松山市文化財調査報告書４９

松山市道後城北遺跡群

松山大学構内遺跡 II

—第３次調査—

（本文編）

1995

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

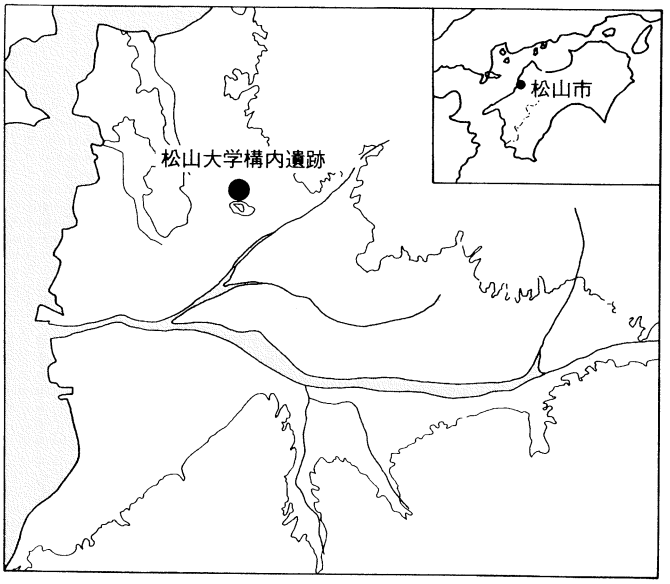
埋蔵文化財センター

松山市道後城北遺跡群

松山大学構内遺跡 II

—第３次調査—

（本文編）



1995

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

巻頭図版１　遺構検出状況（南より）

序

松山市は、文学の香り漂う俳句・温泉の町として全国的に有名ですが、近年は、埋蔵文化財の宝庫としても注目を集めております。市内の土地開発に伴って当埋蔵文化財センターが行う発掘調査が、古代における松山を解明する手がかりになろうとしています。

松山大学構内遺跡における発掘調査は、平成元年度の2次調査に引き続いて、今回が3次調査にあたります。3次調査においては、厚生会館建設に伴って発掘調査を実施した結果、縄文時代後期から中世にかけての遺構・遺物を確認しています。

特に流路からは、一括性の高い弥生時代中期後半から後期の土器や土製品・石器などが大量に出土しています。これらは、当該期の土器編年を考える上で、今後重要な参考資料となるものと期待されます。また、検出された弥生時代・古墳時代の竪穴式住居址・掘立柱建物址などは、道後城北遺跡群における集落形成過程を知る上でデータ集積に役立つものと考えられます。本書の刊行にあたり、当遺跡の発掘調査についてご指導・ご協力を頂きました関係各位、ならびに関係機関に厚くお礼を申し上げますとともに、今後とも埋蔵文化財の発掘調査に関して、より一層のご協力をお願い申しあげます。

平成7年3月31日

財団法人　松山市生涯学習振興財団
理事長　田中誠一

例　言

1．本書は、松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センターが、平成４年11月～平成５年５月に実施した、松山市文京町松山大学厚生会館建設に伴う事前調査の報告書である。

2．遺構の実測は、梅木謙一の指示のもと、宮内慎一が中心に行い、愛媛大学、松山大学の学生他の援助を受けた。遺構の撮影は、梅木謙一、宮内慎一、大西朋子が行った。

3．遺構は呼称名を略号化して記述した。竪穴式住居址：ＳＢ、掘立柱建物址：掘立、土坑：ＳＫ、溝：ＳＤ、自然流路：ＳＲ、ピット：ＳＰ、性格不明遺構：ＳＸ他である。

4．遺物の実測・製図、遺構の製図は、梅木謙一、宮内慎一、高尾和長、加島次郎、志賀夏行、水口あをい、森田利恵、松本美知子、越智令子、生鷹真弓、生鷹千代、山下満佐子、村上規子、平岡直美、渡部明日香他が行った。遺物の撮影は、大西朋子が担当した。

5．遺構図の縮尺は、縮分値をスケール下に注記した。遺物図は、縄文土器・弥生土器・土師器は１／４、須恵器は１／３、石器は１／４・１／３、鉄器は１／２・２／３、ガラス製品は等倍を原則とした。なお、縮分値はスケール下に注記した。

6．本書に使用した方位はすべて磁北である。

7．本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで収蔵・保管している。

8．本書の執筆は、宮内慎一、梅木謙一、加島次郎が分担執筆した。執筆者名は本文目次に記し、必要に応じ章のはじめにも記載した。関連資料の調査は、山之内志郎、志賀夏行、水口あをいが行った。

9．本書の浄書は、白石公信が担当した。

10．科学分析では、株式会社　古環境研究所に植物珪酸体分析を、福岡市埋蔵文化財センター本田光子氏に赤色顔料の鑑定・分析を頂いた。記して感謝申し上げます。

11．本書の編集は宮内慎一が行い、梅木謙一、水口あをいの協力を得た。

本文目次

Ⅰ　調査に至る経緯 ―――――――――――――― 〔宮内慎一〕

1．調査に至る経緯 …… 2

2．調査・刊行組織 …… 2

Ⅱ　遺跡の概要 ―――――――――――――― 〔宮内慎一〕

1．地理的環境 …… 4

2．歴史的環境 …… 6

Ⅲ　調査の概要

1．調査の経緯 ―――――――――――――― 〔宮内慎一〕 …… 10

2．層位 ―――――――――――――― 〔宮内慎一〕 …… 11

3．遺構と遺物 …… 22

〔1〕第Ⅳ層検出の遺構と遺物 ―――――― 〔宮内慎一〕 …… 22

〔2〕第Ⅴ層検出の遺構と遺物 ―――――― 〔宮内慎一〕 …… 64

〔3〕第Ⅵ層検出の遺構と遺物 ―――――― 〔宮内慎一〕 …… 82

〔4〕第Ⅶ層検出の遺構と遺物 ―――――― 〔宮内慎一・梅木謙一〕 … 87

〔5〕石製品 ―――――――――――――― 〔加島次郎〕 …… 283

〔6〕金属製品 ―――――――――――――― 〔宮内慎一〕 …… 308

〔7〕動物遺存体 ―――――――――――――― 〔宮内慎一〕 …… 312

4．小結 ―――――――――――――― 〔宮内慎一〕 …… 313

Ⅳ　科学分析

1．植物珪酸体分析 ―――――――――――― 〔㈱古環境研究所〕 …… 319

2．赤色顔料分析 ―――――――――――― 〔本田光子〕 …… 341

Ⅴ　考　察

1．松山大学構内遺跡３次調査出土の弥生土器 〔梅木謙一〕 …… 346

2．道後城北遺跡群の古墳時代集落の変遷 ― 〔宮内慎一〕 …… 365

Ⅵ　松山大学構内遺跡３次調査の成果と課題 ― 〔宮内慎一〕 …… 370

挿図目次

第１図　道後城北地区の地質図 …… 4
第２図　松山大学構内遺跡周辺の主要遺跡分布図（縮尺１／50,000） …… 5
第３図　松山大学構内遺跡３次調査地周辺の遺跡分布図（縮尺１／15,000） …… 7
第４図　調査地位置図（縮尺１／4,000） …… 10
第５図　調査地区割図（縮尺１／600） …… 12
第６図　調査区北壁土層図 (1)（縮尺１／60） …… 14
第７図　調査区北壁土層図 (2)（縮尺１／60） …… 15
第８図　調査区南壁土層図 (1)（縮尺１／60） …… 16
第９図　調査区南壁土層図 (2)（縮尺１／60） …… 17
第10図　調査区東壁土層図 (1)（縮尺１／60） …… 18
第11図　調査区東壁土層図 (2)（縮尺１／60） …… 19
第12図　調査区西壁土層図 (1)（縮尺１／60） …… 20
第13図　調査区西壁土層図 (2)（縮尺１／60） …… 21
第14図　第Ⅳ層遺構配置図（縮尺１／400） …… 22
第15図　ＳＫ４測量図（縮尺１／40） …… 23
第16図　ＳＫ４出土遺物実測図（縮尺１／３・１／４） …… 24
第17図　ＳＫ16測量図（縮尺１／40） …… 25
第18図　ＳＫ16出土遺物実測図（縮尺１／４） …… 25
第19図　ＳＤ11出土遺物実測図（縮尺１／３） …… 27
第20図　ＳＤ16出土遺物実測図（縮尺１／３） …… 27
第21図　ＳＤ14出土遺物実測図（縮尺１／３） …… 28
第22図　ＳＤ18出土遺物実測図（縮尺１／３） …… 28
第23図　第Ⅳ層（古代）出土遺物実測図 (1)（縮尺１／３） …… 30
第24図　第Ⅳ層（古代）出土遺物実測図 (2)（縮尺１／３） …… 31
第25図　第Ⅳ層（古代）出土遺物実測図 (3)（縮尺１／３） …… 32
第26図　第Ⅳ層（古代）出土遺物実測図 (4)（縮尺１／３） …… 33
第27図　第Ⅳ層（古代）出土遺物実測図 (5)（縮尺１／４） …… 34
第28図　ＳＢ20・ＳＢ23・ＳＢ24測量図（縮尺１／60） …… 35
第29図　ＳＢ20出土遺物実測図（縮尺１／３・１／４） …… 37
第30図　ＳＢ23・ＳＢ24出土遺物実測図（縮尺１／３） …… 38
第31図　ＳＢ21・ＳＢ22測量図（縮尺１／60） …… 39

第32図　ＳＢ21出土遺物実測図 (1)（縮尺１／３・１／６）…… 40
第33図　ＳＢ21出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４・１／２）…… 41
第34図　ＳＢ22出土遺物実測図（縮尺１／３）…… 42
第35図　ＳＢ13出土遺物実測図（縮尺１／３）…… 42
第36図　ＳＢ13測量図（縮尺１／60）…… 43
第37図　ＳＢ6・ＳＢ18測量図（縮尺１／60）…… 45
第38図　ＳＢ6出土遺物実測図 (1)（縮尺１／３）…… 47
第39図　ＳＢ6出土遺物実測図 (2)（縮尺１／３・１／４）…… 48
第40図　掘立1測量図（縮尺１／80）…… 50
第41図　掘立1出土遺物実測図（縮尺１／３）…… 51
第42図　掘立2測量図（縮尺１／150）…… 51
第43図　掘立2出土遺物実測図（縮尺１／３）…… 52
第44図　掘立3測量図（縮尺１／150）…… 52
第45図　掘立4測量図（縮尺１／80）…… 53
第46図　掘立4出土遺物実測図（縮尺１／３）…… 54
第47図　ＳＫ12測量図（縮尺１／40）…… 54
第48図　ＳＫ12出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 55
第49図　ＳＫ22出土遺物実測図（縮尺１／３）…… 55
第50図　第Ⅳ層ピット（古墳）出土遺物実測図（縮尺１／３）…… 56
第51図　第Ⅳ層（古墳）出土遺物実測図 (1)（縮尺１／３）…… 58
第52図　第Ⅳ層（古墳）出土遺物実測図 (2)（縮尺１／３）…… 59
第53図　第Ⅳ層（古墳）出土遺物実測図 (3)（縮尺１／３）…… 60
第54図　第Ⅳ層（古墳）出土遺物実測図 (4)（縮尺１／３・１／４）…… 61
第55図　ＳＫ20出土遺物実測図（縮尺１／２）…… 62
第56図　第Ⅳ層（弥生）出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 62
第57図　第Ⅳ層（弥生）出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 63
第58図　第Ⅳ層（時期不明）出土遺物実測図（縮尺１／４・１／２・１／１）…… 63
第59図　第Ⅴ層遺構配置図（縮尺１／400）…… 64
第60図　ＳＢ10測量図（縮尺１／60）…… 65
第61図　ＳＢ10内炉測量図（縮尺１／20）…… 66
第62図　ＳＢ10出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 68
第63図　ＳＢ10出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 69
第64図　ＳＢ10出土遺物実測図 (3)（縮尺１／４）…… 70
第65図　ＳＢ10出土遺物実測図 (4)（縮尺１／４）…… 71

第66図　ＳＢ10炉内出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 72
第67図　ＳＢ10内ＳＰ666出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 73
第68図　ＳＢ10出土の縄文土器・弥生土器実測図（縮尺１／４・１／２）…… 73
第69図　ＳＢ11測量図（縮尺１／60）…… 74
第70図　ＳＢ11カマド測量図（縮尺１／20）…… 75
第71図　ＳＢ11出土遺物実測図（縮尺１／３・１／４）…… 76
第72図　第Ⅴ層（古墳）出土遺物実測図 (1)（縮尺１／３・１／４）…… 77
第73図　第Ⅴ層（古墳）出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 78
第74図　第Ⅴ層（弥生）出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 79
第75図　第Ⅴ層（弥生）出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 80
第76図　第Ⅴ層（古代）出土遺物実測図（縮尺１／３）…… 81
第77図　第Ⅴ層（時期不明）出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 81
第78図　第Ⅵ層遺構配置図（縮尺１／400）…… 82
第79図　ＳＢ2測量図（縮尺１／60）…… 83
第80図　ＳＢ2出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 84
第81図　ＳＢ1測量図（縮尺１／60）…… 84
第82図　ＳＢ1出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 85
第83図　ＳＢ5測量図（縮尺１／60）…… 86
第84図　第Ⅵ層（弥生）出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 86
第85図　第Ⅶ層遺構配置図（縮尺１／400）…… 87
第86図　ＳＢ8測量図（縮尺１／60）…… 88
第87図　ＳＢ8出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 89
第88図　ＳＢ9測量図（縮尺１／60）…… 90
第89図　ＳＢ9出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 91
第90図　ＳＢ9出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 92
第91図　ＳＢ12測量図（縮尺１／60）…… 93
第92図　ＳＢ12出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 94
第93図　ＳＢ15測量図（縮尺１／60）…… 95
第94図　ＳＢ15出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 97
第95図　ＳＢ15出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 98
第96図　ＳＢ15出土遺物実測図 (3)（縮尺１／４・１／３）…… 98
第97図　ＳＢ17測量図（縮尺１／80）…… 99
第98図　ＳＢ17内炉測量図（縮尺１／20）…… 100
第99図　ＳＢ17出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 102

第100図　ＳＢ17出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 103
第101図　ＳＢ15～17出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 104
第102図　第Ⅶ層上面検出状況図（縮尺１／400）…… 105
第103図　西壁土層図（縮尺１／100）…… 106
第104図　東壁〔上〕南壁〔下〕土層図（縮尺１／100）…… 106
第105図　ＳＲ模式図 …… 107
第106図　Ａベルト土層図（縮尺１／100）…… 108
第107図　北西部遺構検出状況図（縮尺１／100）…… 109
第108図　ＳＸ1測量図（縮尺１／30）…… 111
第109図　ＳＸ1下部出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 112
第110図　ＳＸ1下部出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 113
第111図　ＳＸ1下部出土遺物実測図 (3)（縮尺１／４）…… 114
第112図　ＳＸ1下部出土遺物実測図 (4)（縮尺１／４）…… 115
第113図　ＳＸ1上部出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 116
第114図　ＳＸ2測量図（縮尺１／30）…… 117
第115図　ＳＸ2下部出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 118
第116図　ＳＸ2下部出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 119
第117図　ＳＸ2下部出土遺物実測図 (3)（縮尺１／４）…… 120
第118図　ＳＸ2下部出土遺物実測図 (4)（縮尺１／４）…… 121
第119図　ＳＸ2下部出土遺物実測図 (5)（縮尺１／４）…… 122
第120図　ＳＸ2上部出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 123
第121図　ＳＸ2上部出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 124
第122図　ＳＸ2上部出土遺物実測図 (3)（縮尺１／４）…… 125
第123図　ＳＸ2上部出土遺物実測図 (4)（縮尺１／４・１／２）…… 126
第124図　ＳＸ2関連出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 127
第125図　ＳＰ731出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 129
第126図　ＳＰ731・ＳＰ732出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 130
第127図　ＳＲ２・３　Ｂ区出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 131
第128図　ＳＲ２・３　Ｃ区出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 132
第129図　ＳＲ２・３　Ｃ・Ｄ区出土遺物実測図（縮尺１／４・１／２）…… 133
第130図　ＳＲ３・ＳＸ401・ＳＸ402検出状況図（縮尺１／150）…… 134
第131図　ＳＸ401出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 135
第132図　ＳＸ402出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 136
第133図　ＳＲ２・３検出状況図（縮尺１／150）…… 137

第134図　Ｂベルト〔上〕・Ｃベルト〔下〕土層図（縮尺１／100）…… 138
第135図　Ｅベルト土層図（縮尺１／100）…… 138
第136図　ＳＲ３（⑤区）出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 139
第137図　ＳＲ３（⑤区）出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 140
第138図　ＳＲ３（④区）出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 141
第139図　ＳＲ３（①区）出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 142
第140図　ＳＲ３（①区）出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 143
第141図　ＳＲ２（⑧区）出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 145
第142図　ＳＲ２（⑧区）出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 146
第143図　ＳＲ２（⑧区）出土遺物実測図 (3)（縮尺１／４）…… 147
第144図　ＳＲ２（⑧区）出土遺物実測図 (4)（縮尺１／４）…… 148
第145図　ＳＲ２遺物取上状況図（縮尺１／150）…… 149
第146図　ＳＲ２（①区Ｐ30）出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 151
第147図　ＳＲ２（②区Ｐ1～4・6）出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 152
第148図　ＳＲ２（②区Ｐ7・8）出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 153
第149図　ＳＲ２（②③区Ｐ11）出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 154
第150図　ＳＲ２（②③区Ｐ11）出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 155
第151図　ＳＲ２（②③区Ｐ11・12）出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 156
第152図　ＳＲ２（②区）出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 157
第153図　ＳＲ２（③区）出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 159
第154図　ＳＲ２（⑥区Ｐ21・22・24・26）出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 160
第155図　ＳＲ２（⑥区Ｐ25）出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 161
第156図　ＳＲ２（⑥区Ｐ28）出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 162
第157図　ＳＲ２（⑥区）出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 163
第158図　ＳＲ２（⑥区）出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 164
第159図　ＳＤ402・ＳＸ５及び埋土２・３検出状況図（縮尺１／150）…… 165
第160図　ＳＸ５出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 167
第161図　ＳＸ５出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 168
第162図　ＳＸ５出土遺物実測図 (3)（縮尺１／４）…… 169
第163図　ＳＸ５出土遺物実測図 (4)（縮尺１／４）…… 170
第164図　埋土３出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 171
第165図　埋土２出土遺物実測図（縮尺１／４・１／２）…… 172
第166図　ＳＲ１上層（③区Ｐ11）出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 174
第167図　ＳＲ１上層（③区Ｐ11）出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 175

第168図　ＳＲ１上層（③区Ｐ11）出土遺物実測図 (3)（縮尺１／４）…… 176
第169図　ＳＲ１上層（③区Ｐ11）出土遺物実測図 (4)（縮尺１／４）…… 177
第170図　ＳＲ１上層（③区Ｐ14）出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 179
第171図　ＳＲ１上層（③区Ｐ14）出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 180
第172図　ＳＲ１上層（③⑥区Ｐ17～20）出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 181
第173図　ＳＸ３及びＳＲ1上層検出状況図（縮尺１／150）…… 182
第174図　ＳＸ３出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 183
第175図　ＳＸ３出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 184
第176図　ＳＸ３出土遺物実測図 (3)（縮尺１／４）…… 185
第177図　ＳＸ３出土遺物実測図 (4)（縮尺１／４）…… 186
第178図　ＳＸ３出土遺物実測図 (5)（縮尺１／４）…… 187
第179図　ＳＸ３出土遺物実測図 (6)（縮尺１／４）…… 188
第180図　ＳＸ３出土遺物実測図 (7)（縮尺１／４）…… 189
第181図　ＳＸ３出土遺物実測図 (8)（縮尺１／４）…… 190
第182図　ＳＸ３出土遺物実測図 (9)（縮尺１／４）…… 191
第183図　ＳＸ３出土遺物実測図 (10)（縮尺１／４）…… 192
第184図　ＳＸ３出土遺物実測図 (11)（縮尺１／４）…… 193
第185図　ＳＸ３出土遺物実測図 (12)（縮尺１／４）…… 194
第186図　ＳＸ３出土遺物実測図 (13)（縮尺１／４）…… 195
第187図　ＳＲ１上層出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 197
第188図　ＳＲ１上層出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 198
第189図　ＳＲ１上層出土遺物実測図 (3)（縮尺１／４）…… 199
第190図　ＳＲ１上層出土遺物実測図 (4)（縮尺１／４）…… 200
第191図　ＳＲ１上層出土遺物実測図 (5)（縮尺１／４）…… 201
第192図　ＳＲ１上層出土遺物実測図 (6)（縮尺１／４）…… 202
第193図　ＳＲ１上層出土遺物実測図 (7)（縮尺１／４）…… 203
第194図　ＳＲ１上層出土遺物実測図 (8)（縮尺１／４）…… 204
第195図　ＳＲ１上層出土遺物実測図 (9)（縮尺１／４）…… 205
第196図　ＳＲ１上層出土遺物実測図 (10)（縮尺１／４）…… 206
第197図　ＳＲ１上層出土遺物実測図 (11)（縮尺１／４）…… 207
第198図　ＳＲ１上層出土遺物実測図 (12)（縮尺１／４）…… 208
第199図　ＳＲ１上層出土遺物実測図 (13)（縮尺１／４）…… 209
第200図　ＳＲ１上層出土遺物実測図 (14)（縮尺１／４）…… 210
第201図　ＳＲ１上層出土遺物実測図 (15)（縮尺１／４）…… 211

第202図　ＳＲ１上層出土遺物実測図 ⑯（縮尺１／４）…… 212
第203図　ＳＲ１上層出土遺物実測図 ⑰（縮尺１／４）…… 213
第204図　ＳＲ１上層出土遺物実測図 ⑱（縮尺１／４）…… 214
第205図　ＳＲ１上層出土遺物実測図 ⑲（縮尺１／４・１／２）…… 215
第206図　ＳＸ３と判断される遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 216
第207図　ＳＸ３と判断される遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 217
第208図　ＳＲ１下層検出状況図（縮尺１／150）…… 218
第209図　ＳＲ１下層上部出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 220
第210図　ＳＲ１下層上部出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 221
第211図　ＳＲ１下層上部出土遺物実測図 (3)（縮尺１／４・１／２）…… 222
第212図　Ｅベルト（下層上部）遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 224
第213図　Ｅベルト（下層上部）遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 225
第214図　Ｅベルト（下層上部）遺物実測図 (3)（縮尺１／４）…… 226
第215図　ＳＲ１下層下部出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 227
第216図　ＳＲ１下層下部出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 228
第217図　ＳＲ１下層下部出土遺物実測図 (3)（縮尺１／４）…… 229
第218図　ＳＲ１下層下部出土遺物実測図 (4)（縮尺１／４）…… 230
第219図　ＳＲ１下層下部出土遺物実測図 (5)（縮尺１／４）…… 231
第220図　ＳＲ１下層下部出土遺物実測図 (6)（縮尺１／４・１／２）…… 232
第221図　ＳＲ１下層下部（参考品）出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 234
第222図　ＳＲ１（②区）出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 235
第223図　ＳＲ１（②区）出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 235
第224図　ＳＲ１（③区）出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 236
第225図　ＳＲ１（⑤区）出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 237
第226図　ＳＲ１（⑤区）出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 238
第227図　ＳＲ１（⑤区）出土遺物実測図 (3)（縮尺１／４・１／２）…… 239
第228図　ＳＲ１（⑥区）出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 240
第229図　最下層Ａ・最下層Ｂ及び基底面検出状況図（縮尺１／150）…… 241
第230図　ＳＲ１最下層Ｂ出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 242
第231図　ＳＲ１最下層Ｂ出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 243
第232図　ベルト・トレンチ出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）…… 245
第233図　ベルト・トレンチ出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）…… 246
第234図　ベルト・トレンチ出土遺物実測図 (3)（縮尺１／４）…… 247
第235図　複合口縁壺の拓本 (1)（縮尺１／２）…… 248

第236図　複合口縁壺の拓本 (2)（縮尺１／２）…… 249
第237図　複合口縁壺の拓本 (3)（縮尺１／２）…… 250
第238図　第Ⅶ層ピット（弥生）出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 254
第239図　ＳＢ３測量図（縮尺１／60）…… 255
第240図　ＳＢ３出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 256
第241図　ＳＢ16測量図（縮尺１／60）…… 257
第242図　ＳＢ16出土遺物実測図（縮尺１／４・１／３）…… 258
第243図　ＳＢ４・ＳＢ19測量図（縮尺１／60）…… 259
第244図　ＳＢ４出土遺物実測図 (1)（縮尺１／３）…… 261
第245図　ＳＢ４出土遺物実測図 (2)（縮尺１／３）…… 262
第246図　ＳＢ４出土遺物実測図 (3)（縮尺１／３）…… 263
第247図　ＳＢ４出土遺物実測図 (4)（縮尺１／４・１／２・１／１）…… 264
第248図　ＳＢ19出土遺物実測図（縮尺１／３・１／４）…… 265
第249図　ＳＢ７測量図（縮尺１／60）…… 266
第250図　ＳＢ14・ＳＢ25測量図（縮尺１／60）…… 267
第251図　ＳＢ14出土遺物実測図（縮尺１／３・１／４）…… 269
第252図　ＳＢ25出土遺物実測図（縮尺１／３・１／４）…… 270
第253図　ＳＫ15測量図（縮尺１／40）…… 271
第254図　ＳＫ15出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 271
第255図　ＳＤ５出土遺物実測図（縮尺１／３）…… 272
第256図　第Ⅶ層ピット（古墳）出土遺物実測図（縮尺１／３・１／４）…… 273
第257図　ＳＫ14測量図（縮尺１／80）…… 274
第258図　ＳＫ14出土遺物実測図 (1)（縮尺１／３）…… 275
第259図　ＳＫ14出土遺物実測図 (2)（縮尺１／３・１／４）…… 276
第260図　第Ⅶ層（縄文）出土遺物実測図（縮尺１／４）…… 277
第261図　第Ⅶ層ＳＫ・ＳＤ・ＳＰ（時期不明）出土遺物実測図（縮尺１／４・１／２）　277
第262図　表採・トレンチ出土遺物実測図 (1)（縮尺１／３）…… 279
第263図　表採・トレンチ出土遺物実測図 (2)（縮尺１／３・１／４）…… 280
第264図　表採・トレンチ出土遺物実測図 (3)（縮尺１／４）…… 281
第265図　表採・トレンチ出土遺物実測図 (4)（縮尺１／４）…… 282
第266図　ＳＢ出土石器実測図 (1)（縮尺１／４・１／３）…… 284
第267図　ＳＢ出土石器実測図 (2)（縮尺１／３）…… 285
第268図　ＳＸ１・ＳＸ２出土石器実測図（縮尺１／３）…… 287
第269図　ＳＲ２・３Ｂ・Ｃ・Ｄ区出土石器実測図（縮尺１／３）…… 287

第270図　ＳＲ１南半部下層出土石器実測図 (1)（縮尺１／４・１／３）…… 288
第271図　ＳＲ１南半部下層出土石器実測図 (2)（縮尺１／４・１／３）…… 290
第272図　ＳＲ１北半部出土石器実測図 (1)（縮尺１／３）…… 291
第273図　ＳＲ１北半部出土石器実測図 (2)（縮尺１／４・１／３）…… 292
第274図　ＳＲ１北半部出土石器実測図 (3)（縮尺１／３）…… 293
第275図　ＳＲ１南半部上層出土石器実測図（縮尺１／３）…… 294
第276図　ＳＸ３出土石器実測図（縮尺１／３）…… 295
第277図　ＳＸ５出土石器実測図（縮尺１／４・１／３）…… 296
第278図　ＳＲ２北半部出土石器実測図 (1)（縮尺１／４・１／３）…… 298
第279図　ＳＲ２北半部出土石器実測図 (2)（縮尺１／３）…… 299
第280図　Ｅベルト出土石器実測図（縮尺１／４・１／３）…… 300
第281図　ＳＸ401・402出土石器実測図（縮尺１／３）…… 301
第282図　第Ⅳ層出土石器実測図（縮尺１／３）…… 302
第283図　第Ⅴ層出土石器実測図（縮尺１／４・１／３）…… 303
第284図　第Ⅶ層出土石器実測図（縮尺１／４）…… 304
第285図　地点不明出土石器実測図（縮尺１／４・１／３）…… 305
第286図　ＳＢ出土鉄器実測図（縮尺２／３）…… 308
第287図　ＳＲ出土鉄器実測図（縮尺２／３）…… 309
第288図　第Ⅳ層出土鉄器実測図（縮尺２／３）…… 310
第289図　第Ⅳ層出土鉄器・青銅器実測図（縮尺１／２・２／３）…… 311
第290図　竪穴式住居址の変遷図（縮尺１／800）…… 317
第291図　ＳＢ17張出部土壌サンプル採取地点位置図（縮尺１／20）…… 321
第292図　ＳＢ17内炉土壌サンプル採取地点位置図（縮尺１／20）…… 322
第293図　ＳＢ４土壌サンプル採取地点位置図（縮尺１／60）…… 323
第294図　植物珪酸体の顕微鏡写真 (1) …… 331
第295図　植物珪酸体の顕微鏡写真 (2) …… 332
第296図　植物珪酸体の顕微鏡写真 (3) …… 333
第297図　植物珪酸体の顕微鏡写真 (4) …… 334
第298図　植物珪酸体の顕微鏡写真 (5) …… 335
第299図　植物珪酸体の顕微鏡写真 (6) …… 336
第300図　ＳＢ17サンプル採取地点位置図（縮尺１／40・１／20）…… 342
第301図　中期後葉の土器（縮尺１／８）…… 347
第302図　後期前葉の土器 (1)（縮尺１／８）…… 349
第303図　後期前葉の土器 (2)（縮尺１／８）…… 350

第304図　後期末の土器（縮尺１／８）…… 352
第305図　松山大学構内遺跡３次調査出土の外来系土器（縮尺１／８）…… 359
第306図　赤色顔料付着遺物（縮尺１／８）…… 362
第307図　道後城北地区の遺跡分布図 …… 369

表　目　次

表１　動物遺存体観察表 …… 312
表２　松山大学構内遺跡３次調査の植物珪酸体分析結果（1）…… 324
表３　松山大学構内遺跡３次調査の植物珪酸体分析結果（2）…… 325
表４　松山大学構内遺跡３次調査の植物珪酸体分析結果（3）…… 326
表５　松山大学構内遺跡３次調査　ＳＢ17張出部の植物珪酸体分析結果 …… 327
表６　松山大学構内遺跡３次調査　ＳＢ17内炉の植物珪酸体分析結果 …… 328
表７　松山大学構内遺跡３次調査　ＳＢ４の植物珪酸体分析結果 …… 329
表８　植物珪酸体の顕微鏡写真 …… 330
表９　植物珪酸体分析結果（1）…… 339
表10　植物珪酸体分析結果（2）…… 340
表11　赤色顔料分析結果 …… 343
表12　道後城北地区の竪穴式住居址（古墳時代）一覧 …… 367

Ⅰ　調査に至る経緯

1．調査に至る経緯

1990（平成２）年12月、学校法人　松山大学（理事長　神森　智）より同校構内（松山市文京町４番10他）に厚生会館を建設するにあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

松山大学構内は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『67樋又遺物包蔵地』内にあたり、周知の遺跡として知られている。同包蔵地内では、これまでに縄文時代後期～古墳時代までの集落関連遺構が確認されており、特に弥生時代の松山平野においては主要な集落地帯であったことが近年の調査で明らかになっている。

また、松山大学構内では、松山市教育委員会により、これまで２度にわたる発掘調査が実施されている。第１次調査は1987年11月に構内東北部の７号館建設の際に行われ、弥生時代と中世の遺物包含層を確認している。第２次調査は、1989年11月に構内北西部の８号館建設に伴うものであり、弥生時代～古墳時代の竪穴式住居址16棟を含む集落関連遺構と遺物を多数確認している。

これらのことより、当該地の埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲や性格を確認するために、1991（平成３）年３月に文化教育課は試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、弥生土器・土師器・須恵器を含む遺物包含層（３層）と土坑を検出し、当該地に弥生時代～古墳時代の集落関連遺構があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課と松山大学の両者は遺跡の取り扱いについて協議を行い、建物の建設によって失われる遺構と遺物について記録保存のために発掘調査を実施することとなった。発掘調査は当該地の弥生時代～古墳時代の集落構造解明及び古地形・古環境復元を主目的とし、(財)松山市生涯学習振興財団・埋蔵文化財センターが主体となり、松山大学の協力のもと1992（平成４）年11月２日に開始した。

2．調査・刊行組織

調　査　地　松山市文京町４番地10他

遺　跡　名　松山大学構内遺跡３次調査地

調査期間　野外調査　1992（平成４）年11月２日～1993（平成５）年５月15日
　　室内調査　1993（平成５）年５月17日～1994（平成６）年３月31日

調査面積　１，６００㎡

調査組織　〔平成４年度・５年度〕

調査主体　（財）松山市生涯学習振興財団　　理　事　長　　田中誠一
　　事務局長　　渡辺和彦

調査・刊行組織

	事務局次長	鶴井茂忠（平成４年度）
		一色正士（平成５年度）
埋蔵文化財センター	所　　長	和田祐三郎（平成４年度）
		河口雄三（平成５年度）
	次　　長	田所延行
	調査係長	西尾幸則（平成４年度）
		田城武志（平成５年度）
	調査主任	田城武志（平成４年度）
		栗田正芳（文化教育課主事）
	調査担当	梅木謙一・宮内慎一・高尾和長・武正良浩・加島次郎

刊行組織　〔平成７年度〕

刊行主体　（財）松山市生涯学習振興財団	理事長	田中誠一
	事務局長	一色正士
埋蔵文化財センター	所　　長	河口雄三
	次　　長	田所延行
	調査係長	田城武志
	調査主任	栗田正芳（文化教育課主事）
	整理担当	梅木謙一・宮内慎一・高尾和長・武正良浩・加島次郎

調査作業員・整理作業員・協力者

高橋恒・山本圭・山邊進也・志賀夏行・大久保英昭・中島宏・富山寛之・西原聖二・本田哲也・藤岡義樹・溝部真功・小笠原聖二・小野敬通・石田真佐夫・川上貴之・金城治男・神直哉・北岡英樹・金城光希・坂元守・野田昌弘・広瀬貴・三宅康孝・水口あをい・西岡早苗・渡部佳子・森田利恵・松本美知子・黒田令子・生鷹千代・生鷹真弓・渡部芙美・伊藤みわ子・岡本里子・白井千景・竹内真琴・松本幸恵・松本朋子・三木寿美子・石井美鈴・西本三枝・日之西美春・三好紀子・山内七重ほか

なお、発掘調査にあたっては下條信行（愛媛大学）、田﨑博之（愛媛大学）、宮本一夫（九州大学）、室内調査にあたっては松井章（奈良国立文化財研究所）、村上恭通（愛媛大学）、本田光子（福岡市埋蔵文化財センター）ほか、多くの先生方に数々の貴重なご指導、ご教示を頂いた。また、奈良国立文化財研究所、福岡市埋蔵文化財センター、株式会社古環境研究所の各機関には、資料調査に際しご配慮を頂いた。記して感謝申し上げます。

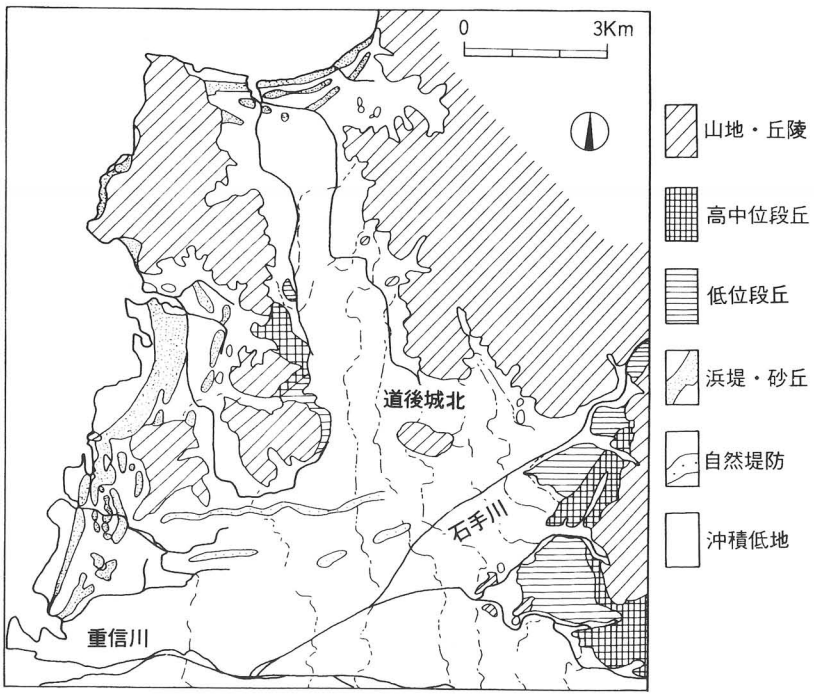
II　遺跡の概要

1．地理的環境（第１図）

松山平野は、高縄半島中央部を南北に走る高縄山地に源を発した河川が伊予灘に流れ出て形成された沖積平野である。松山平野のほぼ中央部に道後城北遺跡群は立地する。遺跡群は地理的な条件や性格などから祝谷地区・城北地区・道後地区の３地区に区分される。

祝谷地区は永谷川の両岸にある丘陵部と、永谷川と丸山川が合流する小規模な扇状地からなる。城北地区は松山大学や愛媛大学を中心とする微高地部と若草町周辺で砂層が基盤層となる低位部からなる。道後地区は愛媛県民文化会館周辺の平野部や、平野部から東へ向かう丘陵部からなる。本遺跡は城北地区のやや西寄りの標高25.3mに立地している。

地質学的には、高縄山地は中世代の領家帯貫入岩類の松山型花崗閃緑岩が大部分を占めているのに対し、勝山（城山）は白亜紀の和泉層群のレキ岩に瀬戸内系火山岩類が貫入している。



第1図　道後城北地区の地質図

Ⓐ文京遺跡(愛媛大学) Ⓑ祝谷六丁場遺跡 Ⓒ道後湯築遺跡 Ⓓ樽味遺跡 Ⓔ三島神社古墳
Ⓕ福音寺遺跡 Ⓖ来住廃寺遺跡

第2図　松山大学構内遺跡周辺の主要遺跡分布図(縮尺1:50,000)

2．歴史的環境（第３図）

本遺跡を含む道後城北地区は文京遺跡（愛媛大学構内）をはじめとする数多くの遺跡が存在する。ここでは、近年、発掘調査された遺跡を中心に歴史的環境を概説する。

旧石器時代

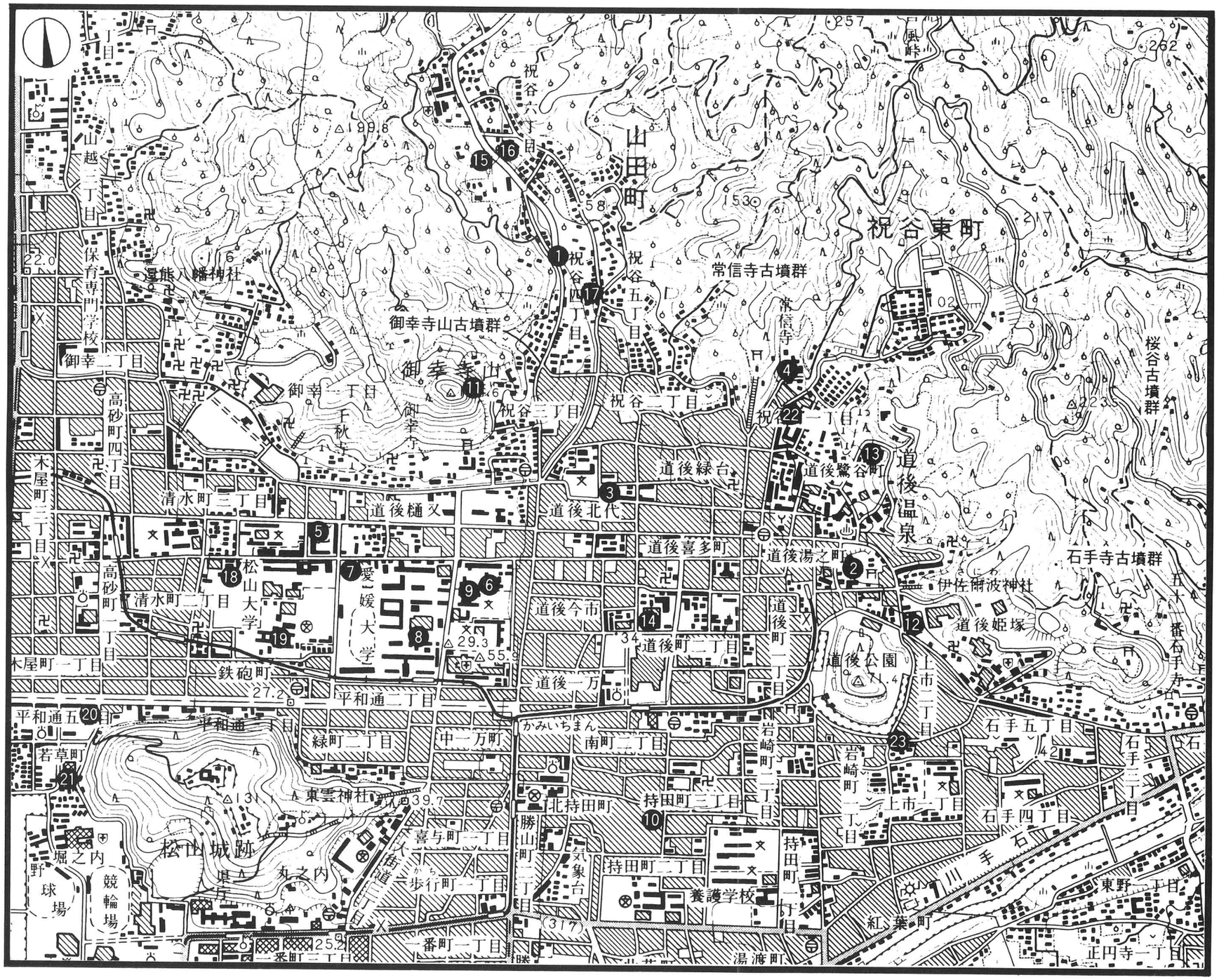
この地域での旧石器遺物の出土は祝谷丸山遺跡（1）が知られている。出土地は丸山川左岸の標高120mの丘陵部で、採集資料として13点の細石核や細石刃他が報告されている。当地域だけでなく、松山平野では遺物が遺構に伴う例や、層位的に把握された例はなく、いずれも採集資料である。

縄文時代

古くから知られる遺跡には道後冠山遺跡（2）、土居窪遺跡（3）、土居ノ段遺跡（4）などがあり、これらの遺跡からは少量の土器が出土している。最近では、道後樋又遺跡１次調査地（南海放送遺跡）（5）で縄文後期と晩期後葉の包含層が層位的に検出されている。文京遺跡８次調査（6）、９次調査（7）においては後・晩期の包含層を確認し、11次調査（8）では後期の野外炉が検出されている。少なくとも縄文時代後期には、この地域は安定した地盤をもち、生活が行われていたことをうかがわせるものである。

弥生時代

前期前半の遺跡は文京遺跡第４次調査（松山東中学校構内）（9）に円形竪穴式住居址２棟がある。このほか、遺構や遺物では、出土状況は不明であるが持田遺跡（10）出土の木葉文壺や、御幸寺山東麗遺跡（11）出土の綾杉文壺などが知られている。前期後半から中期前半の遺跡には道後姫塚遺跡（12）、道後鷺谷遺跡（13）、道後今市遺跡（14）、土居窪遺跡などがあり、扇状地から丘陵部への遺跡の広がりがみられる。中期中葉になると、遺跡の分布は丘陵部に多くみられ、祝谷地区の祝谷六丁場遺跡（15）、祝谷六丁目遺跡（16）、祝谷大地ヶ田遺跡（17）などが代表例である。このうち、祝谷六丁場遺跡は中期中葉を中心として後期前半まで存続する。さらに、祝谷六丁場遺跡では平形銅剣が埋納坑と共に検出されている。中期後半から後期前半の集落は丘陵部から扇状地低位部に移行する。後期中葉から後半には、西方への集落の移動が認められる。松山大学構内遺跡２次調査地（18）や松山北高遺跡（19）には住居址があり、若草町遺跡（20）やカキツバタ遺跡（21）には円形周溝墓群や壺棺墓が検出されている。



遺跡名

1 祝谷丸山遺跡
2 道後冠山遺跡
3 土居窪遺跡
4 土居ノ段遺跡
5 道後樋又遺跡（1次）
6 文京遺跡（8次）
7 文京遺跡（9次）
8 文京遺跡（11次）
9 文京遺跡（4次）
10 持田遺跡
11 御幸寺山東麓遺跡
12 道後姫塚遺跡
13 道後驚谷遺跡
14 道後今市遺跡
15 祝谷六丁場遺跡
16 祝谷六丁目遺跡
17 祝谷大地ヶ田遺跡
18 松山大学構内遺跡（2次）
19 松山北高遺跡
20 若草町遺跡
21 カキツバタ遺跡
22 湯ノ町廃寺
23 内代廃寺

第3図　松山大学構内遺跡3次調査地周辺の遺跡分布図（S＝1:15,000）

古墳時代

古墳時代の集落は弥生時代に引き続き、松山大学構内遺跡２次調査地や松山北高遺跡、若草町遺跡に営まれる。道後地区では、道後今市遺跡に住居址が検出されている。一方、平野部背後の丘陵には数多くの古墳群が分布している。祝谷古墳群、御幸寺山古墳群、常信寺古墳群、桜谷古墳群、石手・伊佐爾波古墳群などがあるが、実態は不明な点が多い。

古代・中世

古代では道後地区に白鳳期の寺院址である湯ノ町廃寺（22）や内代廃寺（23）があり、古瓦が出土している。中世は、現在の愛媛県立道後公園は、河野氏の築造（14世紀）による湯築城址であり、以後250年間にわたって河野氏が領国を支配した。

【文　献】

長井数秋　1986　「丸山遺跡」『愛媛県史　資料編　考古』愛媛県史編さん委員会

名本二六雄　1990　「冠山ー道後平野における弥生文化の受容と展開序説ー」『遺跡第32号』

岡本健児　1961　「愛媛県土居窪遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会編東京堂

西尾幸則　1989　「道後城北ＲＮＢ遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

愛媛大学埋蔵文化財調査室　1989　『文京遺跡第８・９・11次調査』

愛媛県教育委員会　1979　『道後姫塚遺跡埋蔵文化財調査報告書（資料編）』

梅木謙一　1994　「道後鷺谷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査報告書第37集』松山市教育委員会

宮崎泰好　1991　「祝谷六丁場遺跡」『松山市埋蔵文化財調査報告書第24集』松山市教育委員会

梅木謙一　1991　「祝谷大地ヶ田遺跡」『松山市埋蔵文化財調査報告書第37集』松山市教育委員会

梅木謙一　1991　「松山大学構内遺跡ー２次調査地ー」『松山市埋蔵文化財調査報告書第20集』松山市教育委員会

愛媛県教育委員会　1981　『愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書』

愛媛県埋蔵文化財調査センター　1985　『道後今市遺跡』

相原浩二　1991　「若草町遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会

古代学協会四国支部　1988　『松山道後城北の弥生遺跡をめぐって』（シンポジュウム資料）

吉本拡　1986　「湯ノ町廃寺」「内代廃寺」『愛媛県史　資料編　考古』愛媛県史編さん委員会

Ⅲ　調査の概要

1．調査の経緯

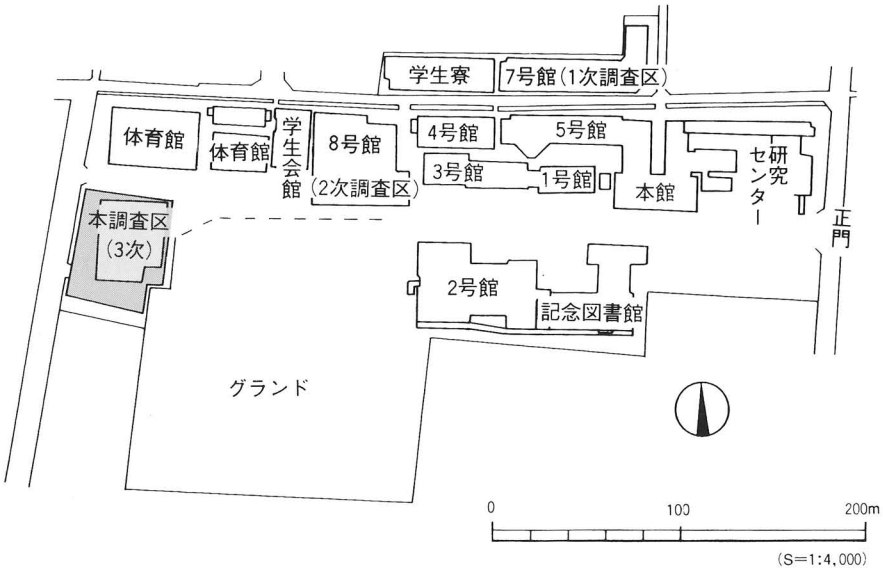
調査地は、大学構内の西部にあたり、調査対象面積は1,600㎡である。当地は調査以前は駐輪場として使用されていた場所である。以下、調査工程を略記する。

1992年11月２日、重機により表土剥ぎ取り作業を開始する。試掘調査の結果と調査期間を考慮したうえで、重機により第Ⅳ層暗灰褐色土（包含層）上面までの剥ぎ取りを行う（第１次剥ぎ取り）。駐輪場施設の掘り方を含め多くの近現代坑と客土があり、表土層及び攪乱土は敷地外に搬出する。よって、表土剥ぎ取り作業に５日間を費やす。

11月９日より作業員を増員し本格的な調査を開始する。包含層の掘り下げを人力で行い、月末までに遺構検出を完了する。

12月　暗灰褐色土中にある遺構の測量を行う。調査の進行上、暗灰褐色土が予想以上に広範囲にわたっており、人力では期間内に調査を終了することが困難だと判断したため、やむをえず、重機により残りの暗灰褐色土の掘削を行った（第２次剥ぎ取り）。調査区内には東西方向と、南北方向にベルトを各２本設置する。

１～２月　暗灰褐色土の掘り下げを終了する。調査地北半部では第Ⅶ層（地山面）を検出し、多数の住居址や柱穴を確認した。調査区南半部では第Ⅶ層までに土層が数層堆積しており、順次、人力で包含層を掘り下げ、遺構検出を行う。



第4図　調査地位置図

3月　包含層の掘り下げが終了し、調査地南半部にて地山面を検出する。遺構の重複する部分があり、検出に苦労する。中旬、竪穴式住居址を中心に調査を行う。

4月　中旬までにほとんどの遺構の測量が終了する。下旬、調査地を東西に流れる流路を中心に調査を行う。この流路からは大量の土器や石器が出土し、土層別に測量と取り上げを行う。

5月13日　すべての遺構の測量が完了する。14・15日、出土遺物や調査用具等を撤去する(野外調査終了)。

5月17日～翌年3月31日の間、大学構内の事務所にて遺構図の浄書、遺物の洗浄・注記・接合等の整理作業を行う。4月1日～翌年3月31日の間、松山市立埋蔵文化財センターにて報告書に関する整理作業を行う。この間、奈良国立文化財研究所、同埋蔵文化財センター、福岡市埋蔵文化財センターほかにて資料調査を行う。

2. 層　位（第6～13図、図版3）

本調査地の基本層位は第Ⅰ層表土、第Ⅱ層緑灰色土、第Ⅲ層明茶褐色土、第Ⅳ層暗灰褐色土、第Ⅴ層褐色土、第Ⅵ層褐色土（黄色土ブロック混入)、第Ⅶ層黄褐色粘質土、第Ⅷ層暗灰色砂礫層である。

第Ⅰ層―瓦礫を含む造成土で、松山大学構内の造成にかかわる堆積土である。

第Ⅱ層―緑灰色の砂質シルト層である。調査区全域に分布し、近世・近代の陶磁器片が出土した。

第Ⅲ層―明茶褐色の砂質シルト層である。調査区ほぼ全域に分布し、中世の土師器小片や須恵器片が出土した。

第Ⅳ層―調査区全域に広がる。暗灰褐色の砂質シルト層である。第Ⅳ層中及び上面で遺構を確認した。遺物は弥生時代後期から古代までの遺物が出土している。とりわけ、7～8世紀代の土師器と須恵器がその大半を占める。

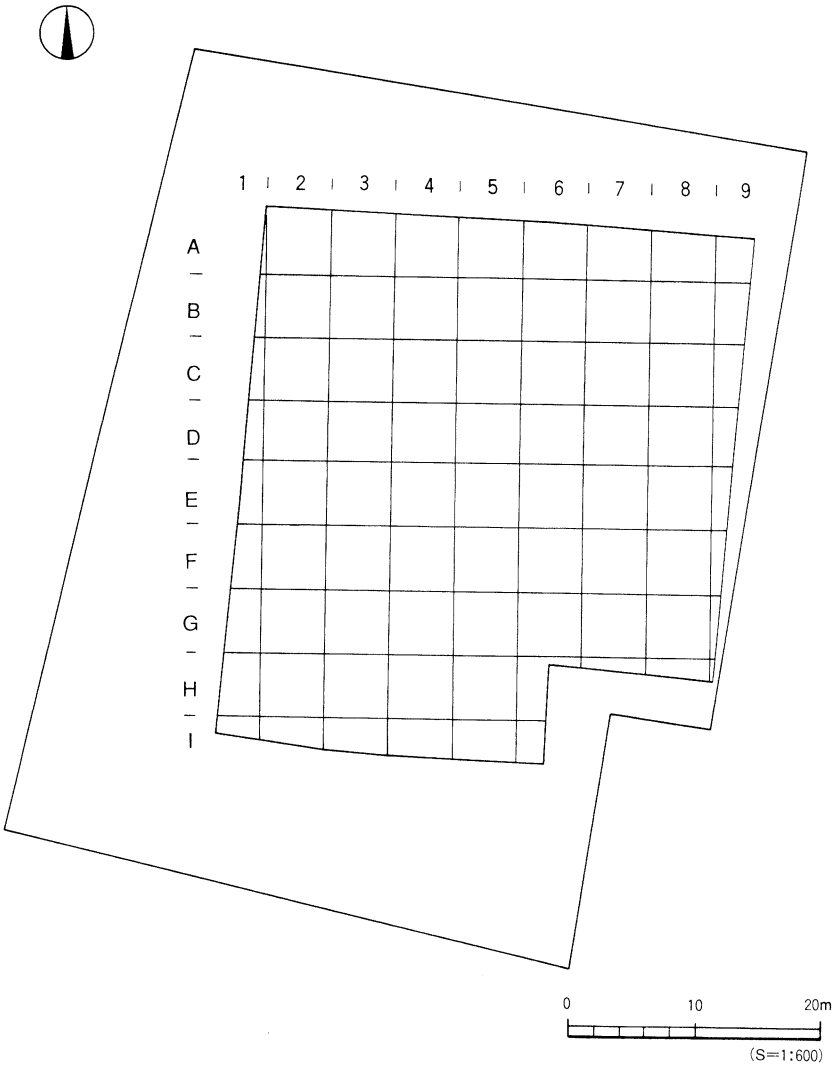
第Ⅴ層―調査区南半部に堆積がかぎられる。褐色の粘土質シルト層で硬くしまる。土層観察により第Ⅴ層中にて遺構を確認した。遺物は弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器が出土した。

第Ⅵ層―第Ⅴ層と同様、調査区南半部に堆積がかぎられる。褐色の粘土質シルト層に黄色のシルトが斑点状に混入している。調査区南壁の土層観察により第Ⅵ層中にて遺構を確認した。遺物は弥生土器・土師器が少量出土した。

第Ⅶ層―調査区中央部、北東部及び北西部を除く地域でみられる。調査区北半部では第Ⅳ層下に第Ⅶ層が検出された（一部を除く)。黄褐色のシルト層である。第Ⅶ層上面にて多数の遺構を確認した。本層中からは、縄文時代後期の遺物が出土している。

第Ⅷ層―調査区西壁に深掘りを行い確認した。調査区北半部にて検出した暗灰色の砂礫層で３～５㎝大の円礫を含んでいる。

遺構は第Ⅳ層、第Ⅴ層、第Ⅵ層中及び第Ⅶ層上面で検出した。第Ⅳ層中では竪穴式住居址８棟（古墳時代後期）、掘立柱建物址４棟（古墳時代後期末）、溝６条（古代）、土坑10基（古代）、ピット155基を検出した。



第5図　調査地区割図

層　　位

第Ⅴ層中では竪穴式住居址２棟（古墳時代中期・後期）、溝１条、ピット８基を検出した。

第Ⅵ層中では竪穴式住居址３棟（弥生時代末～古墳時代初頭）第Ⅶ層上面では竪穴式住居址12棟（弥生時代後期～古墳時代）、溝13条（弥生時代・古墳時代）土坑13基（弥生時代～古代）、自然流路３条（弥生時代）、ピット604基を検出した。ただし第Ⅶ層上面検出の遺構は、その深さなどから考えると、本来は第Ⅵ層以上の層から掘り込まれた可能性が高いものばかりである。また、第Ⅶ層上面の標高を調査すると漸次、調査区北東部から南西部に向けて傾斜をなしている（比高差60cm）。

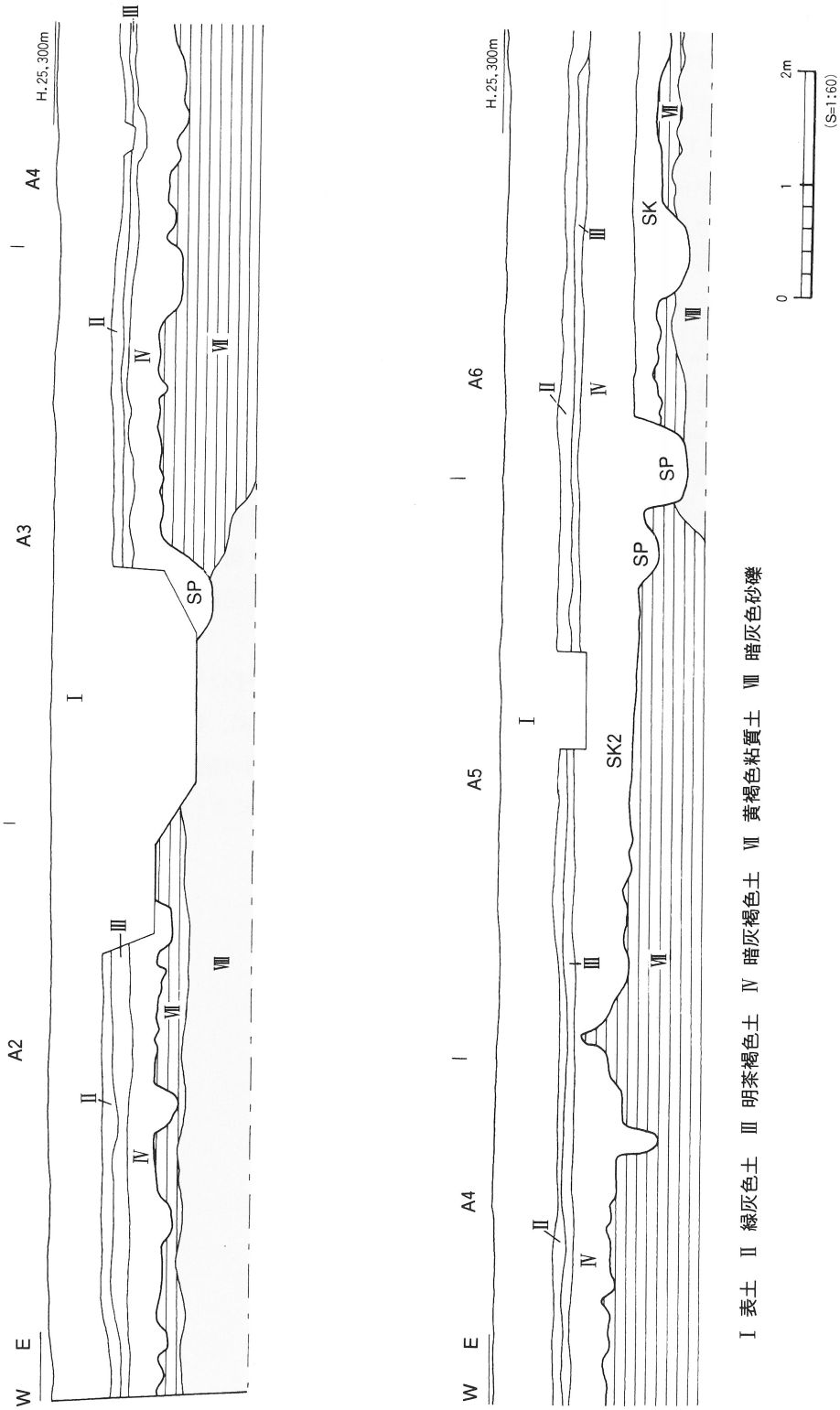
遺物は遺構及び包含層からの出土である。縄文時代後期から中世までの土製品、石製品、鉄製品、銅製品、ガラス製品、種子、動物遺存体ほかが出土した。

各層の時期は出土遺物と検出遺構から判断すると第Ⅲ層は中世、第Ⅳ層は古墳時代～古代、第Ⅴ層は古墳時代、第Ⅵ層は弥生時代～古墳時代、第Ⅶ層は縄文時代～弥生時代に堆積したものと判断される。

なお、調査にあたり調査区内を５ｍ四方のグリットに分けた（第５図）。

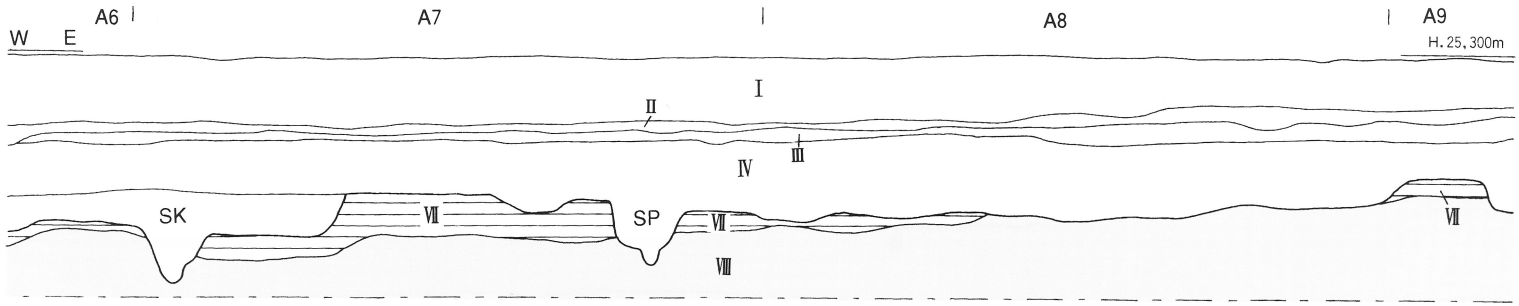
本稿では検出した遺構・遺物を第Ⅳ層から第Ⅶ層まで順に掲載している。さらに、各層において最も多く検出された時期の遺構・遺物を各項の最初に記載し、以下、時期別に報告を行っている。

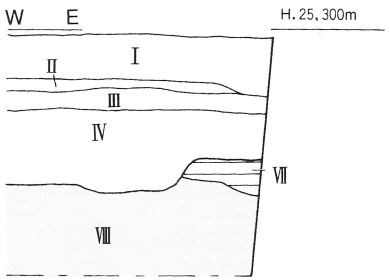
なお、本調査出土の遺物のうち、土製品、ガラス製品、種子については、「３．遺構と遺物〔１〕～〔４〕」にて実測図等を掲載している。ただし、石製品、鉄製品、銅製品は、「３．遺構と遺物〔５〕〔６〕」にて出土地点や実測図を掲載し、遺物の説明をしている。動物遺存体は「３．遺構と遺物〔７〕」にて出土地点と種類等を一覧表にまとめた。



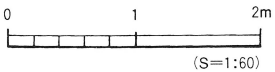
Ⅰ 表土　Ⅱ 緑灰色土　Ⅲ 明茶褐色土　Ⅳ 暗灰褐色土　Ⅶ 黄褐色粘質土　Ⅷ 暗灰色砂礫

第6図　調査区北壁土層図(1)

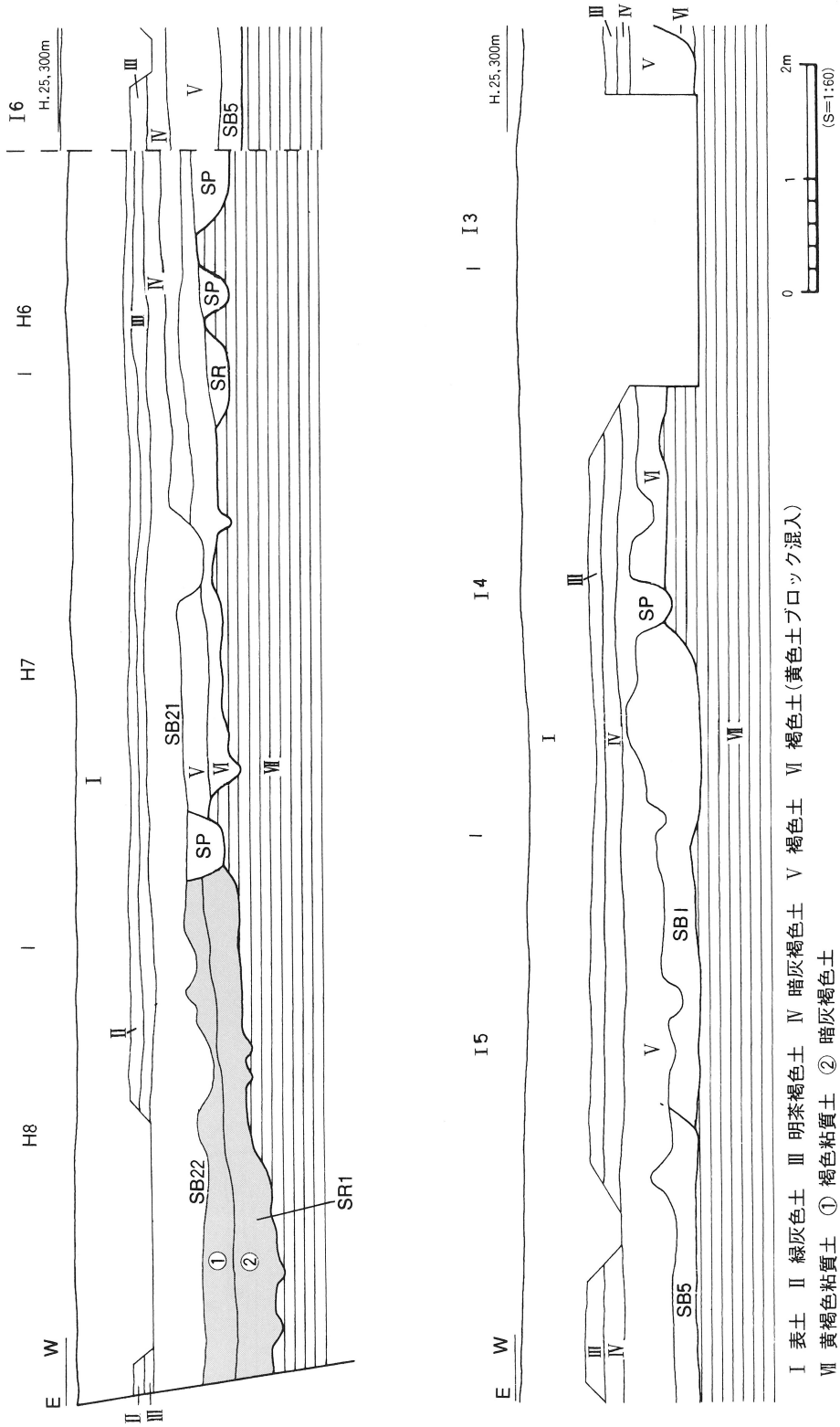




I　表土
II　緑灰色土
III　明茶褐色土
IV　暗灰褐色土
V　褐色土
VI　褐色土（黄色土ブロック混入）
VII　黄褐色粘質土
VIII　暗灰色砂礫

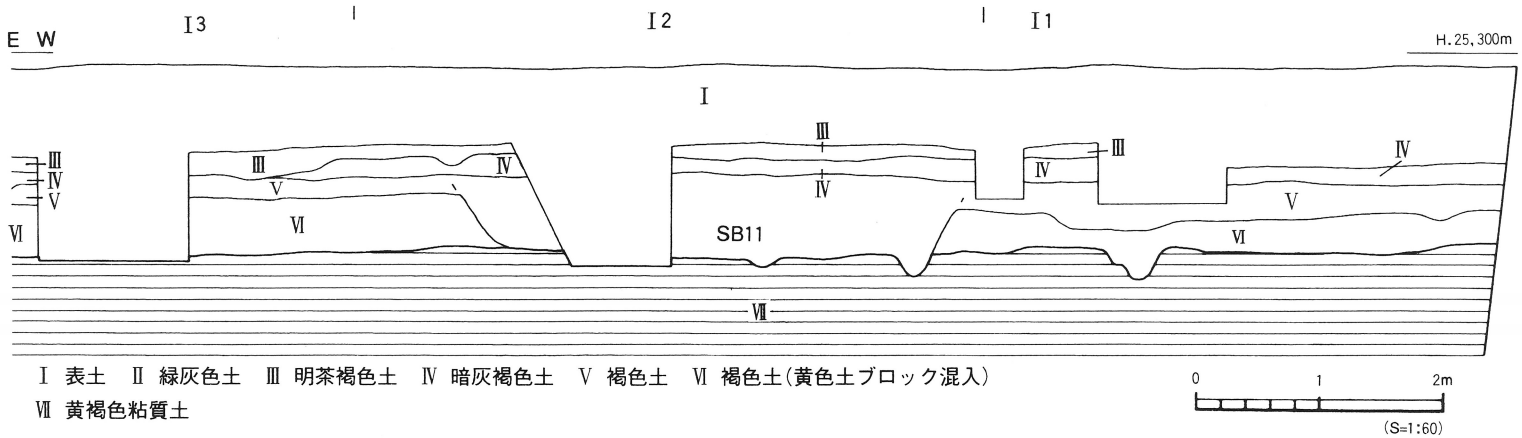


第7図　調査区北壁土層図(2)



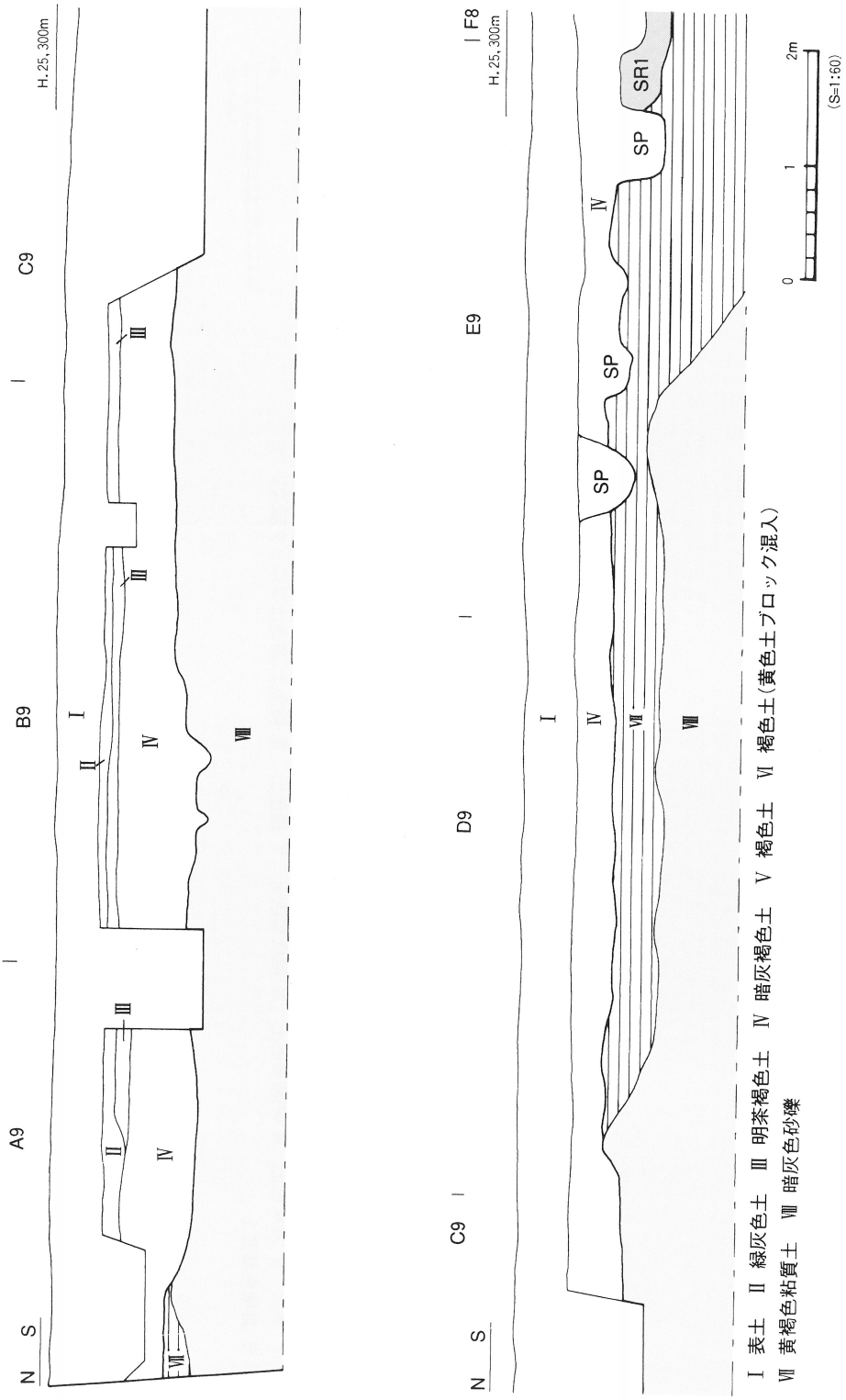
Ⅰ 表土　Ⅱ 緑灰色土　Ⅲ 明茶褐色土　Ⅳ 暗灰褐色土　Ⅴ 褐色土　Ⅵ 褐色土(黄色土ブロック混入)
Ⅶ 黄褐色粘質土　① 褐色粘質土　② 暗灰褐色土

第8図　調査区南壁土層図(1)

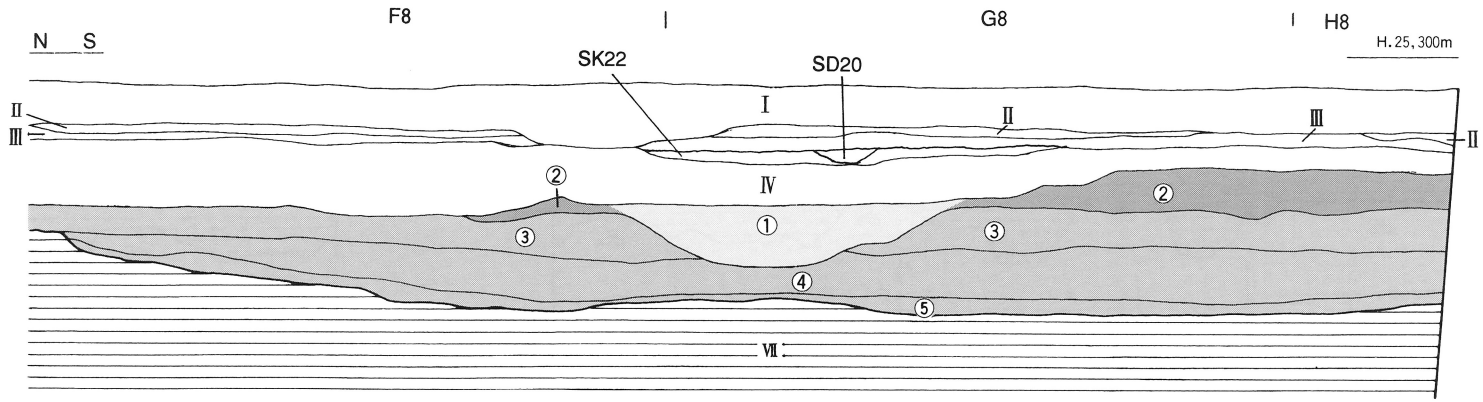


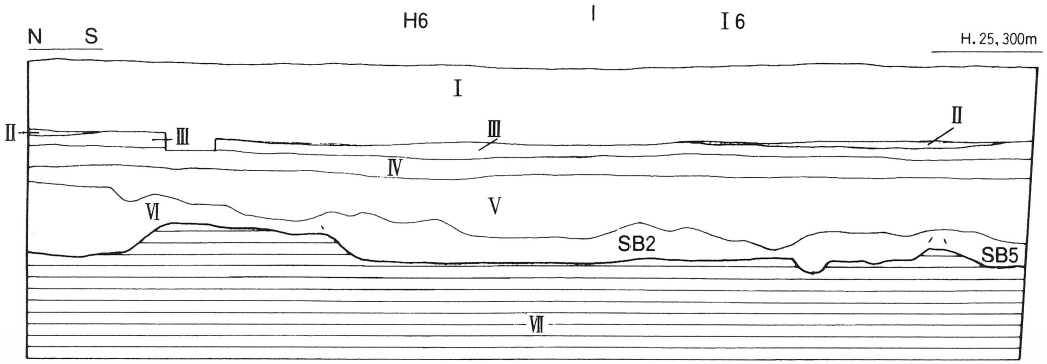
Ⅰ 表土　Ⅱ 緑灰色土　Ⅲ 明茶褐色土　Ⅳ 暗灰褐色土　Ⅴ 褐色土　Ⅵ 褐色土(黄色土ブロック混入)
Ⅶ 黄褐色粘質土

第9図　調査区南壁土層図(2)



第10図 調査区東壁土層図(1)



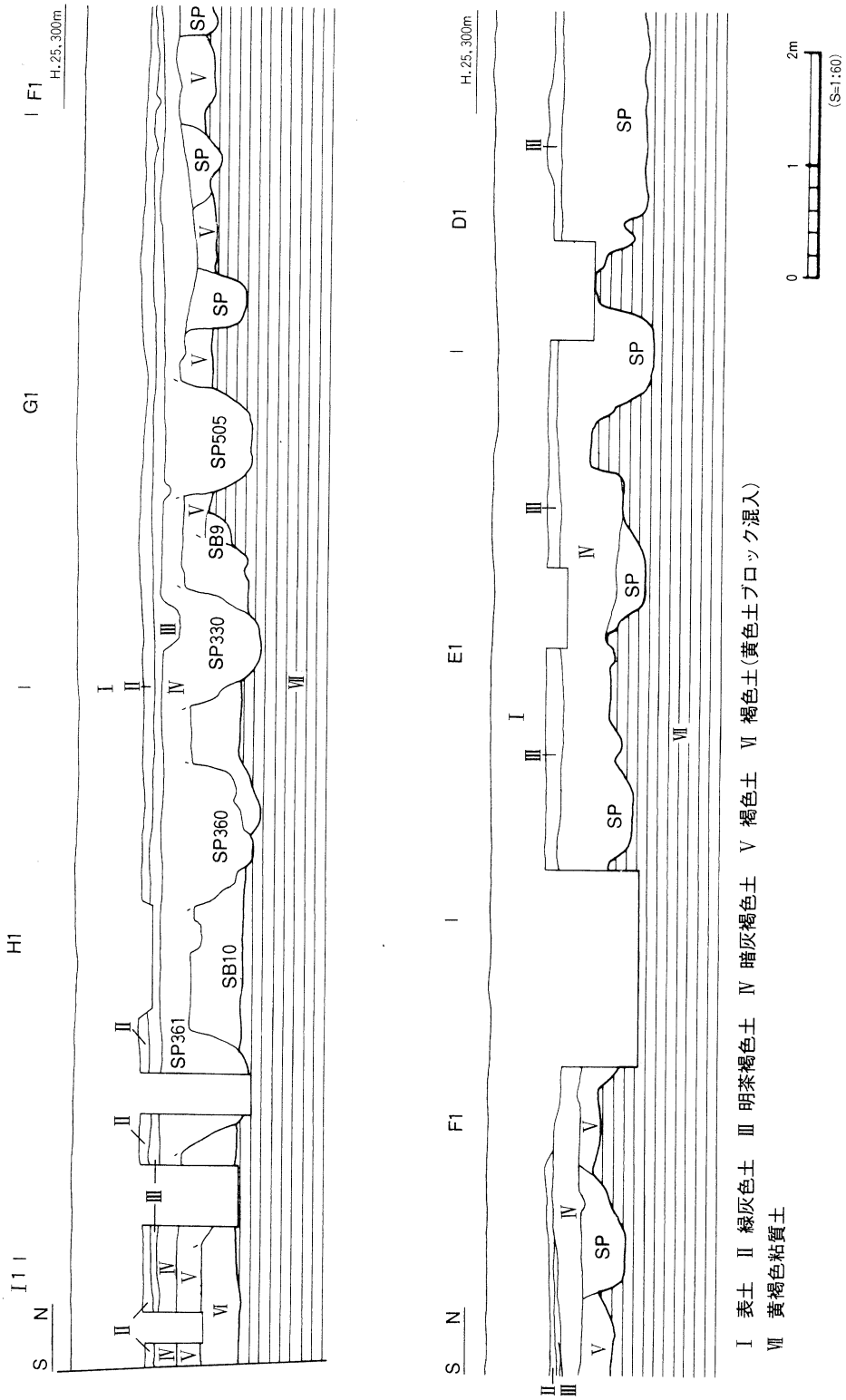


Ⅰ　表土
Ⅱ　緑灰色土
Ⅲ　明茶褐色土
Ⅳ　暗灰褐色土
Ⅴ　褐色土
Ⅵ　褐色土(黄色土ブロック混入)
Ⅶ　黄褐色粘質土

①灰色粗砂［SR3］
②灰色粗砂［SR2］
③褐色粘質土［SR1埋土］
④暗灰褐色土
⑤明灰色砂

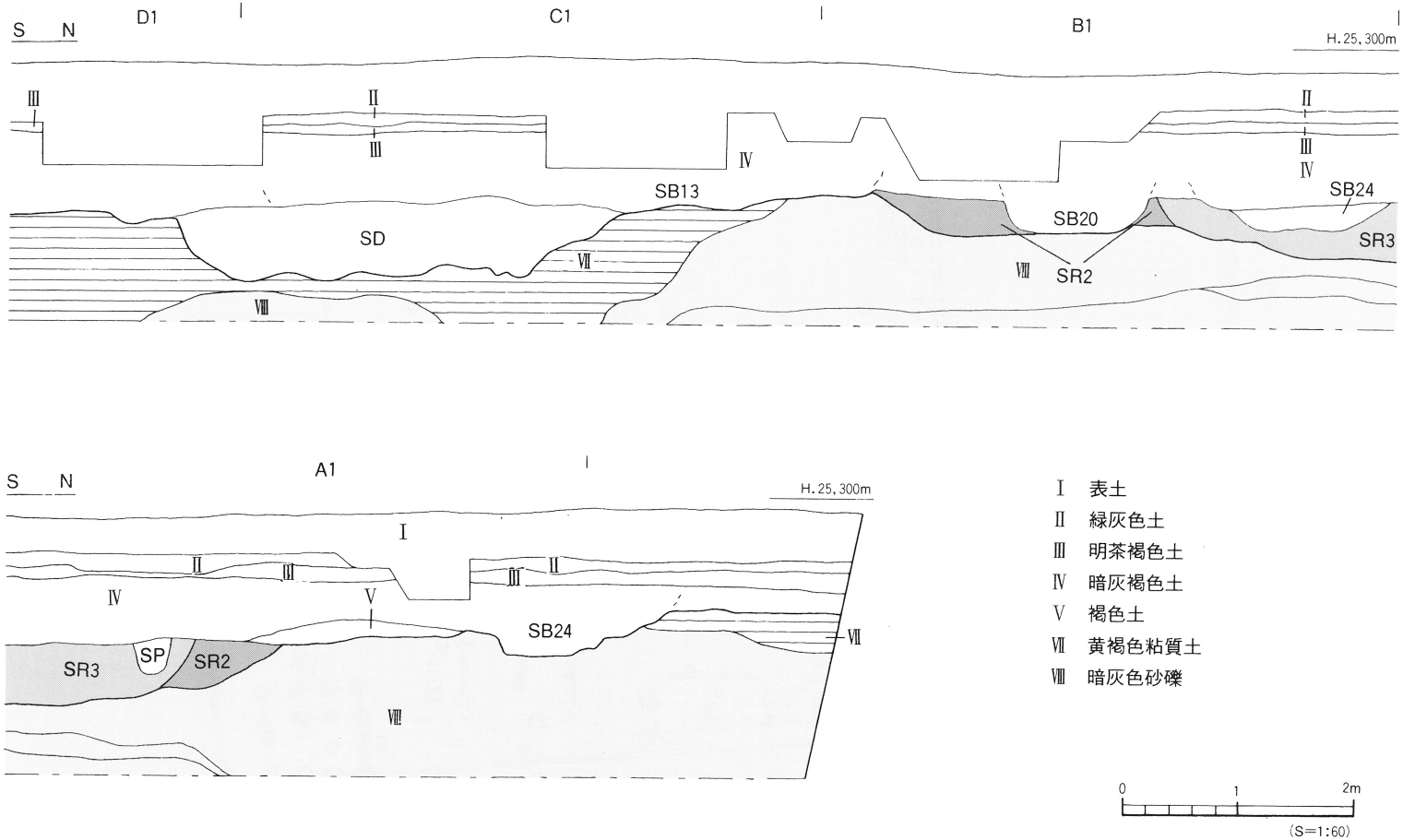
0　1　2m
(S=1:60)

第11図　調査区東壁土層図(2)



Ⅰ 表土　Ⅱ 緑灰色土　Ⅲ 明茶褐色土　Ⅳ 暗灰褐色土　Ⅴ 褐色土　Ⅵ 褐色土(黄色土ブロック混入)
Ⅶ 黄褐色粘質土

第12図　調査区西壁土層図(1)



第13図　調査区西壁土層図(2)

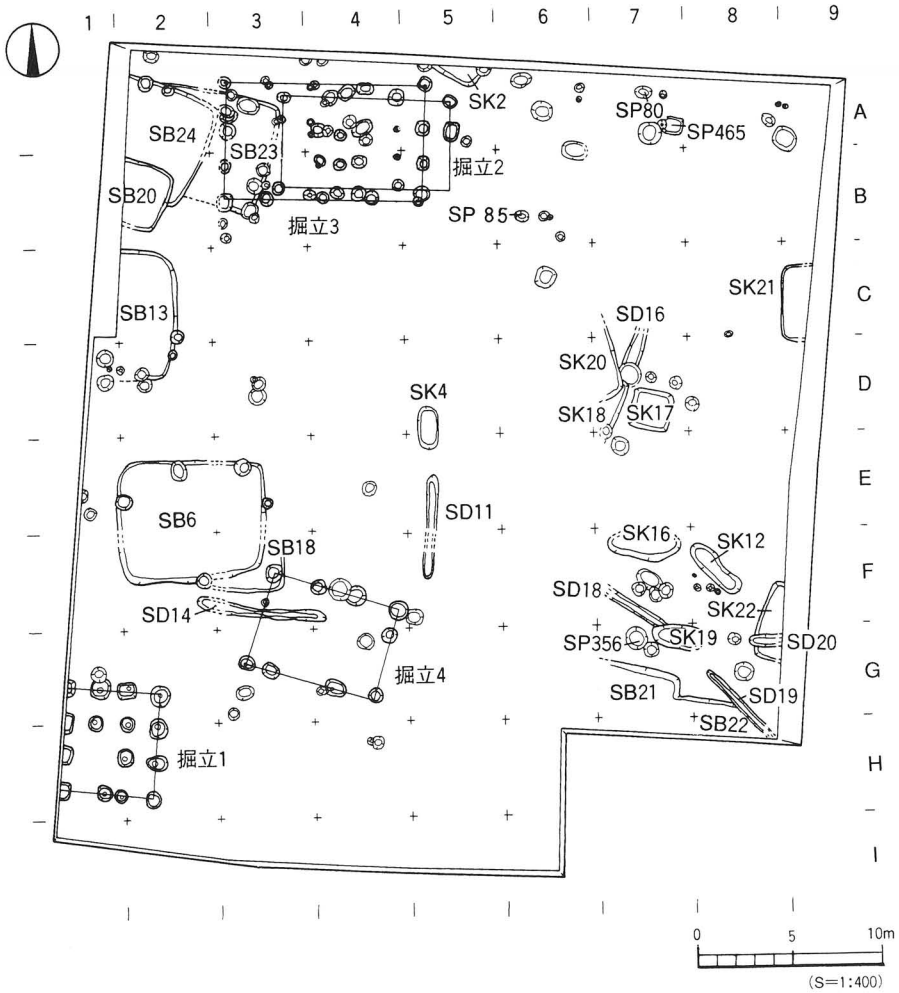
3．遺構と遺物

〔1〕第Ⅳ層検出の遺構と遺物

第Ⅳ層検出の遺構は竪穴式住居址８棟、掘立柱建物址４棟、土坑10基、溝６条、ピット155基（掘立柱建物柱穴を含む）他である。住居址は古墳時代後期、その他の遺構は古代のものが主流をなす。(第14図)

(1) 古　代

1）土　坑



第14図　第Ⅳ層遺構配置図

ＳＫ４（第15図）

調査区中央部、Ｄ５～Ｅ５区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は南北２．１ｍ、東西１．０ｍ、深さ24cmを測る。断面形は皿状を呈する。床面は比較的平坦である。埋土は灰褐色土で、埋土中に焼土・炭化物が混入しているが、床面が焼けた痕跡は検出されなかった。遺物は埋土中に散在して出土した。本土坑からは土師器・須恵器の供膳形態を中心に主要器種を揃えた比較的多くの遺物が出土している。

出土遺物（第16図、図版37）

１～４は須恵器坏蓋である。いずれも身受けのかえりを持たないものである。５は無台の坏で、体部は直線的に立ち上がる。６・７は高台の付く坏である。８は須恵器の皿である。口縁端部はわずかに内傾する。９は壺の口縁部。口縁端部は平坦面をなす。10は甕の口縁部である。11・12は土師器の甕である。12は頸部で稜をなして屈曲し、口縁端部は平坦面をなす。13は土師器の坏。口縁部外面にヘラミガキ調整を施す。

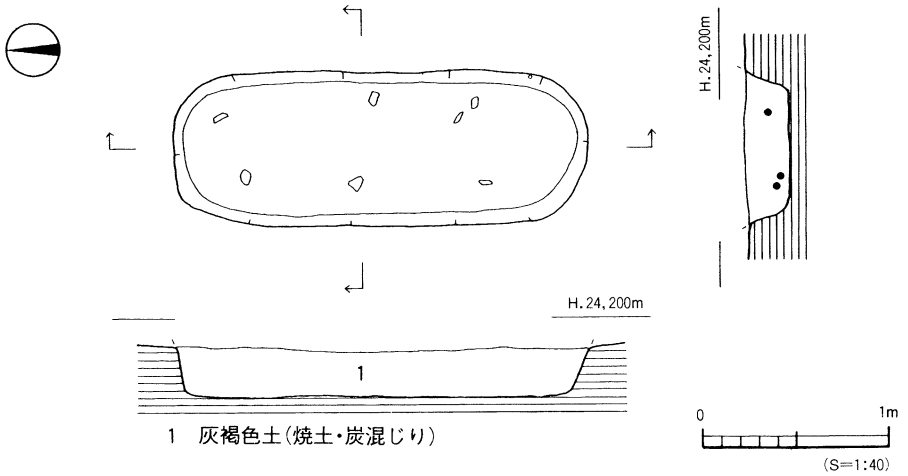
時期：出土遺物より本土坑の時期は８世紀前半～中葉に比定される。

ＳＫ16（第17図）

調査区南東部Ｆ７区に位置する。平面形は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西２．８ｍ、南北検出長１．２ｍ、深さ17cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は第Ⅳ層と同様の暗灰褐色土である。床面は流路の埋土である灰色粗砂が検出された。遺物は埋土中に散在して出土した。

出土遺物（第18図、図版37）

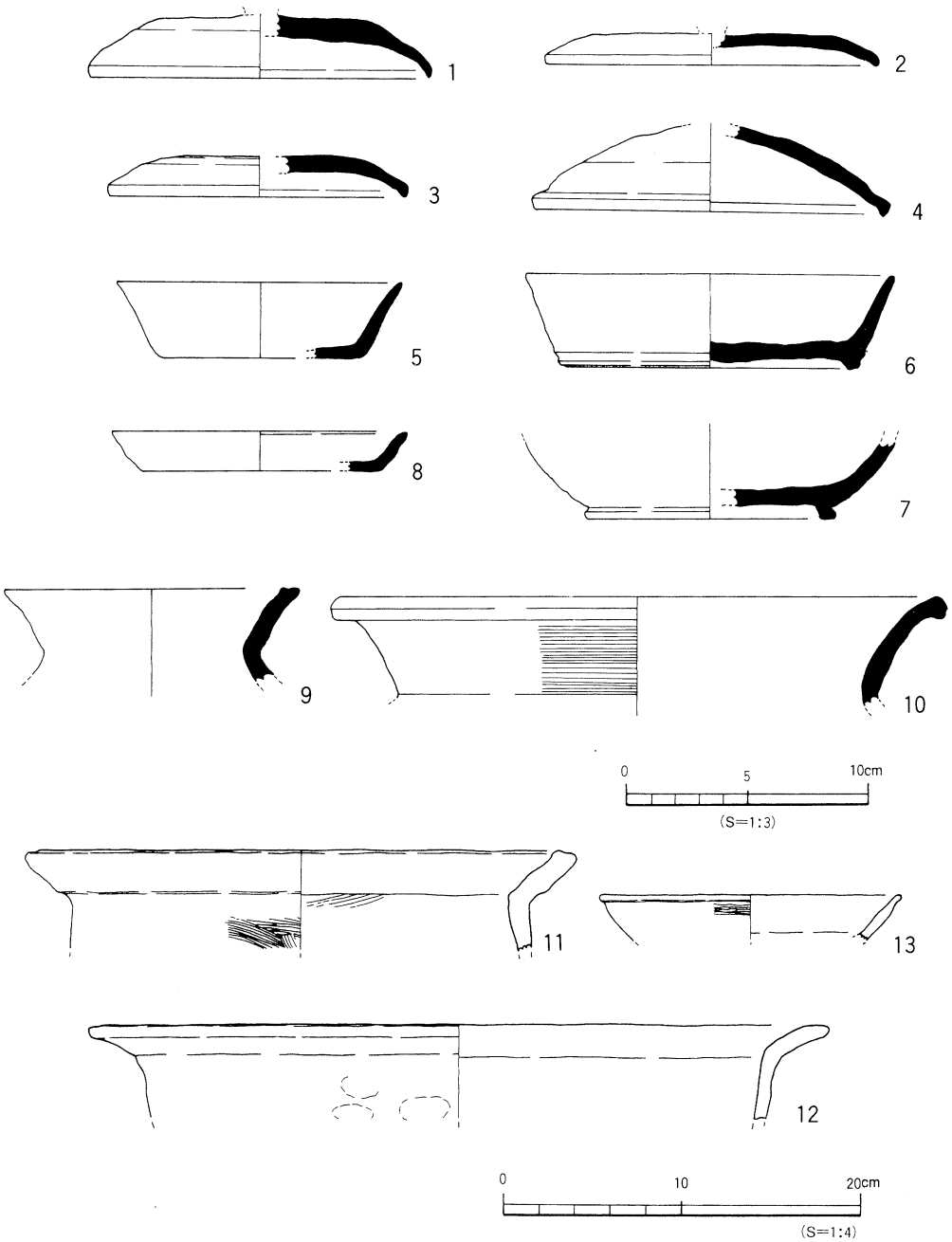
14は土師器坏。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。内外面共にナデ調整を施す。15は完形の鉢である。16は須恵器壺の口縁部である。口縁端部は平坦面をなす。



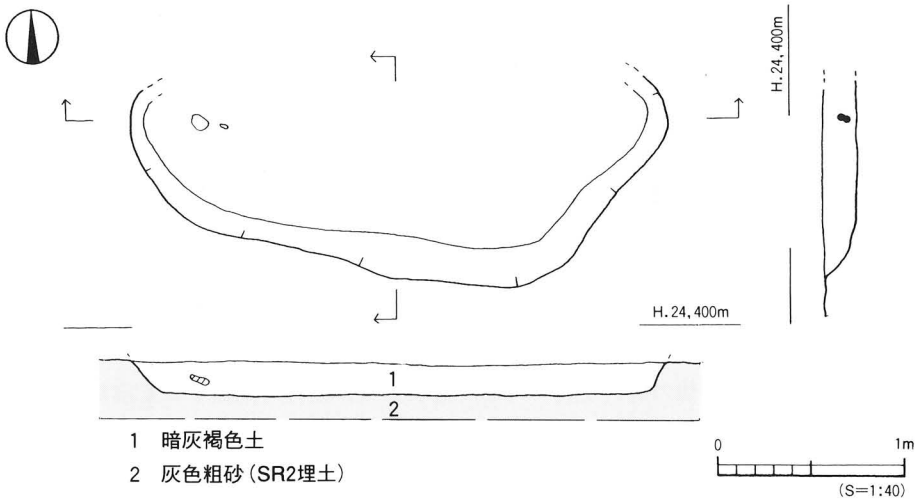
第15図　SK4測量図

17は高台の付く坏と思われる。

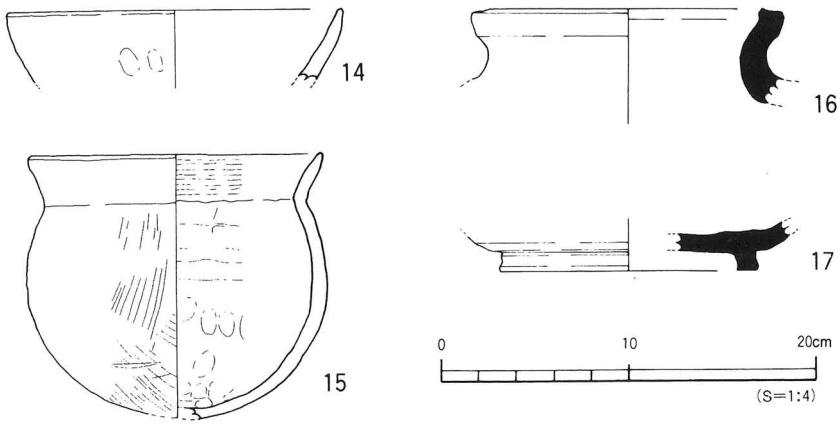
時期：出土遺物が少なく土坑の時期を特定するのは難しいが、８世紀前半～中葉頃であろう。



第16図　SK4出土遺物実測図



第17図　SK16測量図



第18図　SK16出土遺物実測図

ＳＫ19（第14図）

調査区南東部Ｇ７区に位置する。遺構西部は溝ＳＤ18（８世紀中葉～後半）を切っている。平面形は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長２．１ｍ、南北１．１ｍ、深さ約23cmを測る。断面形は皿状を呈し、埋土は第Ⅳ層と同様の暗灰褐色土である。床面は第Ⅶ層黄褐色粘質土が検出された。遺物は埋土中から土師器・須恵器小片が少量出土したが、図化しうるものはない。また、馬の臼歯が埋土中にて出土している（Ｐ312、図版125）。

時期：出土遺物が少なく土坑の時期を特定するのは困難であるが、溝ＳＤ18を切ることから古代、８世紀後半以降のものであろう。

2）溝

ＳＤ11（第14図）

調査区中央部南寄りＥ５からＦ５区で検出した南北方向に延びる溝である。検出長５．４ｍ、幅約０．７ｍ、深さ26cmを測る。断面形は「Ｕ」字状を呈する。埋土は灰褐色土である。

出土遺物（第19図）

18～21は須恵器坏蓋である。いずれも天井部は扁平で、口縁部は下方に屈曲する。22～24は皿である。体部は外傾して立ち上がり、口縁端部で強く外反する。底部は平底である。25は高坏の脚部。裾部は大きく外反し、脚端部で下方に屈曲する。

時期：図化資料とその他の資料を含めた出土遺物より、溝の時期は８世紀前半頃であろう。

ＳＤ16（第14図）

調査区中央部東寄りＤ７区で検出された。短くて不定形な溝である。深さ約15cm、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は第Ⅳ層と同様の暗灰褐色土である。

出土遺物（第20図）

26は須恵器蓋である。27は高台の付く皿で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。28は皿で、口縁端部を水平に仕上げる。29は土師器の鍋。

時期：出土遺物よりこの溝の時期を８世紀中葉頃と考える。

ＳＤ14（第14図）

調査区南西部Ｆ２区からＦ４区にかけて検出した溝で、ＳＤ11とほぼ直交する流路方向をもつ。溝の中央部及び西半部はそれぞれＳＢ８、ＳＢ３を切っている。検出長７．０ｍ、幅約０．８ｍ、深さ約50cmを測る。断面形は「Ｖ」字状を呈する。埋土はＳＤ11と同様の灰褐色土である。溝床及び埋土中から須恵器・土師器が出土した。

出土遺物（第21図）

30は須恵器の坏蓋。扁平な天井部をもち、口縁部は下外方へ屈曲する。31・32は高台の付く坏。いずれも、体部と底部の境界は丸みをもち、高台は境界よりも内側に付く。33は椀、34・35は壺である。34は長頸壺の体部で、肩部と体部の境界は強く屈曲する。36は高台付皿。

時期：出土遺物より溝の時期は８世紀中葉～後半頃であろう。

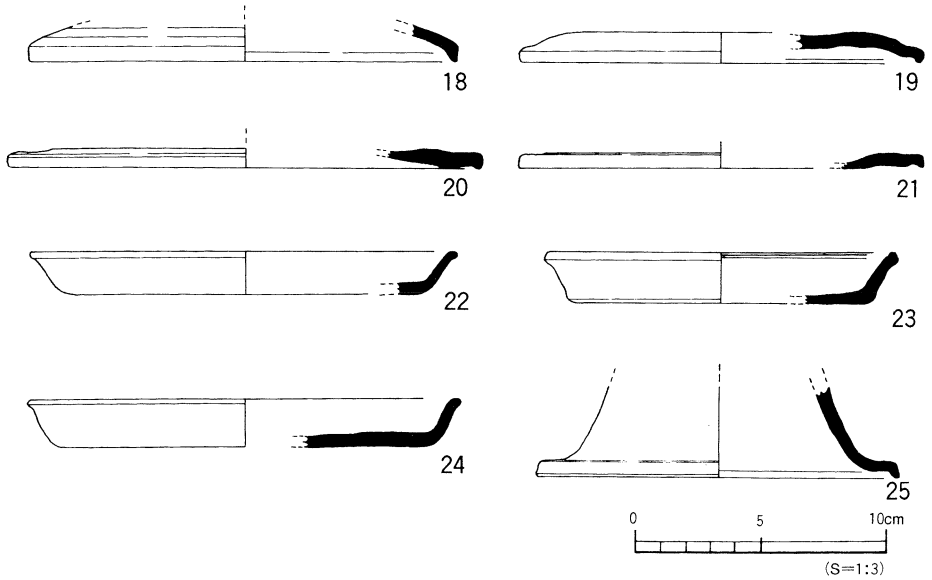
ＳＤ18（第14図）

調査区南東部Ｆ７区からＧ７区にかけて検出した溝で、東端はＳＫ19に切られている。検出長３．３ｍ、幅０．４ｍ、深さ約９cmを測る。断面形は浅いレンズ状を呈する。埋土は単層で暗灰褐色土である。遺物は溝床にて須恵器片が数点出土した。

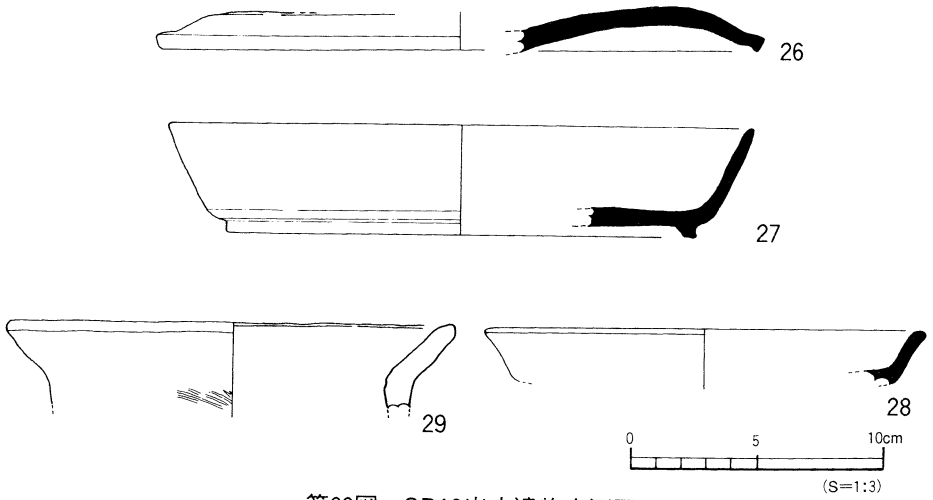
出土遺物（第22図）

37・38は須恵器坏蓋である。37は扁平な擬宝珠つまみが付く。口縁端部で屈曲し、くちばし状を呈する。39は無台の坏。体部は直線的に立ち上がる。底部は平底である。40は高台の付く坏であろう。41・42は須恵器皿。いずれも口縁端部は平坦面をなす。

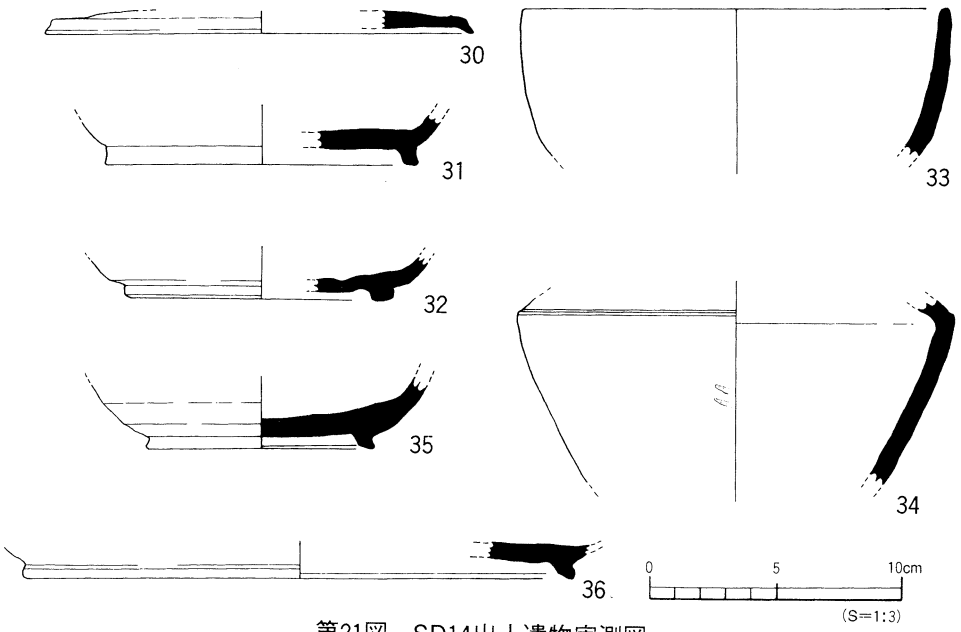
時期：出土遺物より溝の時期は８世紀中葉～後半であろう。



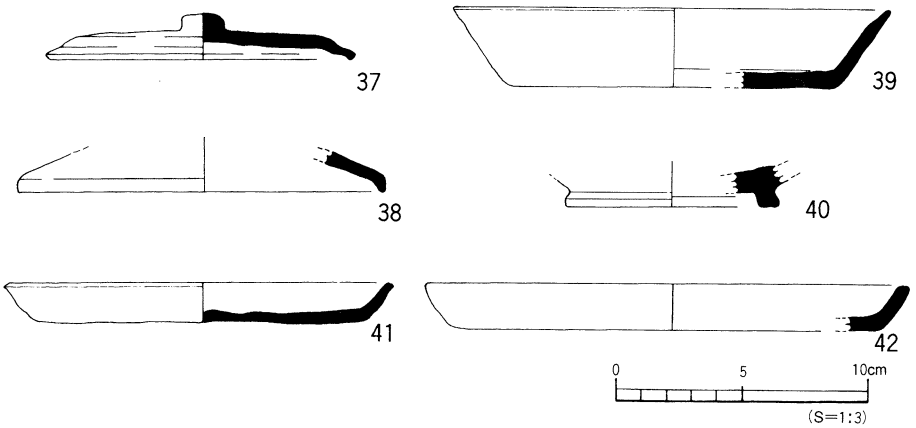
第19図　SD11出土遺物実測図



第20図　SD16出土遺物実測図



第21図　SD14出土遺物実測図



第22図　SD18出土遺物実測図

ＳＤ19（第14図）

調査区南東隅Ｇ８からＨ８区にかけて検出した溝で、東端は調査区外に続き、西端は消滅している。溝中央部はＳＢ22を切っている。検出長３．５ｍ、幅０．４ｍ、深さ約10cmを測る。断面形は浅いレンズ状を呈する。埋土は暗灰褐色土である。溝の方向や規模等がＳＤ18と類似するため同一の溝の可能性が高い。

時期：出土遺物が少なく年代付けは難しいが、ＳＤ18と同一の溝と考えると本溝の時期は８世紀中葉～後半と考えられる。

ＳＤ20（第14図）

調査区南東隅Ｇ８区に検出した短くて不定形な溝で、ＳＫ22を切る。調査区東壁の土層観察より第Ⅳ層上面から掘り込まれたものである（第11図）。深さ約12cmを測り、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は単層で明灰褐色の砂質土である。

時期：出土遺物はなく時期を判断する資料はないが、第Ⅳ層を掘り込んでいることなどから古代以降のものと推定される。

３）第Ⅳ層出土遺物（第23～27図、図版38・39）

須恵器

43～62は須恵器の坏蓋である。43～46は身受けのかえりをもつ７世紀代のものである。47～62は身受けのかえりをもたないもので、口縁部は下内方に屈曲する。47は擬宝珠つまみ、54・55は断面台形状のつまみが付く。47～49・51は８世紀前半、50・52～62は８世紀中葉～後半のものであろう。

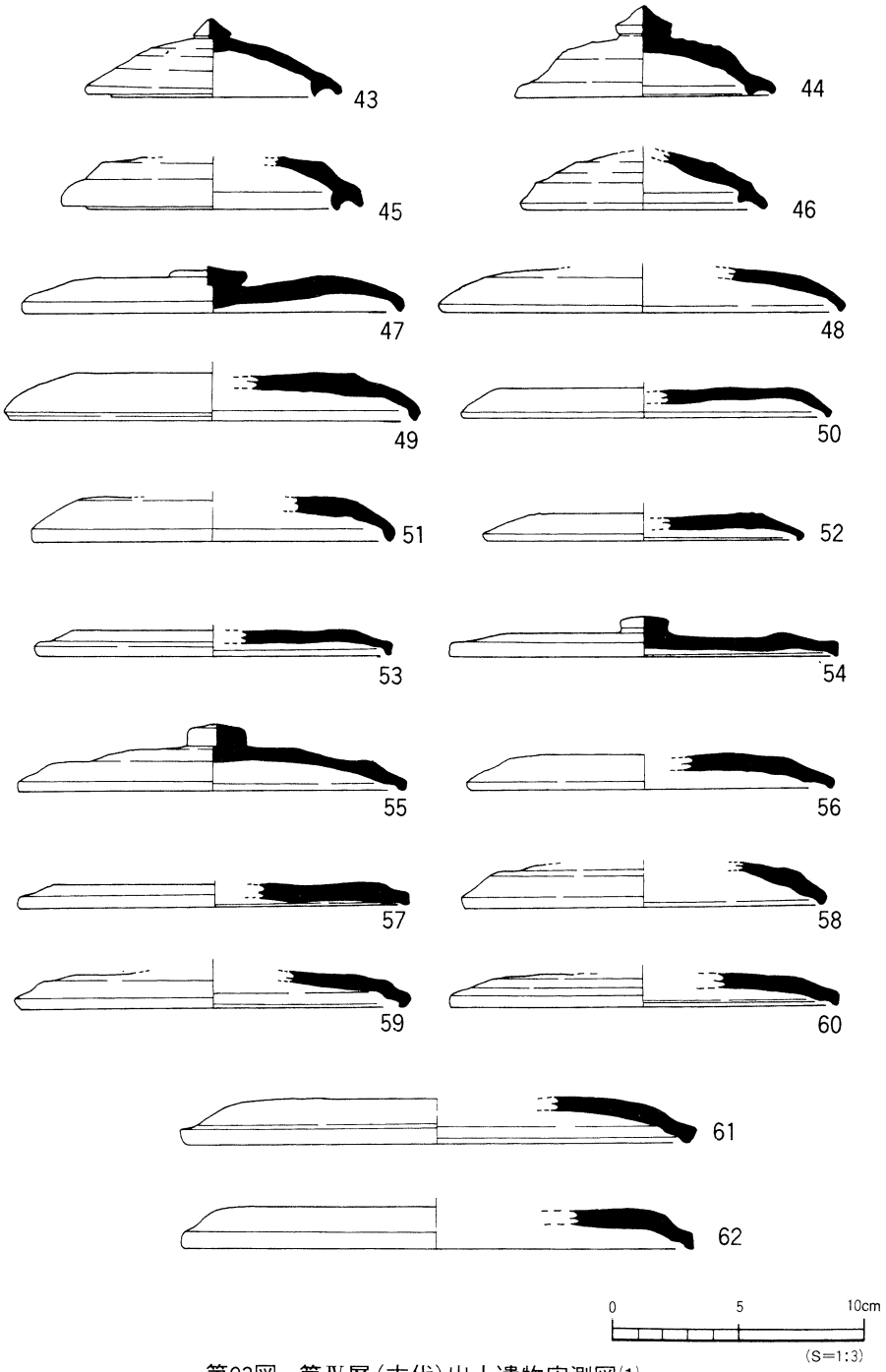
63～68は無台の坏である。63～66は底部はやや丸みをもち、体部は内湾気味に立ち上がる。７世紀後半。67・68は底部は平底風で、体部は直線的に立ち上がる。８世紀前半のものであろう。69～78は高台の付く坏である。69・70は体部はやや内湾し、底体部の境界は丸みを帯びる。７世紀後半。71～78は底体部の境界は稜をなす。高台は境界付近に付き、短くて太い。８世紀中葉～後半。底部外面は69・75・76は回転ヘラ削り調整、その他は回転ナデ調整を施す。

79・80は皿の蓋である。81・82は高台の付く皿である。８世紀中葉～後半。83～86は無台の皿である。83・84は体部はやや内湾する。85・86は体部は外傾して立ち上がり、口縁部は強く外反する。８世紀。

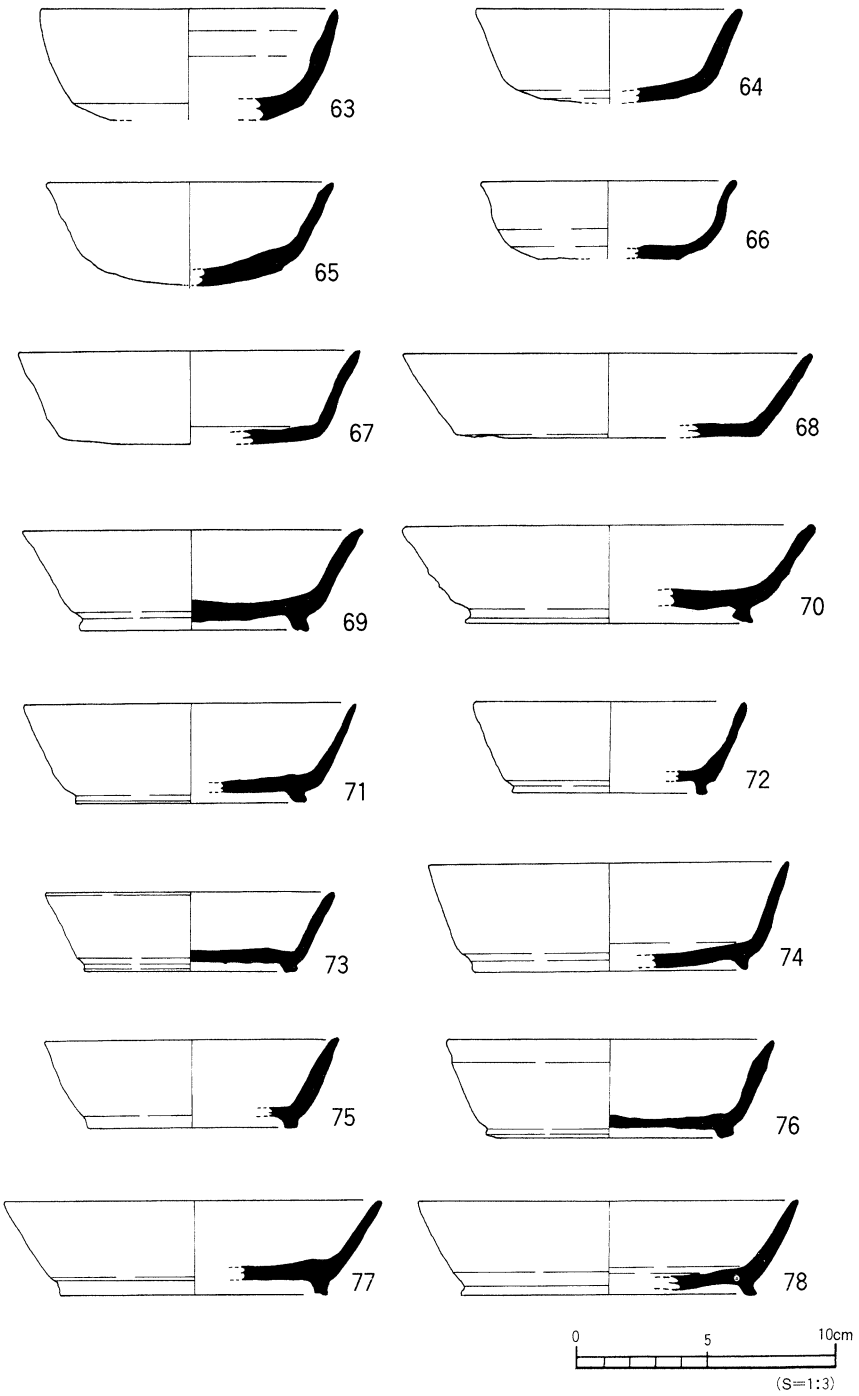
87～91は高坏の脚部である。87～89は低脚で脚端部は下外方へ屈曲する。90・91は円柱状の脚部である。７世紀～８世紀前半。92は壺の蓋。天井部は平坦で口縁部は鋭く屈曲する。８世紀。93～95は短頸壺。93・94は口縁端部を丸く仕上げる。７世紀後半。95は口縁端部は平坦面をなし、肩部の張りは強い。96・97は壺の底部。高台は低く外方へふんばる。８世紀。98は椀である。体部は内湾し口縁部はわずかに外反する。７世紀。99・100は平瓶。101は甕である。８世紀。

土師器

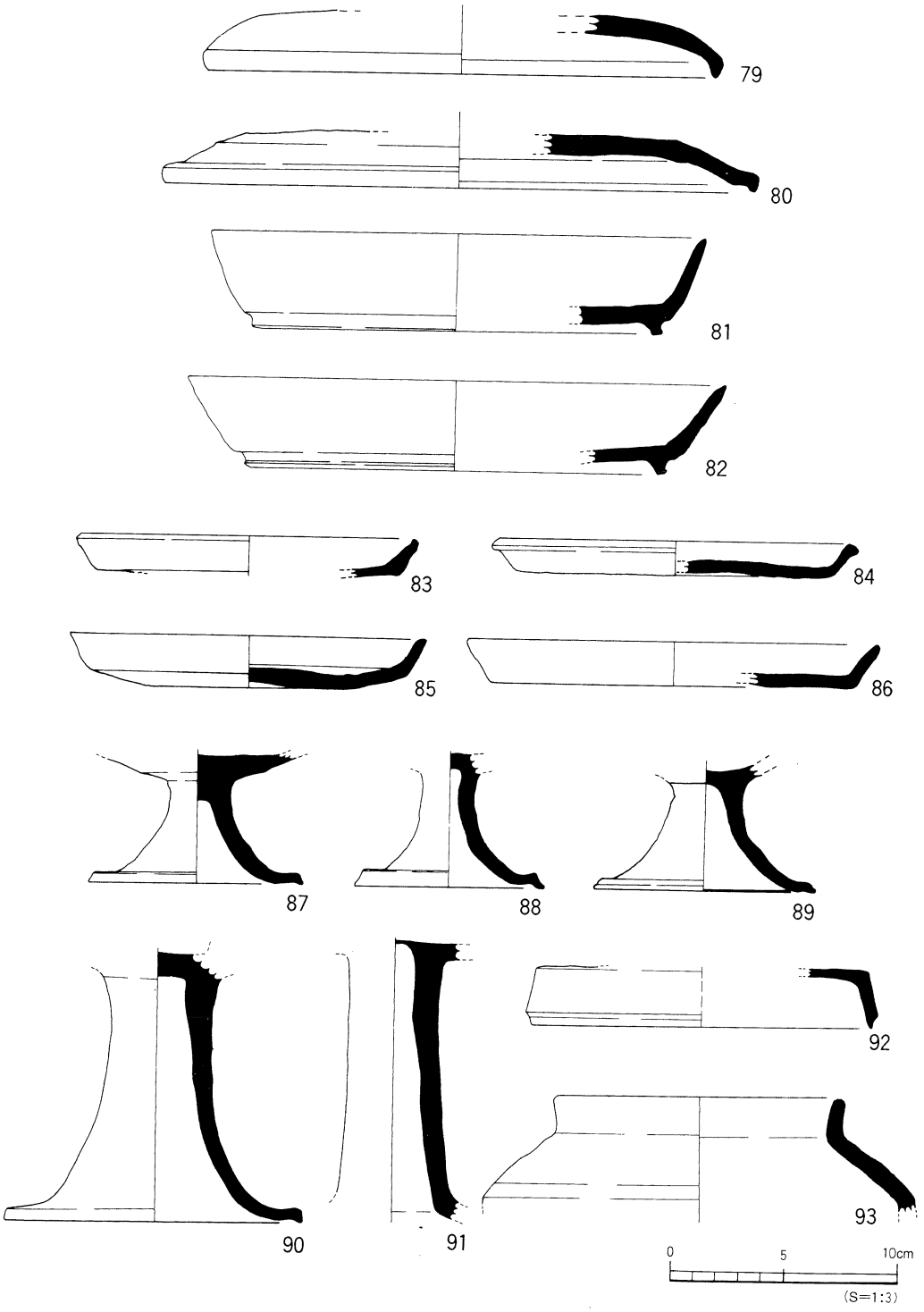
102～107は土師器の坏である。102・104は体部内面に放射状暗文を施す。103は放射状暗文とらせん暗文を施す。特に102・103の暗文は丁寧であり畿内産土師器と考えられる。調整は105は内外面共にヘラミガキ調整を施すが、それ以外は内面ナデ調整、外面ヘラミガキ調整を施す。108～115は土師器の皿、116は高坏である。108～111・115は口縁端部がわずかに内側に丸く肥厚する。



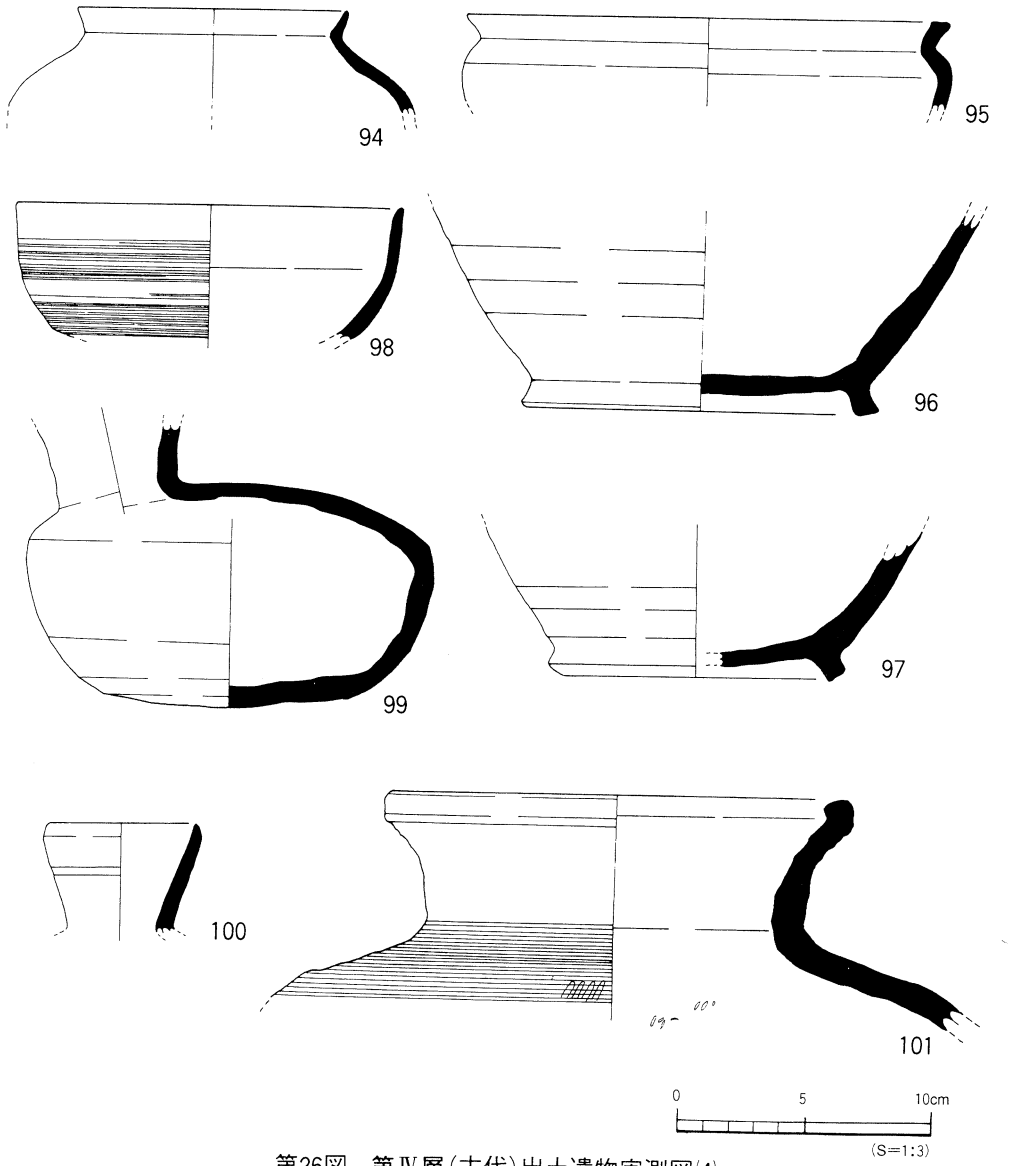
第23図　第Ⅳ層（古代）出土遺物実測図(1)



第24図　第Ⅳ層(古代)出土遺物実測図(2)



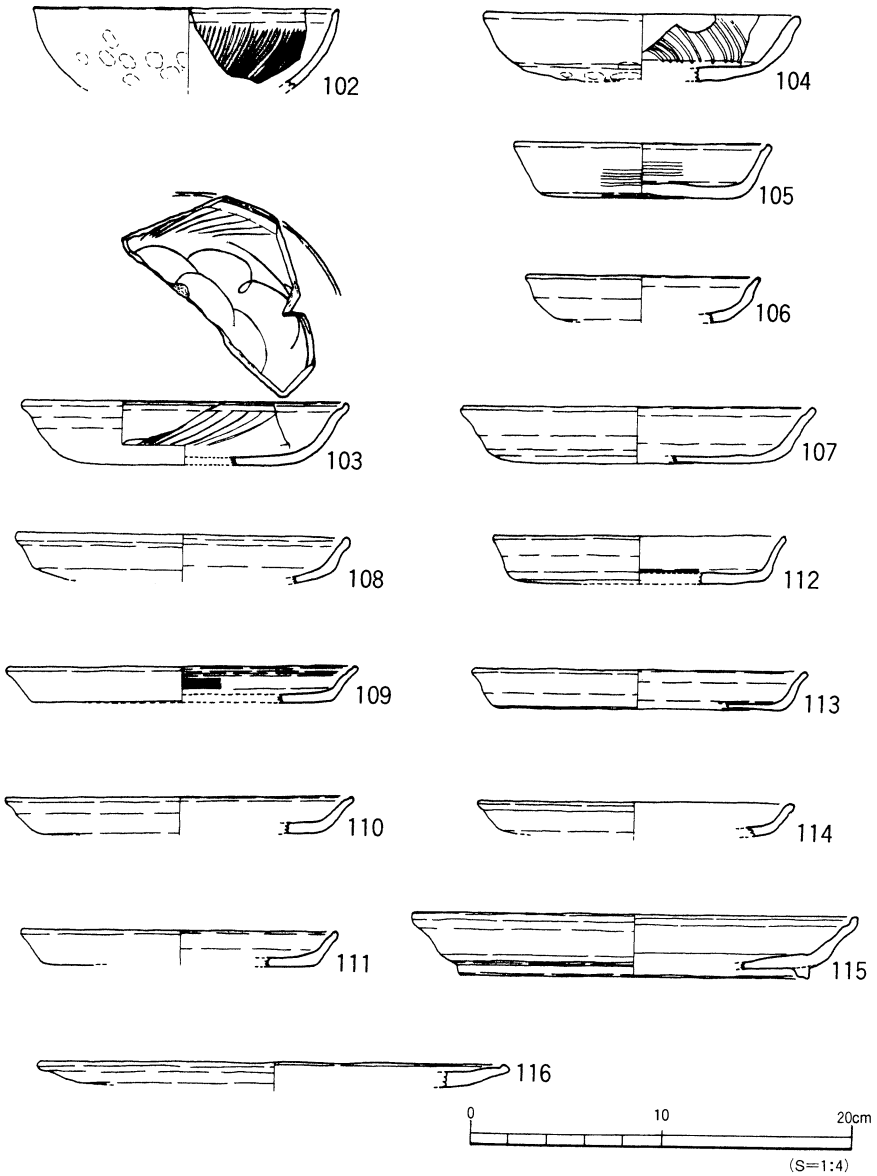
第25図　第Ⅳ層(古代)出土遺物実測図(3)



第26図　第Ⅳ層(古代)出土遺物実測図(4)

底部は108が丸底風であるが、その他は平底である。調整は体部内面にヘラミガキ調整を施すもの（109・112・115)、ナデ調整を施すもの（108・110・111・113)、不明のもの（114）がある。外面はいずれもヘラミガキ調整を施す。107と112の底部外面に「井」に似た細かい線刻がみられる。

これら土師器は大きく3つのグループに分類できる。102・103は畿内産、107～116は畿内のものをまねた在地産、104～106は他の地域からの搬入品と考える。時期は102が飛鳥Ⅱ、103は平城Ⅲ、107～116は平城Ⅰ・Ⅱ、104～106は平城Ⅲ以前のものであろう。



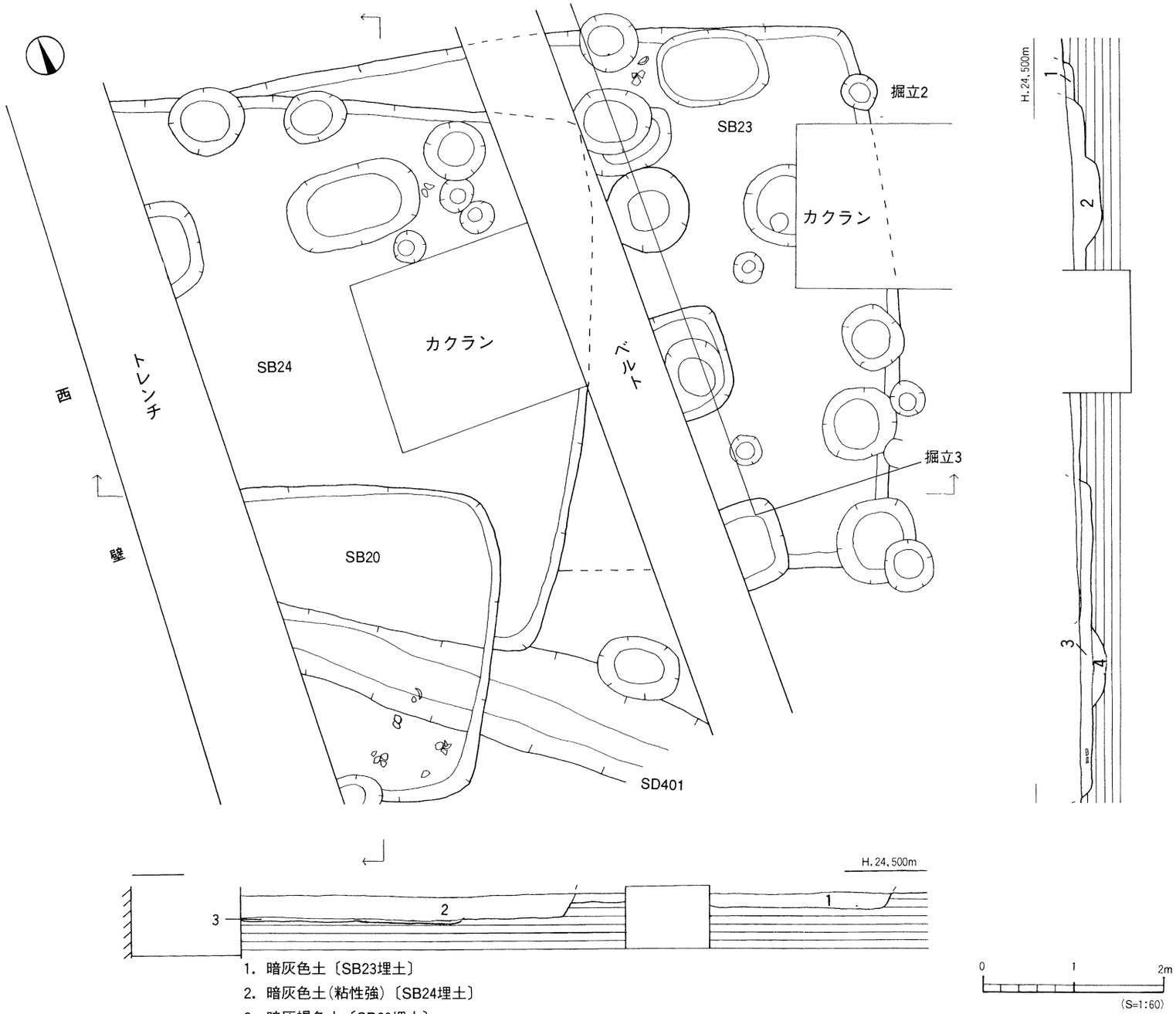
第27図　第Ⅳ層(古代)出土遺物実測図(5)

(2)　古墳時代

1)　竪穴式住居址

ＳＢ20（第28図、図版４）

調査区北西隅Ｂ２区に位置する。遺構西半部は調査区外へ続き、東壁はＳＢ24を切っている。調査区西壁の土層観察により第Ⅳ層中から掘り込まれた遺構である（第13図）。



1. 暗灰色土〔SB23埋土〕
2. 暗灰色土(粘性強)〔SB24埋土〕
3. 暗灰褐色土〔SB20埋土〕
4. 暗灰褐色砂〔SD401埋土〕

第28図　SB20・SB23・SB24測量図

平面形は隅丸の方形を呈するものと考えられ、規模は南北３．４ｍ、東西検出長３．０ｍ、壁高は約13cmを測る。埋土は第Ⅳ層と同様の暗灰褐色土単層である。住居址床面には流路の埋土である灰色粗砂が検出された。主柱穴や炉は未検出である。

住居址西壁は欠落しているものの北壁隅に焼土化した部分がありカマドが存在した可能性がある。遺物は埋土中からの出土であり、須恵器坏蓋や土師器甕他が出土した。

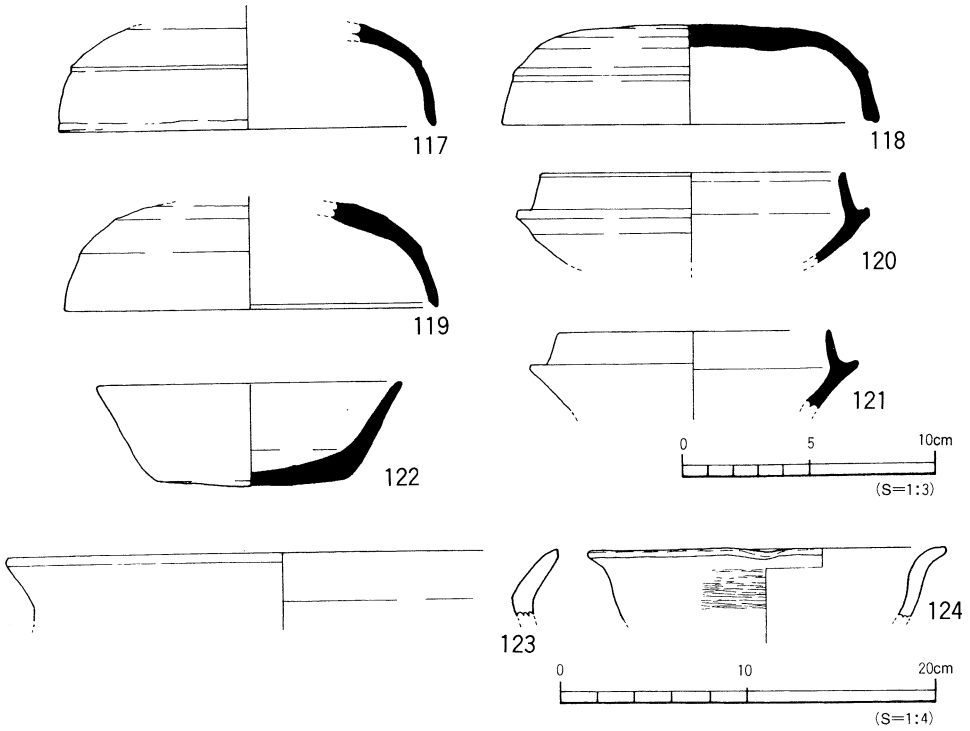
出土遺物（第29図、図版40）

117～119は須恵器坏蓋である。天井部と口縁部を分ける稜は凹線により表現される。120・121は坏身である。122は無台の坏。底部にヘラ切り痕を残す。123は土師器甕の口縁部である。124は片口の鉢で、体部外面に叩き調整を施す。

時期：これらの出土遺物等より本住居址の埋没時期は古墳時代後期前半～中葉頃に比定されよう。

ＳＢ24（第28図、図版４）

調査区北西隅Ａ２区～Ｂ２区に位置する。遺構西半部は調査区外に続き、南半部及び東半部はそれぞれＳＢ20、ＳＢ23と切り合う。遺構中央部東寄りは近現代の攪乱坑により削平さ



第29図　SB20出土遺物実測図

れている。ベルトの土層観察により本住居址はＳＢ20に後出する。調査区西壁の土層観察により第Ⅳ層中から掘り込まれたものであることを確認した（第13図）。

平面形は隅丸の方形もしくは長方形を呈するものと考えられ、規模は南北５．８ｍ、東西検出長５．５ｍ、壁高は約20cmを測る。埋土は暗灰色土単層である。床面は比較的平坦で、第Ⅶ層下の暗灰色砂礫層が検出された。住居址床面にて大小６基のピットを検出したが主柱穴は特定できなかった。炉やカマドは未検出である。

遺物は埋土中に須恵器が数点出土している。図化しうるものを２点抽出した。

出土遺物（第30図）

125は須恵器坏蓋である。126は短頸壺である。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。

時期：出土遺物が少ないため時期を特定するのは難しいが、須恵器の資料より本住居址の埋没時期は６世紀中葉～後半頃であろう。

ＳＢ23（第28図、図版４）

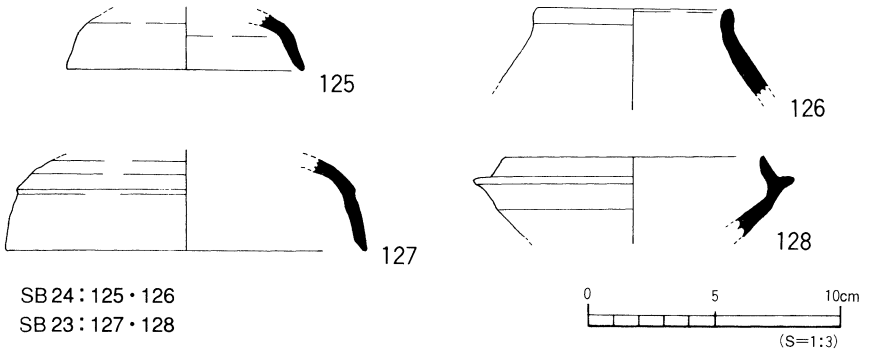
調査区北西部Ａ３区～Ｂ３区に位置する。東壁の一部は近現代の攪乱坑により削平され、西半部はＳＢ24に切られる。また、掘立２、掘立３の柱穴にも切られている。

平面形は隅丸の長方形を呈するものと考えられ、規模は南北７．０ｍ、東西検出長６．０ｍ、壁高は約20cmを測る。埋土は暗灰色の砂質シルト単層である。床面はほぼ平坦で硬くしまっている。

床面にて大小６基のピットを検出したが主柱穴は特定できなかった。炉やカマドは未検出である。遺物は住居址北壁中央付近の埋土中から須恵器坏蓋などが数点出土したのみである。図化しうるもの２点を抽出した。

出土遺物（第30図）

127は須恵器坏蓋。天井部と口縁部を分ける稜は鈍く、口縁端部は内傾する。128は坏身片



第30図　SB23・SB24出土遺物実測図

である。たちあがりは低く内傾し、端部は尖り気味に丸く仕上げる。

時期：出土遺物が少ないため、詳細な年代付けは難しいが、ＳＢ24に切られることや、出土した須恵器の資料より、本住居址の廃棄・埋没時期は６世紀前半～中葉頃と考えられる。

ＳＢ21（第31図、図版５・６）

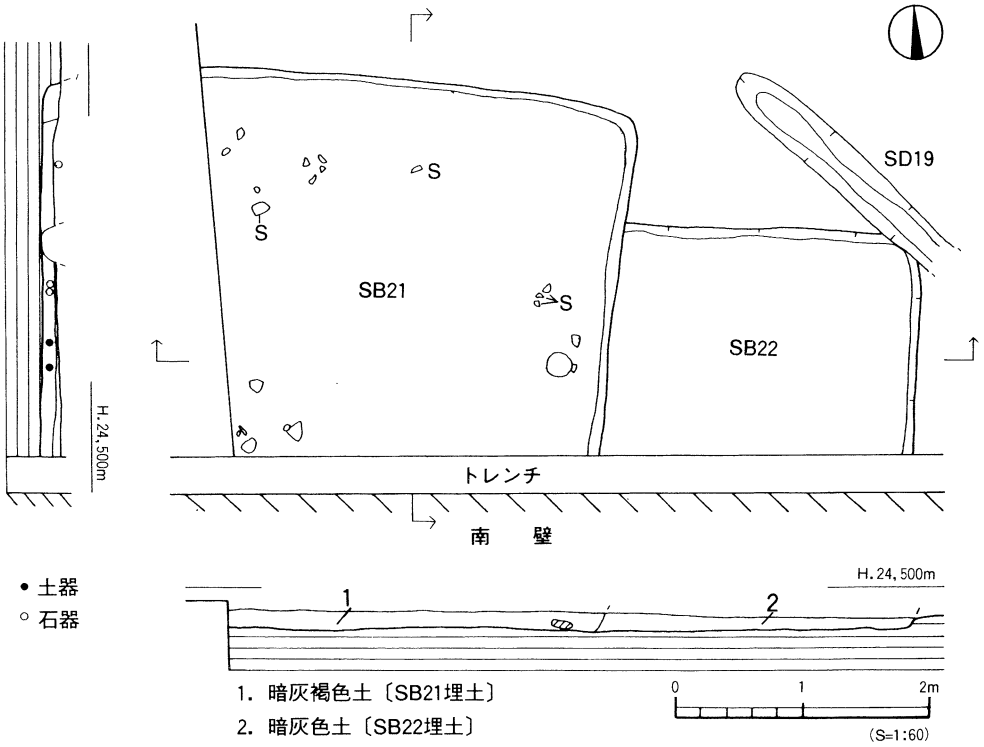
調査区南東部Ｇ７区～Ｈ７区に位置する。住居址東壁はＳＢ22を切り、南壁は調査区外へ続く。調査区南壁の土層観察により本住居址は第Ⅳ層中から掘り込まれたものである（第８図）。

平面形は隅丸の方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長３．５ｍ、南北検出長３．０ｍ、壁高は約15cmを測る。住居址床面には第Ⅴ層である褐色土が検出された。埋土は第Ⅳ層と同様の暗灰褐色土である。

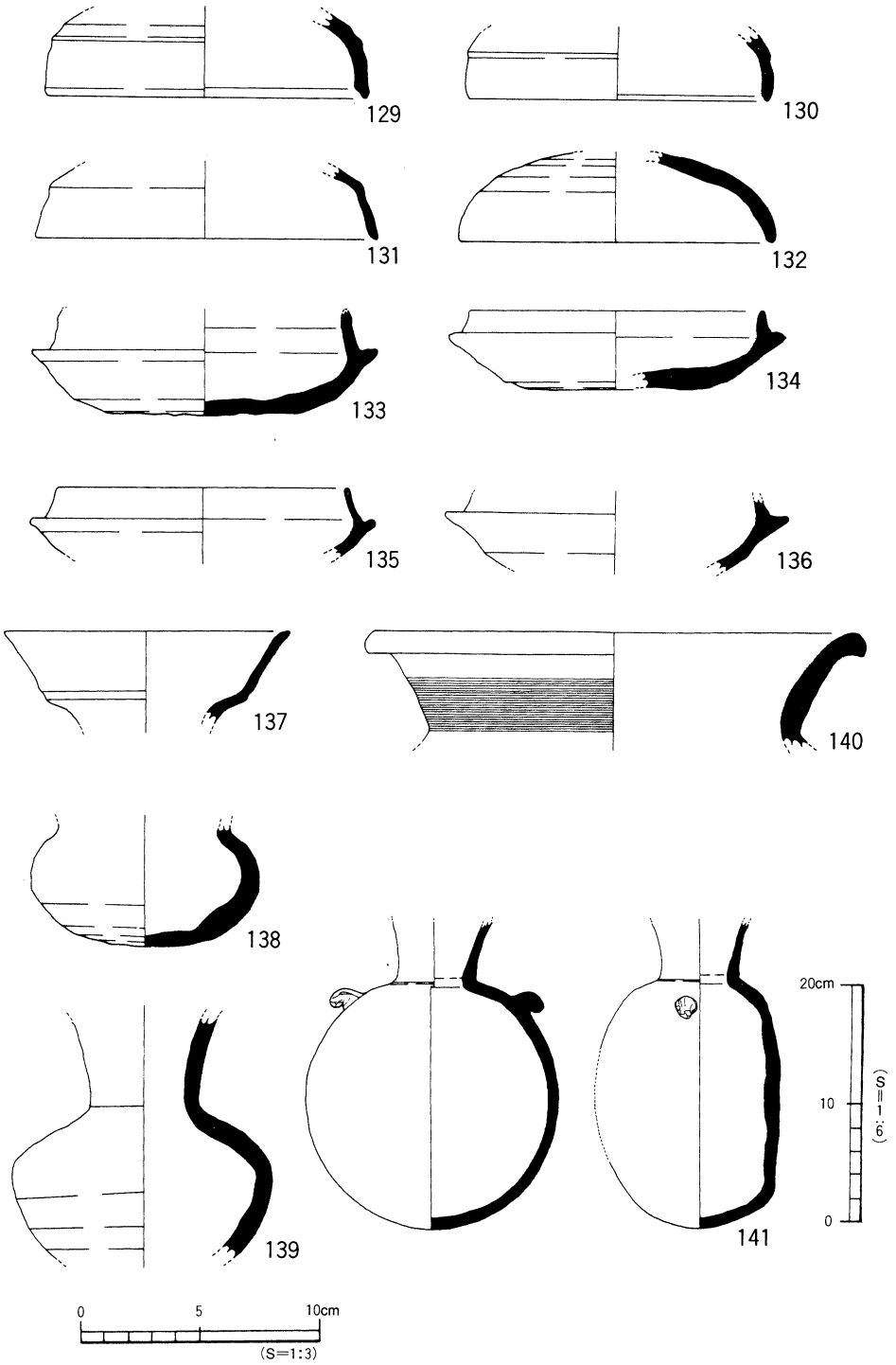
住居址床面からは炉やカマド等の施設は検出されなかった。遺物はそのほとんどが埋土中からの出土であり、須恵器坏蓋や壺、ほぼ完形の提瓶、石器類では、石庖丁（2052）などが出土しているほか、埋土上面から骨片が出土している。

出土遺物（第32・33図、図版40）

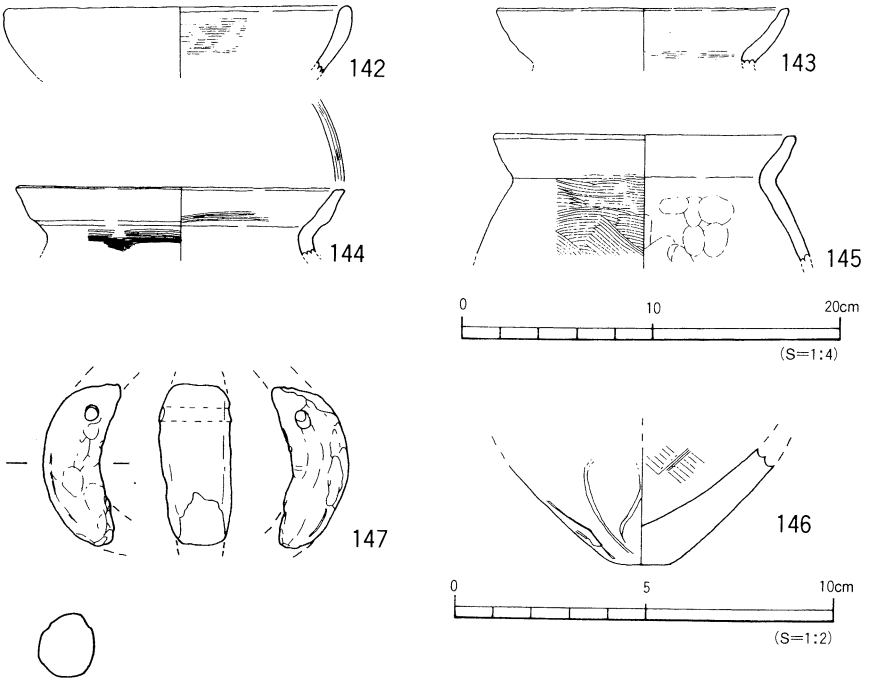
129～132は須恵器坏蓋、133～136は坏身である。129・133は住居址東壁の埋土上位から出



第31図　SB21・SB22測量図



第32図　SB21出土遺物実測図(1)



第33図　SB21出土遺物実測図(2)

土したものであり、混入品の可能性がある。137・138は瓿、139は長頸壺である。140は甕の口縁部片。口縁端部は珠玉状におさめる。141は提瓶。口縁部が欠損しているもののほぼ完形品である。穴埋めのための円孔が体部中位に残る。142～145は土師器の甕である。いずれも口縁部はやや内湾する。146は壺の底部。外面にヘラ状工具による木の葉の文様の線刻を施す。147は土製の勾玉である。径４㎜大の円孔を穿つ。

時期：出土した提瓶の特徴などから、本住居址の埋没時期は６世紀後半頃に比定されよう。

ＳＢ22（第31図、図版６）

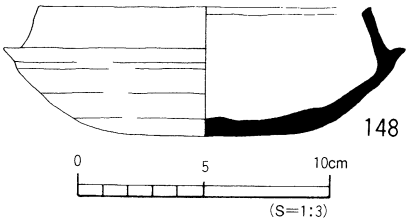
調査区南東隅Ｈ７・８区に位置する。住居址北東部はＳＤ19（８世紀中葉～後半）に切られ、南半部は調査区外に続く。西半部はＳＢ21に切られている。

平面形は方形プランを呈するものと考えられ、規模は東西検出長２．５ｍ、南北検出長１．８ｍ、壁高は約14㎝を測る。床面にはＳＢ21と同様に第Ⅴ層が検出された。埋土は暗灰色の砂質シルトである。住居址床面からはピットや炉などは検出されなかった。遺物は埋土中にて須恵器・土師器小片が数点出土している。図化しうるものを１点抽出した。

出土遺物（第34図、図版40）

148は須恵器坏身である。3分の2の残存である。住居址はほぼ床面からの出土である。たちあがりは内傾し、端部は内傾する。

時期：出土遺物が少ないため明確な時期判断は難しいが、ＳＢ21に切られることなどから、本住居址の埋没時期の下限を6世紀後半と考える。



第34図　SB22出土遺物実測図

ＳＢ13（第36図、図版6）

調査区西壁ほぼ中央部Ｃ2区からＤ2区で検出した。遺構西半部は調査区外へ続く。調査区西壁の土層観察により第Ⅳ層中から掘り込まれたものである（第13図）。

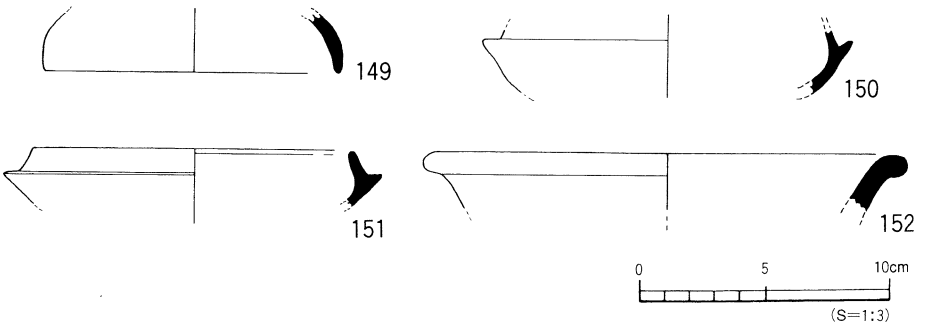
平面形は隅丸の方形もしくは長方形を呈するものと考えられ、規模は南北5.4m、東西検出長2.4m、壁高は約20cmを測る。床面は比較的平坦で北から南に向けて緩やかな傾斜をなす。床面にて大小4基のピットを検出したが、本住居址に伴うものかは不明である。主柱穴や炉は未検出である。埋土は暗灰褐色土単層である。

遺物は埋土中から土師器、須恵器小片が数点出土している。図化しうるものを4点抽出した。

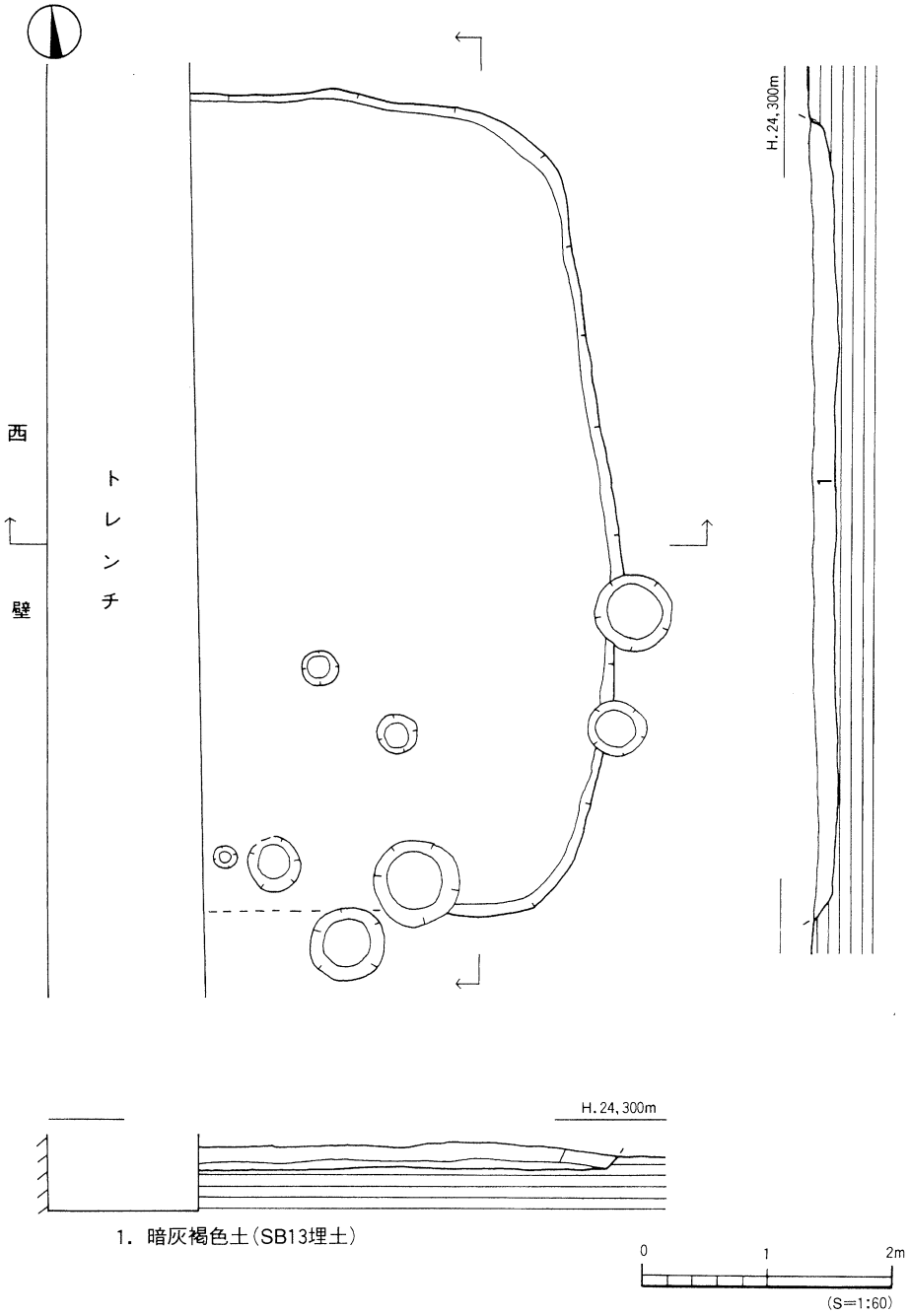
出土遺物（第35図）

149は須恵器坏蓋、150・151は須恵器坏身の口縁部である。149は天井部と口縁部を分ける稜は消失している。151はたちあがりは短く内傾し、端部は丸く仕上げる。152は甕の口縁部である。口縁端部は珠玉状に丸くおさめる。

時期：出土遺物がわずかなため時期を特定するのは困難であるが、須恵器の特徴などから本住居址の埋没時期を古墳時代後期後半と考える。



第35図　SB13出土遺物実測図



第36図　SB13測量図

ＳＢ６（第37図、図版７）

調査区中央西寄りＥ２区からＦ３区で検出した。遺構南東部はＳＢ18を切っている。ベルトの土層観察により第Ⅳ層中から掘り込まれたものである。平面形は東西にやや長い隅丸方形を呈し、規模は東西７．６ｍ、南北６．１ｍ、壁高は約35cmを測る。住居址床面は中央部がやや凹んでいるものの、ほぼ平坦である。

住居址床面にて大小10基のピットを検出したが主柱穴は特定できなかった。ただし、遺構南西部床面検出のＳＰ①、ＳＰ②はＳＢ９の主柱穴である。炉や周溝は未検出である。埋土は暗灰褐色土単層である。

遺物は床面付近出土（153～162・164・166・170・173・174・178～185）と、埋土上位出土（163・165・167～169・171・172・175～177）のものに分けられ、埋土上位出土のものは包含層である第Ⅳ層遺物の流れ込みの可能性が高い。

出土遺物（第38・39図、図版41）

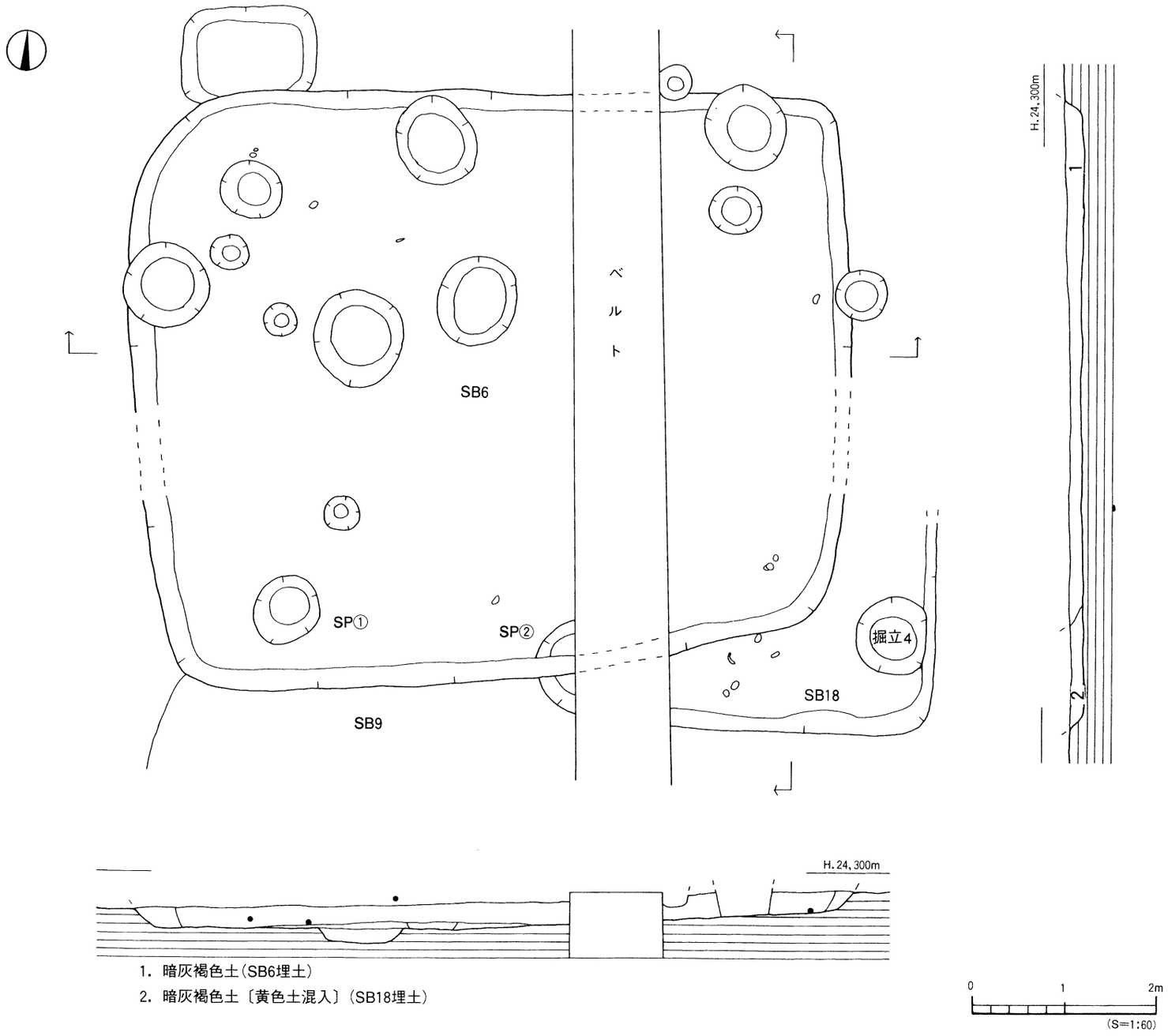
須恵器

153～156は坏蓋である。すべて天井部と口縁部を分ける稜は段により表現される。157～162は坏身である。157～159はたちあがりが比較的長く、160～162は短く内傾する。162の受部は上方にひねり出されている。163は皿の蓋であろう。口縁部は下方に屈曲する。164は無台の坏。体部は直線的に立ち上がる。165は高台の付く坏。口縁部は欠損している。高台は底部端付近に付く。166は高坏の坏部片。167～169は皿である。167・168は体部は外反し、口縁端部は水平な面をなす。169は体部はやや内湾し、口縁部は外反する。170は椀。口縁部及び体部外面に波状文を施す。171・172は壺。171の口縁端部は内傾する面をなす。173は甕の口縁部片。口縁端部を上下方に拡張する。

土師器・弥生土器

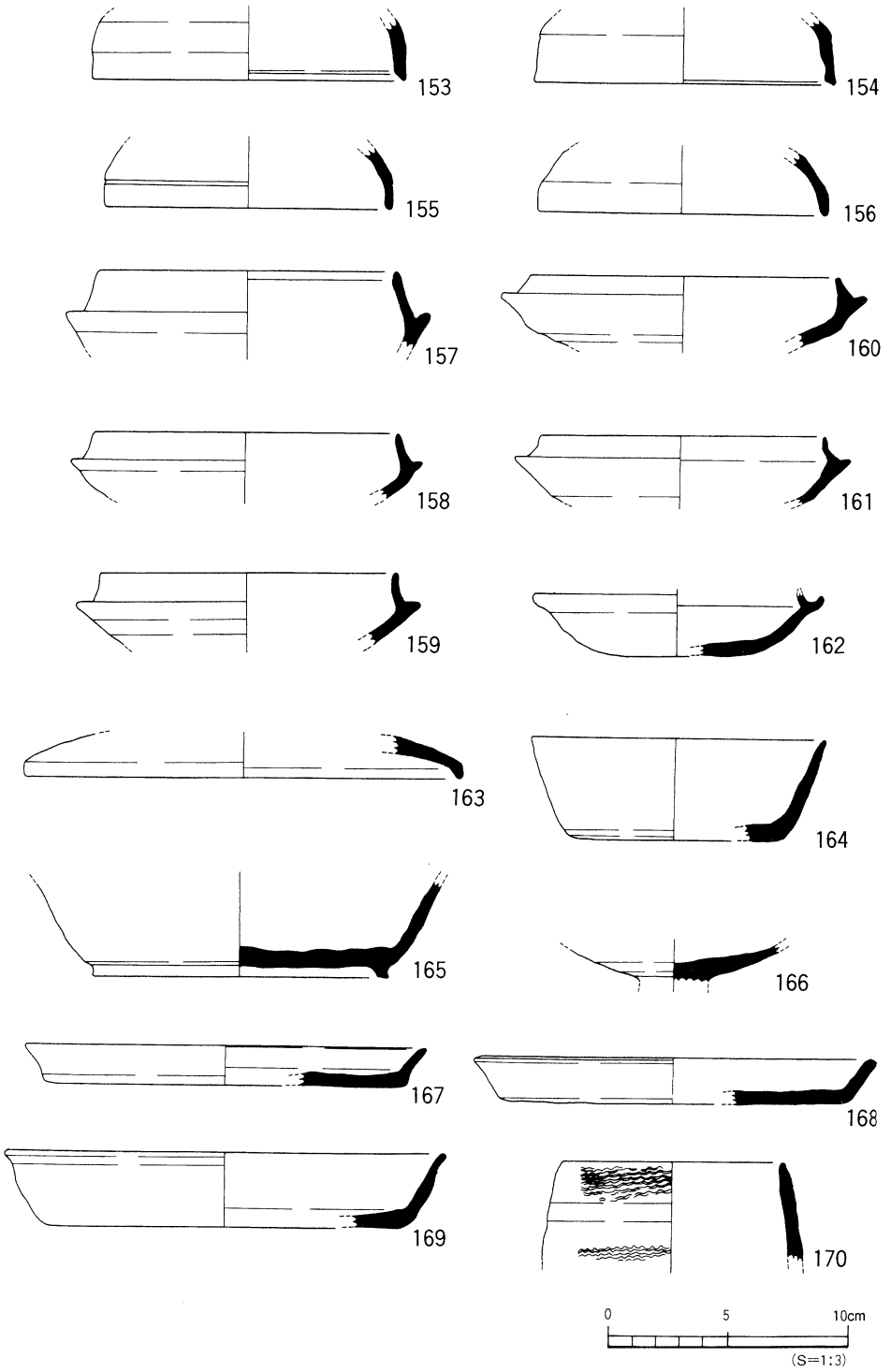
174は土師器甕の口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。175・176は坏。体部は内湾してたちあがる。176は口縁部が外反する。177は鉢。口縁端部を丸く仕上げる。178は椀で体部は内湾する。179は高坏の脚部。180・181は弥生土器の甕である。口縁部は「く」の字状を呈する。182～184は壺。182・183は複合口縁壺で182は口縁部外面に上下に７条の櫛描波状文を施す。183は６条以上の櫛描波状文と斜線文を施す。184は小型の壺。口縁部は外反し、体部内面に指頭痕を顕著に残す。185は支脚である。

時期：住居址床面付近出土の須恵器の特徴から本住居址の廃棄・埋没時期は古墳時代後期後半～７世紀初頭に比定される。

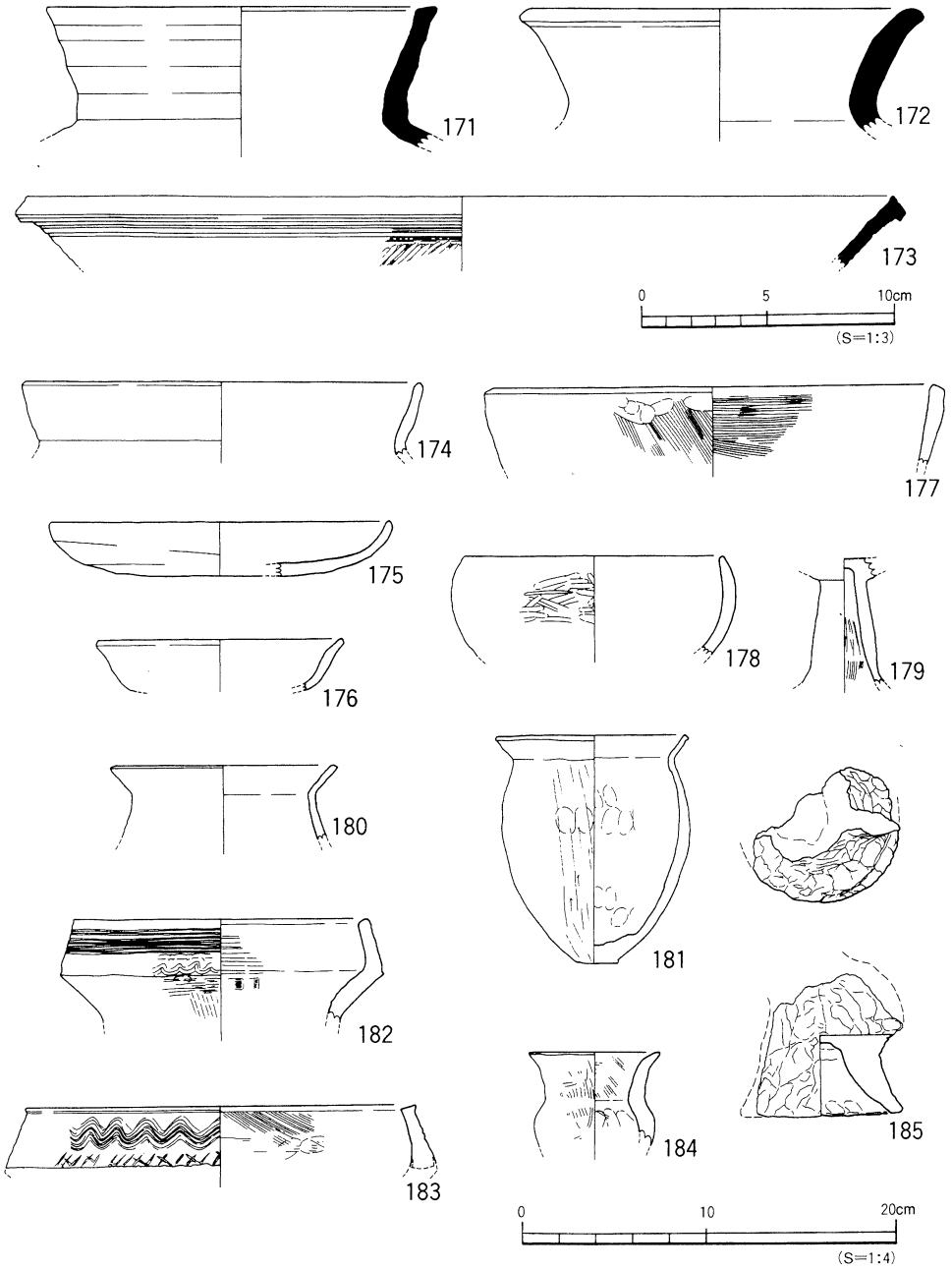


1. 暗灰褐色土(SB6埋土)
2. 暗灰褐色土〔黄色土混入〕(SB18埋土)

第37図　SB6・SB18測量図



第38図　SB6出土遺物実測図(1)



第39図　SB6出土遺物実測図(2)

ＳＢ18（第37図）

調査区中央部南西寄りＦ３区で検出した。遺存状況は悪く、遺構南西部のみの検出である。ＳＢ６と同様にベルトの土層観察により第Ⅳ層中から掘り込まれたものである。遺構南西隅は掘立４（７世紀初頭）柱穴に切られ、西側はＳＢ６に切られる。

平面形は方形プランを呈するものと考えられ、規模は東西検出長３．０ｍ、南北検出長２．４ｍ、壁高は約30cmを測る。埋土は暗灰褐色土を基調とし、黄色土が斑点状に混入する。遺物は土師器・須恵器小片が数点出土しているが、図化しうるような遺物はない。

時期：ＳＢ６に切られることから、古墳時代後期後半以前のものであろう。

２）掘立柱建物址

掘立１（第40図、図版７・８）

調査区南西隅Ｇ１区～Ｉ１区で検出した建物址である。調査区西壁の土層観察により第Ⅳ層中から掘り込まれたものであることを確認した（第12図）。柱穴はＳＢ10（古墳時代中期）を切っている。３間（５．４ｍ）×３間（５．０ｍ）の総柱建物址（一部柱穴未検出）で、ほぼ磁北に等しい方位をとる。各柱穴の平面形は円～楕円形で径０．６～１．２ｍ、深さ20～50cmを測る。柱痕は径15～25cm、深さ25～50cmを測る。柱間は桁間１．６～１．９ｍ、梁間１．５～１．８ｍを測る。

柱穴のうち、径20～30cm大の詰め石の礫が検出されたものがある。柱穴埋土は、暗灰褐色土単層、柱痕埋土は暗褐色土である。柱穴内からは須恵器坏身片などが出土している。

出土遺物（第41図）

186～188は須恵器坏身である。たちあがりは短く内傾し、端部は尖り気味である。189は須恵器甕。口縁端部は上内方に屈曲する。肩部外面に回転カキ目調整、内面に円弧叩きを施す。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀末～７世紀初頭に比定する。

掘立２（第42図）

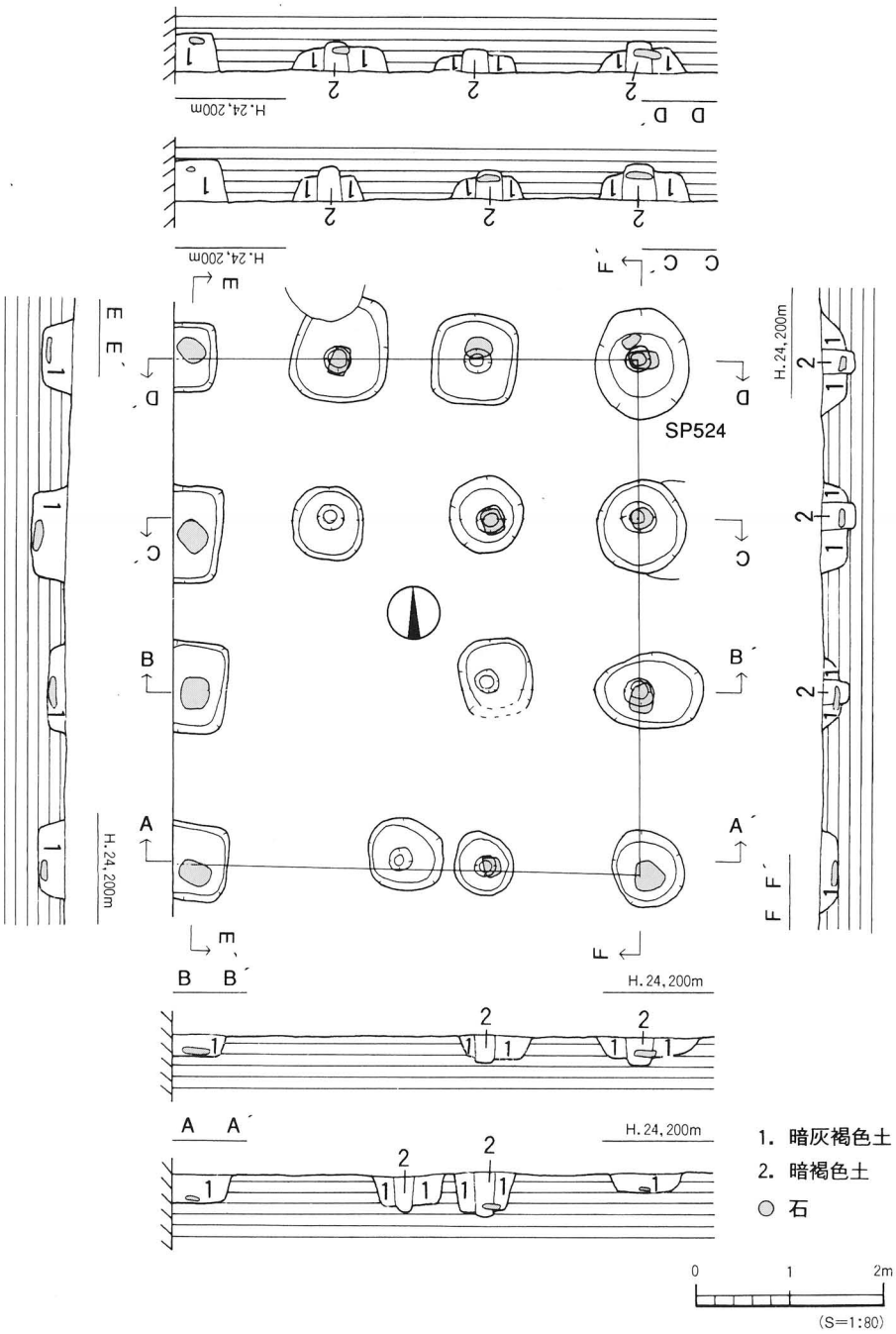
調査区北西部Ａ３区～Ｂ５区で検出した建物址でＳＢ７（古墳後期）を切っている。３間（８．８ｍ）×３間（４．８ｍ）の総柱建物址と考えられ、主軸方位をほぼ磁北に等しくとる。柱間は桁間２．６～３．４ｍ、梁間１．３～１．６ｍを測る。各柱穴の平面形は円～楕円形を呈し、径20～90cm、深さ40～70cmを測る。柱穴埋土は暗灰褐色土、柱痕埋土は暗褐色土である。

柱穴内からは須恵器蓋坏片が出土している。

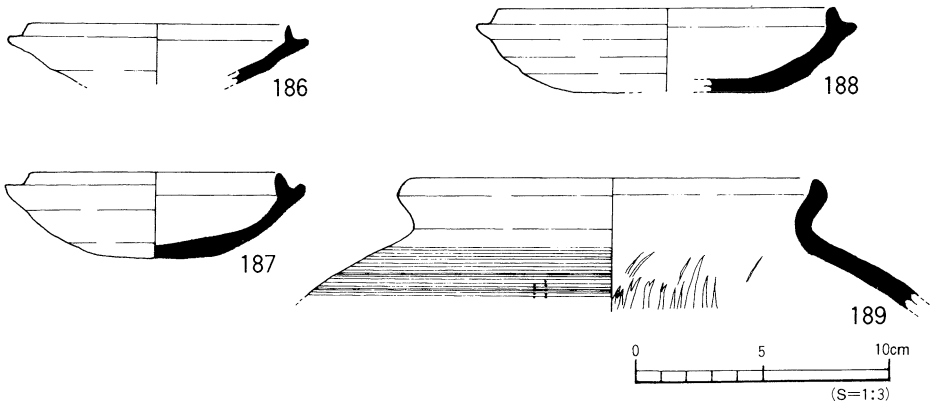
出土遺物（第43図）

190は須恵器坏蓋である。天井部は丸みをもつ、天井部と口縁部を分ける稜は消失している。191・192は須恵器坏身である。たちあがりは短く内傾する。

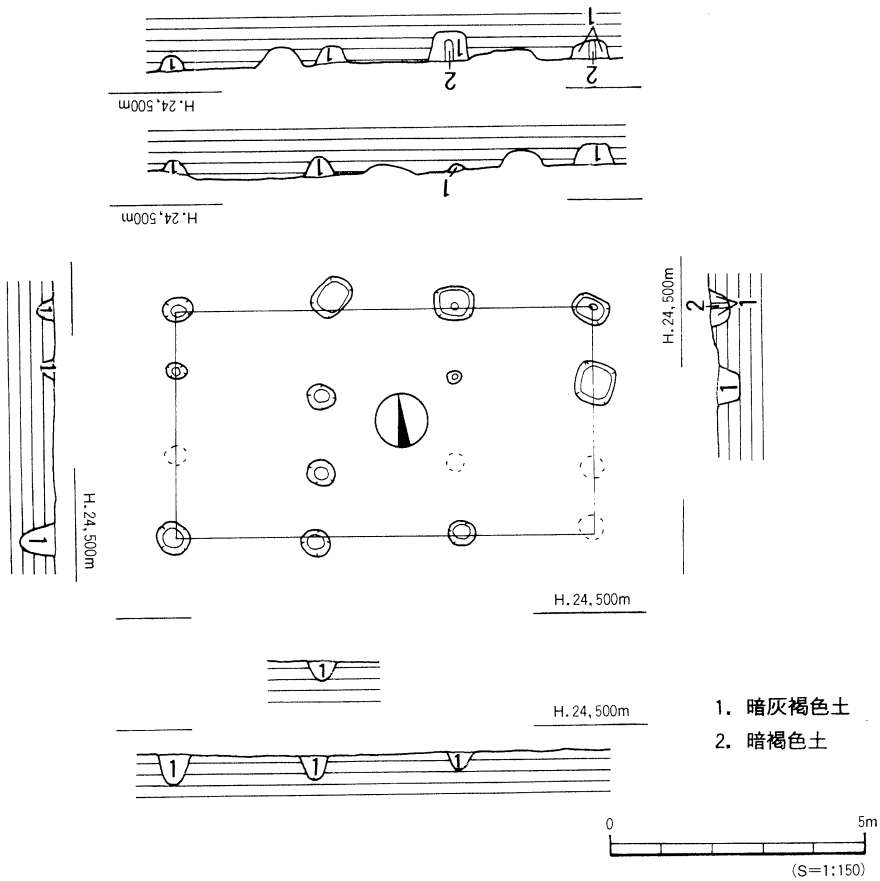
時期：出土した須恵器の特徴より本建物址の時期は６世紀末～７世紀初頭と考えられる。



第40図　掘立1測量図



第41図　掘立1出土遺物実測図

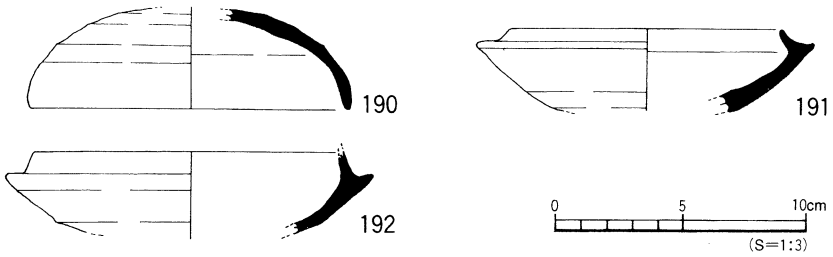


第42図　掘立2測量図

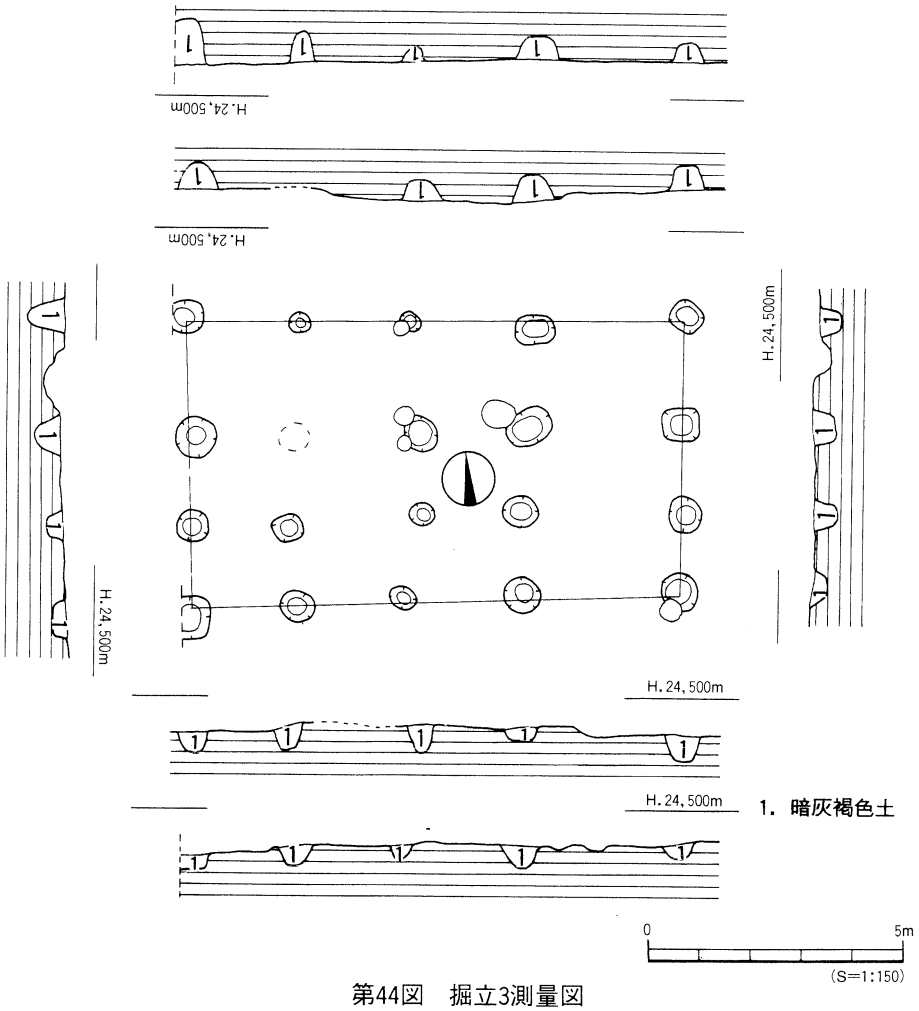
掘立３（第44図）

調査区北西部Ａ３区～Ｂ５区で検出した建物址でＳＢ23を切っている。４間（10.４ｍ）×３間（６．０ｍ）の総柱建物址と考えられ、掘立２と主軸方位をほぼ等しくする。

柱間は桁間２．２～３．４ｍ、梁間１．６～２．４ｍを測る。各柱穴の平面形は円～楕円形を呈し、径40～80㎝、深さ30～80㎝を測る。柱穴埋土は暗灰褐色土である。



第43図　掘立2出土遺物実測図



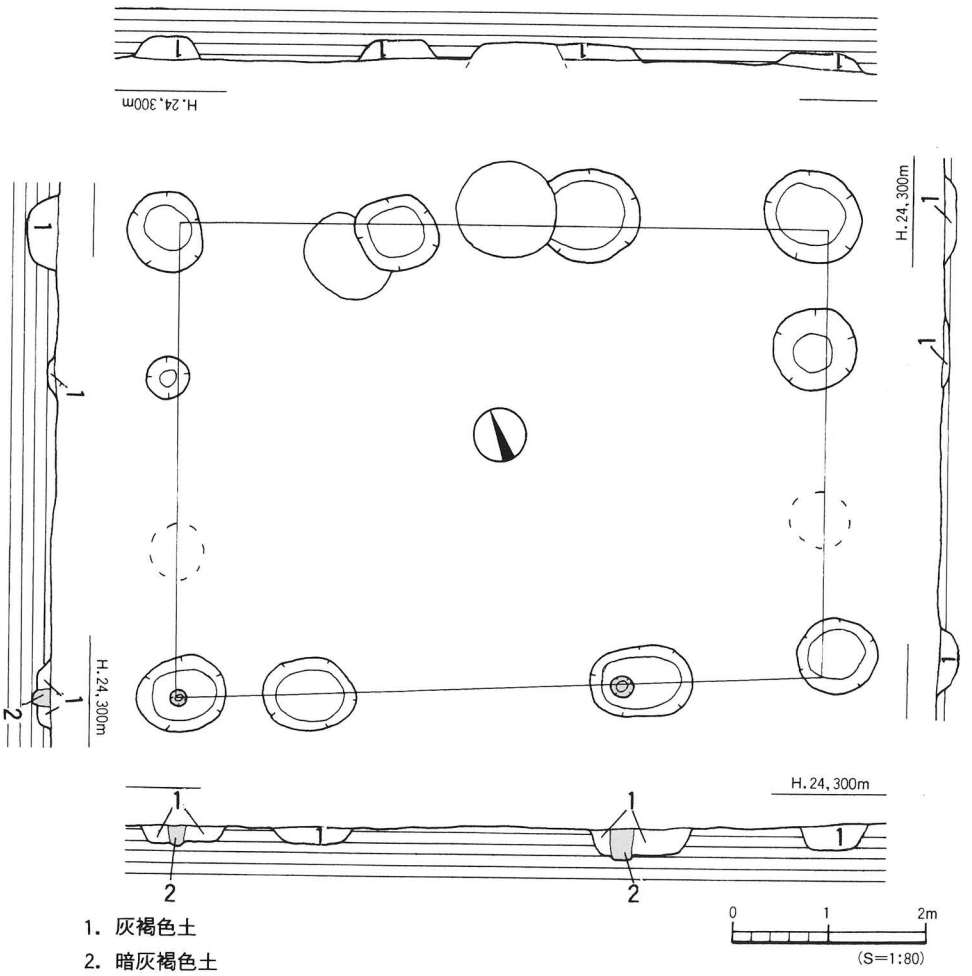
第44図　掘立3測量図

柱穴内からは須恵器・土師器の小片が数点出土しているが図化しうるものはない。

時期：出土遺物・住居址との切り合い、掘立２に主軸方位が類似することなどから、本建物址は掘立２に類似する時期のものであろう。

掘立４（第45図）

調査区南部Ｆ３区～Ｇ４区で検出した建物址でＳＢ18を切っている。３間（６．８ｍ）×３間（４．７ｍ）の東西棟で主軸方位Ｎ65°Ｅを測る。柱間は桁間２．０～２．５ｍ、梁間１．６ｍを測る。各柱穴の平面形は円～楕円形を呈し径80～110㎝、深さ20～35㎝を測る。柱穴埋土は灰褐色土、柱痕埋土は暗灰褐色土である。柱穴からは須恵器坏身と椀が出土している。

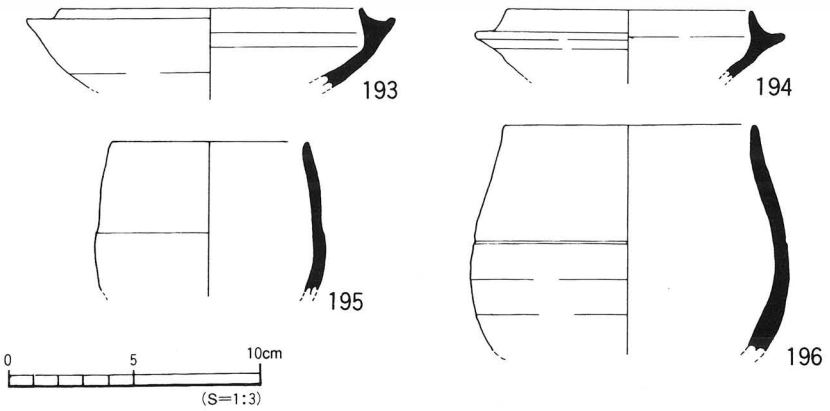


第45図　掘立4測量図

出土遺物（第46図）

193・194は須恵器坏身である。たちあがりは低く内傾し、端部は尖る。195・196は須恵器椀である。体部は内湾し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。

時期：出土した須恵器の特徴より、本建物址の時期は６世紀末～７世紀初頭に比定されよう。



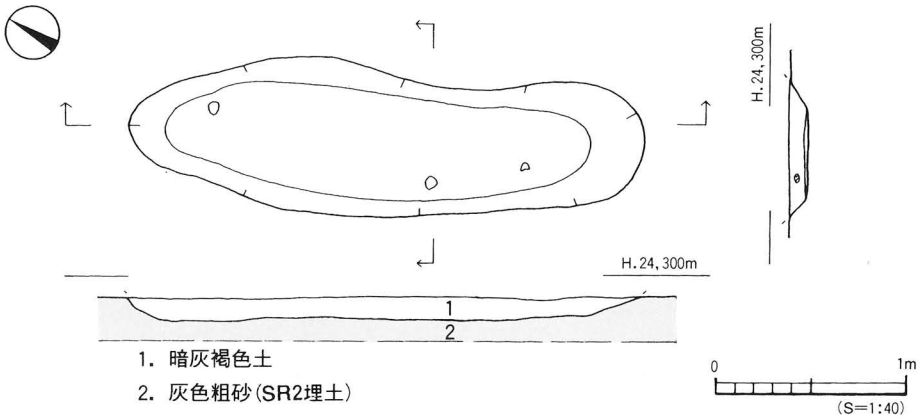
第46図　掘立4出土遺物実測図

３）土坑

ＳＫ12（第47図）

調査区南東部Ｆ７区～Ｆ８区で検出された。調査時、第Ⅳ層掘り下げ中に検出した土坑である。平面形は不整の長楕円形を呈し、規模は長径２．７ｍ、短径０．９ｍ、深さ約10cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。床面は流路ＳＲ２の埋土である灰色粗砂が検出された。埋土は暗灰褐色土である。

遺物は須恵器坏身のほか、土師器の壺他が出土している。

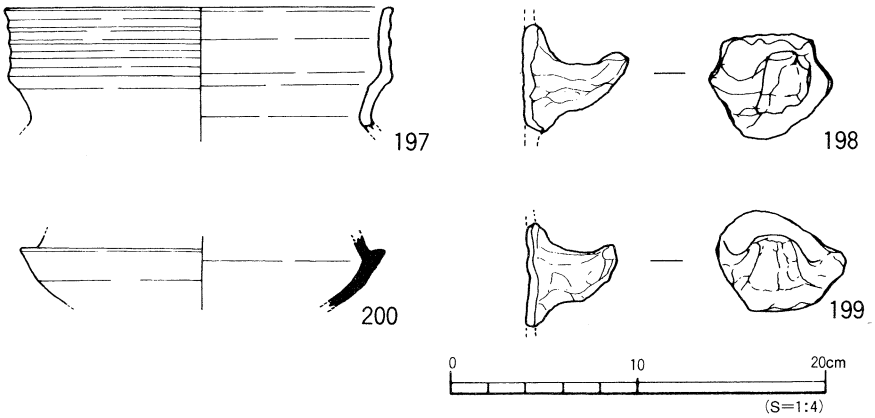


第47図　SK12測量図

出土遺物（第48図）

197は土師器の壺。口縁部は直立して立ち上がり、口縁端部は内傾する。198・199は甑の把手である。200は須恵器坏身である。

時期：出土遺物が少量のため時期を特定することは難しいが、６世紀代の遺構と考える。



第48図　SK12出土遺物実測図

ＳＫ22（第14図）

調査区南東隅Ｆ８区～Ｇ８区で検出された。遺構東半部は調査区外に続き南西部はＳＤ20に切られる。調査区東壁の土層観察により第Ⅳ層中から掘りこまれた遺構であることを確認している（第11図）。

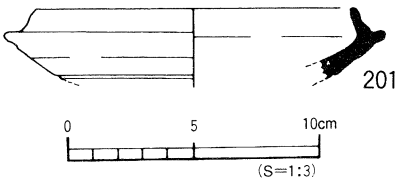
平面形は隅丸の方形状を呈するものと考えられ、規模は南北３．４ｍ、東西検出長０．９ｍ、深さ約14cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は第Ⅳ層と同様の暗灰褐色土である。

遺物は埋土中から須恵器小片が出土している。図化しうるものを１点抽出した。

出土遺物（第49図）

201は須恵器坏身。たちあがりは低く内傾し、端部は丸く仕上げる。

時期：資料が少ないため時期を特定するのは難しいが、６世紀後半頃と考えたい。



第49図　SK22出土遺物実測図

ＳＫ21（第14図）

調査区東壁中央部、Ｃ９区で検出された。遺構東半部は調査区外に続く。調査区東壁の土層観察により第Ⅳ層中から掘り込まれたものである（第13図）。

平面形は隅丸の方形プランを呈するものと考えられ、規模は南北３．４ｍ、東西検出長０．７ｍ、深さ約22cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は暗灰褐色土である。床面には第Ⅶ層下の暗灰色砂礫が検出された。

遺物は埋土中から須恵器小片が数点出土したが図化しうるものはない。

時期：時期を判断する資料が少ないため、詳細な時期判断はできないが、ＳＫ22と形状、埋土等が類似することなどからほぼ同時期の遺構と考えておく。

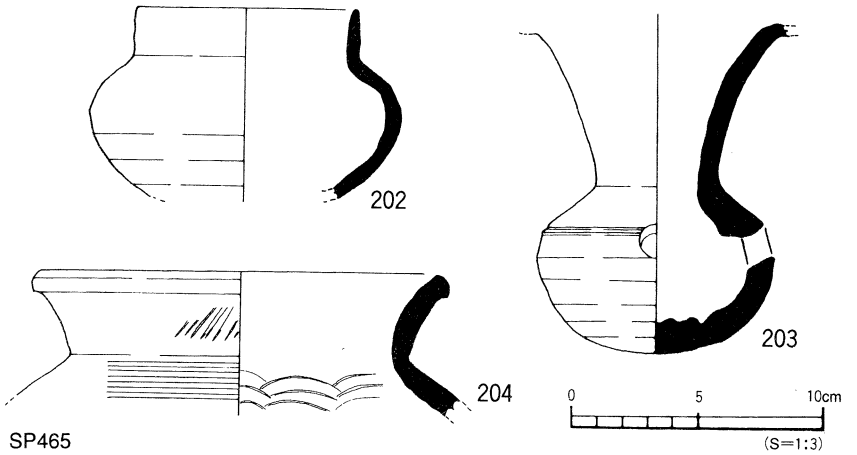
４）その他の遺構と遺物

第Ⅳ層検出のピットは155基である（掘立柱建物柱穴55基を含む）。埋土の違いにより①灰褐色土、②暗灰褐色土、③暗灰褐色土（黄色土が斑点状に混入）の３つに分類される。

埋土①のピットは掘立４を含め23基で調査区南東部に点在する。埋土②のピットは掘立１を含め32基で、調査区ほぼ全域に点在する。埋土③のピットは掘立２・３を含む100基で、調査区北半部及び南東部に分布する。これらピットの内、古墳時代の遺物を出土したピットが10数基あった。そのうち３基のピットから出土した遺物を以下に掲載した。

ピット出土遺物（第50図、図版41）

202はＳＰ465出土の須恵器短頸壺である。口縁部は直立し、口縁端部はわずかに面をなす。体底部外面に回転ヘラ削り調整を施す。203はＳＰ80出土の須恵器瑳。口縁部は欠損しているもののほぼ完形品である。体部は扁球形で体部下半に回転ヘラ削り調整を施す。204はＳＰ85出土の須恵器甕の口縁部。頸部外面に回転カキ目調整、内面に円弧叩きを施す。



202：SP465
203：SP80
204：SP85

第50図　第Ⅳ層ピット（古墳）出土遺物実測図

第Ⅳ層出土遺物（第51～54図、図版41・42）

須恵器

205～216は坏蓋である。天井部と口縁部の境界が断面三角形の稜をなすもの（205・206）、凹線によるもの（207～210）、稜のないもの（211～216）に分類される。217～232は坏身である。たちあがりの長さが1cm以上のもの（217～224）と1cm以下のもの（225～232）に分かれる。前者はたちあがり端部が内傾するものが大半で224のみ丸く仕上げる。後者は端部の尖るもの（230～232）、丸いもの（225～229）とがある。233～239は高坏、240は有蓋高坏の蓋である。233・234は無蓋高坏の坏部で体部中位に凹線が巡り、口縁部は外反する。235・236は椀形の坏部で口縁端部は丸く仕上げる。237～239は脚部片。脚端部は下方に屈曲する。240は高坏の蓋でつまみ中央部が凹む。241・242は瓶、243は長頸壺である。244は短頸壺。口縁部はやや内傾し、端部は丸く仕上げる。245～250は甕の口縁部である。249の口縁端部は外方へつまみ出されている。251は器台の脚部。脚端面は凹面をなす。

土師器

252・253は甕形土器。252は口縁部を折り曲げ、口縁端部は丸く仕上げる。253は口縁部中位で屈曲し、端部は尖る。254は壺形土器、255は小型器台である。256は紡錘車である。断面形は台形状を呈する。

(3) 古墳時代～古代

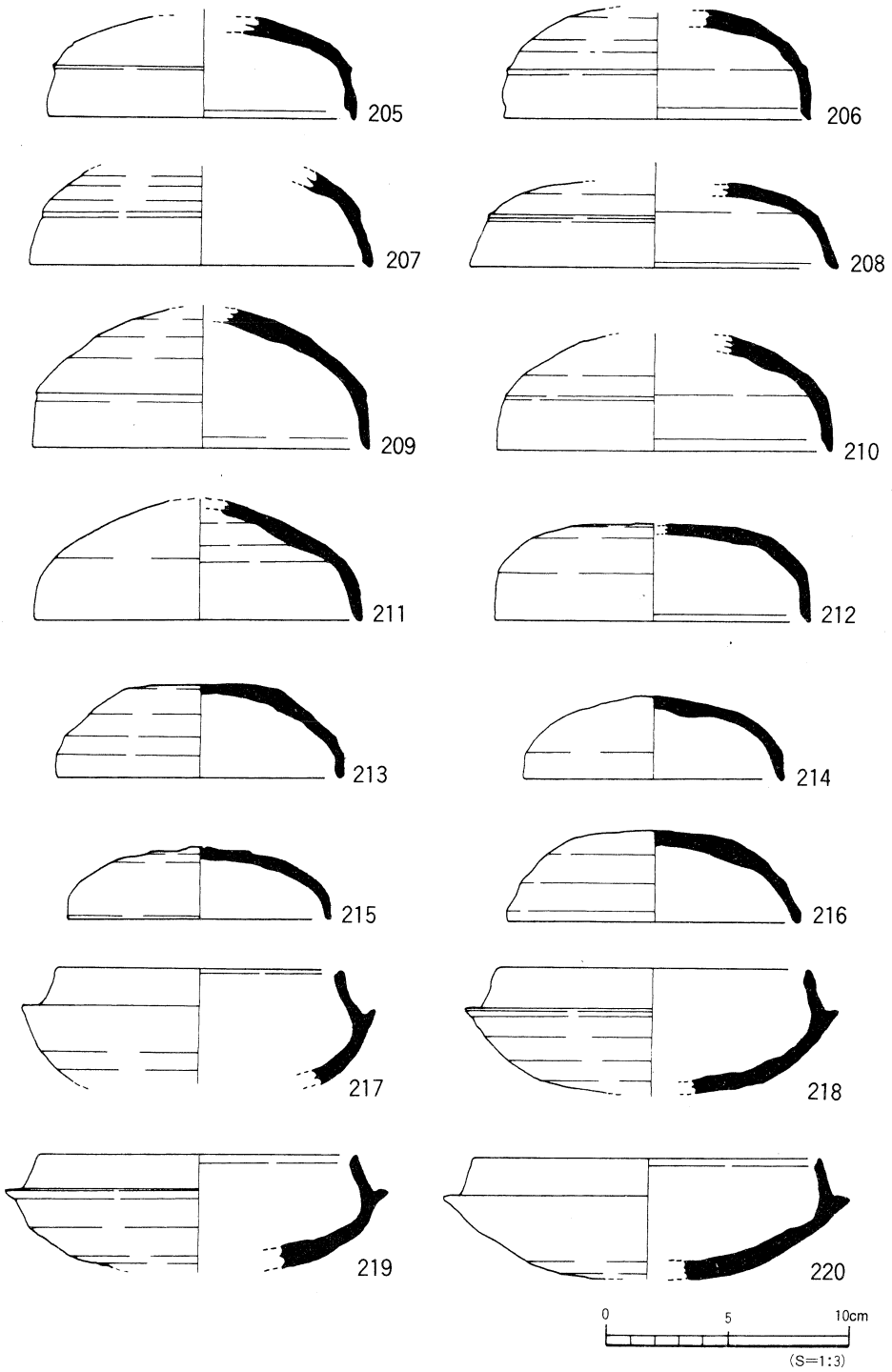
時期の特定が困難な遺構にＳＫ２・17・18・20・21がある。ＳＫ２・20については調査壁及びベルトの土層観察により第Ⅳ層中から掘り込まれたものである。ＳＫ20からは土錘が1点出土している（第55図、図版42）。ＳＫ17・18・21については掘り方は不明である。埋土はいずれも暗灰褐色の砂質シルトである。出土遺物はなく、時期決定は難しいが少なくとも第Ⅳ層堆積中の遺構と考えられる。よって時期特定は難しいが総じて第Ⅳ層堆積時期である古墳時代～古代の遺構であろう。これらの土坑についての詳細は一覧表に記す（表16）。

(4) 弥生時代

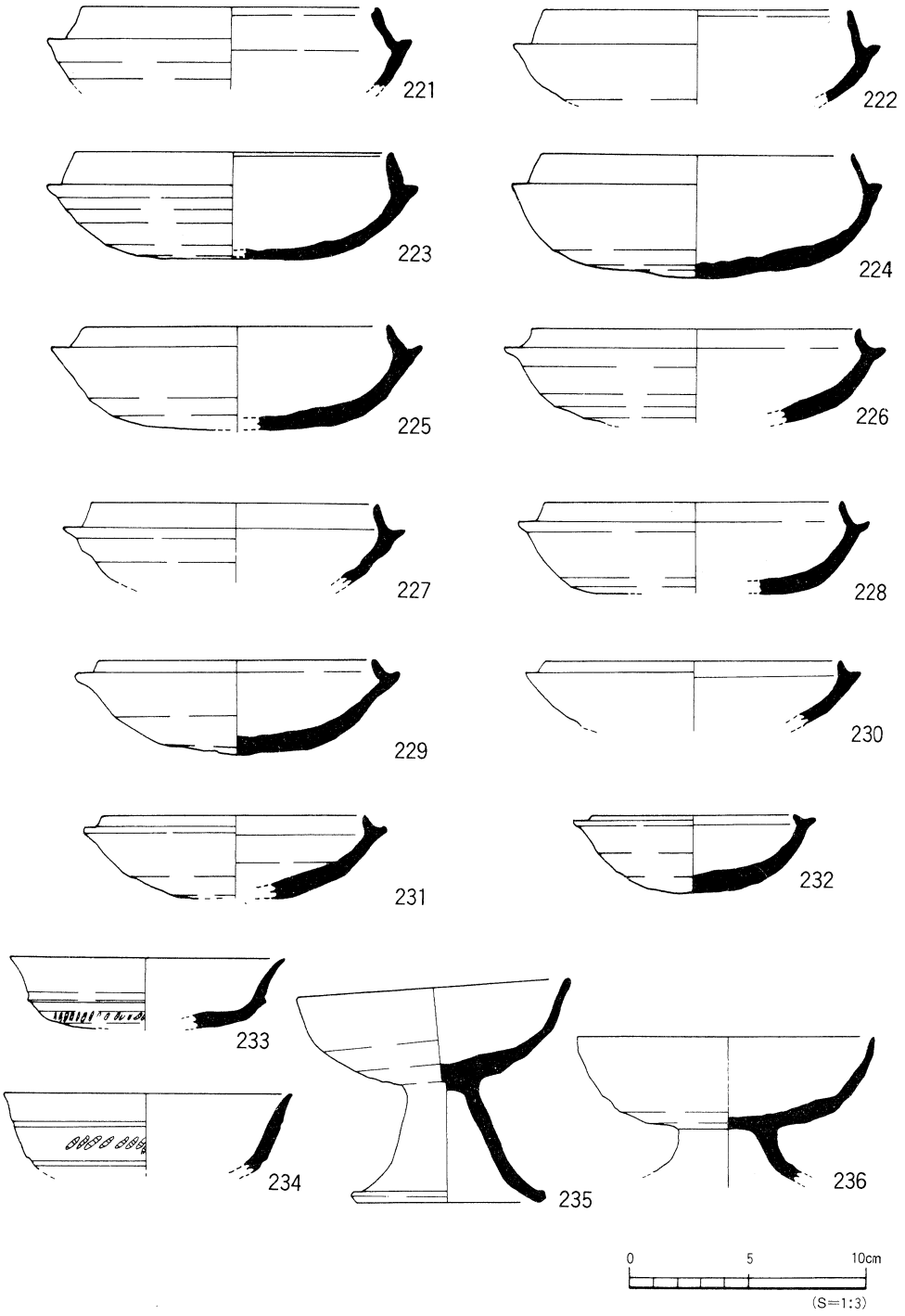
弥生時代に時期比定できる遺構は未検出であるが、遺物は出土している。

第Ⅳ層出土遺物（第56・57図、図版43）

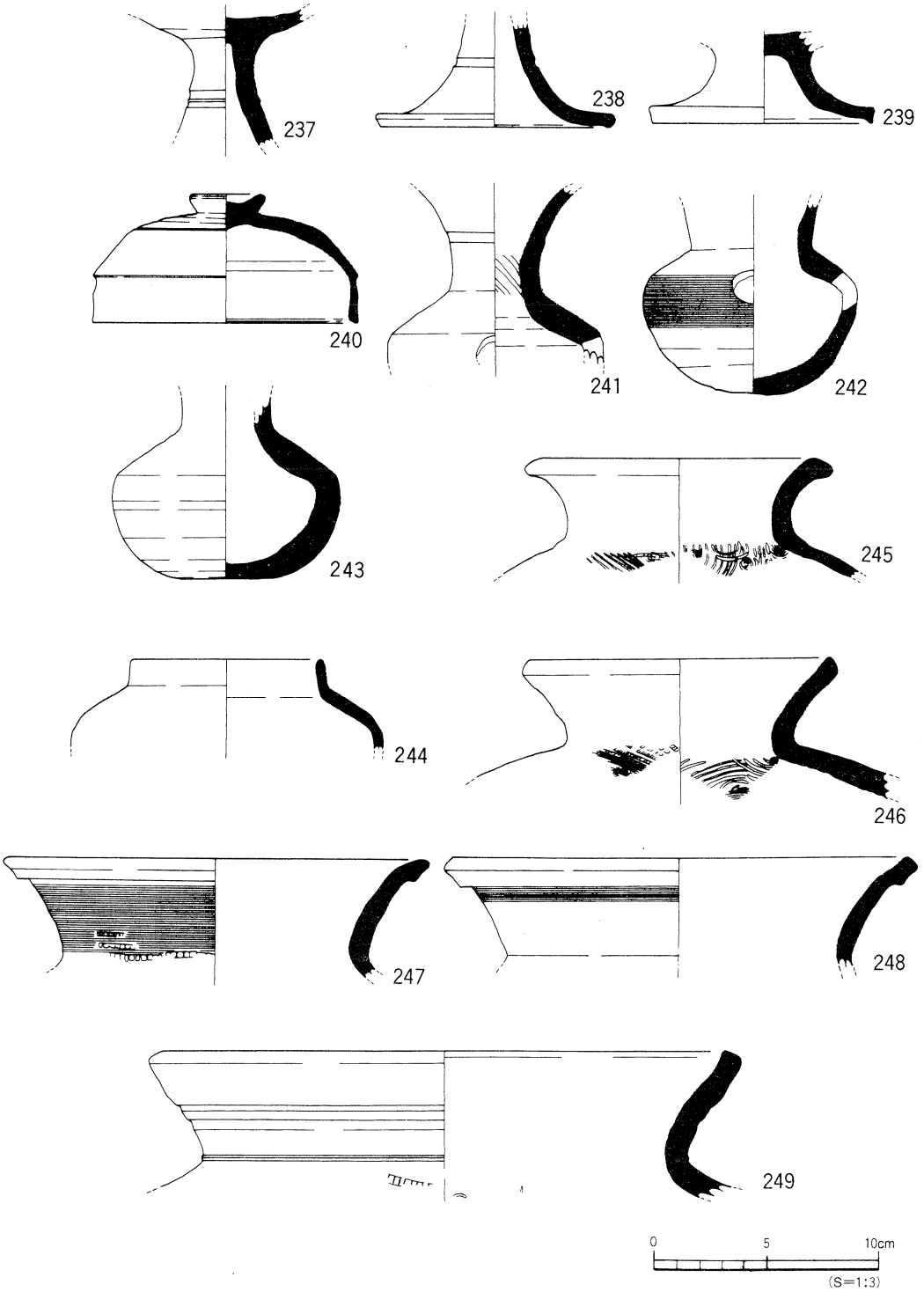
258～261は複合口縁壺。258・259・261は口縁部が内傾するもので、258の口縁部外面に櫛描波状文と半截竹管文を、260は口縁部が外反するもので端面には3条の凹線を施す。頸部と口縁部下位に凸帯を貼り付け、凸帯上に刻み目を施す。262・263は器台形土器。262は口縁端部を上下方に拡張し、端面に円形浮文を貼付する。264は高坏形土器。坏部下位で稜をなし、口縁部は外反する。脚部は「ハ」の字状に開く。



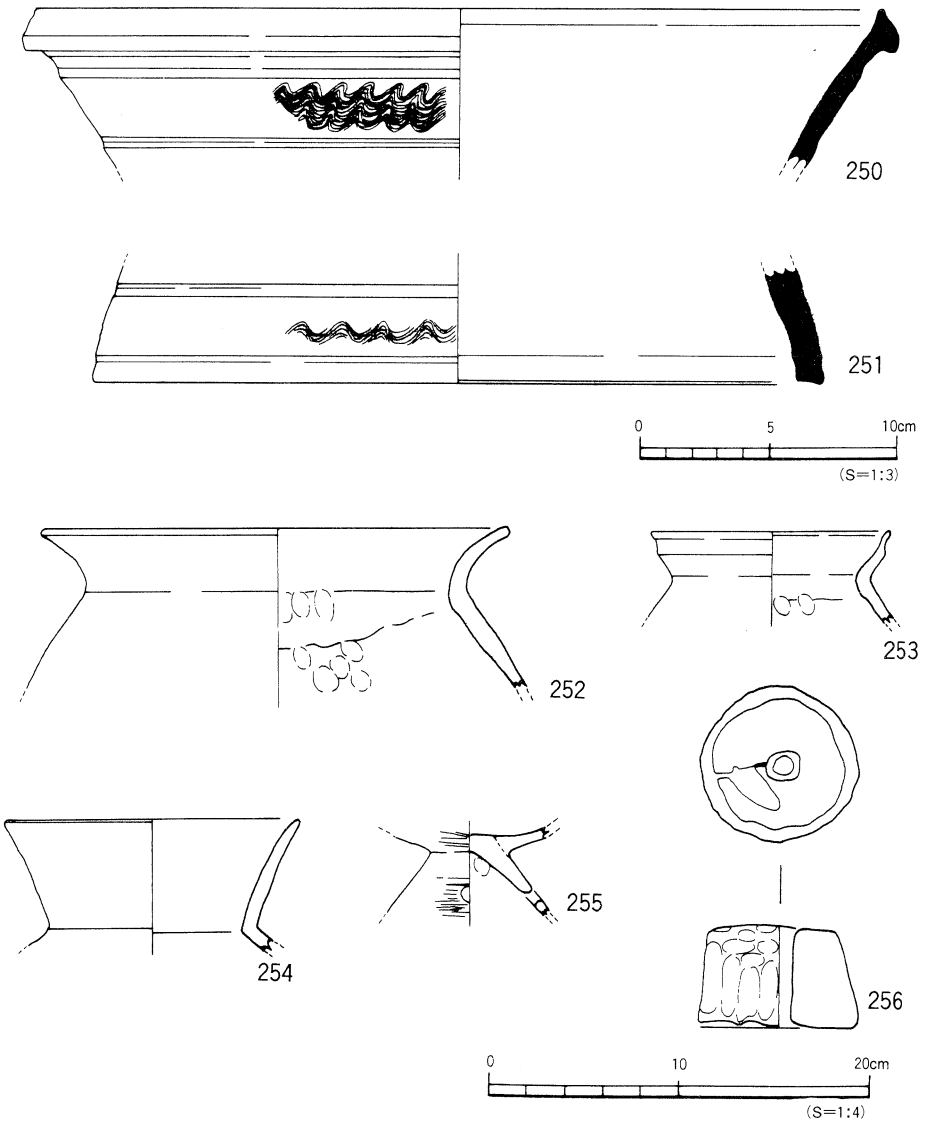
第51図　第Ⅳ層（古墳）出土遺物実測図(1)



第52図　第Ⅳ層(古墳)出土遺物実測図(2)



第53図　第Ⅳ層（古墳）出土遺物実測図(3)

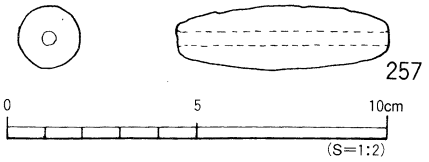


第54図　第Ⅳ層(古墳)出土遺物実測図(4)

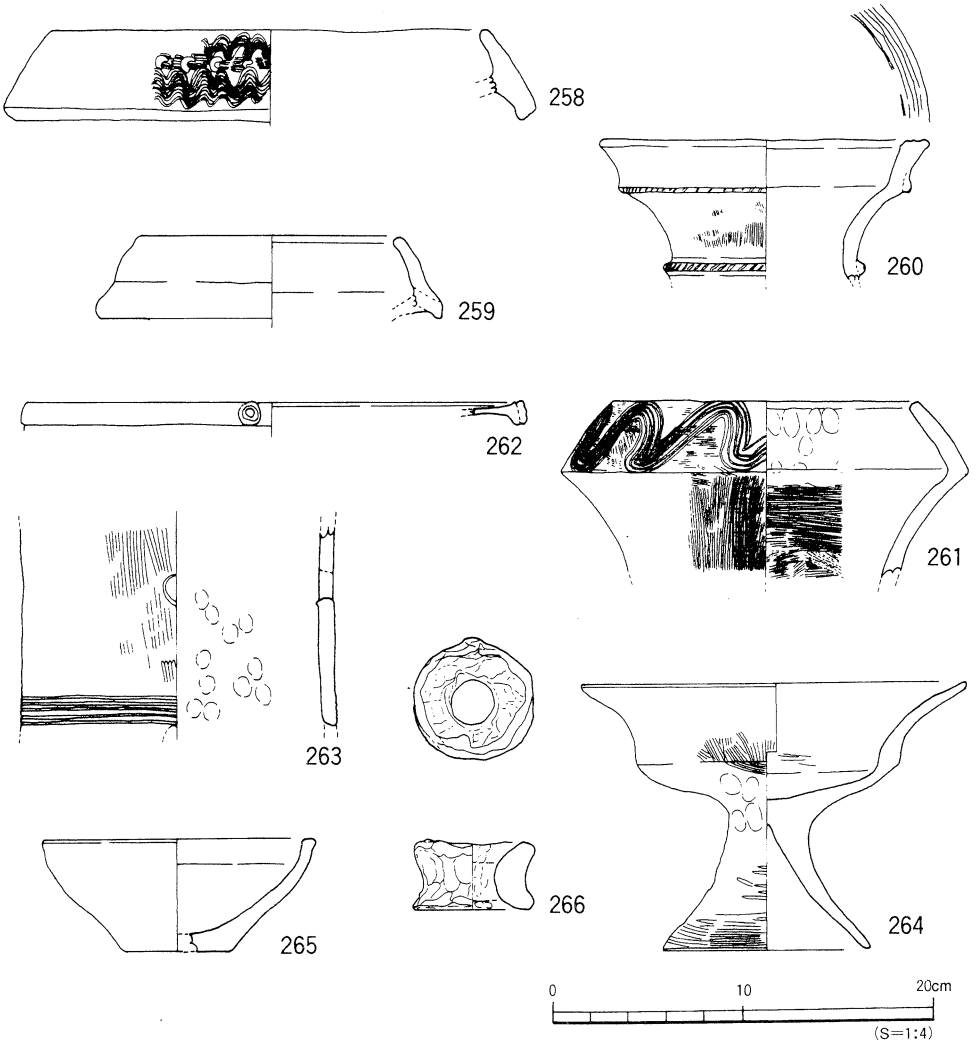
265は鉢形土器。平底の底部で体部は内湾する。266は支脚形土器である。267は底部片。内面に赤色顔料が付着する。

(5) 時期不明遺物（第58図、図版43）

第Ⅳ層中からミニチュア土器やガラス玉、種子等が出土した。



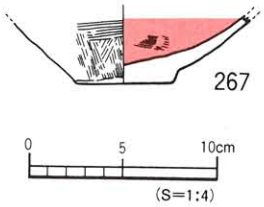
第55図　SK20出土遺物実測図



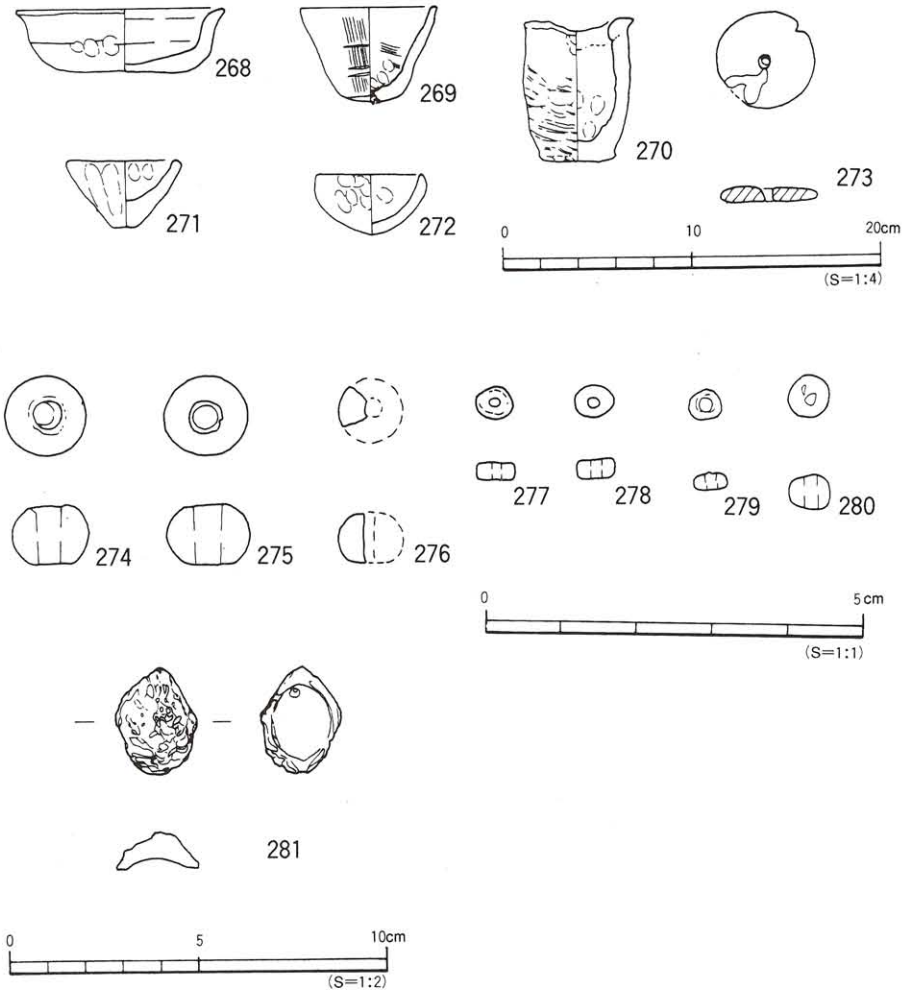
第56図　第Ⅳ層（弥生）出土遺物実測図(1)

268～272は鉢形土器である。268は平底の底部で口縁部は強く外反する。269は直口口縁で口縁端部は丸く仕上げる。271・272はミニチュア土器。270は平底で口縁端部付近で外反する。体部外面に叩き痕を顕著に残す。272は内外面ともに指頭痕を残す。273は土製の紡錘車である。

274～280はガラス玉である。色調は274～276は濃緑色、277・278はブルー、279・280は紺色を呈する。281はモモの種子である。



第57図第Ⅳ層（弥生）出土遺物実測図(2)



第58図　第Ⅳ層（時期不明）出土遺物実測図

〔2〕 第Ⅴ層検出の遺構と遺物

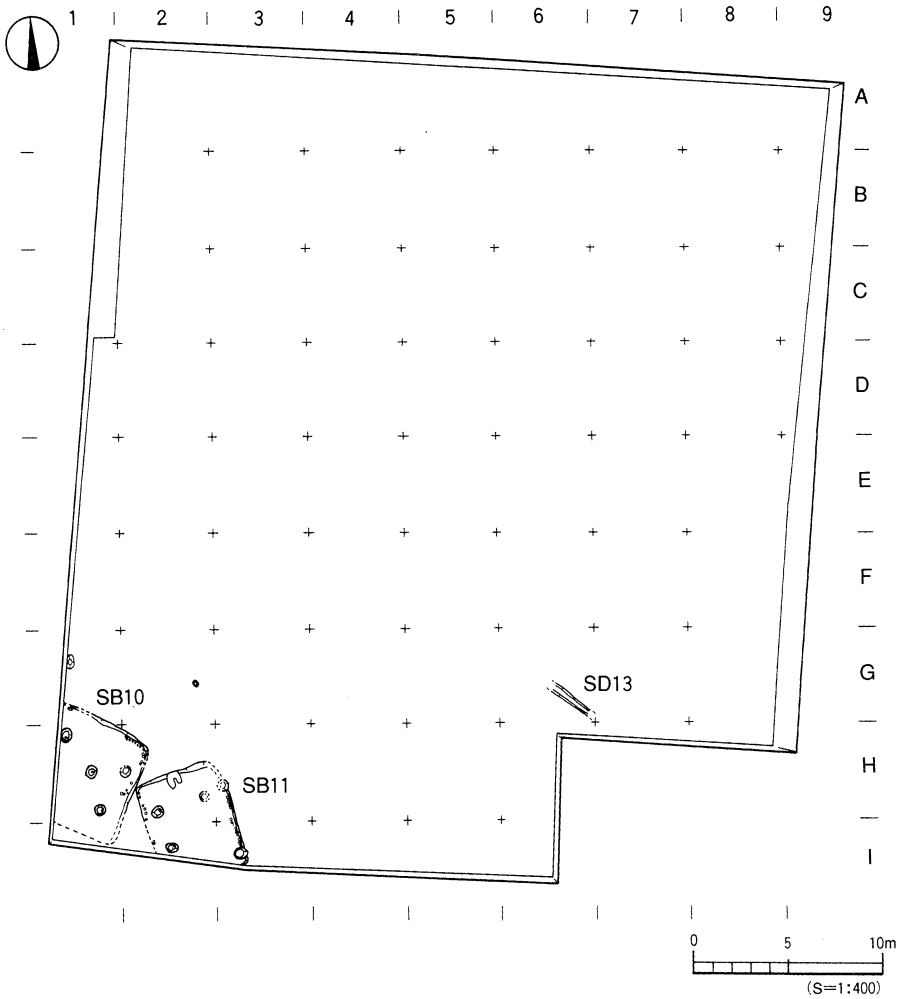
第Ⅴ層検出の遺構は竪穴式住居址2棟、溝1条、ピット8基他である。住居址はいずれも古墳時代のものである（第59図）。

(1) 古墳時代

1）竪穴式住居址

ＳＢ10（第60図、図版９・10・12）

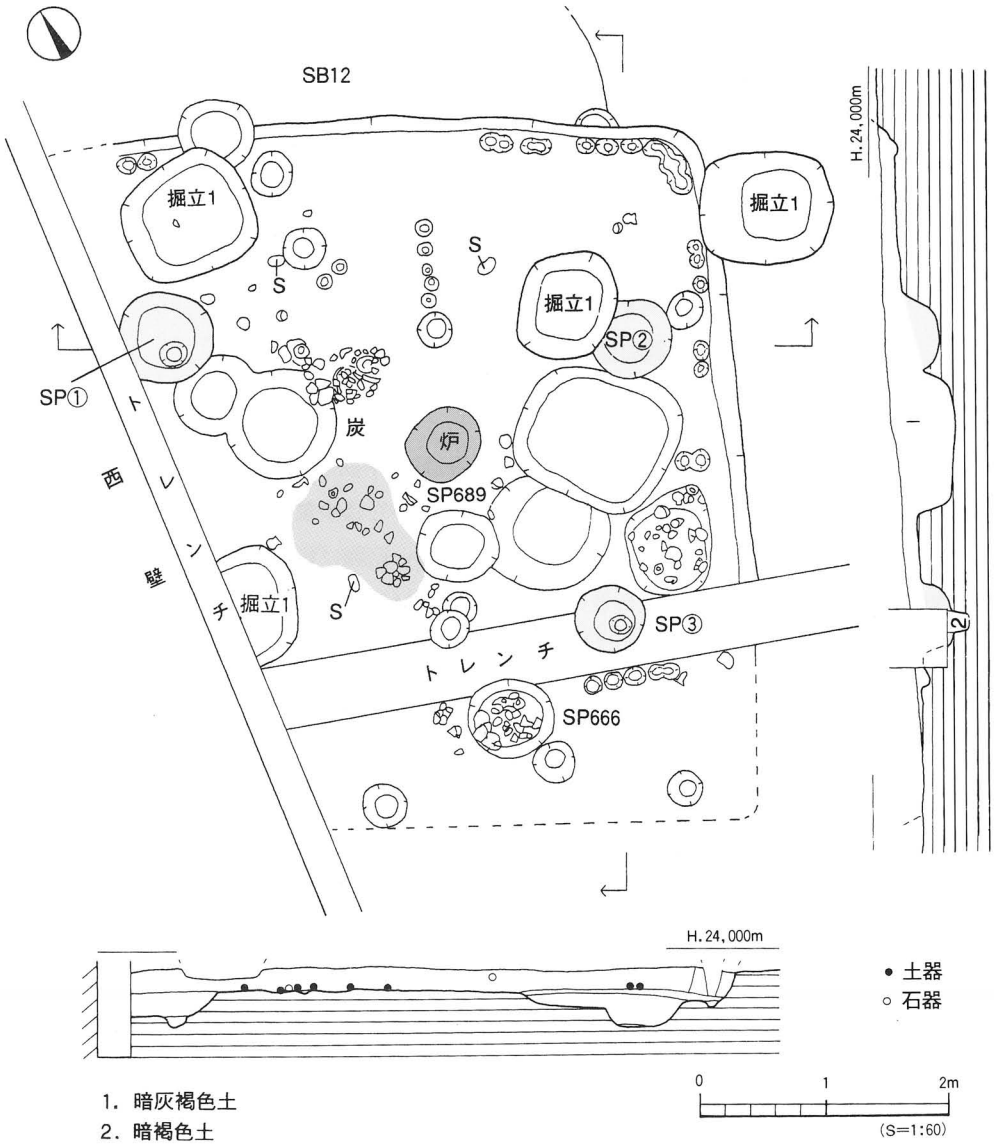
調査区南西隅Ｇ1～Ｈ2区に位置する。遺構南半部は後世の攪乱により削平され、西壁は調査区外に続く。掘立１に切られる。調査区西壁の土層観察により第Ⅴ層中からの掘り込みであることを確認した（第12図）。



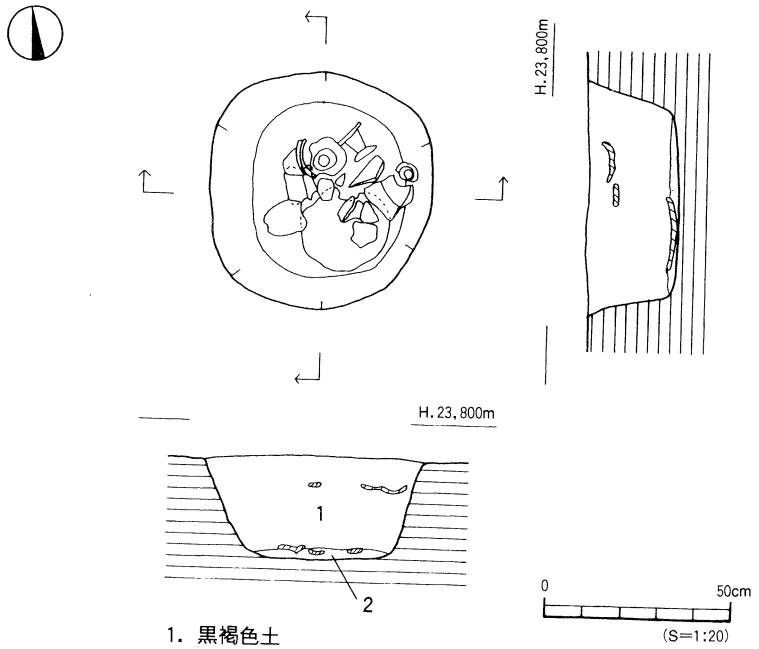
第59図　第Ⅴ層遺構配置図

平面形は隅丸の方形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長5.6m、東西検出長5.1m、壁高は約18cmを測る。床面はほぼ平坦で硬く締まっている。住居址壁体に沿って径4～10cm、深さ3～12cmの小ピットが住居址北東隅及び南側で検出された。埋土は暗灰褐色の粘土質シルト単層である。

主柱穴はＳＰ①・②・③の3本を検出したが、その配置から4本柱であろうと考えられる。各柱穴は円形を呈し、規模は径50～80cm、深さ10～15cmである。柱穴間はＳＰ①―②間3.7m、



第60図　SB10測量図



1. 黒褐色土
2. 黒褐色土(炭化物混入)

第61図　SB10内炉測量図

ＳＰ②—③間2.4mである。

炉は住居址ほぼ中央部に位置する（第61図、図版11)。平面形は円形で、規模は径60～65cm、深さ約25cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。炉内からは少量の炭化物のほか、土師器甕や高坏などが出土した。また炉の西側の床面付近に広い範囲に炭が検出された。

炉内を除くと遺物は住居址中央部及び東壁側の床面付近及び床面直上に集中して出土している。特に東壁沿いの遺物については径60～80cm、深さ5cm程度の楕円形の落ち込み部分から完形の小型丸底壺や高坏の脚部などが出土した。そのほか、床面検出のピット（ＳＰ666）からは土師器の壺や高坏が重なりあった状態で検出され、ピット底からは径10～15cm大の詰め石と思われる礫が出土した。また、埋土中より加工された鹿の骨が出土した（Ｐ312、図版125)。

出土遺物（第62～65図、図版44～46)

ＳＢ10からは住居址内と、ＳＰ666から遺物が出土している。住居址内からは、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器が出土している。

282～290は甕形土器である。球形の胴部に、短く外反する口縁部をもつもので、内面には(287を除き）ケズリ痕が顕著にみられるものである。282・283は頸部が強く締まるもので、口縁端部は内傾し曖昧な面をもっている。284～286は口縁部が単に外反するもので、284・285は口縁端部が丸く、286は面をもつものである。287は復元完形となるもので、わずかに内湾して立ち上がる口縁部をもつ。内面は刷毛目と指頭痕が看取される。288は底部を欠くが、

良好な資料である。内湾して立ち上がる口縁部は、端部が外傾して面をなす。内面はマメツするが指頭痕がみられる。289は平底をなす胴部片である。平底は289だけであり、異形といえる。292は二重口縁壺である。293～306は小型壺である。扁球形の胴部に、上外方に立ち上がる直口口縁をもつものである。293は完形品で、内湾して立ち上がる口縁部をもつ。頸部が強く締まっている。294～297は293と法量を同じくするもので、頸部の締まりが弱いものである。294・297は内面にケズリ痕がみられるものである。298～305は法量的に最も小さい壺である。298は口径が胴部最大径より大きいものである。内湾して立ち上がる口縁部をもち、器壁が薄い。299～305は胴部最大径が口径を凌ぐものである。外面は刷毛目、内面はナデによる調整となる。306は頸部が直立するもので、形態は須恵器の瑳に類似するものである。291は大型の鉢形土器になるものと思われるものである。有段の口縁部は器壁が厚く、焼成も良好で硬いものである。307は小型の鉢形土器である。外面には指頭痕が著しく、ひずんだ土器である。308～339は高坏形土器である。坏部の口径が20cmを越えるもの308～315と、20cm未満のもの316～321がある。坏部は外傾後ゆるやかに外反する口縁部をもつものである。坏底部は大きいもの308～314では底部から口縁部の接合部までに深みをもつが、口径が20cm未満のものは坏底部に深みをもたず水平化する傾向をもつ。322～339は脚部片である。先の308～321を含め、坏部との接合手法をみると、坏底部を充塡した後に、脚部と接合することを基本としている。なお充塡部分は脚内部に突出するものと、突出部を押圧して凹ませるものがみられる。脚部形態は柱部は三角錐を呈し、裾部は内面に稜をもって折り曲げられるものとなる。脚柱部の内面はヨコ方向にケズリを施したままであり、ケズリ痕を顕著に残すものとなっている。裾部はヨコナデが強くされるためにわずかに内湾するものとなっている。形態が異なるものとしては334があり、柱部と裾部の境が不明瞭なため、脚部の全体形が三角錐を呈するものとなっている。

ＳＢ10炉内出土遺物（第66図、図版47）

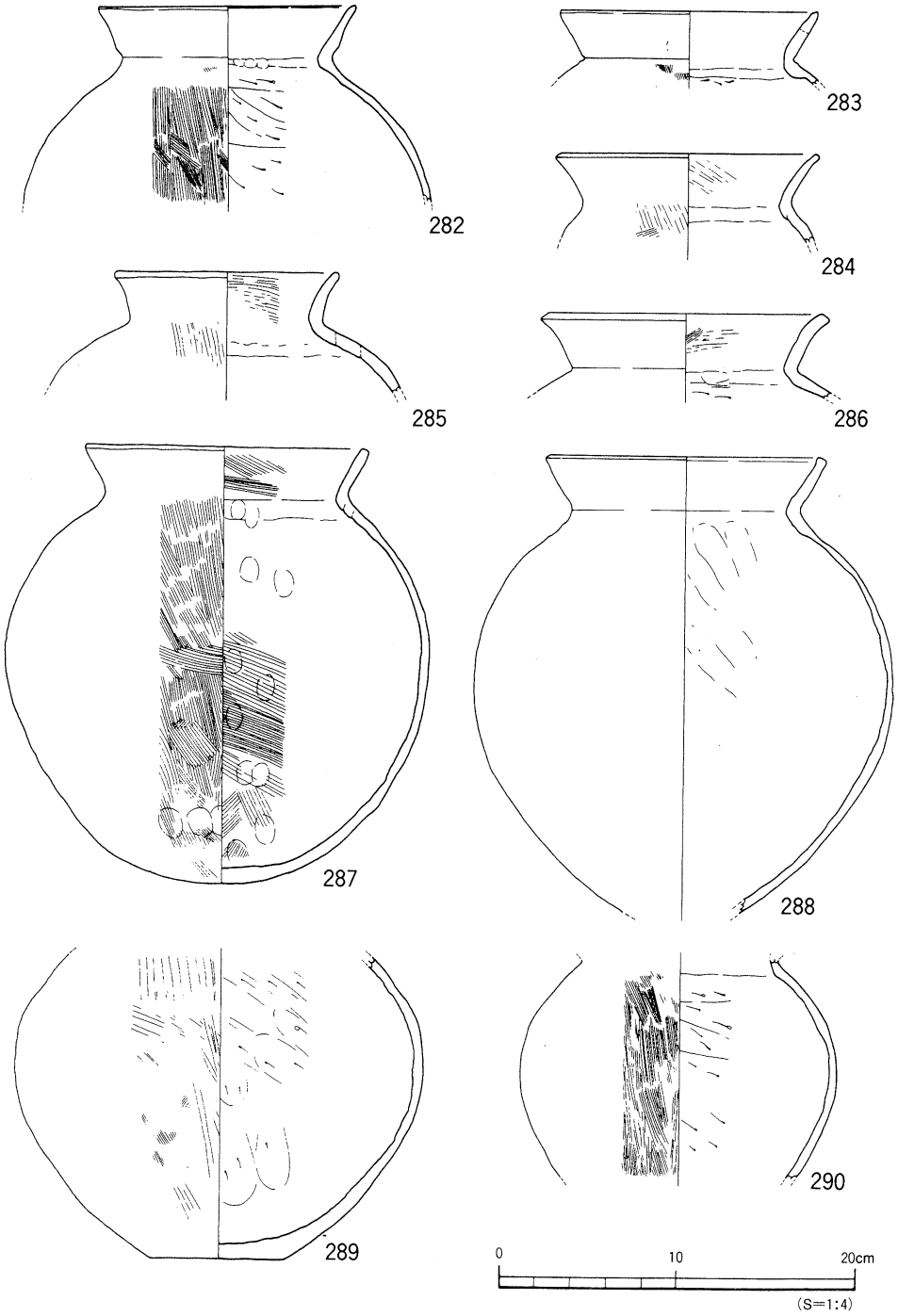
炉内からは甕形土器、高坏形土器が出土している。

340～344は甕形土器である。340は完形に近いものである。球形の胴部にやや長い口縁部をもつ。341～344は内湾して立ち上がるものである。340～343は内面にケズリ痕を残し、344はナデの痕がみられる。345～347は高坏形土器である。345は深めの坏部に外傾して立ち上がる口縁部をもつ。脚柱部は三角錐を呈し、内面にはケズリ痕を残す。全体に丸みをもち、焼成が良好なものである。346・347は脚部である。三角錐の柱部と、内面に稜をもってひらく裾部をもつ。裾部はわずかに内湾する。

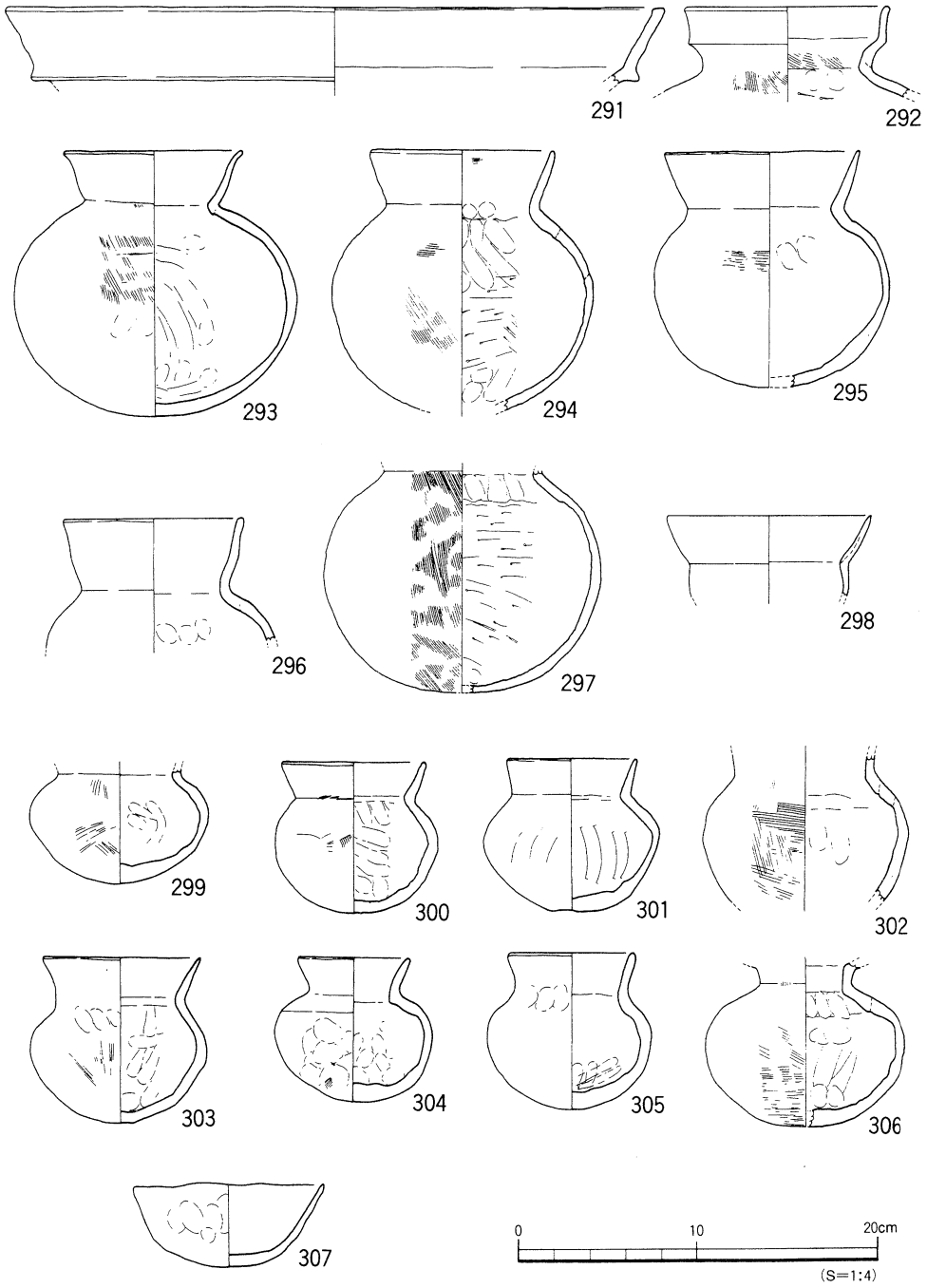
ＳＢ10内ＳＰ666出土遺物（第67図）

住居址床面検出のＳＰ666からは、甕形土器、壺形土器、高坏形土器が出土している。

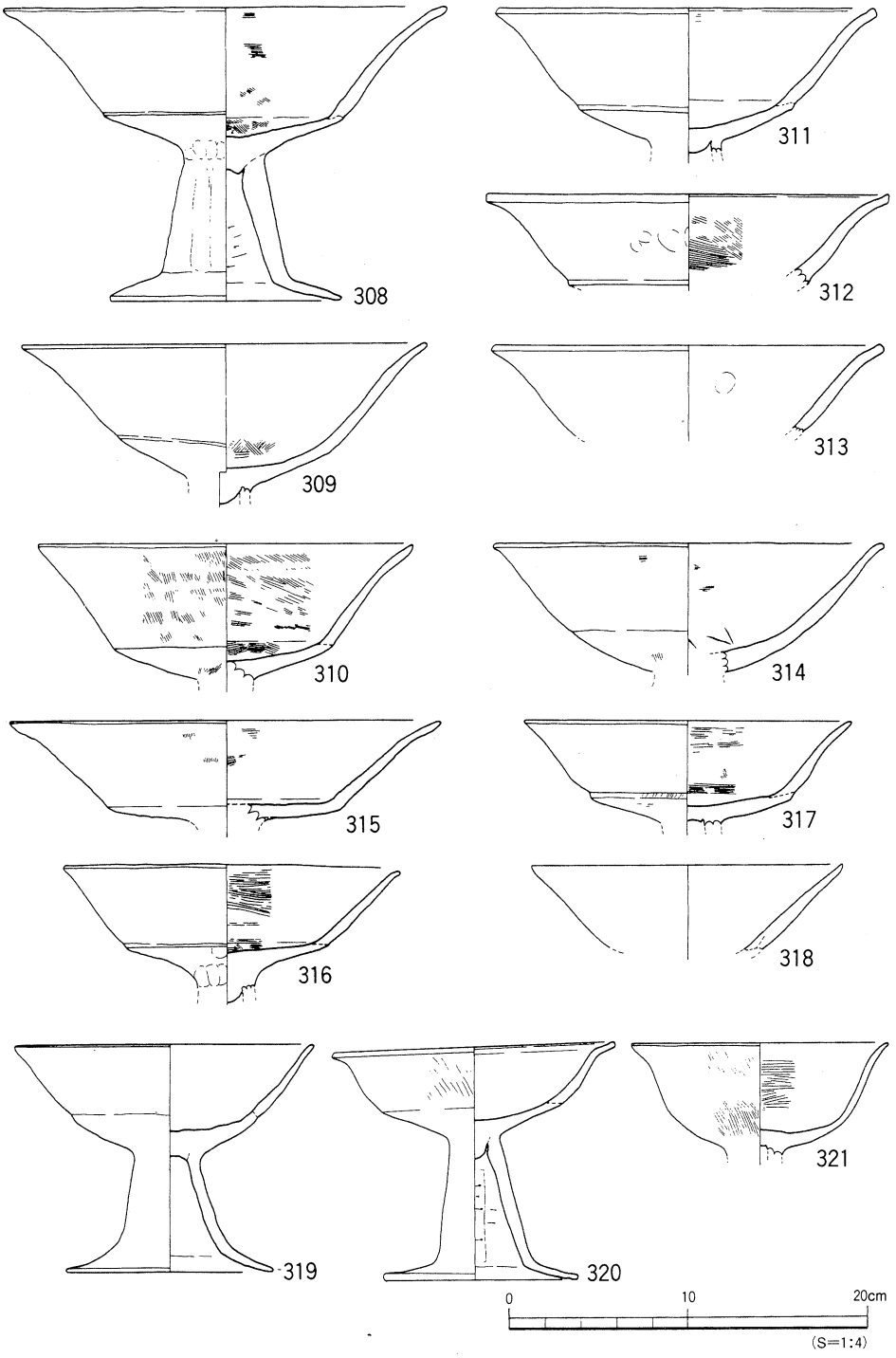
348は甕形土器で、口縁部はわずかに内湾して立ち上がる。349は甕形土器の胴部片である。内面の底部に指頭痕、中～下半部にケズリ痕を残す。



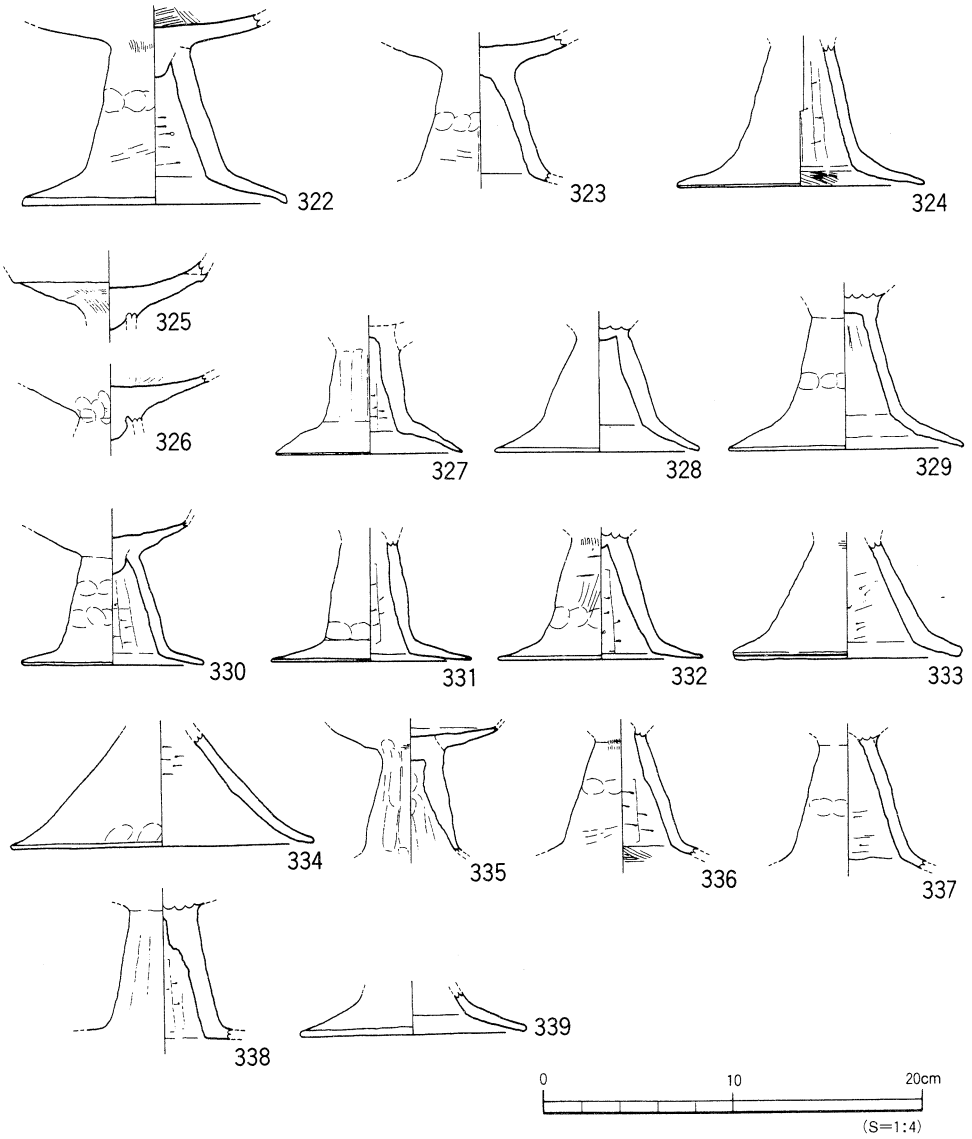
第62図　SB10出土遺物実測図(1)



第63図　SB10出土遺物実測図(2)



第64図　SB10出土遺物実測図(3)

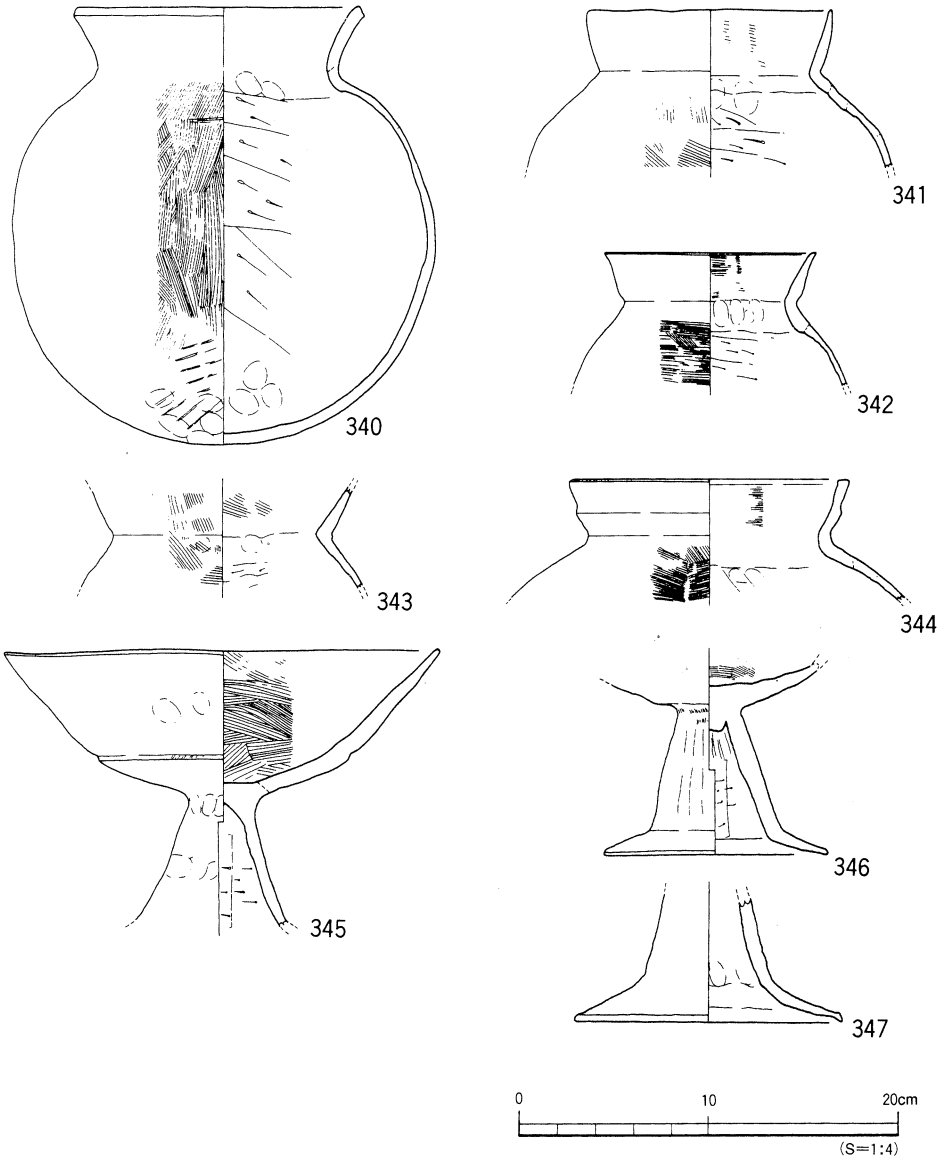


第65図　SB10出土遺物実測図(4)

350は小型壺で胴上半部に張りをもち、口縁部は屈曲して立ち上がる。351～353は高坏形土器である。351は浅い坏底部に、外傾して立ち上がる口縁部をもつ。脚部はいずれも柱部は三角錐で柱部と裾部の境は内面に稜をもっている。

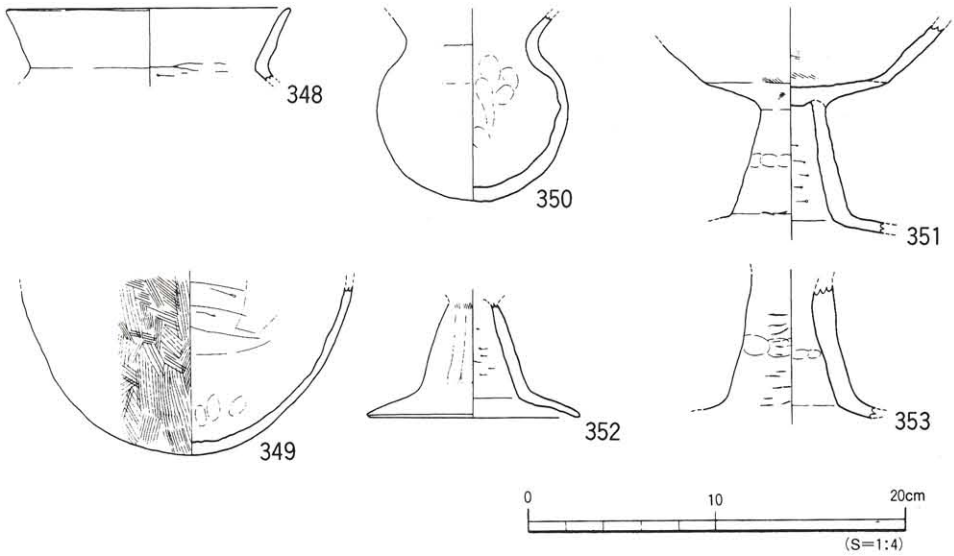
ＳＢ10出土の縄文土器・弥生土器（第68図、図版47）

354は甕形土器の胴部である。長胴、平底の形態をもち、内面はケズリかと思われる工具痕がある。355・356は壺形土器の胴部片で、355はヘラによる円形状の線刻、356はヘラによる

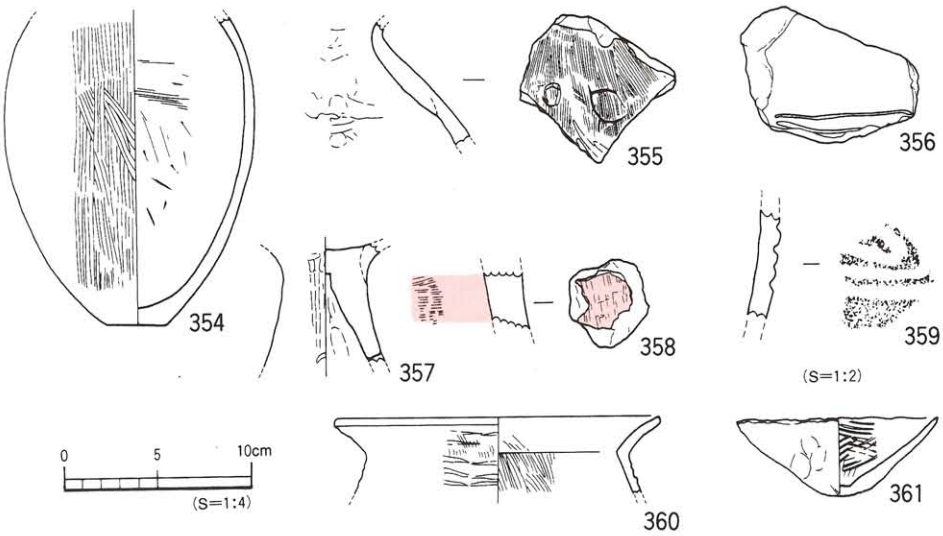


第66図　SB10炉内出土遺物実測図

ヨコ方向の沈線が2条みられる。357は高坏形土器である。円孔をもっている。358は器壁が厚く、赤色顔料が付着する器台形土器の破片と思われる。359は縄文土器で、後期の縁帯文土器である。360は炉内からの出土品である。甕形土器で、タタキ痕を残すものである。361はＳＰ689出土品である。小型の鉢形土器で、底部が突出し丸底となる。



第67図　SB10内SP666出土遺物実測図



第68図　SB10出土の縄文土器・弥生土器実測図

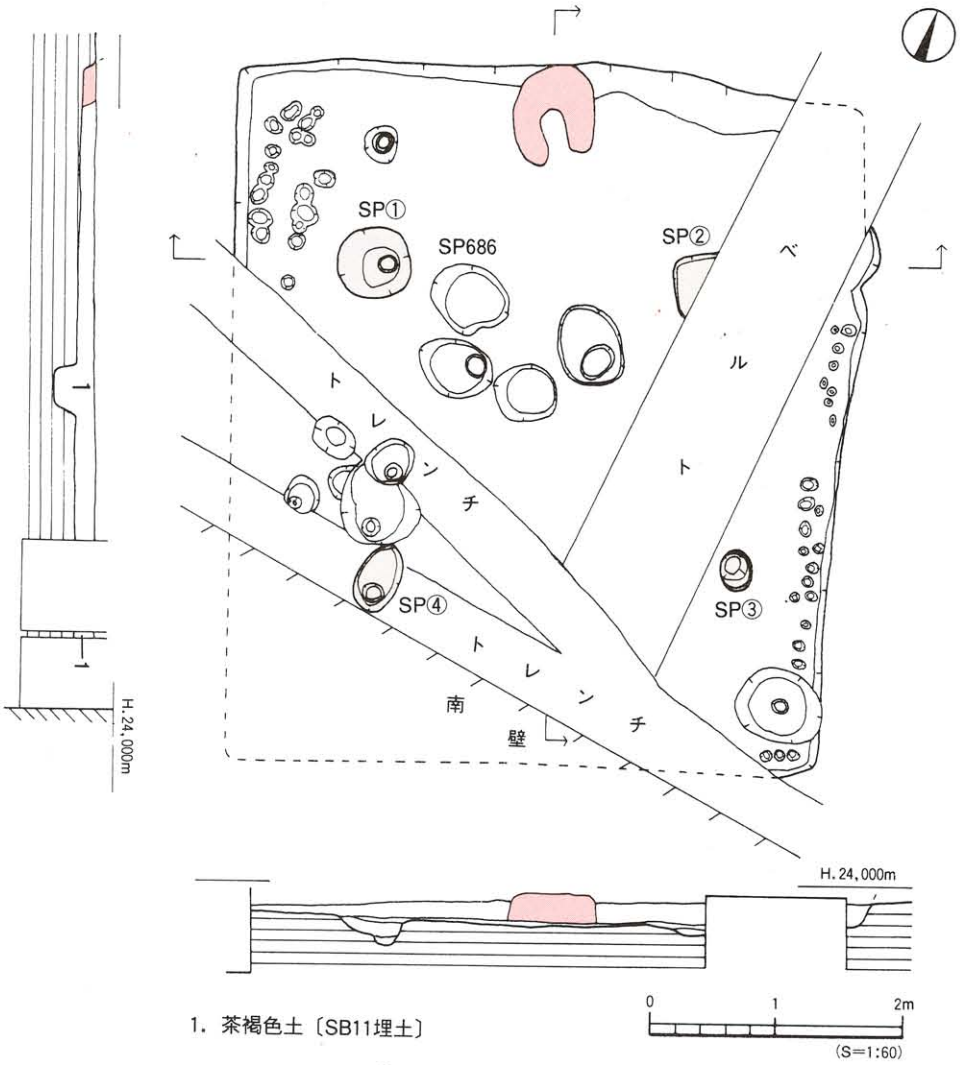
時期：小型丸底壺や高坏形土器の形態は古墳時代中期前半に比定される。出土遺物が床面付近から出土し、かつ完形品に近いことから本住居址の廃棄時期に伴う可能性が高い。よって、本住居址の廃棄・埋没時期は古墳時代中期前半と考える。

ＳＢ11（第69図、図版12）

調査区南西部Ｅ4区～Ｆ4区に位置する。遺構南半部は近現代の攪乱により削平されている。調査区南壁の土層観察より第Ⅴ層中からの掘り込みであることを確認した（第９図）。平面形は隅丸の長方形を呈するものと考えられ、規模は南北5.6m、東西4.6ｍを測る。壁高は東壁で約20cmを測る。西壁は壁体溝に相当する位置に小ピット列を確認した。

床面は北から南に向けて緩やかに傾斜する（比高差約8cm）。埋土は茶褐色土単層である。

主柱穴はＳＰ①・②・③・④の４本を検出した。



第69図　SB11測量図

各柱穴は円～楕円形を呈し径50～70cm、深さ30～40cmを測る。柱穴間はＳＰ①―②間2.0m、ＳＰ①―③間2.1mである。住居址床面にて大小10基のピットを検出した。ＳＰ686からは弥生土器が出土している。

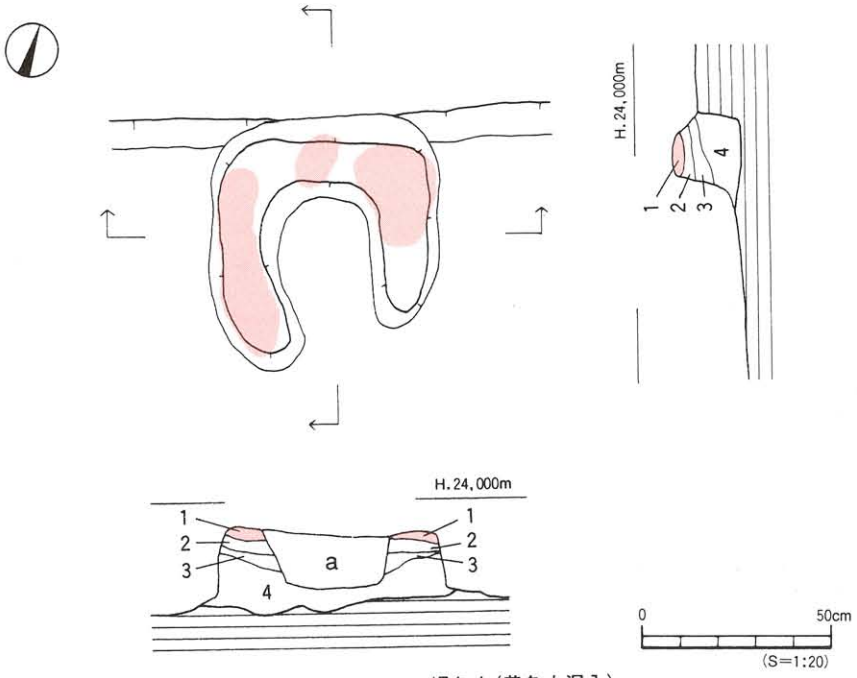
他に住居址北西隅及び東壁の壁体に沿って径5～10cm、深さ3～10cmの小ピット列を検出した。小ピットは北壁では未検出である。

本住居址には北壁のほぼ中央部にカマドが付設される（第70図、図版13）。平面形は馬蹄形を呈する。煙道部は未検出である。カマドは作り付けで、縦・横断面観察では住居址床面と北壁を掘りくぼめた後、褐色土と黄色土を敷き、褐色土（焼土混じり）、明灰褐色土（炭混じり）を積み重ね、最後に粘土をのせて構築していることを確認した。粘土は火を受けて赤く焼けている。カマドからの遺物の出土はない。

本住居址からの遺物は埋土中より土師器・須恵器の小片が数点出土している。

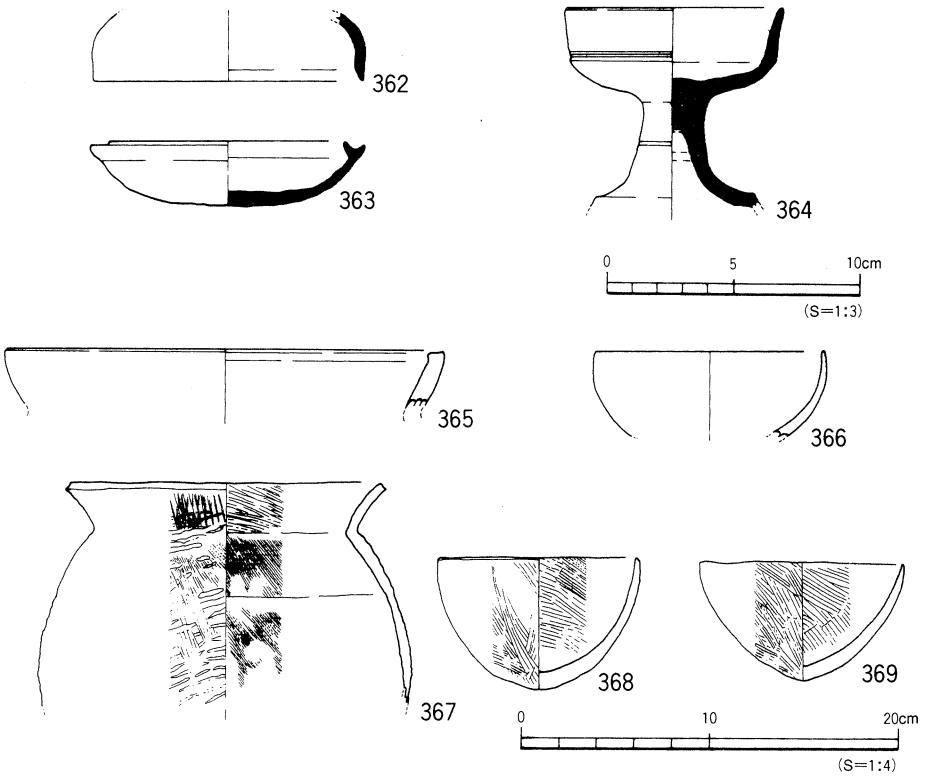
出土遺物（第71図、図版48）

362は須恵器坏蓋、363は須恵器坏身である。たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。364は無蓋の高坏である。坏部は椀形をなし、体部下位に2条の沈線、脚部中位に1条の凹線が巡る。



1. 焼土
2. 明灰褐色土（炭化物混入）
3. 褐色土（焼土・炭化物混入）
4. 褐色土（黄色土混入）
a. 茶褐色土（カマド内の埋土）

第70図　SB11カマド測量図



第71図　SB11出土遺物実測図

365は土師器甕。口縁端部は面取りされる。366は土師器椀。体部は内湾し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。367～368はＳＢ11床面検出のピットＳＰ686出土の遺物である。367は甕形土器で外面に叩きを施す。368・369はどちらも弥生時代後期末の鉢形土器である。

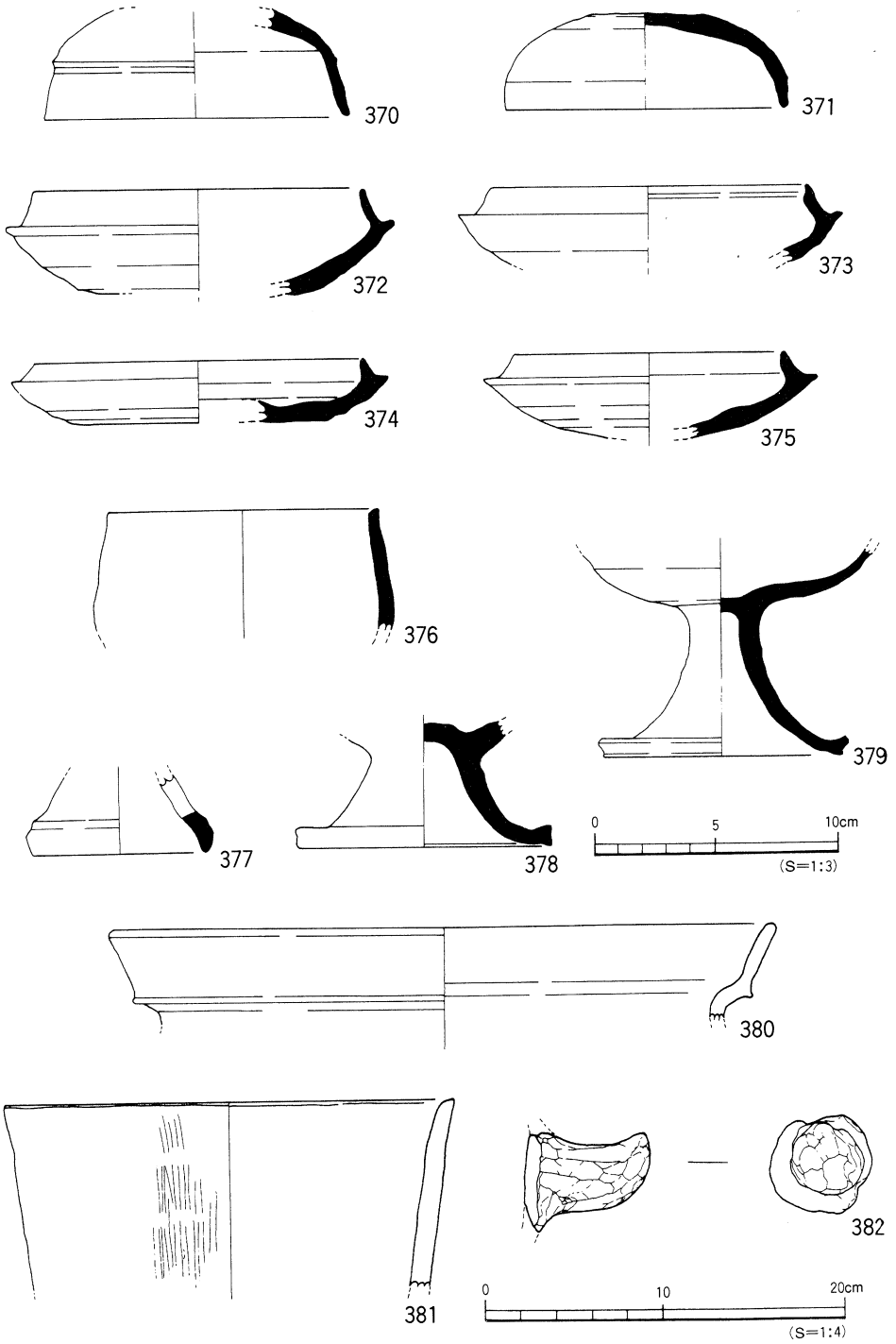
時期：出土した土器より、本住居址の廃棄、埋没時期は古墳時代後期後半に比定する。

2）溝

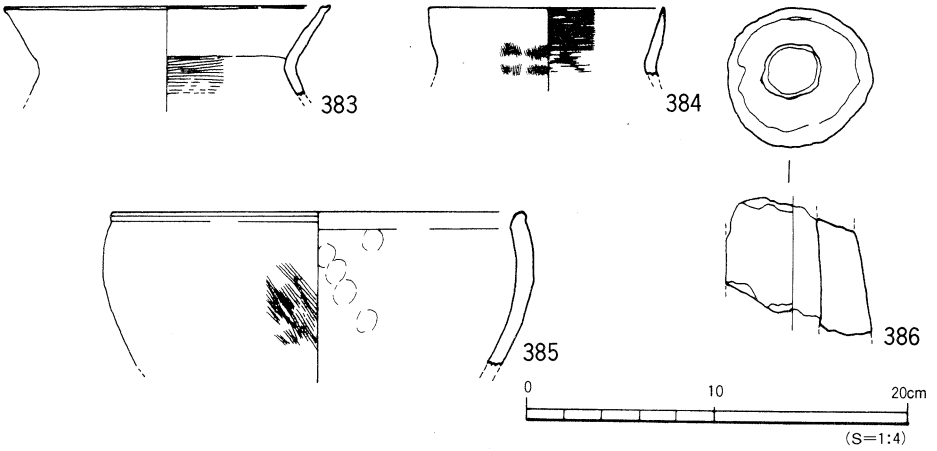
ＳＤ13（第59図）

調査区南西部Ｇ6区で検出した短くて不定形な溝である。東端及び西端は消滅している。ベルトの断面観察により第Ｖ層中から掘り込まれたものである。検出長2.8m、幅0．5m、深さ約15cmを測る。断面形は浅い「Ｕ」字状を呈する。埋土は第Ｖ層と同様の褐色土である。遺物は埋土中から弥生土器・土師器小片が数点出土しているが、図化しうるものはない。

時期：出土遺物がわずかであり時期を特定することは困難であるが、掘り方や遺構埋土等から古墳時代の遺構と考える。



第72図　第Ⅴ層(古墳)出土遺物実測図(1)



第73図　第Ⅴ層(古墳)出土遺物実測図(2)

3）その他の遺構と遺物

第Ⅴ層出土遺物（第72・73図、図版48）

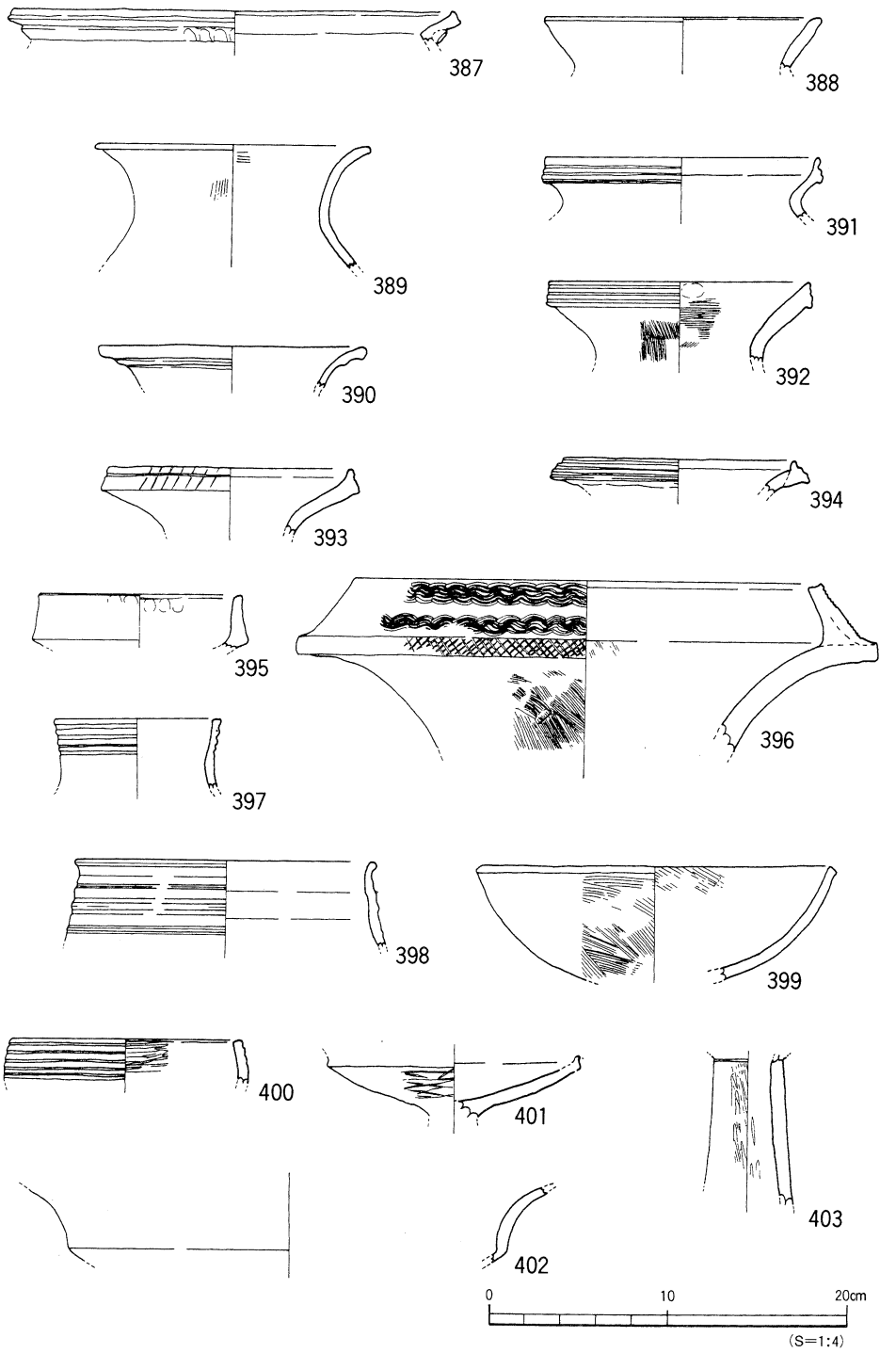
370・371は須恵器坏蓋である。370は断面三角形の稜をもつ。372～375は須恵器坏身である。372はたちあがりは比較的高く、端部は丸く仕上げる。373～375はたちあがりは低く内傾し、端部は尖る。376は椀である。377～379は高坏の脚部。377は透かしが看取される。378・379は脚柱部が大きく外反し脚端部は上下方に拡張する。380は土師器の甕。二重口縁を呈するもので、口縁端部は丸く仕上げる。381・382は土師器甑。体部は直立し口縁部はわずかに外反する。口縁端部は内傾する。383は甕。口縁部はわずかに内湾し、口縁端部は内傾する凹面をなす。体部内面に刷毛目調整を施す。384は壺。口縁端部は先細りする。385は鉢。口縁端部付近で直立し、端部は丸く仕上げる。386はふいごの羽口である。

(2)　弥生時代

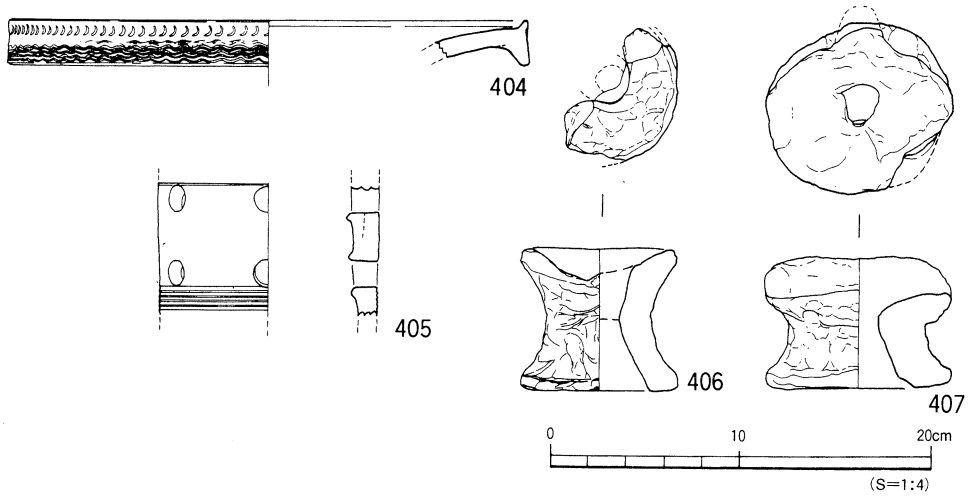
弥生時代の遺構は未検出であるが、弥生時代中期中葉～後期の遺物が出土している。

第Ⅴ層出土遺物（第74・75図、図版49）

387・388は甕形土器。387は口縁端部に1条の凹線が巡り、口縁下に凸帯を貼付する。389～398は壺形土器。390は口頸部に丸みのある断面三角形の凸帯を貼付する。391は口縁部を上下方に、392は下方に、393・394は上方に拡張し、端部に凹線文と沈線文が巡る。395・396は複合口縁壺。395は口縁部は直立し、端部はわずかに面取りされる。397・398は直口口縁壺。399は鉢形土器。直口口縁で口縁端部は丸くおさめる。400～403は高坏形土器。400は凹線文期の高坏の口縁部。6条の凹線文が巡る。404・405は器台形土器。404は口縁部を上下方に拡張し、口縁端面に半截竹管文と波状文を施す。406・407は支脚形土器である。



第74図　第Ⅴ層(弥生)出土遺物実測図(1)



第75図　第Ⅴ層(弥生)出土遺物実測図(2)

(3) 古　代

古代に時期比定される遺構は未検出であるが、第Ⅴ層中から少量ではあるが遺物が出土している。

第Ⅴ層出土遺物（第76図、図版49）

408・409は高台の付く須恵器坏である。底体部の境界は丸みをもち、高台は境界よりやや内側に付く。8世紀前半。

410は土師器甕、411は土師器坏である。411の口縁部内面に斜格子状の暗文を施す。

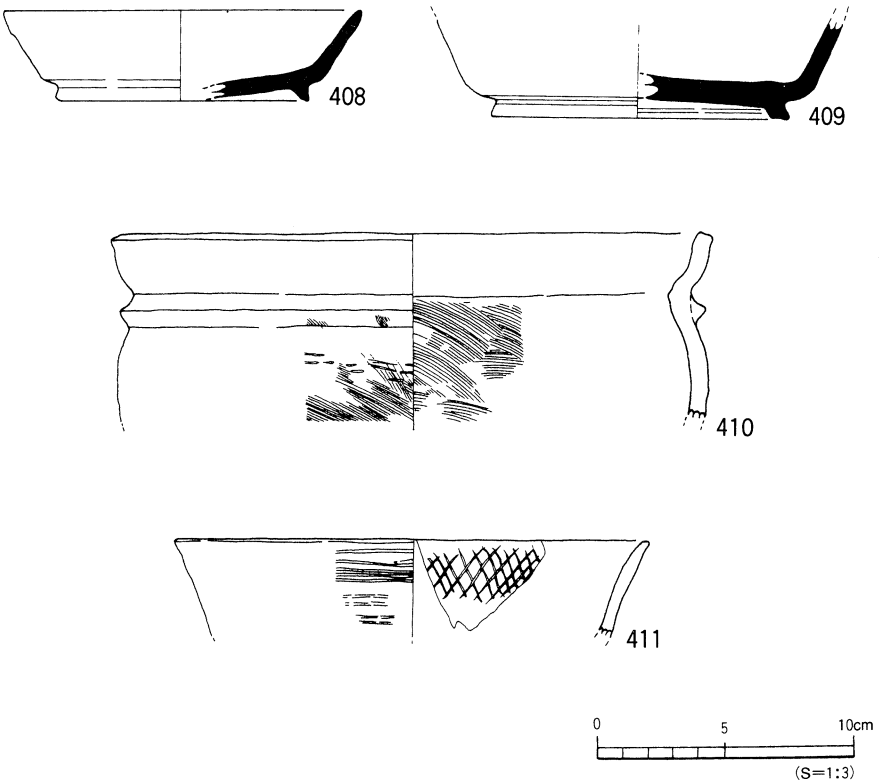
(4) 時期不明

第Ⅴ層検出のピットは8基（調査壁の土層観察にて4基検出を含む）である。埋土は①褐色の粘土質シルト、②褐色の粘土質シルトに黄色シルトが斑点状に混入するものである。ピット内からの遺物の出土はなく、時期はわからない。

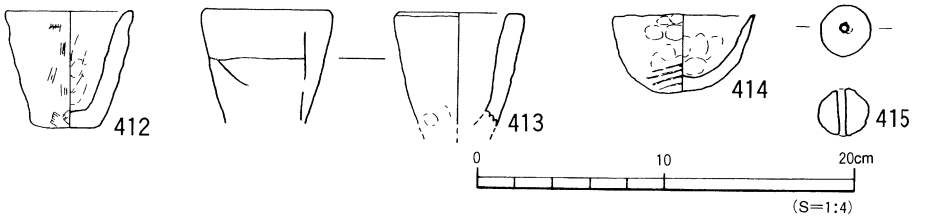
そのほかに、第Ⅴ層中からミニチュア土器や土玉等が出土した。遺構に伴わず、時期の特定が難しく、ここでは時期不明遺物として取り扱うことにする。

出土遺物（第77図、図版49）

412・413は小型の鉢形土器。413は文様の全容は不明だが体部外面に細沈文による線刻を施す。414は手づくね土器、415は土玉である。径5㎜大の孔を穿つ。



第76図　第Ⅴ層(古代)出土遺物実測図



第77図　第Ⅴ層(時期不明)出土遺物実測図

〔3〕 第Ⅵ層検出の遺構と遺物

第Ⅵ層検出の遺構は竪穴式住居址3棟である（第78図）。

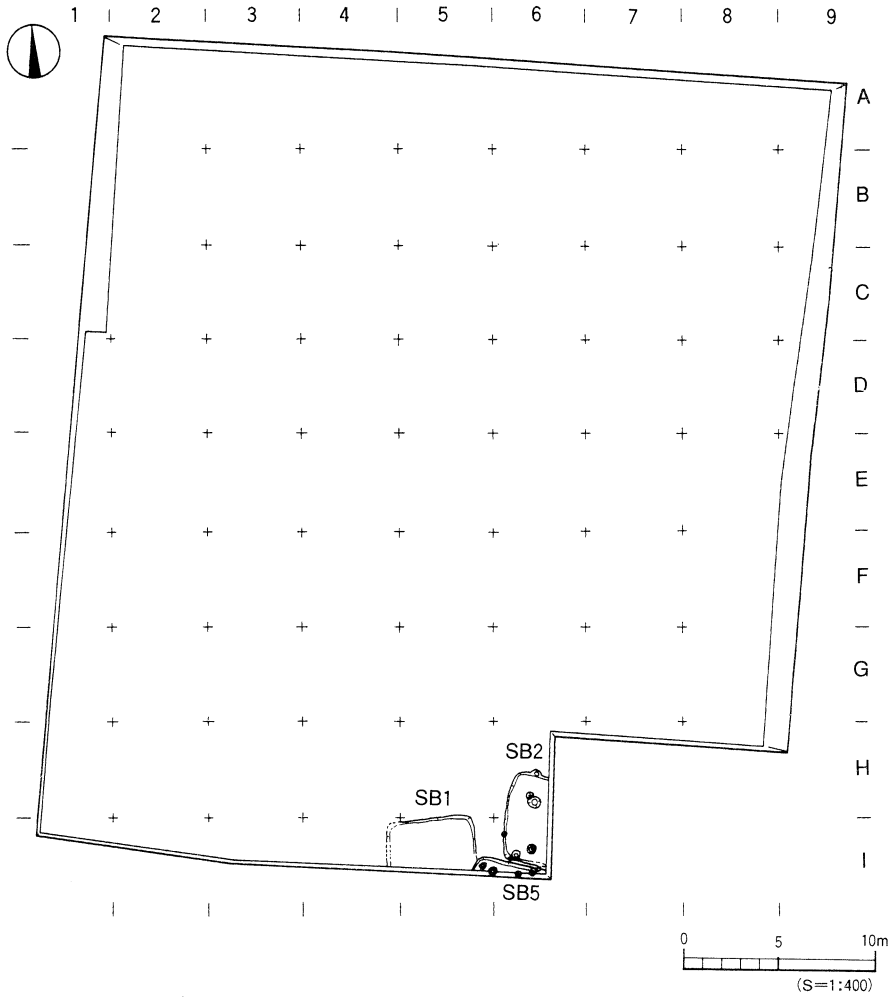
(1) 弥生時代

1）竪穴式住居址

ＳＢ２（第79図、図版14）

調査区南壁中央部やや東寄りＨ6・Ｉ6区に位置する。遺構東半部は調査区外に続く。調査区東壁の土層観察により第Ⅵ層中からの掘り込みであることを確認している（第11図）。

平面形は隅丸の方形を呈するものと考えられ、規模は南北4.8m、東西検出長2.0m、壁高は約20cmを測る。床面は比較的平坦で硬い。埋土は褐色粘質土と黄色土の混合土である。



第78図　第Ⅵ層遺構配置図

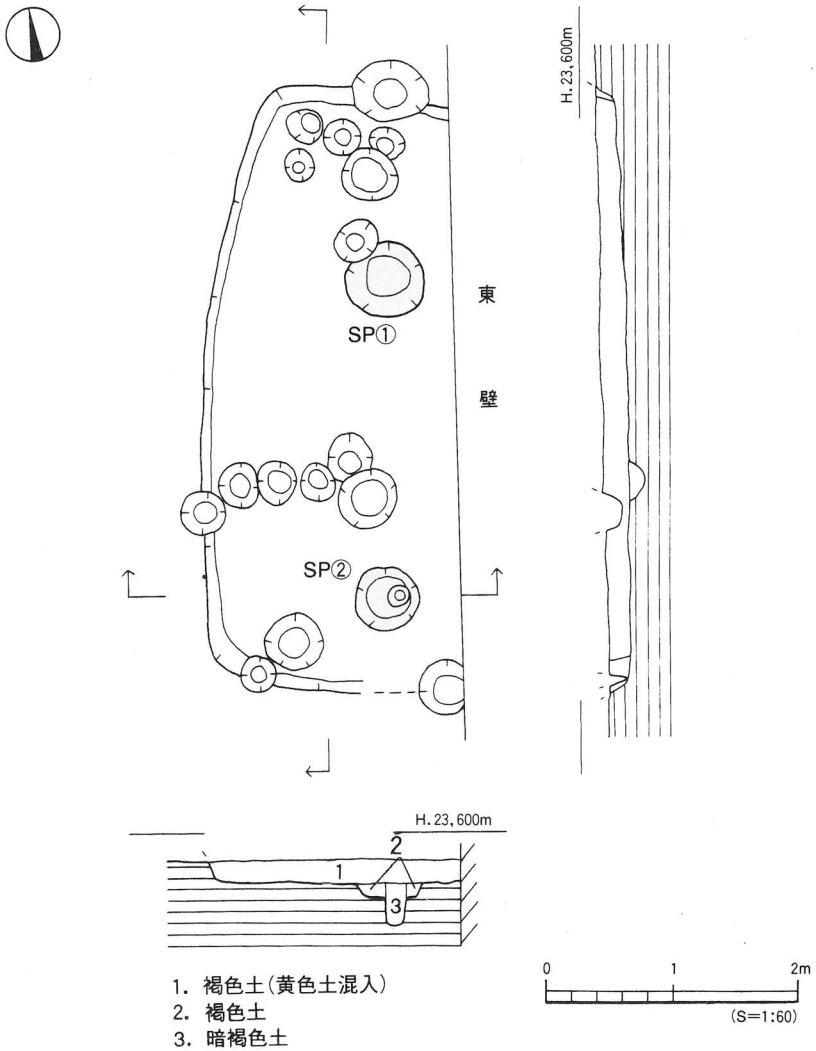
主柱穴はＳＰ①・②の2本を検出し、おそらく4本柱の可能性が高いと考えられる。そのほか、住居址床面にて大小12基のピットを検出したが、本住居址に伴うかどうかはわからない。

遺物は埋土中に弥生土器、土師器片が数点出土している。

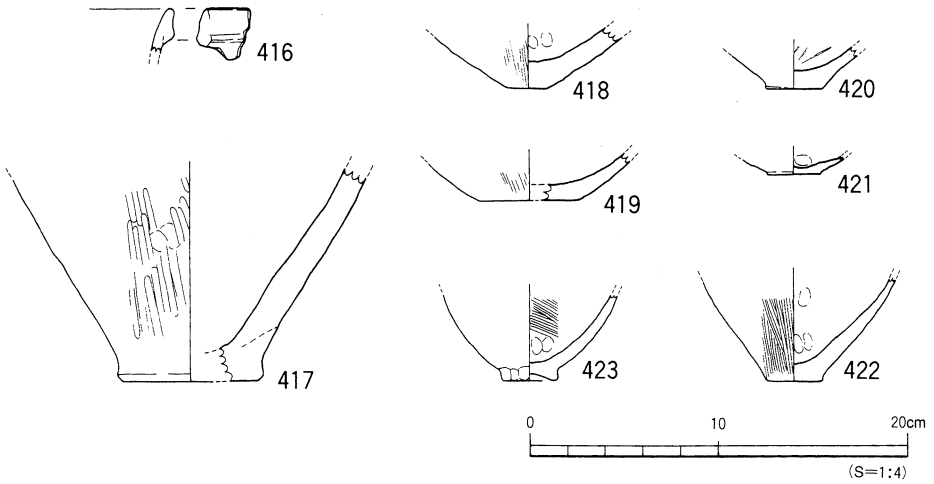
出土遺物（第80図、図版50）

416は刻み目凸帯文甕形土器である。混入品であろう。弥生前期。417～422は壺形土器、423は鉢形土器の底部である。

時期：出土遺物は総じて弥生時代後期後半～末に比定されるものである。時期特定は難しいが、本住居址の埋没時期は弥生時代後期後半～末と考える。



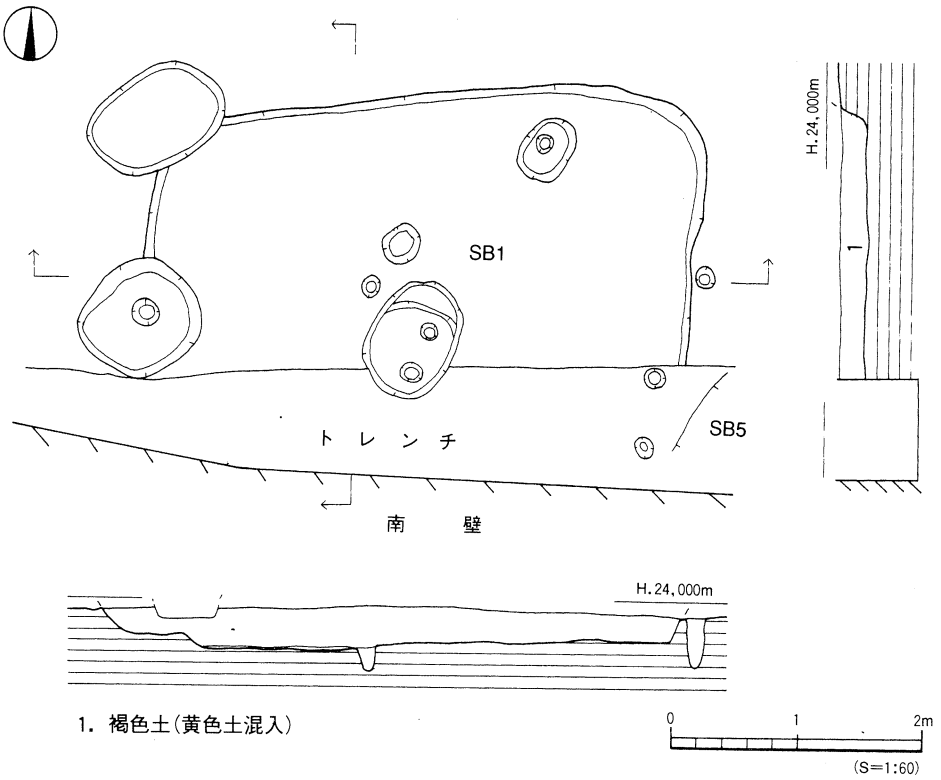
第79図　SB2測量図



第80図　SB2出土遺物実測図

ＳＢ１（第81図、図版14）

調査区南壁中央部Ｉ４・5区に位置する。住居址北西及び南西部はピットに切られ、南半部



第81図　SB1測量図

は調査区外へ続く。調査区南壁の土層観察により第Ⅵ層中からの掘り込みであることを確認している（第８図）。

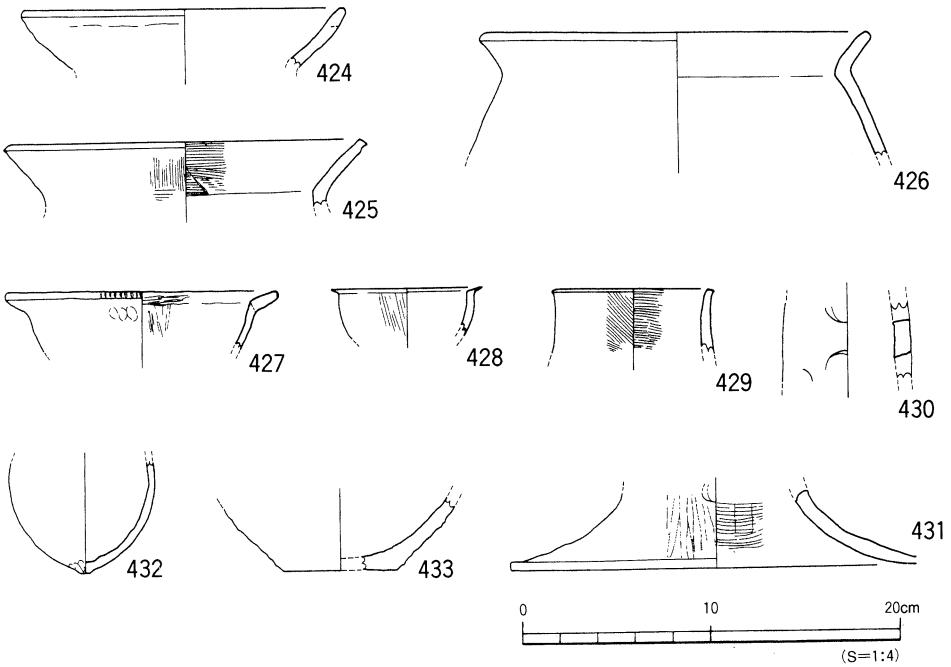
平面形は隅丸の方形を呈するものと考えられ、規模は東西4.4m、南北2.2m、壁高は約30cmを測る。埋土は第Ⅵ層と同様の褐色粘質土に黄色土が斑点状に混入するものである。住居址床面にて大小4基のピットを検出したが、本住居址に伴うものかどうかは不明である。

遺物は埋土中から弥生土器・土師器片が散在して出土している。

出土遺物（第82図、図版50）

424～427は甕形土器。424～426は「く」の字状口縁で、口縁端部は424・425は丸く、426は「コ」字状に仕上げる。427は口縁端部に刻み目を施す。弥生時代前期。混入品であろう。428は鉢形土器。外反する口縁部をもつ。429は壺形土器。430は高坏形土器、431は器台形土器。430は円筒状の柱部に径1cmの円孔を穿つ。431は裾部が大きく外反するものである。432は鉢形土器、433は壺形土器の底部である。432は突出部をもつ。

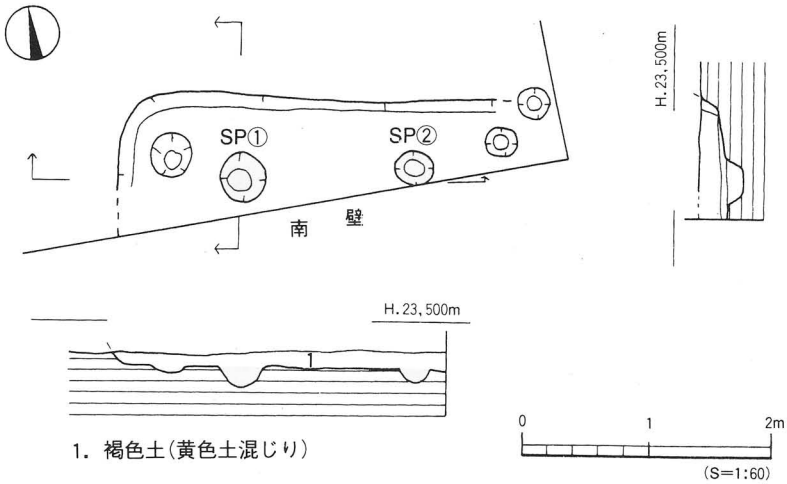
時期：遺物はすべて埋土中からの出土であるが、その大半が弥生時代後期後半～末の様相を示している。よって本住居址の埋没時期は弥生時代後期後半～末と考える。



第82図　SB1出土遺物実測図

ＳＢ５（第83図）

調査区南壁中央東寄りＩ５・6区に位置する。遺構東半部及び南半部は調査区外に続く。調査区南壁の土層観察により第Ⅵ層中からの掘り込みであることを確認している（第８図）。



第83図　SB5測量図

平面形は隅丸の方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長3.0m、南北検出長0.8m、壁高は約15cmを測る。床面は北東から南西に向けて緩やかに傾斜している。埋土は褐色粘質土と黄色土の混合土である。

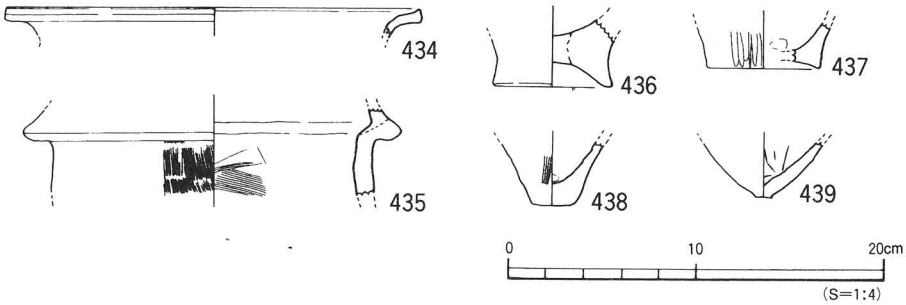
主柱穴はＳＰ①・②の2本が考えられ、おそらく4本柱であろう。住居址床面にて主柱穴以外に2基のピットを検出したが、埋土が暗灰褐色土であることから、本住居址に伴うものとは考えがたい。本住居址からの遺物の出土はない。

時期：住居址の形状や埋土がＳＢ1・2に類似することから、ほぼ同時期のものと考える。

2）その他の遺構と遺物

第Ⅵ層出土遺物（第84図）

434は甕形土器。口縁端部は上方につまみ上げている。435は複合口縁壺の頸部片。口縁部は欠損している。436・437は甕形土器の底部。436はくびれの上げ底、437はわずかに上げ底を呈する。438・439は鉢形土器。439の底部はわずかに突出する。



第84図　第Ⅵ層(弥生)出土遺物実測図

〔4〕 第Ⅶ層検出の遺構と遺物

第Ⅶ層検出の遺構は竪穴式住居址12棟、土坑13基、溝13条、自然流路３条、ピット604基他である。各遺構は弥生時代後期から古代までのものである（第85図）。

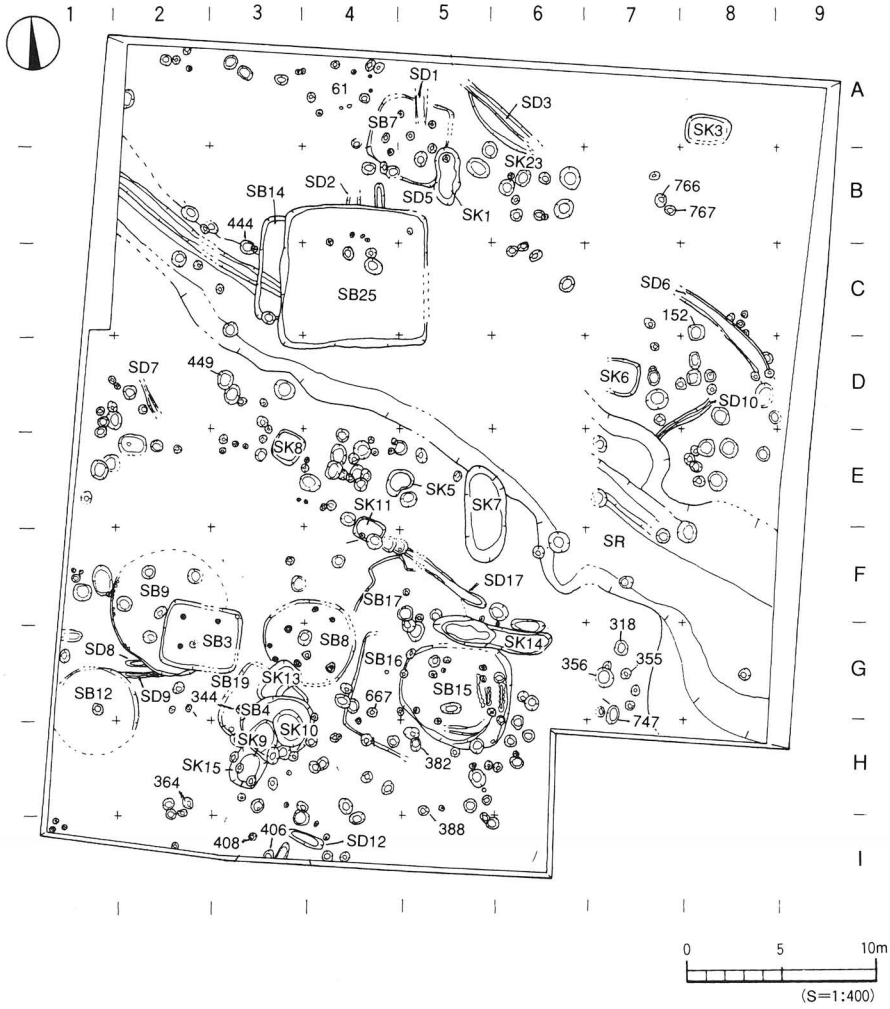
(1) 弥生時代

１）竪穴式住居址

ＳＢ８（第86図）

調査区中央部南寄りＦ３区～Ｇ４区に位置する。遺構北西部はＳＤ14（８世紀）に、南西部はＳＫ13（古墳後期）に、南東部は掘立４柱穴（古墳後期）に切られる。

平面形は円形を呈し、規模は長径4.8m、短径4.6m、壁高は約15cmを測る。遺構の遺存状

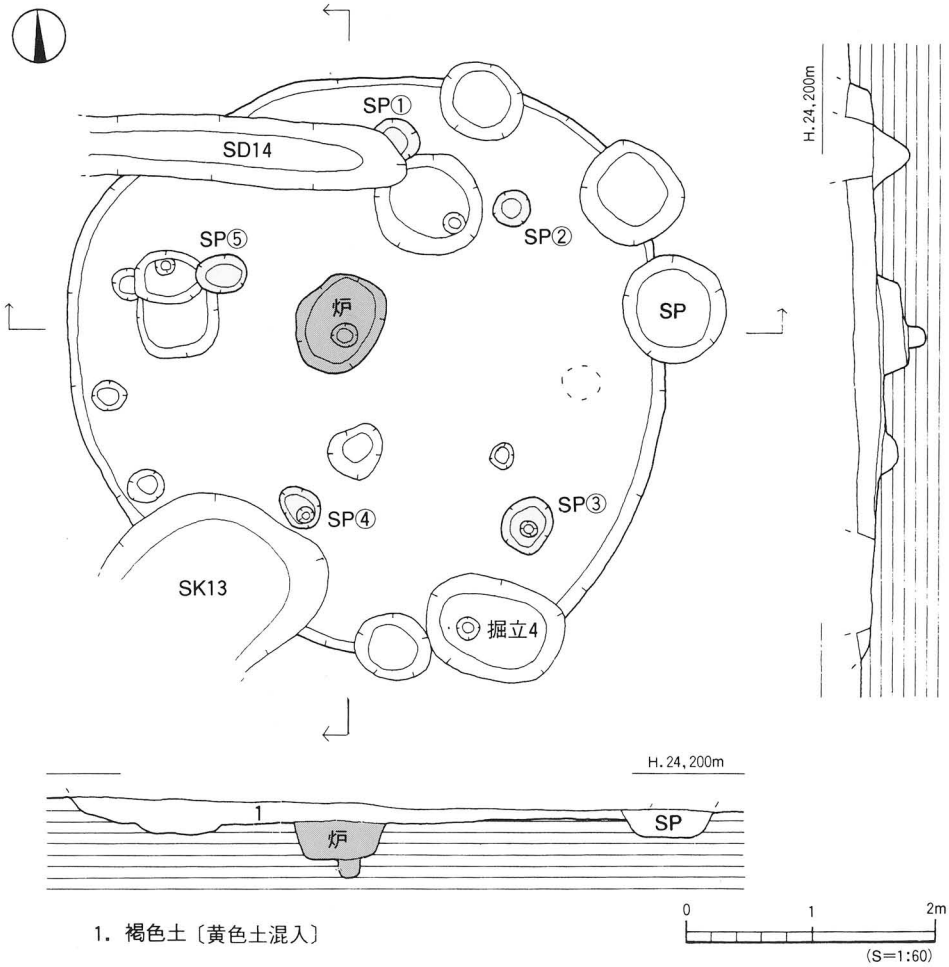


第85図　第Ⅶ層遺構配置図

況は良好ではなかった（東半部では壁高は約２㎝程度）。床面はほぼ平坦で硬くしまっている。埋土は褐色粘質土に黄色土が斑点状に混入するものである。

主柱穴はＳＰ①・②・③・④・⑤の5本を検出した。おそらく他に1本あるものと思われ、6本柱の可能性が考えられる。各柱穴は円～楕円形を呈し、規模は径30～45㎝、深さ10～20㎝、柱穴間は1.2～2.0ｍを測る。

炉址は住居址中央部やや北西寄りに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径0.8ｍ、短径0.6ｍ、深さ約30㎝を測る。断面形は逆台形状を呈する。炉内にて少量ではあるが炭化物を検出した。埋土は褐色の粘土質シルトである。



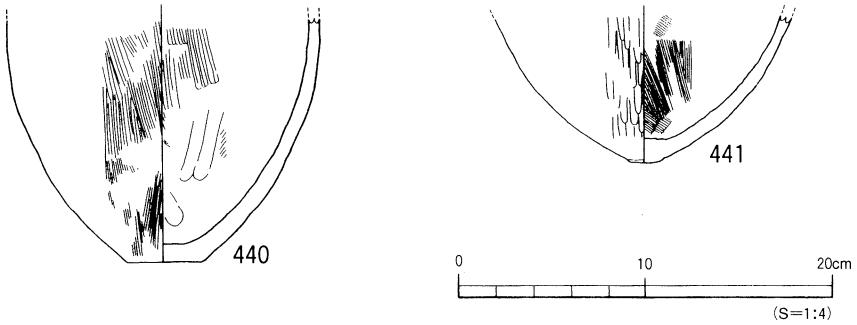
第86図　SB8測量図

遺物は住居址床面付近に散在して出土している。

出土遺物（第87図）

440は甕形土器の底部である。器壁にやや厚みをもつ。441は壺形土器の底部である。小さく突出する平底をもつ。

時期：出土した遺物は弥生時代後期末の特徴を示している。よって、本住居址の廃棄・埋没時期は弥生時代後期末と考えられる。



第87図　SB8出土遺物実測図

ＳＢ９（第88図、図版15）

調査区南西部Ｆ２区～Ｇ２区に位置する。遺構北半部はＳＢ６、南東部はＳＢ３およびＳＤ14に切られる。南西部はＳＤ８・９を切っている。

平面形は円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長5.3m、南北検出長4.7m、壁高は約15cmを測る。床面はほぼ平坦で、比較的硬い。住居址壁体に沿って径６～14cm、深さ４～12cmの小ピットが、住居址北西部及び南西隅で検出された。遺構埋土は褐色粘質土に黄色土が斑点状に混入するものである。

主柱穴はＳＰ①・②・④を検出した。柱穴埋土、配置等からＳＢ３床面検出のＳＰ③、ＳＢ６床面検出のＳＰ⑤もＳＢ９の柱穴と考えられ、おそらく６本柱であろう。

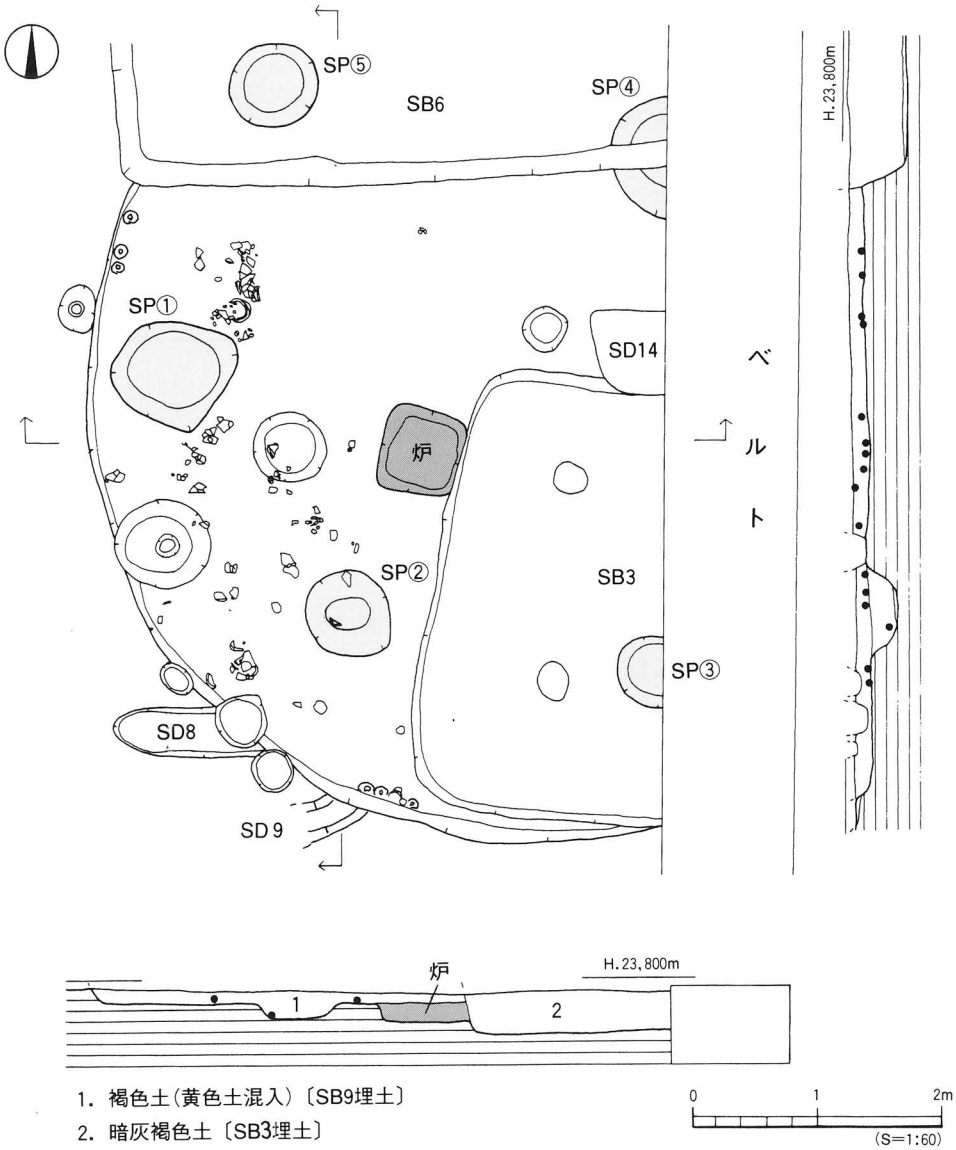
炉址は住居址中央部やや西寄りに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径0.7m、短径0.6m、深さ約20cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。炉内からは炭化物、焼土が検出され、完形品に近い鉢形土器（459）がうつぶせの状況にて出土した。

炉内を除くと遺物は住居址西半部の床面付近に集中して出土している。

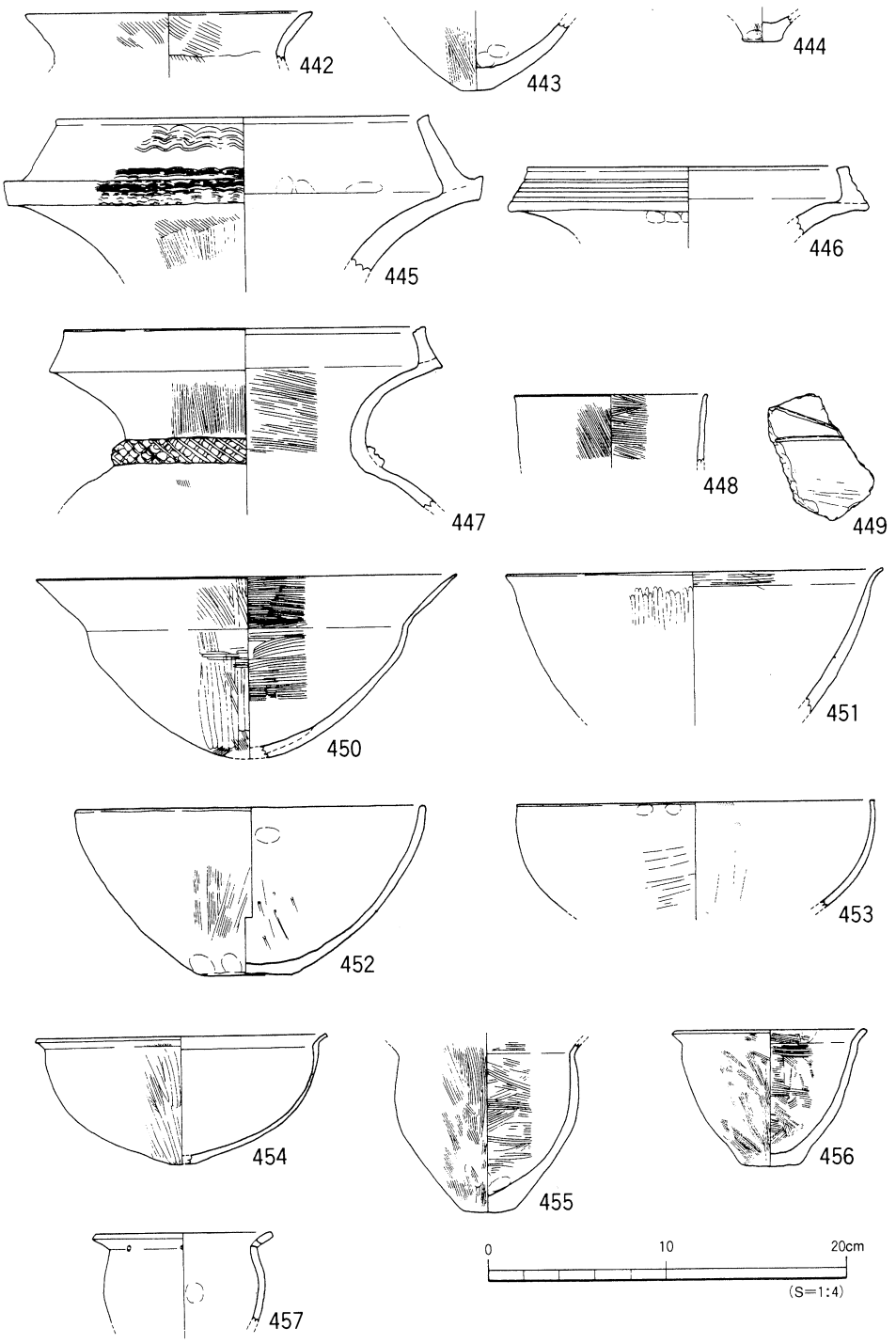
出土遺物（第89・90図）

甕形土器、壺形土器、高坏形土器、ミニチュア品が出土している。

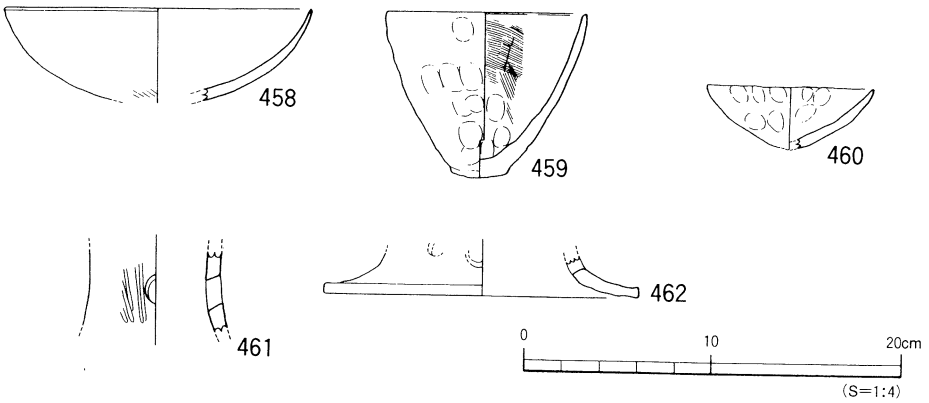
442～444は甕形土器である。442は口縁端部がわずかに内傾し、曖昧な面をもつ。443は厚みをもつ平底、444は立ち上がりをもつ平底である。445～449は壺形土器である。445～447は複合口縁壺である。445は口縁接合部は面をなし、櫛描波状文をもつ。口縁部には櫛描波状文を2段もつ。446は口縁部に太い沈線文をもつ。448は直口口縁壺で、器壁が薄い。449は胴上



第88図　SB9測量図



第89図　SB9出土遺物実測図(1)



第90図　SB9出土遺物実測図(2)

半部の破片で、沈線文をもっている。小片にて傾きは判断できなかった。450～459は鉢形土器である。450～453は口径が19～23cmのものである。450・451は口縁部が外反するもので、450は器壁が薄く口縁部が著しく長いものである。451は口縁部がわずかに折り曲げられるものである。452・453は直口口縁をもつものである。452は大きめの底部をもっている。454～459は口径が9～16cmのものである。454～457は口縁部が外反するもので、458・459は直口口縁のものである。454は器壁が薄く、仕上げが丁寧であり稜をもって外反する短い口縁部をもつ。450・453と同じ様相を示す。455・456はやや厚い平底をもっている。457は焼成前の小円孔をもつものである。458・459は直口口縁をもつもので、458は器高が低く、459は器高が高いものである。459は立ち上がりをもつ平底である。460は小型品で、ミニチュア品と考えられる。指頭痕が著しい。461・462は高坏形土器の脚部である。461は柱部の中位部分であるが、器壁がやや厚く器台に似た形状を呈している。462は裾端部に近い位置に円孔をもっており、異質の感がある。

時期：出土した遺物から、廃棄・埋没時期は弥生時代後期末に比定する。

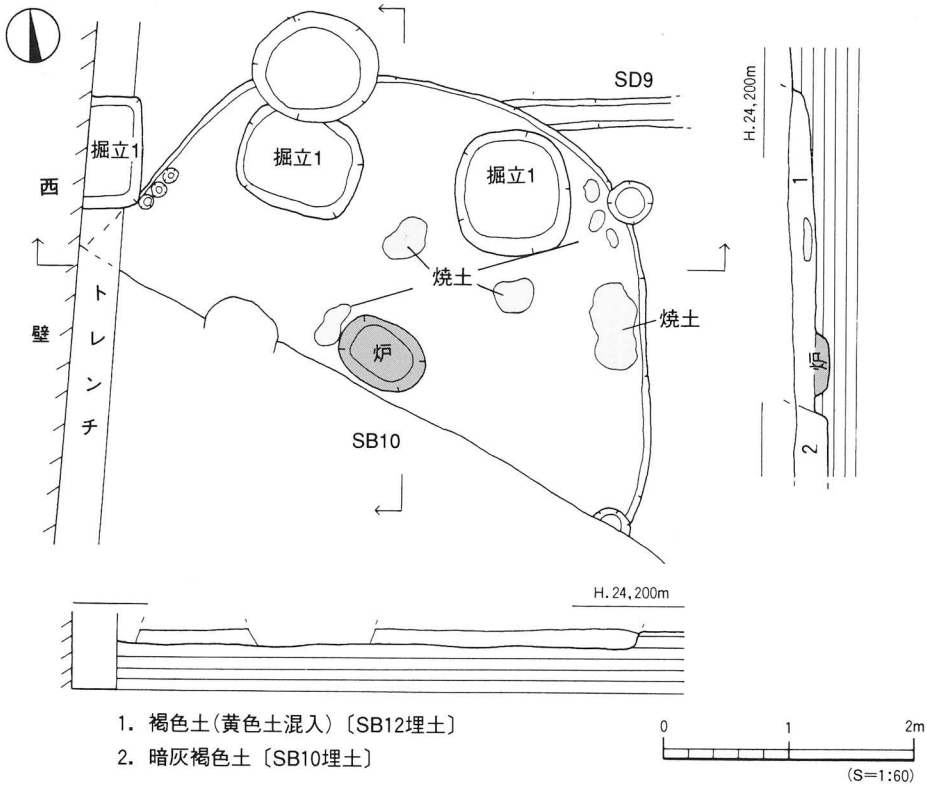
ＳＢ12（第91図、図版12）

調査区南西隅Ｇ1・2区に位置する。遺構南半部はＳＢ10（古墳中期）に、北半部は掘立１（古墳後期末）柱穴に切られている。

平面形は円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長4.9m、南北検出長2.6m、壁高は約20cmを測る。床面は北から南に向けて緩やかに傾斜している。埋土は褐色粘質土に黄色土が斑点状に混入するものである。

住居址壁体に沿って径4～10cm、深さ5～8cmの小ピットが北壁沿いに散在して検出された。

炉址は住居址ほぼ中央部に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径0.82m、短径0.



第91図　SB12測量図

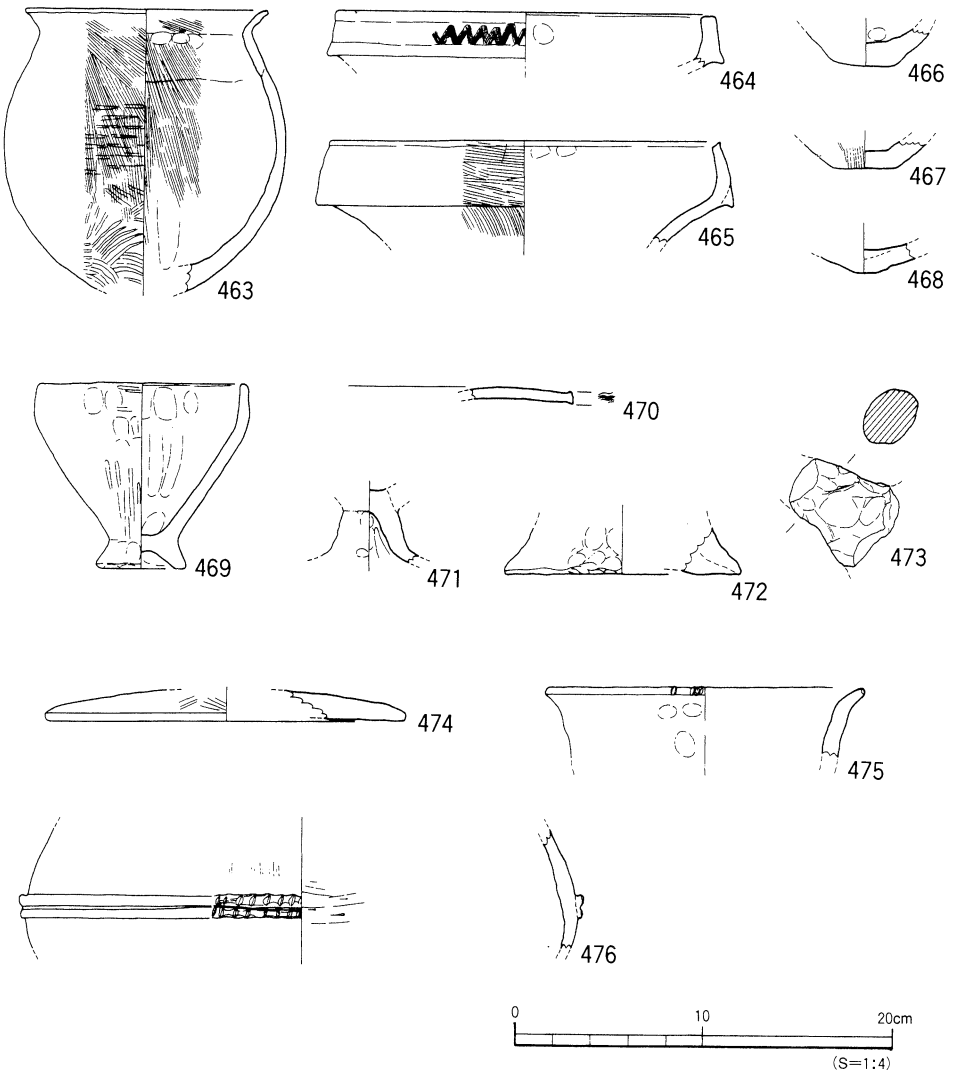
48m、深さ約10cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。炉内からは炭化物・焼土のほか、完形の鉢形土器（469）が横たわった状態で出土している。

他に住居址中央部及び北東部壁体に沿って焼土塊が散在して検出されたが、床面に焼けた痕跡はみあたらなかった。遺物は埋土中及び床面直上から弥生土器が散在して出土している。

出土遺物（第92図）

甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、支脚形土器ほかが出土している。

463・466・467は甕形土器である。463は底部を欠くが遺存が比較的良好なものである。球形の胴部と、口縁端部に曖昧な面をもつものである。464・465・468は壺形土器で、464・465は複合口縁壺である。464・465は接合部が小さく下方に垂れ下がるものである。464は櫛描波状文をもつ。468は立ち上がりをもつ小さい平底で、鉢形土器の可能性もあるものである。469は鉢形土器である。完形品で、くびれの上げ底はやや大きい底部となる。470・471は高坏形土器である。470は坏部の小片で、端面に櫛描波状文をもつ。471は脚部片で、柱部が短い。472・473は支脚形土器である。472は底部片で、厚い器壁で表面に指頭痕を残す。473は受部片で、角状に突出する受部をもつものである。474は蓋形土器と考えられるものであるが、断



第92図　SB12出土遺物実測図

定できない。器壁が厚く、水平にひろがるものである。475・476は古い時期のものである。475は弥生時代前期の甕形土器の口縁部である。口縁端部に刻目をもつ。476は壺形土器の胴部片で、胴部最大部分にM字状の刻目凸帯をもつ。

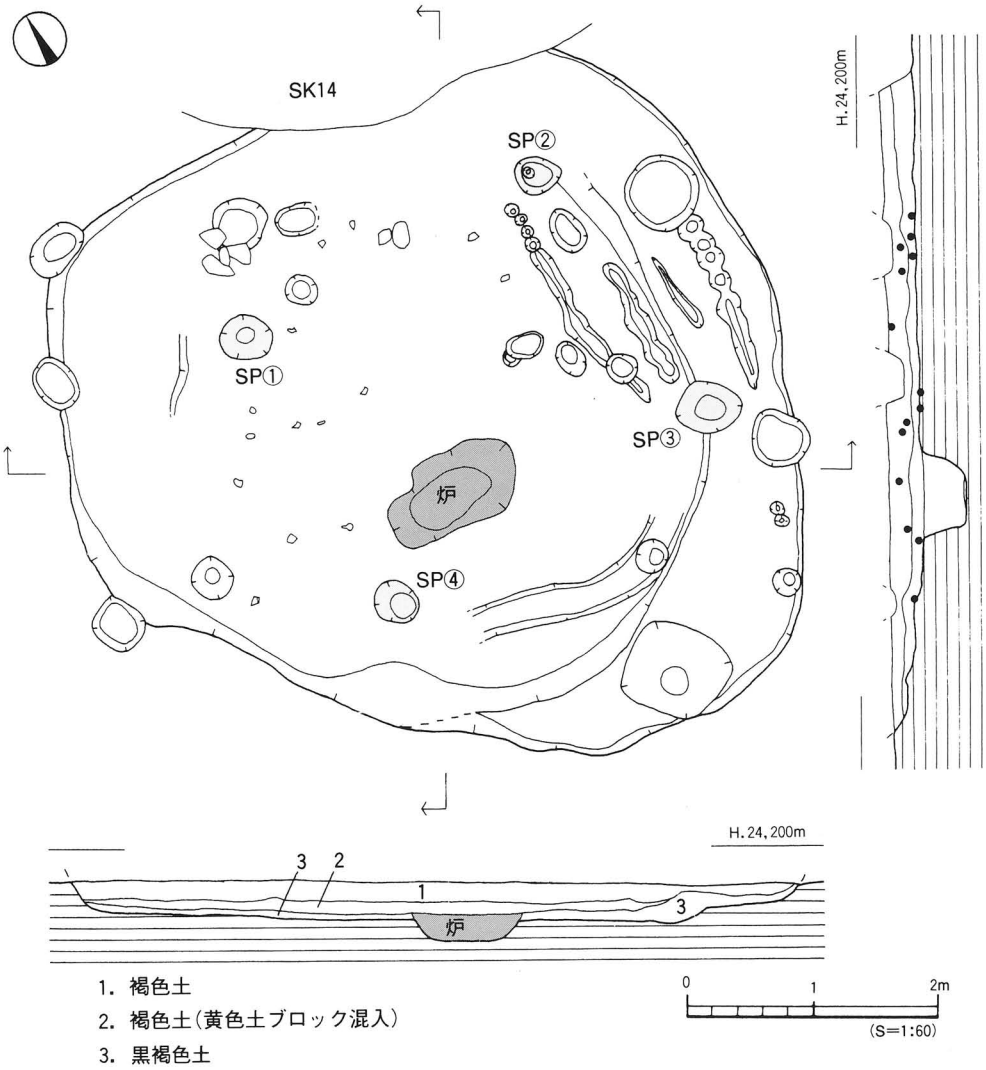
時期：出土した遺物には多少の時期差がみられるが、概ね弥生時代後期末の特徴を示している。よって、本住居址の廃棄・埋没時期は弥生時代後期末と考えられる。

ＳＢ15（第93図、図版15・19）

調査区中央南寄りＧ５区～Ｈ６区に位置し、ＳＢ16・17と重複する。埋土が類似することから検出に困難を有した住居址である。遺構北部はＳＫ14（８世紀）に切られている。

平面形は不整の円形を呈する。住居址は東部に長径幅70cm前後、高さ約15cmのテラスを有する構造であった。規模は長径5.9m、短径5.6m、壁高は約30cmを測る。床面はほぼ平坦で比較的硬い。

埋土は３層に分層され、上層は褐色の粘土質シルト、中層は上層に黄色土が斑点状に混入するものである。下層は黒褐色の粘土質シルトである。住居址床面及びテラスの床面にて幅



第93図　SB15測量図

10cm、深さ５～８cmの小溝が検出された。

主柱穴はＳＰ①・②・③・④の４本を検出した。各柱穴は楕円形を呈し、径40～60cm、深さ約10～15cmを測る。柱穴間はＳＰ①―②間2.4m、ＳＰ①―④間2.7mを測る。

炉址は住居址中央部やや南寄りに位置する。平面形は不整の楕円形を呈し、規模は長径1.2m、短径0.6m、深さ約20cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は黒褐色の粘土質シルトである。

主柱穴以外に住居址床面にて大小12基のピットを検出したが、本住居址に伴うものかどうかは不明である。

住居址は壁体溝と思われる溝が二重に巡ることや埋土の堆積状況、平面形態などから住居の拡張もしくは２棟の住居址が重複している可能性もある。

これらの判断が困難であったため、本稿ではテラスを付設する住居址として報告している。

遺物は住居址床面及び埋土上層からの出土である。上層からは須恵器・土師器（６～８世紀）が出土し、床面付近からは弥生土器が出土している。

出土遺物（第94～96図）

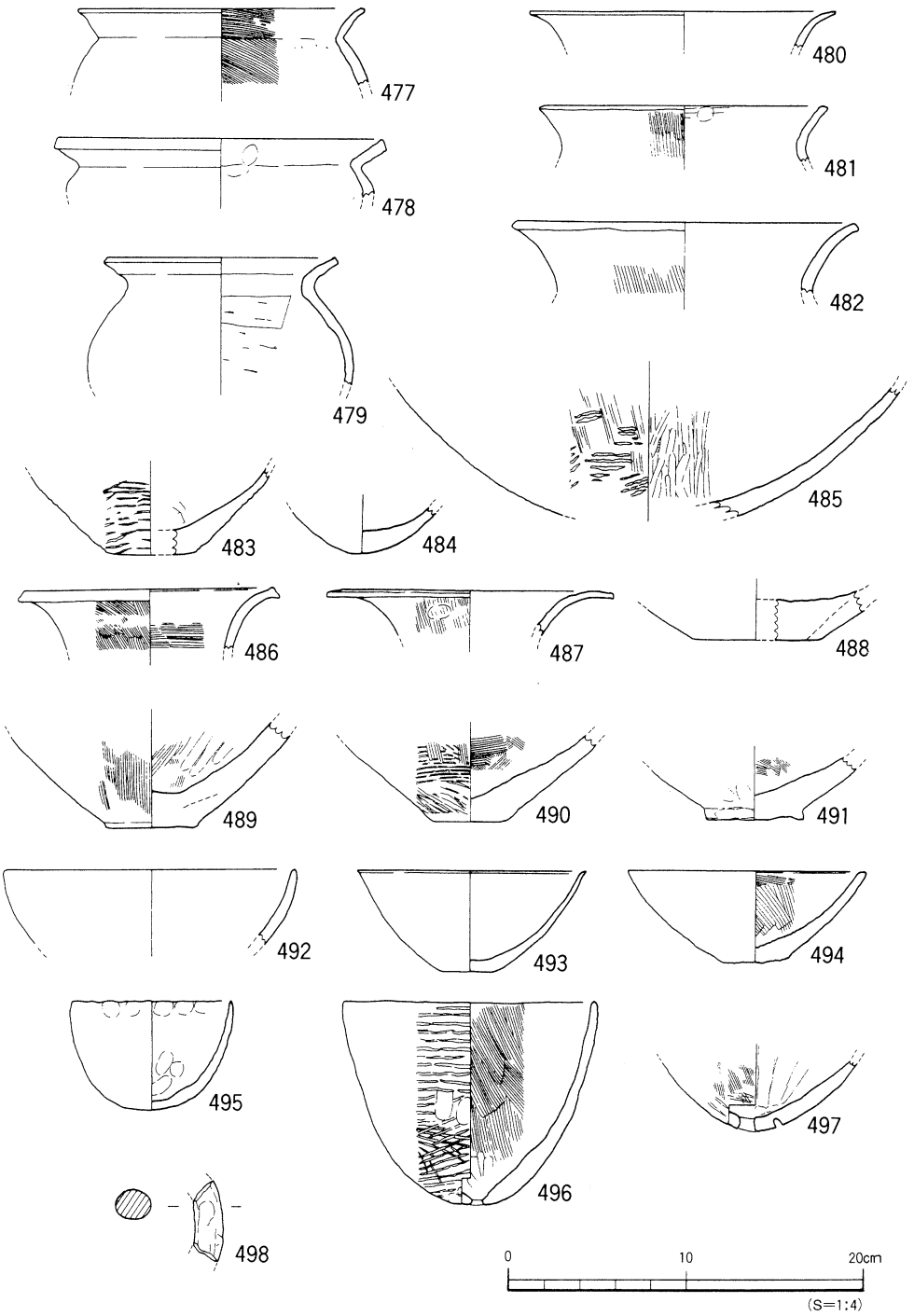
甕形土器、壺形土器、鉢形土器、甑形土器、支脚形土器ほかが出土している。

477～485は甕形土器で、いずれも破片で小さいものである。479以外は在地的なもので、479は畿内的要素をもつものである。479は球形の胴部で内面にケズリ痕をもち、口縁端部は面をなしている。483～485は底部片で、483は平底、484は曖昧は面をもちながらも丸底となっている。486～491は壺形土器である。486・487は大きくひろがる口縁部をもつものであるが、487は器壁が薄く高坏形土器や器台形土器等の脚部片に近いものである。488～490は平底の底部で、491は立ち上がりをもつものである。492～495は鉢形土器である。いずれも直口口縁をもつ。495は丸底である。496・497はいわゆる甑形土器である。丸底の底部に焼成前に円孔を穿つ。497は焼成前に円孔と未貫通の小円孔を穿つ。498は小片で、把手付土器の把手部分である。499～501は支脚形土器である。499は角状の突起を受部とするもので、突起を2ヶもち背面には小さいつまみだしをもっている。500は器高が低いもので、体部は中実となる。受部には上外方にのびる小突起を１ヶもつ。501は裾部片である。

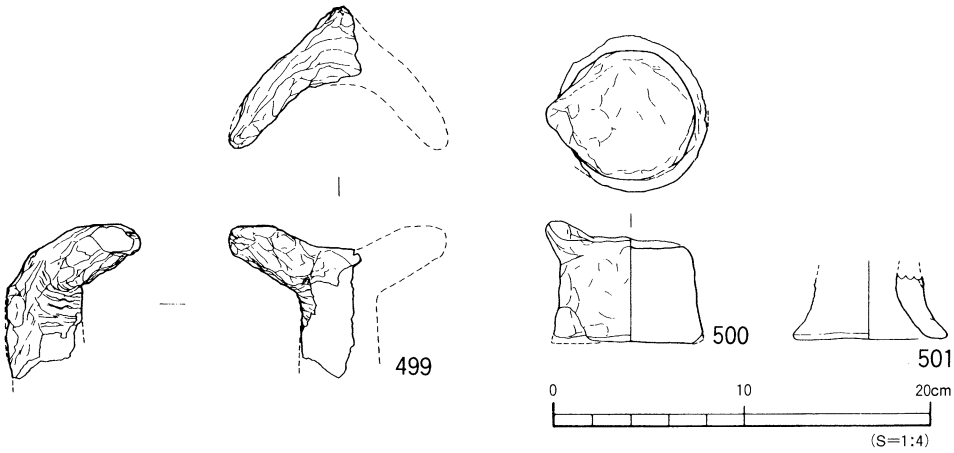
502～505は埋土上層出土品である。

502は土師器の甕形土器。口縁部が内湾し、口縁端部は内傾する面をなす。503は壺形土器。口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁部内面は刷毛目調整、体部内面はヘラケズリ調整を施す。504は須恵器坏蓋。天井部と口縁部との境は凹線により表現される。口縁端部は尖り気味に仕上げる。505は須恵器坏身。たちあがりは欠損している。

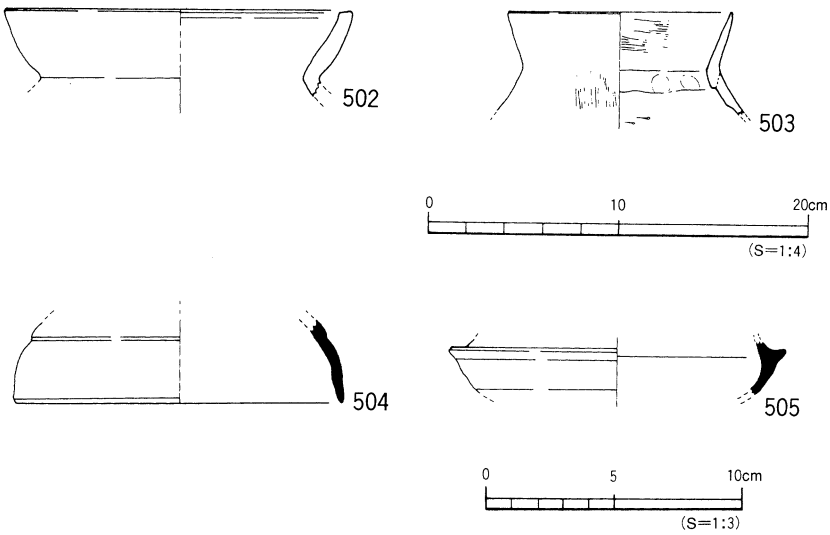
時期：住居址床面出土の遺物は弥生時代末に比定されることから、本住居址の廃棄・埋没時期は弥生時代末と考えられる。



第94図　SB15出土遺物実測図(1)



第95図　SB15出土遺物実測図(2)

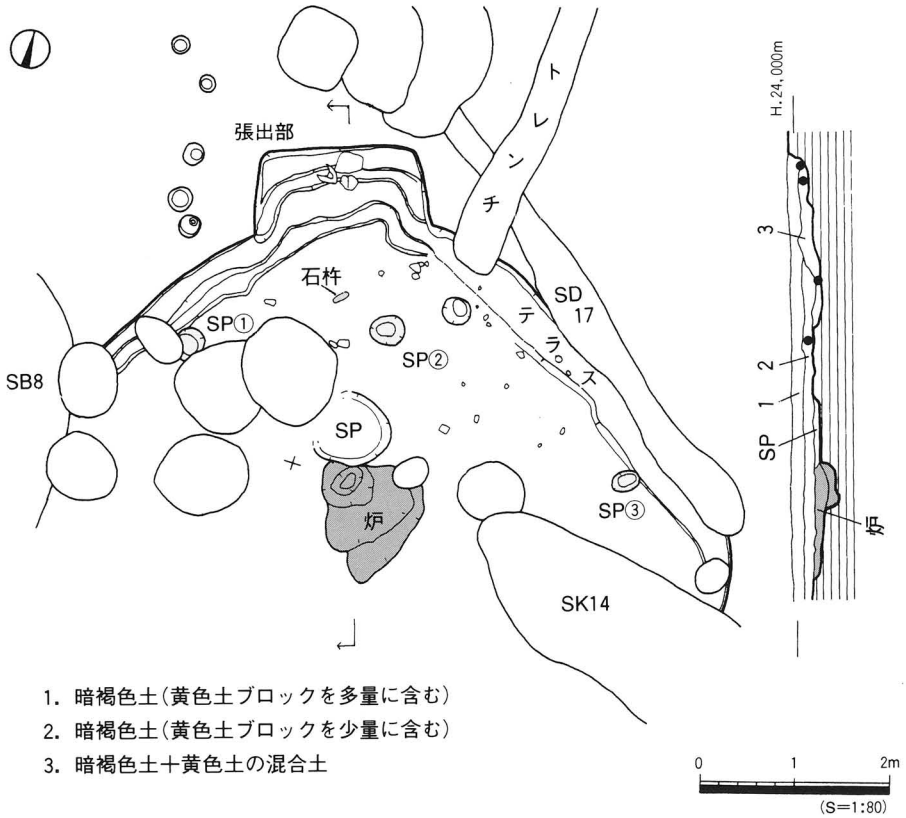


第96図　SB15出土遺物実測図(3)

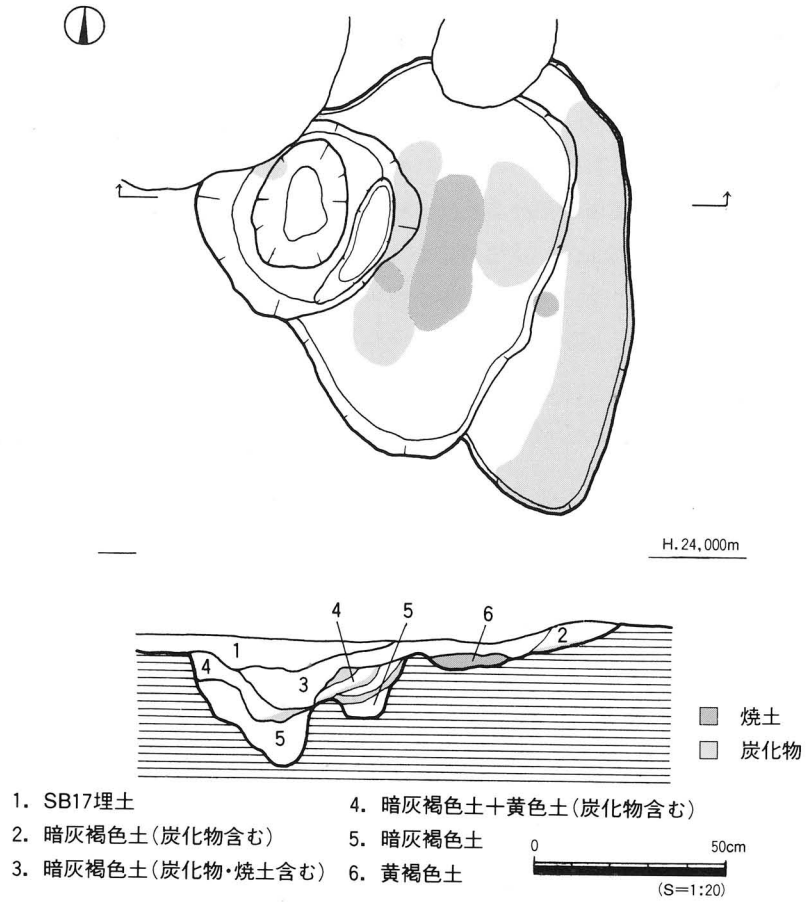
ＳＢ17（第97図、図版16～19）

調査区の中央南よりに位置する。住居址東側はＳＤ17・ＳＫ14に切られ、南側はＳＢ16に大きく切られて、破壊されている。平面形態は円あるいは楕円形を呈し、規模は直径あるいは長軸が7ｍ前後と想定される。住居の北側には張り出し部が付設されている。張り出し部は、平面形態が長方形を呈し、規模は東西1.8ｍ、南北0.8ｍを測る。壁高22～34㎝の遺存であった。張り出し部の床は、住居のそれより８㎝程度高くなっている。壁体に沿って幅10㎝程度のテラスが巡る。テラスの床は、住居の床から６～10㎝程度高くなっており、第Ⅶ層を削り出してつくり出したものである。本住居址の覆土は暗褐色土である。床面は硬くしまっていた。壁体に沿って幅15～30㎝の周壁溝を検出している。張り出し部には、この溝の外側に沿って同幅の周壁溝１条を検出している。

主柱穴はＳＰ①、②、③の３本を検出した。先述したように住居址の大半が破壊されており、主柱穴の配列は明らかにできなかった。検出した主柱穴は楕円形を呈し、長軸40㎝、短軸20㎝、深さ10～40㎝、柱穴間は2.1～3.0ｍを測る。



第97図　SB17測量図



第98図　SB17内炉測量図

炉址は、住居址の中央と想定される位置で検出した。平面形態は不整円形を呈し、長軸（東西方向）短軸（南北方向）ともに1.2m、深さ7～34cmを測る。構造は西に最深部があり、東にむかって掘り方が浅くなっている。埋土は、4層に分層可能であるが、暗灰褐色土（粒が細かく、炭化物粒が散在する）を基調としている。最深部の床面には焼土や炭化物が認められず、これらが確認されたのは、掘り方の浅い東側の床面である。床面直上に炭化物が層厚1cm程度みられ、この上には焼土が厚さ3cm程度認められた。

遺物は、張り出し部を中心に弥生土器・石器が出土した。なかでも、住居址の床面直上から出土した石杵（2061）には、その機能面に赤色顔料が良好に遺存（付着）していた。

出土遺物（第99・100図、図版50）

甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、支脚形土器が出土している。また、506～509は張り出し部より出土した遺物である。

張り出し部から出土した506・507は甕形土器で、506は長胴、507は胴部に膨らみをもつものである。508は壺形土器の胴部である。平底で、外面はヘラミガキがなされる。509は壺形土器の口縁部片で口縁部に太い沈線文を2条もつ。509は古い時期のものである。

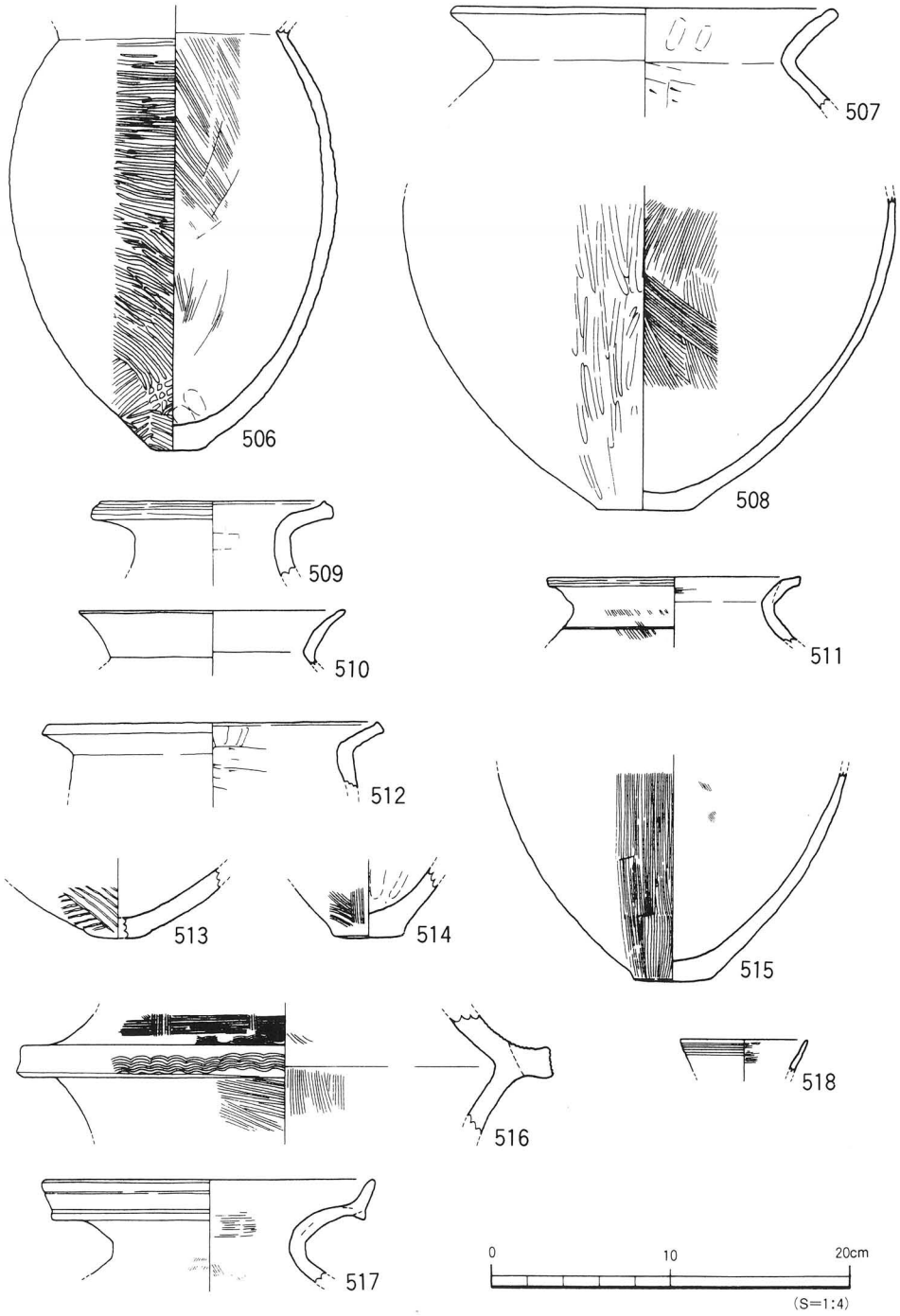
510～533は住居址出土品である。510～515は甕形土器である。510・511は肩部が強く張るものと考えられる。511は口縁部下に施文であるか調整時に無意識的についた線であるのかが判断できない沈線を1条もっている。512は胴部の張りが弱く、器壁が厚いもので、異形品である。513～515は底部で、いずれも底部全体に丸みをもつ。516～523は壺形土器である。516は複合口縁壺で、接合部は面をもち櫛描波状文を施す。口縁部には櫛描き波状文のほか、1組8条のタテ直線文帯を等間隔に施す。517は口縁部が短い複合口縁壺となるもので、口縁端面に浅い沈線文が2条施される。形態、施文とも異質の感がある。518は直口口縁壺で、口縁部に細い沈線文を3条もつ。器壁が薄い。519は広口壺で、口縁端部が拡張され、端面に櫛描波状文をもつ。520は胴部片で、複合口縁ないし広口の壺になると思われる。521～523は底部片で、平底のものである。524～528は鉢形土器である。524は中型品で、長い口縁部をもつ。525・526は直口口縁をもつものである。526はほぼ完形品で、底部は立ち上がりをもつ平底となる。527は脚付鉢である。大きく広がる裾部と円孔（4方向）をもつ。528は底部が低い高台状の平底となるものである。タタキ痕とみられる跡を看取する。529はミニチュア品で、くびれの上げ底となる。530・531は高坏形土器である。530は口縁部小片である。531は脚部片で、裾部は有段となり、円孔をもつ。532・533は支脚形土器である。532・533ともに受部に突起を2ヶもつものである。体部は532は中空、533は大部分が中実であり、底部が上げ底になるものである。533の背面は小さく突出している。

時期：出土した遺物の特徴などから本住居址の廃棄・埋没時期は弥生時代末に比定されよう。

ＳＢ15～17出土遺物（第101図、図版50）

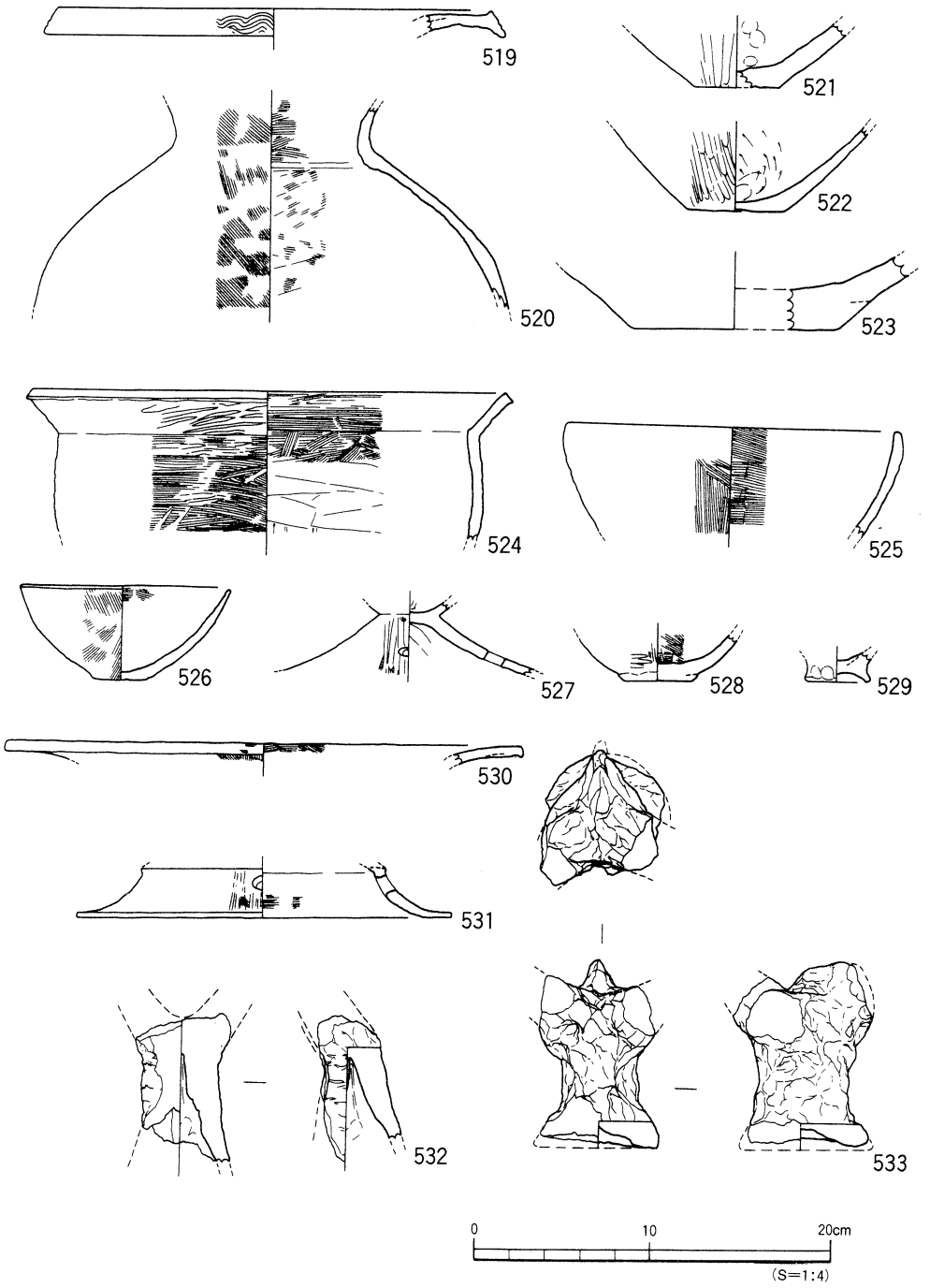
ＳＢ15・16・17は切り合いの関係にあり、いずれの住居に伴うか判断できなかった遺物を以下にあげる。

534～536は甕形土器である。胴部に膨らみをもつもので、534・535はタタキ痕を看取する。537～539は複合口縁壺である。537は接合部に面をもち、斜格子文を施す。538は口縁部に斜線文充塡の三角文をもつ。540～542は鉢形土器である。540は外反口縁に平底、541・542は直口口縁に丸底の形態をもつ。543は壺形土器あるいは鉢形土器の底部である。544は鉢形土器の底部でくびれの上げ底となる。545は充塡技法の高坏柱部片である。546は甕形土器の底部で、厚い平底となる。

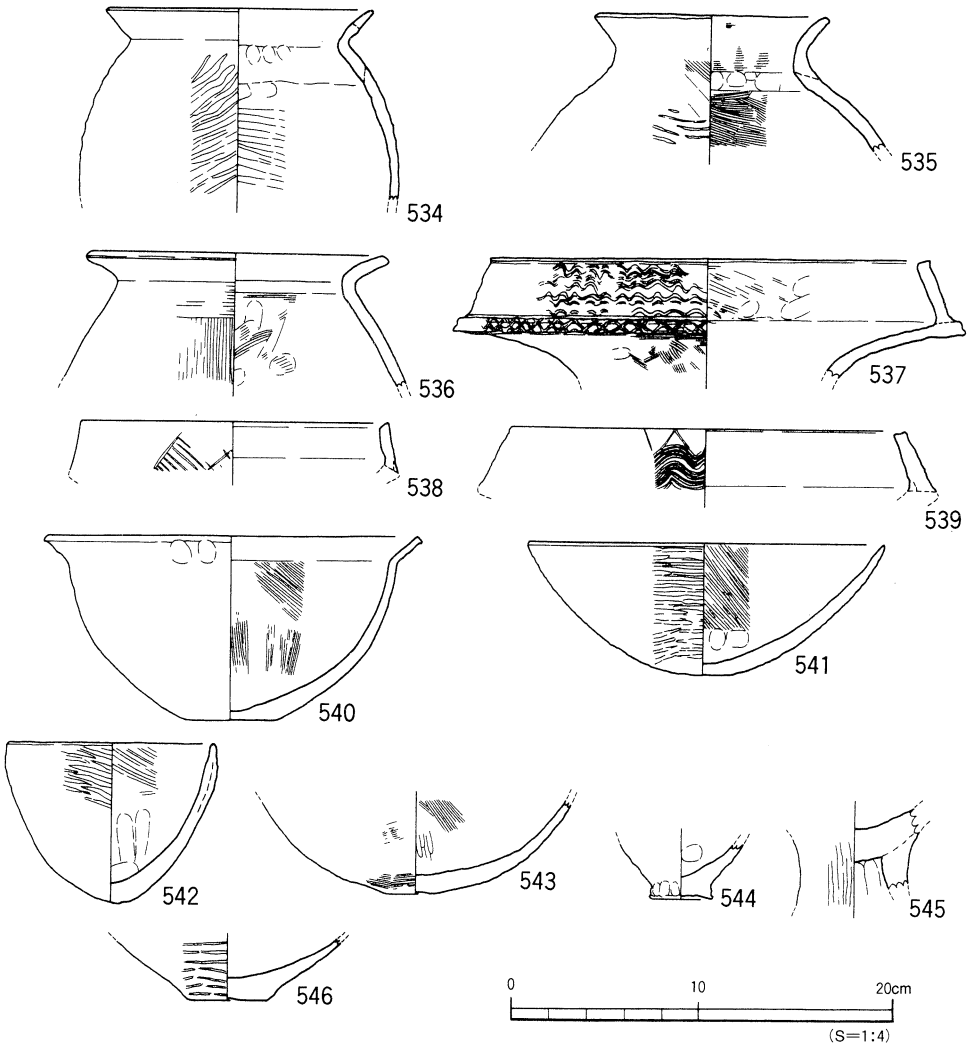


506～509:張出部

第99図　SB17出土遺物実測図(1)



第100図　SB17出土遺物実測図(2)

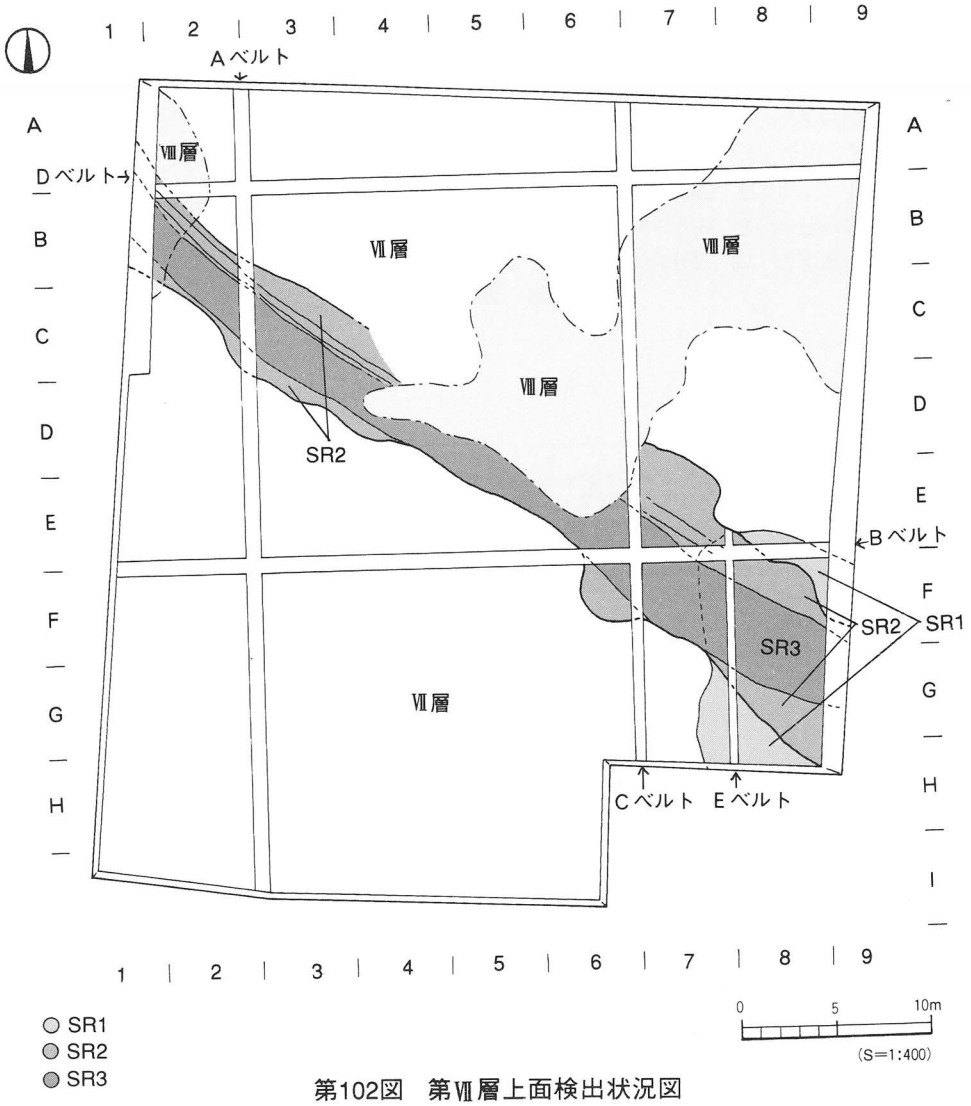


第101図　SB15～17出土遺物実測図

2）自然流路と土器溜りほか

本調査において3条の自然流路を検出した。発掘調査時の工程をふまえながら各流路の概略を説明する。調査は調査区北西部から中央部（B2～D7区）と南東部（E6～H8区）に分けて行った。

まず、流路の掘り下げに先立ちE～H区の7・8区間にベルトを設定した（Eベルト）。ベルト沿いに先行トレンチを掘り、土層観察を行った。また、調査開始時に設定した東西方向と南北方向のベルト（A・B・Cベルト）及び調査区東壁・西壁の土層観察をもとに流路の範囲や堆積状況の把握に務めた（第102図）。

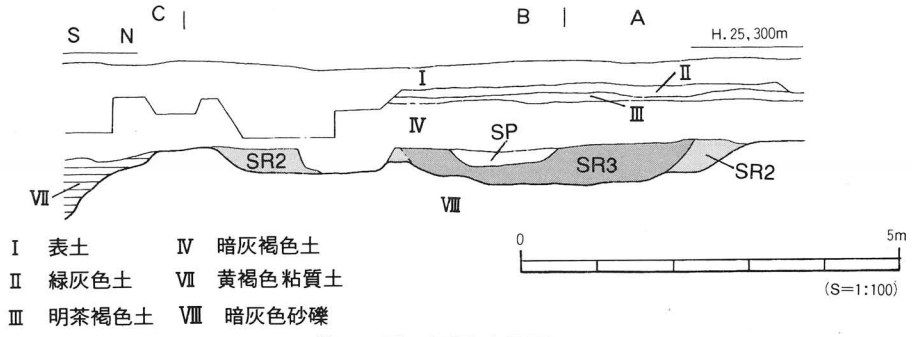


第102図　第Ⅶ層上面検出状況図

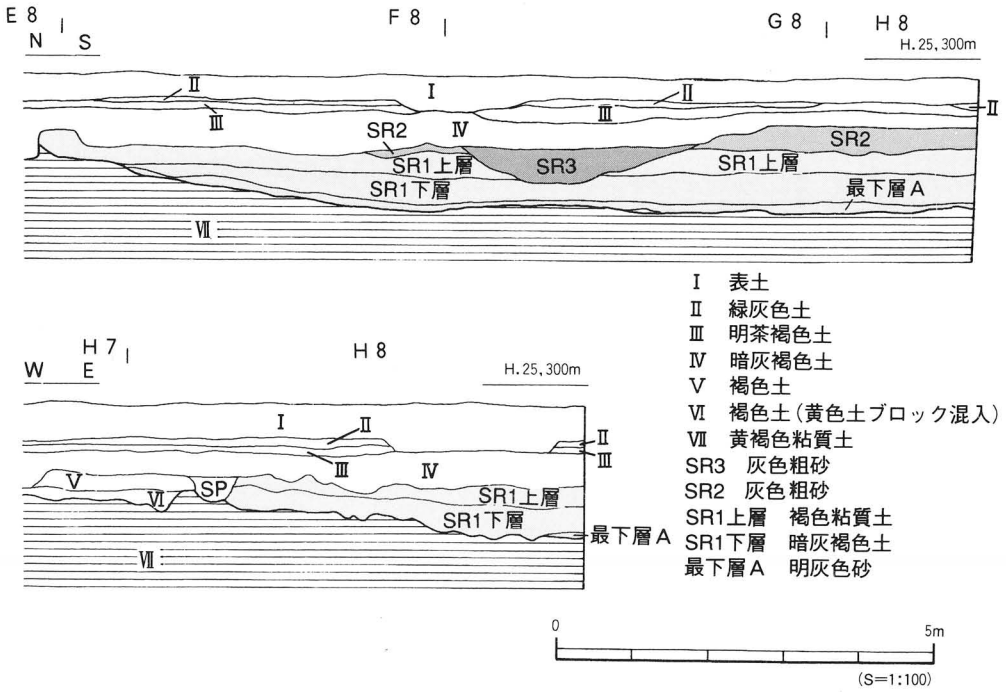
南東部ではＳＲ1・2・3の3条の流路を検出した。北東部から中央部ではＳＲ1は検出されずＳＲ2・3の2条の流路を検出した。

つづいて、ＳＲ1～3の埋土について説明する。ＳＲ1は粘性の強い砂を多く含む暗灰褐色土を埋土にもつ流路である。その上面には褐色の粘質土が覆っている。本稿では暗灰褐色土をＳＲ1下層、褐色粘質土をＳＲ1上層として呼称する。また流路基底面からは明灰色砂層と鉄分を多く含む小礫層を検出した。前者を最下層Ａ、後者を最下層Ｂとして土層名を呼称した。両者は出土地点が異なるため前後関係はわからない。

ＳＲ2及びＳＲ3は調査区南東部から北西部に向けて流れる流路である。灰色の粗砂を埋土



第103図　西壁土層図



第104　東壁(上)南壁(下)土層図

にもつ流路である。両者の埋土は類似しており、形状や範囲は調査区東壁・西壁及び調査区内に認定したベルトの土層観察をもとに認定している（第103・104図）。北西部から中央部までは両者の区別が難しく、調査は同時に掘り下げることになった。そのため、出土した遺物はどちらの流路のものか判断していない。よって、これらの遺物を本稿では「ＳＲ2・3出土遺物」として掲載している。一方、南東部ではＳＲ2とＳＲ3の認定が可能であり、区別して調査をした。ＳＲ2は完掘後、流路基底面に明灰色砂層と鉄分を含む小礫層を検出した。前者をＳＲ埋土2、後者を埋土3と呼称した。

ＳＲ1～3以外の遺構

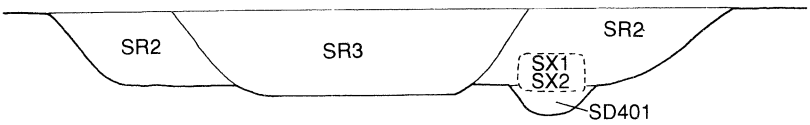
また、3条の流路掘り下げ時には、遺構と土器溜りを検出した。北西部から中央部では土器溜り2箇所（ＳＸ1・ＳＸ2）と溝1条（ＳＤ401）を、南東部では土器溜り2箇所（ＳＸ3・ＳＸ5）と溝1条（ＳＤ402）を検出した。以下、自然流路と遺構・土器溜りについての検出状況を模式図を用いて説明する（第105図）。

① まず、北西部から中央部ではＳＲ2・3の2条の流路を検出した。2条は土層観察より、ＳＲ2がＳＲ3に先行する。両者を掘り下げた後、流路基底面ではＳＸ1、ＳＸ2と溝ＳＤ401を検出した。ＳＸ1とＳＸ2は、ＳＤ401埋土上面付近から検出した土器溜りである。

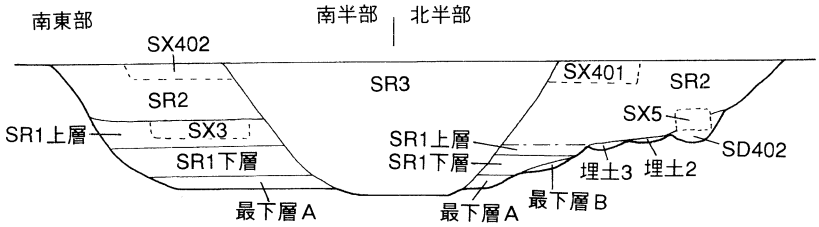
② 次に、南東部ではＳＲ1～3の流路を検出した。ＳＲ3はＳＲ1及びＳＲ2を一部浸食している。よって、はじめにＳＲ3を掘り下げ、つづいて、ＳＲ2の掘り下げを行った。ＳＲ2の上部では遺物を含む土層（ＳＸ401・402）を検出した。調査はＳＸ401と402を完掘後、調査区を北と南（北半部、南半部と呼称）に分けて行うことにした。

③ 北半部では西側と東側で流路基底面の様相が異なっている。西側はＳＲ2を完掘すると、流路基底面でＳＸ5、溝ＳＤ402、明灰色砂（埋土2）と小礫層（埋土3）を検出した。ＳＸ5はＳＤ402埋土上面付近から検出した土器溜まりである。埋土2と埋土3は出土地点が異なるため、前後関係は不明である。

(1) 北西部から中央部



(2) 南東部



第105図　SR模式図

北半部の東側ではＳＲ2を完掘すると、ＳＲ1下層が検出された（ＳＲ1上層は本来、存在していたと考えられるが、調査時にはＳＲ1下層と区別できなかった)。つづいて下層を完掘すると、流路基底面には明灰色砂層（最下層Ａ）と小礫層（最下層Ｂ）が検出された。最下層Ａ・Ｂは、出土地点が異なるため前後関係は不明である。

④　南半部ではＳＲ2を完掘すると、ＳＲ1上層が検出された。次に上層上部では土器溜りＳＸ3が検出された。つづいて、ＳＸ3及び上層を掘り下げると、ＳＲ1下層が検出された。南半部では下層の堆積は北半部に比べて厚いため、調査は上部と下部に分けて掘り下げを行った。下層下部を完掘すると、流路基底面となり、基底面では明灰色砂層（最下層Ａ）を検出した。

以上のように、自然流路や土器溜り等は、地区により堆積状況や調査方法が異なるため、報告は調査区の北西部から中央部までと、調査区の南東部に分けて記述を行うことにする。また、記述に際しては遺構は宮内が、土器は梅木が担当した。さらに石器は加島が担当しＰ283～307に、鉄器は宮内が担当しＰ308～311にまとめて記述した。

(1)　北西部から中央部（Ｂ2～Ｄ6区）の調査（第107図）

調査区北西部から中央部では自然流路2条と溝1条、土器溜り2基、ピット7基を検出した。

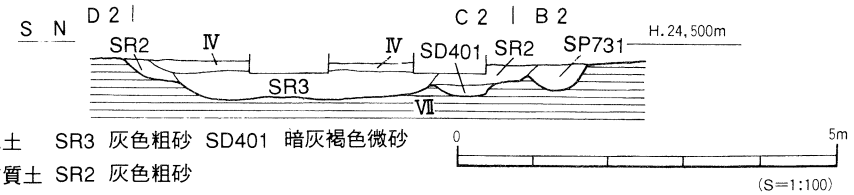
ＳＲ２

調査区南東部Ｈ8区から北西部Ｂ2区に向けて流れる。Ｄ4～Ｄ6区では第Ⅷ層砂礫層が一部露出し流路の形状は不明である（第102図)。北西部から中央部では検出規模は最大幅7m、深さは検出面下約40cmを測る。断面形は浅いＵ字状を呈する。基底面からは溝ＳＤ401を検出した。またＳＤ401の埋土上面付近からは土器溜まりを2箇所検出した（ＳＸ1・ＳＸ2)。

ＳＲ３

調査区南東部Ｇ8区から北西部Ｂ2区に向けて流れる流路である。調査区中央部以西では、ＳＲ2との切り合いは断面では確認できたが、平面では区別がつかなかった。そのためＳＲ3の両岸は、調査区西壁と調査区内のベルトの断面、さらには流路の基底面のレベルにより、想定ラインを設定したものである。北西部から中央部では、検出規模は最大幅3.2m、深さは検出面下約50cmを測る。断面形はＵ字状を呈する。土層観察では、埋土がＳＲ2にくらべ大粒の砂粒があり、ＳＲ2よりは急な流れをもつ流路であったと推測される。

ＳＲ2・3からは弥生時代後期末から古墳時代初頭頃までの遺物が出土している。



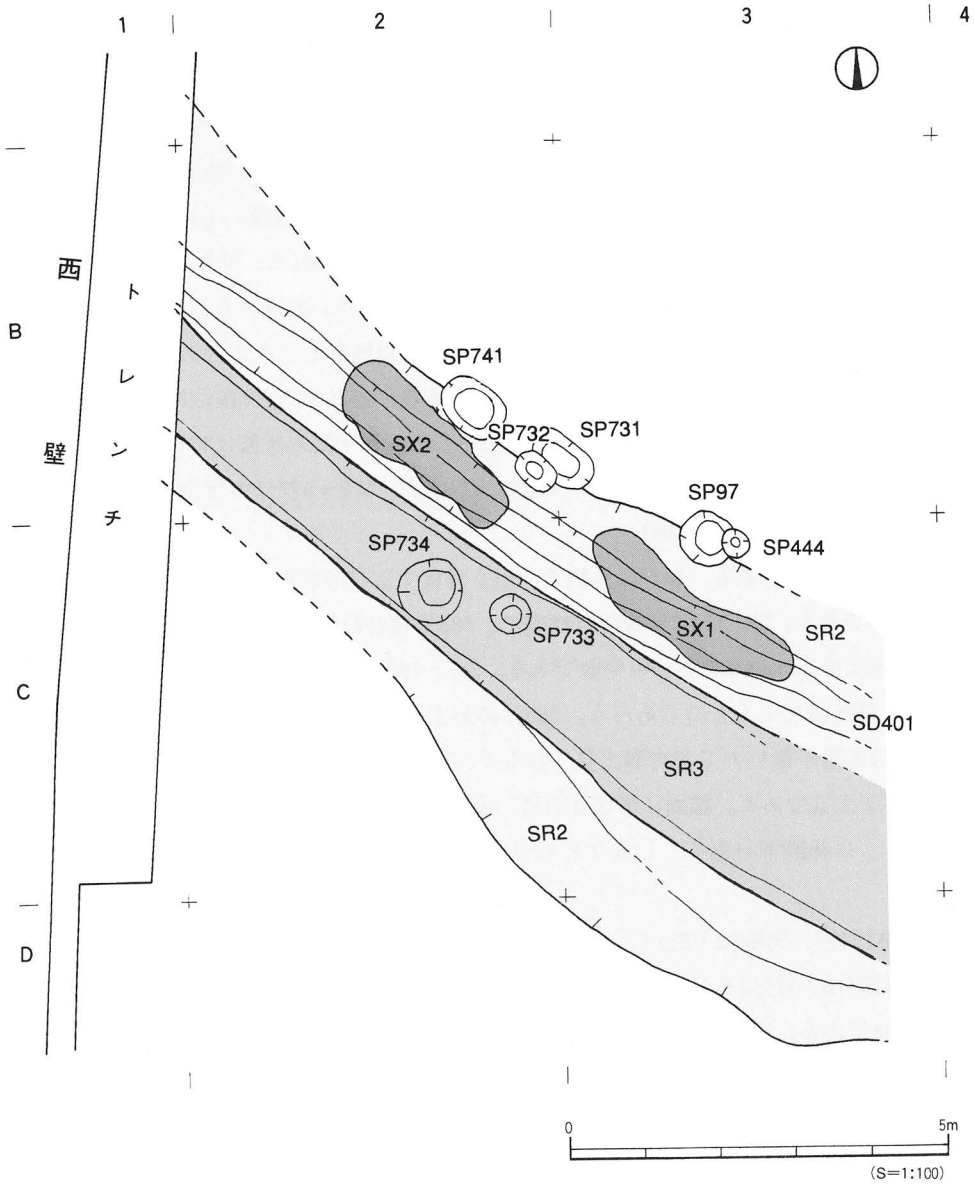
Ⅳ 暗灰褐色土　SR3 灰色粗砂　SD401 暗灰褐色微砂
Ⅶ 黄褐色粘質土　SR2 灰色粗砂

第106図　Ａベルト土層図

ＳＤ４０１（図版21）

ＳＤ401はＣ3区からＢ2区にあり、ＳＲ2の完掘後に流路基底面で検出した溝である。規模は最大検出幅90cm、深さは検出面下約20cmを測る。埋土は暗褐色で粘性の強く、微砂が主体となる。断面形は浅い、逆台形状を呈する。溝底面は東から西へ向けて緩やかな傾斜をなす。溝内からの遺物の出土はない。

ただし、ＳＤ401埋土上面付近では土器溜まりを2箇所検出している（ＳＸ1・ＳＸ2）。



第107図　北西部遺構検出状況図

ＳＸ１（第108図、図版19・20）

調査区北西部Ｃ3区にあり、ＳＤ401の上面で検出した土器溜りである。出土物は1×3.2mの範囲で、押しつぶされた状態で検出している。明確な掘り方は確認できなかった。遺物は図化して取り上げを行い、上部遺物（ＳＸ1上部出土遺物）を取り上げるとさらに完形に近い遺物が下部より出土した（ＳＸ1下部出土遺物）。ＳＸ1からは弥生時代後期末に比定される遺物が多数出土し、石器には石庖丁の未製品（Ｐ287，第268図）が出土している。

ＳＸ１下部出土遺物（第109～112図、図版51～53）

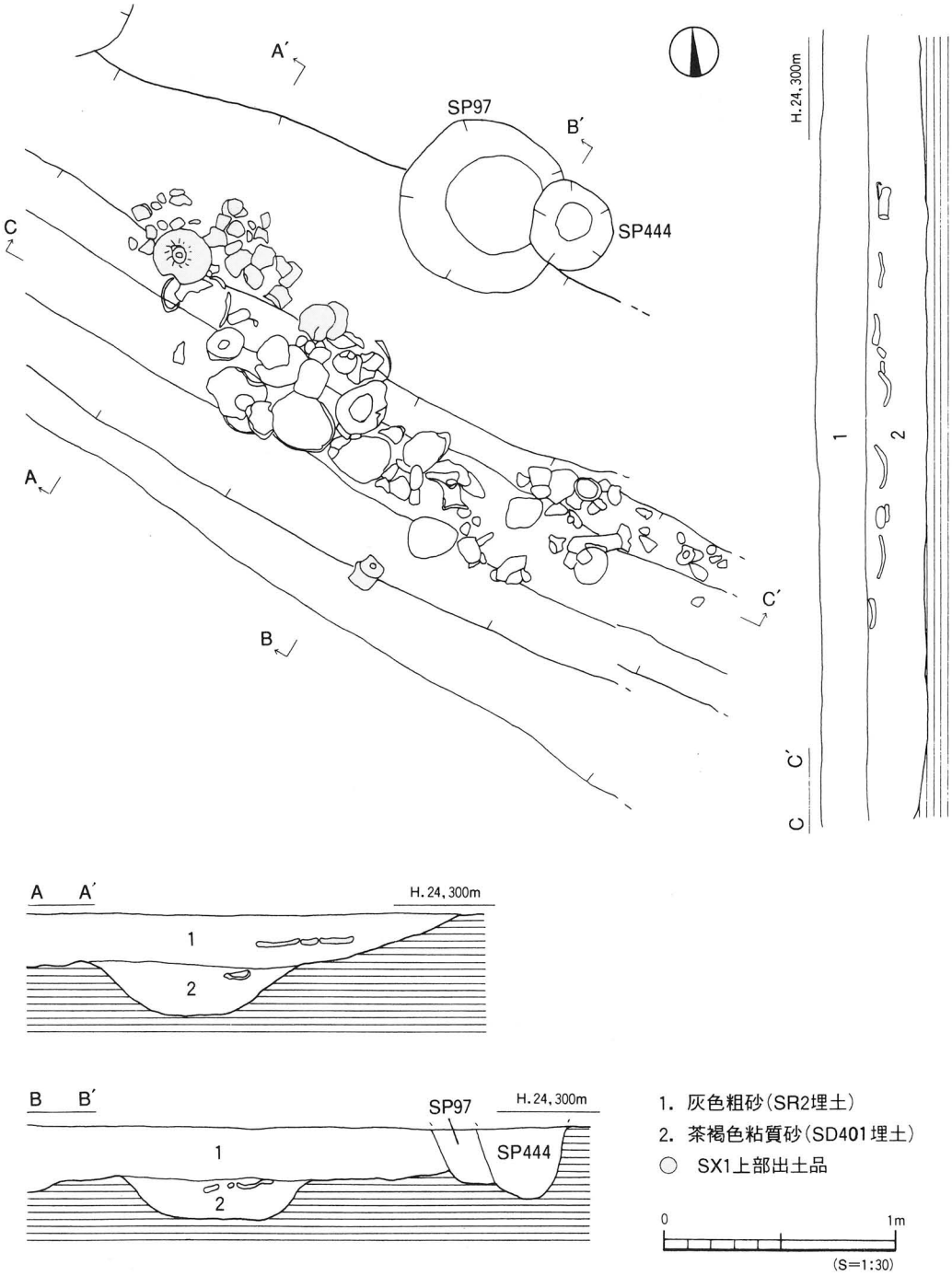
547～558は甕形土器である。法量より、547～550は大型品、551～553は中型品、554～558は小型品となる。器形は長胴、平底、短く外反する口縁部をもつものである。ただし、胴部最大径が胴上位に位置するものと中位にあるものとがあり、口縁部でも長いものと短いものがあり、多少の違いがみられる。559～564は壺形土器である。559～561は複合口縁壺である。561は大型壺で、大きく突出する接合部をもつ。口縁端部の内面、端面、接合部上端面に竹管文を施しており、器形・施文とも異質である。562は広口壺で、器壁は厚いものとなる。563・564は壺形土器の胴部片である。564は細長頸壺になるものと思われる。565～571は鉢形土器である。565～567は外反する口縁部をもつものである。565は薄い器壁のもので、大きくひろがる長い口縁部をもつものである。568・569・571は直口口縁をもつものである。571は丸底となる。570はやや広い平底で小さく突出するものである。572は大型の器台形土器である。多段の円孔と櫛描文をもつものである。573は鉢ないしは壺形土器の底部に穿孔を加えたものである。574～577は支脚形土器である。574は体部が中実、575～577は中空のものである。

ＳＸ１上部出土遺物（第113図）

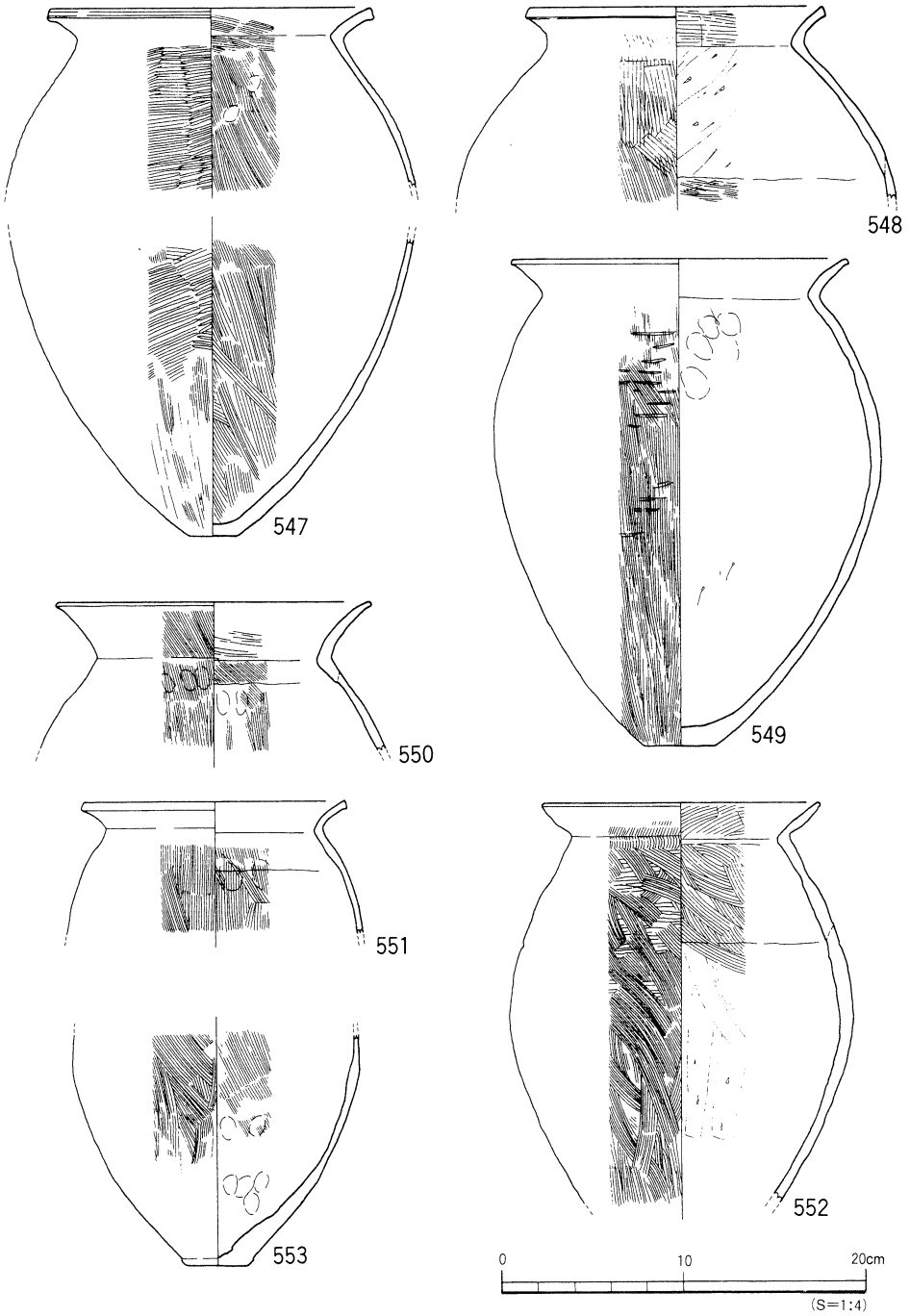
578～580は甕形土器である。形態は長胴で、短く外反する口縁部をもつものである。581～587は壺形土器である。581・582は複合口縁壺で、583も複合口縁壺になると思われるものである。584は外反する口縁部をもつ中型壺である。585～587は底部であるが、586・587は中～大型品で複合口縁壺となるものであろう。588は鉢形土器である。589は高坏形土器の坏部片である。590は器壁が薄いので器台形土器ではなく、高坏形土器と判断したものである。591は大型の器台形土器である。端面に櫛描きの浅い直線文をもつ。592は甕形土器であるが胴部の張りが弱く、口縁直下が薄く、しまりをもつことより古い時期のもの（後期前葉）である。

ＳＸ２（第114図、図版20・21）

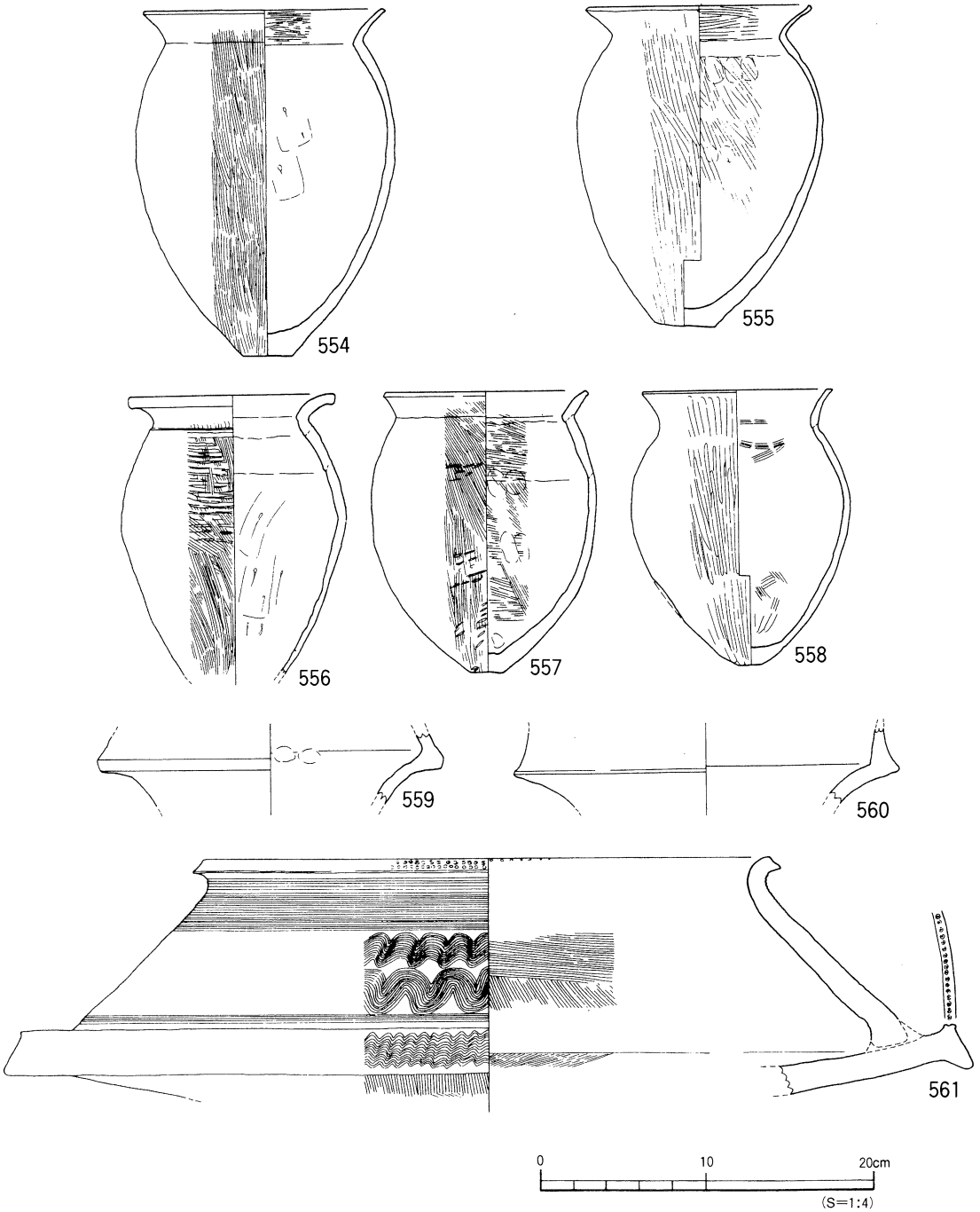
調査区北西部Ｂ2・3区にあり、ＳＤ401の上面で検出した土器溜りである。ＳＸ1はＳＸ2の南面、約1.5ｍにある。出土物は1×2.8mの範囲で、遺物がまとまって出土している。明確な掘り方は確認できなかった。遺物は完形品に近いものが多く、図化して取り上げを行い、上部出土のものをＳＸ2上部、下部出土のものをＳＸ2下部とした。ＳＸ2からは弥生時代後期末に比定される土器が多数出土している。



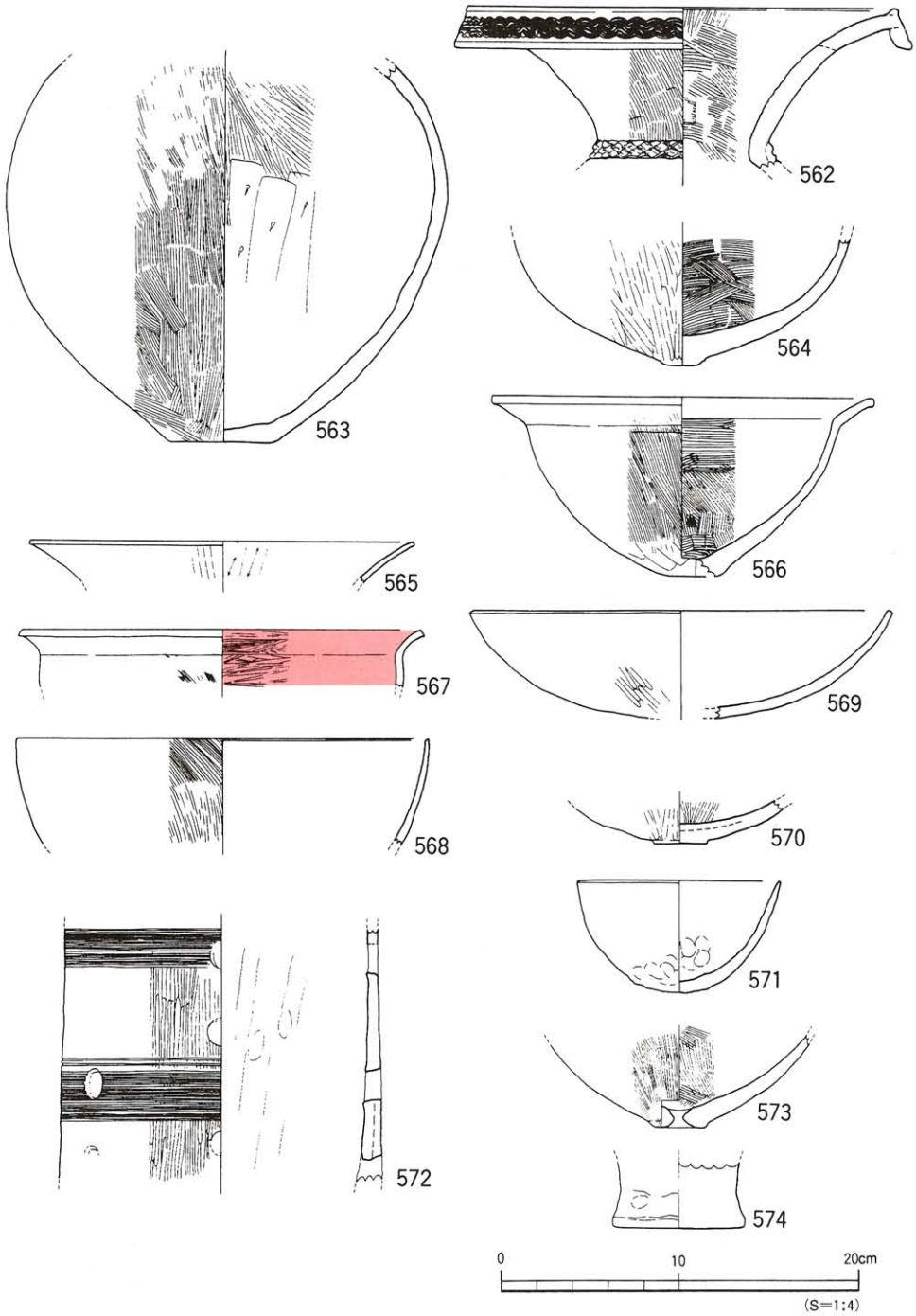
第108図　SX1測量図



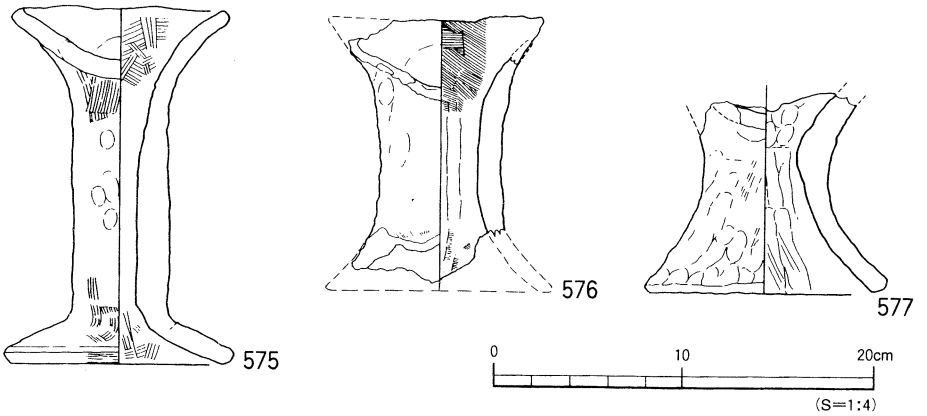
第109図　SX1下部出土遺物実測図(1)



第110図　SX1下部出土遺物実測図(2)



第111図　SX1下部出土遺物実測図(3)



第112図　SX1下部出土遺物実測図(4)

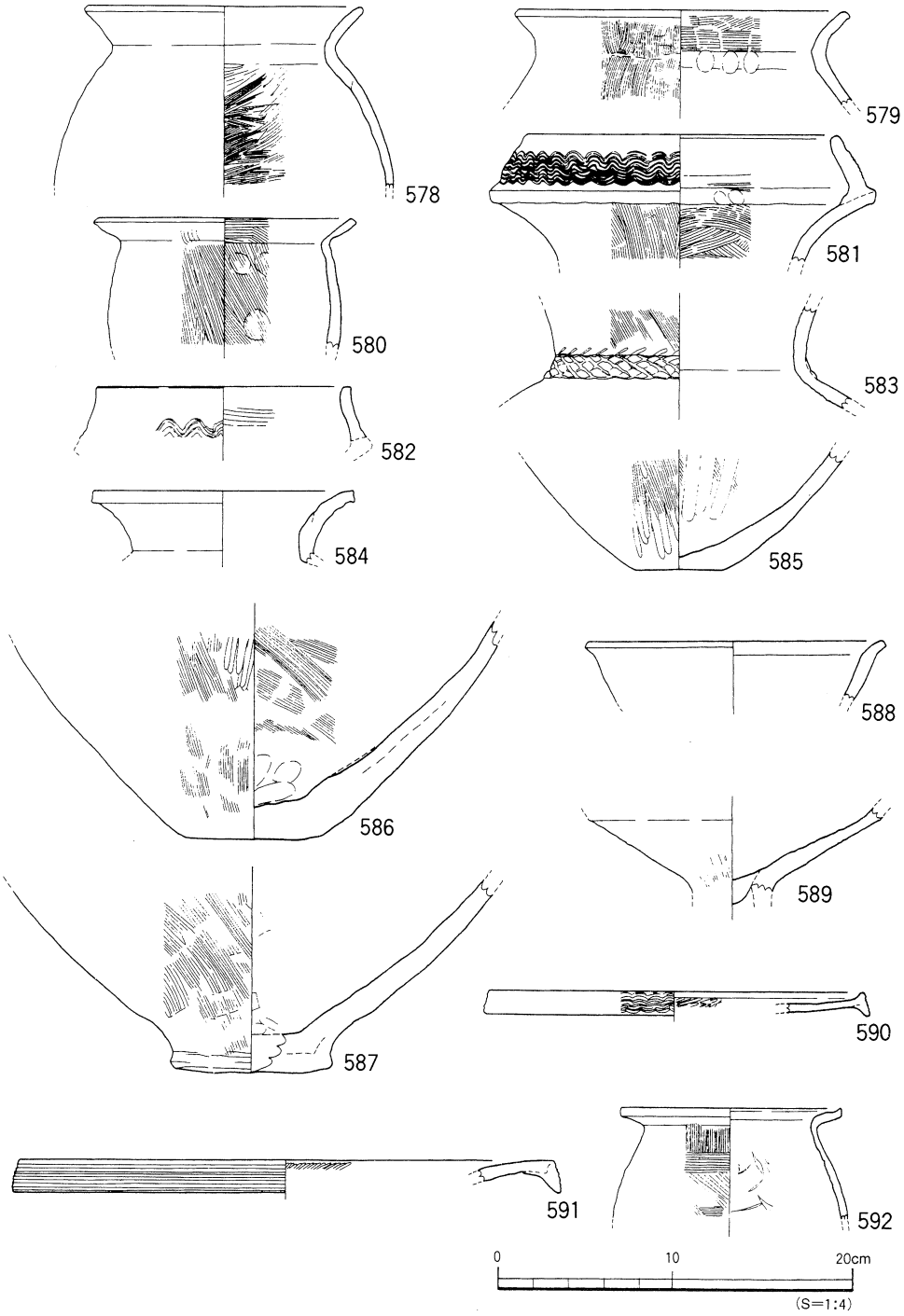
とりわけ、ＳＸ2上部からは分銅形土製品が1点出土している。石器では、上部より石庖丁が1点出土している（Ｐ287，第268図）ほか猪の切歯が1点出土している（Ｐ312）。

ＳＸ２下部出土遺物（第115～119図、図版54・55）

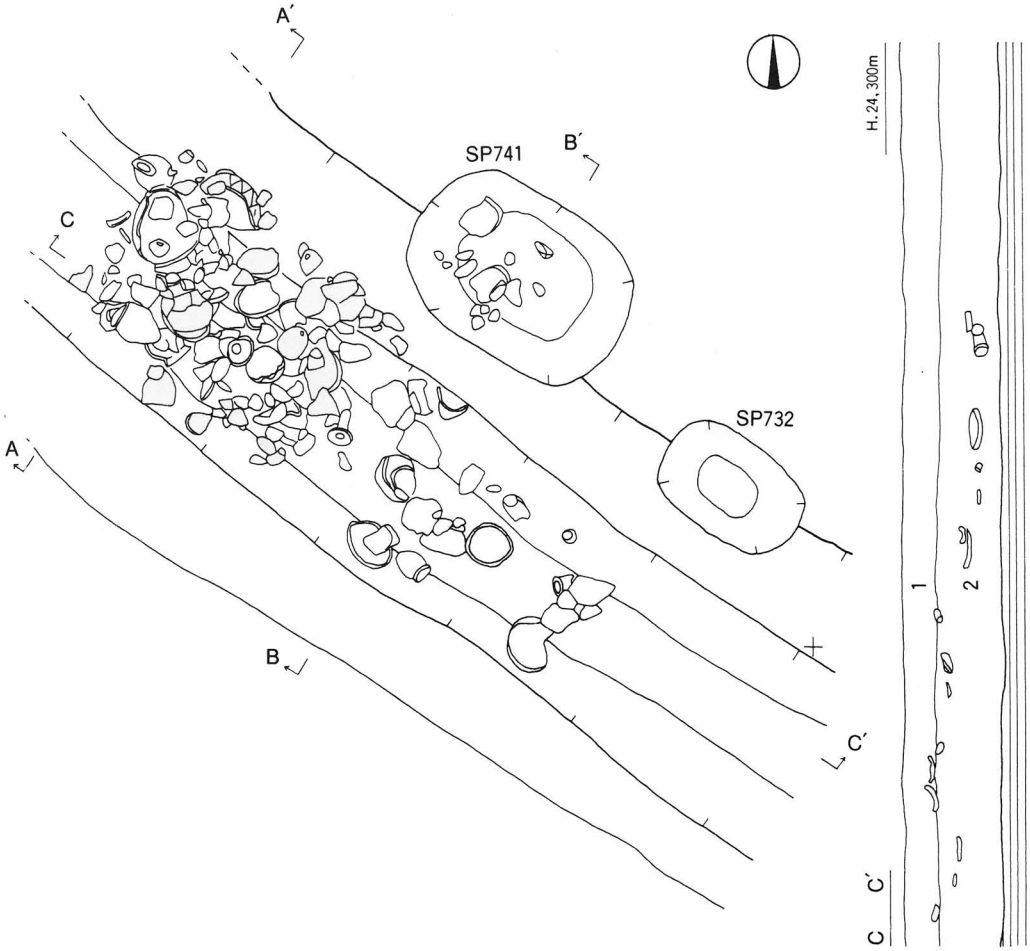
甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、支脚形土器が出土している。

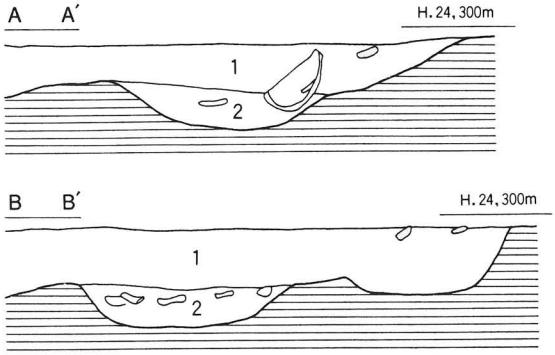
593～606は甕形土器である。器形は長胴、平底、短く外反する口縁部をもつものである。593～596は大型品で、胴部の張りが著しいもの594・595がみられる。597・598は中型品で、598は一部を欠くがほぼ完形品となる。597・598は口縁端部を水平近くに強く折り曲げるものである。599～602は小型品である。599はほぼ完形品で、底部は平底であるが丸みをもつ。

603～606は底部片で、いずれも平底である。605・606は小さい平底で、胴部下半にふくらみをもつものである。607～620は壺形土器である。607～612は複合口縁壺である。607・608は接合部は面となり、609～611は稜となる。611は小型で完形品である。口縁部下半に2条1組の工具による長い刻目をもち、異質な加飾方法となる。613は大型品の底部片で、複合口縁壺になるものと思われる。底部外面に、鳥足状の沈線文がみられる。614は短く外反する口縁部をもつ中型壺である。器壁が厚く粗製である。615・616は広口壺で、616は口縁部に櫛描波状文をもつ。617・618は細長頸壺である。接合部分がないため別個体として取り扱ったが、同一体である可能性をもつ。619は短頸壺である。短く外反する口縁部と小さく突出する小さい平底をもつ。なお、617～619は器壁が薄く、仕上げも丁寧なものである。620は突出する厚い平底となるもので、壺形土器の底部片と思われるものである。621～633は鉢形土器である。形態には口縁部が外反するものと直口のものがある。621～625は外反口縁のものである。621は大型品で平底となる。625は小型品で、丸みをもつ小さい平底となる。626～630は直口口縁のものである。626・627ともにわずかに上げ底となる。630は胴部が外傾するもので、口径に対し器高が高いものである。



第113図　SX1上部出土遺物実測図

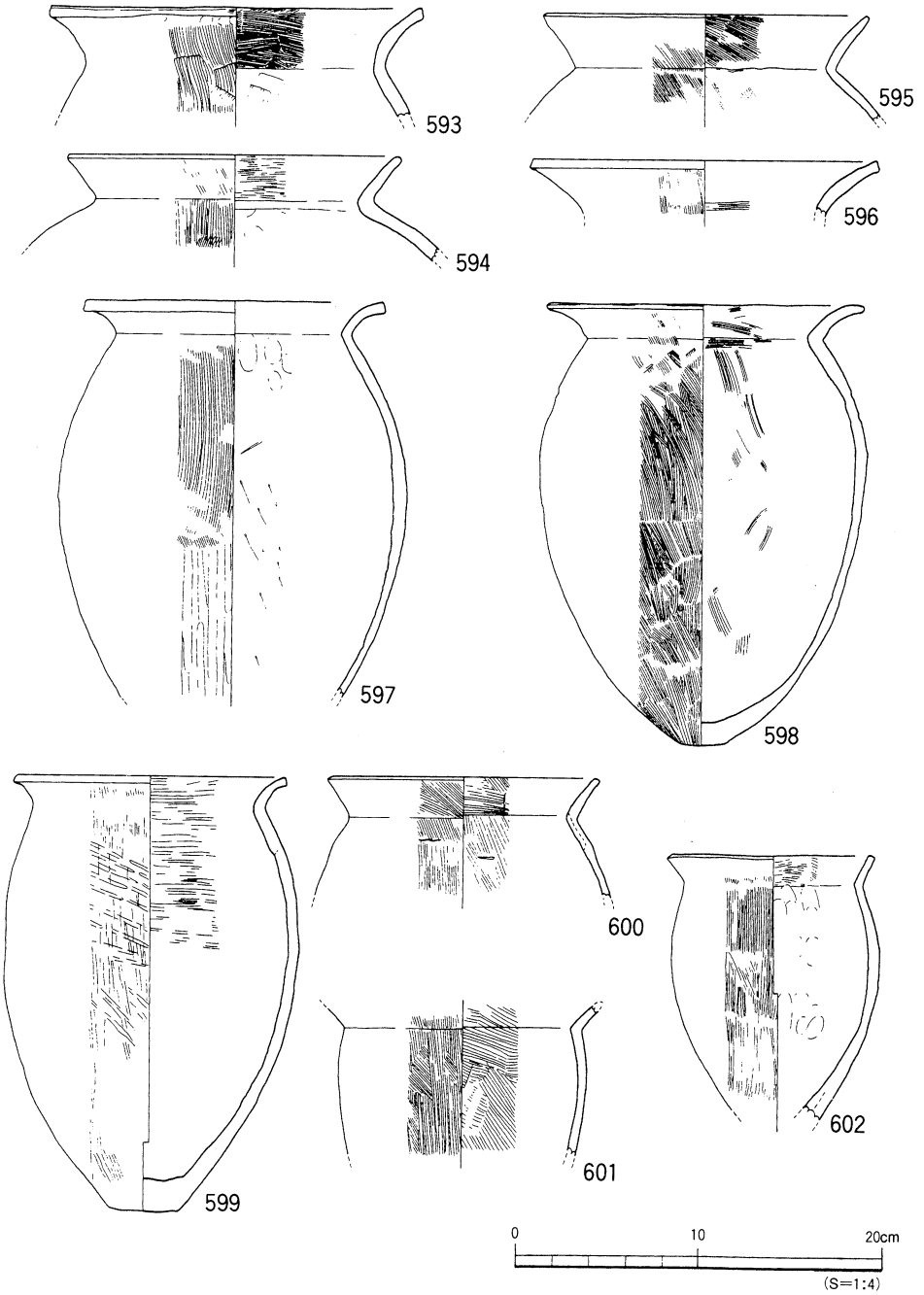




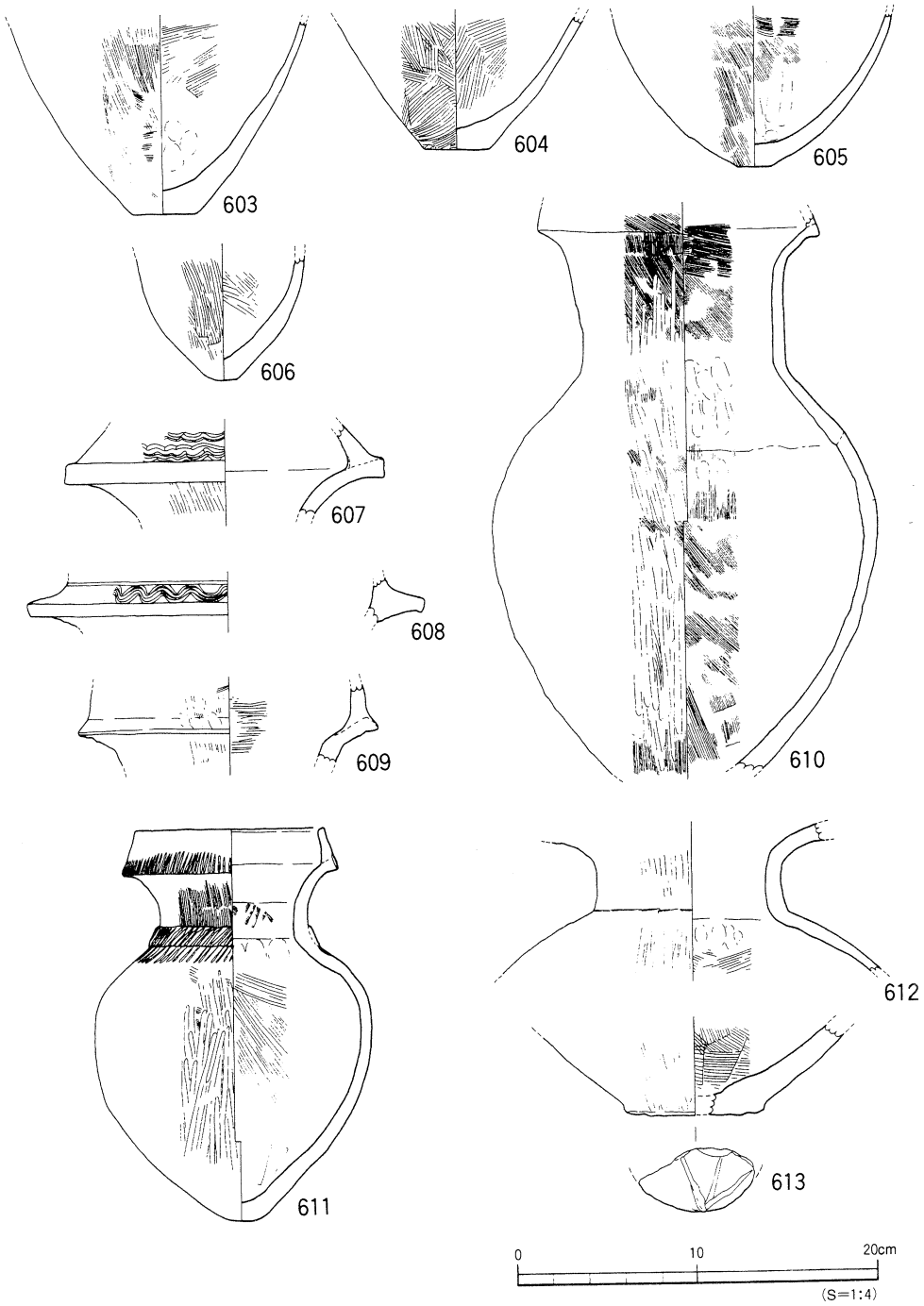
1. 灰色粗砂(SR2埋土)
2. 茶褐色粘質砂(SD401埋土)
○ SX2上部出土品

0 1m
(S=1:30)

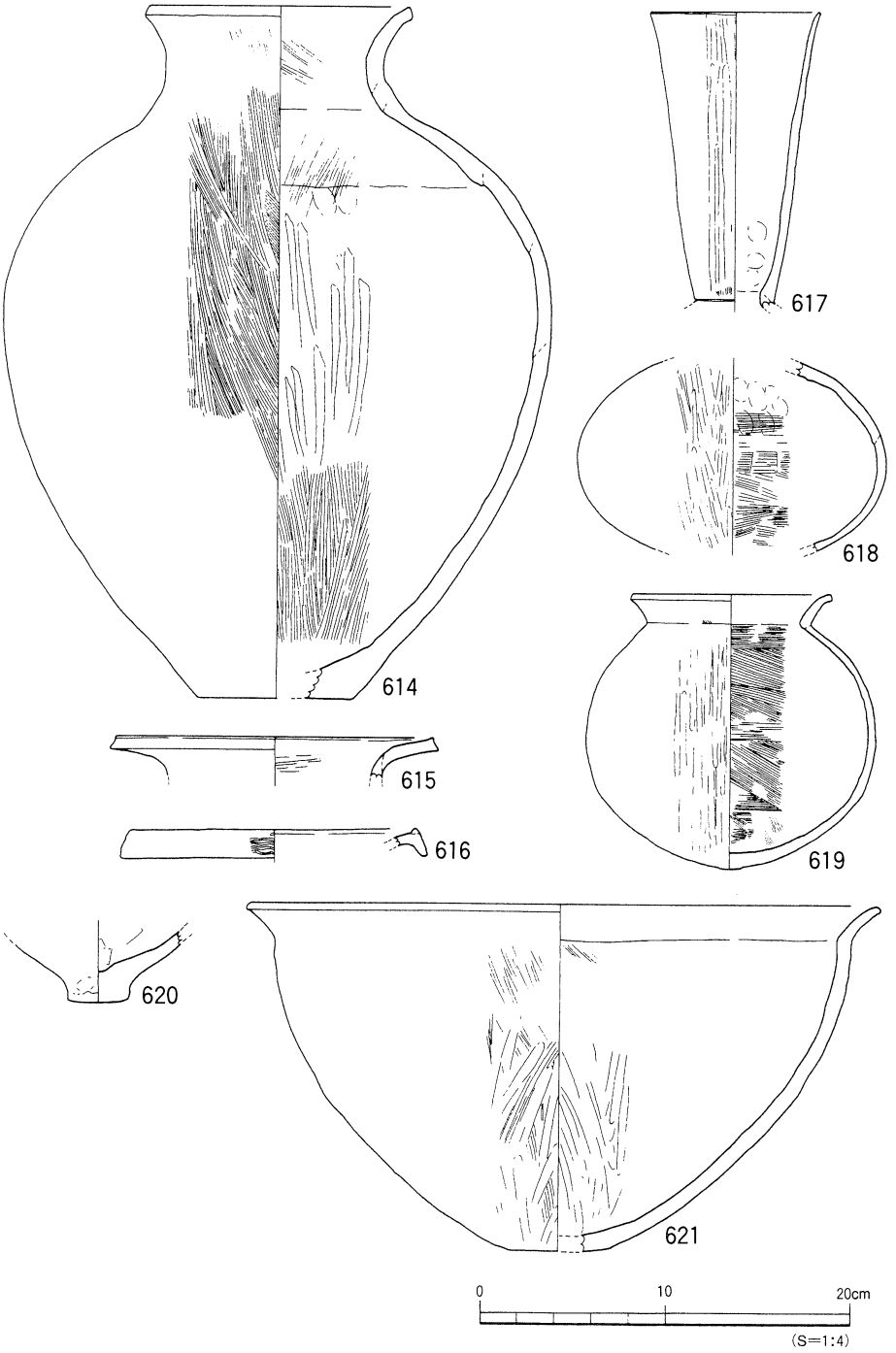
第114図　SX2測量図



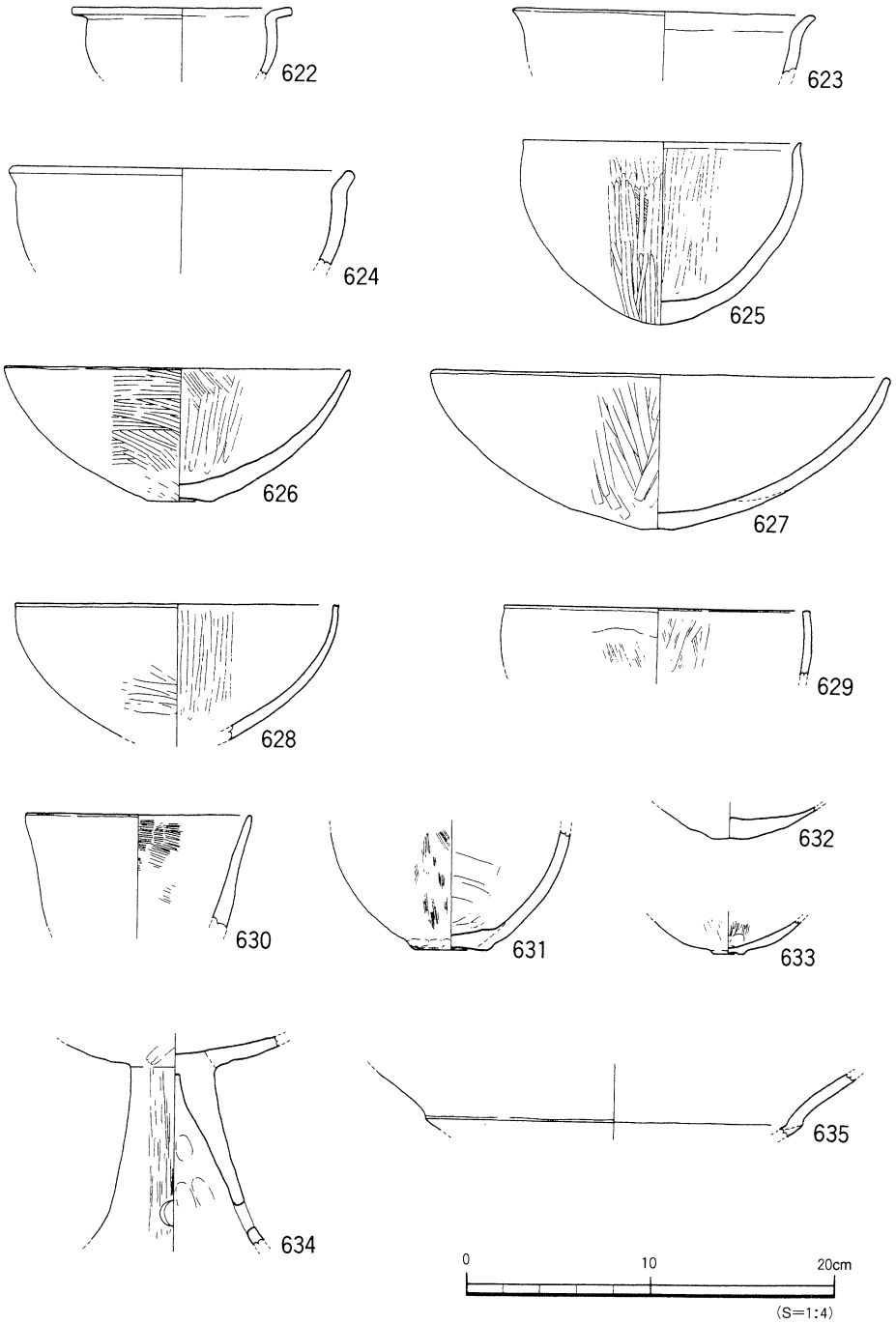
第115図　SX2下部出土遺物実測図(1)



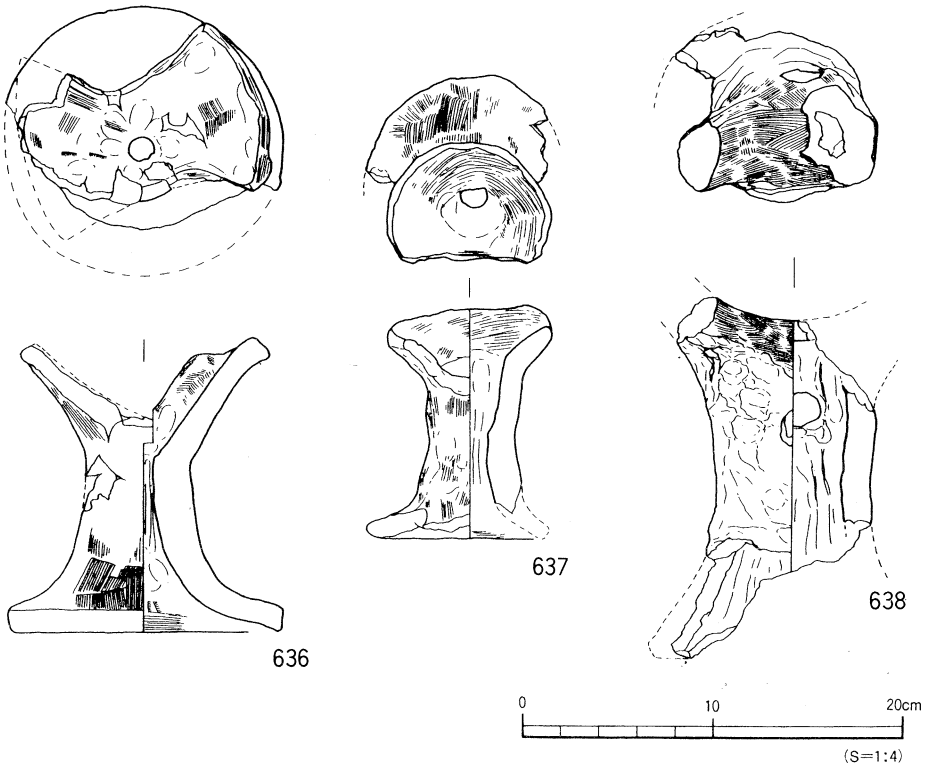
第116図　SX2下部出土遺物実測図(2)



第117図　SX2下部出土遺物実測図(3)



第118図　SX2下部出土遺物実測図(4)



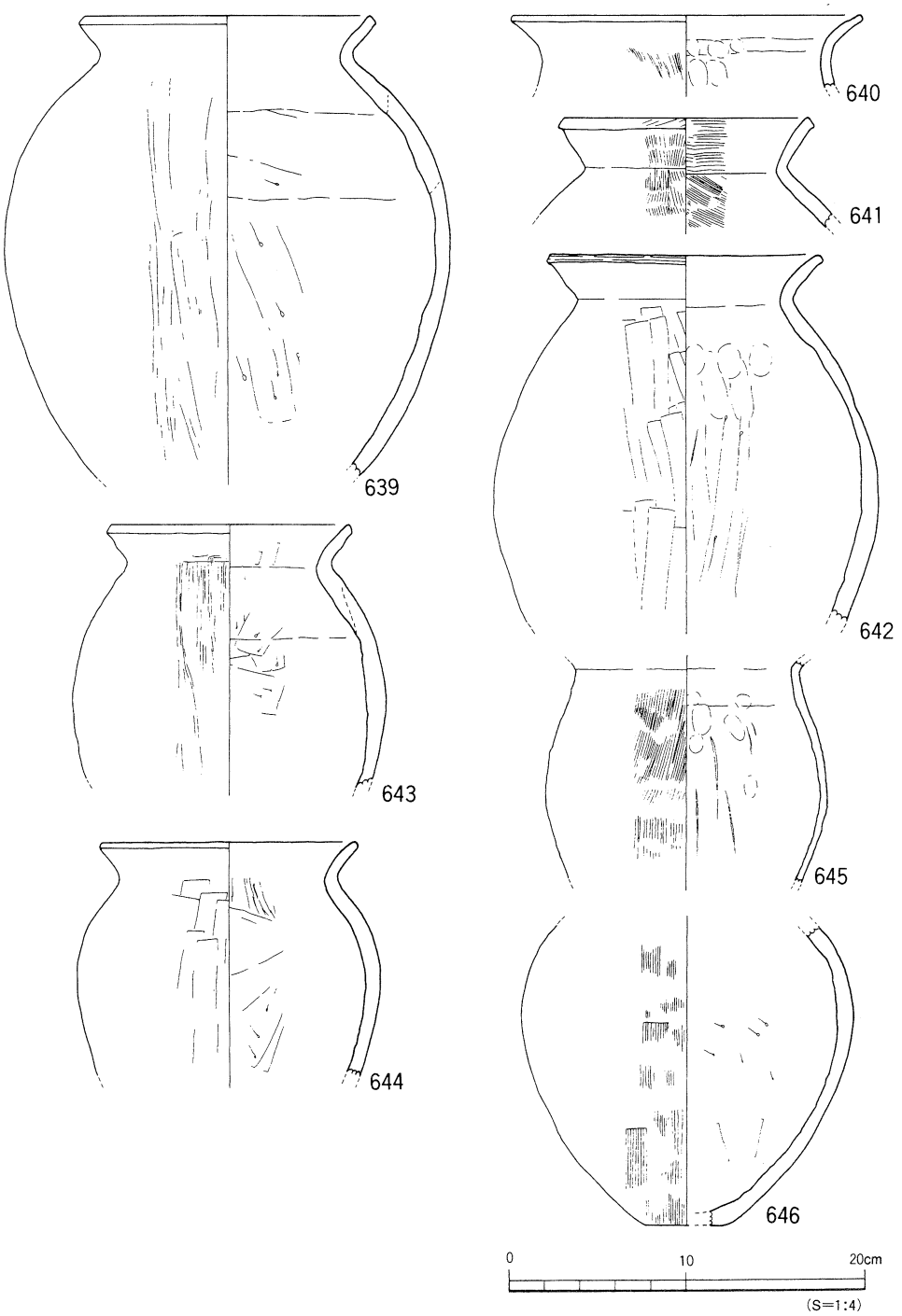
第119図　SX2下部出土遺物実測図(5)

631～633は鉢形土器の底部片である。いずれもわずかに上げ底となる。634・635は高坏形土器である。634は脚部、635は坏部である。635は坏部と口縁部の接合部が段となるものである。636～638は支脚形土器である。体部は中空となる。636・637は受部が「U」字状に傾斜するものであり、636は傾斜部を2方向、637は1方向に傾斜部をもつ。638は受部に突起を2ヶもつものである。前・後面に円孔を1ヶもっている。

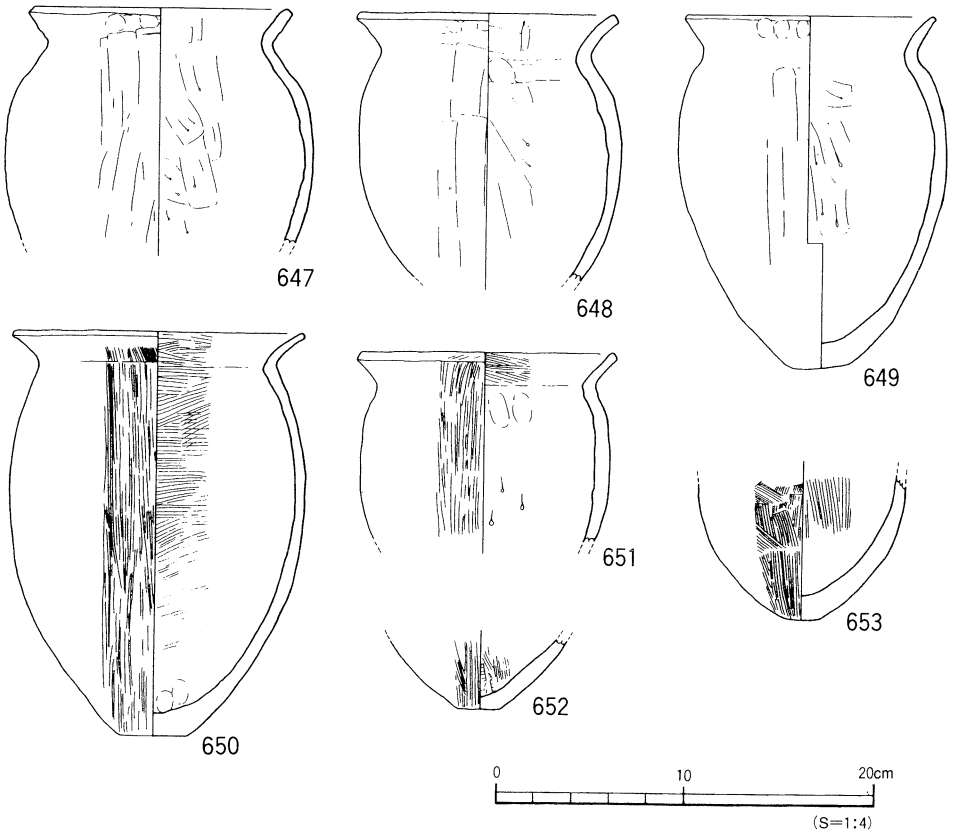
ＳＸ２上部出土遺物（第120～123図、図版56）

甕形土器、壺形土器、鉢形土器、器台形土器、分銅形土製品が出土している。

639～653は甕形土器である。形態は長胴、平底、短い口縁部をもつものである。639～646は中～大型品である。639は器壁が厚く、重いものである。640は著しく口縁部が長いものである。645は器壁が薄く、641～646のなかでは異質である。647～653は小型品である。650・652・653は内面が刷毛目で仕上げられ、他はケズリ痕を残すものである。653底部は丸みをもつが平底である。654～664は中～大型品の壺形土器である。654～662は複合口縁壺となるものである。接合部は654～656は面、657～659は稜となる。



第120図　SX2上部出土遺物実測図(1)

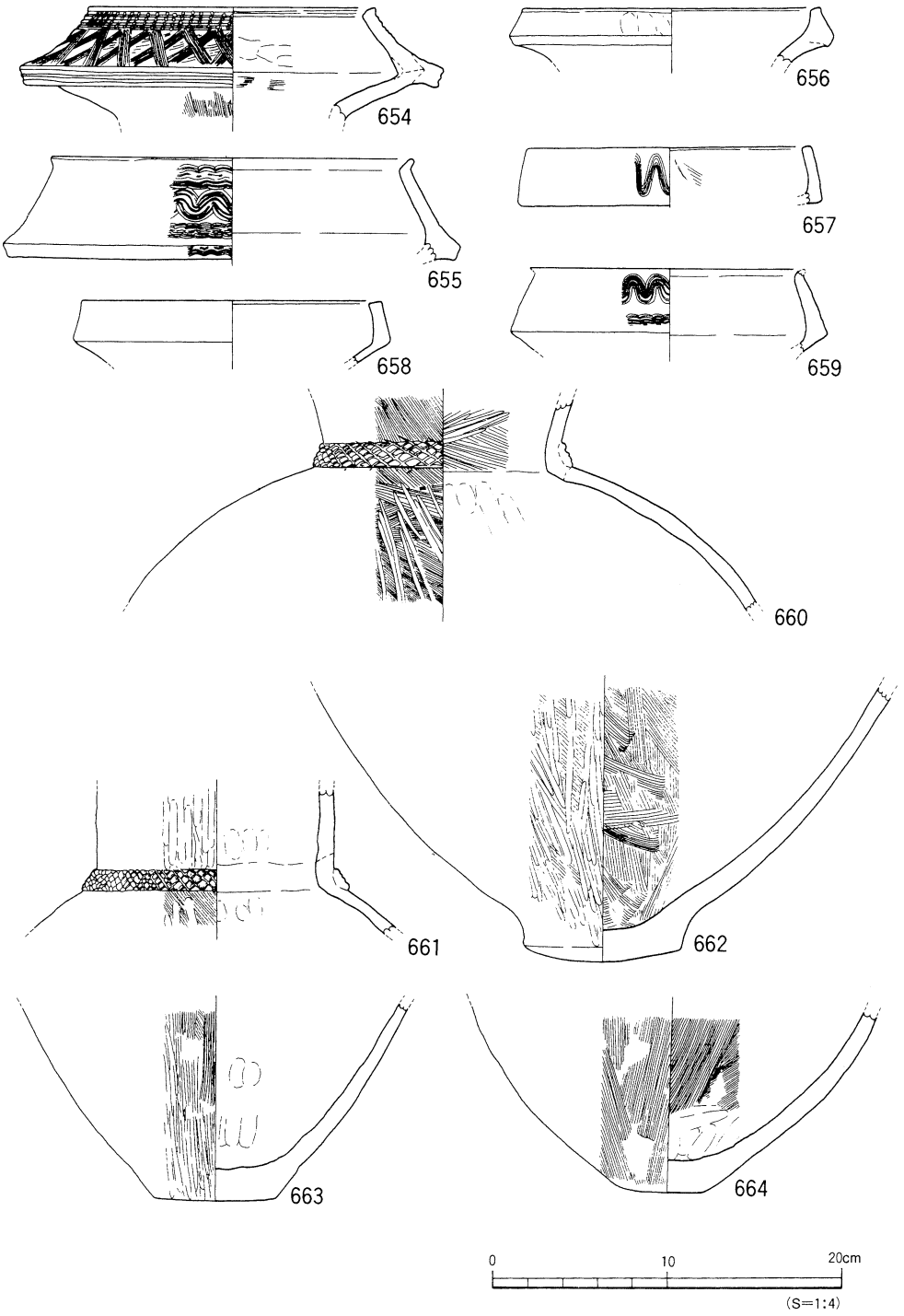


第121図　SX2上部出土遺物実測図(2)

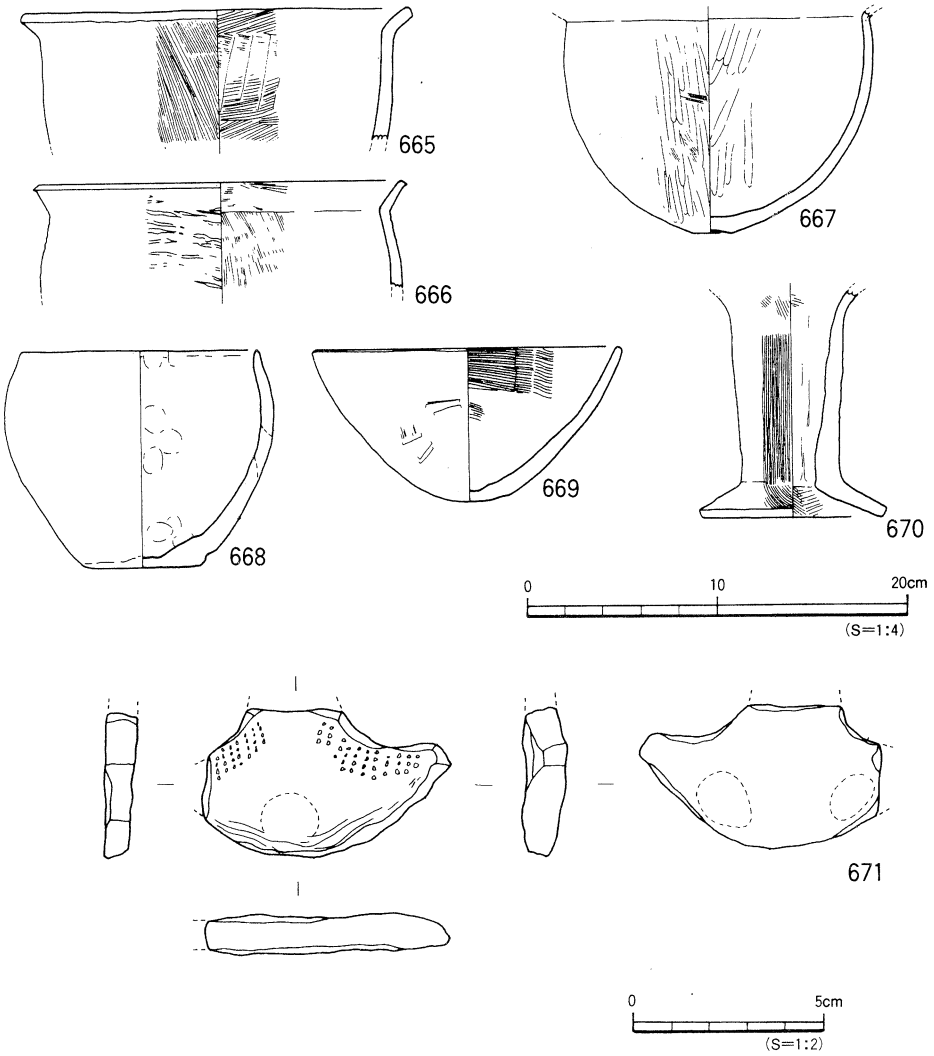
665～669は鉢形土器である。形態には口縁部が外反するものと直口のものがある。667はわずかに上がる底部に、短く外反する口縁部をもつものである。内・外面ともに仕上げはヘラミガキされ丁寧な作りとなる。666は甕形土器になるものかもしれない。668は底部がやや厚く大きな平底で、内湾する口縁部をもつものである。669は丸みをもつ底部は一部に面をもって平底となっている。670は支脚形土器である。円柱状の柱部をもつ。671は分銅形土製品である。器形は円形を呈し、下端面からくびれ部にかけて次第に肥厚する。顔面表現はみられないが、表面のくびれ部から端部にかけ外周に沿って、ヘラ状工具による刺突文を最大4列に、また下端部に2～3条の沈線文を施す。朱彩の痕跡は認められない。

ＳＸ２関連出土遺物（第124図、図版57）

672はＳＸ2から出土したが、出土地点がわからないものである。中型の甕形土器で、やや長い口縁をもつ。673はＳＸ2の下部より出土したと思われるものであるが、特定できなかったものである。中型の甕形土器で長胴、平底となる。



第122図　SX2上部出土遺物実測図(3)

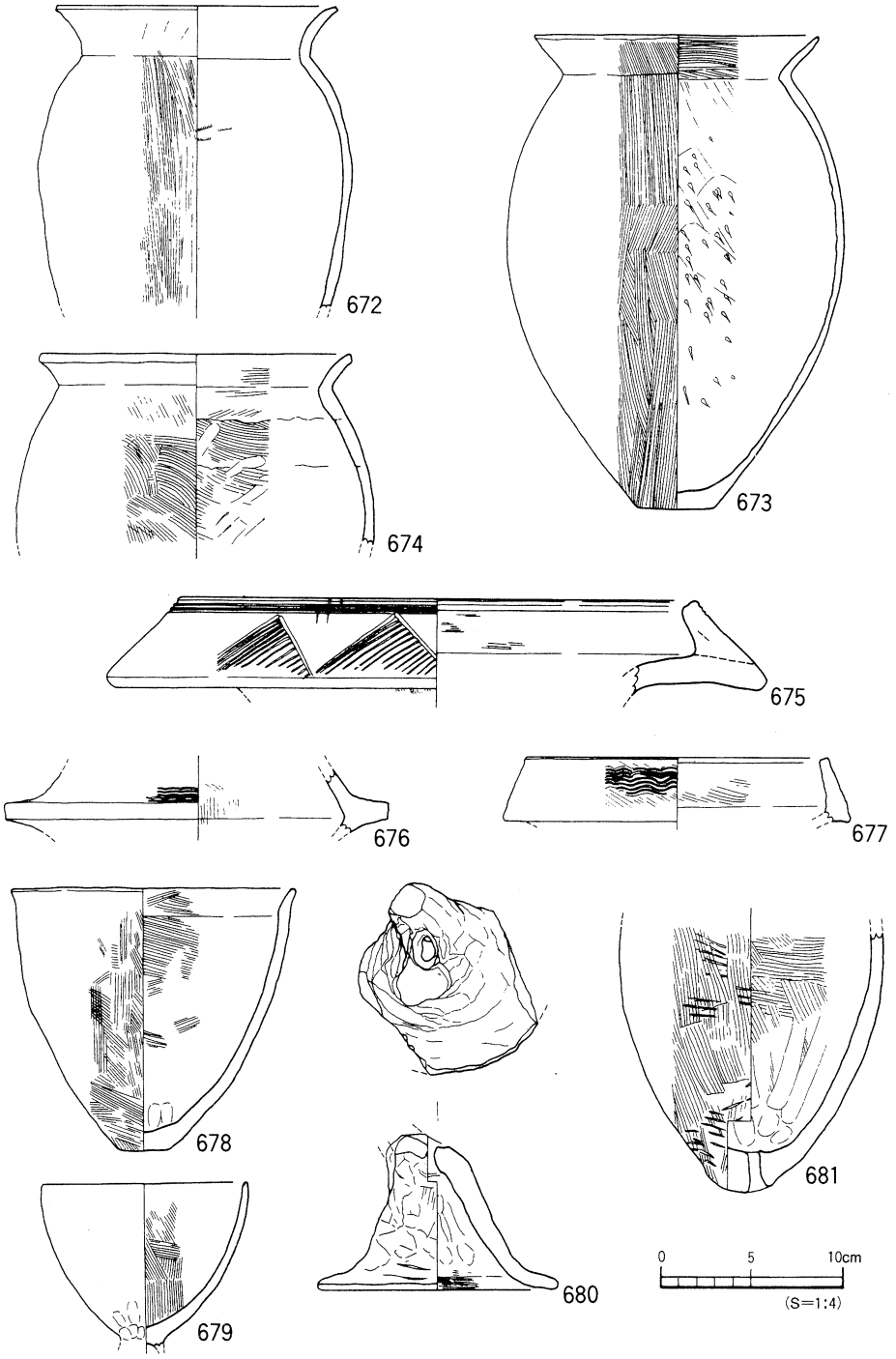


第123図　SX2上部出土遺物実測図(4)

674～681は上部の出土品であるが、出土位置は特定できないものである。674は甕形土器で、胴中位が強く張るものである。675～677は複合口縁壺である。接合部は675・676は面をなし、677は稜となる。678・679は鉢形土器である。678はわずかに外反する口縁部をもつ。679は台付鉢で、脚部が欠損している。680は支脚形土器で、受部に突起を2ヶもつ。体部は中空で、上部に円孔をもつ。681はいわゆるコシキ形土器で、焼成前に円孔が穿たれる。

ピット（第107図、図版22）

流路の基底部及び壁体からは、ＳＲ2・3の埋土である灰色の粗砂が覆うピットを7基検出した。ただし流路に伴うものかはわからない。



第124図　SX2関連出土遺物実測図

基底部からはＳＰ733・734の2基のピットを検出した。ＳＰ733の規模は径50～60cm、深さは約20cm、ＳＰ734は径80cm、深さ20cmを測る。両者ともに埋土は灰色の粗砂で遺物の出土はない。壁体からはＳＰ97・444・731・732・741の5基のピットを検出した。いずれも埋土は暗灰褐色土である。ＳＰ731は径60×90cm、深さ検出面下約40cm、ＳＰ732は径40×60cm、深さ約40cmを測る。両者の埋土は類似するため切り合いは不明である。ＳＰ731とＳＰ732からは完形品を含む良好な状態の遺物が出土した。特にＳＰ731出土の土器片には赤色顔料が付着するものがある。ＳＰ444・733・734・741のピットからは遺物の出土はない。

ＳＰ731・732出土遺物（第125・126図、図版22・57）

682～694はＳＰ731、695はＳＰ732出土遺物である。682・683は甕形土器。「く」の字状口縁で内外面共に刷毛目調整を施す。684～687は壺形土器。684は口縁部が大きく外反し、口縁端部を上方にわずかに拡張する。685・686は複合口縁壺で、686の口縁端面に浅い波状文が巡る。687は完形品である。口縁部は直立気味に立ち上がり、体部の張りは弱い。内外面共に刷毛目調整を施す。688・689は高坏形土器。688は坏部片で、屈曲部で稜をなし、口縁部は外反する。口縁内面にミガキ調整を施す。689は脚部片。径1cm大の円孔を穿つ（焼成前穿孔）。690は器台形土器の口縁部。口縁端部は下方に垂下し、端面に6条の櫛描沈線文を施す。内面はヘラミガキ調整を施す。

691～693は壺形土器の底部。691・692は平底で693はわずかに突出する上げ底を呈する。694は体部片。内外面共に一部赤色顔料が付着する。

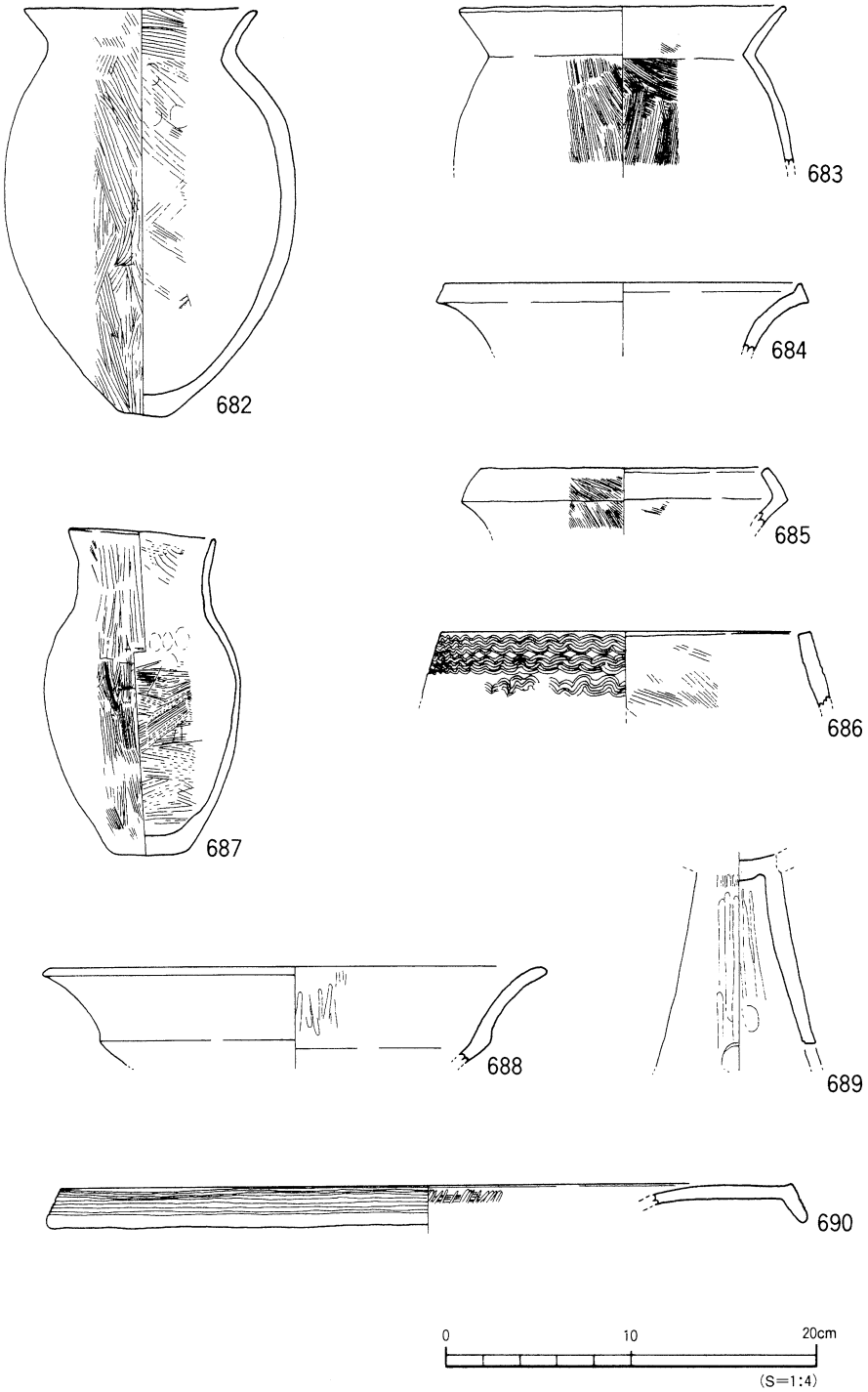
695は甕形土器。「く」の字状口縁で、口縁部は外反する。内外面共に刷毛目調整を施す。

ＳＲ2・3（灰色粗砂）出土遺物（第127～129図、図版58）

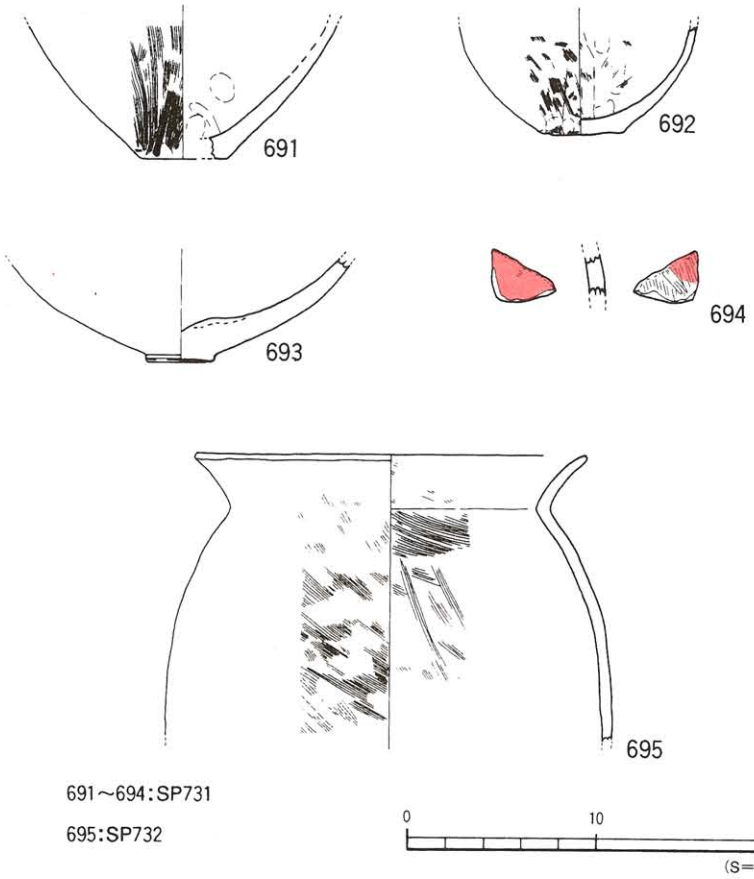
ＳＲ2・3の埋土である灰色の粗砂中からは、土器や石器が出土している。ＳＲ2・3遺物はグリット別に取り上げたが、ここでは大グリット（Ｂ・Ｃ・Ｄ区）ごとにまとめて掲載する。遺物には、Ｂ区からは赤色顔料が付着した壺形土器片や大陸系磨製石器片、Ｃ区ではミニチュア土器や分銅形土製品、石鏃、石庖丁、石斧が出土している（Ｐ287，第269図）。

Ｂ区（Ｂ2・3区）出土遺物（第127図）

696は壺形土器である。長球形の胴部に短く外反する口縁部をもつ。697は壺形土器で、口縁部外面に多条の沈線文をもつ。698は壺形土器片で、Ｍ字状の凸帯をもつ。赤色顔料が付着している。696～698は弥生時代中期から後期前葉までのものと思われる。699は直口口縁をもつ鉢形土器である。器壁が薄く、ヘラミガキされ作りが丁寧なものである。700はＳＸ2の上部にある砂層中から出土した高坏形土器である。内・外面ともにミガキがなされ丁寧な仕上げである。701は柱部が短い高坏形土器の脚部片である。702・703は支脚形土器である。702は中央に貫通孔をもつ。703は受部が一方向だけ高くなっているものである。



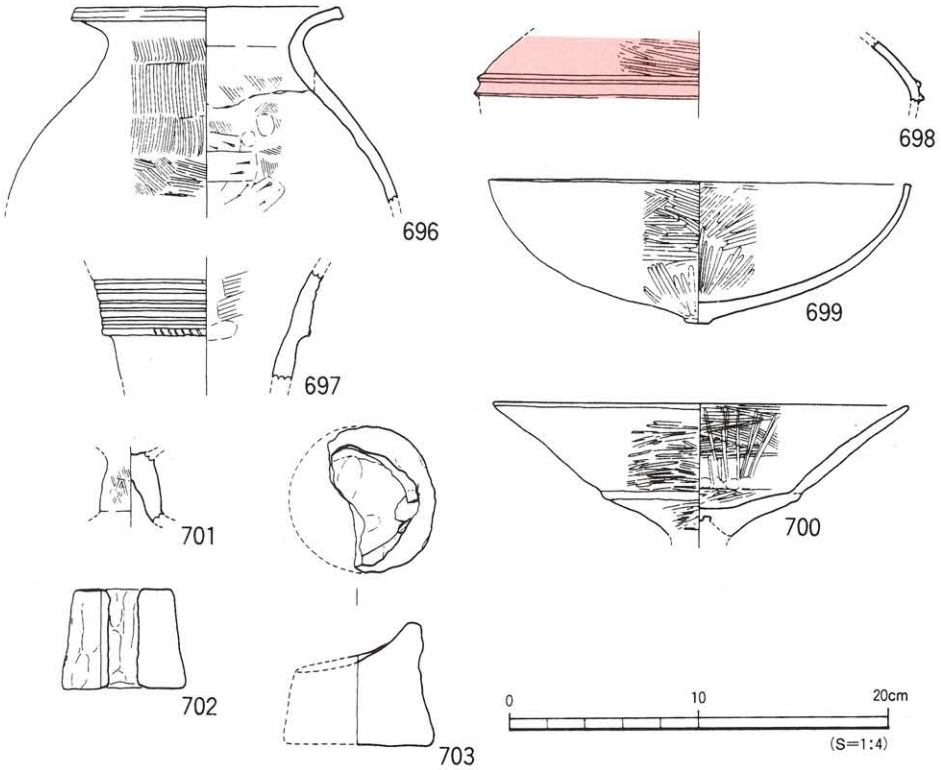
第125図　SP731出土遺物実測図



第126図　SP731・SP732出土遺物実測図

C区（C2～4区）出土遺物（第128・129図）

704・705は甕形土器である。704は完形品である。小さい平底に、短く外反する口縁部をもつ。705は上方に拡張する口縁部をもつものである。口縁外面に2条の浅いナデ凹みをもつ。706・707は複合口縁壺である。接合部は面をもち、706は半截竹管文が施される。707は外反する口縁部をもつもので、器壁が厚く、形態とともに異質である。708・709は広口壺である。709は口縁端面に竹管文をもつ。710は広口壺の頸部を考えたが、定かではないものである。711は壺形土器の胴部片である。M字状凸帯には刻目が施される。712は壺形土器の頸部下半～胴部上半の破片である。肩部に櫛描波状文をもつ。時期は後期と思われるが、施文手法に平野では類例がない。713～717は高坏形土器である。713は坏部片で口縁部と坏底部の接合部に刻目をもつものである。717は柱部片で、接合部に凸帯（羽状の刻目）と多重沈線文をもつ。高坏形土器の坏部と脚部の接合部への凸帯加飾は平野内にはなく、よって外来系のものと思われる。

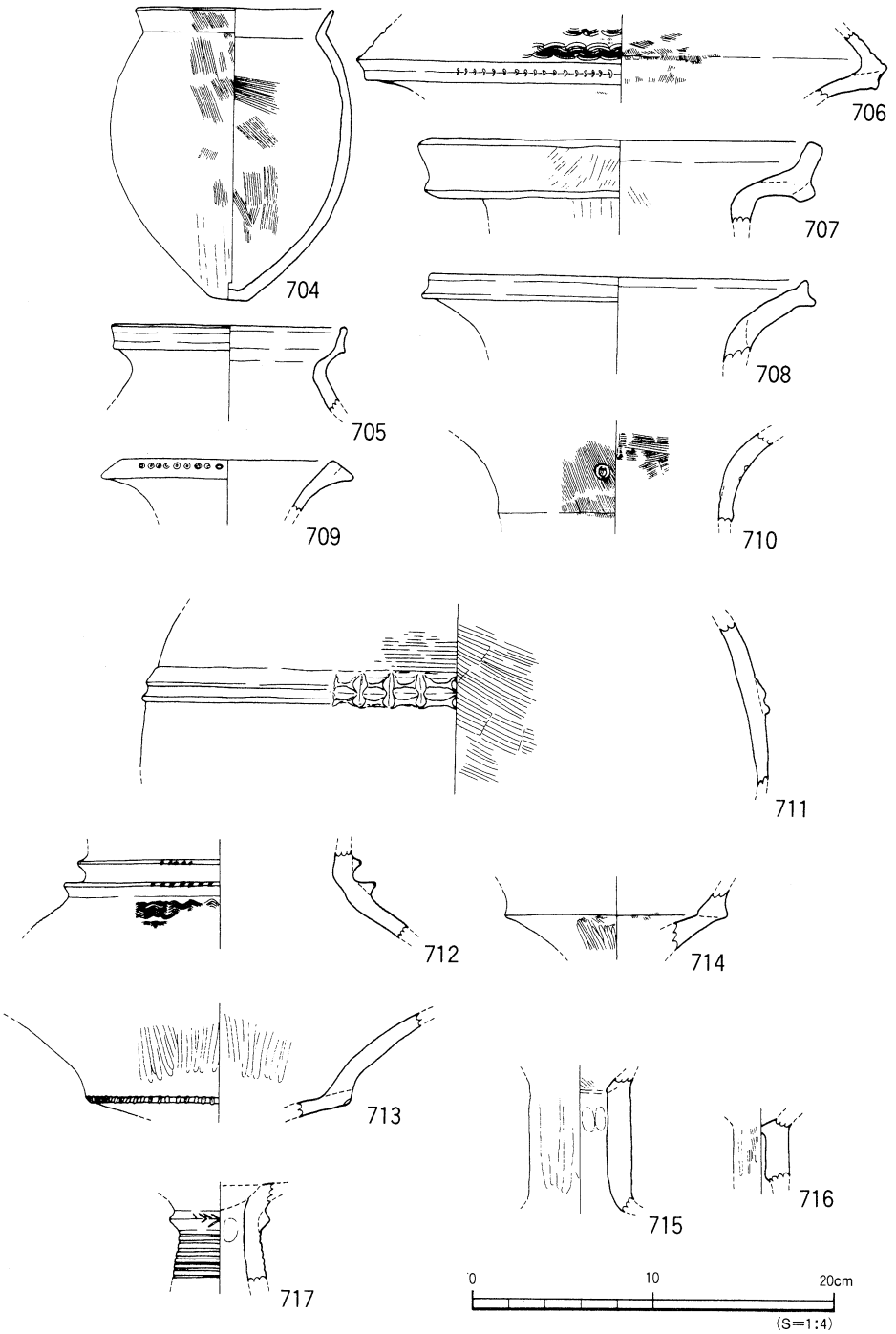


第127図　SR2・3 B区出土遺物実測図

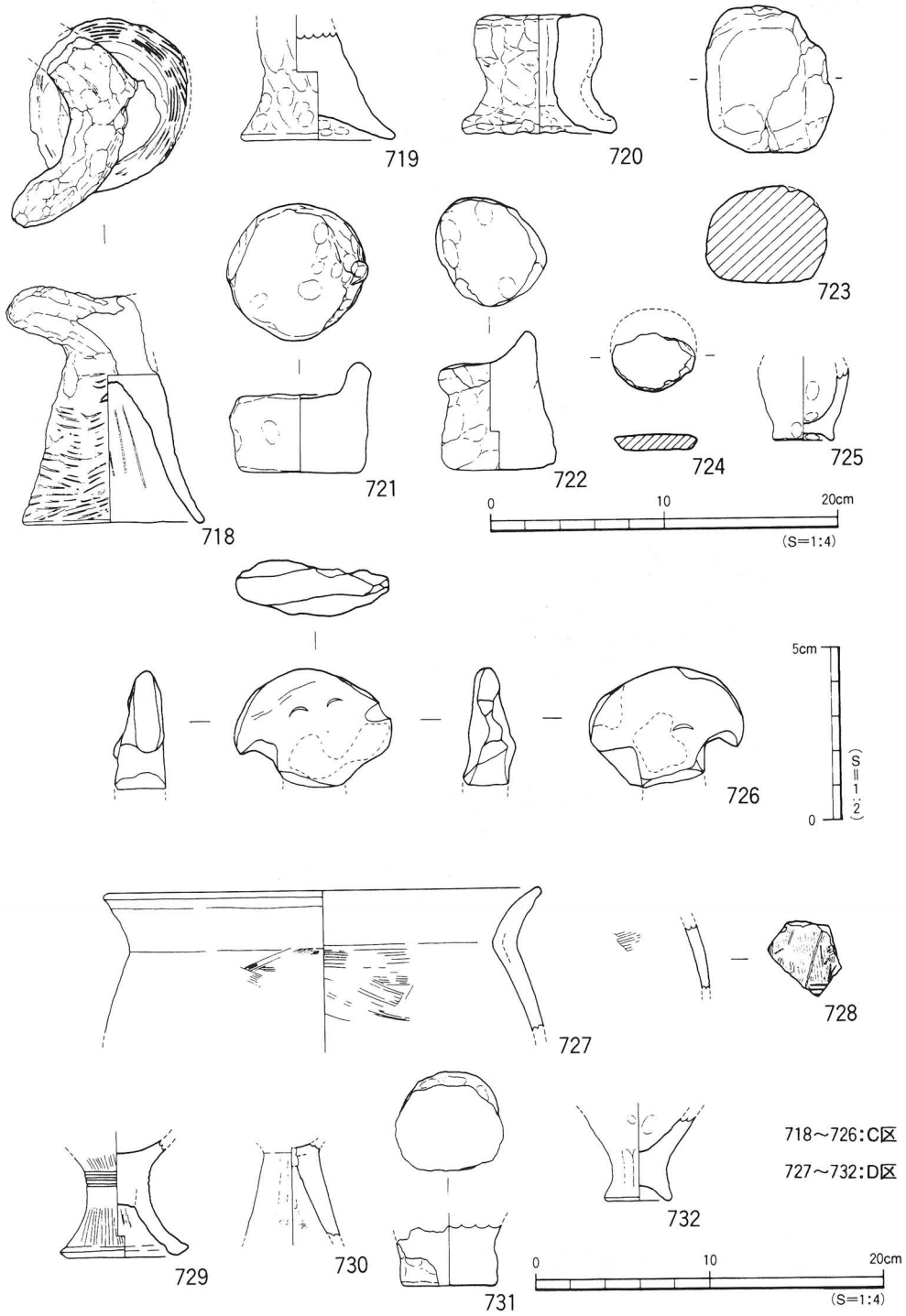
715・716は柱部が円筒状になるもので、裾部が有段になる高坏形土器の破片とみられる。718～722は支脚形土器である。718は受部に突起を2ヶもつもので、背面には小さいつまみ出しがつくものである。719は突起ないし、「U」字状の受部がつくものと思われる。720はくびれをもつ裾部に、中央が中空となるもので数少ない形態のものである。721・722は体部が中実なものである。つまみ状の立ち上がりをもつ。723は拳大の土製品である。用途不明品。724は壺ないし甕形土器胴部の転用品である。現状で半円形を呈している。725はミニチュア品である。726は分銅形土製品である。上半部のみの残存であり、表裏面共に各所に凹みがみられる。表裏面共に目の表現がみられる。目の表現は2箇所ある面と1箇所ある面とがある。これまで、愛媛県下では両面共に顔面表現がある資料は出土していない。特に、くびれ部断面の焼成具合から、焼成前に下半部を欠失していた可能性もある。

D区（D3・4区）出土遺物（第129図）

727は大型の鉢形土器である。728は壺形土器の胴部片で、焼成前の線刻があるが、内容は判断つかない。729は弥生中期後半の高坏形土器の脚部片である。730は高坏形土器の脚部片である。731は支脚形土器で、体部が中実のものである。器高が低いものである。732はミニチュア品で、甕形土器を模したものと思われる。



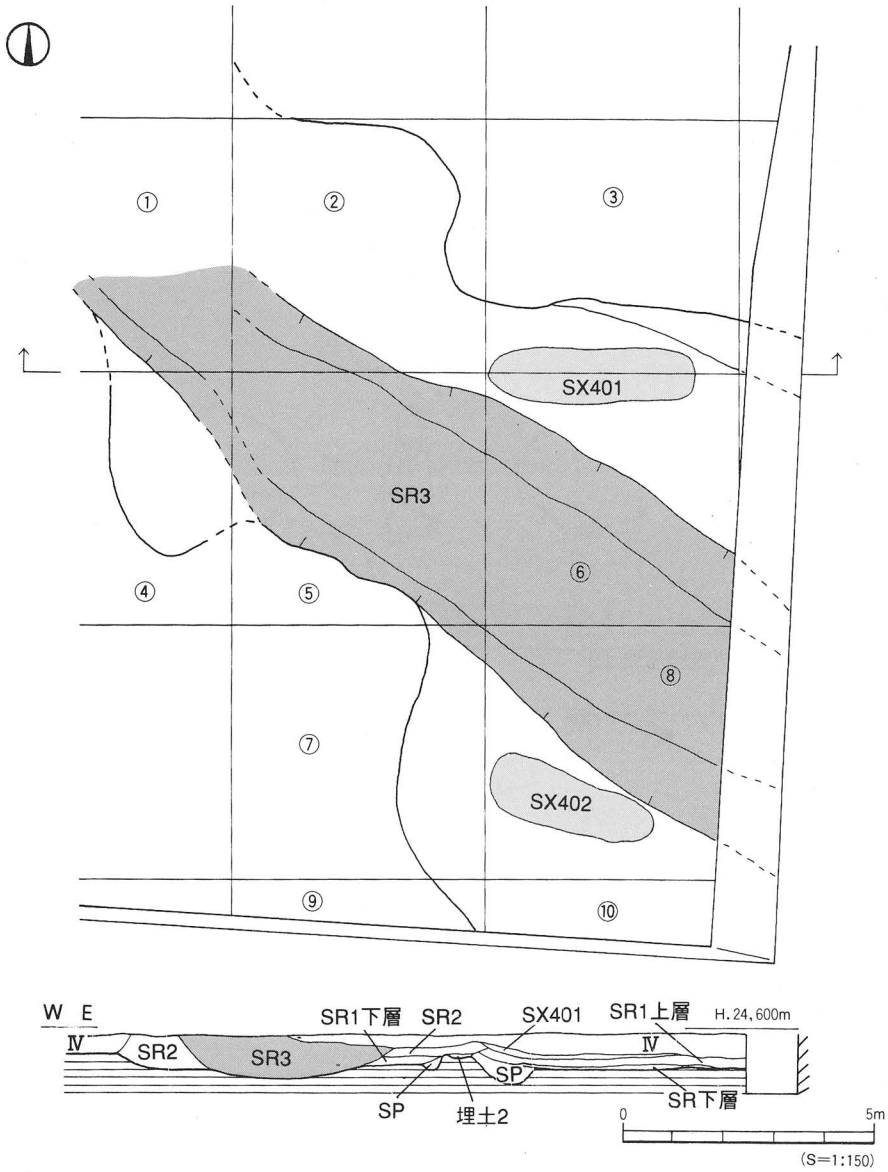
第128図　SR2・3C区出土遺物実測図



第129図　SR2・3C・D区出土遺物実測図

(2) 南東部（E6～H8区）の調査

調査区南東部E6～H8区においては3条の流路と溝1条（ＳＤ402)、土器溜り2基（ＳＸ3・ＳＸ5)、ピット3基、流路上部にて第Ⅴ層に類似した土層（ＳＸ401・402）を検出した。調査は、E6～H8区の地域を5mの小グリット（①・②・③……⑩区と呼称）に細分し進めた。最初に、流路上部の③・⑥区と⑧区にて検出したＳＸ401、ＳＸ402について調査を行った（第130図)。



第130図　SR3・SX401・SX402検出状況図

ＳＸ４０１・４０２（第130図）

ＳＸ401は③・⑥区、ＳＸ402は⑧区で検出した。ＳＸ401は1×3mの範囲で検出され、弥生時代後期末に比定される土器類と扁平片刃石斧（Ｐ301，第281図）などが出土した。

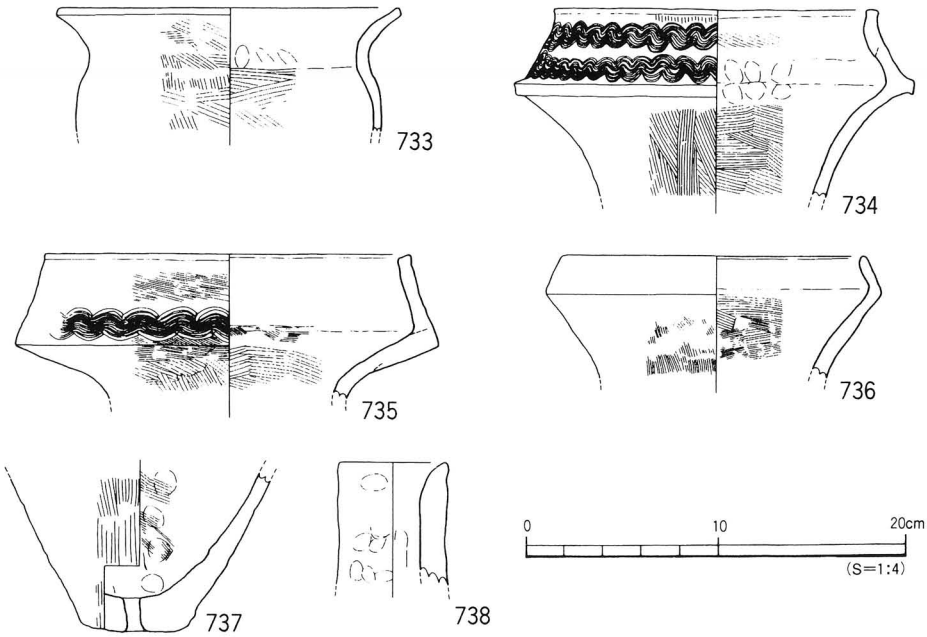
ＳＸ402は1×2.5mの範囲で検出され、弥生時代後期末に比定される土器と石庖丁、大陸系磨製石器片（Ｐ301，第281図）などが出土した。ＳＸ401と402は出土遺物や堆積状況が類似することから、本来はひとつの土層であり、おそらく、ＳＲ3によりＳＸ401と402の間は、削平されたものと考えられる。ただし、ＳＸ401・402の性格は、遺構埋土か包含層か、不明である。

ＳＸ４０１出土遺物（第131図、図版59）

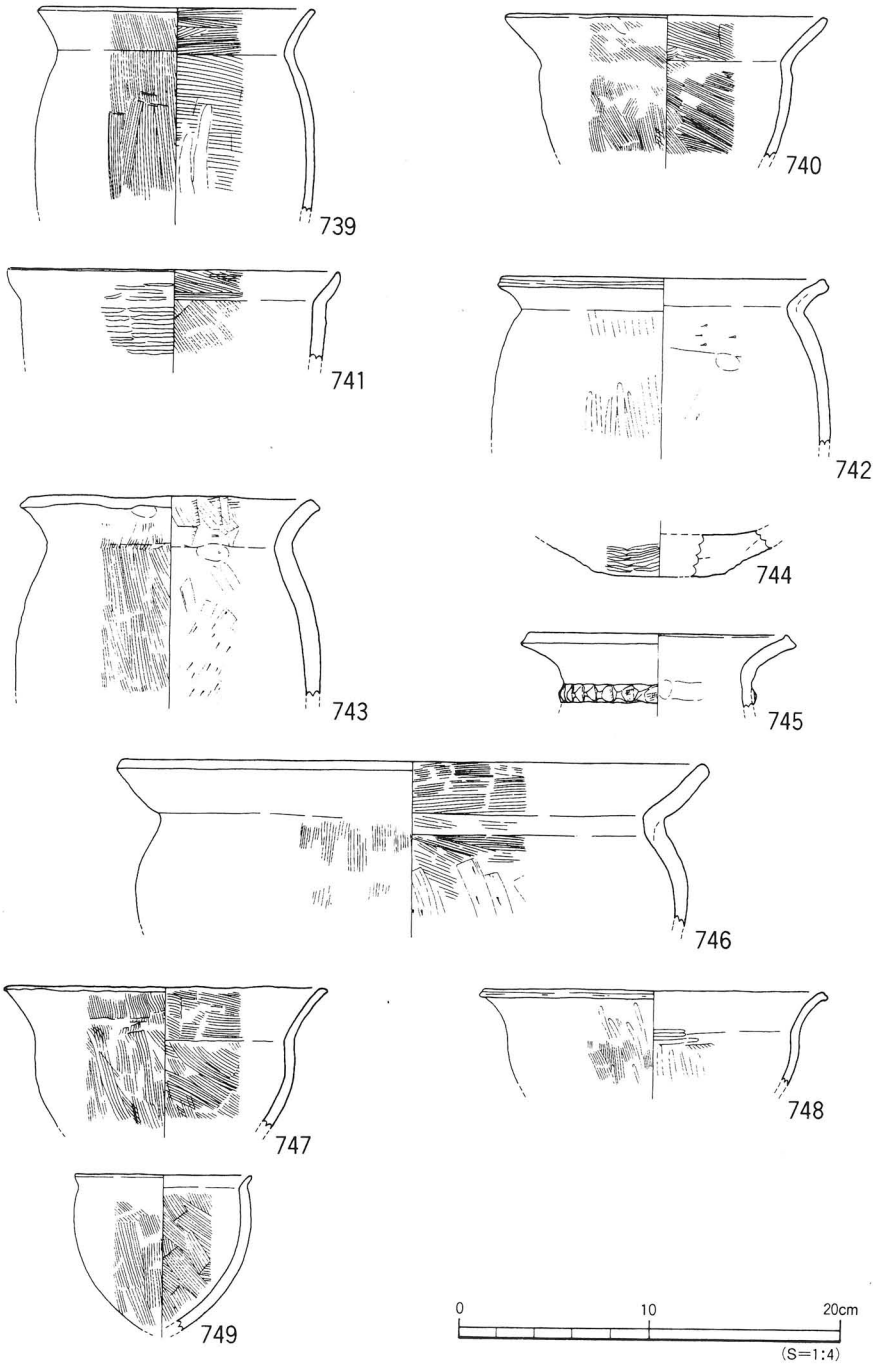
733は甕形土器、734～736は壺形土器で、複合口縁壺である。737は焼成前に穿孔されたコシキ形土器である。738は筒状の土製品で、器壁が厚いものである。

ＳＸ４０２出土遺物（第132図）

739・742・743は甕形土器である。形態は胴部が長胴となるものである。745は壺形土器である。古い時期のものである。740・741・746～749は鉢形土器である。746は大型品、その他は中・小型品である。749は短い口縁部をもつもので、底部は小さい平底をもつものとなる。



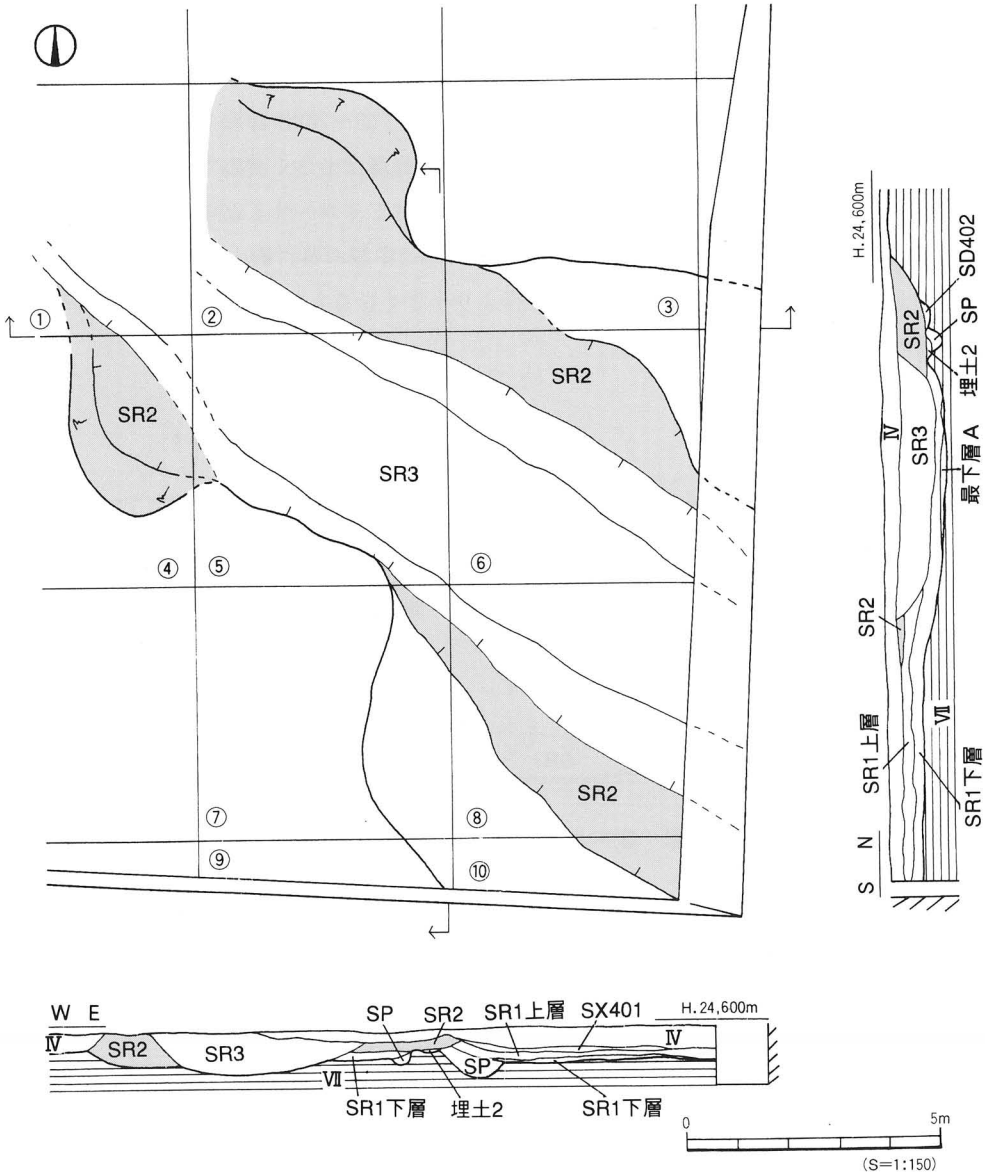
第131図　SX401出土遺物実測図



第132図　SX402出土遺物実測図

ＳＲ３（第133図、図版23）

ＳＲ３は調査区北西部から続く流路であり、ＳＸ401・402を完掘後、流路の調査を行った。まず、調査区東壁及び調査区内に設けたＢ・Ｃ・Ｅベルトの土層観察により、ＳＲ3と思われる灰色粗砂の範囲を設定して掘り下げを行った（第133～135図）。北西部から中央部の調査ではＳＲ2・3の埋土の違いを判断しかねたため、ＳＲ2・3を同時に掘り下げたが、南東部では



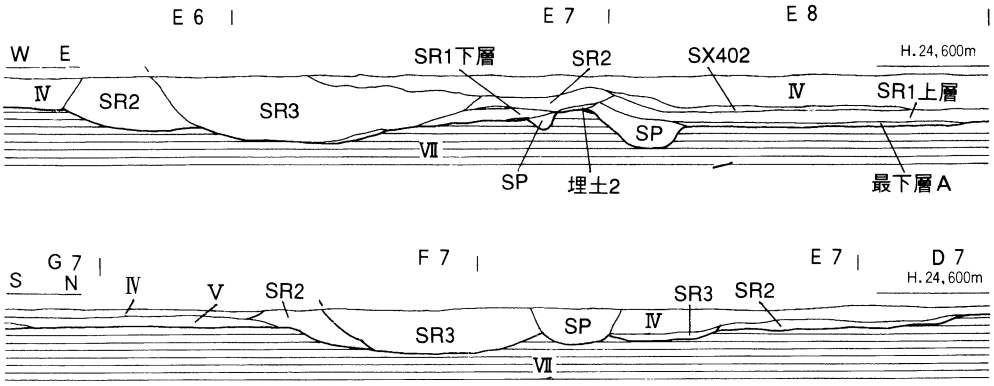
第133図　SR2・SR3検出状況図

ＳＲ2とＳＲ3の底面のレベルが異なることや、埋土の違いが比較的容易に区別できたため、ＳＲ3のみを掘り下げることができた。ＳＲ3は①区から⑧区にかけて検出し、規模は最大検出幅は5m、深さは最深部で約70cmを測る。流路底面は東から西に向けて緩やかな傾斜をなす。埋土は灰色の粗砂で、2～3mm大の砂粒が一直線上に層をなして混入している。堆積状況からＳＲ3は比較的急な流れの流路であったと考えられる。

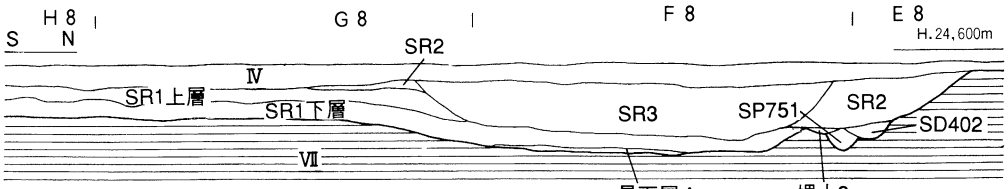
遺物は①・④・⑤区において弥生時代後期末から古墳時代初頭の土器がまとまって出土している。この中には外来的要素の強い土器も含まれている。その他の地区では遺物の出土は少量であった。

ＳＲ３（⑤区）出土遺物（第136・137図、図版59）

750～752は甕形土器である。750・751は比較的長い口縁部をもつものでる。753～757は壺形土器で、753～755は複合口縁壺、756は広口壺である。758～762は鉢形土器である。口縁部が外反するもの758と直口口縁のもの759・760がある。底部は小さく突出するものがみられる。763・764は高坏形土器である。763は柱部から裾部にかけてヨコヘラミガキをする。765・766は小型器台で、丁寧なヨコミガキがされる。767・768は中型の器台形土器である。769～776は支脚形土器である。769・770は受部径が底径より小さくなるものである。771は中実の柱部に、椀状の受部をもつ異形品である。

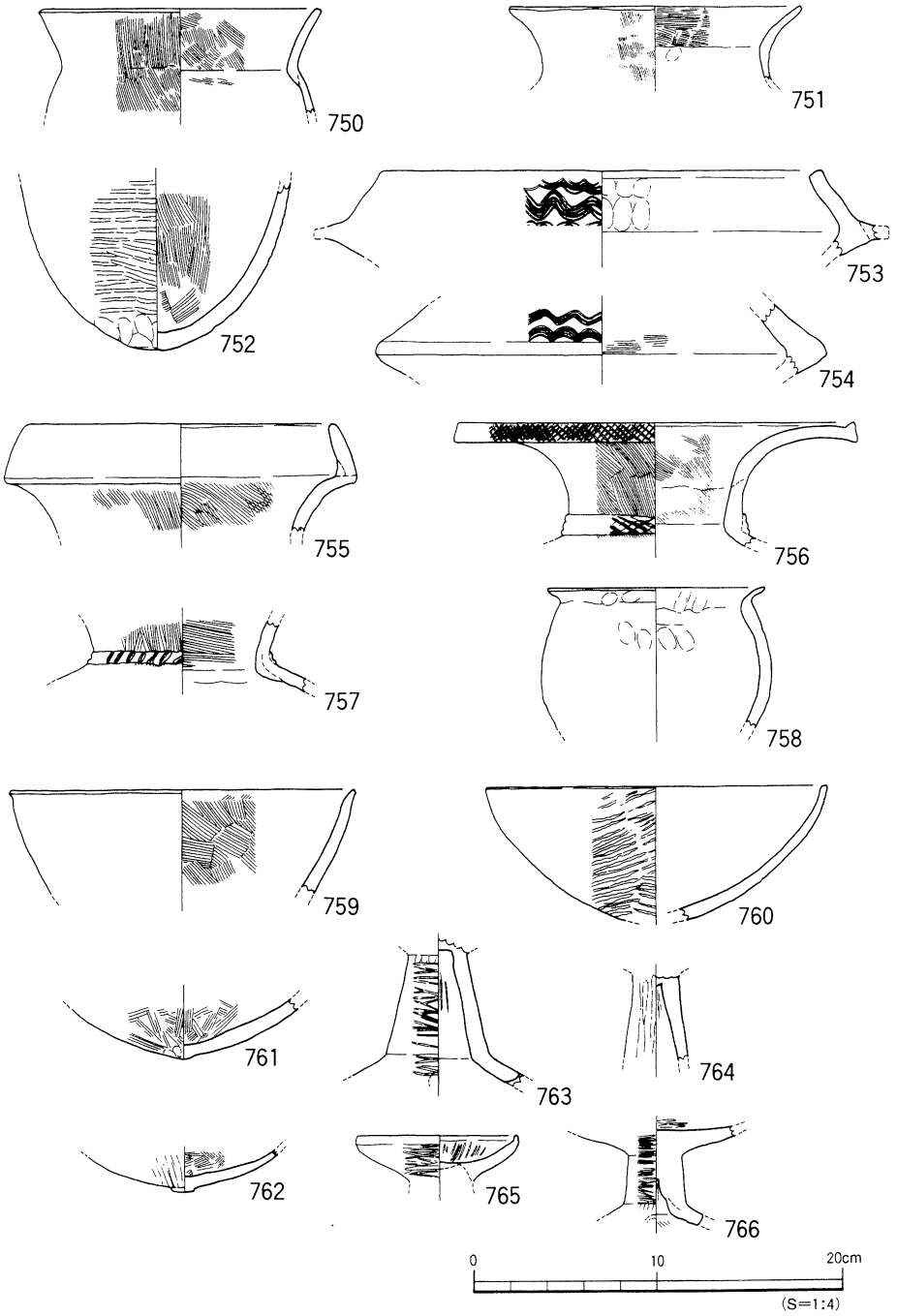


第134図　Ｂベルト［上］Ｃベルト［下］土層図

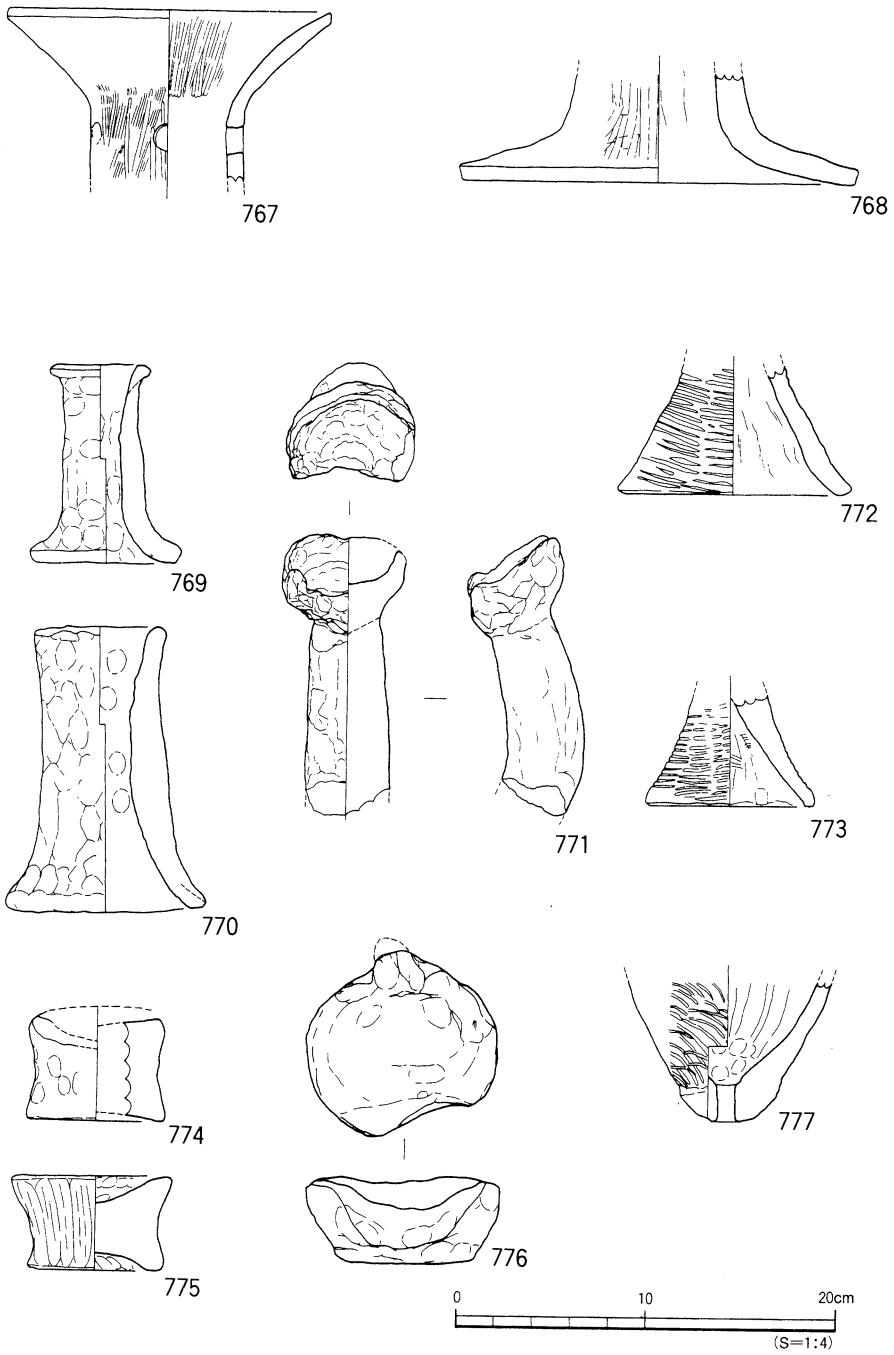


Ⅳ　暗灰褐色土　SR3　灰色粗砂　最下層Ａ　明灰色砂
Ⅴ　褐色土　SR2　灰色粗砂　埋土2　明灰色砂
Ⅶ　黄褐色粘質土　SR1上層　褐色粘質土
SR1下層　暗灰褐色土

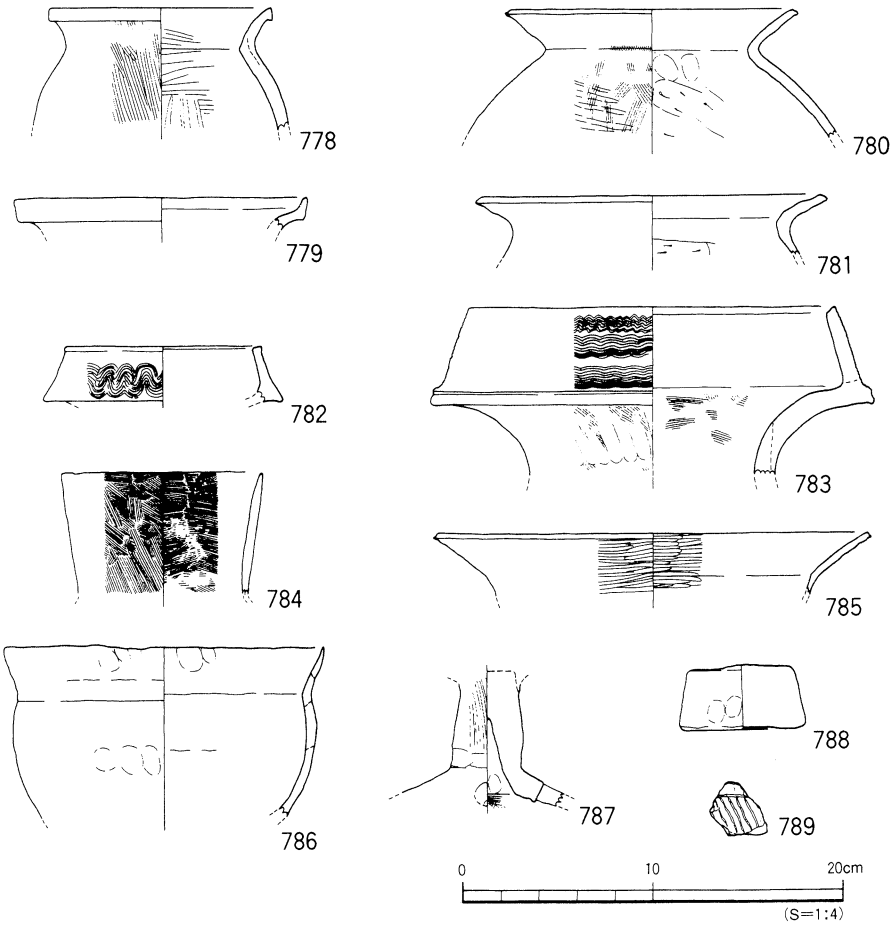
第135図　Ｅベルト土層図



第136図　ＳＲ３（⑤区）出土遺物実測図（1）



第137図　ＳＲ３(⑤区)出土遺物実測図(2)



第138図　ＳＲ3(④区) 出土遺物実測図

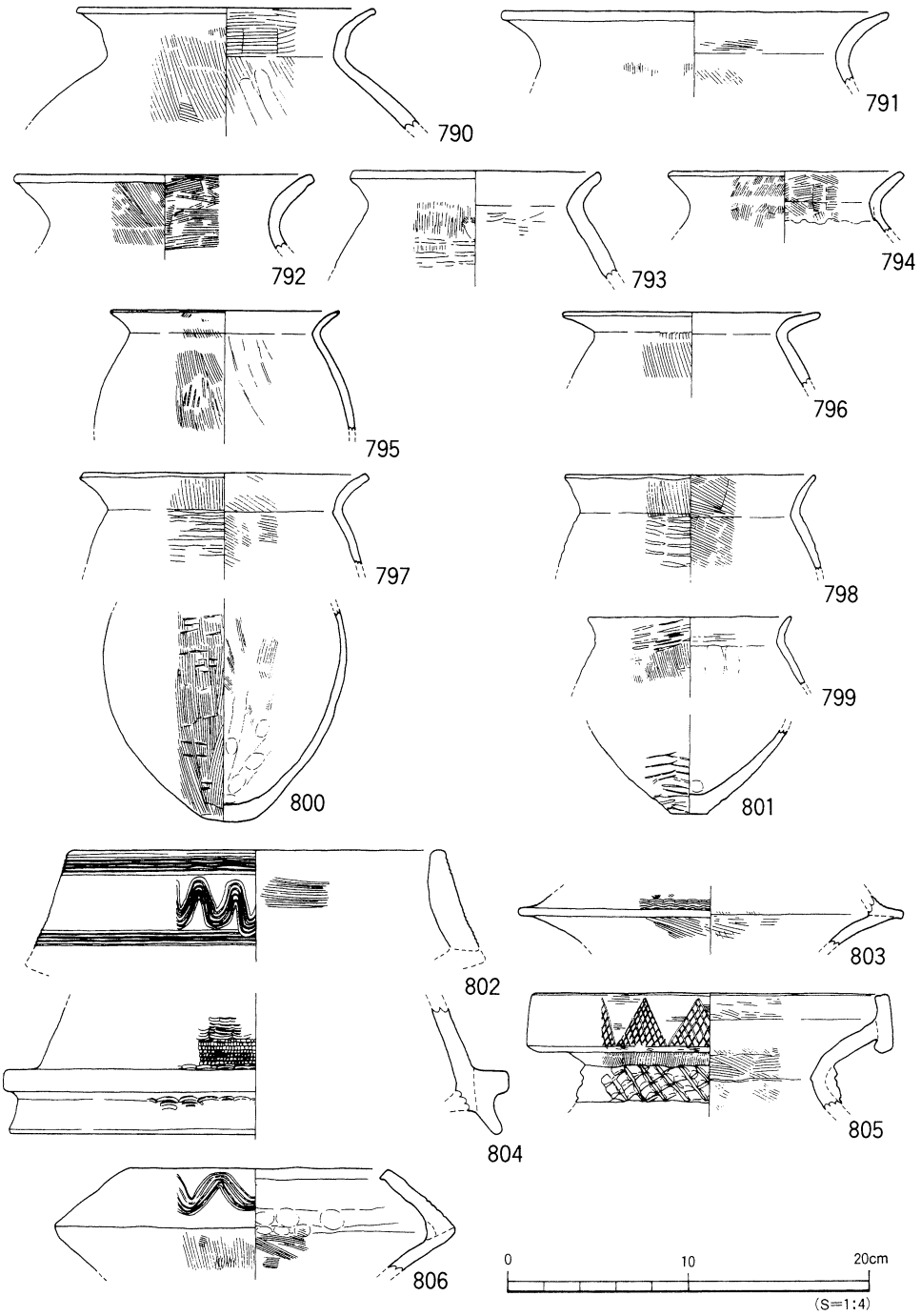
772・773は裾部にタタキ痕を顕著に残すものである。774～776は器高が低く、中実のものである。776は受部の一方向に突出部をもつ。777はいわゆるコシキ形土器である。

ＳＲ３（④区）出土遺物（第138図、図版59）

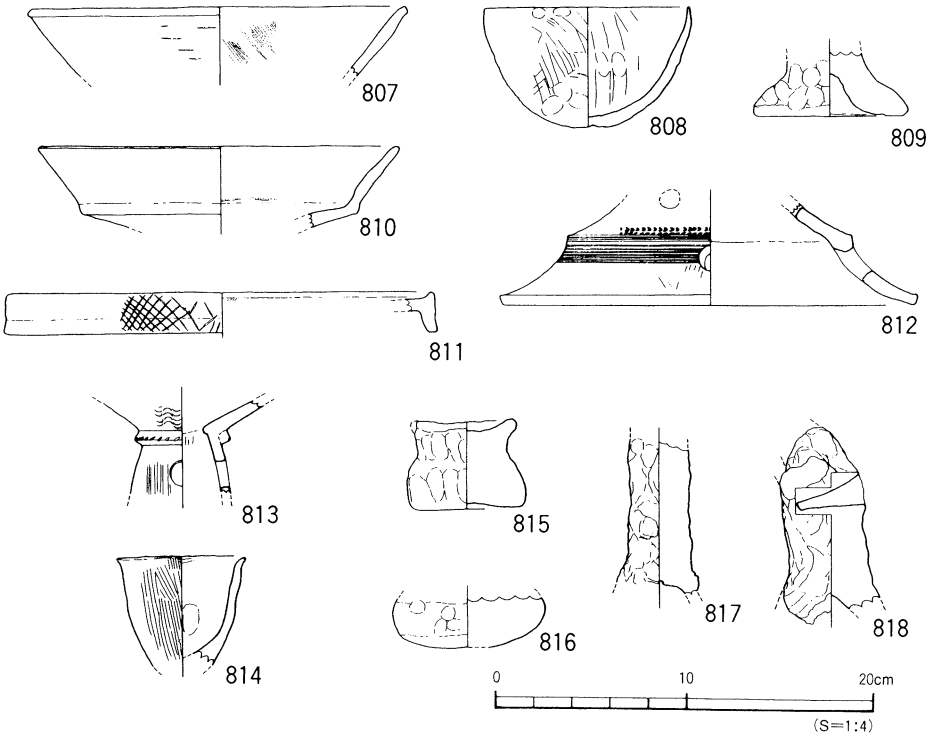
778～781は甕形土器である。780・781は口縁端部が面をなし、内面にケズリ痕をもつ。782～784は壺形土器で、782・783は複合口縁壺、784は長頸壺である。785・786は鉢形土器で、785は長い口縁部、786は内湾ぎみに立ち上がる口縁部をもつもので、785・786とも器壁が薄い。787は高坏形土器で、短い柱部に、大きくひらく裾部をもつものである。788は支脚形土器で、器高が低く中実のものである。789は胴部片で、ヘラ描きの文様がみられる。

ＳＲ３（①区）出土遺物（第139・140図、図版60）

790～801は甕形土器である。形態は胴部に膨らみをもち長球形を呈するものである。タタキ調整痕が胴下半部にも顕著にみられるものもある。また、口縁端部が細先するものが多い。



第139図　ＳＲ３（①区）出土遺物実測図（1）



第140図　SR３(①区)出土遺物実測図(2)

802～806は壺形土器で複合口縁部をもつものである。804は口縁接合部以外に突出部をもつ異形品である。805は口縁部が下方に垂れ、直立するものとなっている。807～809は鉢形土器である。808は丸い底部に直口口縁をもつものである。809は台付鉢の台部である。810～813は高坏形土器である。810・811は坏部片で、811は柱部がエンタシス状を呈するものとなる。813は坏部と柱部の境に凸帯をもち、坏部下位に半截竹管文をもつものである。器壁は薄く、色調もほかのものと異なり、外来的要素が強いものである。814はミニチュア品で、鉢形土器を模したものである。815・817・818は支脚形土器である。817は細い中実の柱部となる。

ＳＲ２（第133図、図版23～25）

ＳＲ2は調査区北西部から続く流路で、①区から⑩区にかけて検出した。規模は最大検出幅は10m、深さは最深部で約60cmを測る。流路底面は東から西に向けて緩やかな傾斜をなす。埋土は灰色の粗砂で、明灰色の微砂がしま状に混入している。堆積状況からＳＲ3に比べるとＳＲ2はゆるやかな流れの流路であったと考えられる。

遺物は弥生時代後期末に比定される土器類と、石器では石庖丁、石斧、石錘などが出土している（P298・299，第278・279図）。

調査は完形品に近い遺物がＳＲ2①～⑥区の上部にまとまって出土したため、北半部（①～⑥区）と南半部（⑦～⑩区）に分けて進めることにした。

以下、調査工程に沿って南半部（⑦～⑩区）と北半部（①～⑥区）に分けて遺物の出土状況を主に報告を行う。

ＳＲ２南半部（⑦～⑩区）の調査

南半部では⑧・⑩区及び⑦区の一部でＳＲ2を検出した。⑧区ではＳＸ402によりＳＲ2は部分的に削平されている。遺物は、土器が⑧区にまとまって出土しているが、そのほとんどが破片である。その他の地区では遺物の出土は少量であった。出土物には、ジョッキ形土器の握手部分と思われるものや土製の勾玉が含まれている。

なおＳＲ2を完掘すると、南半部ではＳＲ1の上層を検出した。

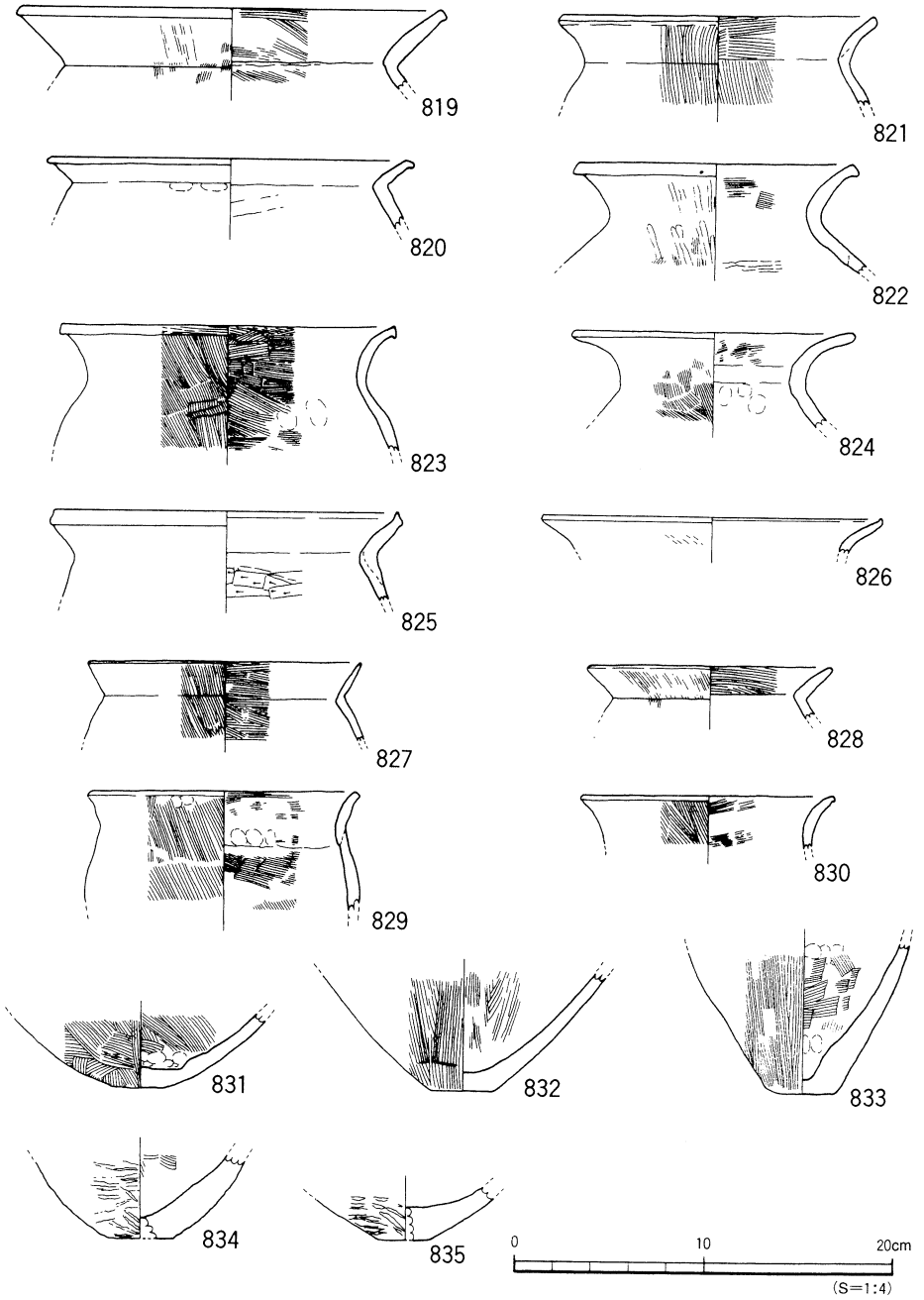
ＳＲ２南半部（⑧区）出土遺物（第141～144図、図版61）

甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、支脚形土器が出土している。

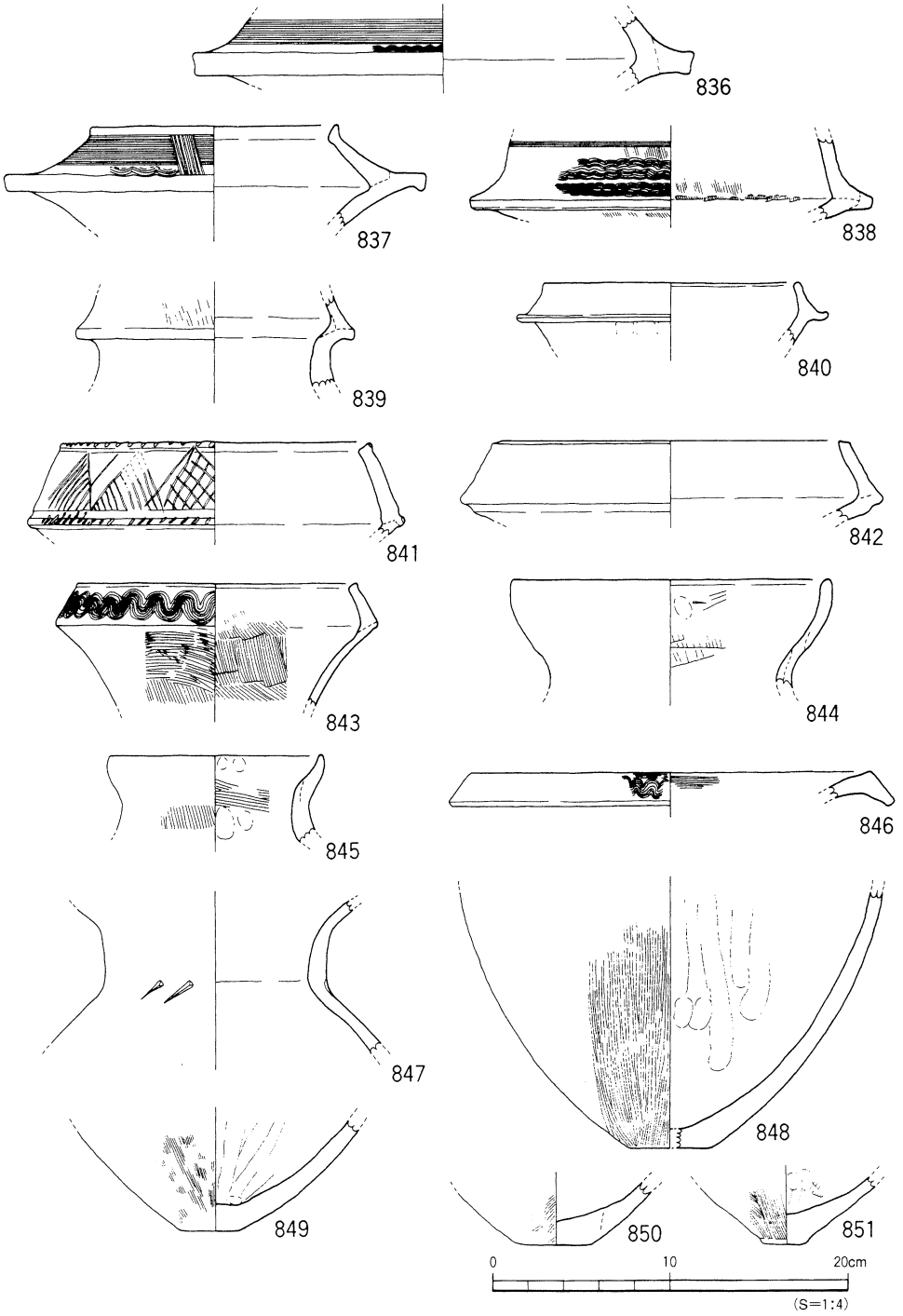
819～835は甕形土器である。825は内面にケズリ痕をもち、口縁端部が上方に拡張するものでほかのものとは異なる形態をもつ。831～835は底部で、丸みのある平底となるものである。

836～851は壺形土器である。836～845は複合口縁壺である。836～839は口縁接合部が面をなし、840は丸みをもって突出し、841～843は稜となるものである。844・845は袋状の口縁部になる。846は広口壺で、口縁端部が垂下する。847は胴部片で肩部に2ヶ1組の押圧文をもつ。848～851は底部で平底になるものである。852～872は鉢形土器である。852は大型品、853～865は中・小型品である。853は大きく外反する長い口縁部をもち、外面はタテヘラミガキされ仕上げが丁寧なものである。854・857・858は器壁が薄く、調整が丁寧なものである。860は器壁が厚く、短い口縁をもつ。やや異形態。861～865は直口口縁をもつものである。866～872は底部で、866は上げ底、867・868は平底、869～872は突出するもので、うち869は平底、870～872は上げ底となる。

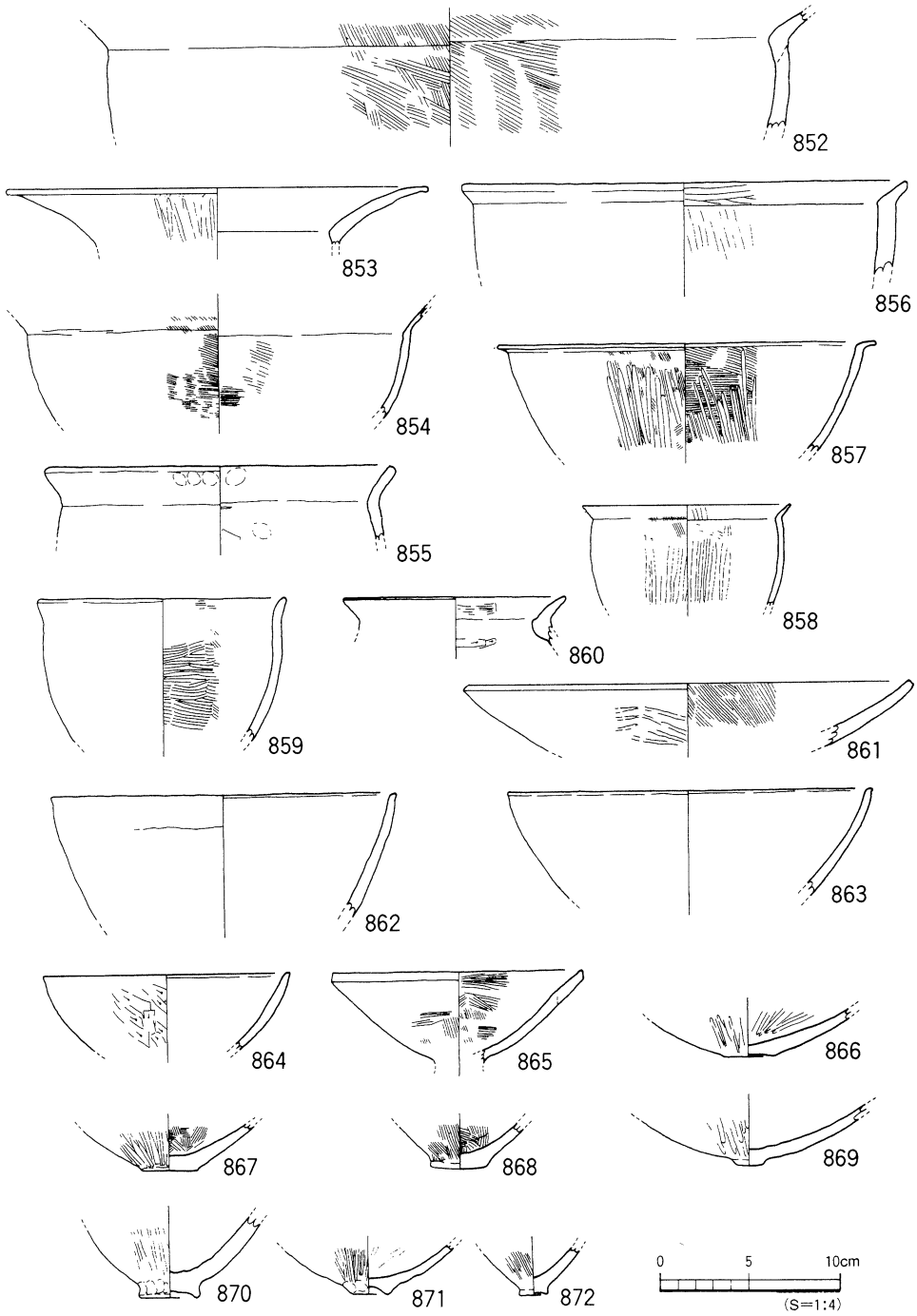
873～884は高坏形土器である。873は器壁が厚く、坏底部と口縁部の接合部分は立ち上がりをもっている。875は接合部が丸みのある段となる。878は坏部が丸いものである。883・884は時期の異なるものである。883は矢羽根状の文様は、格子目文で充塡される。885はジョッキ形土器の把手部分と思われるものである。886～891は支脚形土器である。886・887は受部に突起をもつものである。888は外面にタタキ痕を著しく残す。889～891は器高が低いものである。889・890は中央部に貫通孔をもつ。892は蓋形土器もしくはミニチュア品と思われるものである。893は土製の勾玉である。腹部に刻目風の段をもつ。



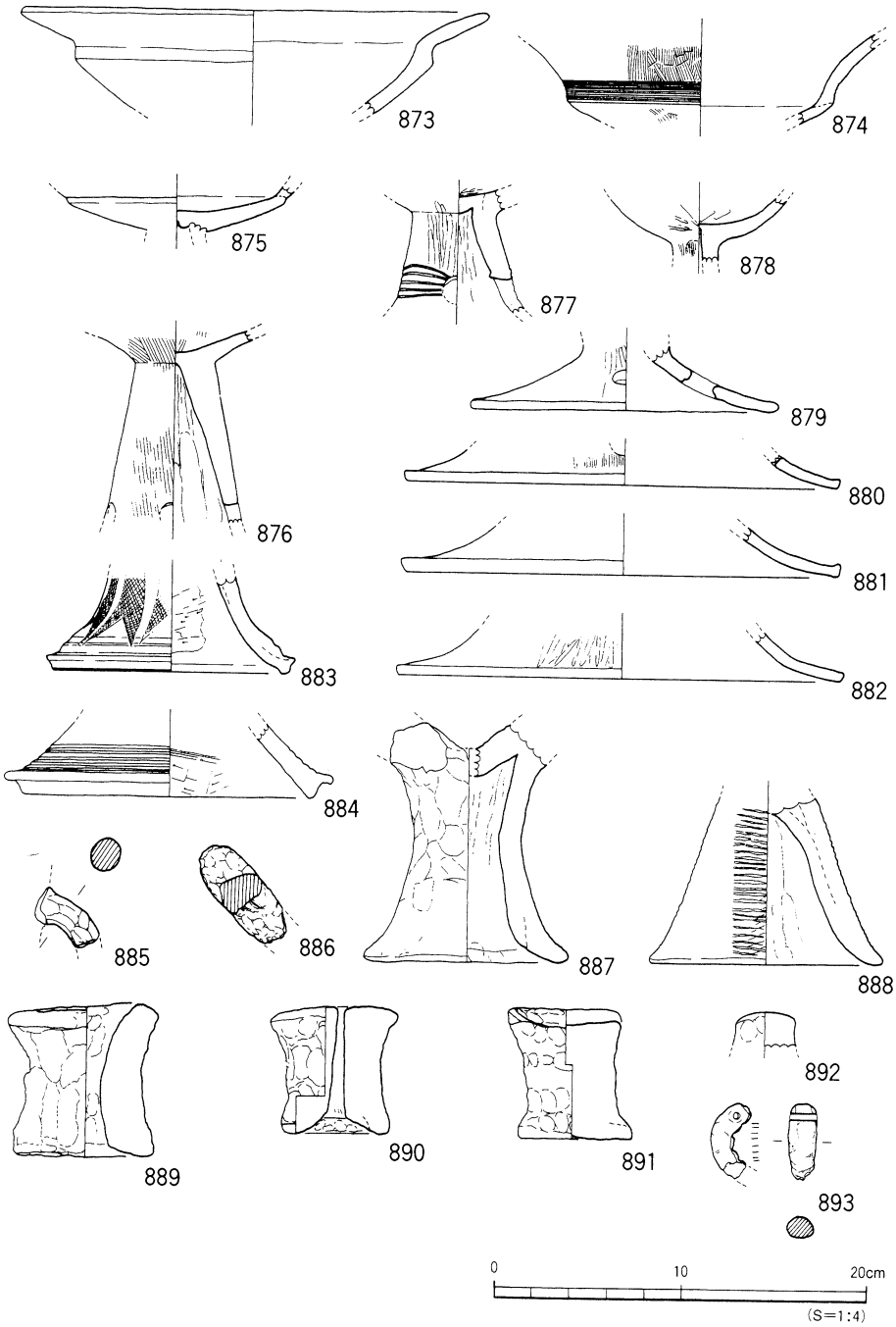
第141図　SR 2（⑧区）出土遺物実測図（1）



第142図　SR2（⑧区）出土遺物実測図（2）



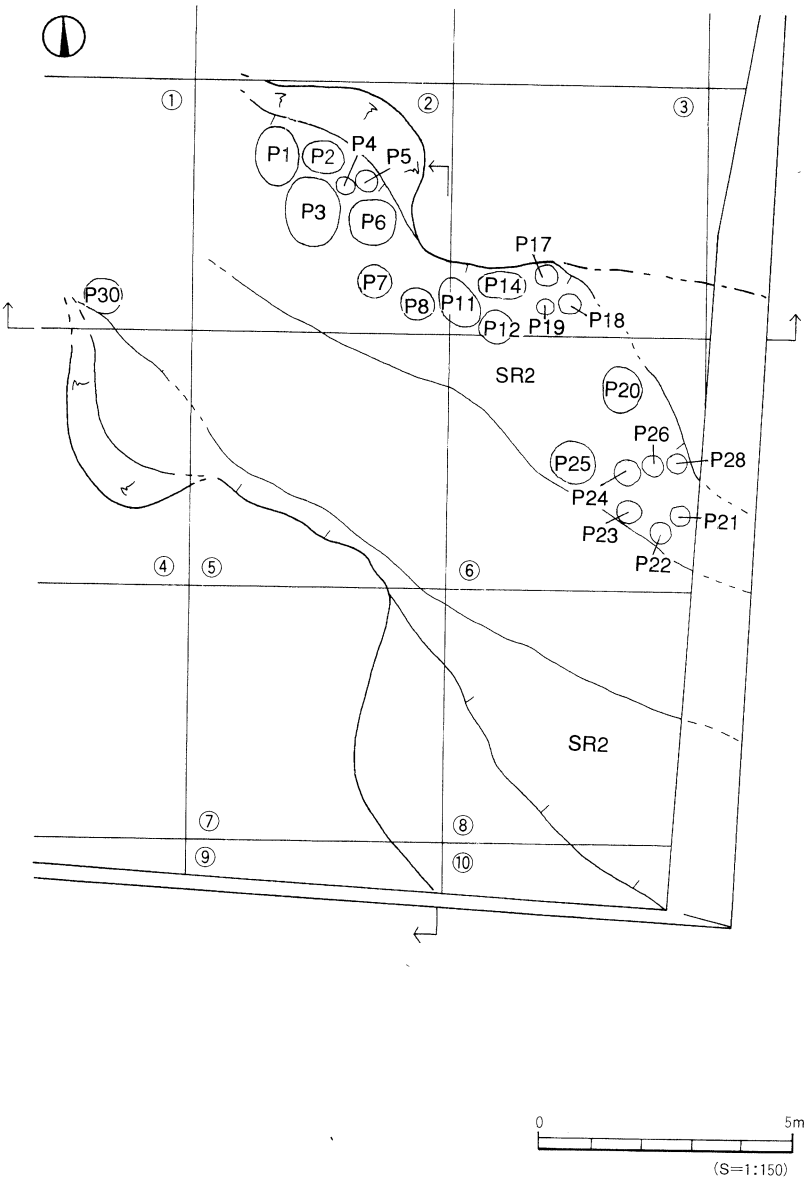
第143図　SR２(⑧区)出土遺物実測図(3)



第144図　SR2（⑧区）出土遺物実測図（4）

② ＳＲ２北半部（①～⑥区）の調査

北半部では②～④・⑥区と①・⑤区の一部にてＳＲ2を検出した。③・⑥区ではＳＸ401によりＳＲ2は部分的に削平されている。②・③区の流路壁体付近では遺物がまとまって出土した。遺物は完形品が多く、その場で押しつぶされた状況であった。これは北西部で検出したＳＸ1・ＳＸ2と同様の状況を示している（図版23・24）。遺物は調査期間の都合上、範囲を図化して取り上げ、Ｐ1地点、Ｐ2地点などと呼称した（第145図）。



第145図　SR2遺物取上状況図

②区では遺物を取り上げた後、基底面と溝ＳＤ402を検出した。ＳＤ402の上部付近からは遺物がまとまって出土したため、範囲を図化して取り上げを行った（ＳＸ5）。ＳＤ402は検出状況、規模、埋土等から判断すると、北西部検出の溝ＳＤ401の続きと考えられる。

②区では流路基底部に明灰色砂層（埋土2）と、酸化鉄を含む小礫層（埋土3）を検出している。両者は検出地点が異なるため、先後関係は不明である。

発掘調査終了後、出土遺物の整理を進めていくと、ＳＲ2として取り上げた遺物のうち、時期の大きく異なるもの（古い時期のもの）がいくつかみられた。これらは、本来はＳＲ2の下部にあるＳＲ1上層の遺物として考えられるものである。

ＳＲ２北半部出土遺物

Ｐ30地点出土遺物（第146図、図版62）

①区の南端、ＳＲ3との境界近く、流路基底面付近に出土した遺物である。60×80cmの範囲で口縁部や底部などがまとまって出土している。特に在地ではあまりみられない加飾の著しい遺物などが含まれている。なお、①区では石器（石庖丁、石錘、砥石）が出土している。

894は甕形土器の底部である。丸みをもった小さい平底となる。895～897は壺形土器で、895・896は複合口縁である。896は大型品で、口縁接合部に凸帯をもつ異形品である。加飾も著しいものである。897は胴部で、刻目凸帯をもっている。898～900は高坏形土器であり。899は細沈線が多条に施されている。901は支脚、902は土製の紡錘車である。

Ｐ1～4・6地点出土遺物（第147図、図版62）

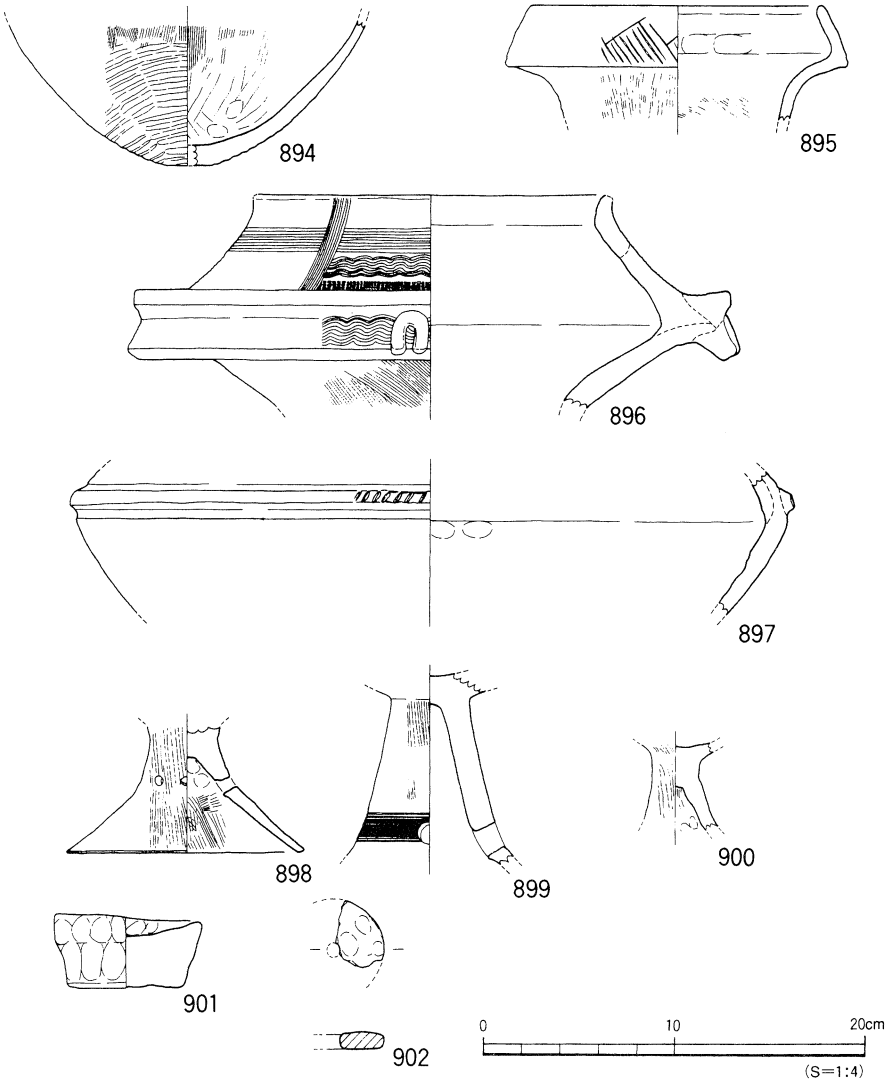
②区の北端、流路壁体付近に出土した遺物である。2.0×3.2mの範囲で、遺物が押しつぶされた状況で、部分的にまとまって出土している。907はＰ1地点、904はＰ2地点、905・908はＰ3地点、903・906・909・910はＰ4地点、911・912はＰ6地点から出土した遺物である。

903～906は壺形土器である。904は複合口縁壺の頸部である。905は口縁部が直立する二重口縁壺で頸部に「ノ」の字文状の刺突文列をもつ。備後地方に類例がある。906は複合口縁壺の口縁部である。907は甕形土器で、内面のケズリが頸部まで達し、肩部の張りが強い胴部をもつものである。908・909は底部で、丸みのあるやや厚い平底である。911は鉢形土器で、大型品である。912は支脚形土器である。

Ｐ7・8地点出土遺物（第148図、図版63）

②区の中央部、流路埋土中から出土した遺物である。Ｐ7地点からは複合口縁壺の口縁部とコシキ形土器が出土し、Ｐ8地点からもほぼ完形の支脚形土器などが出土している。913・914はＰ7地点、915～917はＰ8地点から出土した遺物である。

913は複合口縁壺、914はいわゆるコシキ形土器である。914は完形にちかい遺存である。口縁部下に円孔をもつ。焼成前穿孔。915・916は甕形土器、917は支脚形土器である。



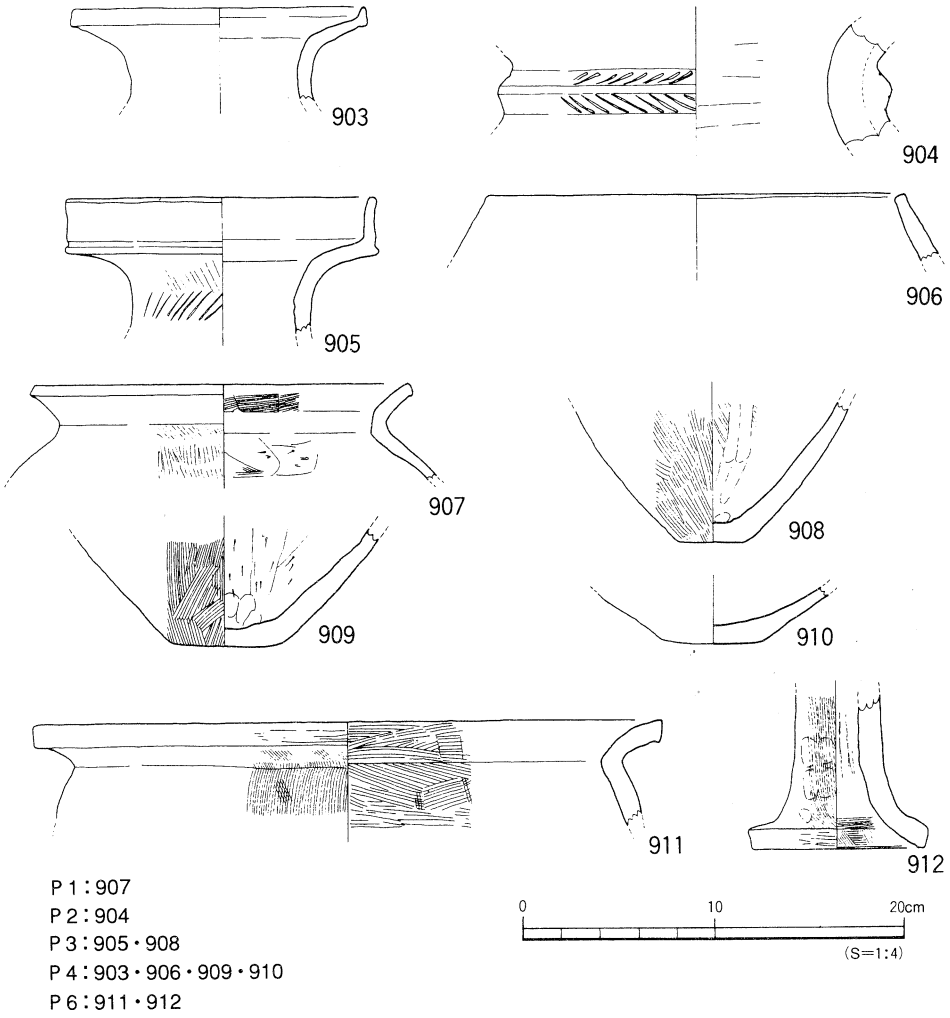
第146図　SR2（①区P30）出土遺物実測図

PⅡ地点出土遺物（第149～151図、図版63・64）

②・③区の南部、流路壁体付近に出土した遺物である。80×100cmの範囲で、遺物が重なり合うような状況で集中して出土している。

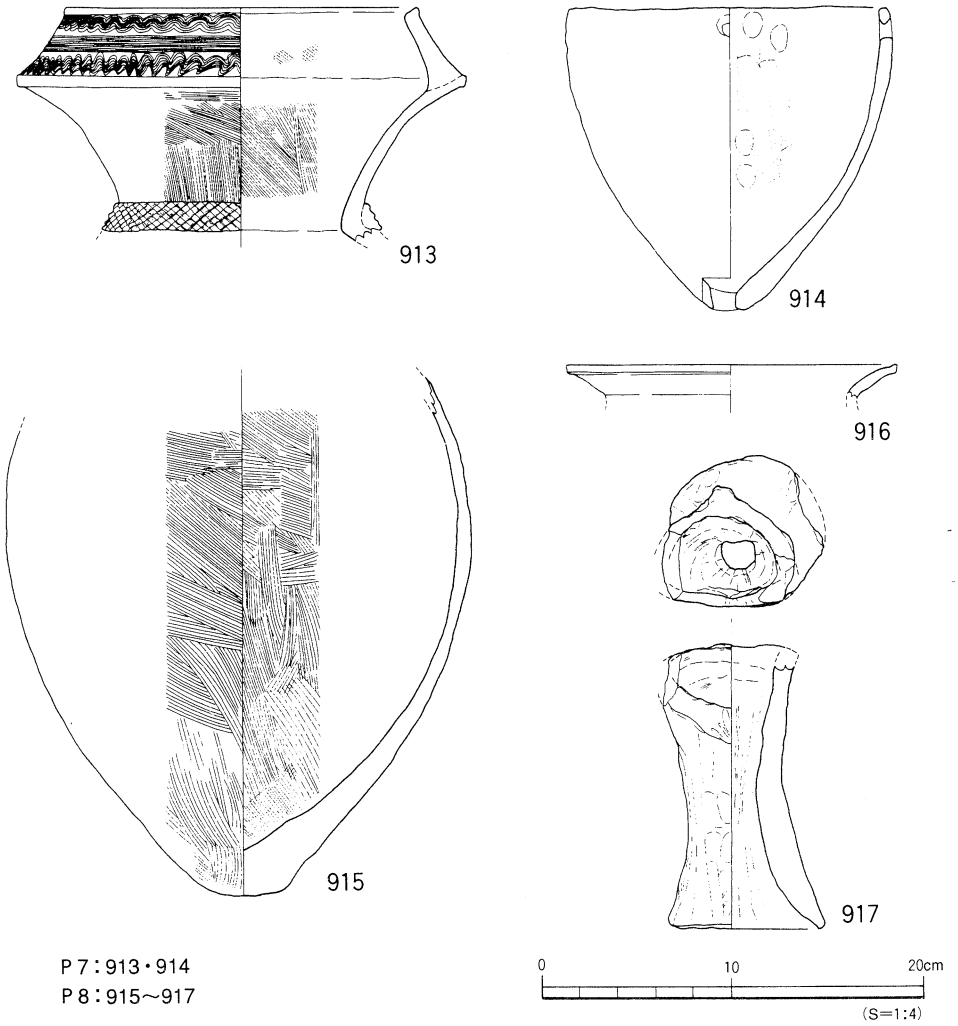
918～928は甕形土器である。形態は膨らみをもった長い胴部となるものである。918・919はするどく折り曲がる長い口縁部をもつものである。925～928は底部である。中～大型品（925・926）は平底、小型品（927・928）は立ち上がりをもつ平底となる。

929～934は壺形土器である。929は複合口縁壺、930は広口壺、931は細長頸壺である。931は器壁が著しく薄いものである。932は頸部以下が判断できないものである。933は直立する頸部をもつことより広口壺と思われるものである。934は底部で平底となる。



第147図　SR2（②区P1～4・6）出土遺物実測図

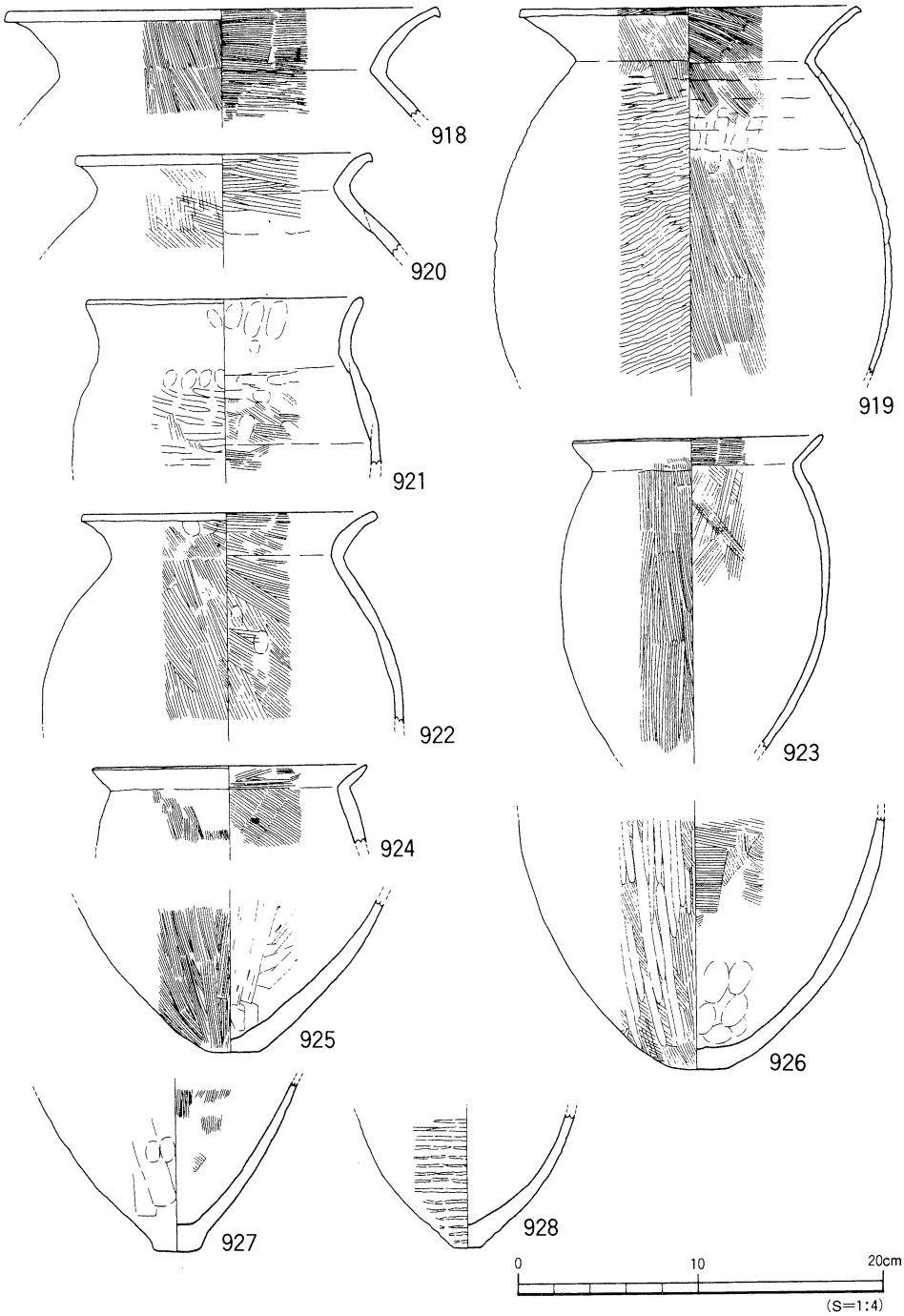
935～937は鉢形土器である。いずれも器壁が薄く、丁寧な作りである。938・939は高坏形土器である。938は大きくひろがる口縁部をもつものである。939は長脚で多段の円孔をもつものである。940～942は器台形土器である。941は大型品で、口縁部の上面と端面に刺突文と半截竹管文を施している。942は裾部片である。943～945は支脚形土器である。943・944の受部は「U」字状の傾斜部をもち945は突起を2ヶもつ。946～948は焼成前の円孔をもついわゆるコシキ形土器である。949は出土地（P12）が離れたものであり、遺存状況が良い甕形土器である。



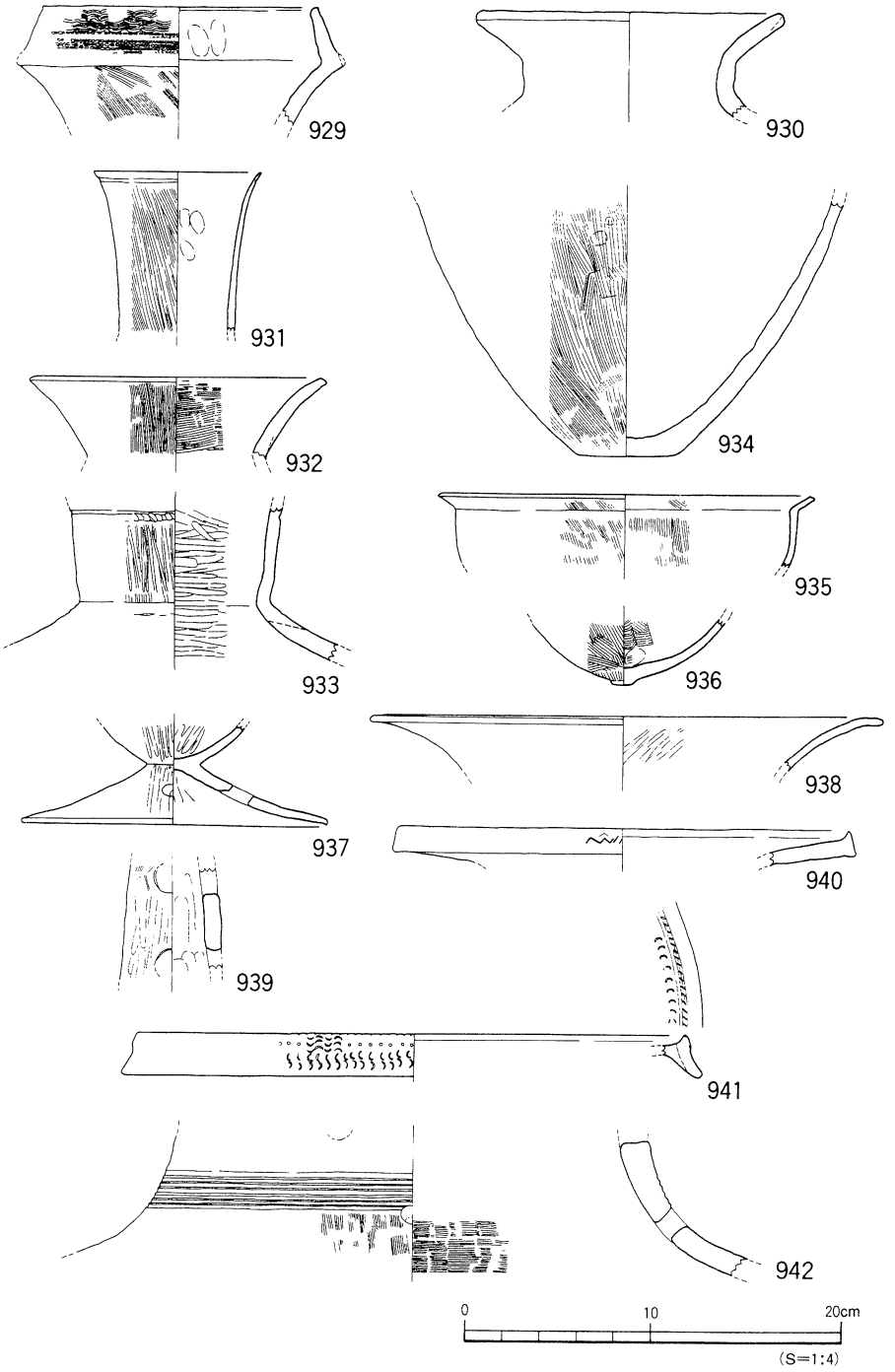
第148図　SR2(②区P7・8)出土遺物実測図

②区出土遺物（第152図、図版64）

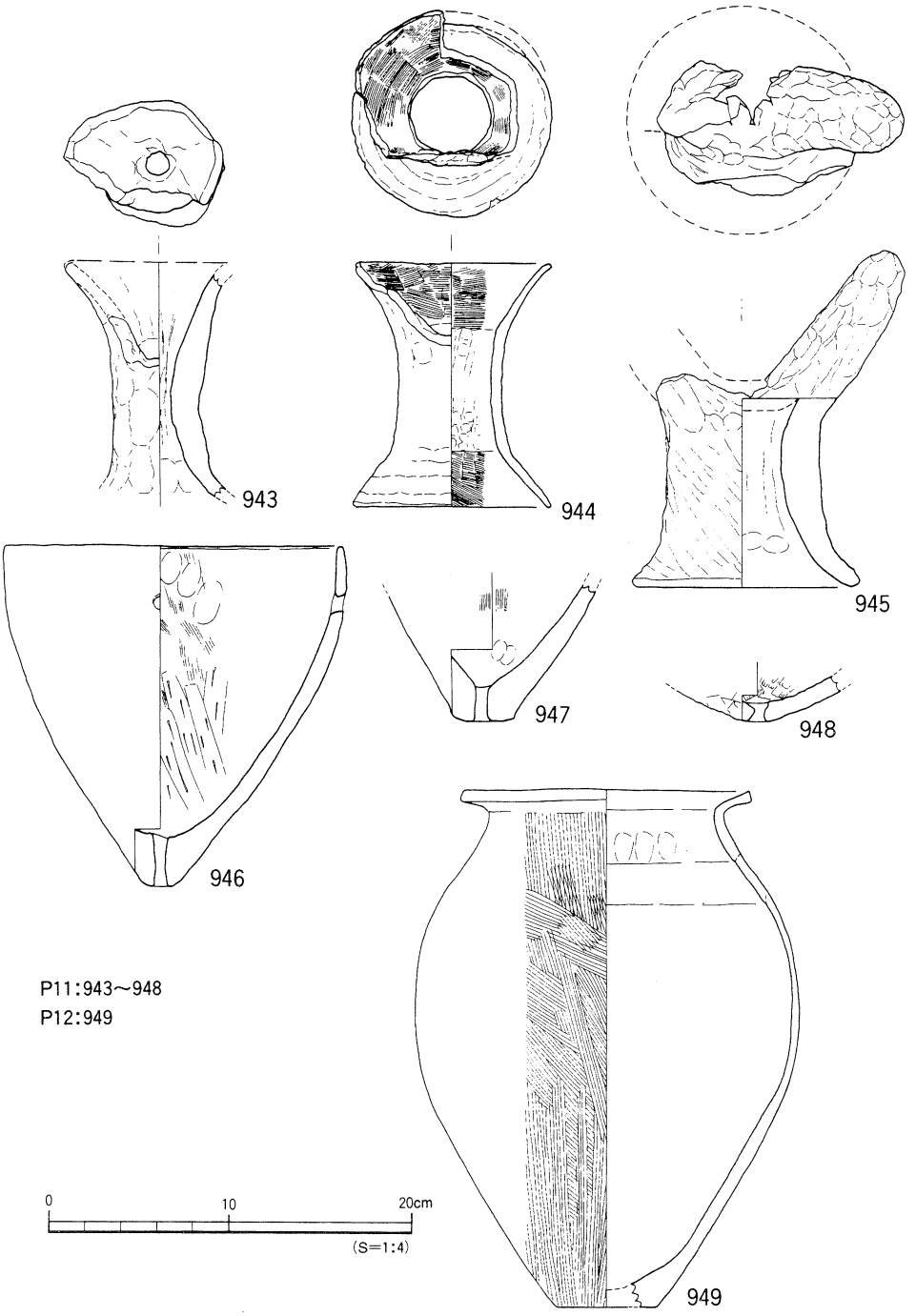
P地点以外から出土したものである。950・951は甕形土器である。952～957は壺形土器で、952・953は複合口縁壺、954は広口壺、955は長頸壺である。956は頸部で、多条の沈線文をもつものである。957は壺形土器の底部とみられるもので、ヘラによる線刻がある。958～960は鉢形土器で、960は脚付鉢の脚部である。961～964は高坏形土器で、961・962は坏部、963・964は脚部となる。965は支脚形土器で、受部に2ヶの突起と背部に小さい突出部をもつ。966はミニチュア品である。



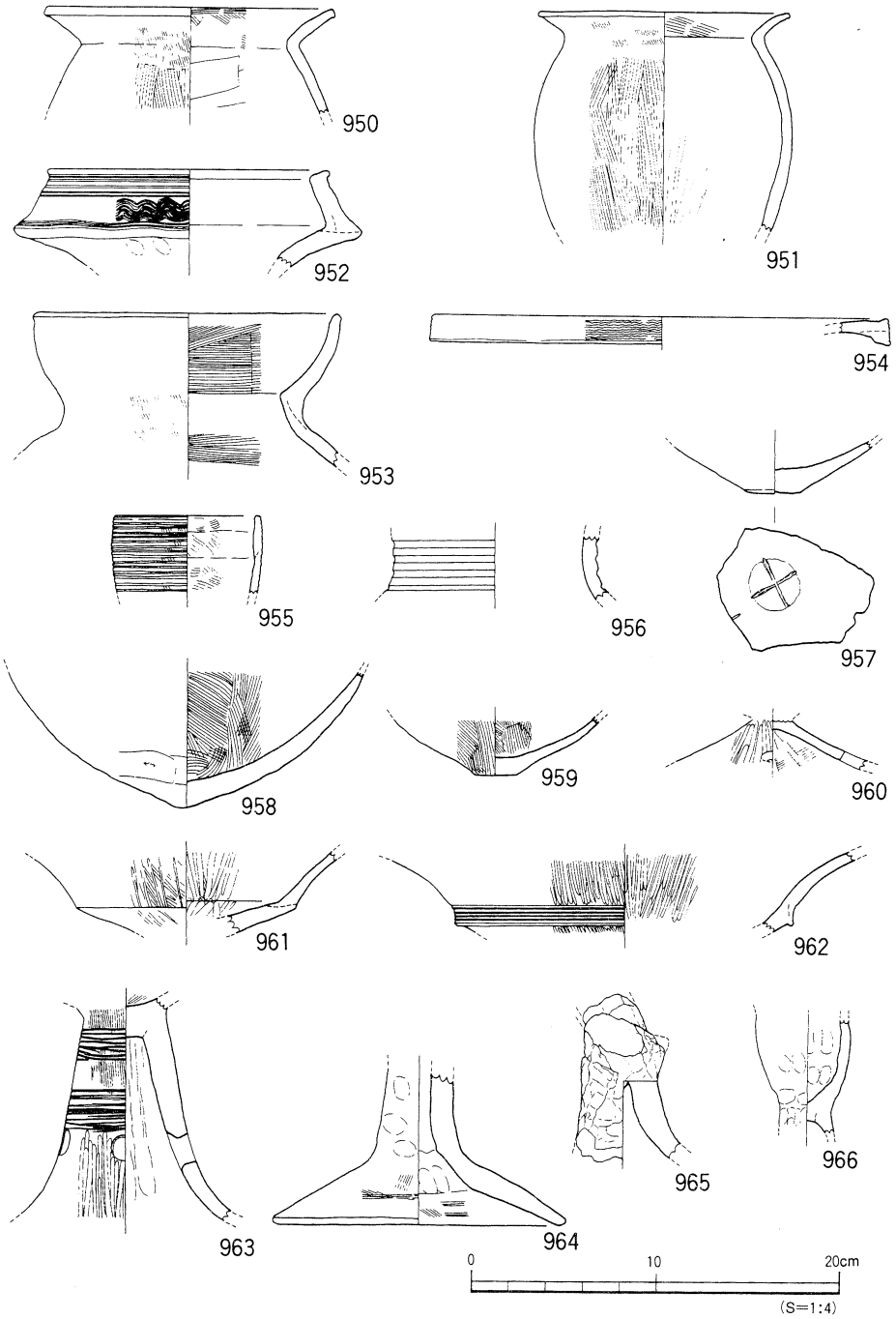
第149図　SR2（②③区P11）出土遺物実測図（1）



第150図　SR2（②③区P11）出土遺物実測図（2）



第151図　SR2(②③区P11・12)出土遺物実測図



第152図　SR2(②区) 出土遺物実測図

③区出土遺物（第153図、図版65）

Ｐ地点以外から出土したものである。967・968は甕形土器である。969～973は壺形土器で、969～971は複合口縁壺、972は広口壺である。970は口縁接合部以外に突出部をもっている異形品である。974は支脚形土器で、975は脚付鉢である。976～978は古い様相（後期前葉）をもつもので、976は甕形土器、977は壺形土器、978は高坏形土器である。

なお、③区からは石斧が出土している（Ｐ298，第278図2138）。

Ｐ21・22・24・26地点出土遺物（第154図、図版65）

⑥区中央部、ＳＲ3との境界付近の埋土中から出土した遺物である。979・987・988・990はＰ21地点、981・982はＰ22地点、983・984・986・989はＰ24地点、980・985はＰ26地点から出土した遺物である。

979～981は甕形土器である。982～986は壺形土器である。982・983は複合口縁壺で、984は広口壺である。986は細長頸壺で、器壁が薄いものである。987・988は鉢形土器である。大きくひらく口縁部をもつものである。989は器台形土器の受部とみられるものである。990は支脚形土器で、受部の一部が「Ｕ」字状に傾斜する。

Ｐ25地点出土遺物（第155図、図版65）

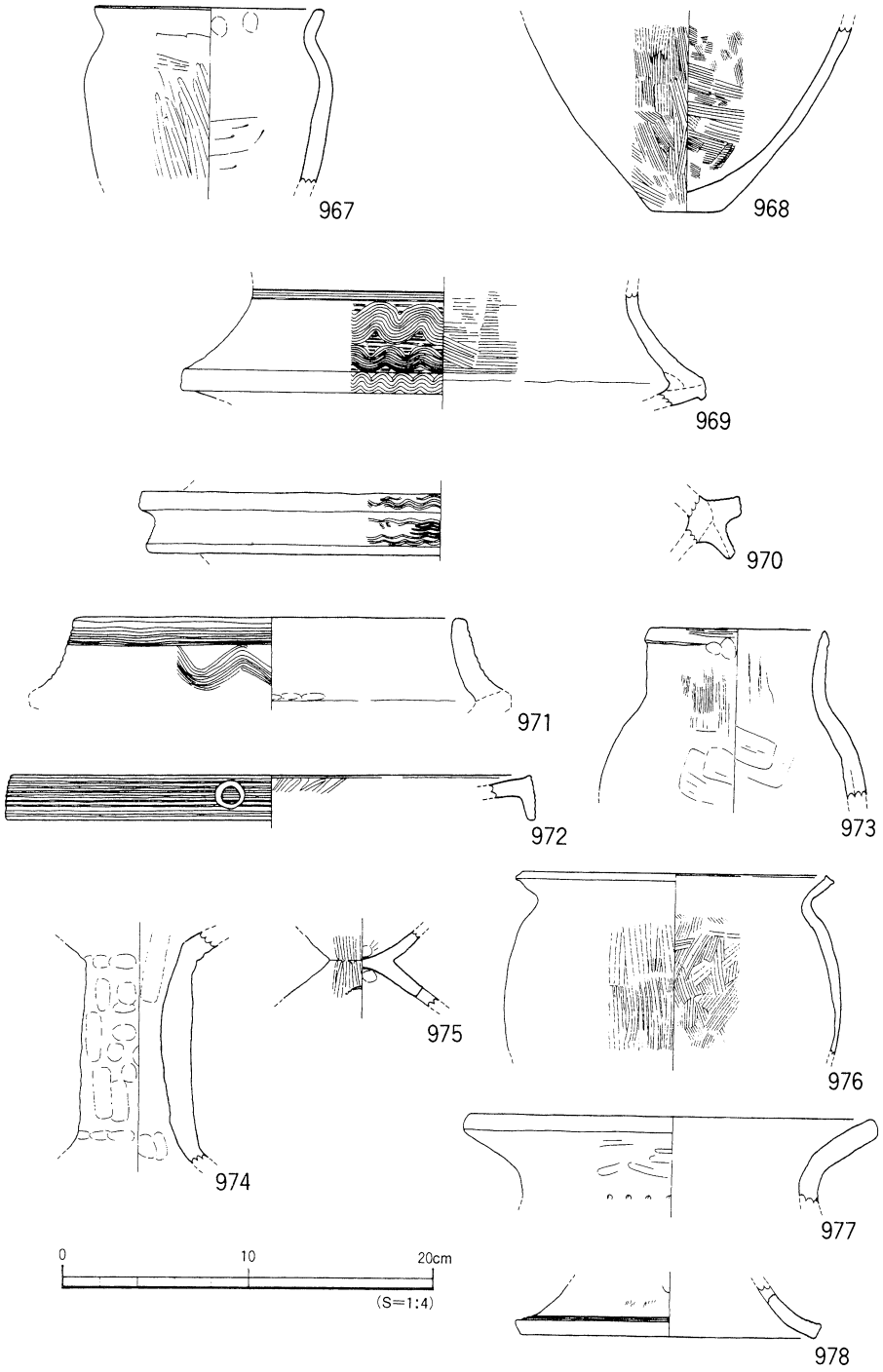
⑥区の北西部、ＳＲ3との境界付近の埋土中から出土した遺物である。90×100cmの範囲で遺物がまとまって出土した。遺存状況は比較的良好なものが多くみられた。

991・992は壺形土器である。991は複合口縁壺で、口縁部を欠いているものである。992は外面にヘラミガキがあることより壺形土器の胴部とみられる。993～996は鉢形土器である。994は大型品でゆるやかに外反する長い口縁部をもつ。995は器壁が薄いものである。997～1000は高坏形土器である。997は坏部で口縁部を欠く。998は柱部がエンタシス状になるもである。999は長脚のもので、3段以上の円孔をもつ。1000は柱部で、上段の円孔は半貫通、下段は貫通するものである。1001は甕形土器の底部で、小さい平底となる。

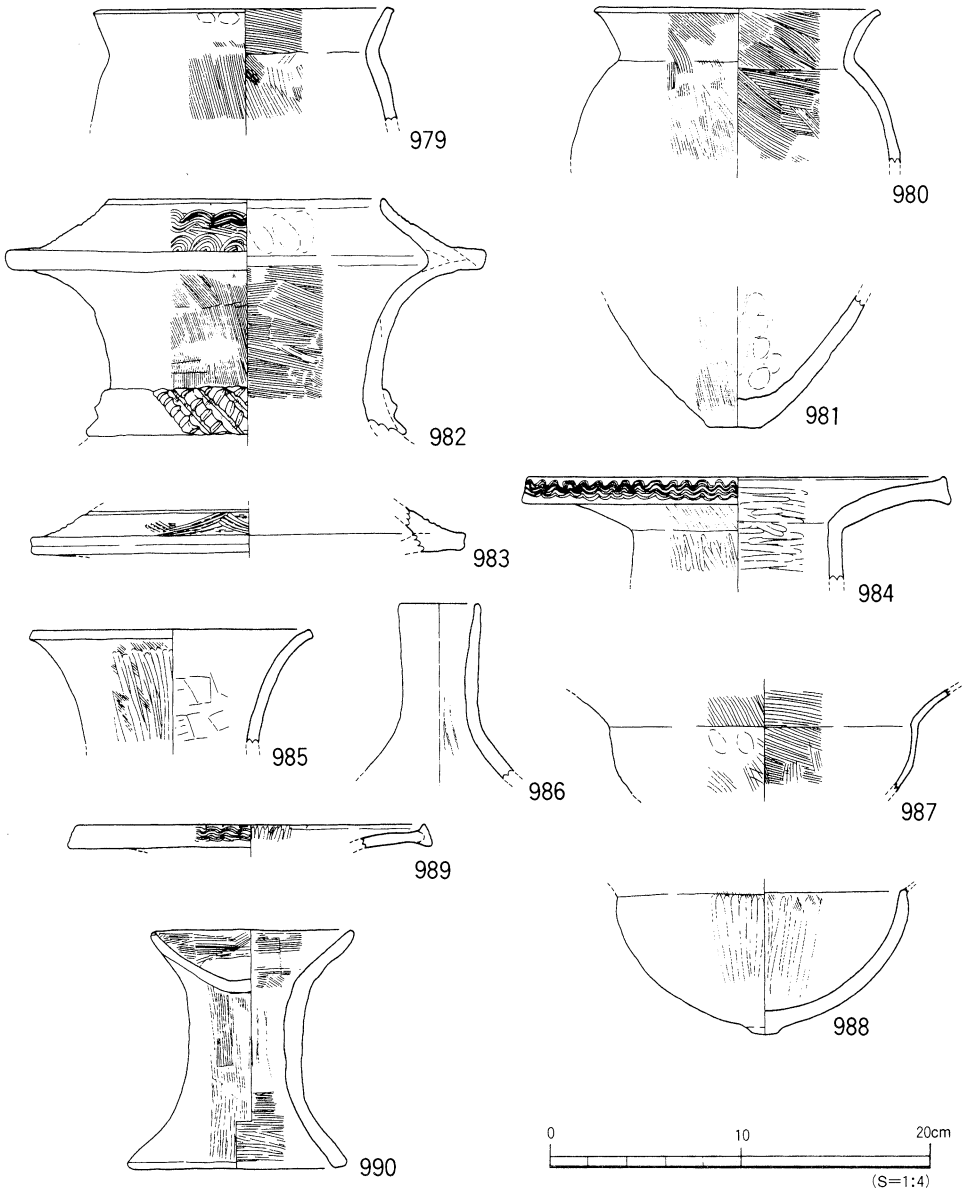
Ｐ28地点出土遺物（第156図、図版66）

⑥区の北東部、流路の埋土中から出土した遺物である。50×50cmの狭い範囲で遺物が出土した。

1002～1005は壺形土器である。1002～1004は複合口縁壺である。1004は口縁部が外反し、外面に沈線をもっており異形態を呈している。1005は広口壺である。1006は鉢形土器の口縁部である。1007・1008は高坏形土器である。1008は細長い柱部をもつ。細かい刷毛目調整がなされる。1009は支脚形土器である。完形品。受部が傾斜し、底部が上げ底となる。

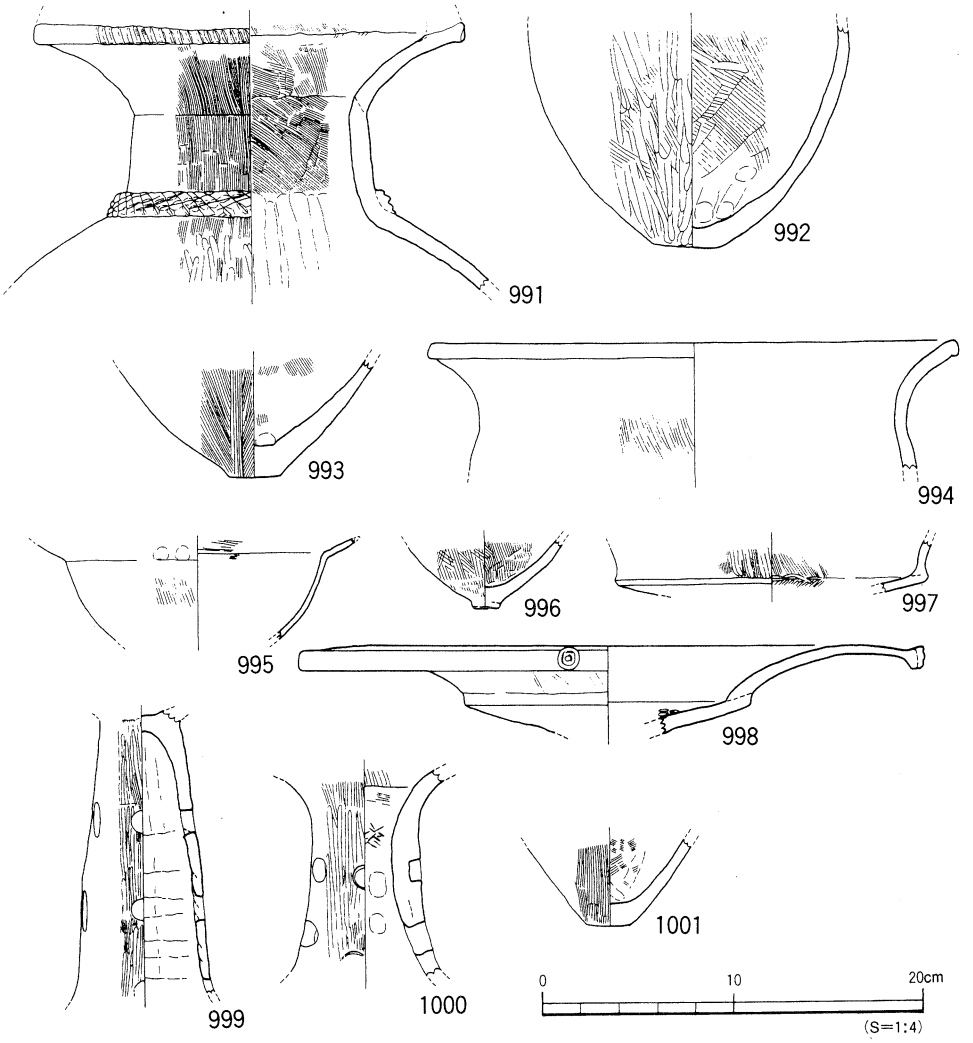


第153図　SR2(③区) 出土遺物実測図



P 21：979・987・988・990
P 22：981・982
P 24：983・984・986・989
P 26：980・985

第154図　SR2（⑥区 P21・22・24・26）出土遺物実測図

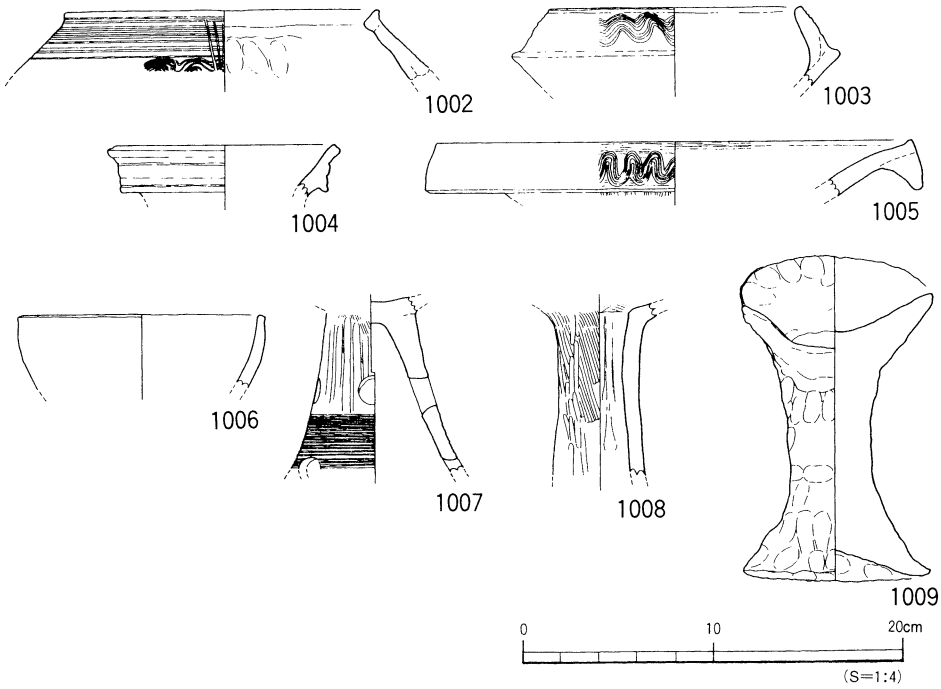


第155図　SR2（⑥区P25）出土遺物実測図

⑥区出土遺物（第157・158図、図版66）

P地点以外からの出土で、完形品を含む遺物が出土した。

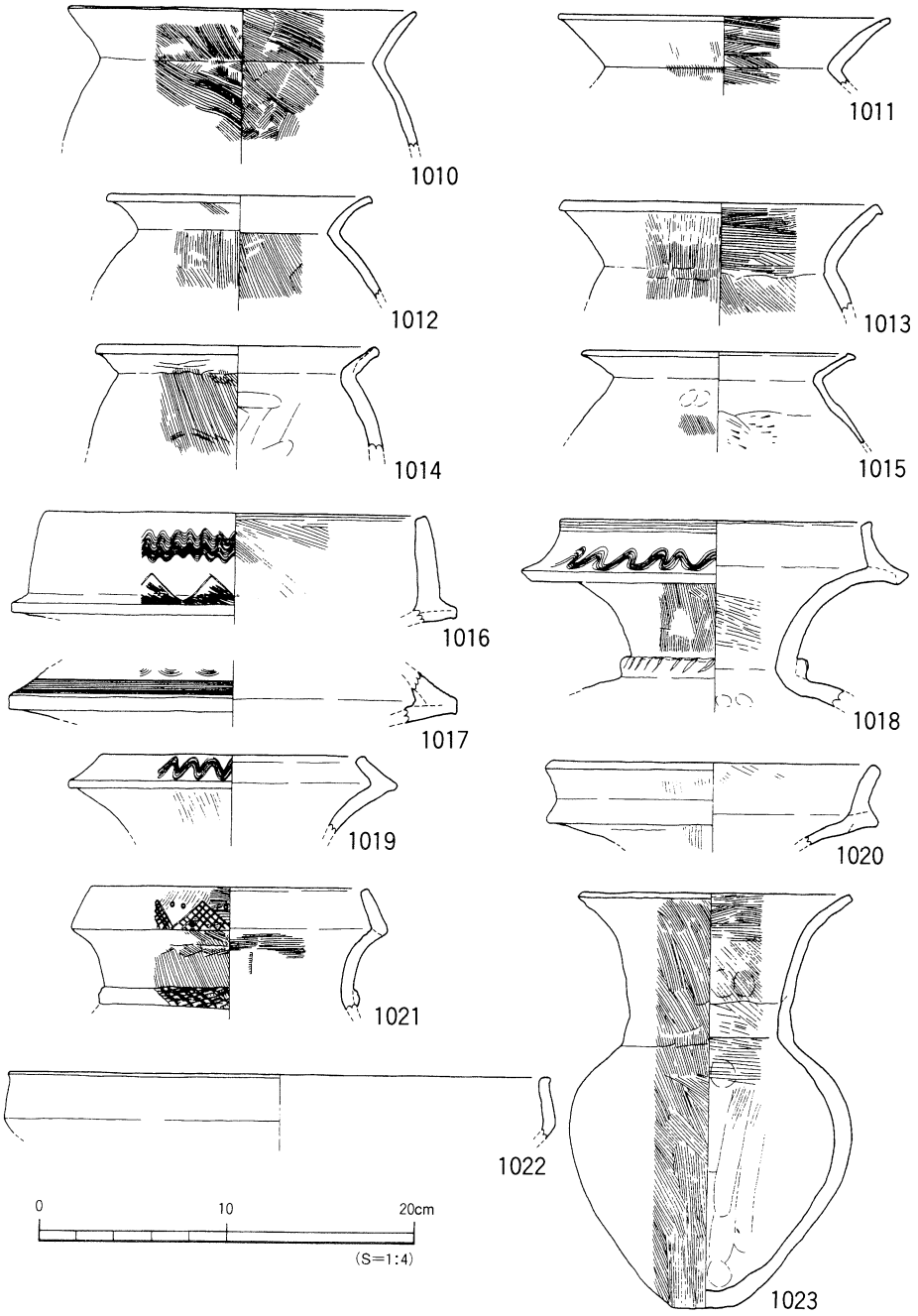
1010～1015は甕形土器である。1015は口縁端部は平坦で、内側に小さく突出する。内面はケズリ痕が著しく残る。1016～1023は壺形土器である。1016～1021は複合口縁壺である。



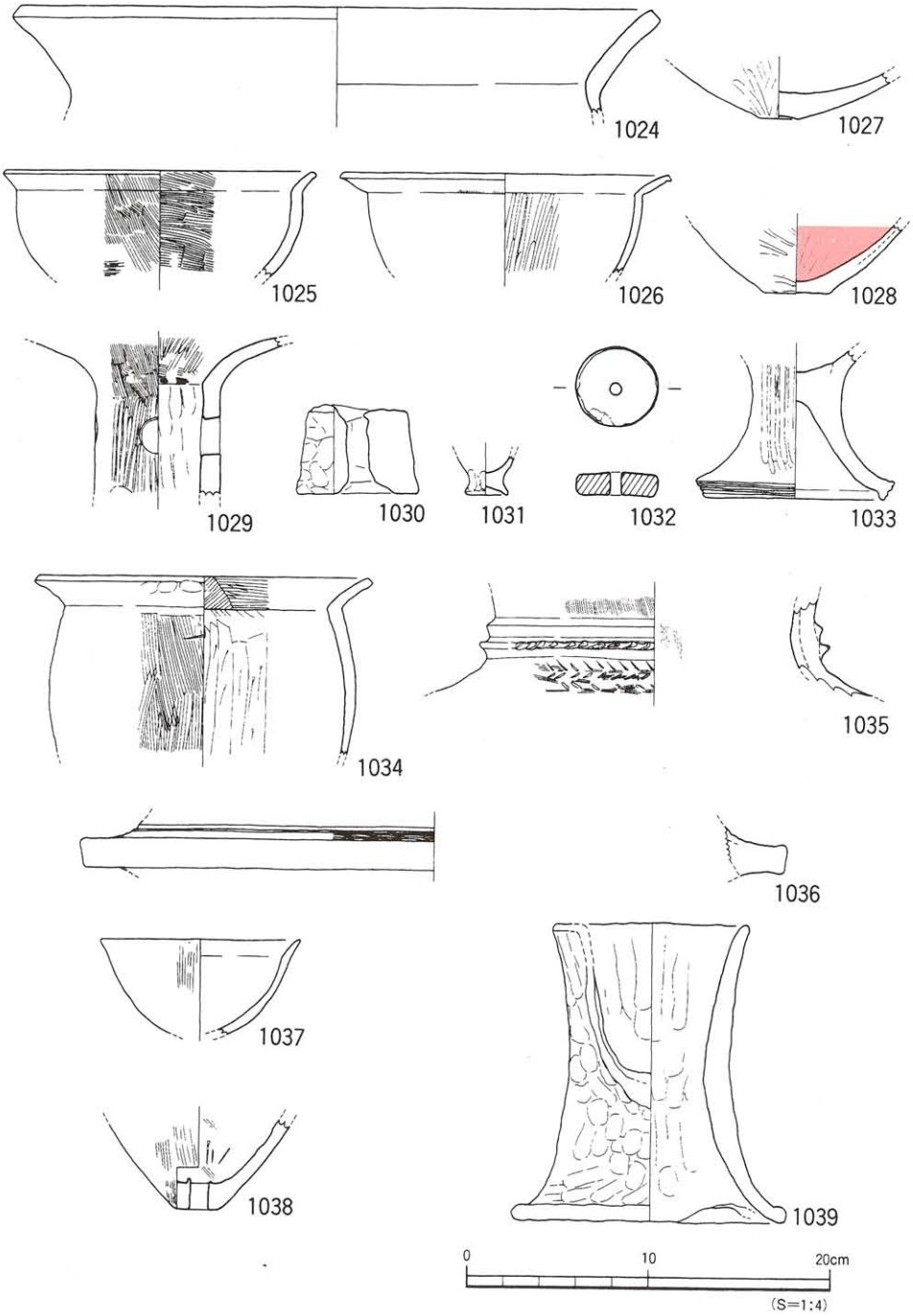
第156図　SR2(⑥区P28)出土遺物実測図

1023は長頸壺で、1022は器種が不明なものである。1024～1028は鉢形土器である。1024は大型品、1025～1028は中～小型品である。1028の内面には赤色顔料が付着する。1029は器台形土器、1030は支脚形土器、1031はミニチュア品である。1032は土製の紡錘車である。1033は後期前葉の高坏形土器の脚部である。1034は甕形土器、1035・1036は壺形土器であり1035・1036とも複合口縁壺である。1037は鉢形土器、1038は焼成前の穿孔であり、コシキ形土器である。1039は受部が大きく「U」字状に傾斜する支脚形土器である。

なお、⑤区からは、石器（伐採斧、台石）が出土している（P297・298, 第278・279図2137・2140)。



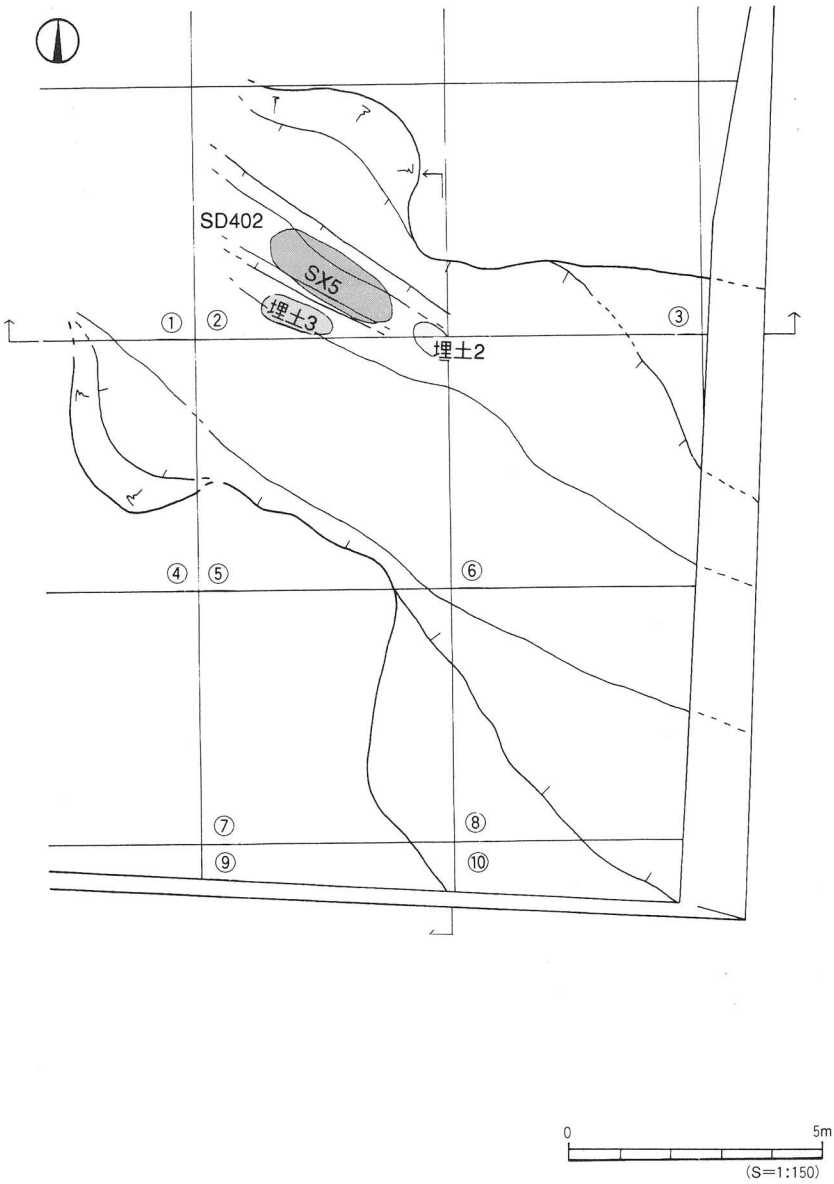
第157図　SR2(⑥区)出土遺物実測図(1)



第158図　SR2(⑥区) 出土遺物実測図(2)

ＳＸ５（第159図、図版24）

②区の南端部、溝ＳＤ402の埋土上部で検出した土器溜まりである。1×2.8mの範囲で、完形品を含む土器がまとまって出土した。明確な掘り方は確認できなかった。遺物は弥生時代後期末に比定される土器が出土している。その中には、ミニチュア品や土錘のほか赤色顔料が付着する遺物なども含まれている。石器では完形の磨製石鏃、敲石、石庖丁未製品などが出土した（Ｐ295・296，第277図）。



第159図　SD402・SX5及び埋土2・3検出状況図

出土遺物（第160～163図、図版67・68）

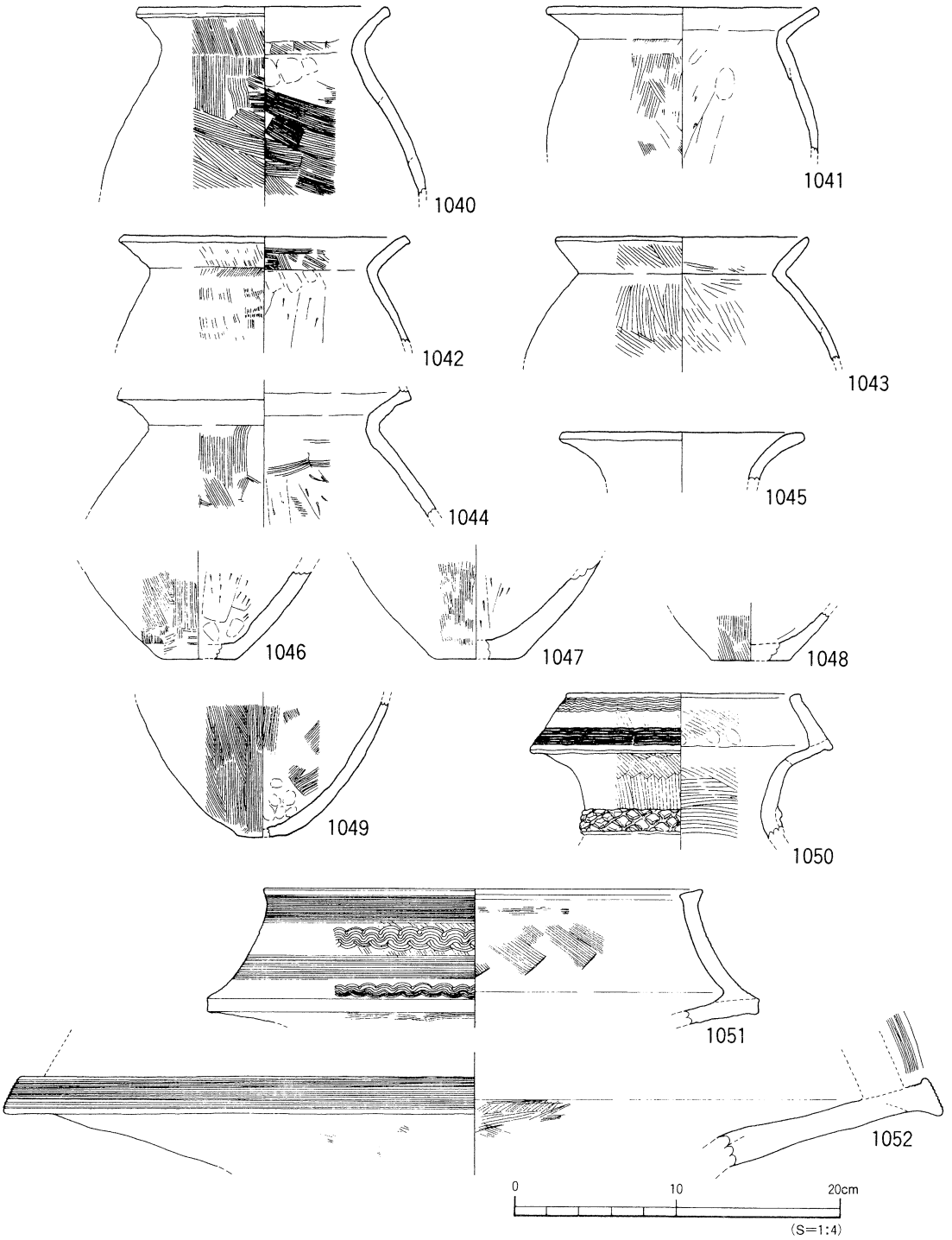
1040～1044、1046～1049は甕形土器である。形態は膨らみをもつ長い胴部になるものである。底部形態は平底で、丸みのあるものになる。1045は中型の広口壺である。1050～1060は壺形土器である。1050～1052は複合口縁壺である。1052は最大の法量をもつものである。1053は広口壺で、1054は長頸壺となる。1055は扁平球の胴部に短く外反する口頸部をもつものである。1056～1060は底部で、大型品ほど突出する平底となる。1061～1063は鉢形土器である。1063は脚付鉢の小型品である。1064・1065は高坏形土器である。1066・1067は支脚形土器である。1068～1072は甕形土器である。形態は胴部は膨らみをもち長胴となるものである。1072は丸底である。1073は広口壺の口縁部である。1074は複合口縁壺になるものと思われる。櫛描波状文とＳ字状の浮文をもつ。1075は小型の壺である。頸部に櫛描きによる多条の直線文と斜線充塡による山形文をもつ。器壁が薄く、仕上げも丁寧である。1076は片口になる鉢形土器である。細い刷毛目調整である。1077は底部片で、赤色顔料が付着する。1078・1079は高坏形土器である。1078は裾部に櫛描波状文をもつ。1079は大型の高坏形土器の坏部と思われるものである。1080・1081は器台形土器である。1080は大型品、1081は小型品である。1082～1084は支脚形土器である。1082は受部が2ヶの突起によりつくられる。1083は小型品で、受部と底部が大きく凹むものである。1084は中実のもので、受部と底部が凹むものである。1085は土錘である。1086は蓋形土器、1087は器台形土器である。1087は端部に小さい三角形の凸帯をもっている。1088は甕形土器、1089は壺形土器、1090は器台形土器、1091は高坏形土器、1092・1093はミニチュア品である。1091は高坏としたが、器壁が著しく薄く、細かい刷毛目をもっており、長頸壺の頸部としても考えられるものである。1094は甕形土器、1095～1097は壺形土器で複合口縁をもつものである。1097は外反する口縁部をもつものである。1098～1100はミニチュア品である。1101は土錘である。

ＳＤ４０２（第159図）

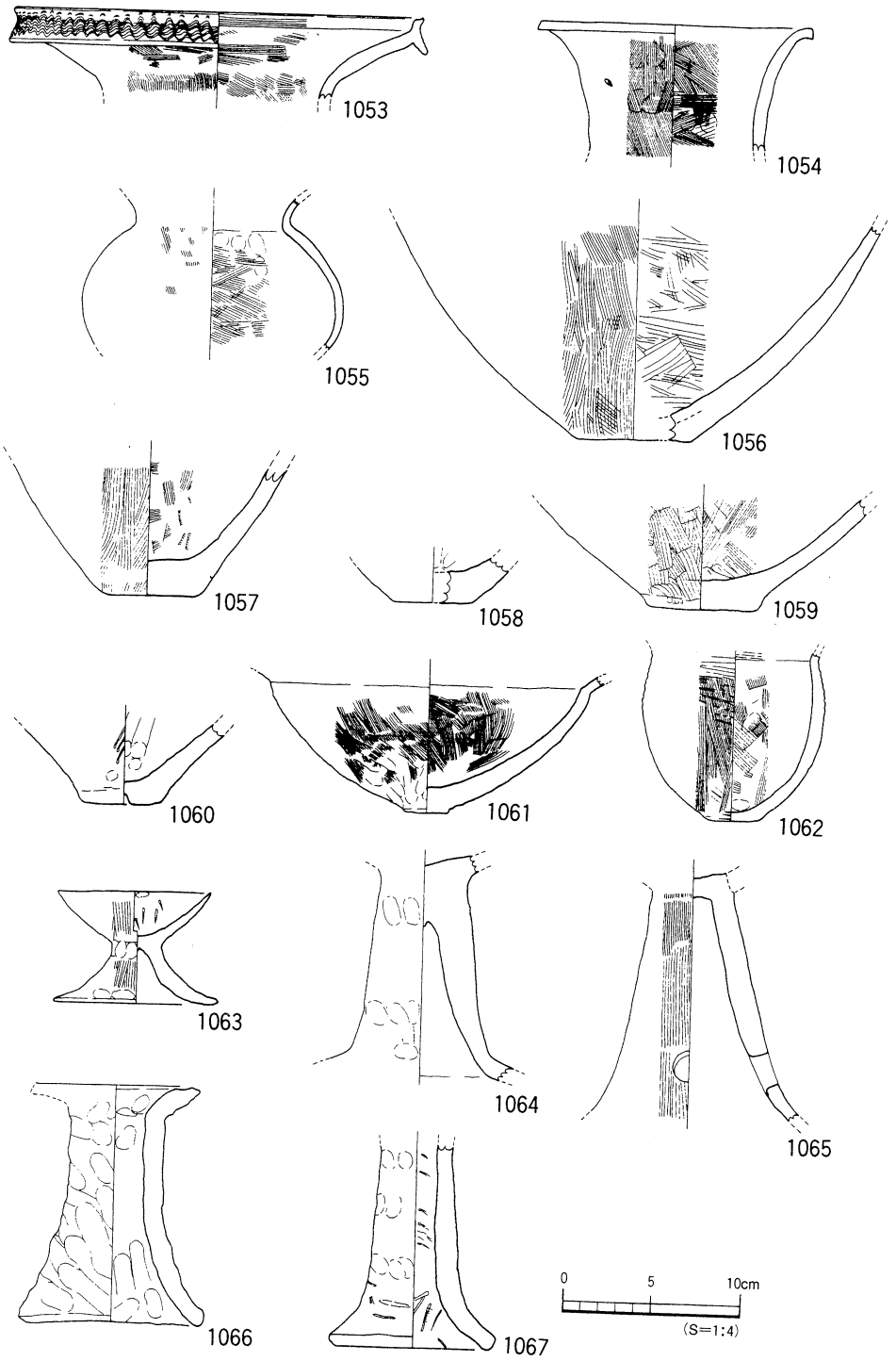
ＳＤ402は②区の流路基底面で検出した溝である。溝の東端及び西端はＳＲ2もしくはＳＲ3に削平されたものと考えられ、未検出である。規模は最大検出幅1.5m、深さは検出面下約20cmを測る。埋土は暗褐色の粘性の強い微砂である。断面形は皿状を呈し、溝底面は東から西へ向けて緩やかな傾斜をなす。検出状況や埋土等が北西部検出の溝ＳＤ401と類似することなどから、ＳＤ402はＳＤ401に続く溝と考えられる。溝からの遺物の出土はない。

埋土３（第159図）

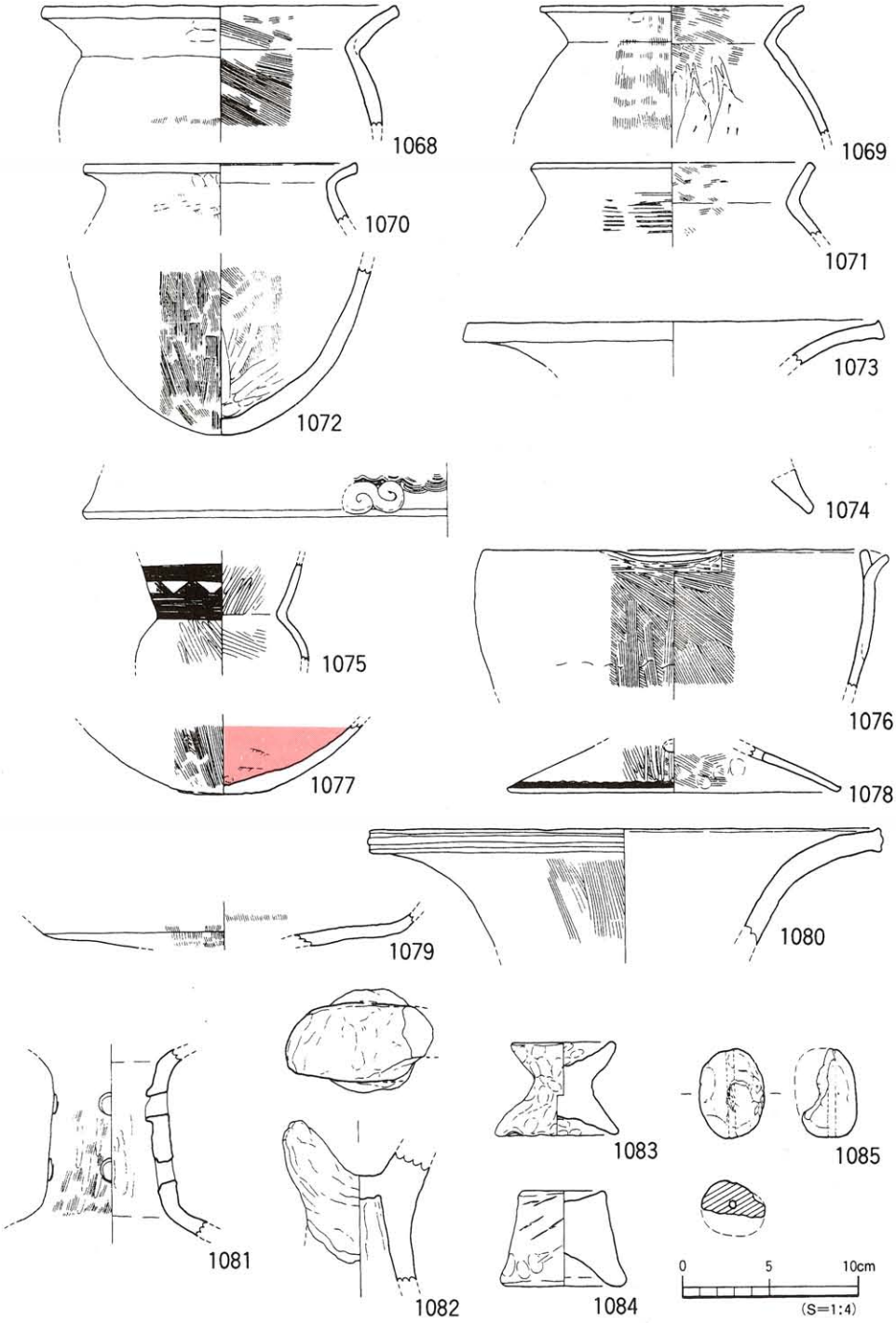
②区南東端の流路基底面で検出した土層である。酸化鉄分を多く含む2～5mm大の小礫からなり基底面に密着した状況で検出された。範囲は50×80cm四方で、厚さ3～5cmの堆積である。遺物は弥生時代後期末に比定される土器片が数点、出土した。出土遺物から、埋土3はＳＲ2



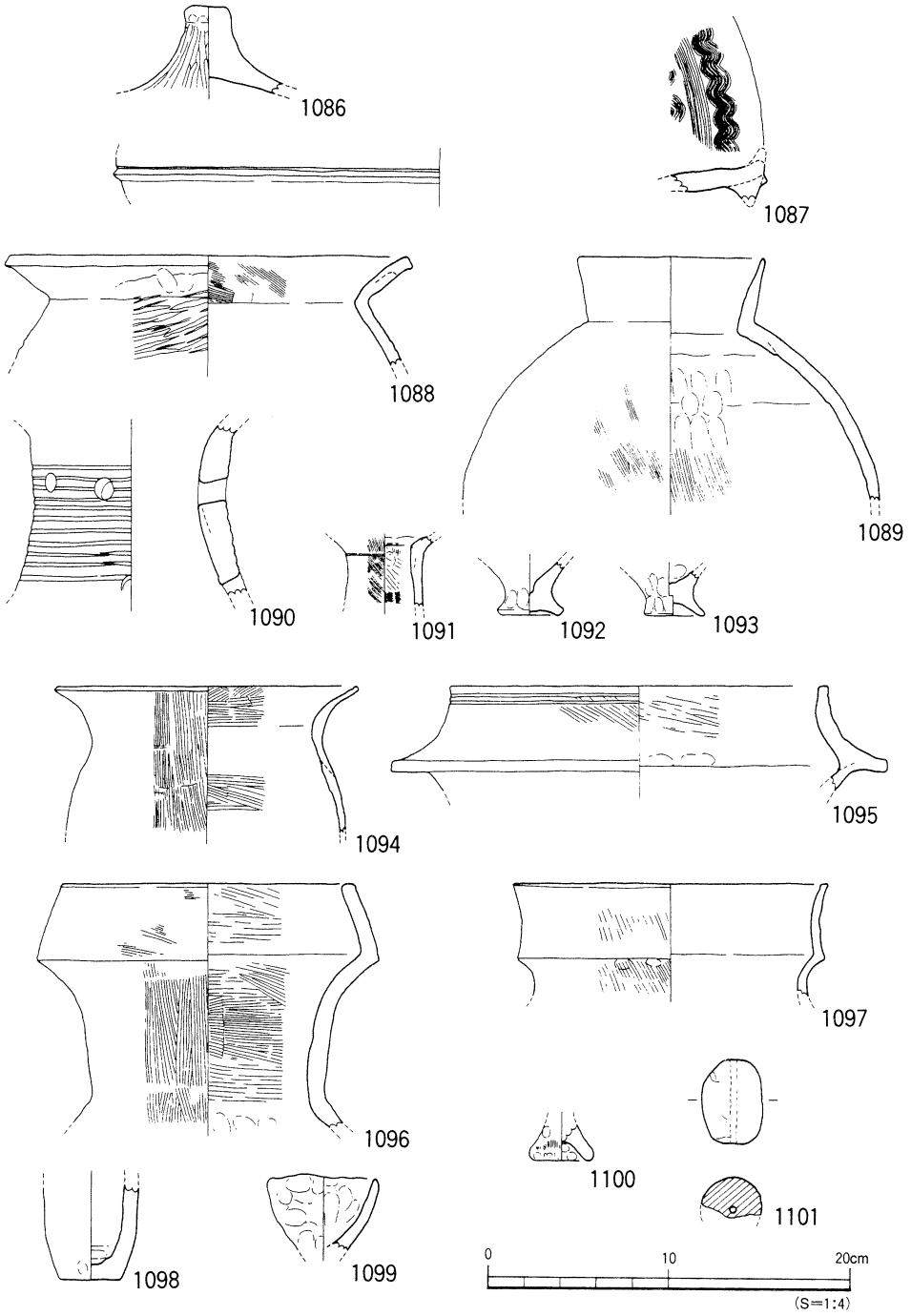
第160図　SX5出土遺物実測図(1)



第161図　SX5出土遺物実測図(2)



第162図　SX5出土遺物実測図(3)



第163図　SX5出土遺物実測図(4)

もしくはＳＲ3の基底部層と考えられる。

出土遺物（第164図、図版68）

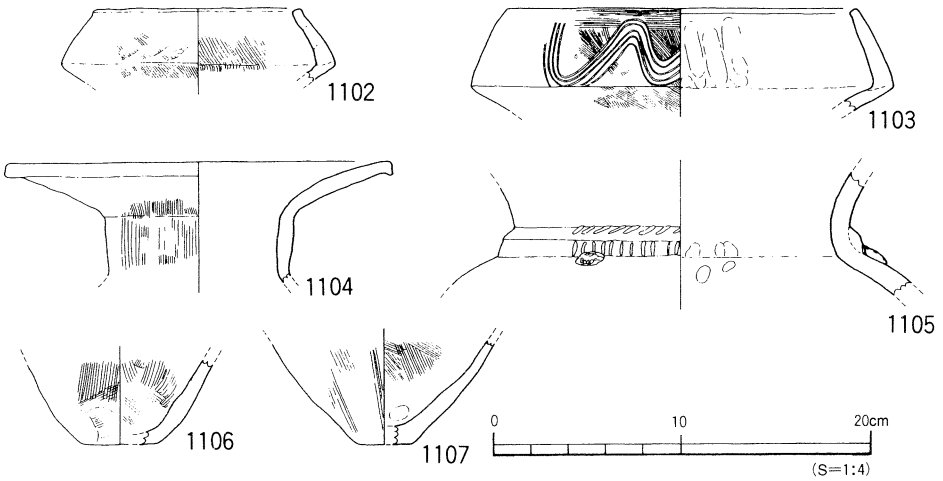
1102～1105は壺形土器である。1102・1103は複合口縁壺、1104は広口壺の口縁部である。1105は複合口縁壺の頸～胴部と思われるものである。刺突文を施した円形浮文をもつ。1106・1107は甕形土器の底部である。

埋土２（第159図）

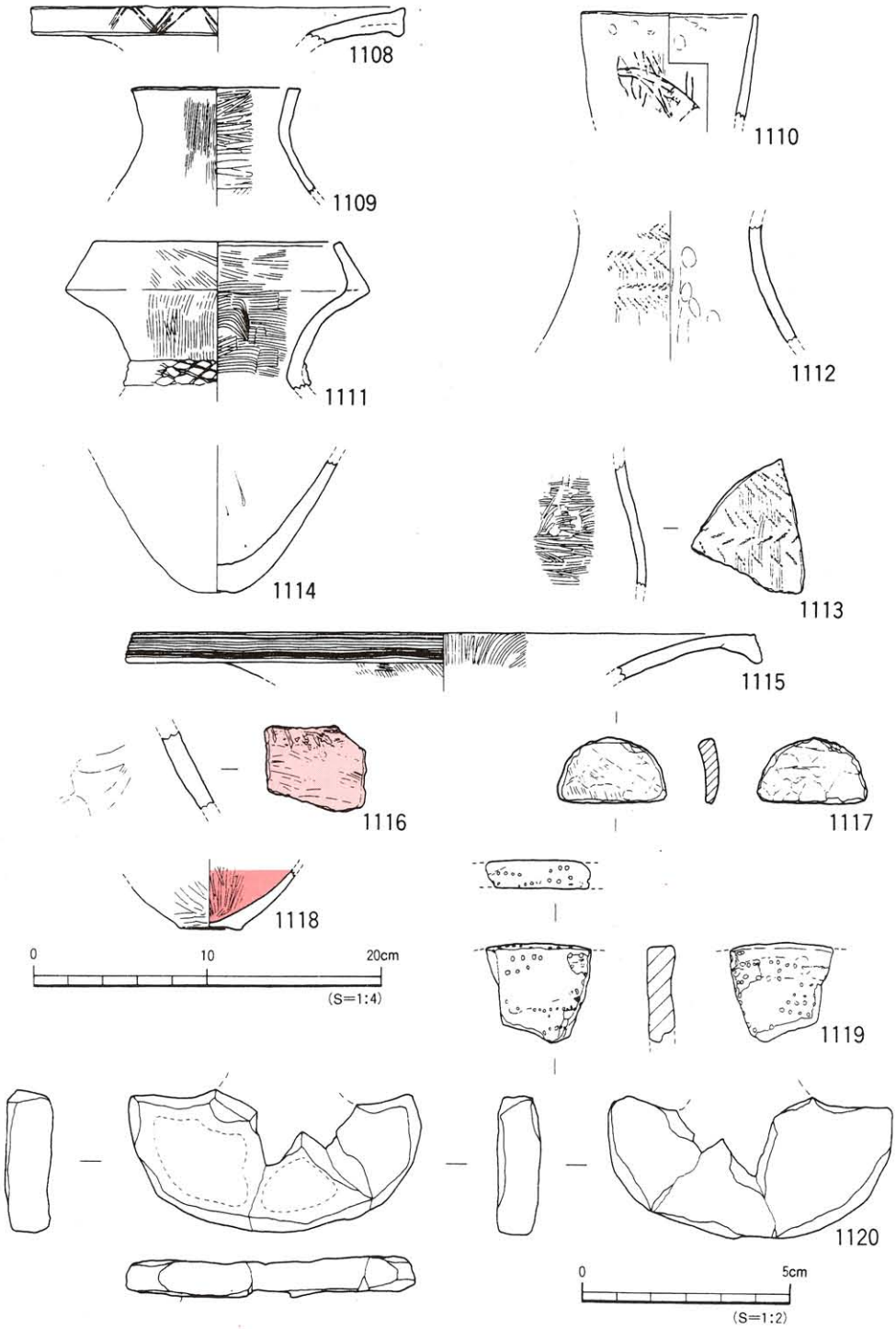
②区の南西隅の流路基底面で検出した土層である。明灰色の砂層で、幅60cm、長さ1.2m、厚さ5～10cmを測る。埋土2は色調や土質がＳＲ1最下部の堆積層（最下層Ａ）と類似していることからＳＲ2・3の基底部層もしくはＳＲ1最下部層と考えられる。そのため遺物は、両者が混在している可能性がある。本層中には安芸地方からの搬入品と思われる遺物が含まれている。

出土遺物（第165図、図版68）

1108～1113は壺形土器である。1108は口縁端面に「ハ」の字状の文様をもつ。1110は細長頸壺で、細沈線による線刻がみられる。全容は不明である。1112・1113は頸部～胴部で貝殻による羽状文が数段施されている。安芸地方からの搬入品と考えられる。1114は甕形土器の底部で、小さく凹む底部をもつ。1115は器台形土器である。大型品で、口縁端部は垂下する。1116・1118は赤色顔料が付着しているものである。1116は壺形土器と思われるもので、刺突文がみられる。1117は胴部片を転用加工したもので、半円形を呈する土製品である。1118は鉢形土器で小さく凹む底部をもつ。1119・1120は分銅形土製品である。1119は小片であるため判断が難しいが、全体の器形は円形と推定される。なお、顔面表現の一部と考えられる刺突が無数に残存しているため、上半部の一部と推定される。また、外周に向けて次第に肉厚になる。上端面・表裏面共に刺突文が残存するが、大小2種類の工具により施されている。



第164図　埋土３出土遺物実測図



第165図　埋土2出土遺物実測図

1120は器形は円形であろうが破損が激しく、大きく3分割になって出土している。顔面表現がみられないため下半部が残存したものと考えられる。

ＳＲ１上層出土と判断される遺物（第166～172図）

発掘調査時にＳＲ2として取り上げた遺物のうち、時期の大きく異なる遺物が出土する地点があった。これは③区及び⑥区のＰ11・14・17～20地点には、ＳＲ1上層が残存していたことを示すものである。よって、これらの地点から出土した遺物は、本来はＳＲ1の上層の遺物と考えられるものである。

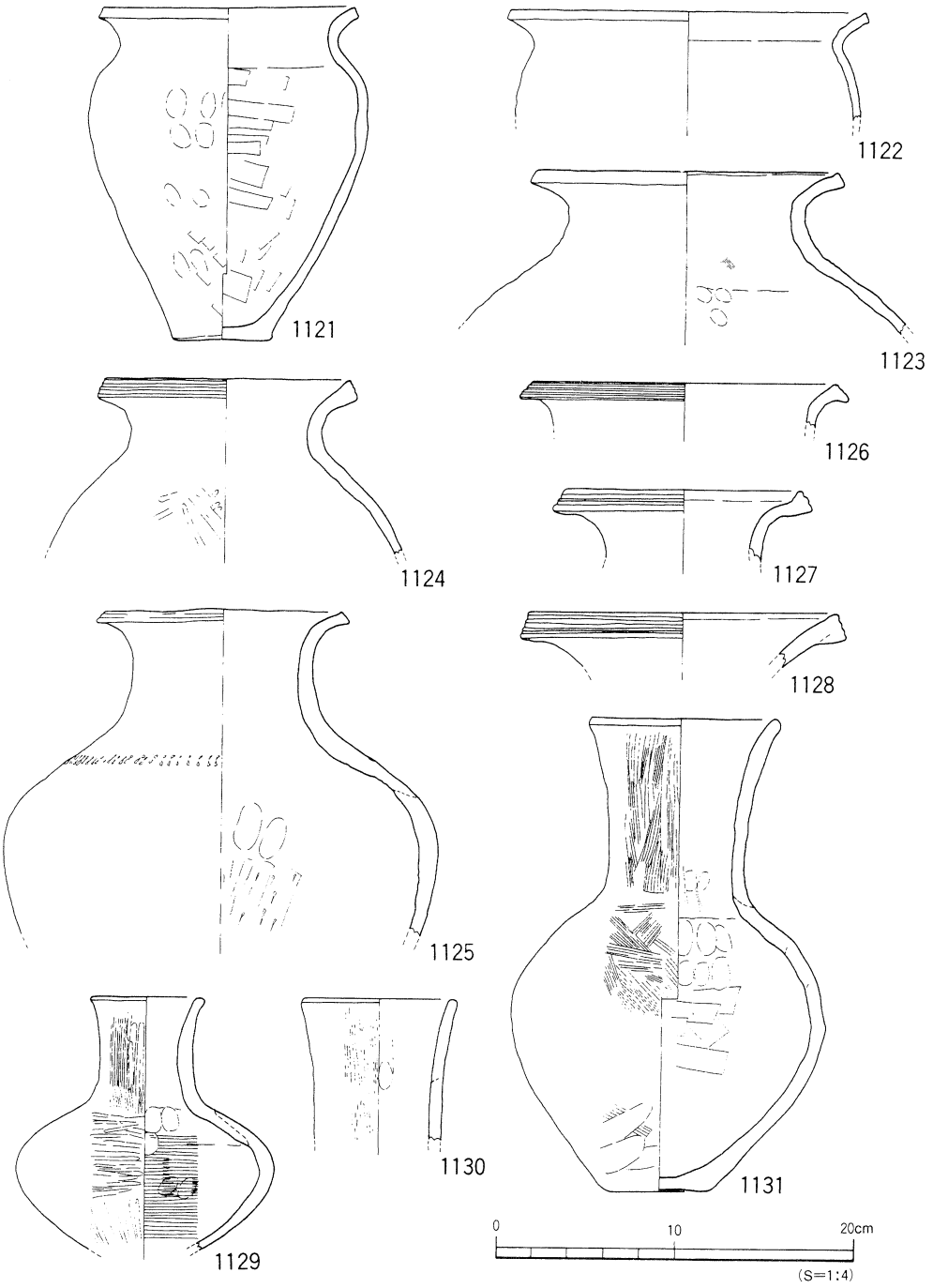
ＰＩＩ地点出土遺物（第166～169図、図版69～71）

③区の西端、Ｐ12地点の西側に出土した遺物である。遺物は約60×60cmの範囲で、完形品を含む多くの土器が重なり合った状況で出土した。壺形土器は外来的要素が強いものが多く、線刻が施されたものもある。また、台形状土製品や赤色顔料が付着する器台形土器なども出土している。これらの遺物は弥生時代後期前葉に比定される。

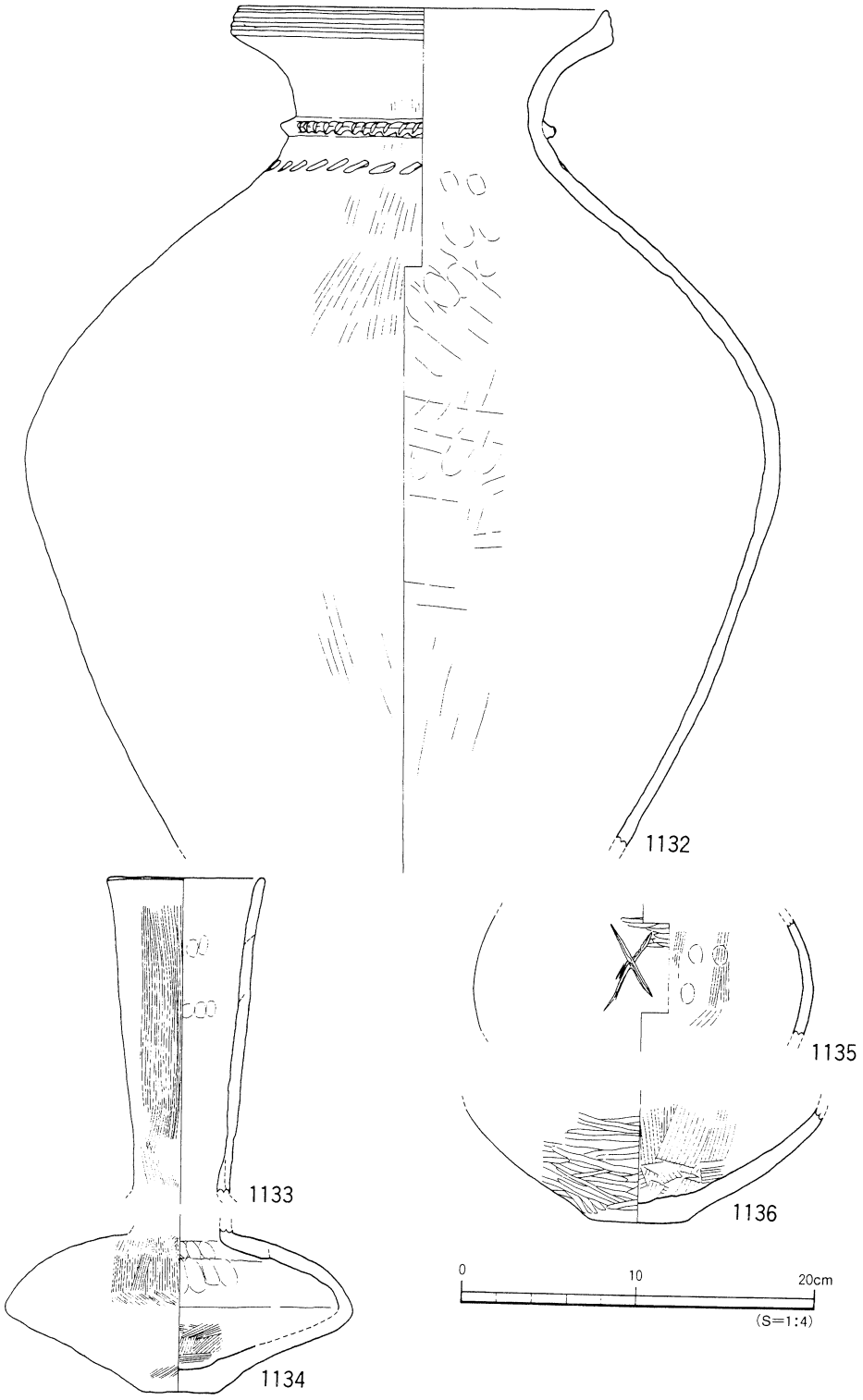
1121・1122は甕形土器である。1121は完形品で、ゆるやかに外反する口縁部に、平底の底部をものである。1123～1141は壺形土器である。1123～1128・1132は内傾～直立する頸部に、短く外反する口縁部をもつもので、1123を除き口縁部端に沈線をもっている。1125の肩部には貝殻押圧による刺突文列がある。1132は頸部に刻目凸帯、頸部下に刺突文列をもつものである。1129～1131・1133は長頸壺であり。口縁端部がわずかに外傾するものである。1133・1134は同一個体と思われる頸部と胴部であるが、接合部分がないことより、少し離して図を作成した。1134内からは種子が5個出土した。1135・1136は胴部片である。1135は胴中位部にヘラによる「X」状の線刻が施される。1136は底部で、内傾する立ち上がりをもつ平底となる。

1137～1141は外来的要素が強い壺形土器である。1137はほぼ完形品である。口縁外面に3条の凹線文、頸部下端に木口押圧文、肩部に雑なヨコ直線文が6条あり、その下に内部にタテ線をもつ半円形状の文様帯をもつものである。1138は頸部に多条の櫛描直線文と木口押圧による刺突文列を2段もつものである。施文方法より安芸～備後地方のものと考えられる。1139は頸部～胴部境に刺突文と櫛描波状文をもつものである。

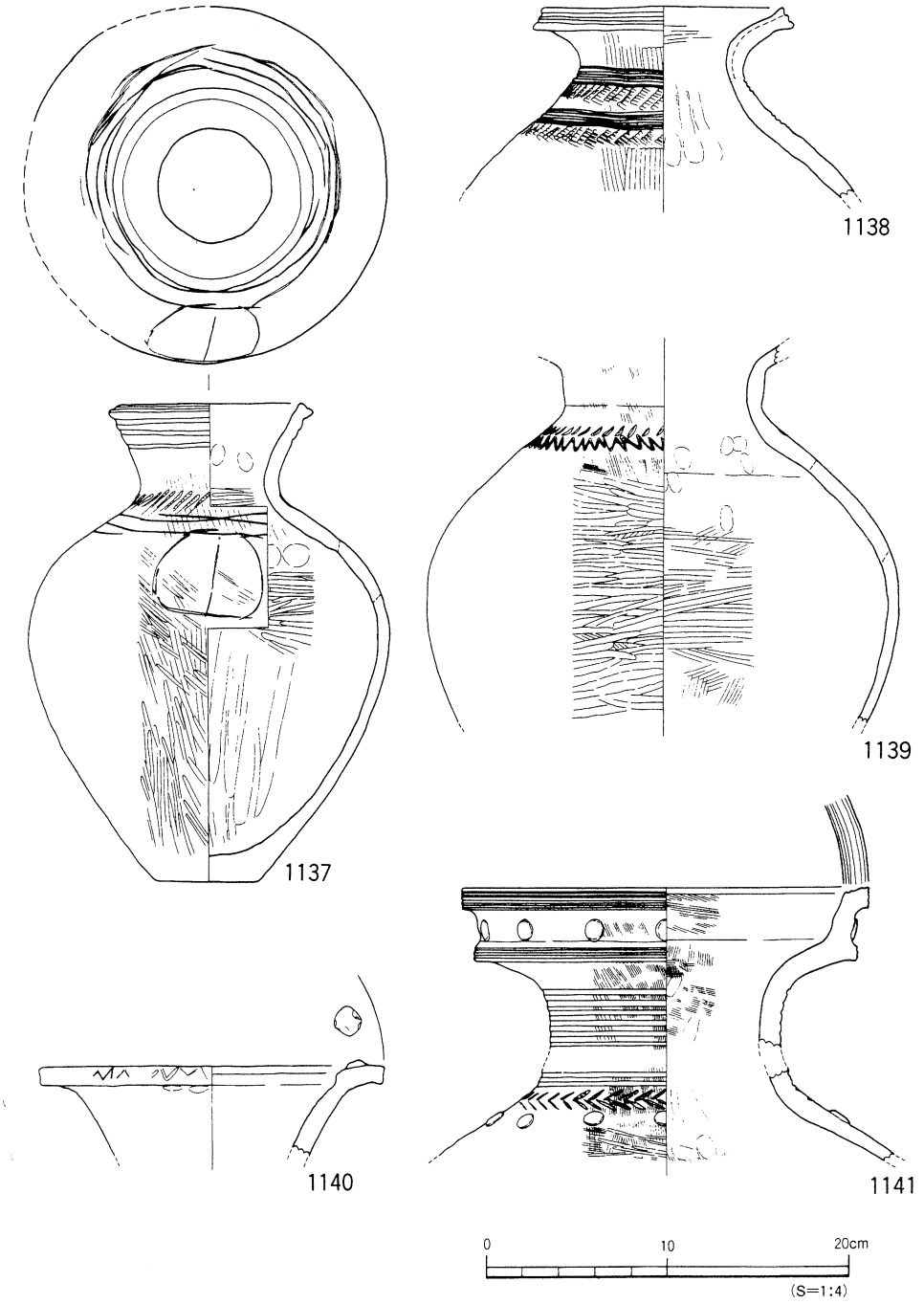
1140は口縁端部が厚く、上面に小さい粘土塊の浮文をもつものである。山形文と円形浮文より東九州地方のものと考えられる。1141は頸部下半を一部欠くものである。口縁部外面に沈線と円形浮文、頸部～胴部に木口押圧による羽状文と円形浮文をもつものである。1142～1146は鉢形土器である。1142は大型品、1143～1146は小型品である。1145は直口口縁となる。1147・1148は高坏形土器である。1149はいわゆる台形状土製品であり、突出部と厚い器壁をもつ。1150は復元完形品の器台形土器である。赤色顔料が付着する。口縁上面に凹線文がみられる。また、脚端面に竹管文をもつ。



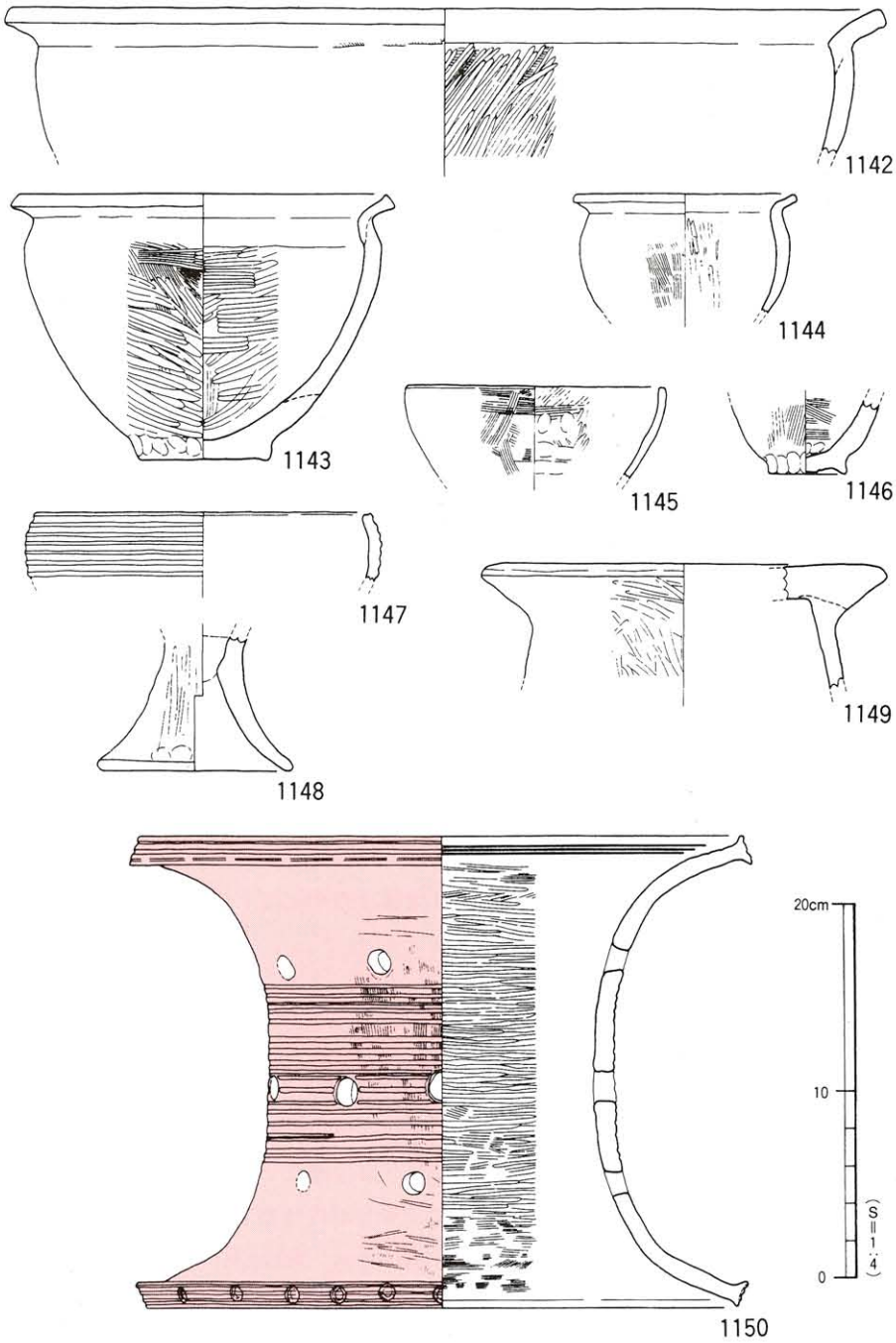
第166図　SR 1上層（③区 P 11）出土遺物実測図（1）



第167図　SR1上層（③区P11）出土遺物実測図（2）



第168図　SR 1上層（③区 P 11）出土遺物実測図（3）



第169図　SR 1上層（③区 P 11）出土遺物実測図（4）

Ｐ14地点出土遺物（第170・171図、図版72・73）

③区の南西隅、流路壁体付近に出土した遺物である。遺物は60×100cmの範囲で、まとまって出土した。遺物には、完形品を含む壺形土器の出土が他の器種にくらべ多くみられた。

1151～1155は甕形土器である。1152・1153は胴上半部に刺突文をもつものである。1156～1171は壺形土器である。1156～1159は大～中型品で、1157は口縁部上部が剝離し、器形が判別しないものである。1160～1167は中～小型品で、筒状の頸部に、短く外反する口縁部をもつものである。1162の頸部下には工具による刺突文と、爪による刺突文列がみられる。1166は完形に近いものである。1167は頸部に山形文と刺突文をもつものである。1168～1171は壺形土器の底部片である。丸みをもった平底1168～1170と上げ底1171がある。1172は高坏形土器の脚部で太い柱部をもつものである。

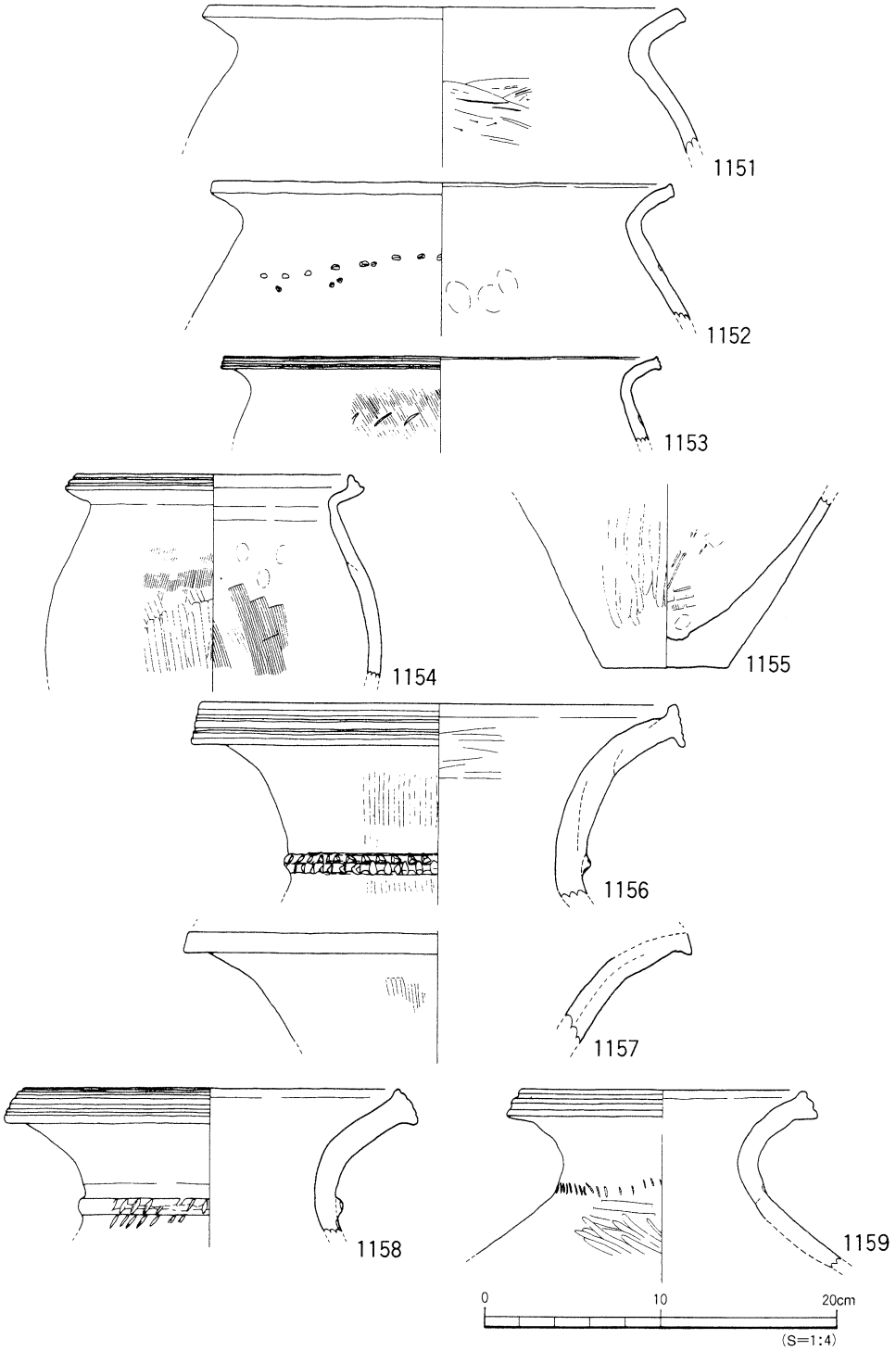
Ｐ17～20地点出土遺物（第172図、図版73）

Ｐ17～19地点の出土遺物は③区、Ｐ20地点の出土遺物は⑥区の流路壁体付近から出土した遺物である。特にＰ18、Ｐ19、Ｐ20地点出土の遺物は形態や施文手法が特異なものであり、外来的要素の強いものである。

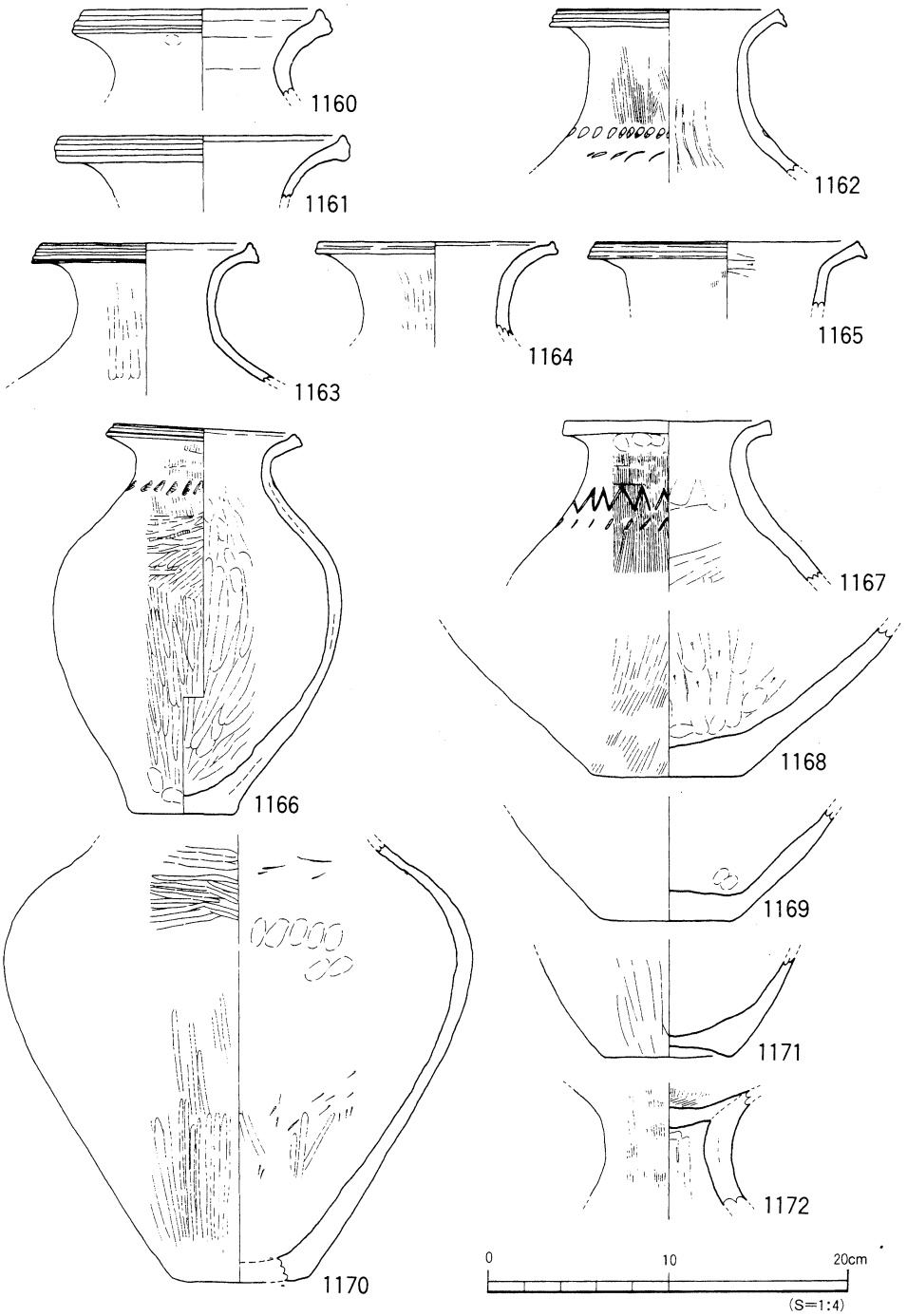
1173～1179はＰ17地点で出土したものである。1173～1176は甕形土器、1177～1179は高坏形土器である。1173・1174の甕形土器には口縁部に沈線文を1～2条もつ。高坏形土器1177～1179の口縁部と裾部には凹線文をもつ。1180・1181はＰ18地点で出土したものである。1180は壺形土器、1181は甕形土器である。1180は頸部に凸帯と小さい棒状浮文をもっており、平野の施文手法とは異なるものである。1182はＰ19地点で出土したものである。壺形土器で、頸部に上から貝殻押圧文、刻目凸帯、櫛描波状文をもち、施文手法が特異なものである。貝殻施文より安芸～備後地方のものと考えた。1183・1184はＰ20で出土したものである。1183は壺形土器、1184は鉢形土器である。1183は口縁部はやや拡張する。角閃石を胎土にもつことや形態などから讃岐地方のものと考える。

ＳＸ３（第173図、図版26・27）

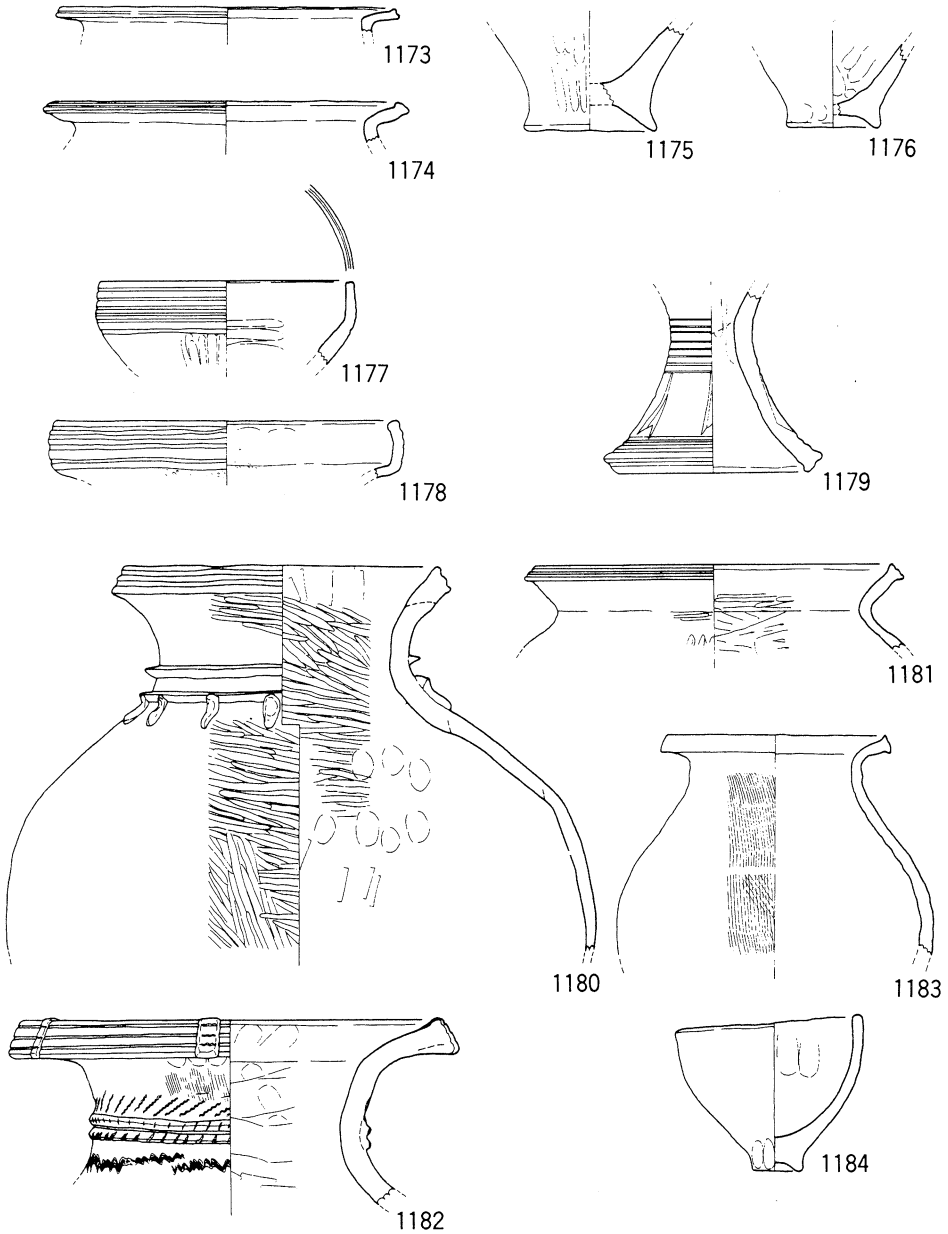
調査区南東隅、ＳＲ2完掘後、⑧区で検出した土器溜まりである。遺物はＳＲ1の上面にあり、ＳＲ2とＳＲ1の中間に位置する。遺物は2.7×4.2mの範囲にあり、遺物は押しつぶされ、重なり合う状況で大量に出土している。明確な掘り方は確認できなかった。遺物は破片が多く、投棄された様相がみうけられる。ＳＸ3からは弥生時代後期末に比定される土器と、石器では加工斧、有溝石錘などが出土している（Ｐ294・295，第276図）。土器には、壺形土器や鉢形土器の中に外来的要素が強い土器が出土しているほか、鉢形土器の内外面に赤色顔料が付着するものが多くみられた。



第170図　SR1上層(③区P14)出土遺物実測図(1)

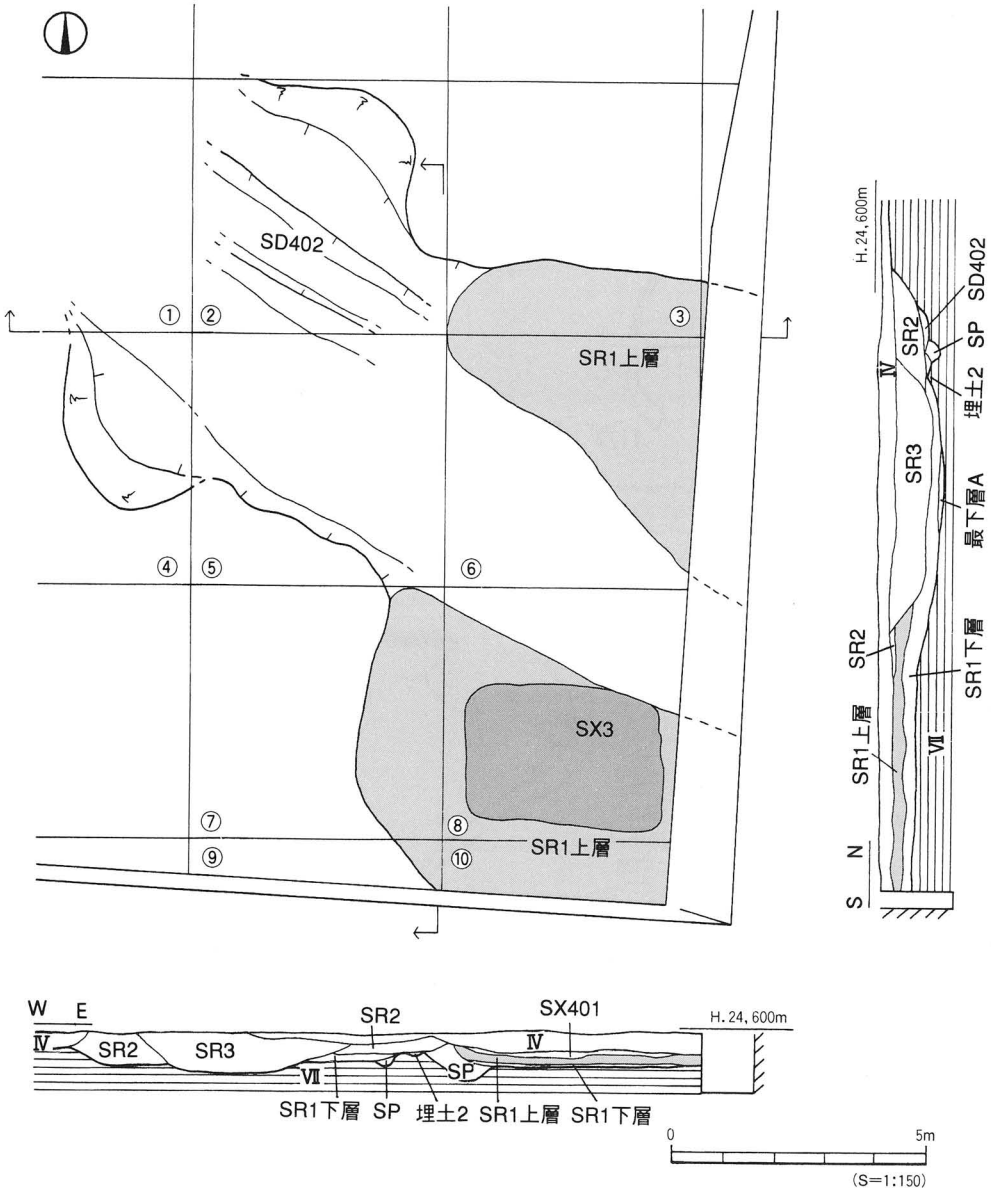


第171図　SR1上層（③区P14）出土遺物実測図（2）



P17：1173～1179
P18：1180・1181
P19：1182
P20：1183・1184

第172図　SR 1上層（③・⑥区 P 17～20）出土遺物実測図

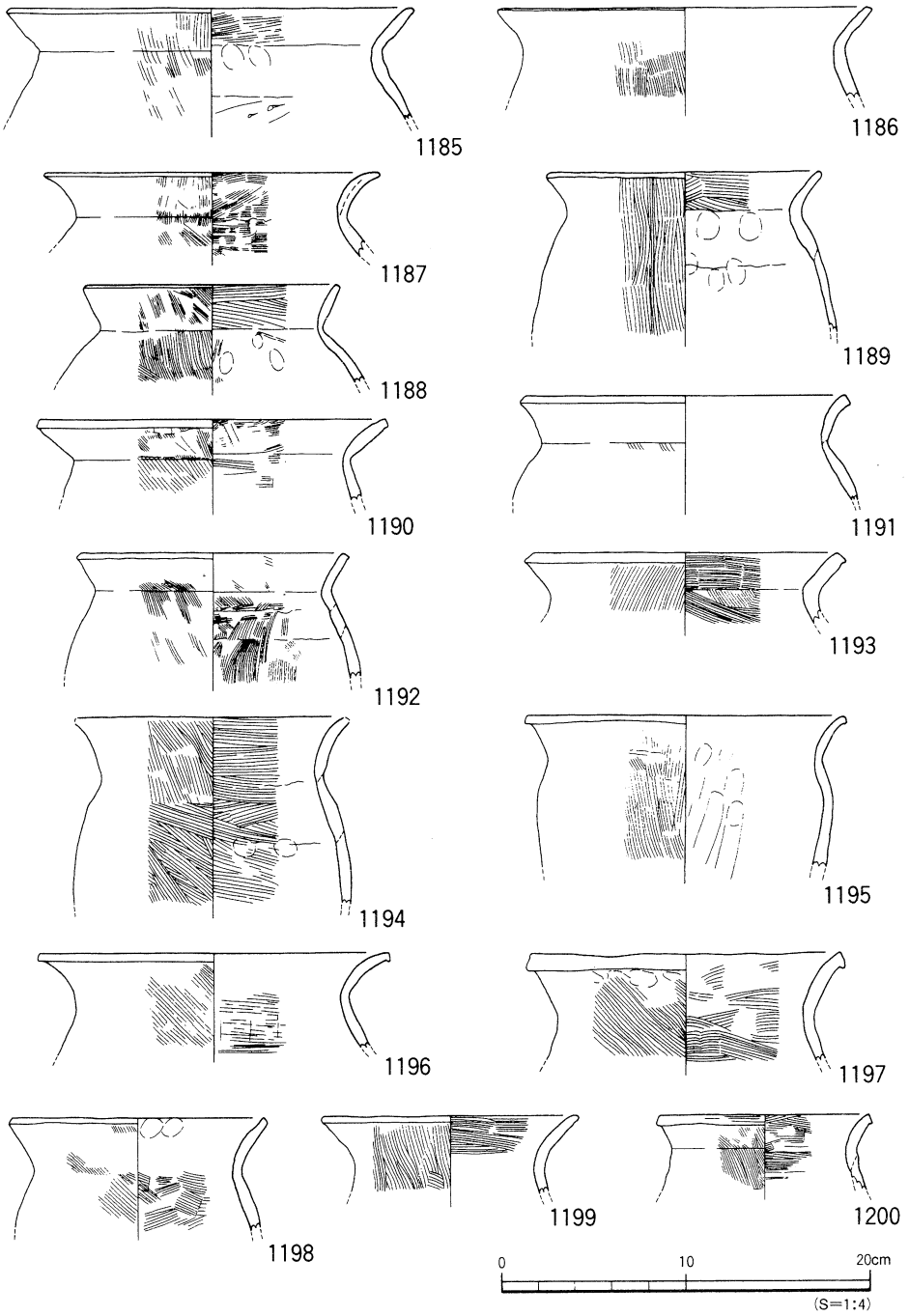


第173図　SX3及びSR1上層検出状況図

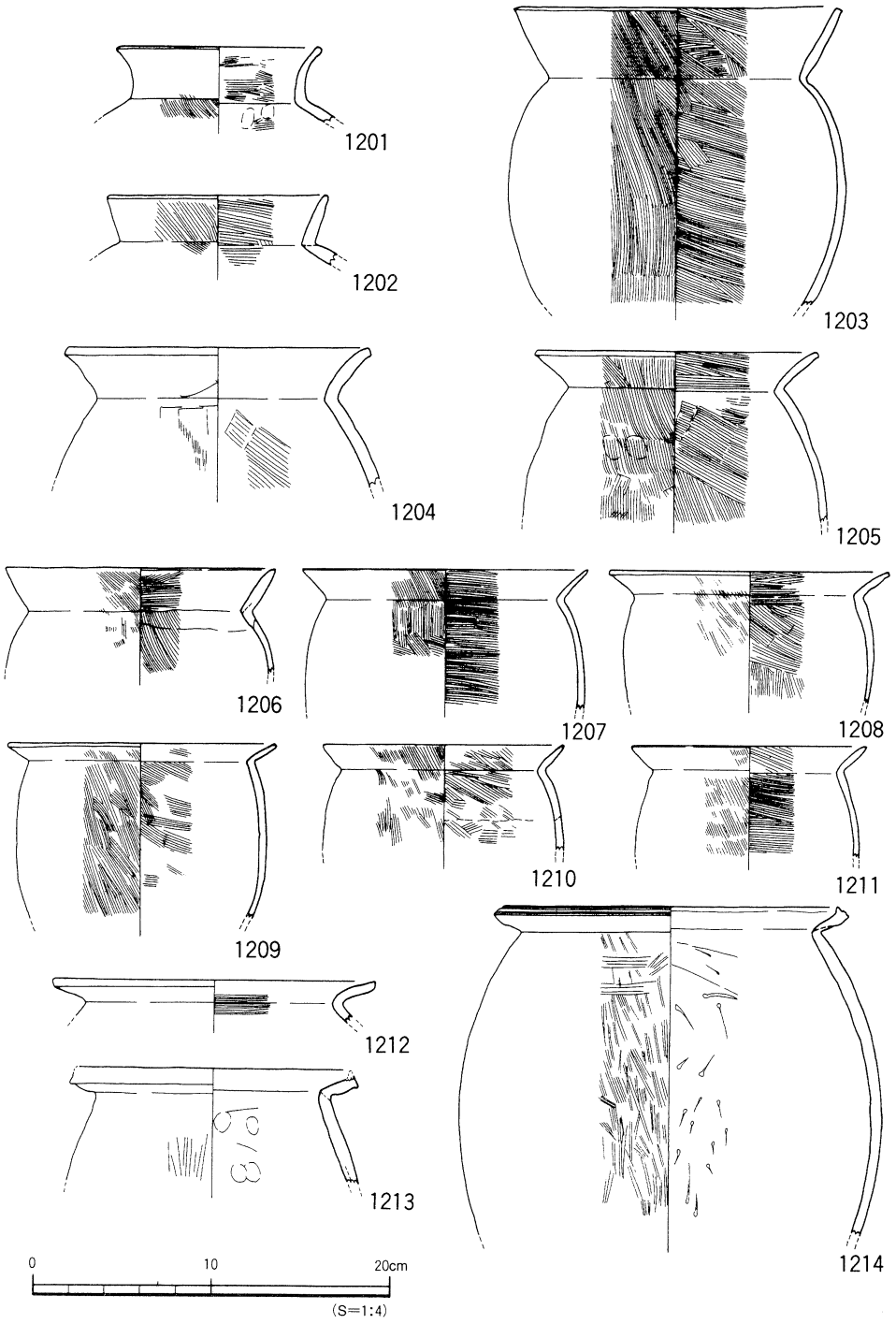
ＳＸ３出土遺物（第174～186図、図版74～79）

甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、支脚形土器ほかが出土している。

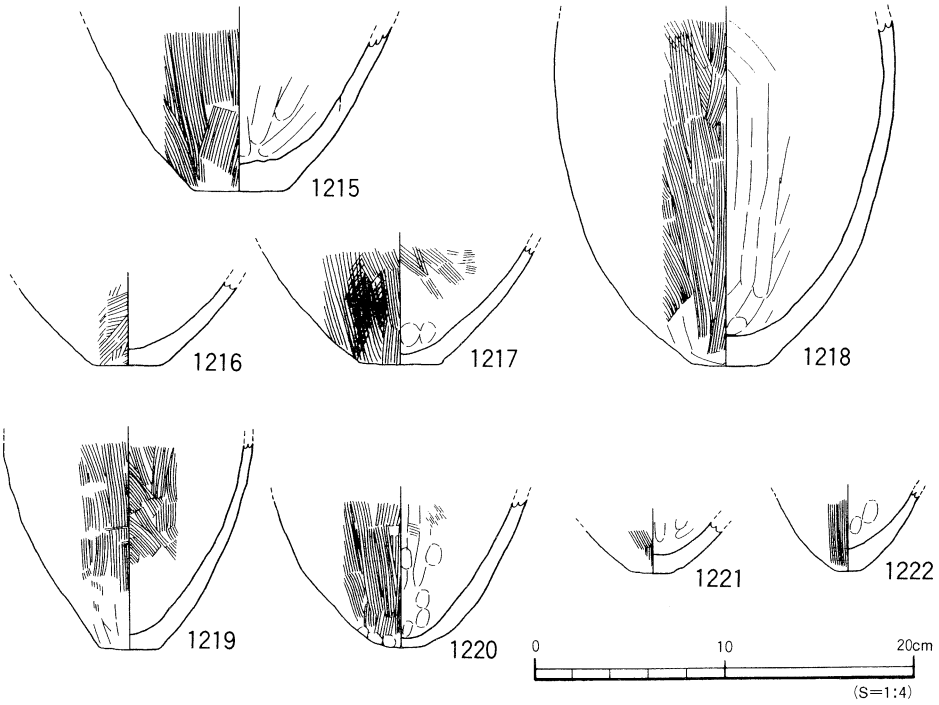
1185～1222は甕形土器である。1185～1200は口縁部がゆるやかに外反するものである。口縁部は面をなすが、曖昧なものが多い。1201～1211は口縁部内面に稜をもって外反するものである。1201・1202は口縁部が短く肩部が強く張るものである。



第174図　SX3出土遺物実測図(1)



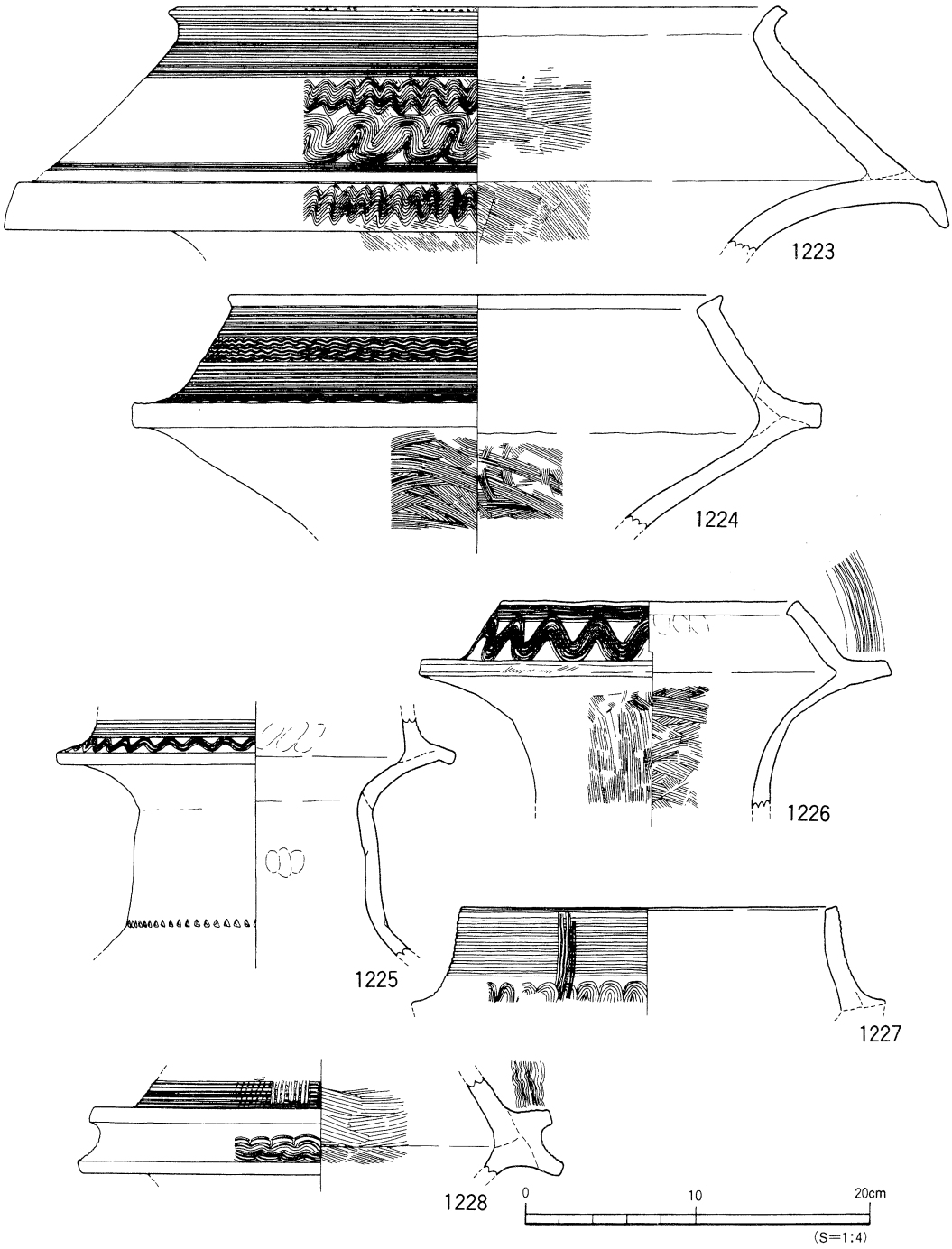
第175図　SX3出土遺物実測図(2)



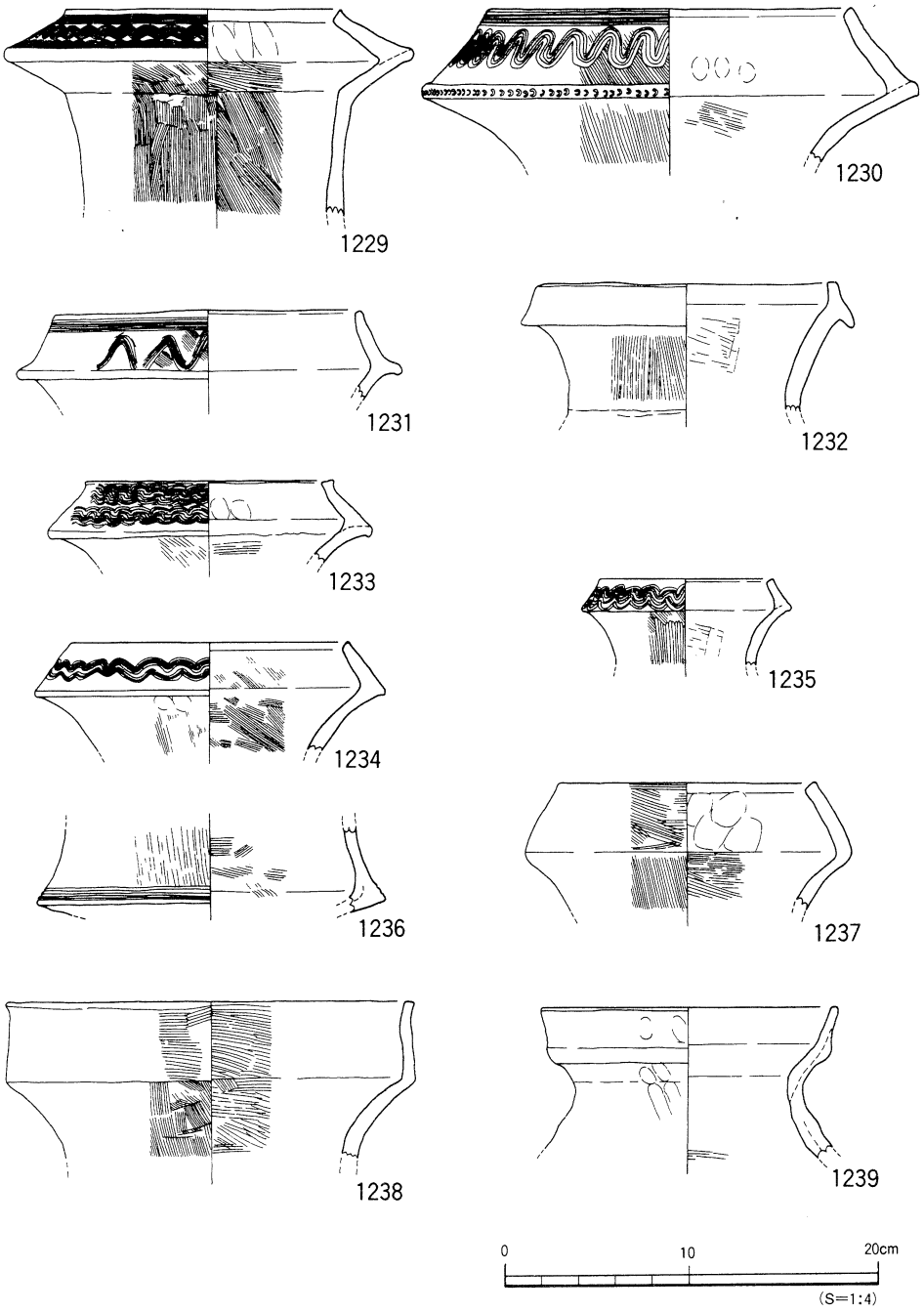
第176図　SX3出土遺物実測図(3)

1203～1205は胴部最大径が口縁部径を凌ぐものである。1206～1211は口縁端部が細く尖るもので、胴部最大径は口縁部径と同じか、少し小さいものである。1212は小片で、器壁が薄く、口縁部は内湾して立ち上がるものである。1213は口縁部は短く、「L」字状に外反するものである。1214は古い形態のもので、口縁部端部に2条の沈線をもつ。1215～1222は底部である。丸みをもった平底となる。1220・1222は小さい平底をもつ。

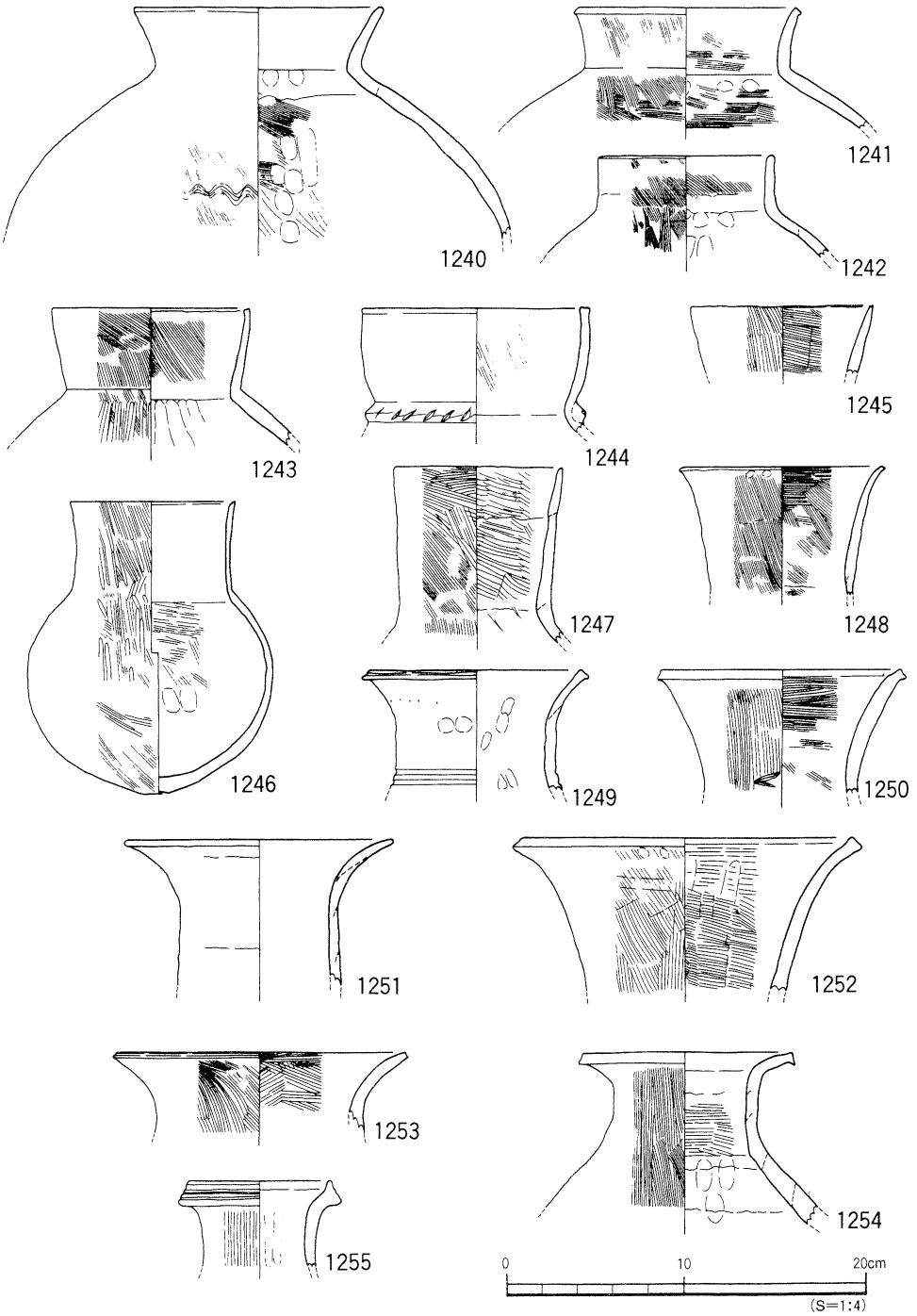
1223～1270は壺形土器である。1223～1239は複合口縁壺である。1223～1228は口縁接合部が突出し面をもつものである。1223は法量が最大のものであり、加飾が著しい。1225は頸部が直立ぎみに立ち上がるもので出土数は極少数である。1228は異形品である。口縁接合部の上方に、さらに突出する部分をもっている。1229～1234は口縁接合部が曖昧な面となるものである。1231・1232は口縁接合部が垂下しており特徴ある形態をもつ。1235～1238は接合部が稜とるものである。1236は口縁部が長く、下端部に沈線を施しており異形態である。1239は外反する口縁部をもつもので出土は1点である。1240～1244は短い口縁部で、直口口縁のものである。1240～1242は直線的に口頸部が立ち上がるもので、1243・1244は内湾して口頸部が立ち上がるものである。1240の胴上半部には櫛描波状文が施され、外来的要素が強いものである。1245～1247は直線的に立ち上がる長い口頸部をもつものである。



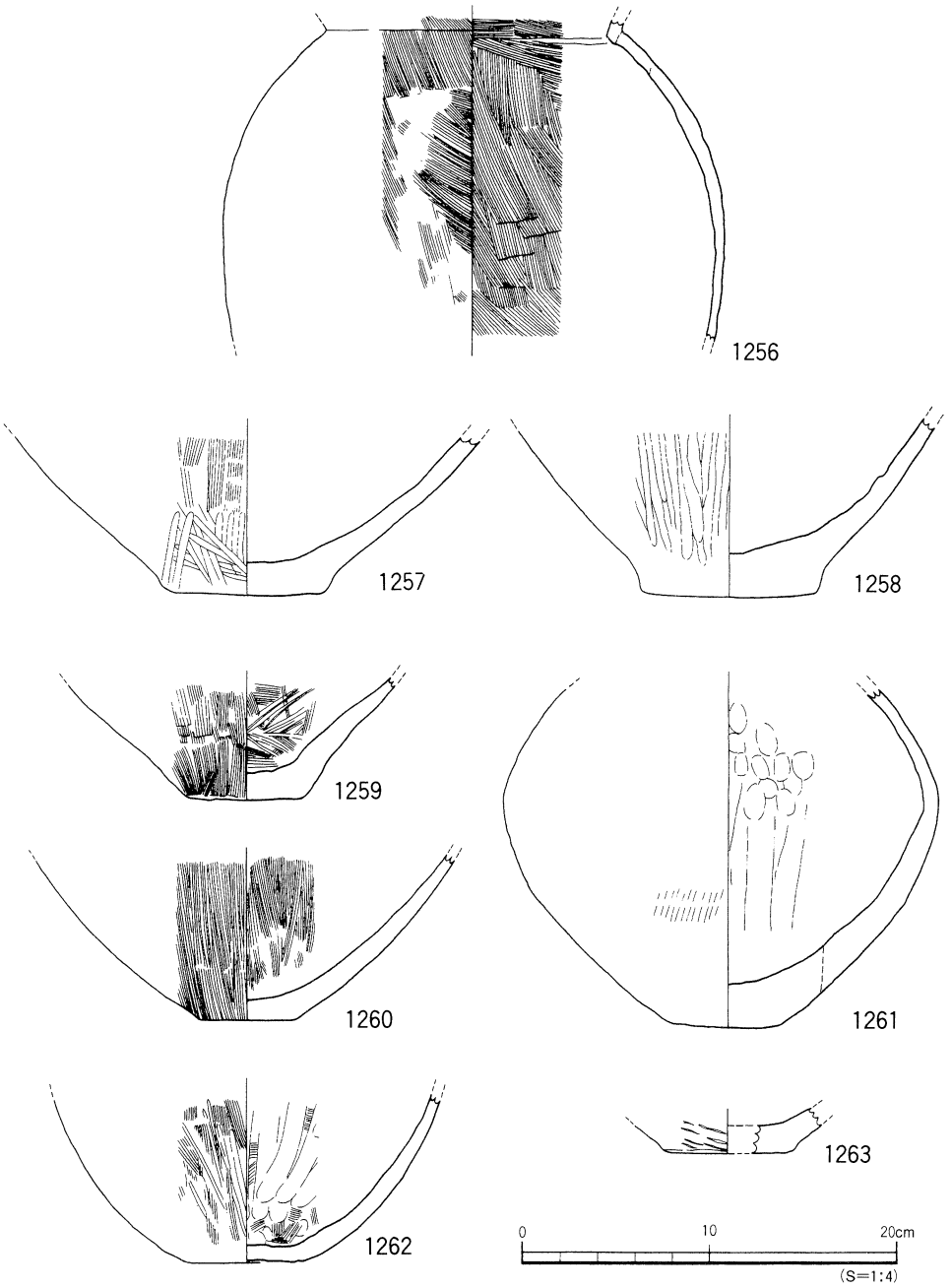
第177図　SX3出土遺物実測図(4)



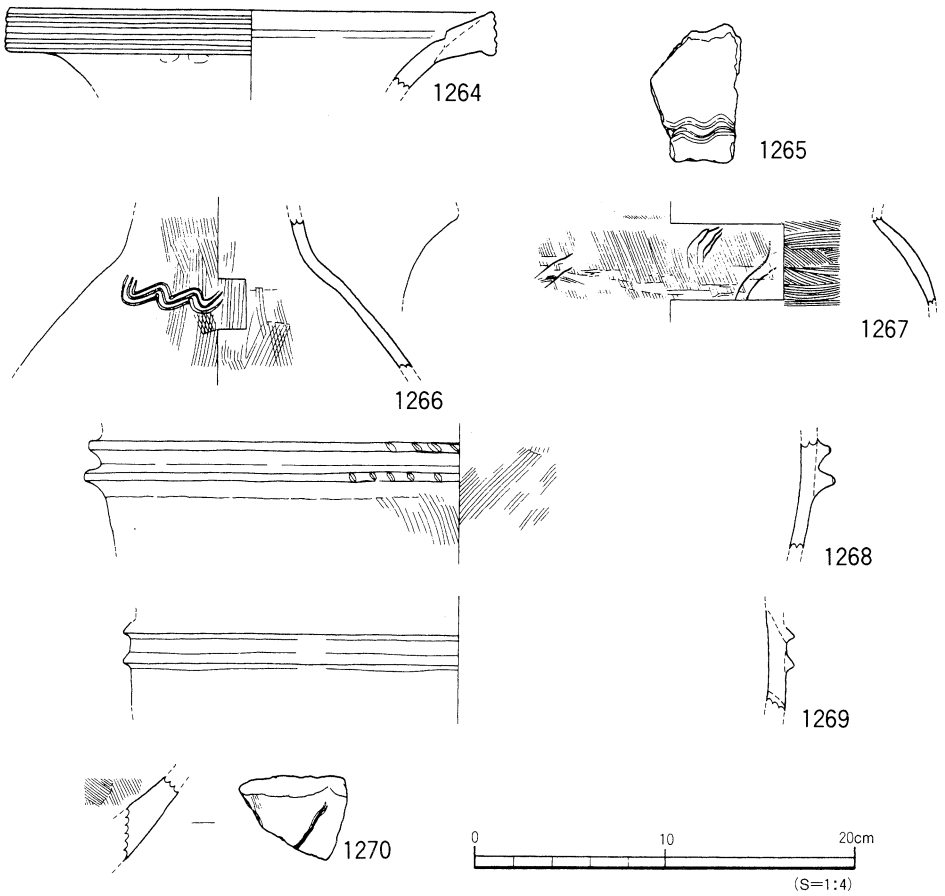
第178図　SX3出土遺物実測図(5)



第179図　SX3出土遺物実測図(6)

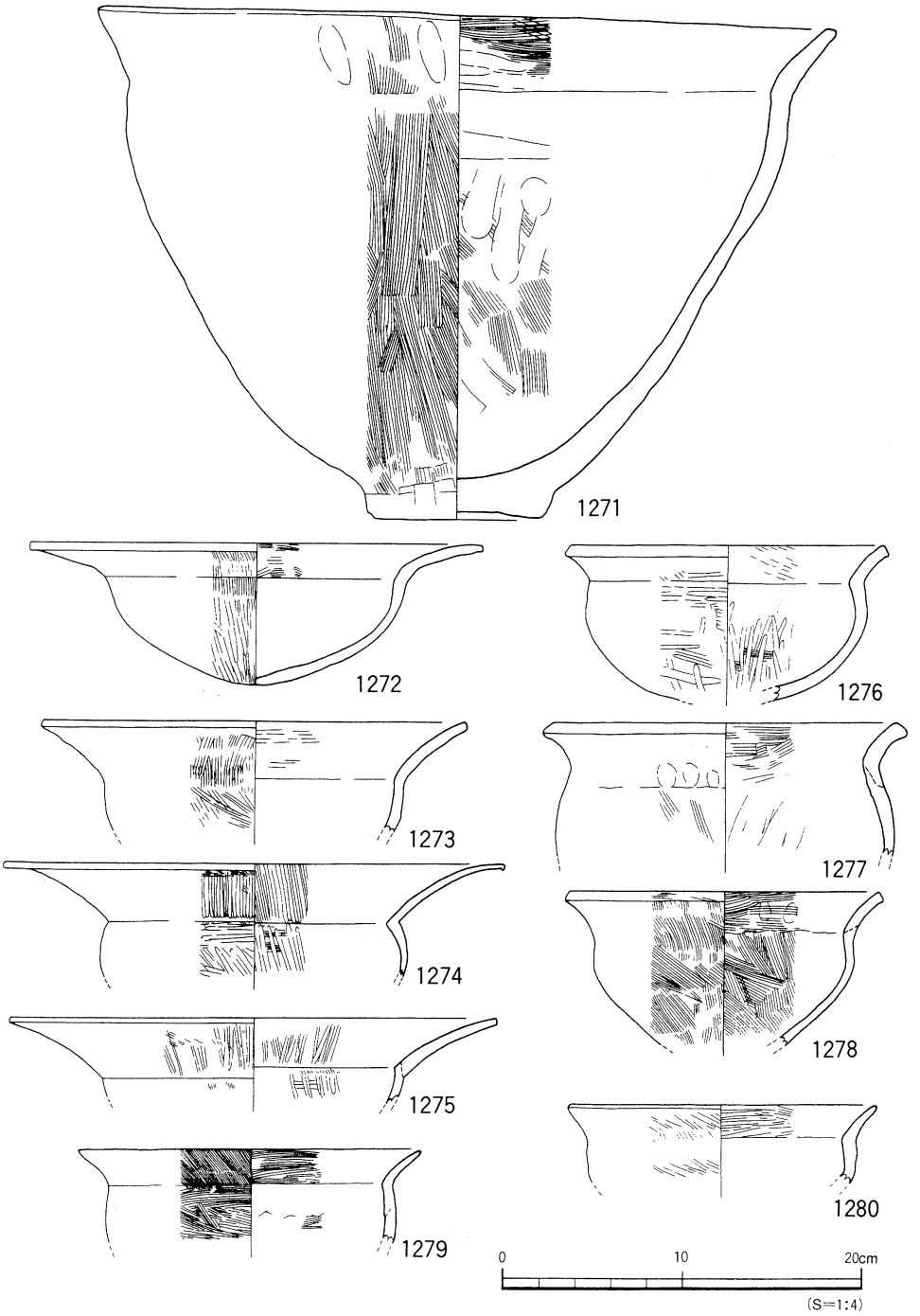


第180図　SX3出土遺物実測図(7)



第181図　SX3出土遺物実測図(8)

1246は小型品で、頸胴部の境が曖昧で、底部は小さく凹むものとなる。1248～1253は長い口頸部をもつもので、口縁部がゆるやかに外反するものである。1249は頸部の上半部に刺突文をもっている。1254・1255は古い形態のものである。1254は直立する頸部に大きく外反する口縁部をもつものである。1255は口縁端部が拡張され、沈線をもつものである。1256～1263は壺形土器の胴部である。大型品は突出する厚い平底、中～小型品は平底となる。1264～1270は特異な土器である。1264は口縁内面に段をもち、口縁端面に沈線をもつものである。胎土・色調もやや異なるものである。1265・1266は胴部片で櫛描波状文をもち、1240と同じ施文手法であり、外来的要素が強いものである。1267は2条が1組となる線刻が施されているもので、線が示す内容は判断できない。1268・1269は大型壺の胴部片で、凸帯を2条以上もつものである。1268は凸帯上に刻目をもっている。1268・1269ともに胎土・色調が異なり搬入品の可能性をもつ。1270は胴部下半の破片で2条1組の線刻をもつものである。

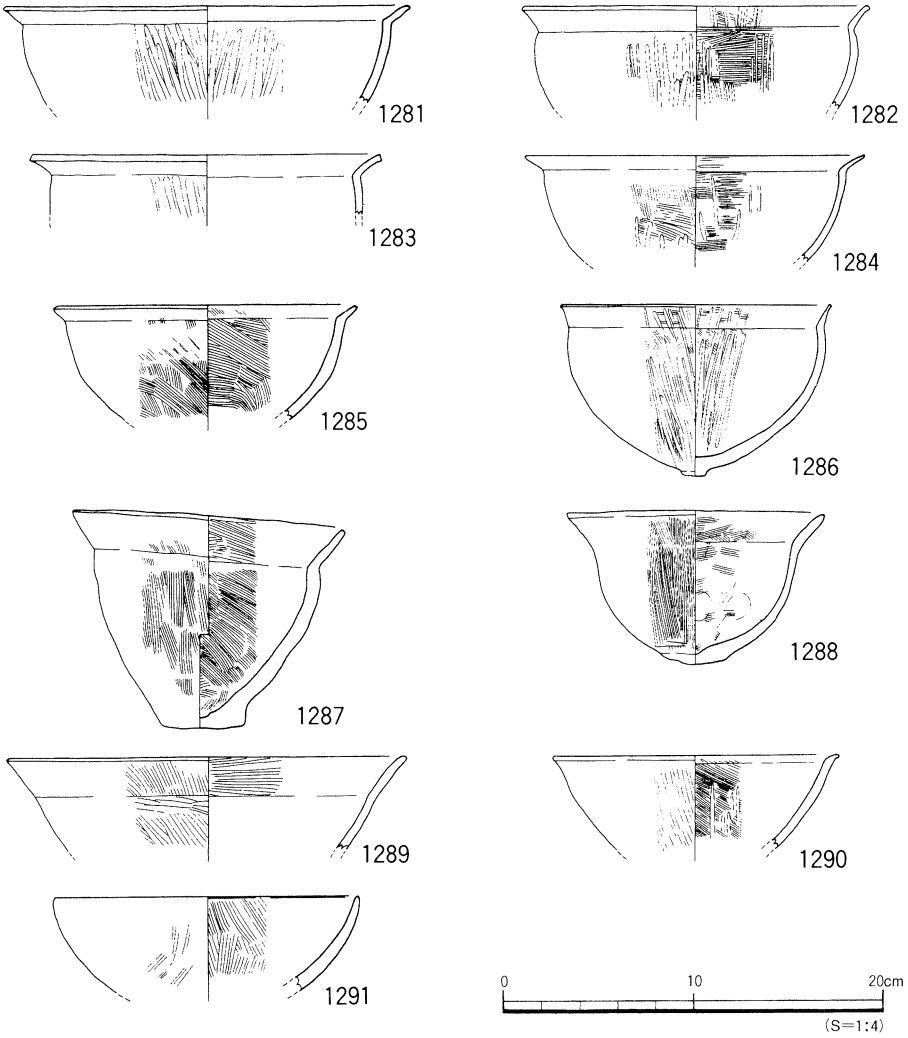


第182図　SX3出土遺物実測図(9)

1271～1305は鉢形土器である。1271～1290は外反する口縁部をもつものである。1291は直口口縁をもつものである。1292～1302は鉢形土器の底部である。1292・1293は平底、1294～1296はわずかに凹む上げ底、1297～1302は小さく突出するものである。1303～1305は台付鉢の台部である。1304は器壁が薄く、細かい刷毛目で丁寧に仕上げられたものである。

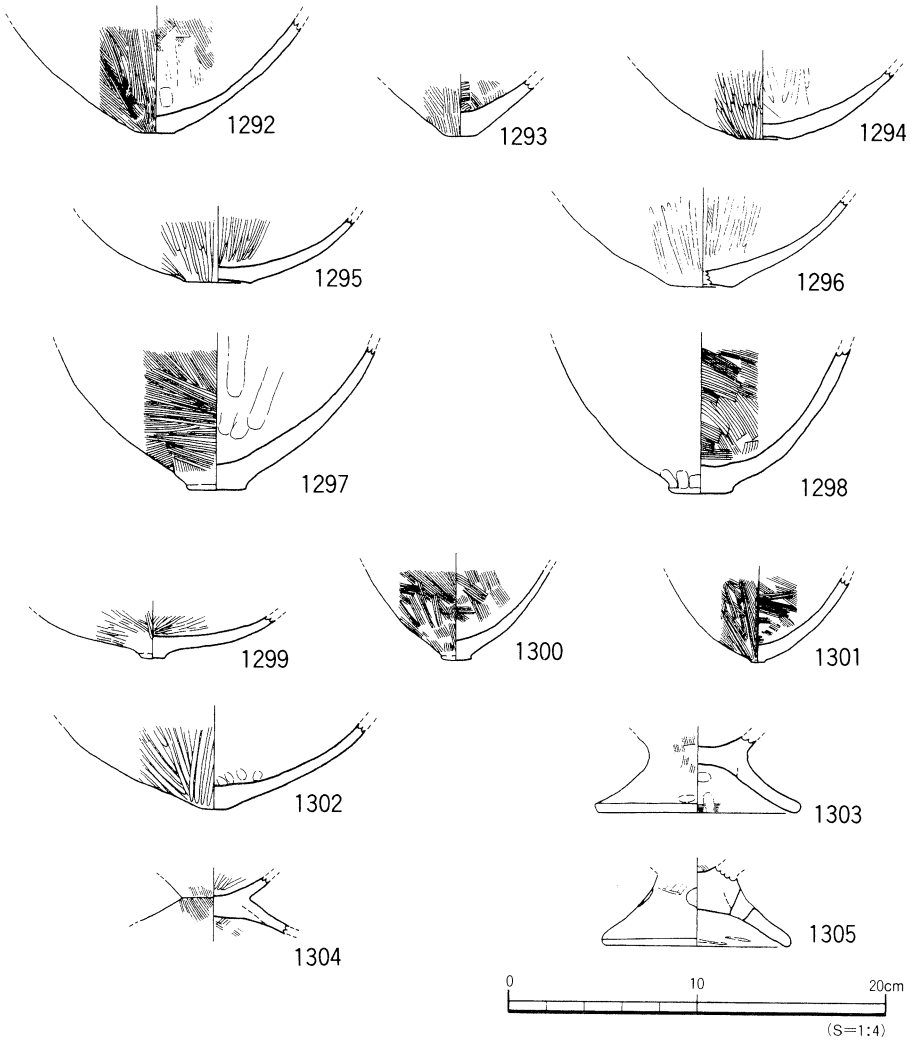
1306～1316は鉢形土器ないし甕形土器で、赤色顔料が付着しているものである。

1317～1327は高坏形土器である。1317・1318は坏部である。大きくひらく口縁部をもつ。坏底部と口縁部の接合部はやや立ち上がりをもつものである。

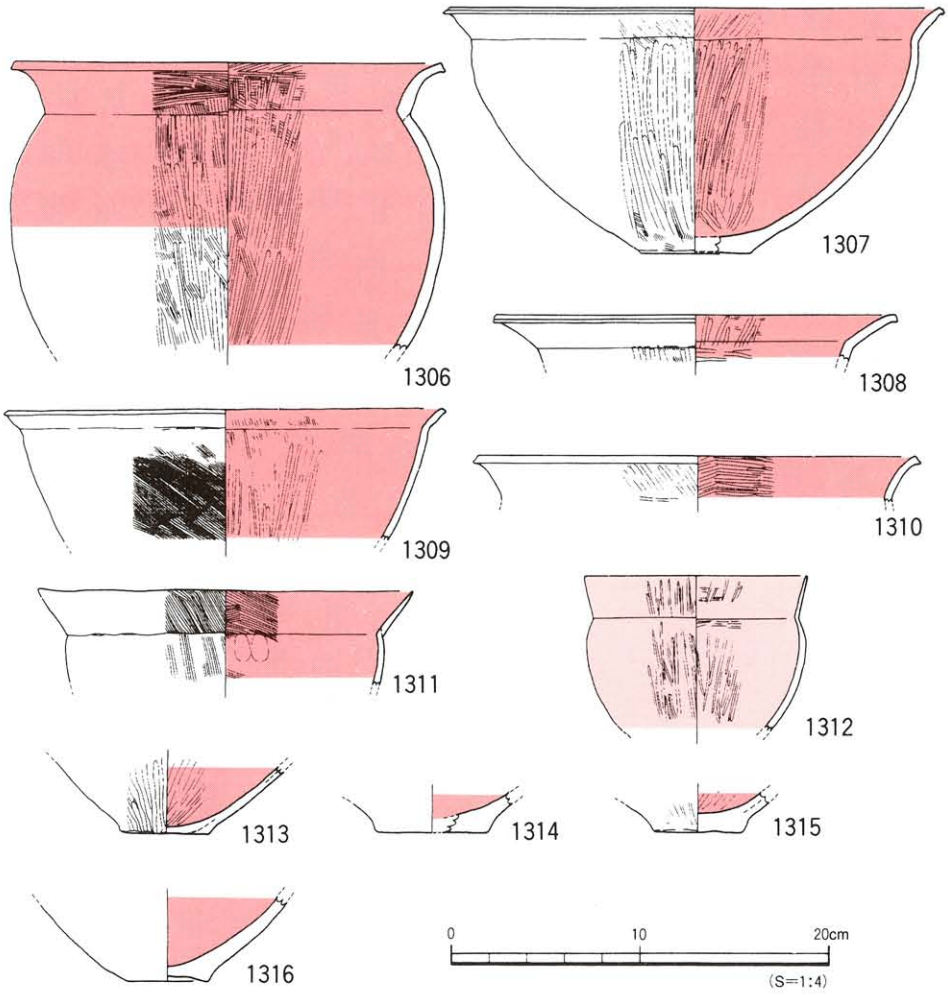


第183図　SX3出土遺物実測図(10)

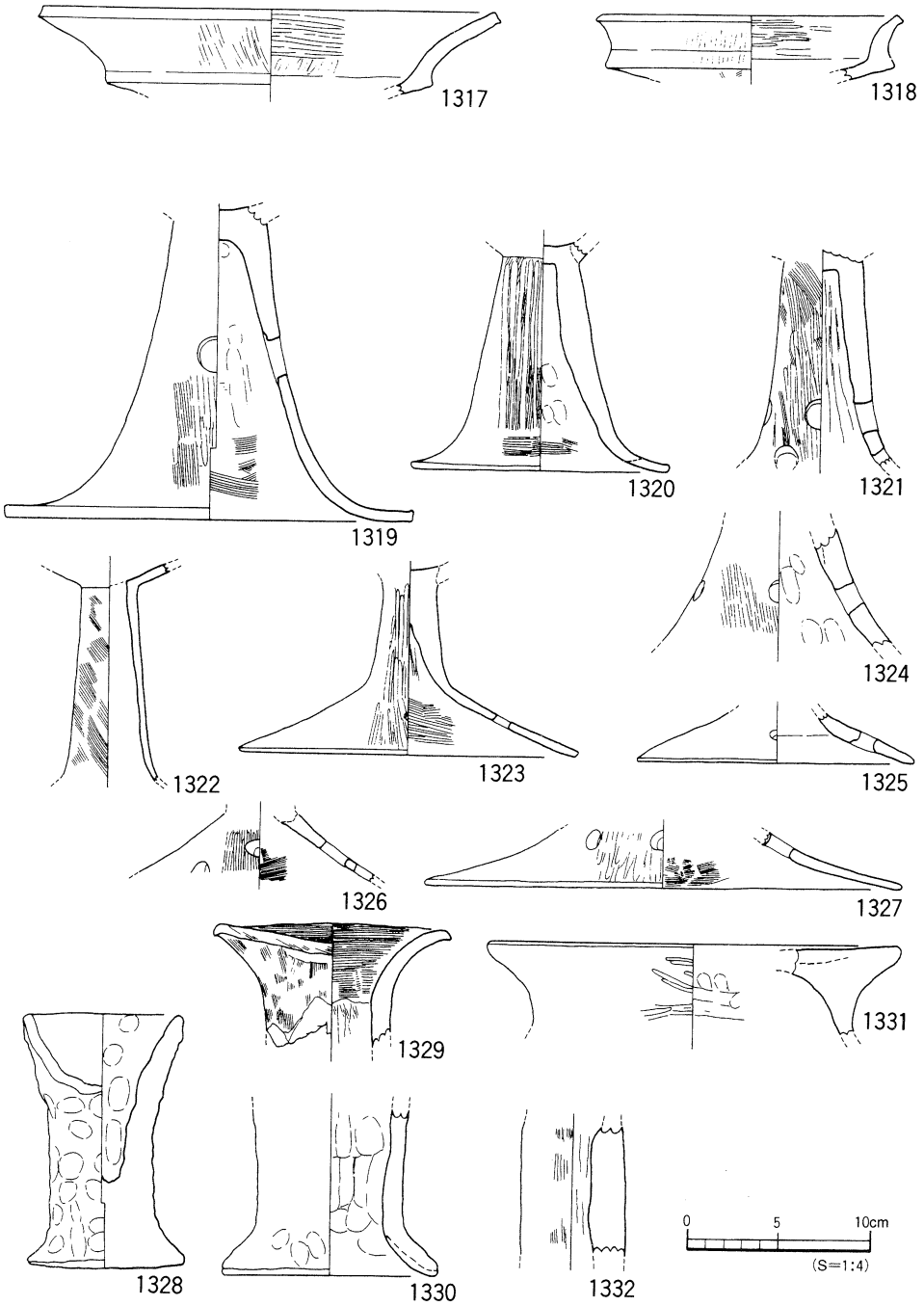
1319～1327は脚部である。1319～1321は長い柱部に、やや短い裾部をもつものである。1322は長い柱部をもつが、器壁が著しく薄く、細かい刷毛目をもつものである。1323は直立する短い柱部に長く大きくひろがる裾部をもつ。ヘラミガキが丁寧にされる。1324はやや器壁の厚いもので、柱部が円錐状となるものである。1325はやや長く、大きくひろがる裾部をもつものである。1326・1327は高坏形土器ないし脚台付鉢の裾部となるものである。器高が低く、大きく裾部がひろがる。1328～1330は支脚形土器である。1328・1329は受部にU字状の傾斜部をもつ。1331はいわゆる台形状土製品である。1332は厚い器壁をもつ筒状の土製品である。器種不明。



第184図　SX3出土遺物実測図(11)



第185図　SX3出土遺物実測図(12)



第186図　SX3出土遺物実測図(13)

ＳＲ１

ＳＸ3の遺物を取り上げた後、ＳＲ1の調査を始めた。ＳＲ1は調査区南東部②～⑩区に検出した遺構である。調査地外に続くため全容は不明である。規模は現況で最大幅12m、深さは最深部で約80cmを測る。断面形は浅い「Ｕ」字状を呈する。

ＳＲ1は大きく2つの土壌により埋没している。上層は褐色の粘土質シルト、下層は暗灰褐色土である。さらに下層は50～60cmの堆積であり、取り上げは上・下2回に分け実施した。

また、基底面では明灰色砂層（最下層Ａ）と、小礫層（最下層Ｂ）を検出した。⑤～⑦区では上層及び下層の一部はＳＲ3により削平され、ただし⑦～⑩区では埋土は上から順に上層→下層→最下層Ａ・最下層Ｂの堆積であるが、①～⑥区では上層はほとんど検出されなかった。

遺物は上層からは完形品が多く、下層からは破片が少量出土する状況であった。概ね、上層からは弥生時代後期前葉、下層からは弥生時代中期後葉、最下層Ｂからは弥生時代中期～後期前葉に比定される土器が出土した。石器では石庖丁、石鏃、石錘などが出土している。

報告はＳＲ2の調査と同様、土壌の堆積状況が異なる南半部と北半部とに分けて記述を行う。

①　ＳＲＩ南半部（⑦～⑩区）の調査

ＳＲＩ上層（第173図、図版23・24・27・28）

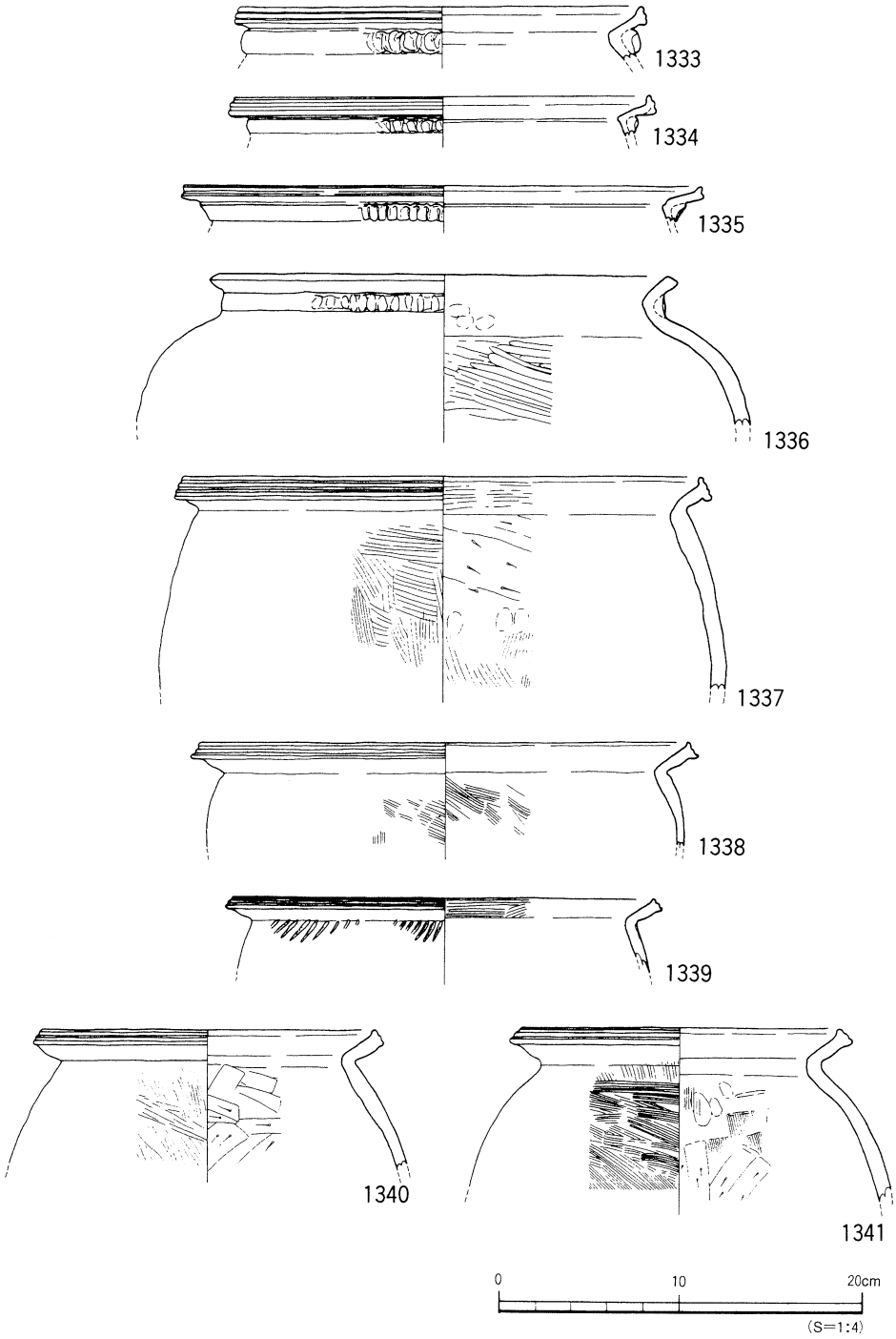
ＳＸ3の遺物を取り上げた後、ＳＲ1の上層部分の掘り下げを行った。上層は⑦、⑧、⑩区では厚さ20～40cmを測る。上層の上位では遺物の出土は極わずかであったが、下位においては遺物が大量に出土した。完形品はその場で割れた状況にあった。遺物の出土状況は良好な遺存状況から、投棄されたものと考えられる。上層からは弥生時代後期前葉に比定される土器と、石器では弧背直刃形や長方形態の石庖丁、有溝石錘などが出土した（Ｐ293・294，第275図）。土器には、讃岐や豊前～豊後地方からの搬入品と考えられるものや、赤色顔料が付着するものもある。このほか、台形状土製品、紡錘車、分銅形土製品が出土している。

なお、⑦・⑧区の境界付近では、ＳＸ3と上層の区別が困難であったため、ＳＸ3の遺物を上層遺物として取り上げたものがある（第206・207図、1522～1539）。これらの遺物は、形態により区別し「ＳＸ3と判断される遺物」として記載した。

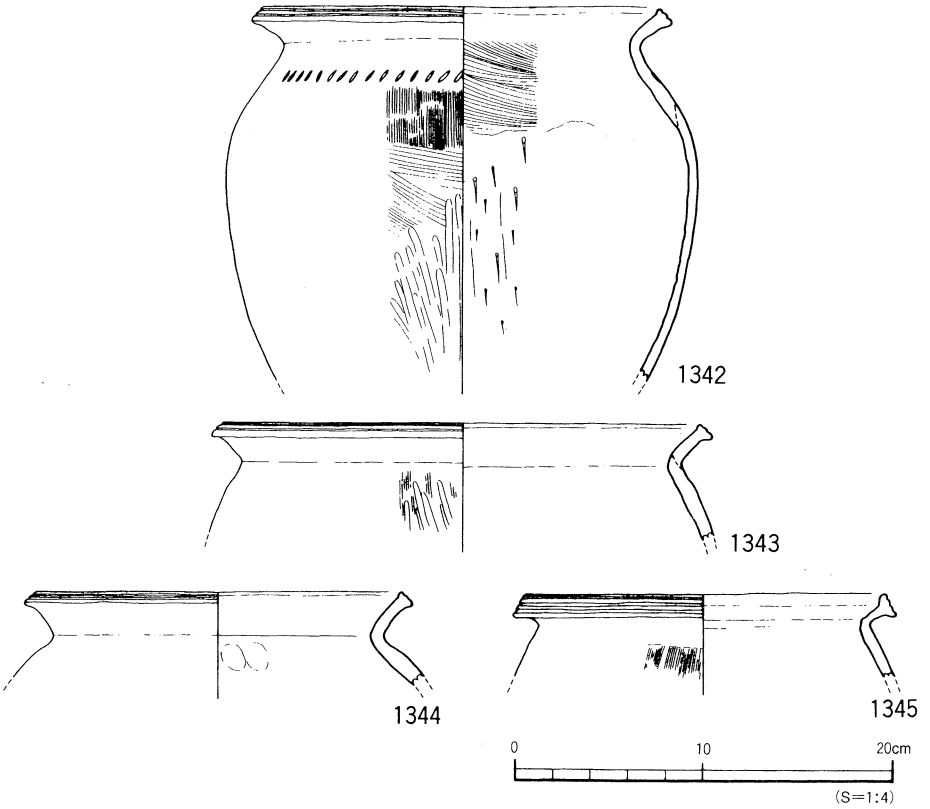
出土遺物（第187～205図、図版80～88）

甕形土器（1333～1389）

1333～1357は中～大型品である。1333～1336は頸部に刻目凸帯をもつものである。1336は肩部が強く張り、口縁端部が拡張せず、器壁が厚いことで1333～1335とは異なるものといえる。1337～1345はゆるやかに外反する口縁部に、口縁端部には沈線をもつものである。このうち1337～1339は頸部の締まりが弱いもので、よって胴部上半の張りが著しくない。また1339・1342の胴上半部には「ノ」字状の文様が施されている。

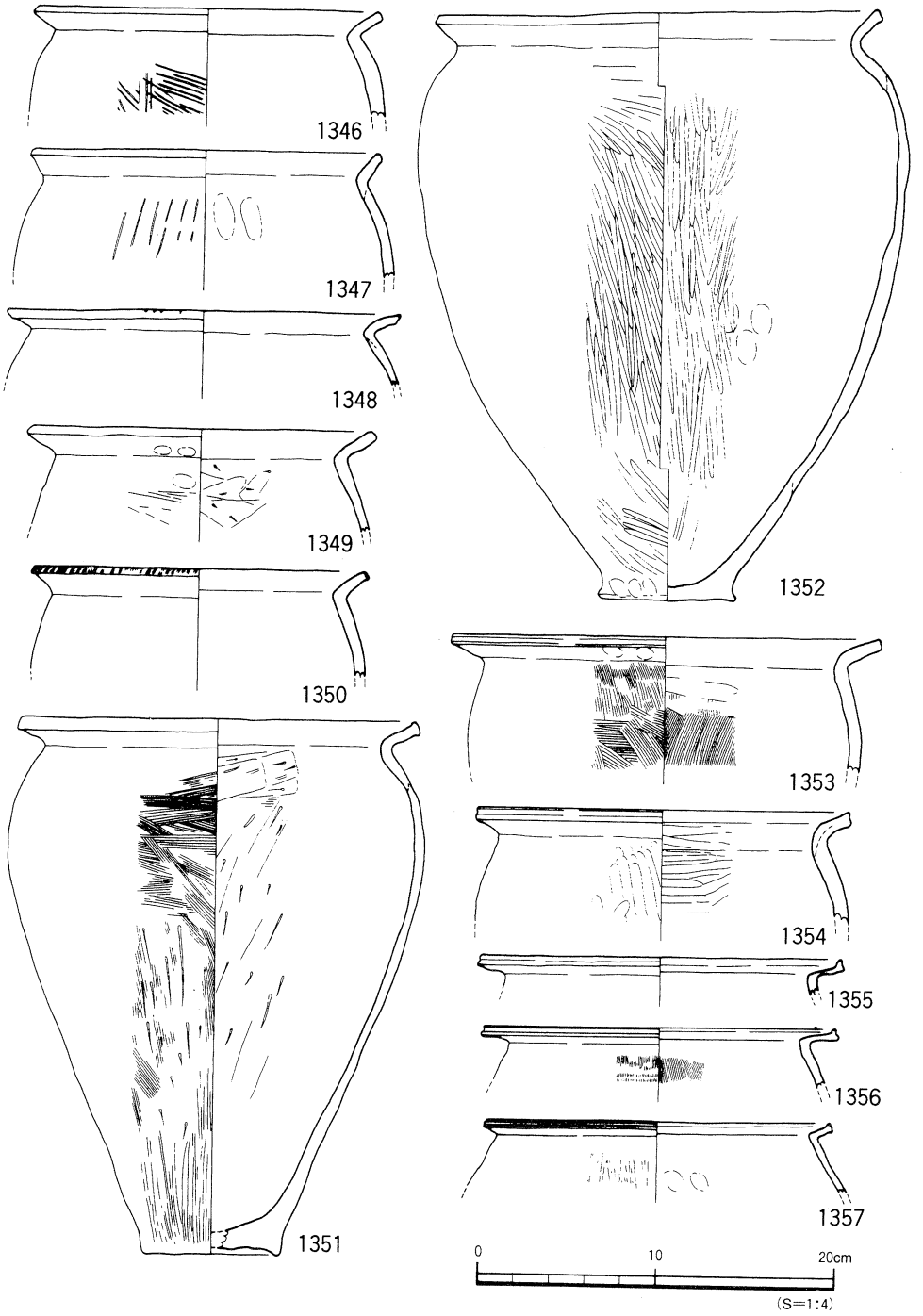


第187図　SR1上層出土遺物実測図(1)

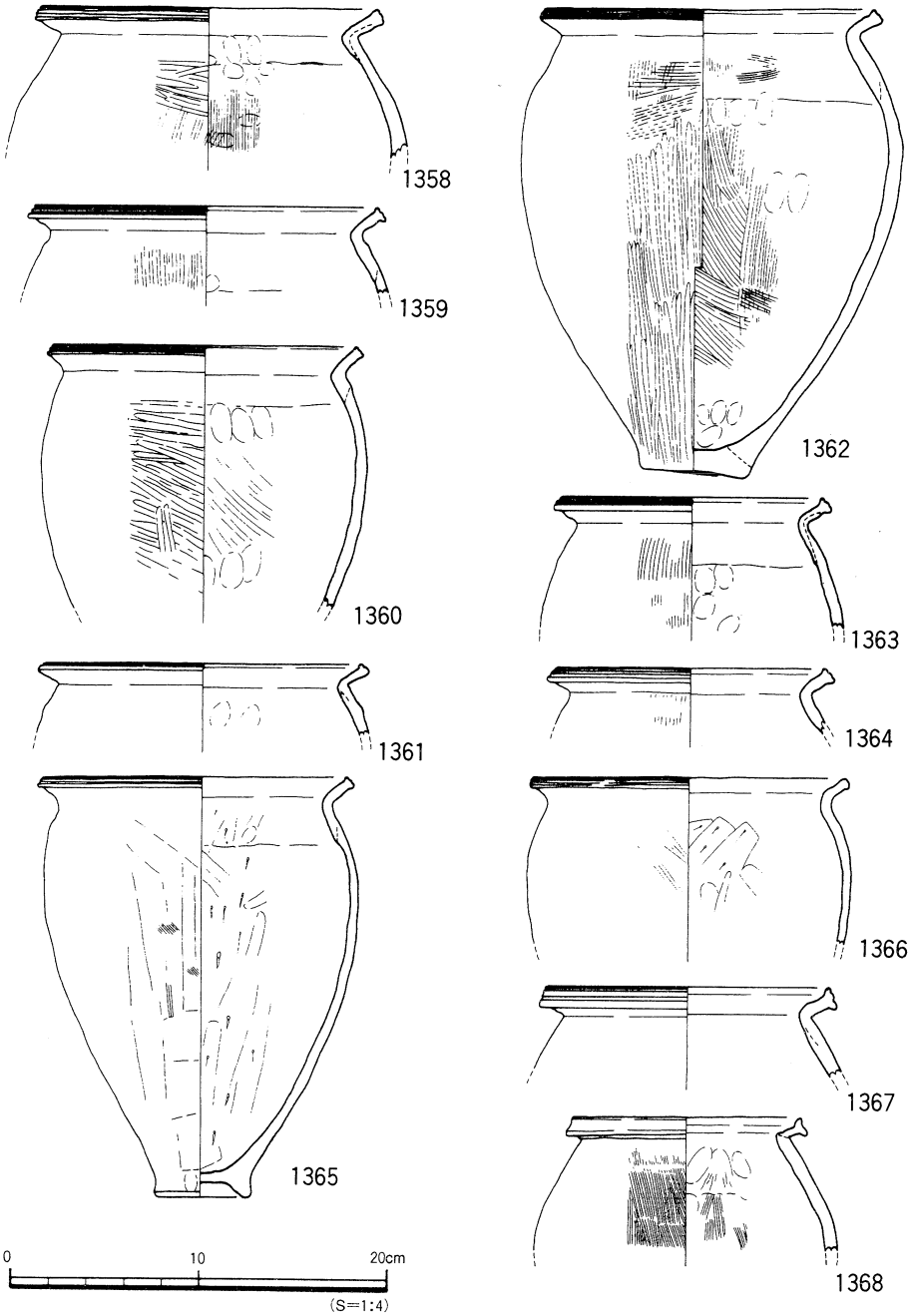


第188図　SR1上層出土遺物実測図(2)

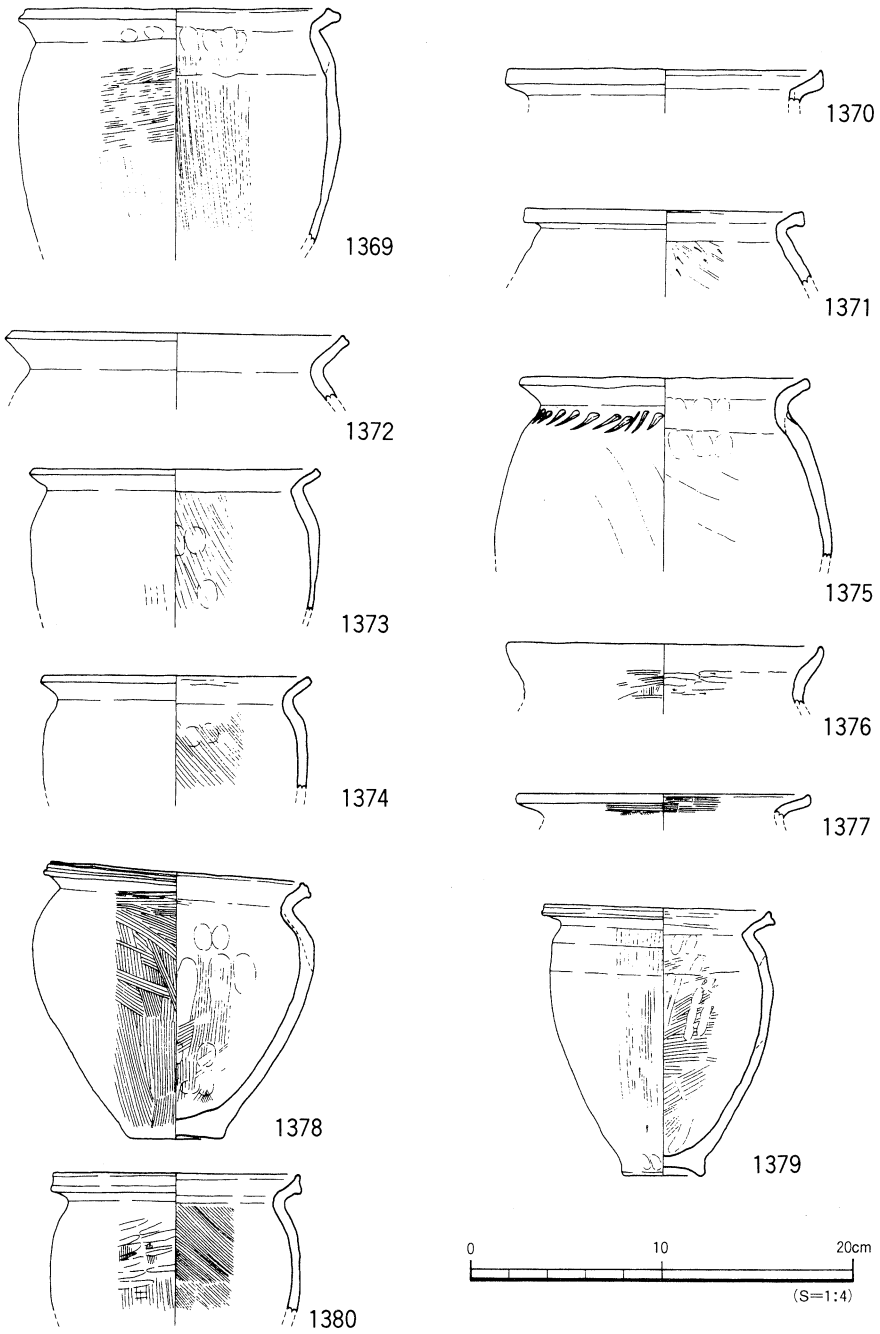
1346～1354は、口縁部を拡張しないものである。1351と1352は復元完形品であるが、胴上半部は形態に違いはないが、下半部は1351は上げ底、1352はくびれの平底となり異なる形状を呈している。1350は口縁端部に刻目をもち、中期前半の古い要素をもつ。1355～1357は「L」字状に折り曲げられた口縁部形態をもち、器壁が著しく薄いものである。特に1357は色調も明るく外来的要素が強い。1358～1378は法量が小さい一群である。1358～1367は口縁部が拡張され、端部に沈線をもつものである。1362・1365は復元完形品である。肩部が張り、上げ底となることを共通とする。1368は肩部が著しく強く張り、口縁端部を上下方向に大きく拡張するものである。器壁の厚さや色調もほかのものとは異なり外来的要素が強いものである。1369～1377は口縁部に沈線をもたないものである。1378・1379は最も法量が小さいものである。1380は口縁部の拡張が上方に大きく、ほかのものと形態が異なるもので外来的要素が強いものである。1381～1389は底部片である。1381～1388は上げ底、1389は立ち上がりをもつ平底である。量的に前者の方が出土量が多い。



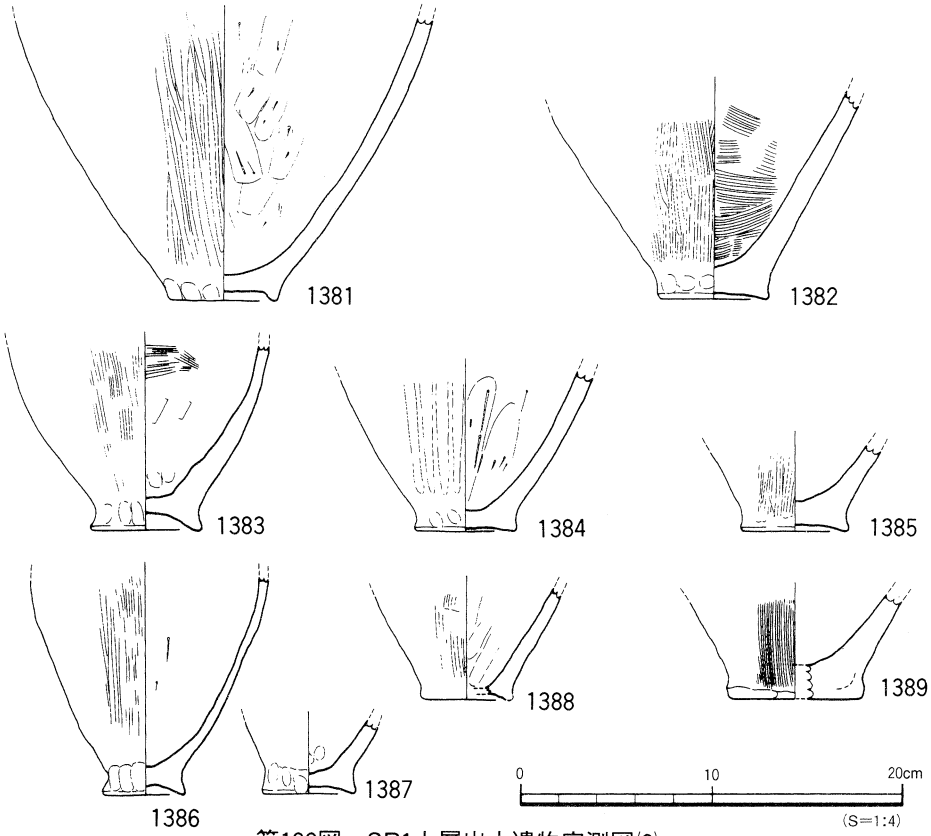
第189図　SR1上層出土遺物実測図(3)



第190図　SR1上層出土遺物実測図(4)



第191図　SR1上層出土遺物実測図(5)

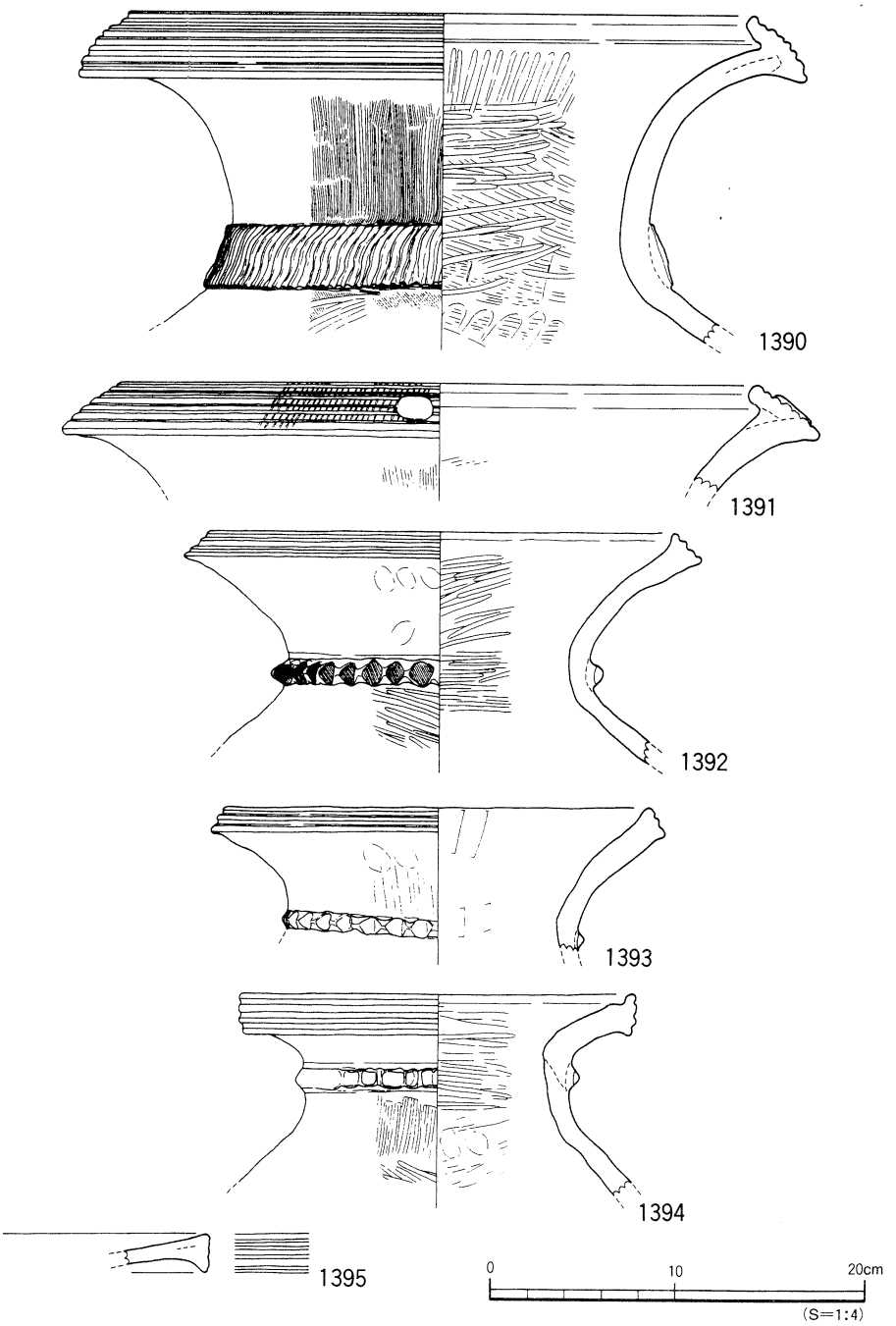


第192図　SR1上層出土遺物実測図(6)

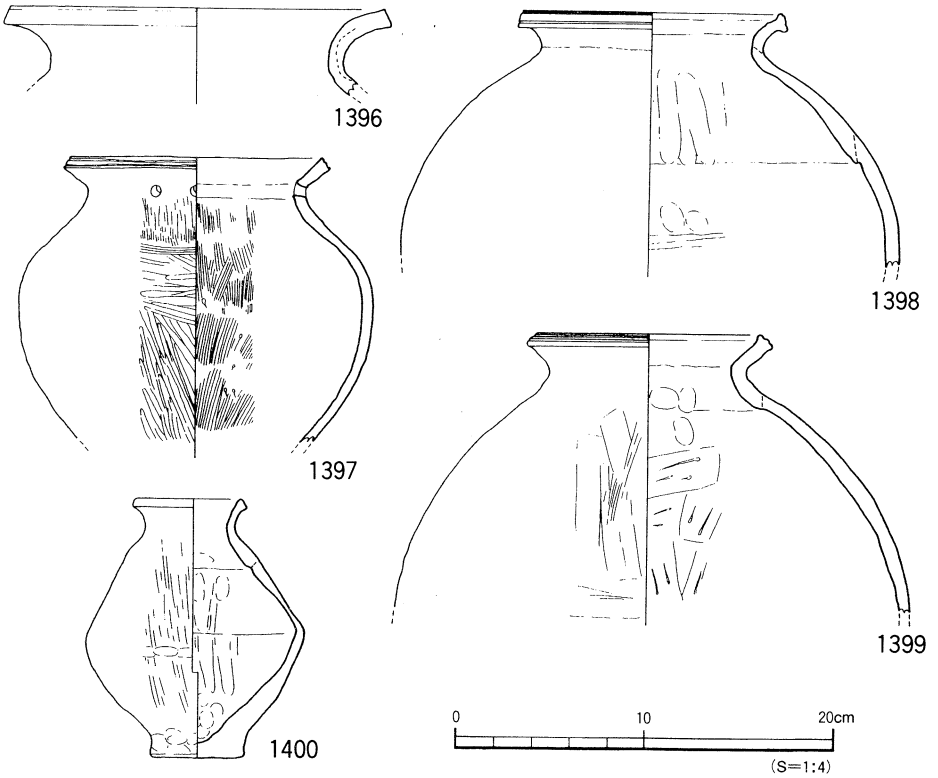
壺形土器（1390～1445）

1390～1395は大型品である、1390・1391・1395は法量が最も大きいもので、大きくひらく長い口頸部をもつものである。1390は頸部の刻目凸帯は細かく、口縁内面に放射状のやや粗いヘラミガキをもっている。1392～1394は先の大型品に比べ器壁が薄く、やや法量が小さいものである。1396～1399は短い口頸部と球形の胴部をもつものである。1397は焼成前の穿孔をもっている。1400～1402は筒状の頸部に、外反する口縁部をもつものである。1400～1406は内傾、1407～1422は直立から外傾して頸部が立ち上がるものである。1416～1418は頸部に沈線をもっており、頸部形態もほかのものと異なり長い傾向をもっている。1415・1419は口縁部がやや異なる形態を呈しており出土も各1点に限られる。1423は完形品である。口頸部が長く、頸部下半の締まりと肩部の張りが強いものである。

1424～1426は口縁部が上方に立ち上がるものである。1424は器壁が厚く、1425・1426は頸部に刺突文をもつものである。1427は完形に近いものである。長い口頸部をもち胴部中位が著しく張るものである。1428は無頸壺である。丁寧なヘラミガキがされる。1429・1430は長い頸部をもつもので多重の凸帯をもつ。1431は胴部片で線刻を施したものである。



第193図　SR1上層出土遺物実測図(7)



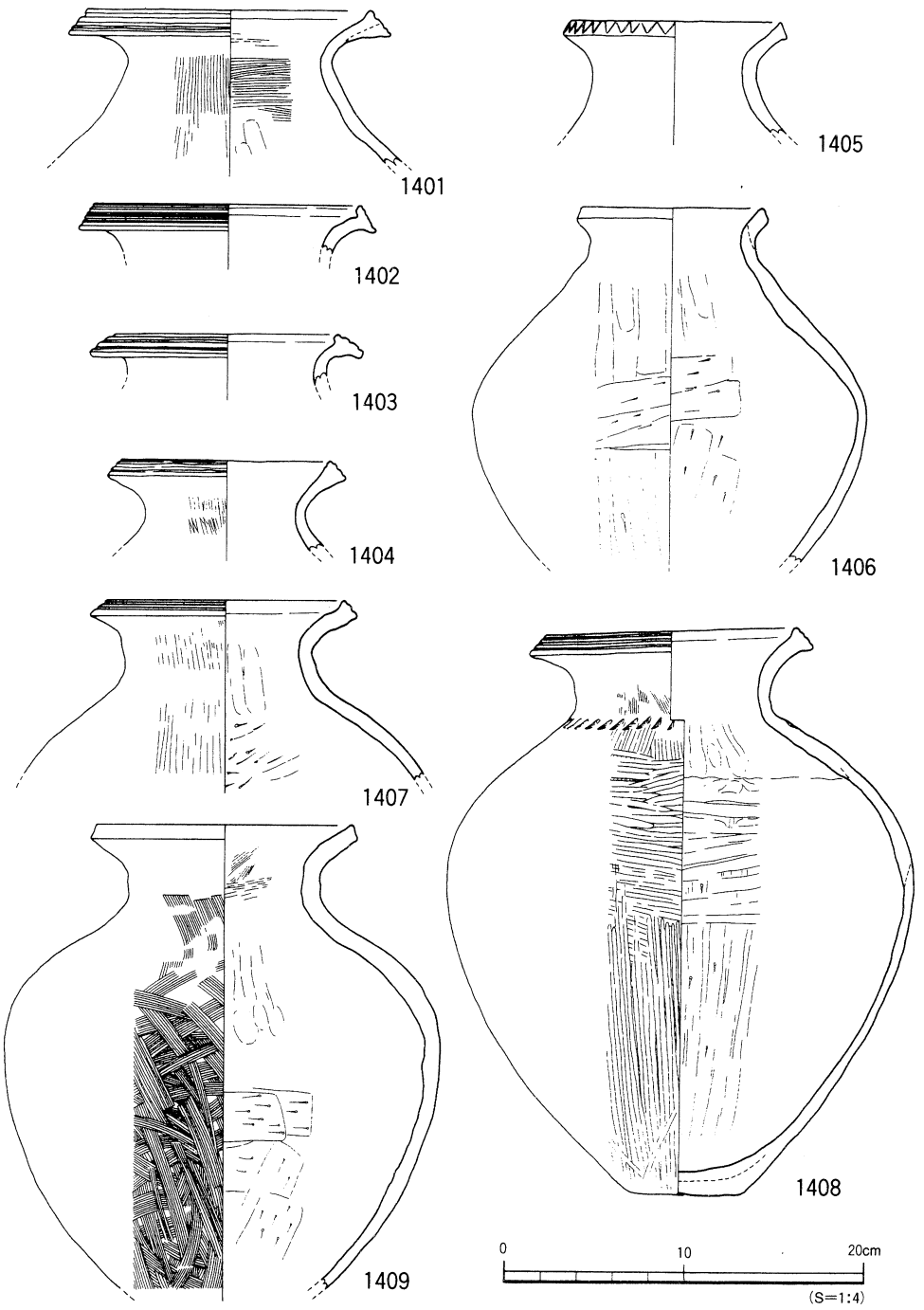
第194図　SR1上層出土遺物実測図(8)

1432～1441は底部片である。厚くやや丸みをもつ平底のものが多く、なかには立ち上がりをもつ上げ底のものもみられる（数は少ない）。

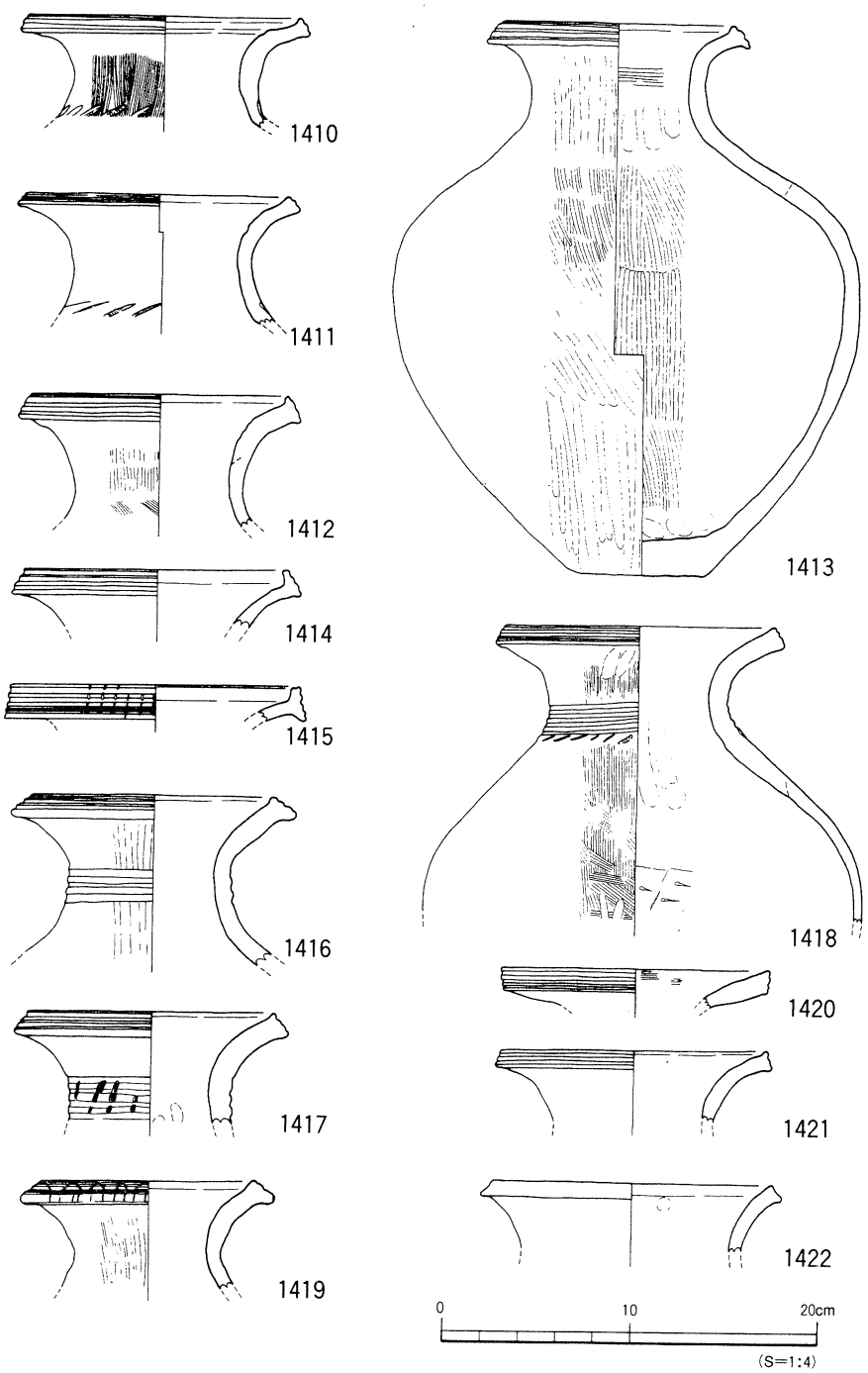
1442～1445は外来的要素が強いものである。1442は形態、施文、色調が平野出土のものとは異なり搬入品とみられる。讃岐地方。1443は形態は平野出土品と大差はないが、頸部の刺突文と口縁部のタテヘラ刻みが施文手法として異なるものである。1444は小さいM字状の凸帯をもつもので、胎土・色調も異なり搬入品とみられる。1445は中～大型壺の胴部片である。胴部に3条の凸帯を施すことは当平野にはなく（中期後半以降）よって搬入品とみられる。豊前～豊後地方のもの。

鉢形土器（1446～1482）

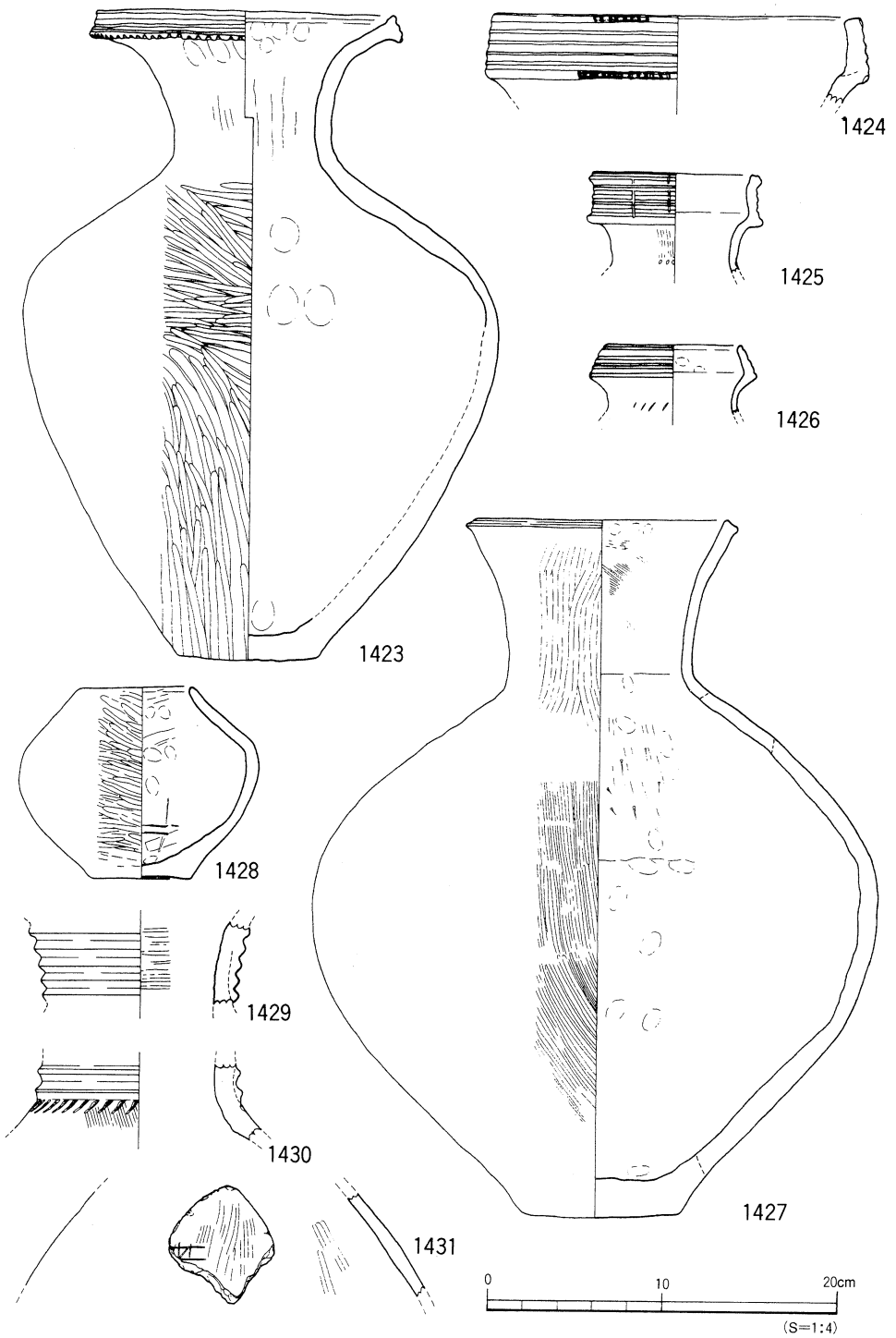
1446～1451は法量の大きい鉢形土器である。口縁部の屈曲が強いもの1446・1449と弱いもの1447・1450・1451がある。1448は法量が最も大きいものである。1451は口縁部外面に2条の沈線があり、形態・施文手法とも平野のものとは異なる。外来的要素が強いものである。1452～1455は外反口縁、1456は直口口縁をもつものである。1456は復元完形品で、器壁が著しく厚いものである。1457～1482は法量が小さいものである。



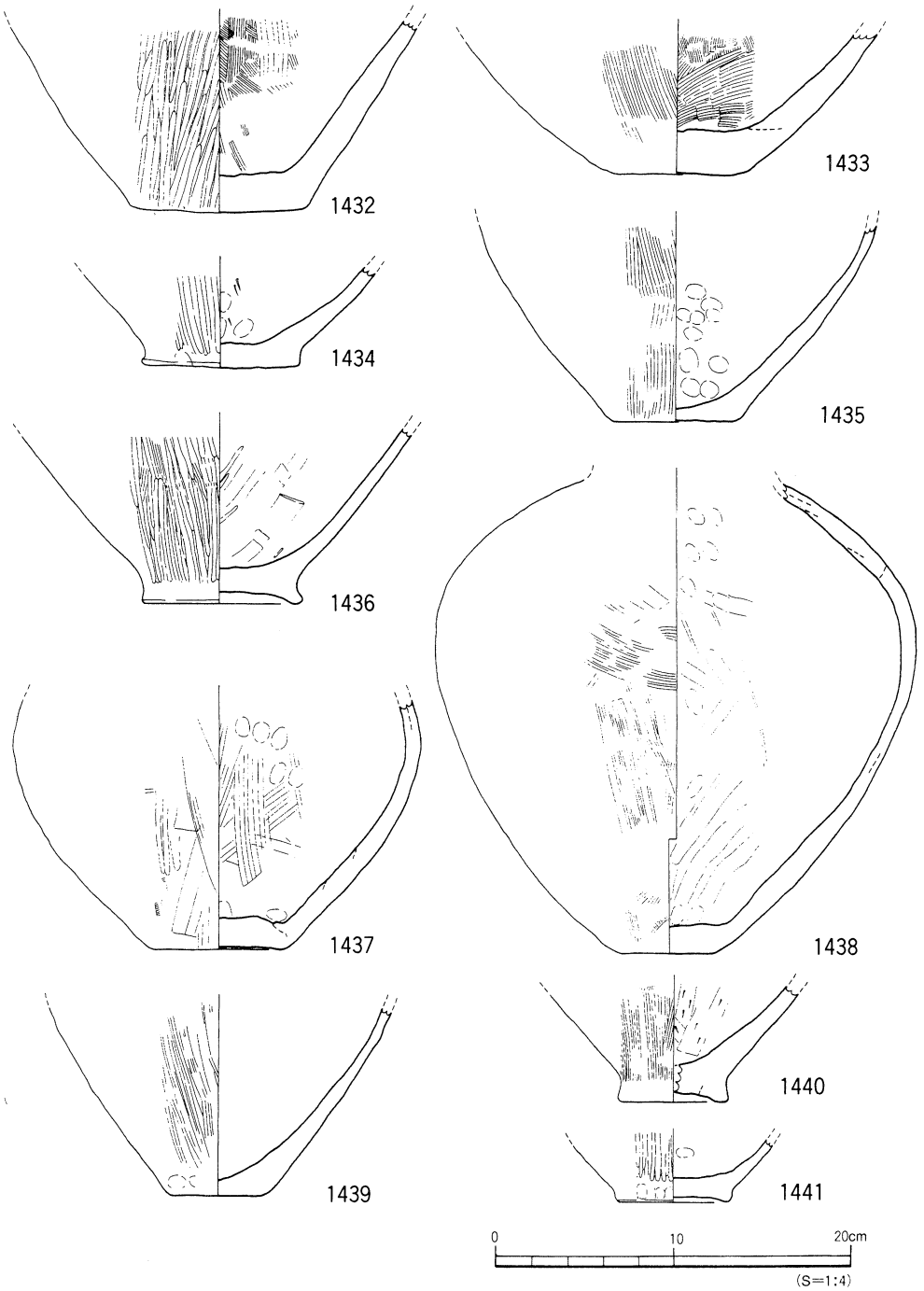
第195図　SR1上層出土遺物実測図(9)



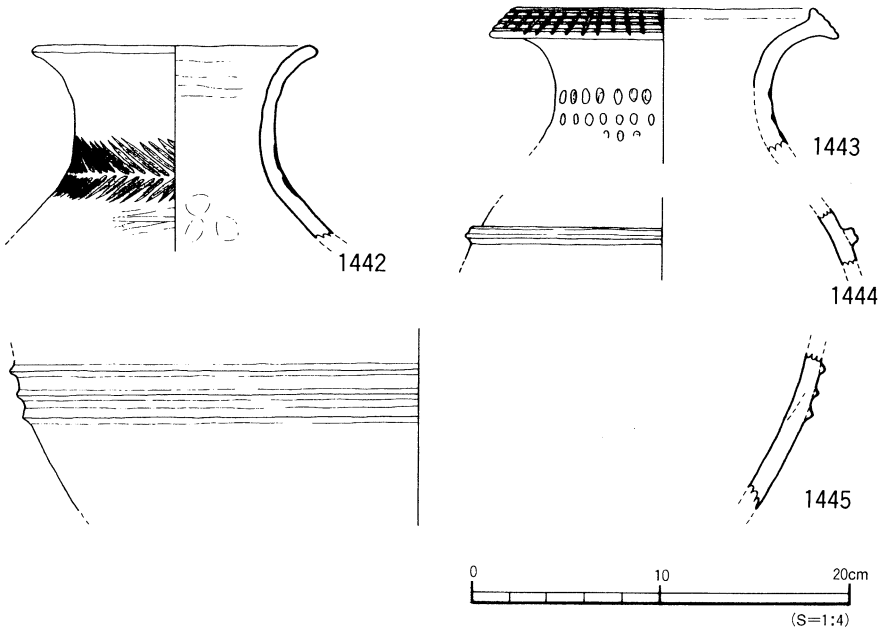
第196図　SR1上層出土遺物実測図(10)



第197図　SR1上層出土遺物実測図(11)



第198図　SR1上層出土遺物実測図(12)



第199図　SR1上層出土遺物実測図(13)

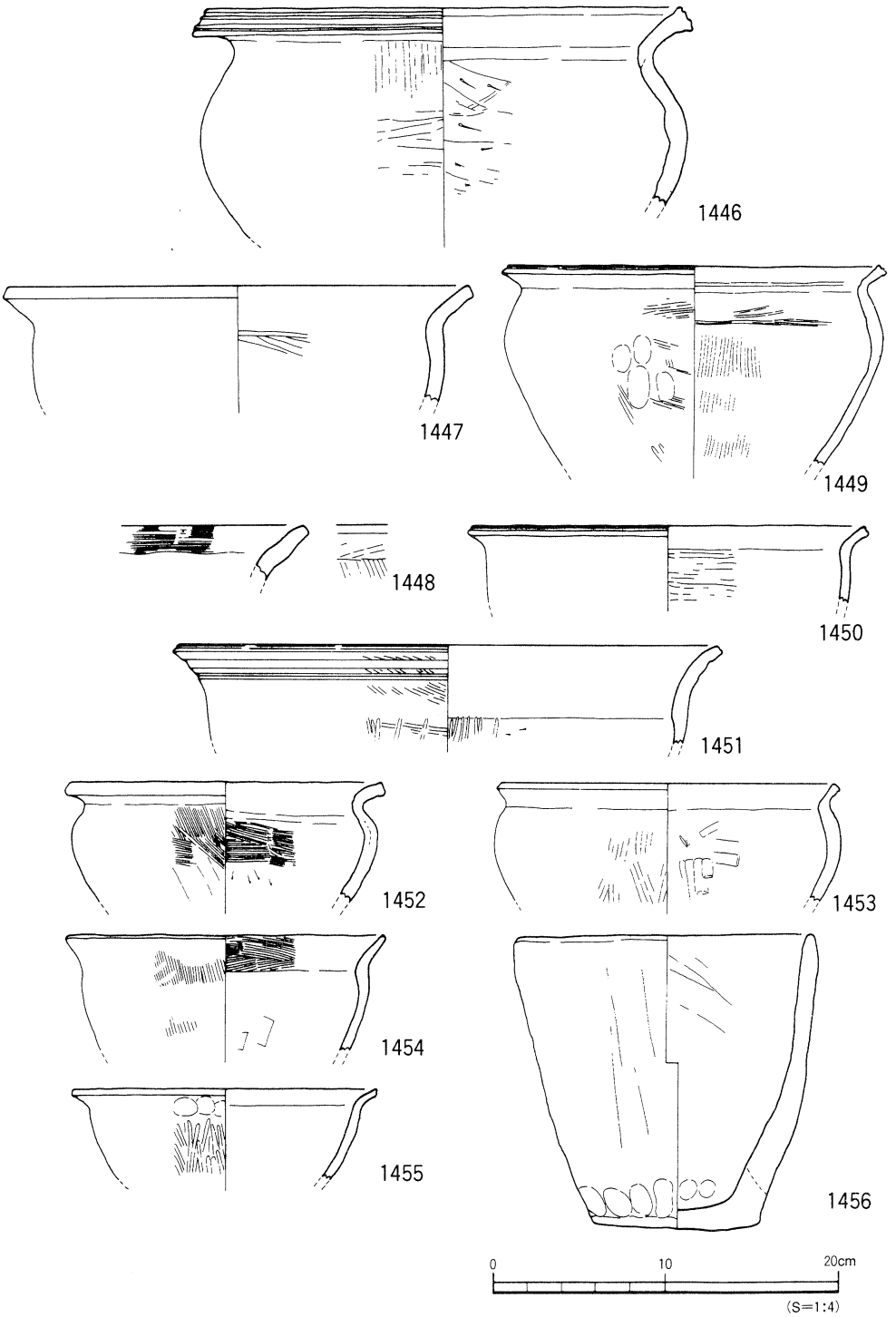
1457～1466は口縁部が外反するものある。底部はくびれの上げ底のものと平底のものがみられる。1467～1478は直口口縁のものである。くびれの上げ底を主体とする。1467・1476は弱干の上げ底となっている。口縁部は内傾～直口のものが多く、外面に施文するものは少ない。1479～1482は小型の鉢形土器の底部である。

高坏形土器（1483～1500）

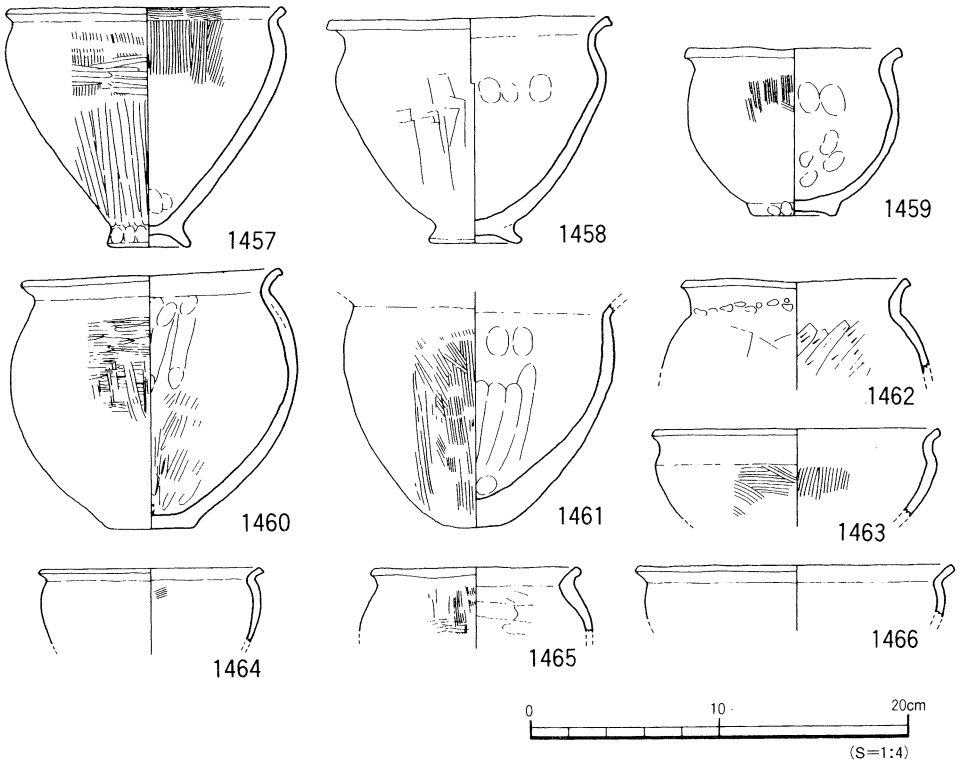
1483・1484は小型品でほぼ完形のものである。内傾する口縁部は、外面に細沈線をもつ。脚部には直線文と山形文状、矢羽根状の文様をもつ。1485～1487は法量の大きいもので、口縁部は直立～外傾する。1488は鉢形土器に似た坏部形態となる。1489・1490は鋤先状口縁をもっており、九州地方の形態を呈しているものである。1492～1500は脚部である。1492は脚部全面を沈線により加飾するもので類例は少ない。1496・1497は脚端面に2条の沈線をもつ。1498は長脚になるもので、出土数は1点である。外面に赤色顔料が付着しており九州地方のものと考えられる。1500は端部が上方に拡張され、小円孔が穿たれているものである。外来的要素をもつ。近畿地方に類例がある。

器台形土器（1501～1506）

1501～1503は中～大型の器台形土器である。端部は拡張され沈線をもつ。1501は部分的に竹管文入りの円形浮文をもつ。1504・1505は形態、色調、胎土ともきわめて酷似するたものである。1506は柱部径が細く、作りは1504・1505に比べてやや粗雑となる。



第200図　SR1上層出土遺物実測図(14)



第201図　SR1上層出土遺物実測図(15)

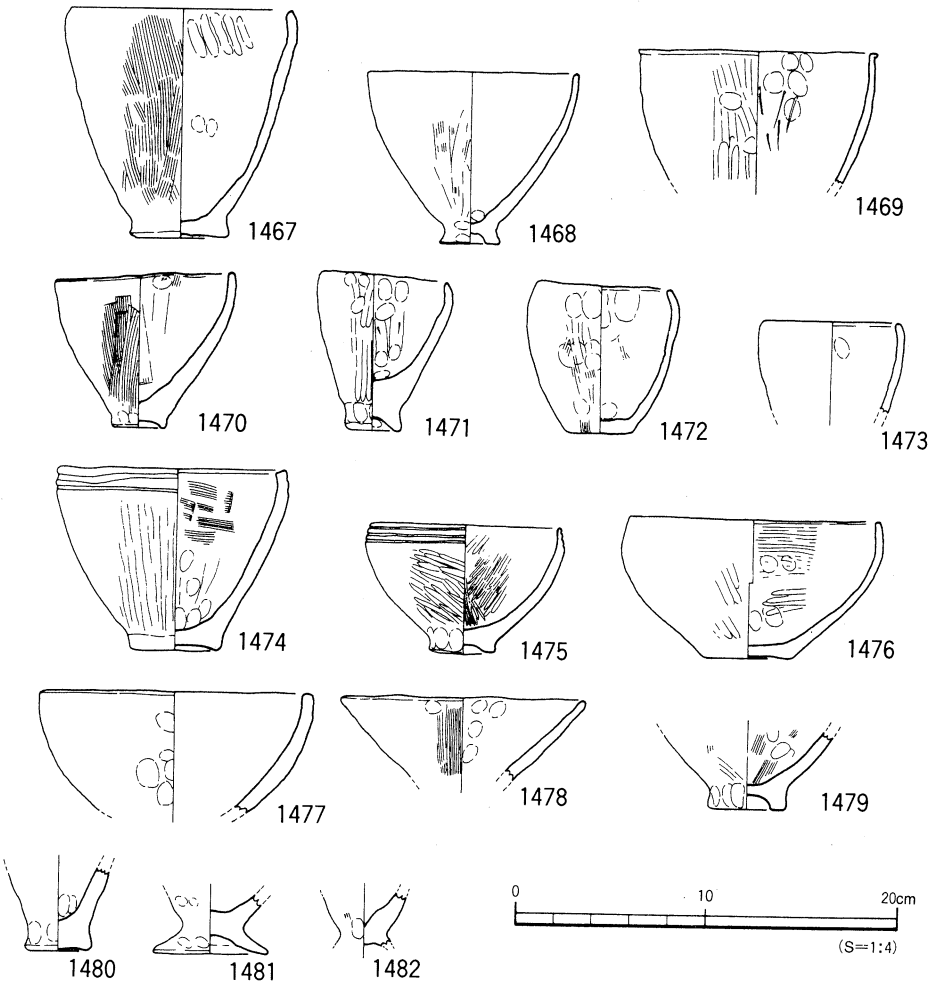
支脚形土器（1507～1513）

1507は受部の一部が「U」字状に傾斜するものである。1508は遺存が約1/2で、受部形態は不明なものである。1509～1511は裾端部がゆるやかに外反するものである。1512は裾端部が直口のものである。1513は脚部が中実になるものと思われる。

その他（1514～1521）

1514・1515はコシキ形土器である。器壁が厚く、底部に大きな円孔が穿たれている。1514は口縁部直下にも1組の円孔がある。1516は1514と同形態をとるものと思われるものである。1517はいわゆる台形状土製品といわれるものである。厚い器壁と突出部をもつ。1518はミニチュア品である。1519は土製の紡錘車である。1520・1521は分銅形土製品である。

1520はいわゆる「伊予型A」の典型的なタイプである（谷若　1989）。器形は円形で、残存部分は上半部右側端部付近のみで、全体の4分の1以下であろう。眉と思われる顔面表現があるため、上半部と推測した。類例に従い、顔面表現がある面を表面とするが、裏面には、部分的に指頭圧痕が残る。1521は器形は今回出土した6点中唯一の方形で、くびれ部根元付近で折れ、上半部を欠失している。下端面からくびれ部にかけての幅は、ほとんど変化がみられず、平らに仕上げている。下端面両側に2カ所の指頭圧痕がみられる。

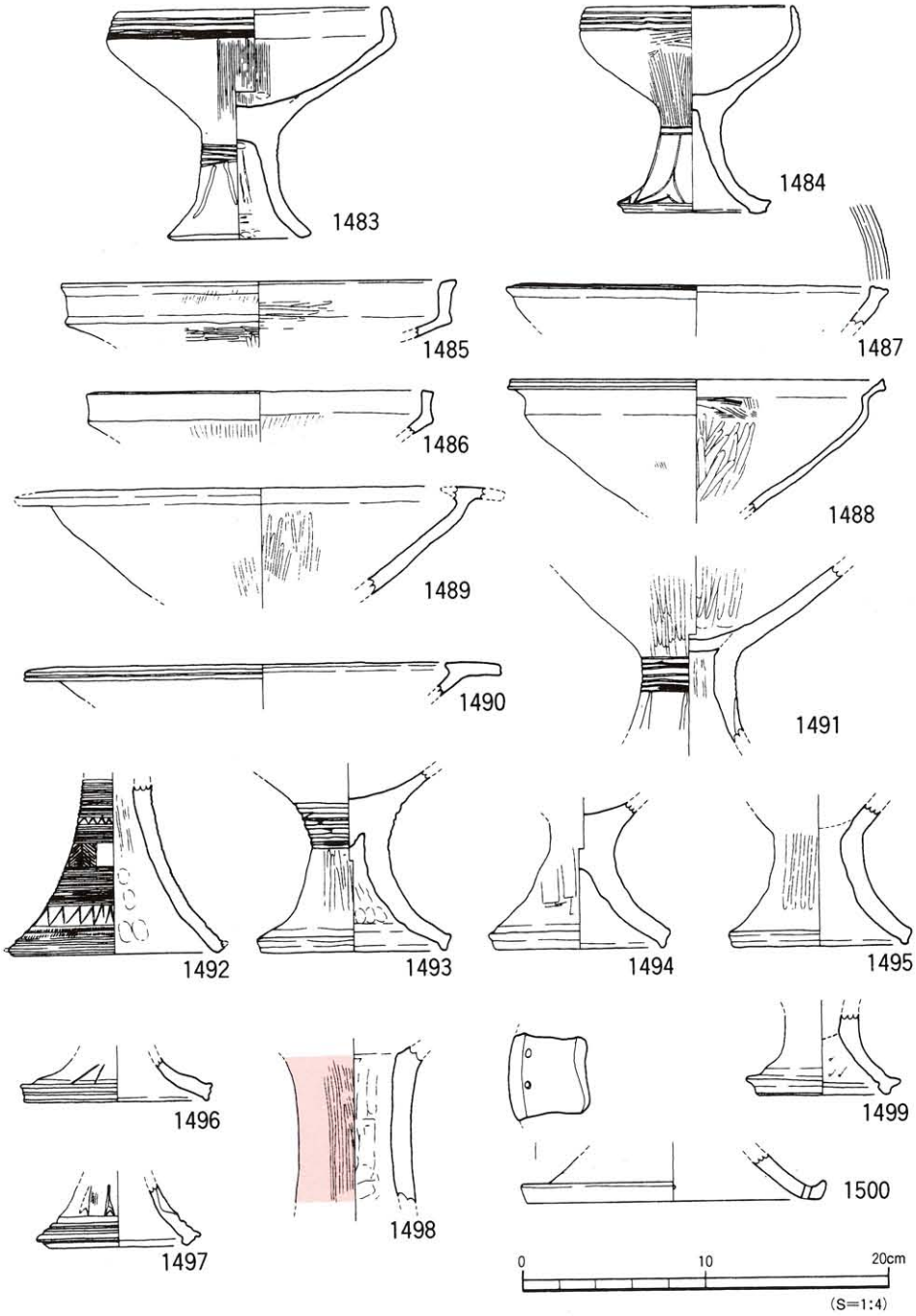


第202図　SR1上層出土遺物実測図(16)

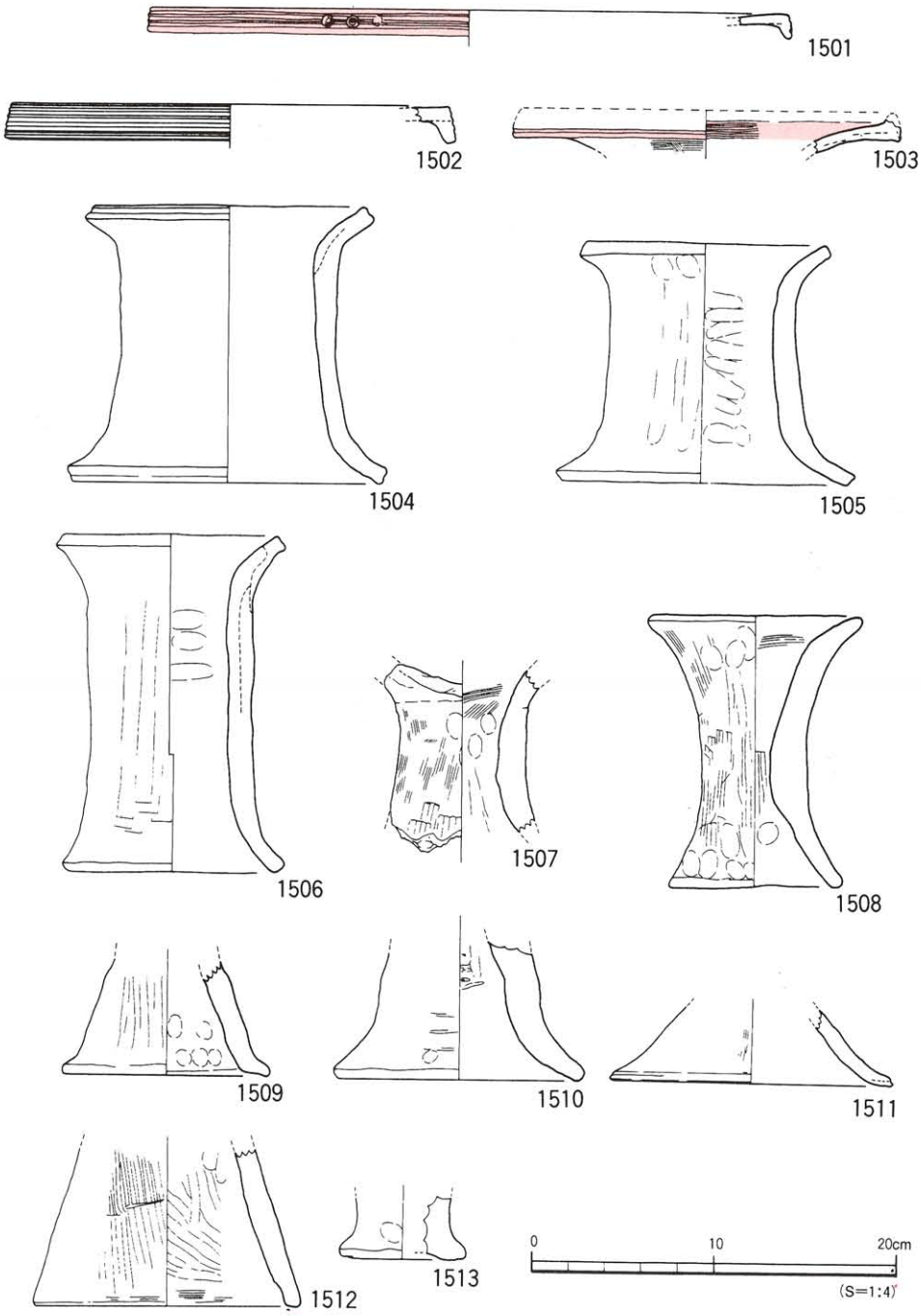
ＳＸ３と判断される遺物（第206・207図、図版89）

1522～1539は⑦・⑧区の境界付近から出土した遺物である。弥生時代後期末の特徴を示していることから、ＳＸ3出土品として判断される遺物である。

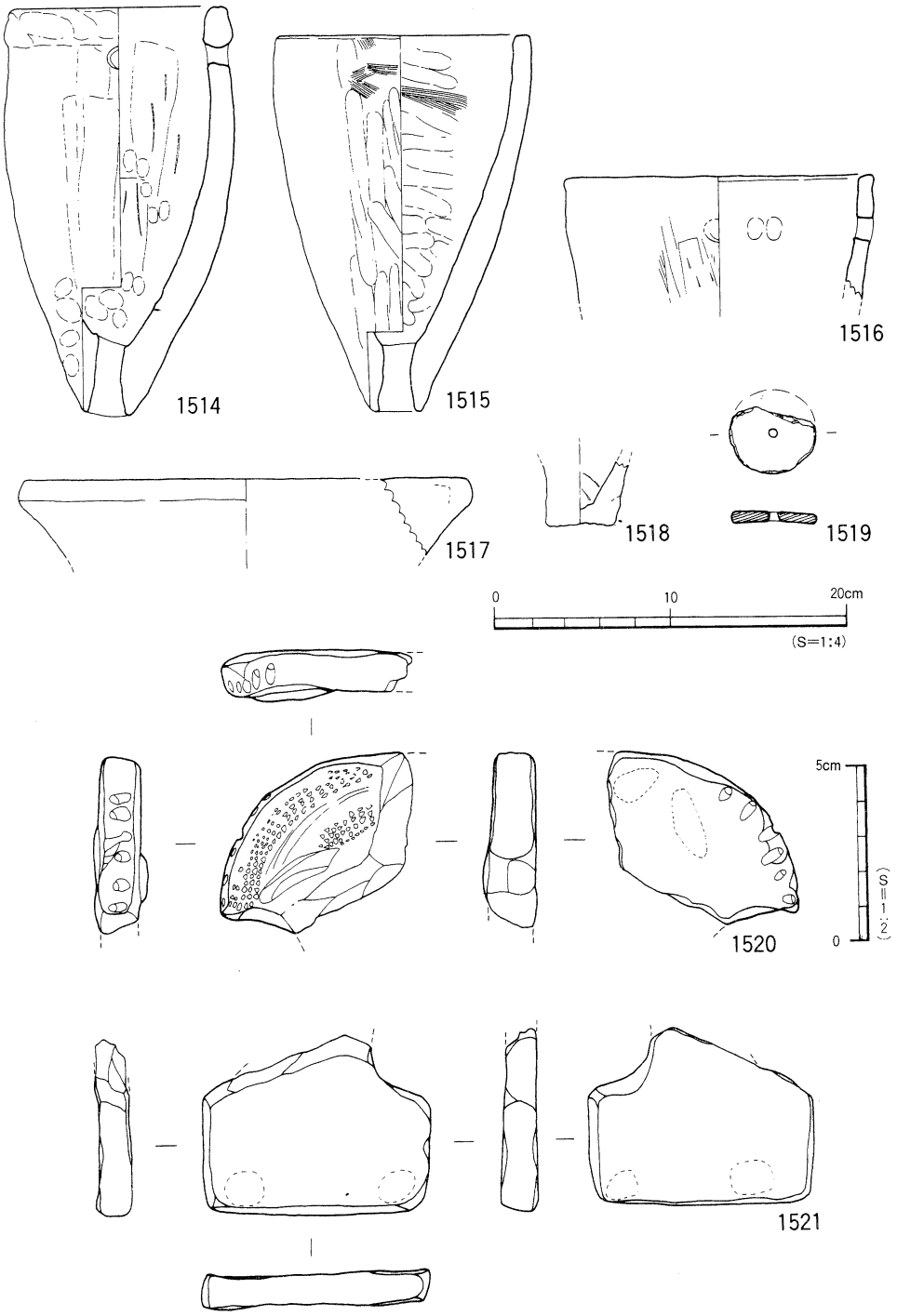
1522～1530は壺形土器である。1522～1528は複合口縁壺であり、1522～1524は接合部が面、1525・1527は稜となるものである。1523は口縁部にタテ方向の刻目浮文を部分的にもち、浮文間はヨコ沈線文で加飾するという特異な施文手法をもつ。1526の外面には赤色顔料が付着する。1529・1530は直口口縁をもつ長頸壺である。1531～1534は鉢形土器で、1531・1532は口縁部が外反し、1533・1534は直口口縁をもつものである。1533は器壁が薄く、細かい刷毛目調整であり作りが丁寧なものである。1535～1538は高坏形土器である。1539は中型の器台形土器である。



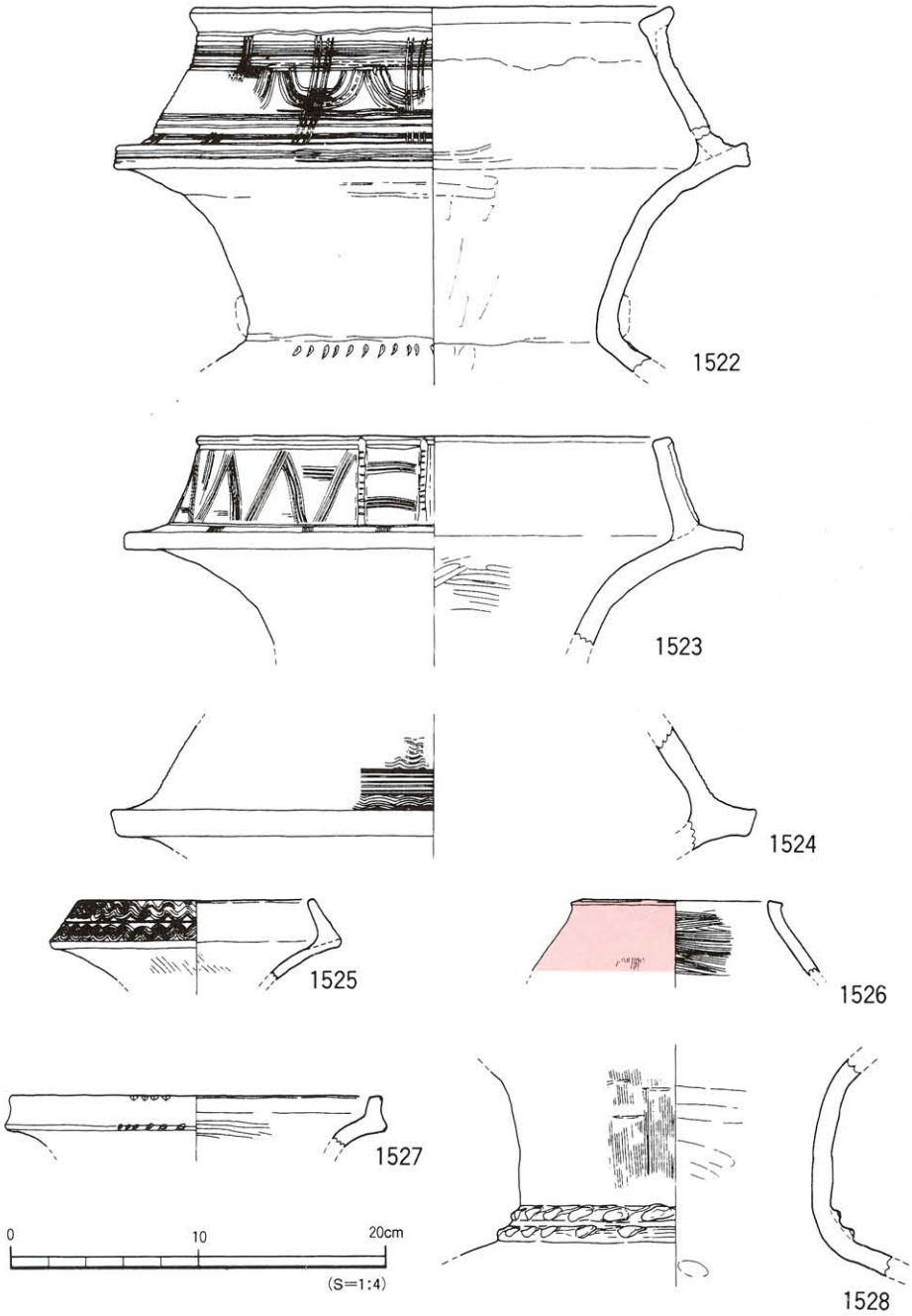
第203図　SR1上層出土遺物実測図(17)



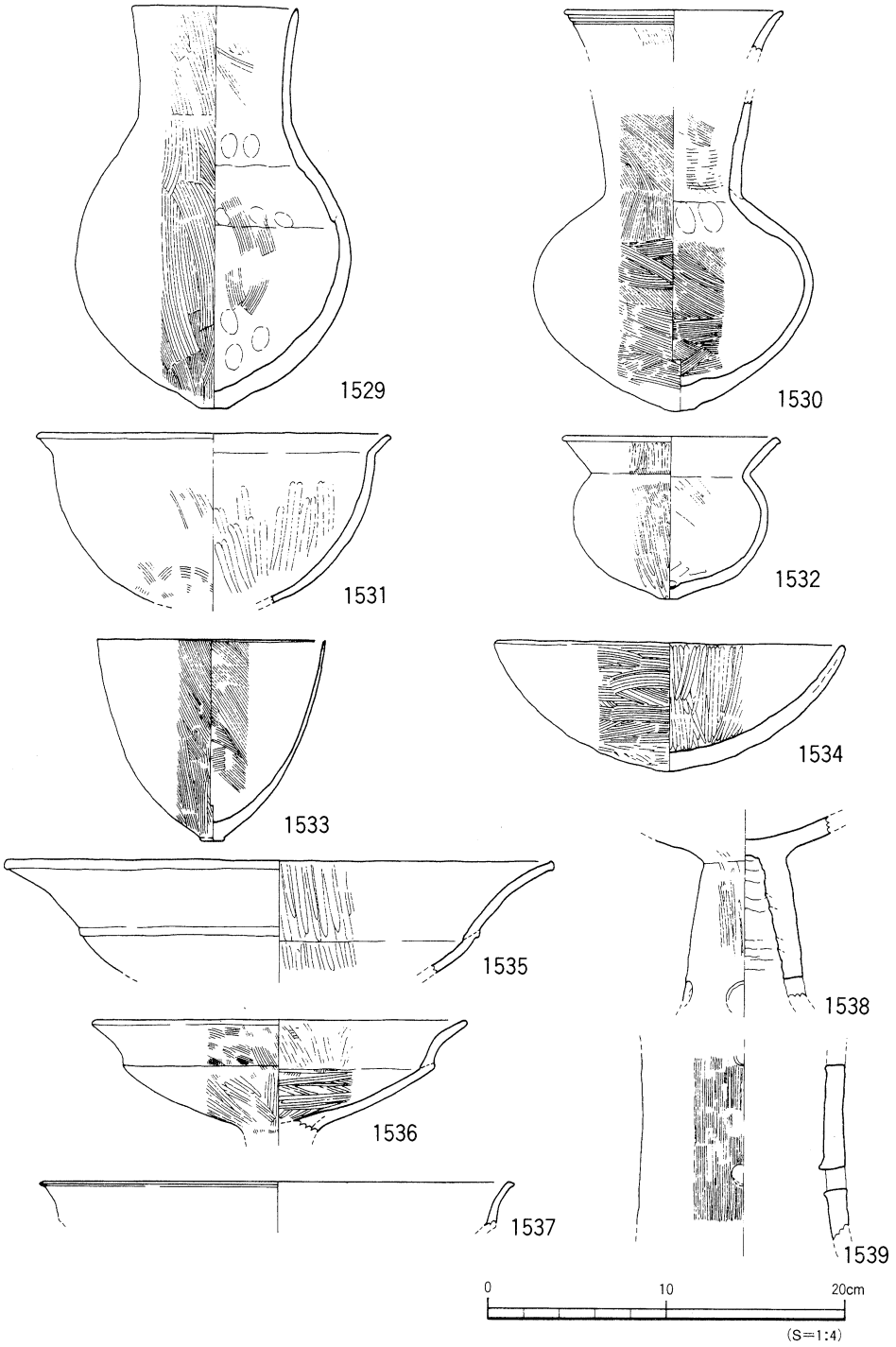
第204図　SR1上層出土遺物実測図(18)



第205図　SR1上層出土遺物実測図(19)



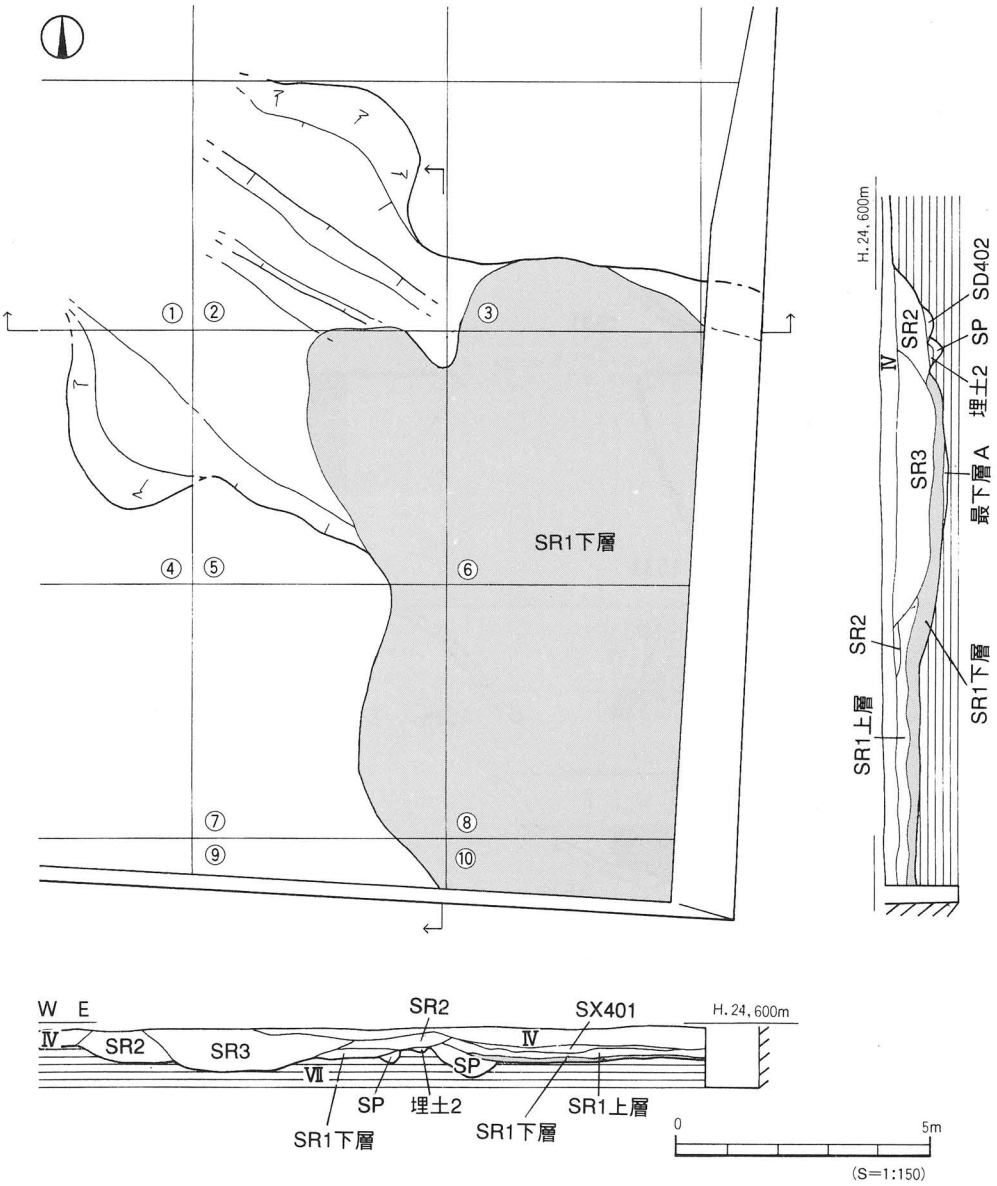
第206図　SX3と判断される遺物実測図 (1)



第207図　SX3と判断される遺物実測図（2）

ＳＲＩ下層（第208図、図版29）

ＳＲ1上層を完掘後、下層の掘り下げを行った。南東部全域にみられ、厚さは20～40cmを測る。北半部では約20cm前後の堆積であるのに対して、南半部では堆積が厚く、調査は2分層して遺物の取り上げを行った。それぞれ、ＳＲ1下層上部、ＳＲ1下層下部として実測図を掲載している。上部と下部からは破片が少量出土している。上部からは甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器のほか、ジョッキ形土器やミニチュア形土器、分銅形土製品が出土して



第208図　SR1下層検出状況図

いる。石器は石庖丁、砥石などが出土している（P286・288～290，第270・271図）。下部からは、甕形土器、壺形土器、高坏形土器、ジョッキ形土器、台形状土製品、分銅形土製品、鳥形状土製品が出土し、石庖丁も出土している。下部からは吉備地方や東瀬戸内地方からの搬入品と思われる土器が含まれている。

そのほか、調査区内に設定した土層観察のためのEベルト（第102図）から出土した遺物も参考品として掲載している。ベルト内からは鹿が描かれた線刻土器の出土がある。

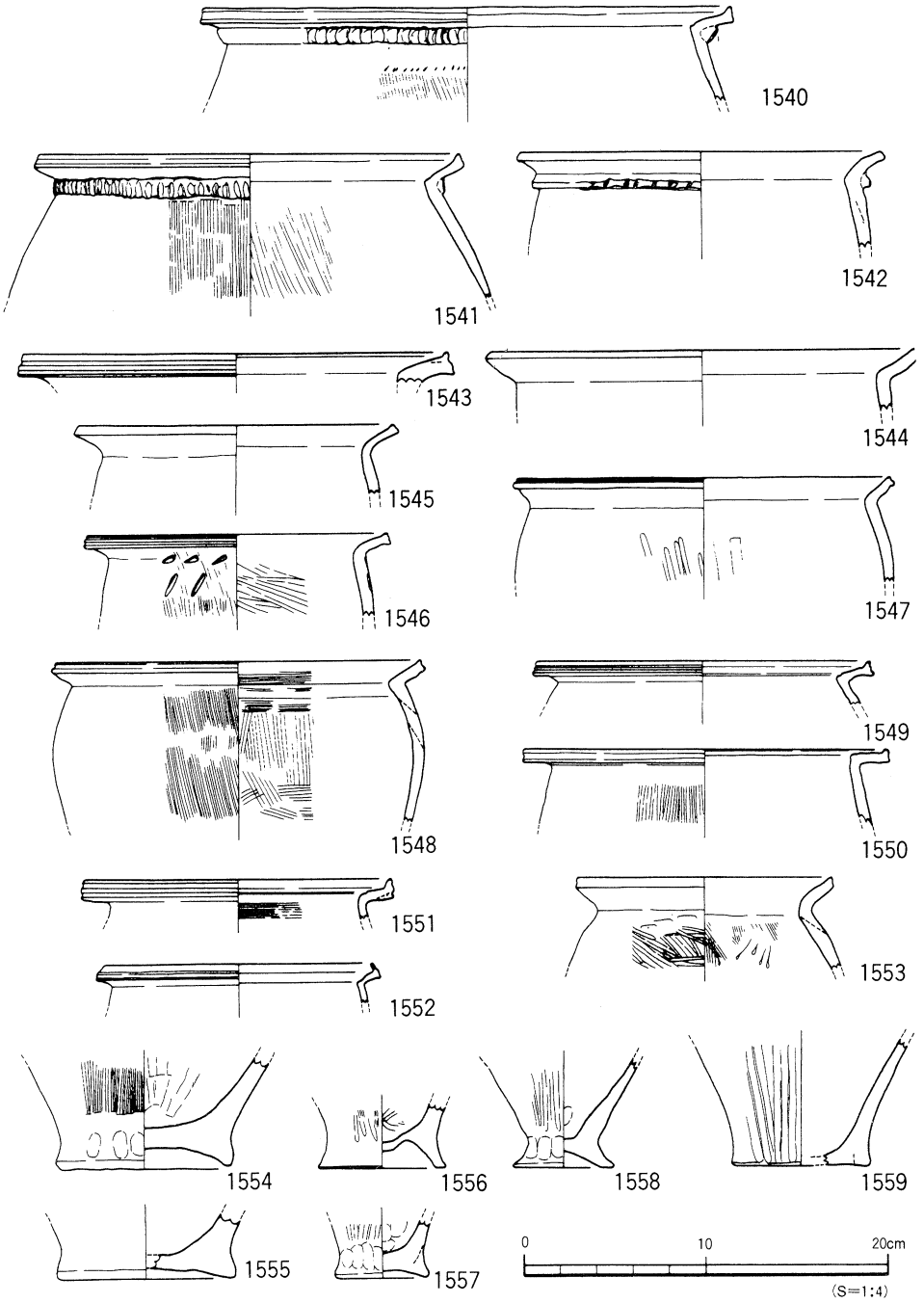
下層上部出土遺物（第209～211図、図版90・91）

甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器ほかが出土している。

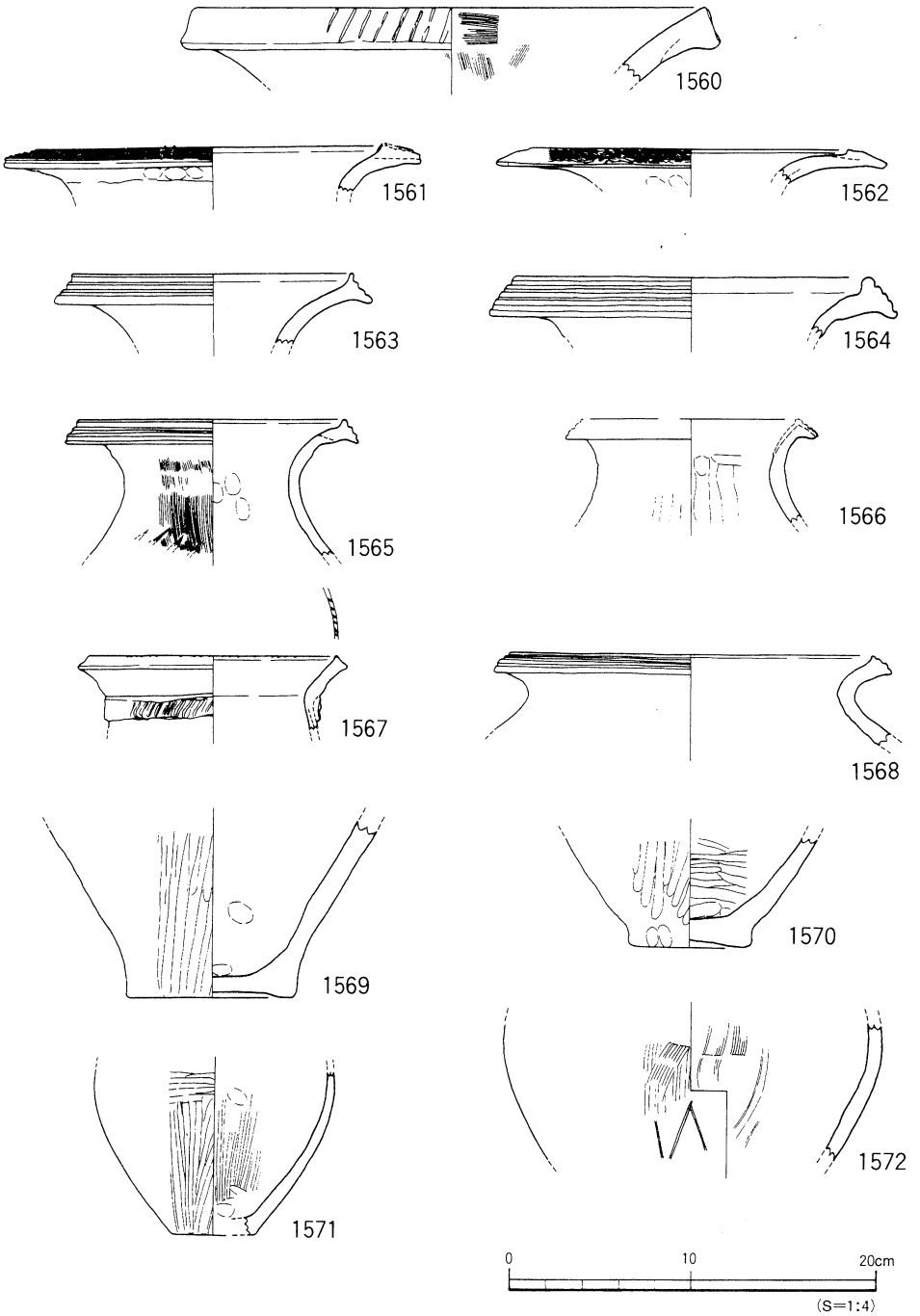
1540～1559は甕形土器である。1540・1541・1543は大型品である。口縁端部は拡張され沈線を1・2条もち頸部には刻目凸帯をもつものである。1542・1544～1550は中型品である。1546～1550は口縁端部を拡張し沈線を1～2条もつ。1551・1552は小型品である。1553は器壁が厚く、内面にケズリ痕を残すなど、1540～1552までの様相とは異なるものである。1554～1559は底部である。1554～1558はくびれの上げ底、1559は平底である。口縁部が拡張されない（沈線をもたない）ものは前者の底部、口縁部が拡張されるものは後者がつくものとなる。

1560～1572は壺形土器である。1560は大型品、1561～1568は中型品である。1561・1562は口縁部が鋤先状になり、端面に櫛描直線文1561や波状文1562を施している。胎土と色調がほかのものと異なり、外来系の要素が強いものである。1569～1572は壺形土器胴底部である。1572は胴下半部片である。ヘラによる山形文状の線刻がみられる。

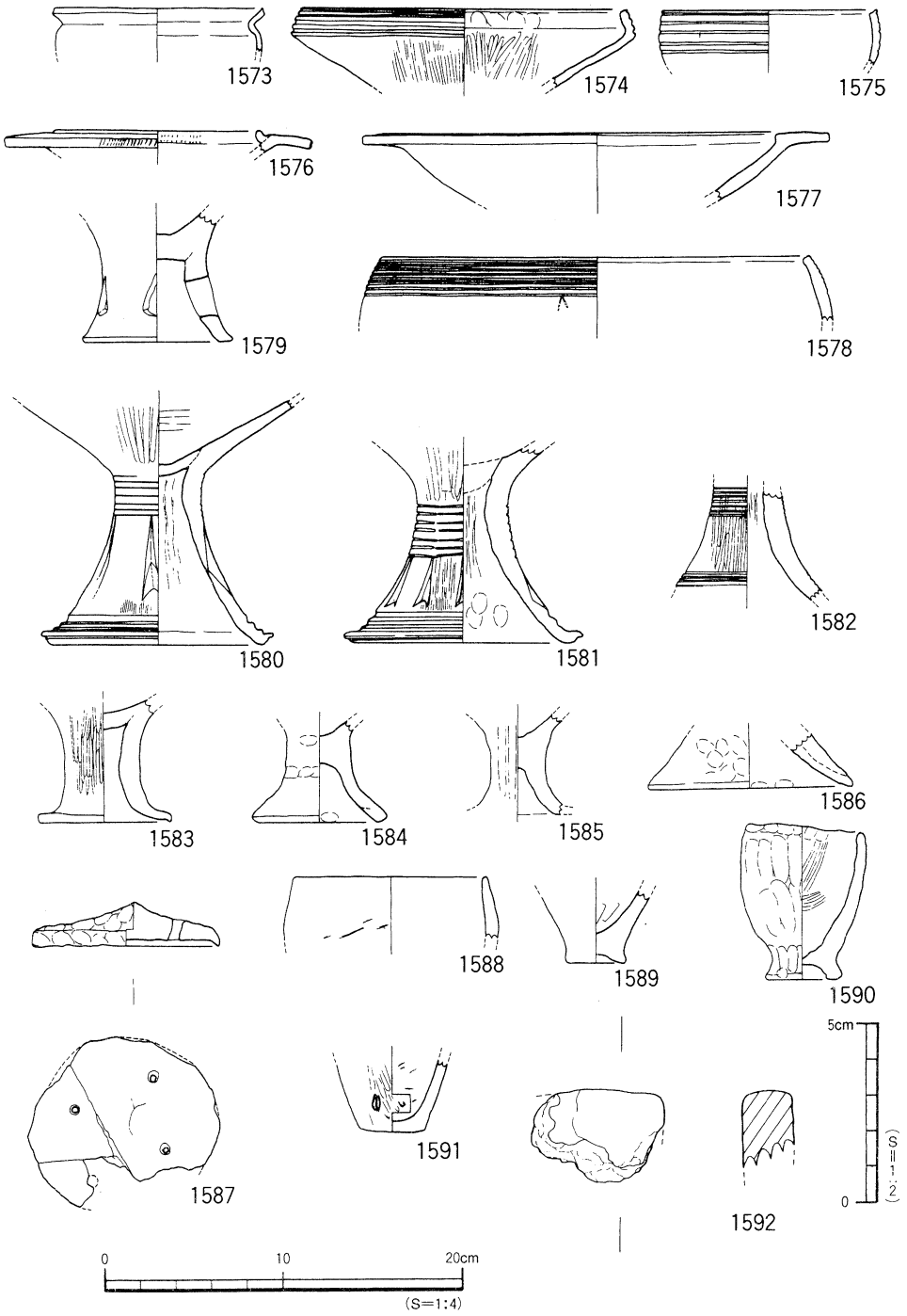
1573は鉢形土器である。小型品で口縁端部はナデによる面をもつ。1574～1578は高坏形土器の坏部である。1574・1575は内傾ないし内湾して立ち上がる口縁部をもつものである。1576は内面にも突出部をもつもので、突出部と口縁端面に刻目をもつ。1577は形態と口径より九州系の高坏形土器の要素が強いものである。1578は大型の高坏形土器ないし脚台付の鉢形土器となるものである。内湾して立ち上がる口縁部には外面に多条の細沈線文をもち、さらに山形文状の施文を施している。1579～1585は高坏形土器の脚部である。1579は丸みのある三角形の貫通孔をもつ。1580～1582は沈線文と矢羽根透しをもつものである。1583～1585は低脚で、高坏形土器の脚部ないし脚台付鉢になるものである。1586は器壁が厚く、脚台付鉢になるものであろう。1587は蓋形土器である。壺用と考えられ、焼成前の円孔を4ヶもつ。1588はジョッキ形土器である。1589～1591はミニチュア品である。1591の外面には線刻が施される。1592は厚みのある土製品で、分銅形土製品の破片と思われるものである。器形は隅丸方形と推定され、下半部の角の一部が残存したものと考えている。



第209図　SR1下層上部出土遺物実測図(1)



第210図　SR1下層上部出土遺物実測図(2)



第211図　SR1 下層上部出土遺物実測図 (3)

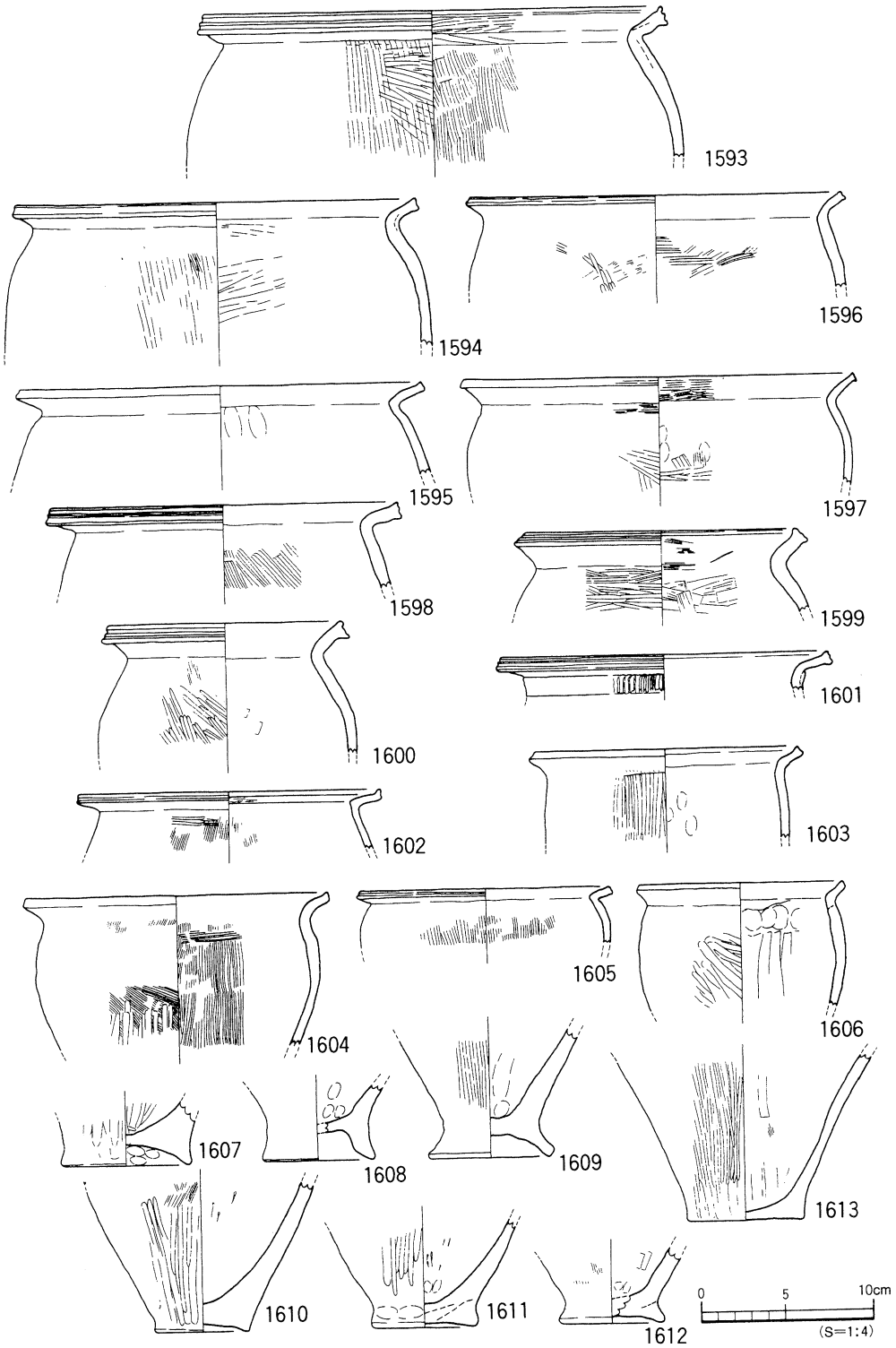
Eベルト出土の下層上部相当遺物（第212～214図、図版91）

1593～1613は甕形土器である。ゆるやかに外反する口縁部をもつもの1593～1601、1603・1604・1606と内面に強い稜をもって外反する口縁部をもつもの1602・1605がある。1601は刻目凸帯をもつものである。1607～1613は底部で、大きくくびれる上げ底のもの1607～1609、小さくくびれる上げ底のもの1610～1612、平底をもつもの1613がある。1614～1633は壺形土器である。1614～1619・1621～1626の口縁端部には沈線をもつ。1623の口縁部には焼成後に円孔が穿たれている。1627～1629は胴部である。1627は中～大型品で、M字状の凸帯をもつ。形態、色調とも平野のものと異なり、外来的要素の強いものである。1628は胴部片で、上半部に円形浮文を施したものである。1629は線刻土器で、鹿が描かれている。1630～1633は底部で、平底になるものである。1634～1636は鉢形土器である。1634は小型品でほぼ完形のものである。1635はくびれの上げ底で、くびれ部分に刺突文をもつ。施文手法としては異例なものである。1636は小さく突出する平底をもつものである。器壁が薄い。

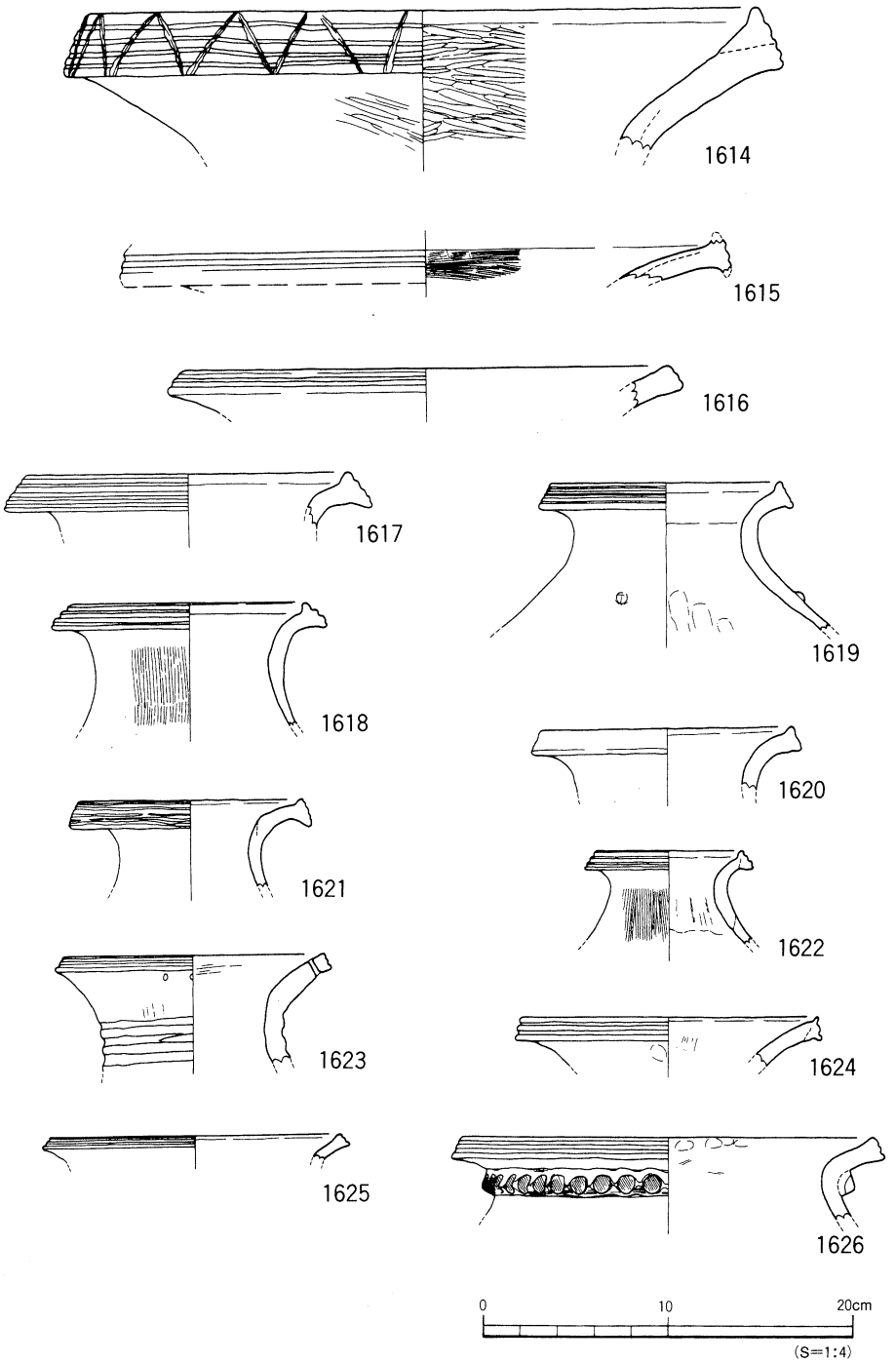
下層下部出土遺物（第215～220図、図版92～94）

1637～1665は甕形土器である。1637は中期前半に隆盛するもので古い形態のものである。出土数はこの1点に限られる。1638～1641は大型品である。1638・1639は口縁部直下に刻目凸帯をもつ。1640・1641は口縁部に沈線文をもち、1641は胴上半部に木口による押圧文をもっている。1641は、口縁部の拡張、器壁が厚いことより後期的要素ならびに外来的要素が強いものである。出土数は1点に限られる。1642～1657は中型である。1642は口縁端部に刻目をもつもので、口縁端部を刻むものはこの1点に限られる。1644～1649、1650～1657は出土量が多いもので、前者は口縁部を拡張せず、後者は口縁部を拡張し、口縁端部に1～2条の沈線をもつものである。1658・1659は小型品である。1660～1665は底部片である。くびれの上げ底となる1660～1663は口縁部を拡張しない1644～1649の底部となり、平底の1664・1665は口縁部の1650～1657の底部となるものである。

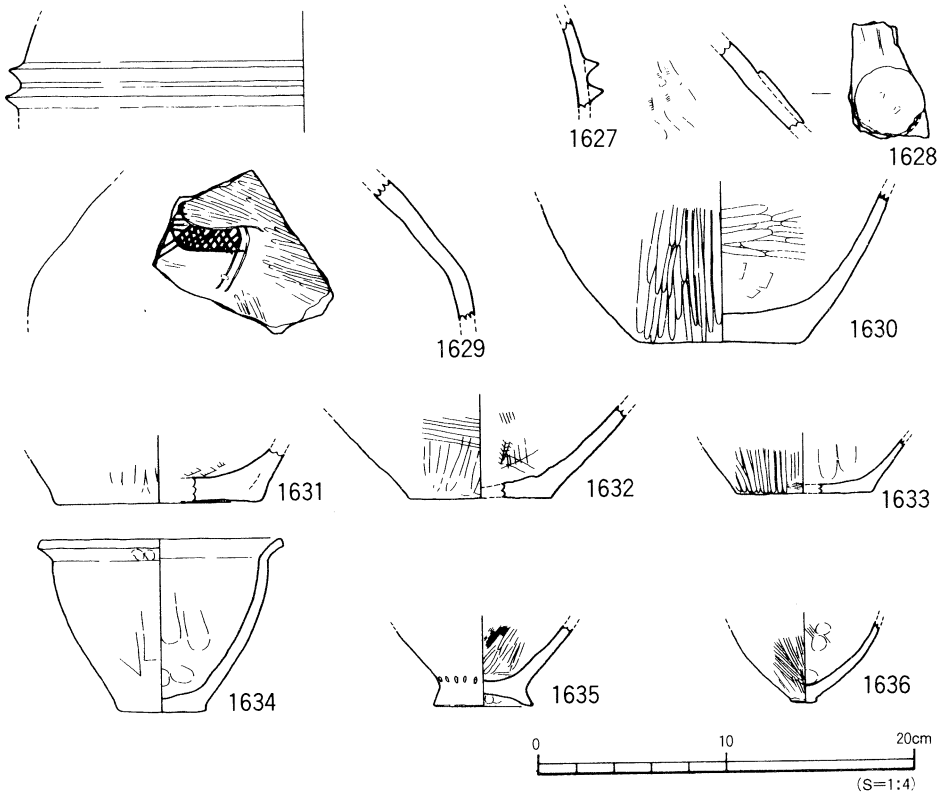
1666～1696は壺形土器である。1666～1670は大型品である。大きくひろがる口縁部をもつもので、器壁が厚い1666・1669・1670は通常みられるものである。1667・1668は器壁が薄く、口縁端部が上方に拡張され、これまでに出土資料としては数少ないものである。1671～1686・1688は中型品である。1671～1676は口頸部が比較的長いものである。口縁部は拡張され、いわゆる凹線文をもつものが多い。1676はどちらかと言えば古い形態を呈しているものである。1680～1686・1688は比較的口～頸部が短いもので、頸部の締まりが強いものが多い（1686を除く）。1682は器壁が厚く、口縁端部の拡張も下方に広く、出土例が少ない形態をもっている。1683は頸部に大きな押圧凸帯がつく、押圧は2ヶ1組となり、押圧手法が注目されるものである。1687・1689～1691は小型品である。頸部が締まり、口径が小さいものである。1687・1689は胴上半部に木口による押圧文をもっている。1692～1696は底部片である。平底が多く、上げ底になるものは古い様相を残したものといえる。



第212図　Eベルト（下層上部）出土遺物実測図（1）



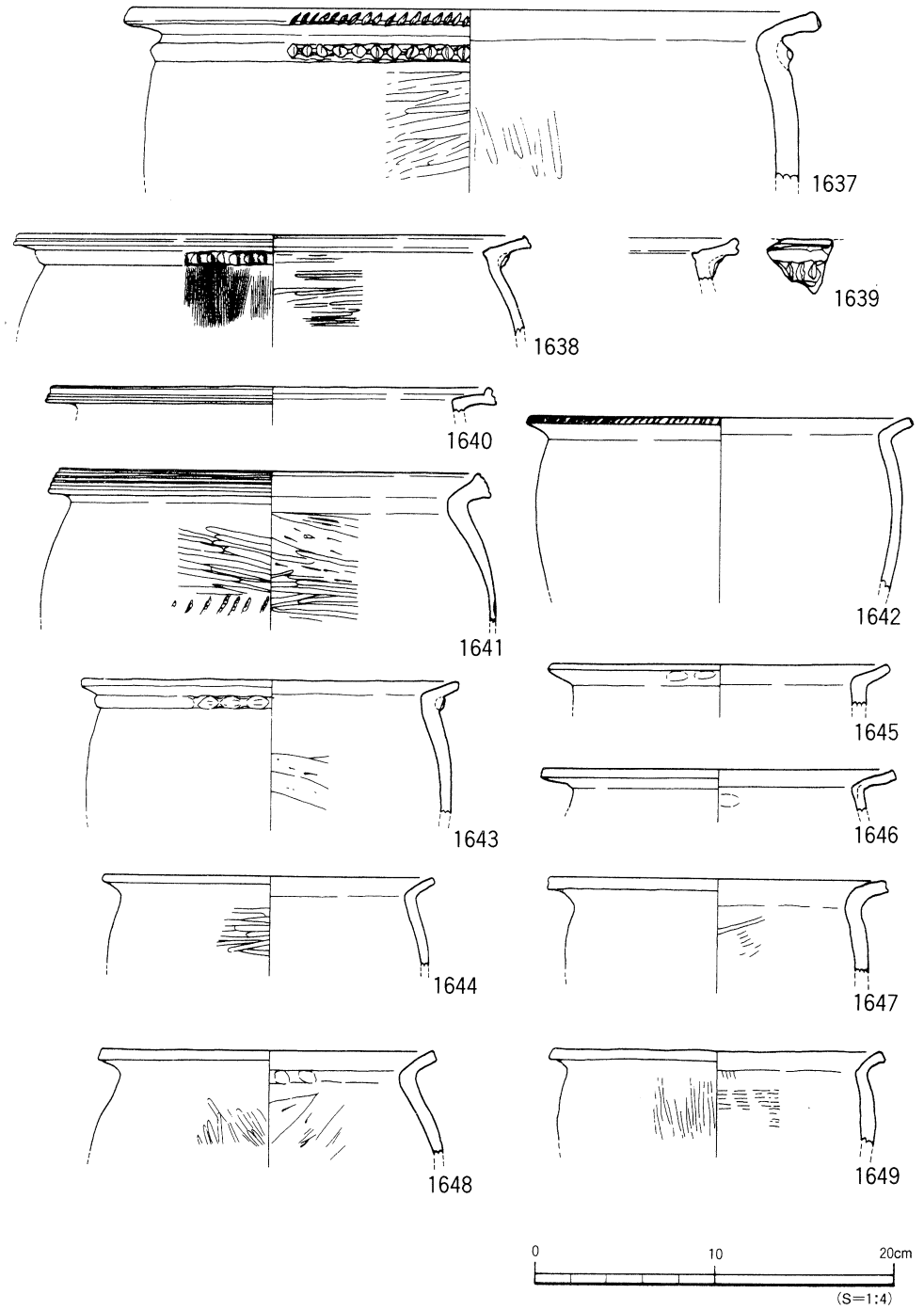
第213図　Eベルト（下層上部）出土遺物実測図（2）



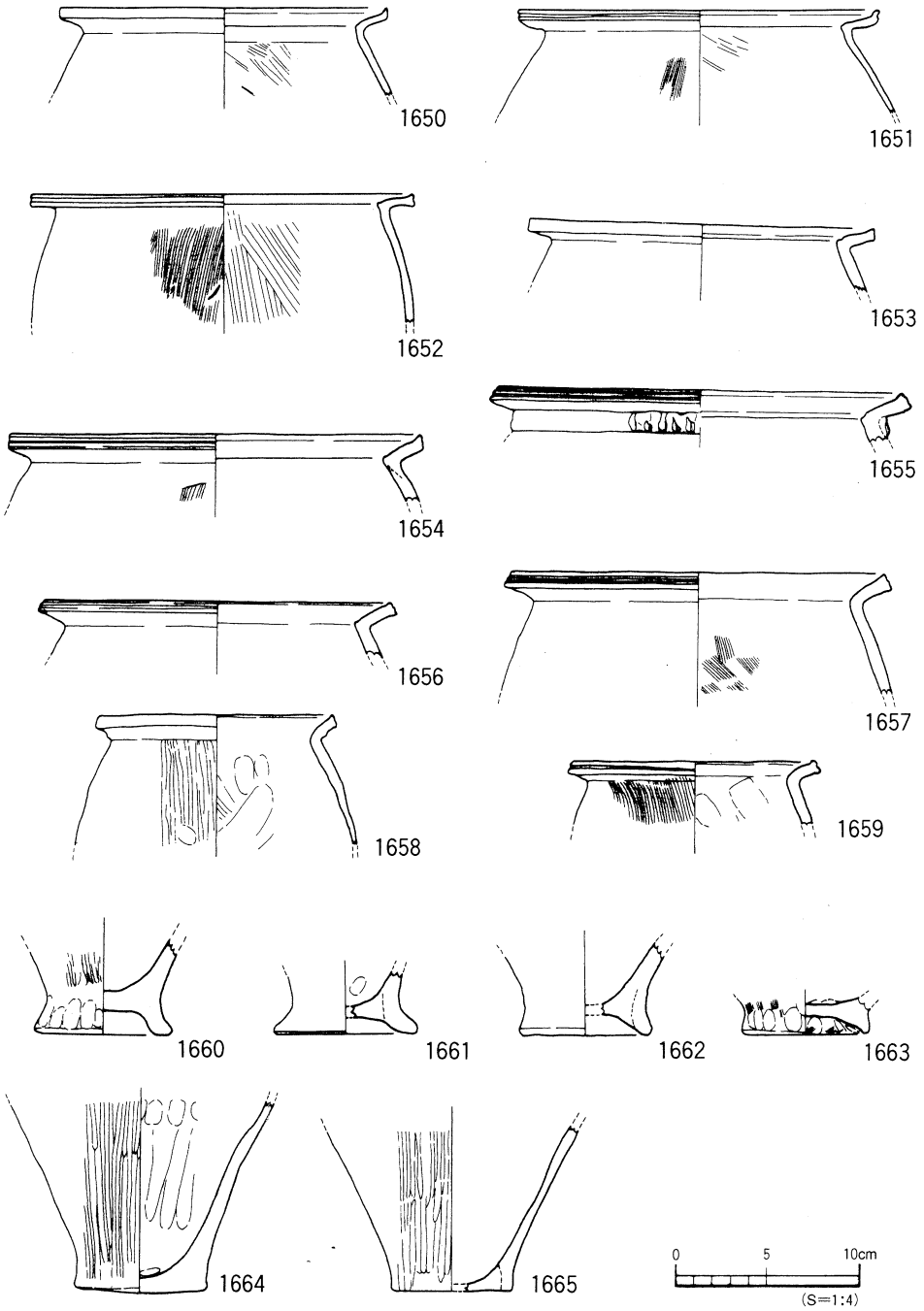
第214図　Eベルト（下層上部）出土遺物実測図（3）

1697～1719は高坏形土器である。1697～1704は坏部片である。口縁部が丸みをもって内傾ないし直立ぎみに立ち上がるものである。口縁部には1704を除き凹線文が施され、くわえて凹線文下に刻目を施すものである。1701は坏部全体に丸みをもっており、出土例が少ない形態のものである。1705～1719は脚部片である。1705・1706・1709・1711～1713は通常にみられる大～中型品である。1707は柱上部が太く、施文手法も先のものと異なるが、平野内で少例みられるものである。1708は柱上部が無文であり、中期前半にみられる長脚をもつ高坏形土器片とみられる。1710は山形文をもっており、矢羽根透しに次ぐ文様モチーフである。1714～1717は小型品である。坏部がやや深い坏部がつくものである。1718・1719は搬入品である。形態・胎土色調が全く異なり、1718は吉備地方、1719は東瀬戸内地方のものと思われる。

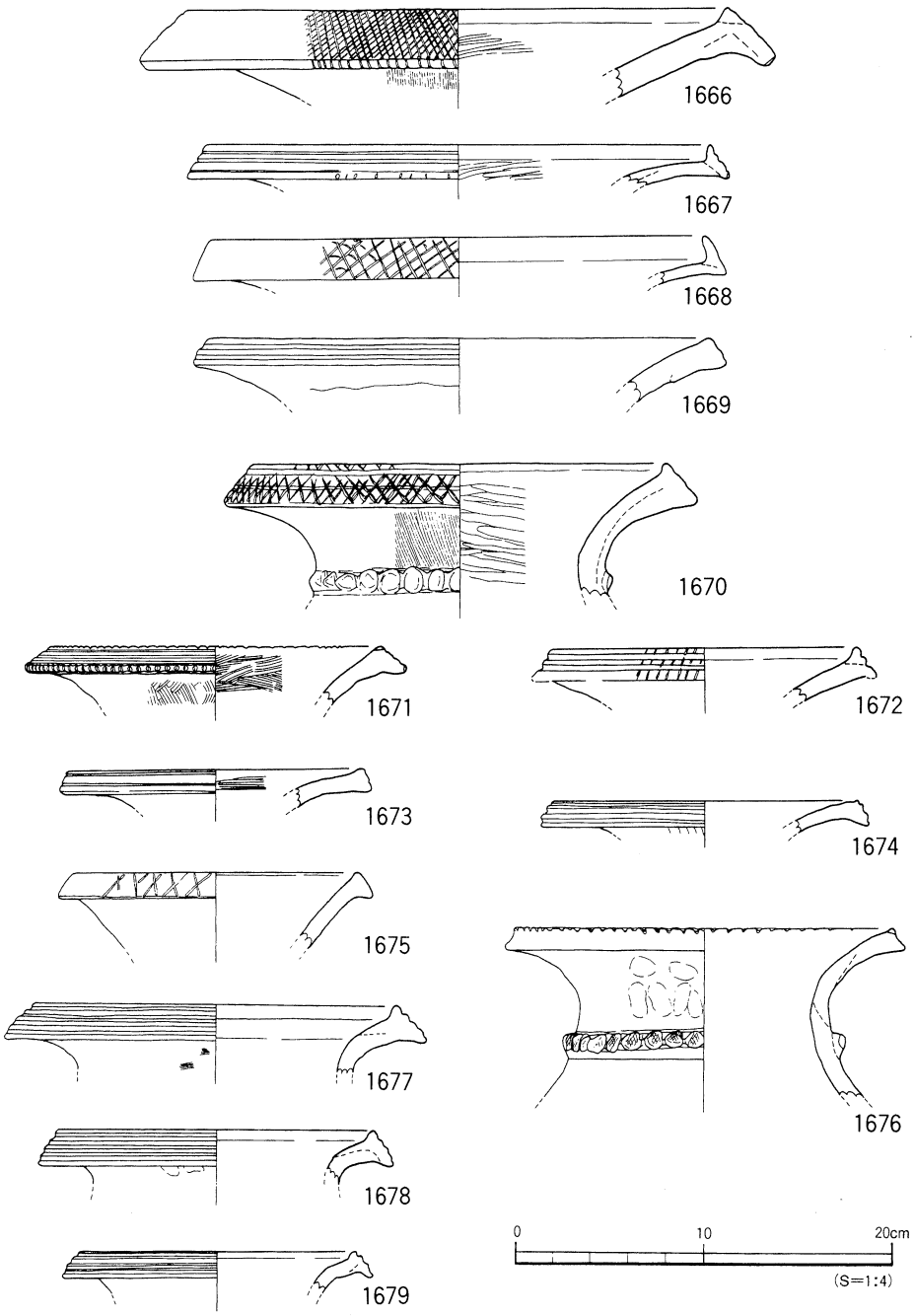
1720・1721は鉢形土器である。1720は直口口縁で、器壁が厚いものである。バケツ状の形態を呈すものになる。1721は小型品である。1722は把手部を欠くもので、ジョッキ形土器となるものである。1723・1724はいわゆる台形状土製品で、大型で器壁が厚く、突出部をもつ。



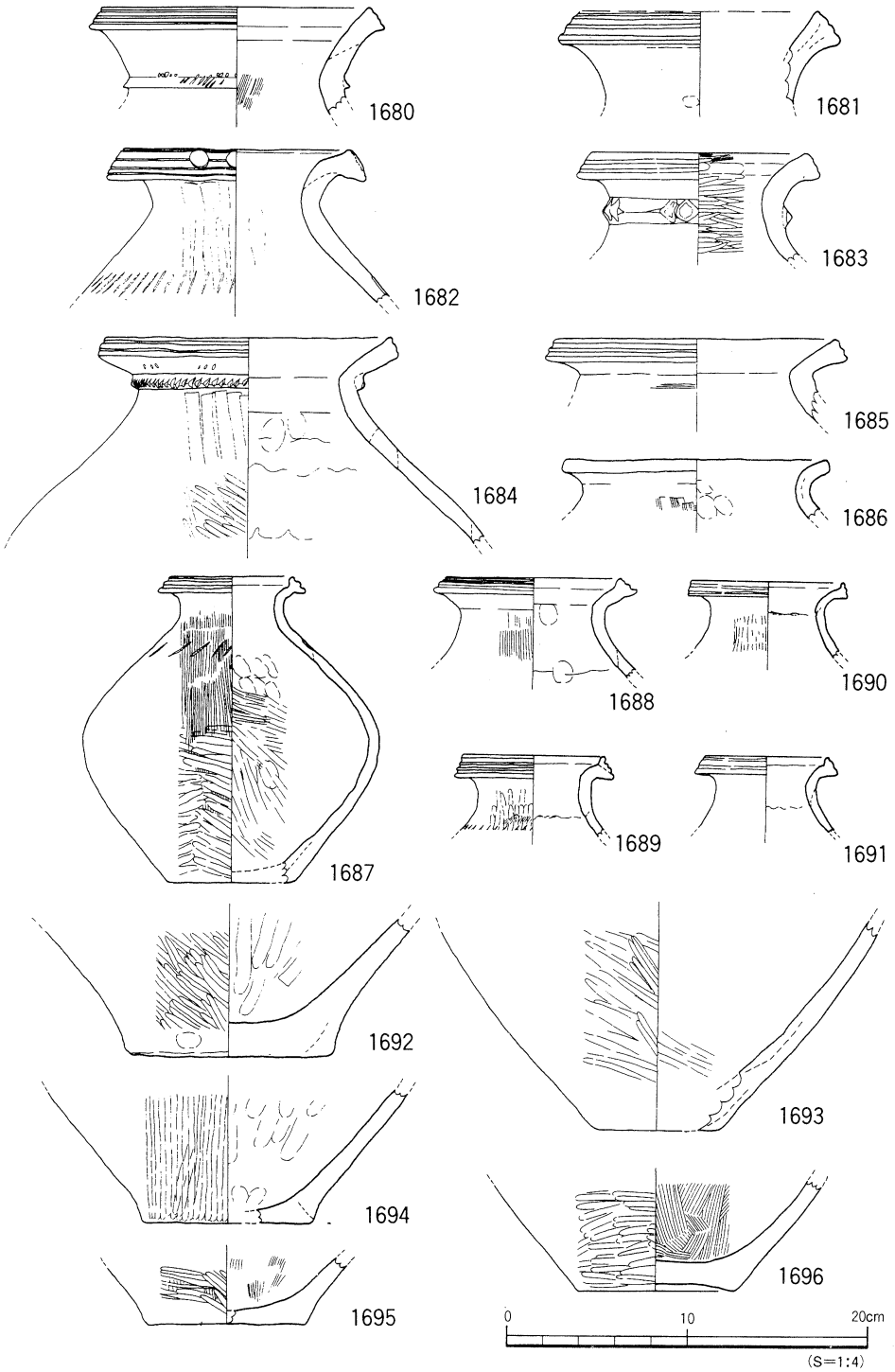
第215図　SR 1下層下部出土遺物実測図（1）



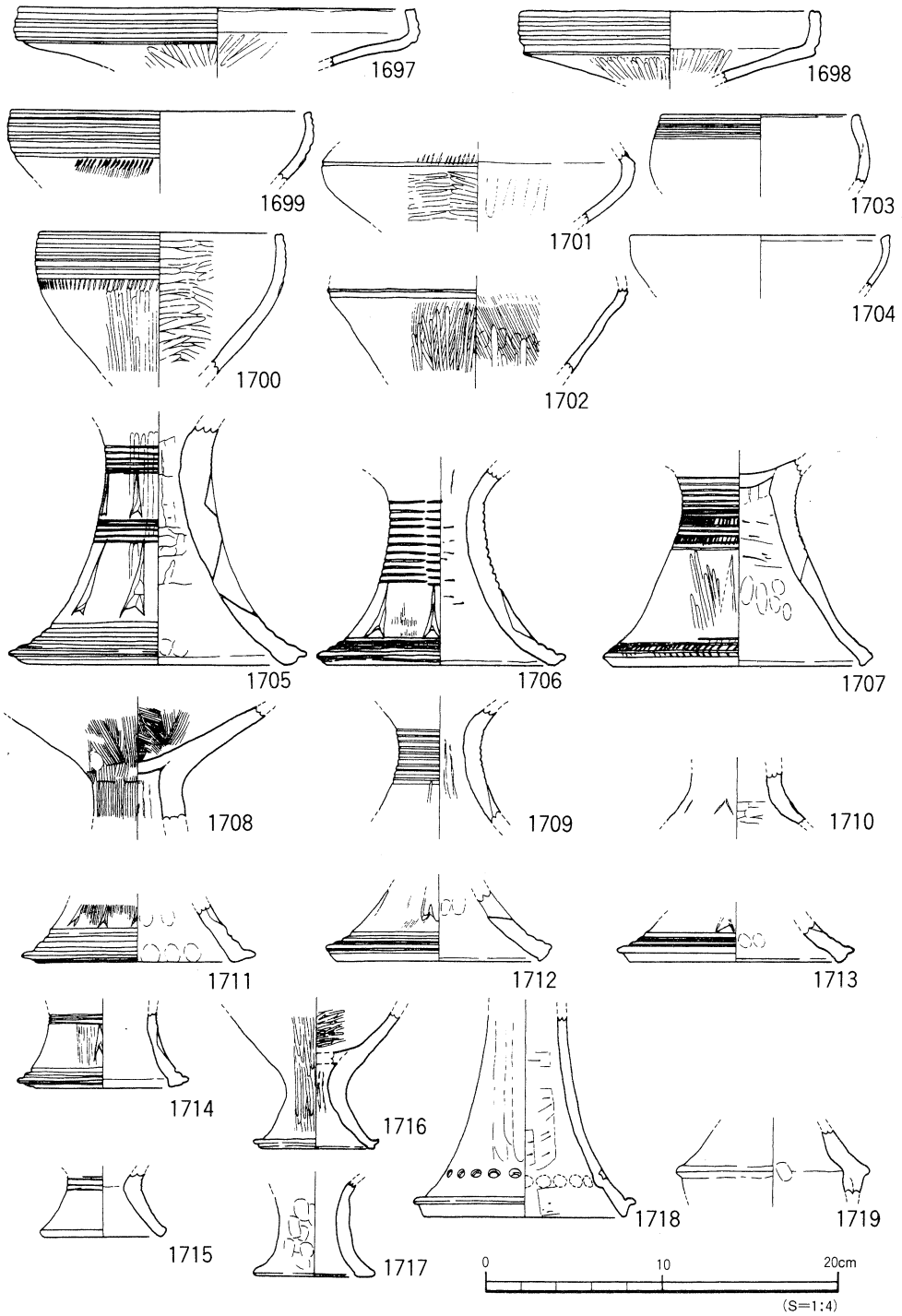
第216図　SR1下層下部出土遺物実測図(2)



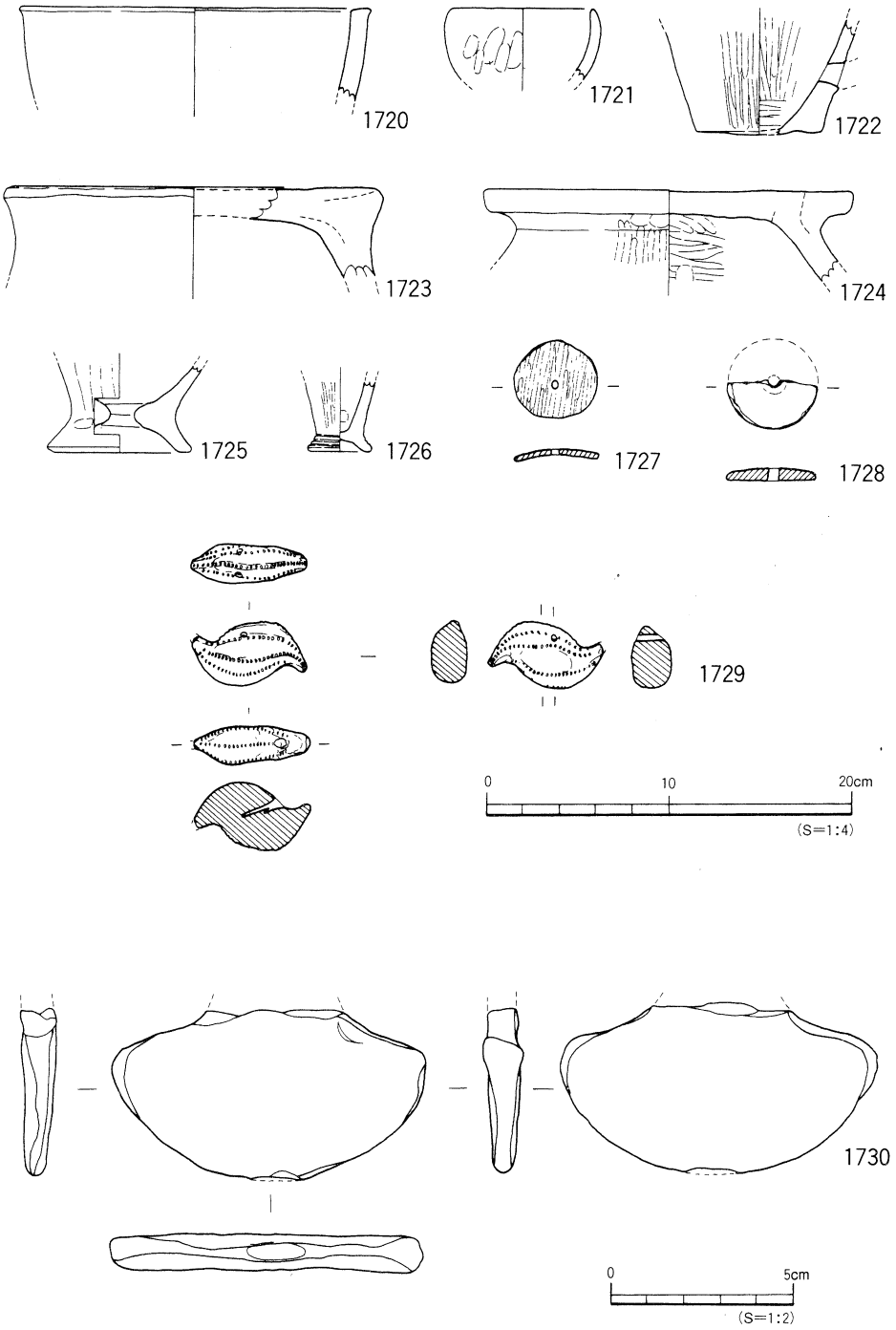
第217図　SR1下層下部出土遺物実測図(3)



第218図　SR1下層下部出土遺物実測図(4)



第219図　SR1下層下部出土遺物実測図(5)



第220図　SR1下層下部出土遺物実測図(6)

1725は甕形土器を転用したコシキである。1726はミニチュア品で甕形土器を模したものである。底部外面に沈線文をもっており、讃岐地方にみられる手法をもっている。1727・1728は土製紡錘車で、1727は胴部片の転用品である。1729は土製品である。鳥形状のもので、未貫通孔が穿たれている。1730は分銅形土製品である。器形は円形で、くびれ部根本で折れ、上半部を欠失している。また、下端面からくびれ部にかけて次第に肥厚する。確実に顔面表現と思われる部分は、見当たらない。任意に表面、裏面を決定しているが、表面は全体が黄灰色で、一部に煤が付着している。裏面は、全体が黄土色である。胎土は微細砂で、焼成はやや良好である。

参考品（第221図、図版95）

出土地点より、下層として確定できなかった資料である。

1731～1735は下層ないし上層からの出土品である。1731～1733は壺形土器、1734は鉢形土器、1735は高坏形土器である。1731は胴上半部にタテ方向の沈線が全体に施されているものである。頸部が長く、やや細い形態は平野での出土例がみられないものである。

1736～1739はＳＸ3資料と思われるものである。1736は甕形土器、1737～1739は壺形土器である。1738は広口壺で、調整が丁寧で、焼成も良好な作りのよい土器である。

1740、1741は出土地点が不明なものである。1740は脚部片である。裾部外面に細かい多条の沈線文を施している。形態、施文手法とも異形のものである。1741はミニチュア品である。

②　ＳＲＩ北半部（①～⑥区）の調査

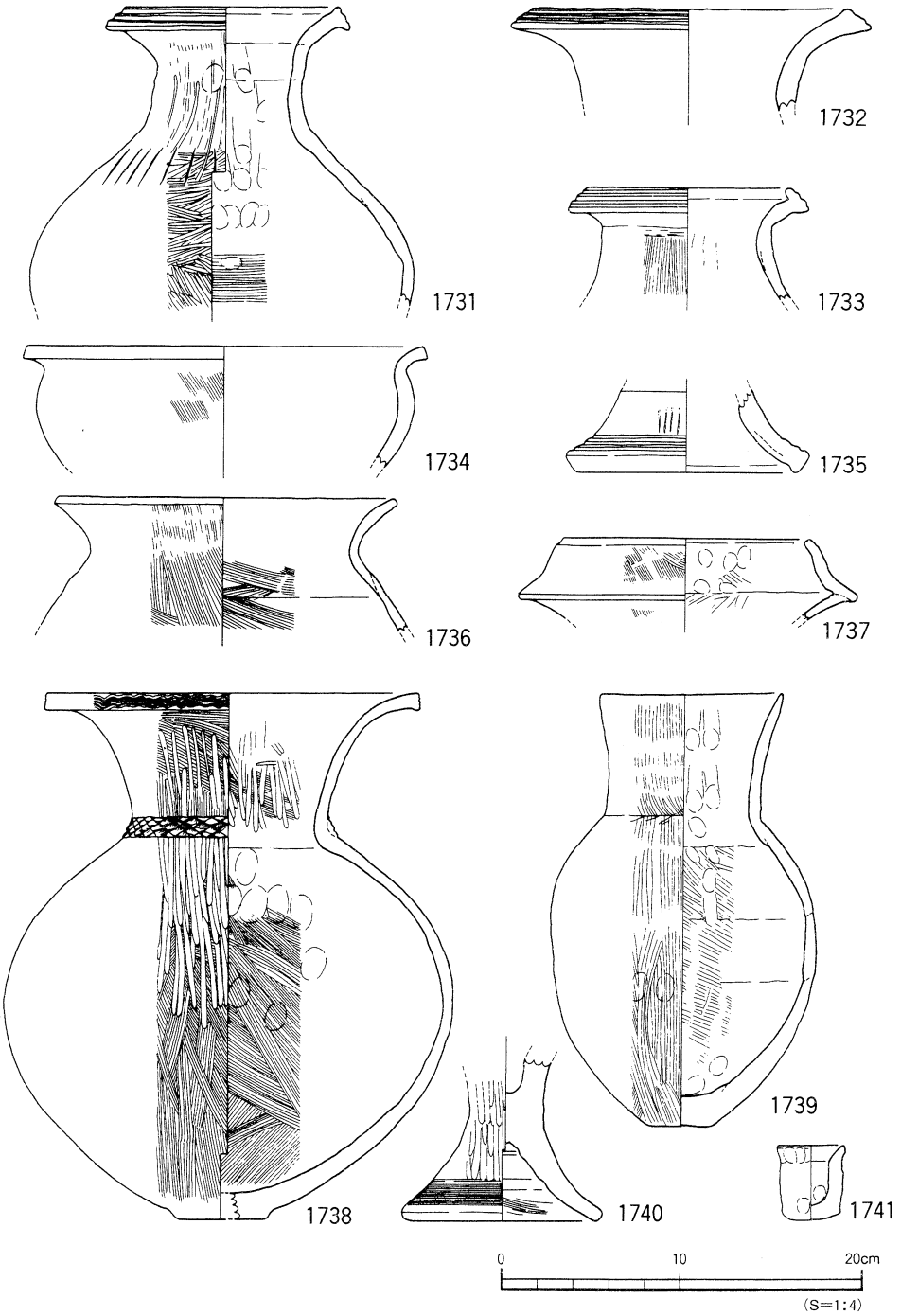
北半部ではＳＲ2・3の埋土である灰色粗砂を完掘後、ＳＲ1を検出した。③・⑤・⑥区及び②区の一部にて検出した。調査時には、ＳＲ1の上層はＳＲ2・3によりすべて削平されているものと判断し、遺物はＳＲ1下層として取り上げを行った。その後、整理時に上層遺物と思われるものが多数あることが判明した。しかし、上・下層のいずれかに属するものか判断しがたいものが多いため、本稿では掲載遺物は上・下層を分別せず、ＳＲ1北半部出土品として報告する。

遺物は弥生時代中期後葉～後期前半に比定される土器と、石器では打製石鏃や石庖丁などが出土した（Ｐ289・291～293，第272～274図）。土器には、ジョッキ形土器の把手部分や分銅形土製品があり、九州、安芸、備後地方からの搬入品も含まれている。九州地方からの搬入品には赤色顔料が付着している。

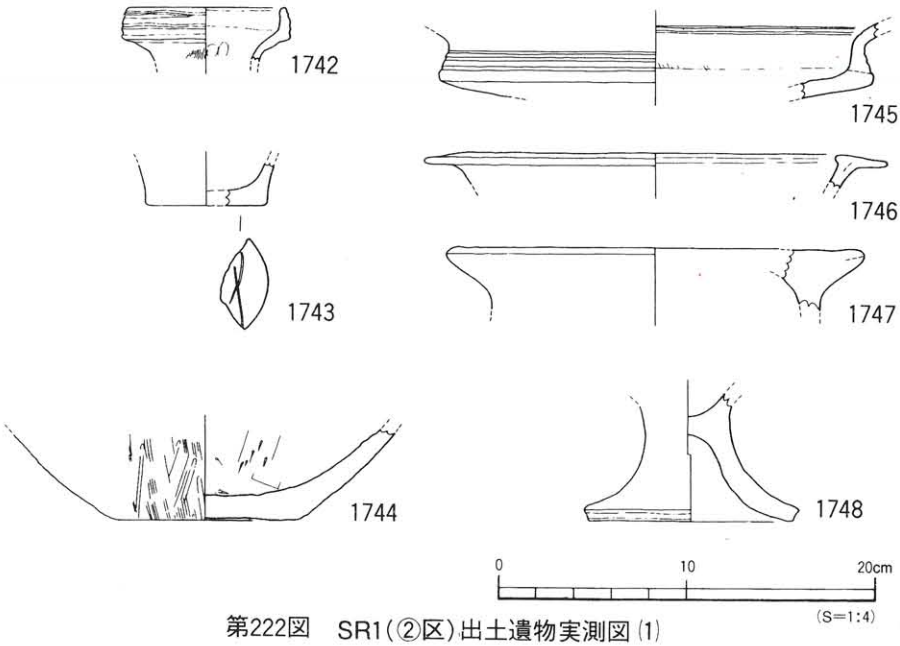
ＳＲＩ北半部出土の遺物

②区出土遺物（第222・223図、図版95・96）

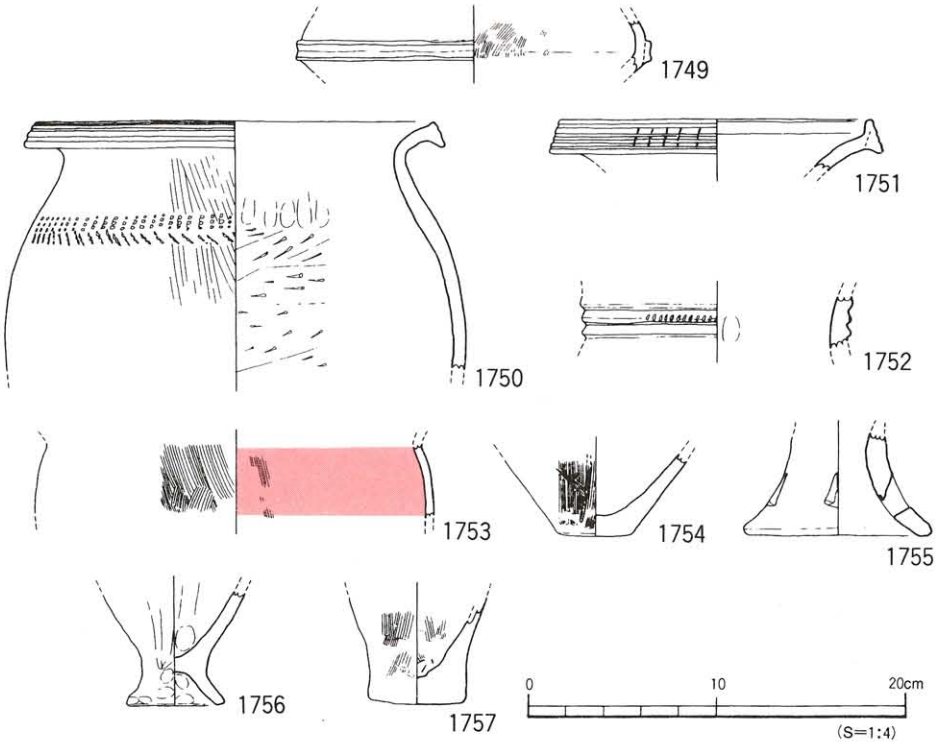
1742～1748は中期後葉～後期前半に比定されるものである。1742は壺形土器で、口縁部は立ち上がり、外面に沈線をもつ。1743は底部に焼成前の線刻がある。1745は高坏形土器の坏部である。坏部外面と口縁部上面に沈線をもつものである。



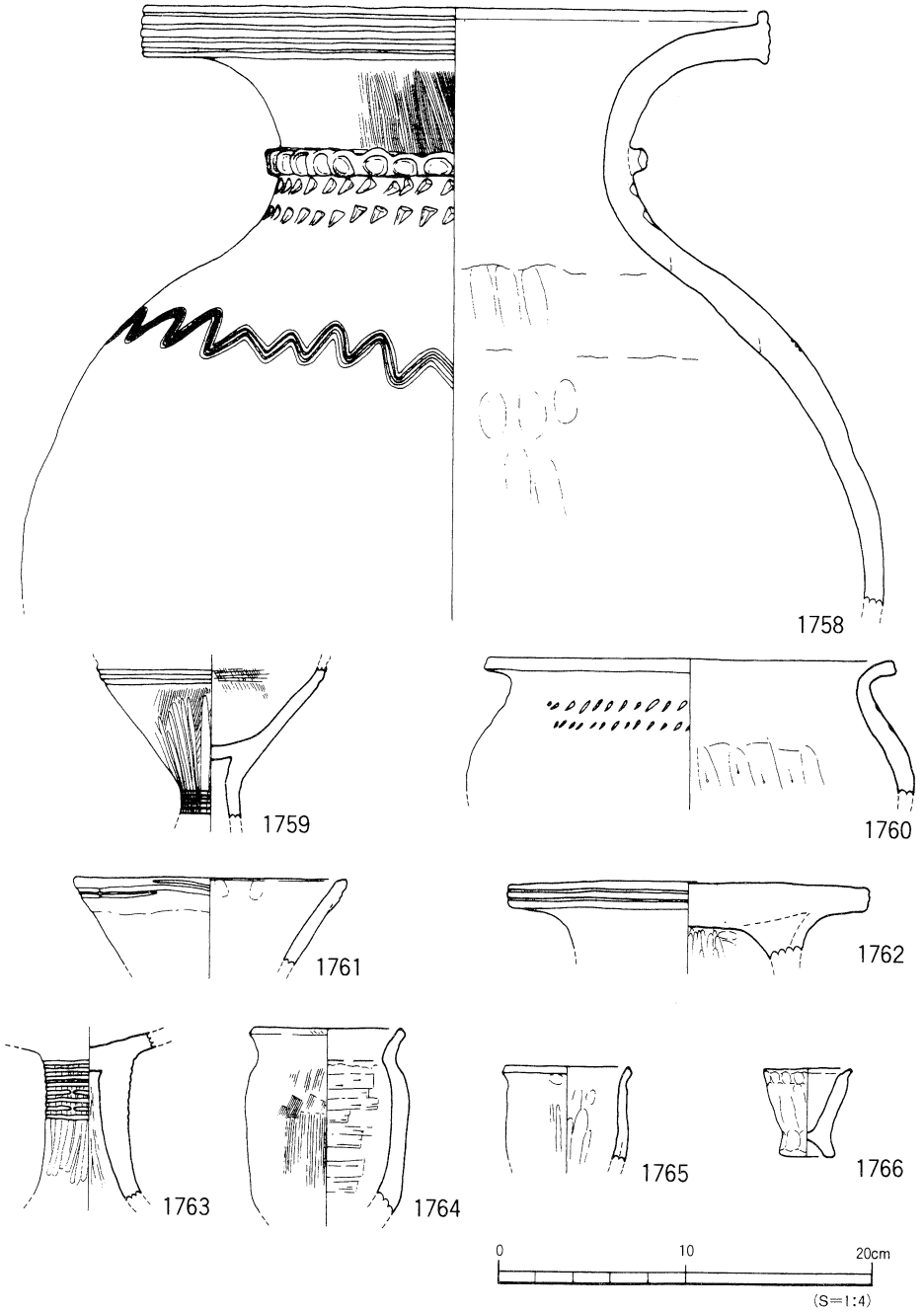
第221図　SR1下層下部（参考品）出土遺物実測図



第222図　SR1(②区)出土遺物実測図(1)



第223図　SR1(②区) 出土遺物実測図(2)

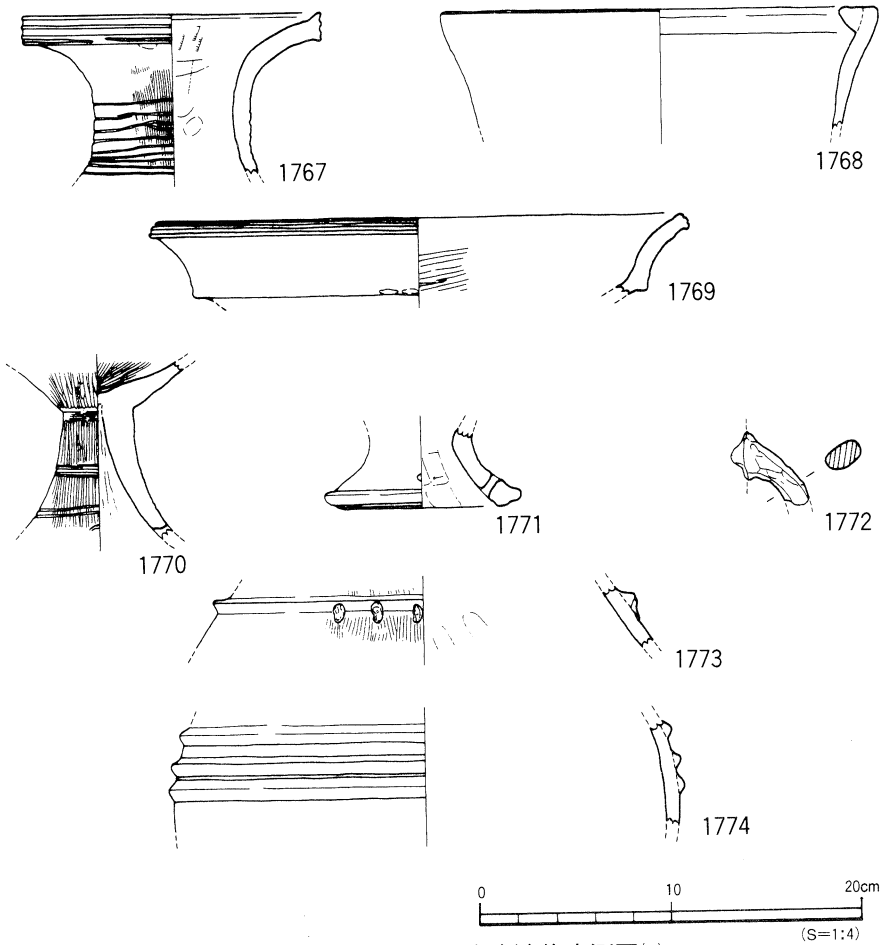


第224図　SR1(③区)出土遺物実測図

1746は高坏形土器である。口縁部は鋤先状を呈す。九州的要素が強いものである。1747はいわゆる台形状土製品である。1748は高坏の脚部である。1749は壺形土器の胴部である。最大胴部にM字状の凸帯をもつ。器壁がやや薄い。1750は甕形土器で胴上半部に貝殻による押圧羽状文をもつ。1751・1752・1754は壺形土器、1753・1757は甕形土器。1753の内面には赤色顔料が付着する。1755は高坏形土器の脚部、1756は鉢形土器である。

③区出土遺物（第224図、図版96・97）

1758は壺形土器である。肩部に櫛描波状文をもつ。1759は高坏形土器で、口縁部を欠くものである。柱上部に細沈線をもつ。1760は甕形土器で肩部の張りが強いものである。1761は異形品である。口縁部外面に2条の沈線をもつ。1762はいわゆる台形状土製品で、端部に沈線を2条もつ。1763は高坏形土器である。1764～1766はミニチュア品で、口縁部が外反する形態をもつ。

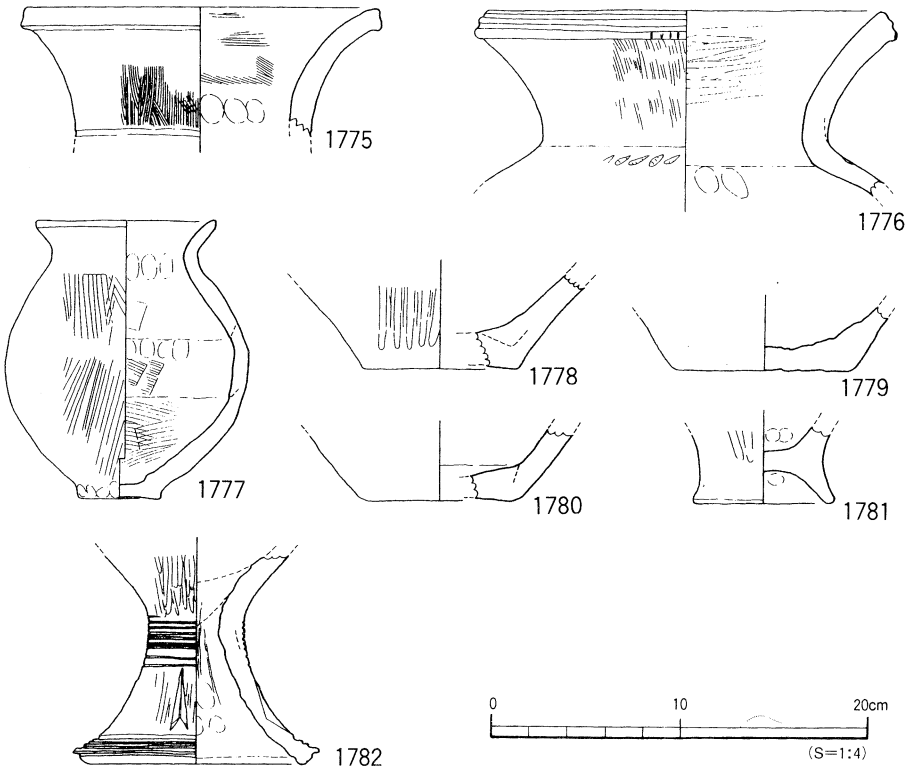


第225図　SR1(⑤区)出土遺物実測図(1)

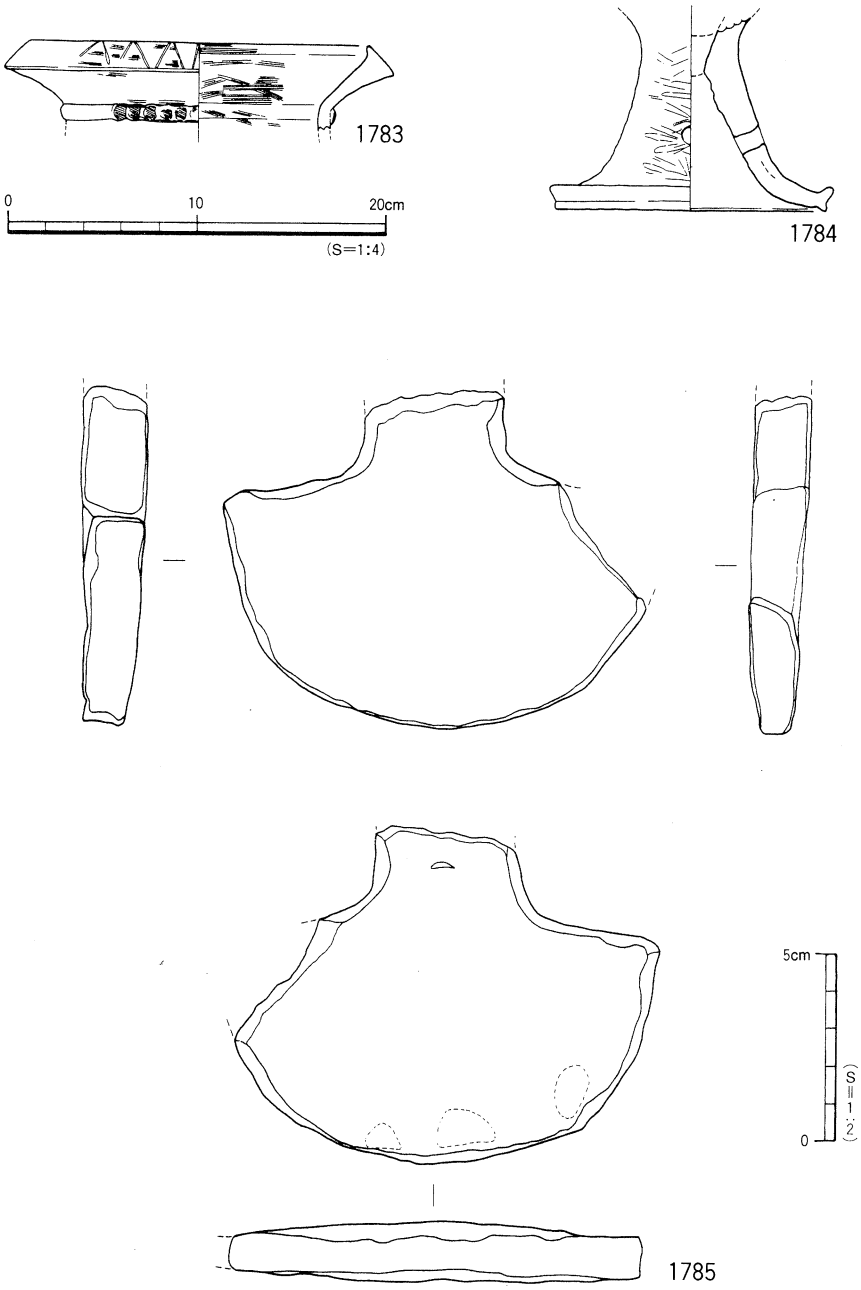
⑤区出土遺物（第225～227図、図版97）

1767は壺形土器である。頸部と口縁端部に沈線をもつ。1768は鉢形土器である。大きな平底をもつものになる。1769～1771は高坏形土器である。1770は柱部に細沈線と円孔をもつ。1772はいわゆるジョッキ形土器の把手部分である。1773・1774は胴部に凸帯をもつもので、形態・施文手法とも平野にはなく外来的要素の強いものである。

1775～1782はやや古い時期のものと思われるものである。1775～1780は壺形土器である。1775・1776は外反するやや長い口頸部をもつものである。1777は完形に近いもので、大きな底部と短く外反する口縁部をもつものである。1781は甕形土器の底部、1782は高坏形土器の脚部である。1783・1784は古い時期のもの（中期後半～後期前半）で1783は壺形土器、1784は高坏形土器の脚部である。1785は分銅形土製品である。1785は器形は円形で、くびれ部中央付近で折れ、下半部のみが存在している。大きさでは、現在公表されている中で、県下最大のものである。上下対象の分銅形土製品と仮定し、欠損した上半部を復元すると18×11cm程度のものと推定される。



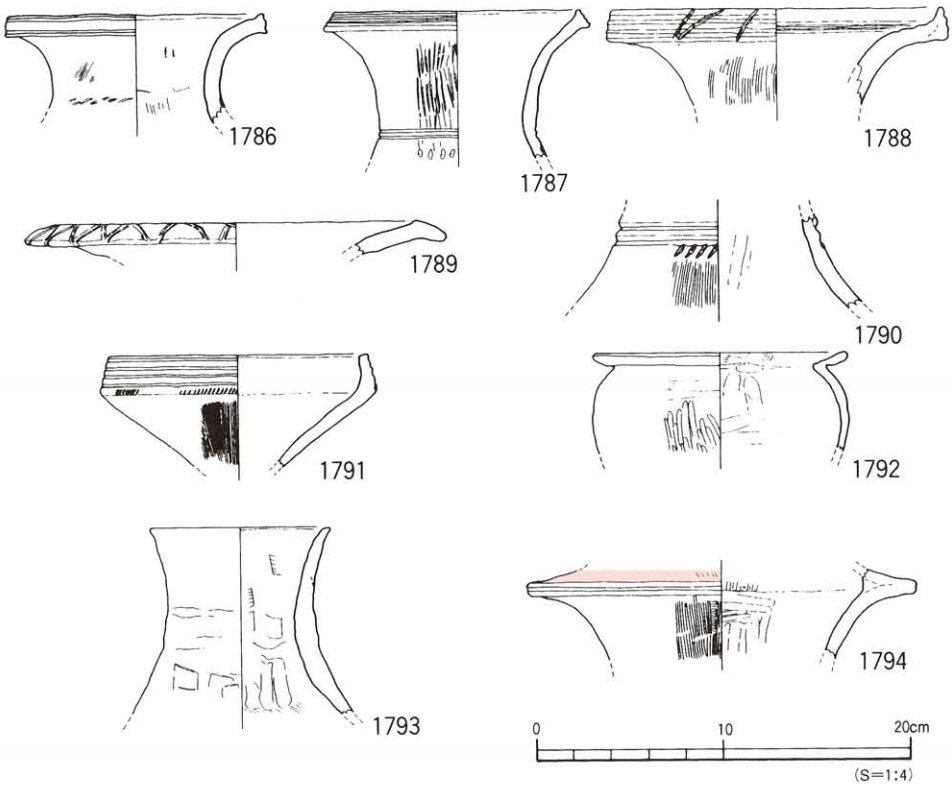
第226図　SR1(⑤区) 出土遺物実測図(2)



第227図　SR1(⑤区)出土遺物実測図(3)

⑥区出土遺物（第228図、図版98）

1786～1790・1793・1794は壺形土器である。1786の頸部には刺突文、1787は頸部に沈線と刺突文をもつ。1788は口縁端部に部分的に斜線文がある。1789は2本歯の山形文をもつ。1791は高坏形土器、1792は鉢形土器である。1793は口頸部～頸胴部の各境が曖昧なものである。胎土・色調も異なり外来的要素が強いものである。1794は口縁部片で複合口縁状の形態をもつものである。赤色顔料が付着する。器種は不明。

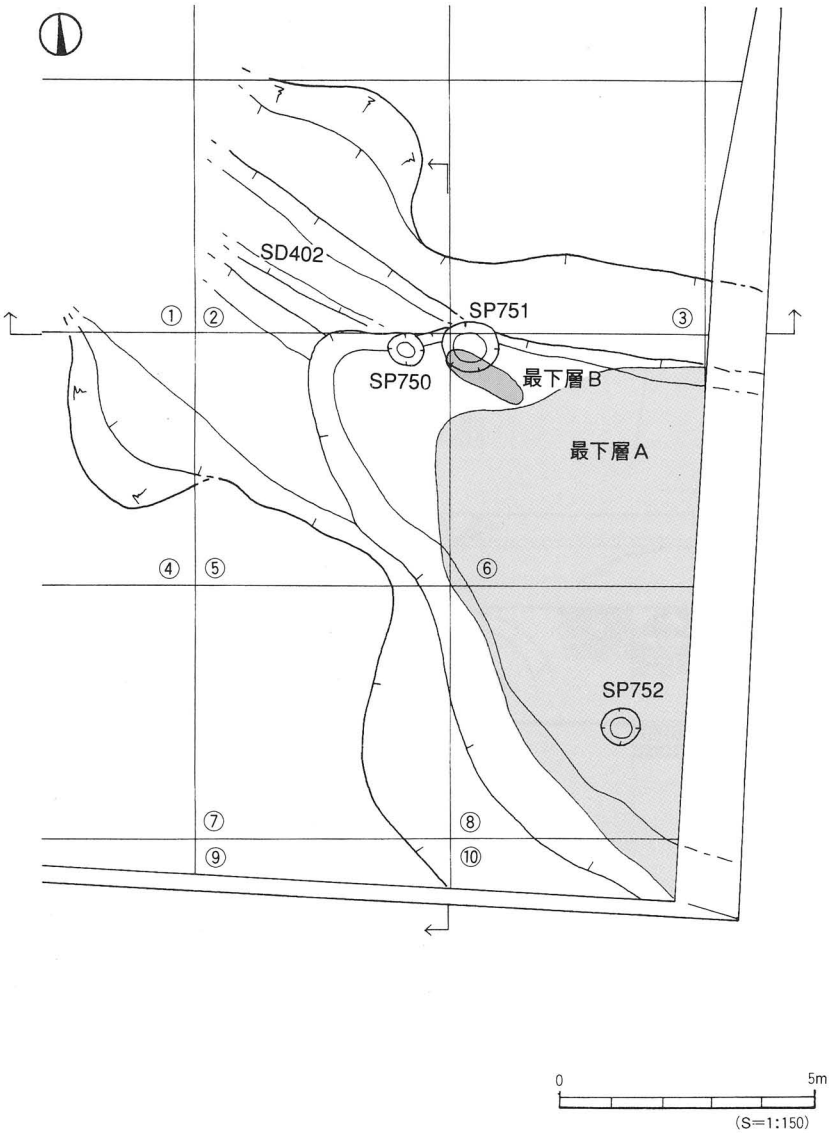


第228図　SR1(⑥区) 出土遺物実測図

流路最下層（第229図）

ＳＲ1下層を完掘すると、流路基底面で明灰色の砂層（最下層Ａ）と鉄分を含む小礫層（最下層Ｂ）を検出した。

最下層Ａは⑥・⑧・⑩区で検出した土層で、南北11m×東西5m、厚さ5～10cmの堆積を測る。土壌内には明灰色の微砂がしま状に混入する。遺物は、土器の出土はほとんどなく、石器は柱状片刃石斧、砥石、石庖丁未製品などが出土している（P286・288・291～293，第270・272・273図）。



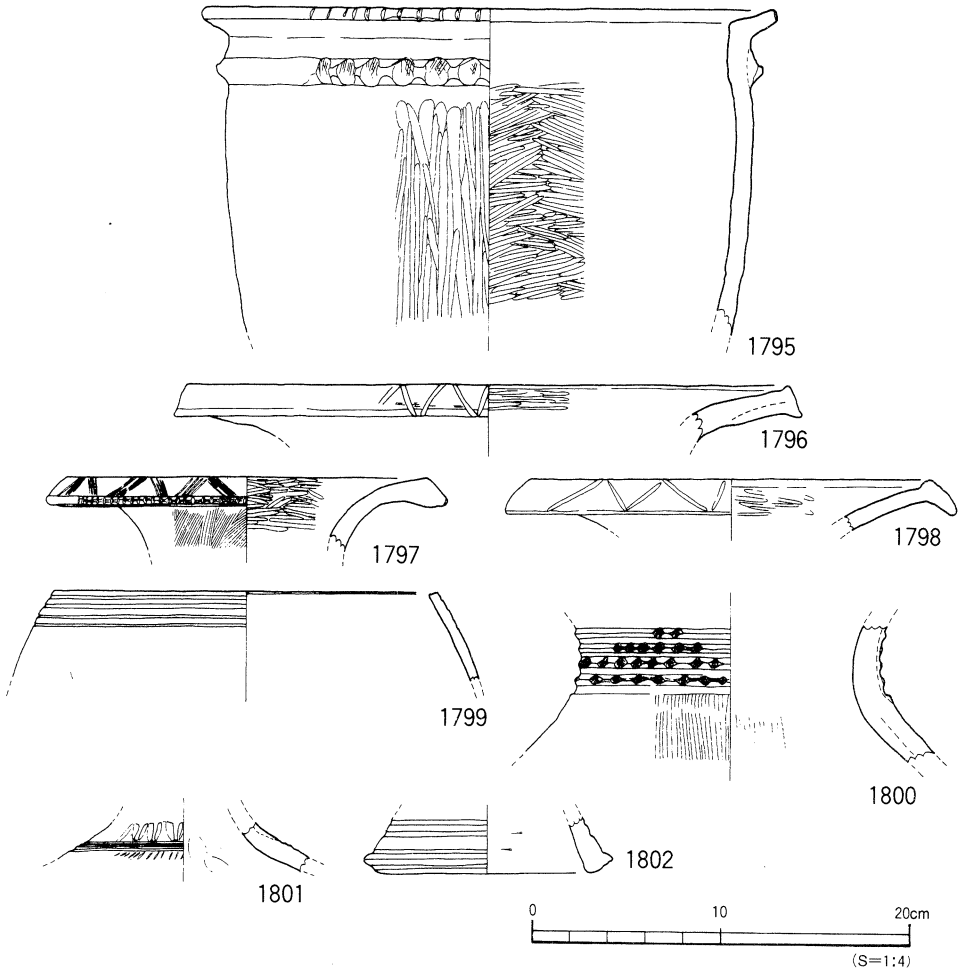
第229図　最下層Ａ・最下層Ｂ及び基底面検出状況図

最下層Ｂは⑥区の北西部で検出した土層で、幅50×230cm、厚さ3～5cmの堆積を測る。流路基底面に密着した状態で検出した。3～5mm大の小礫を含む土層で酸化作用より土壌全体が褐色を呈している。

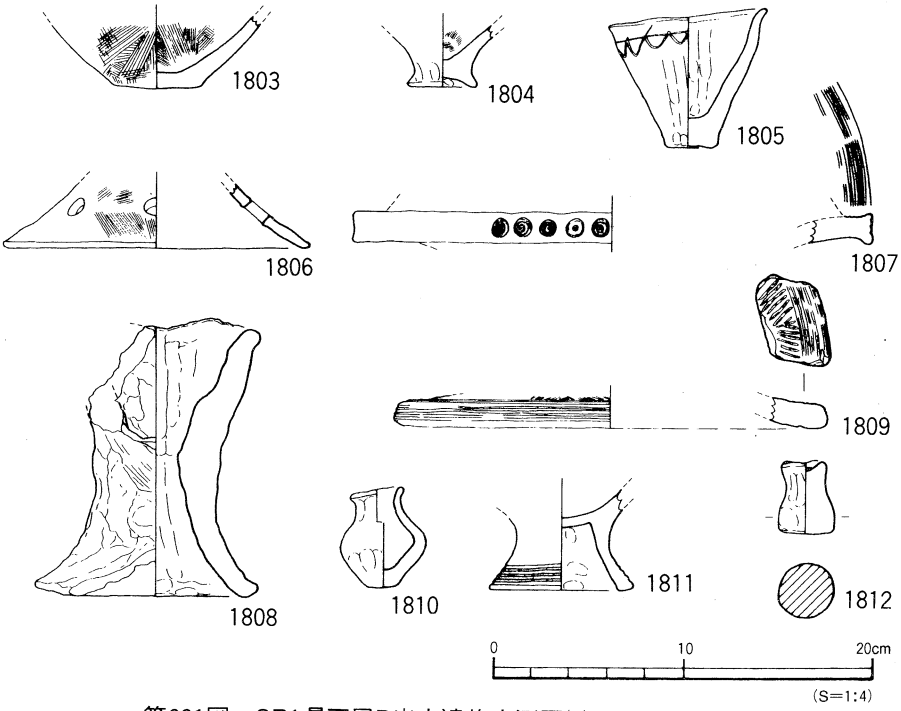
遺物には弥生時代中期～後期前葉に比定される土器と、石器には石錘、石庖丁、扁平片刃石斧などが出土する（Ｐ289・291・293，第272・273図)。土器の中には安芸や讃岐地方からの搬入品も含まれている。

最下層Ｂ出土遺物（第230・231図、図版98)

1795～1802は弥生中期～後期前葉に比定されるものである。1795は甕形土器、1796～1801は壺形土器、1802は高坏形土器である。1799は鉢状のもので、口縁外面に細い沈線をもつ。1800は頸部に4条以上の凹線文と刻目をもっている。1801は壺形土器の胴部で、沈線文と刻目凸帯をもつ。形態・色調・施文手法とも平野のものと異なり、外来的要素の強いものである。



第230図　SR1最下層Ｂ出土遺物実測図(1)



第231図　SR1最下層B出土遺物実測図(2)

1803は壺形土器、1804は鉢形土器である。1805は小型の鉢形土器である。ミニチュア品に近い法量をもつ。1806は高坏形土器の脚部である。1807は壺形土器と思われるものである。1808は支脚形土器である。受部の一部が「U」字状を呈す。1809は器種不明の土製品である。多条の山形文が施されている。1810はミニチュア品で、壺形土器を模したものと思われる。1811・1812は出土地点が少し離れているもので、1811は高坏形土器の脚部、1812は中実支脚のミニチュア品かと思われる。

基底面検出の遺構（第229図、図版30・31）

ＳＲ1の基底面は、わずかに西から東に向けて緩傾斜している。流路検出面から基底面までの深さは約1ｍを測る。⑤・⑥・⑧区ではピットを計3基検出した。

ＳＰ750は⑤区にあり、規模は径70cm、深さ約20cmを測る。埋土はＳＲ1下層と同様の暗灰褐色土である。ピット内からの遺物の出土はない。

ＳＰ751は⑥区にあり、ピット上部は最下層Ｂが一部覆っている。規模は径80×100cm、深さ約25cmを測る。埋土はＳＲ1下層と同様の暗灰褐色である。ピット内からの遺物の出土はない。

ＳＰ752は⑧区にあり、ピット上部は最下層Ａが覆っている。規模は径60×70cm、深さ約35cm

を測る。埋土は暗灰色土である。ピット内からは弥生土器片が数点出土した。

これら3基のピットは性格は不明で、流路に伴うものかどうかは判断しがたい。

このほか⑥・⑧区では、径10cm前後、深さ5～10cmの小ピットが点在して検出したが、時期と性格は判断できない。

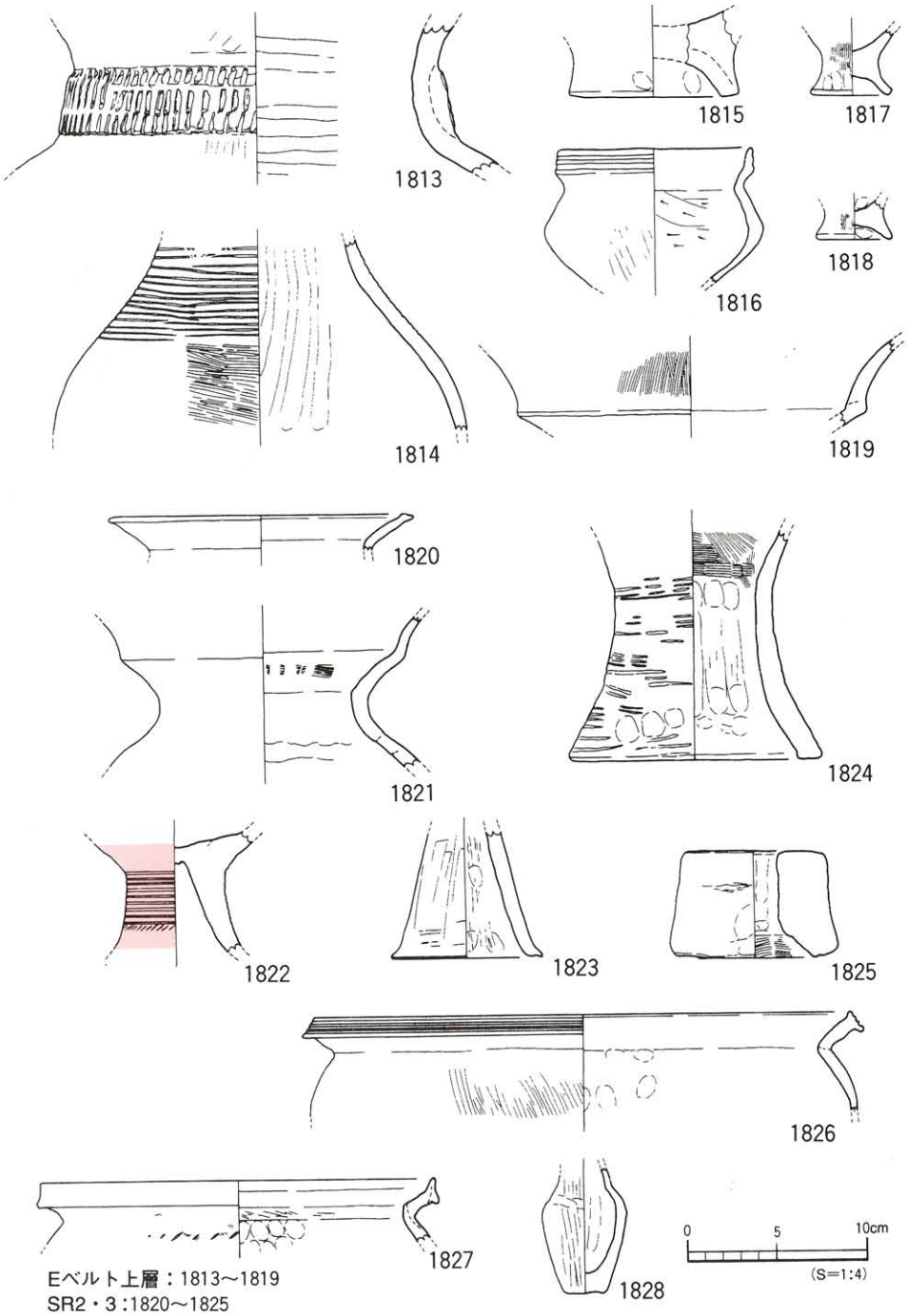
その他の遺物

調査区内に設けた土層観察用のベルトとトレンチからも遺物が多数出土した。出土地点や層位に不明な点があり、本稿ではベルト・トレンチ出土遺物として報告する。

ベルト・トレンチ出土遺物（第232～234図、図版99・100）

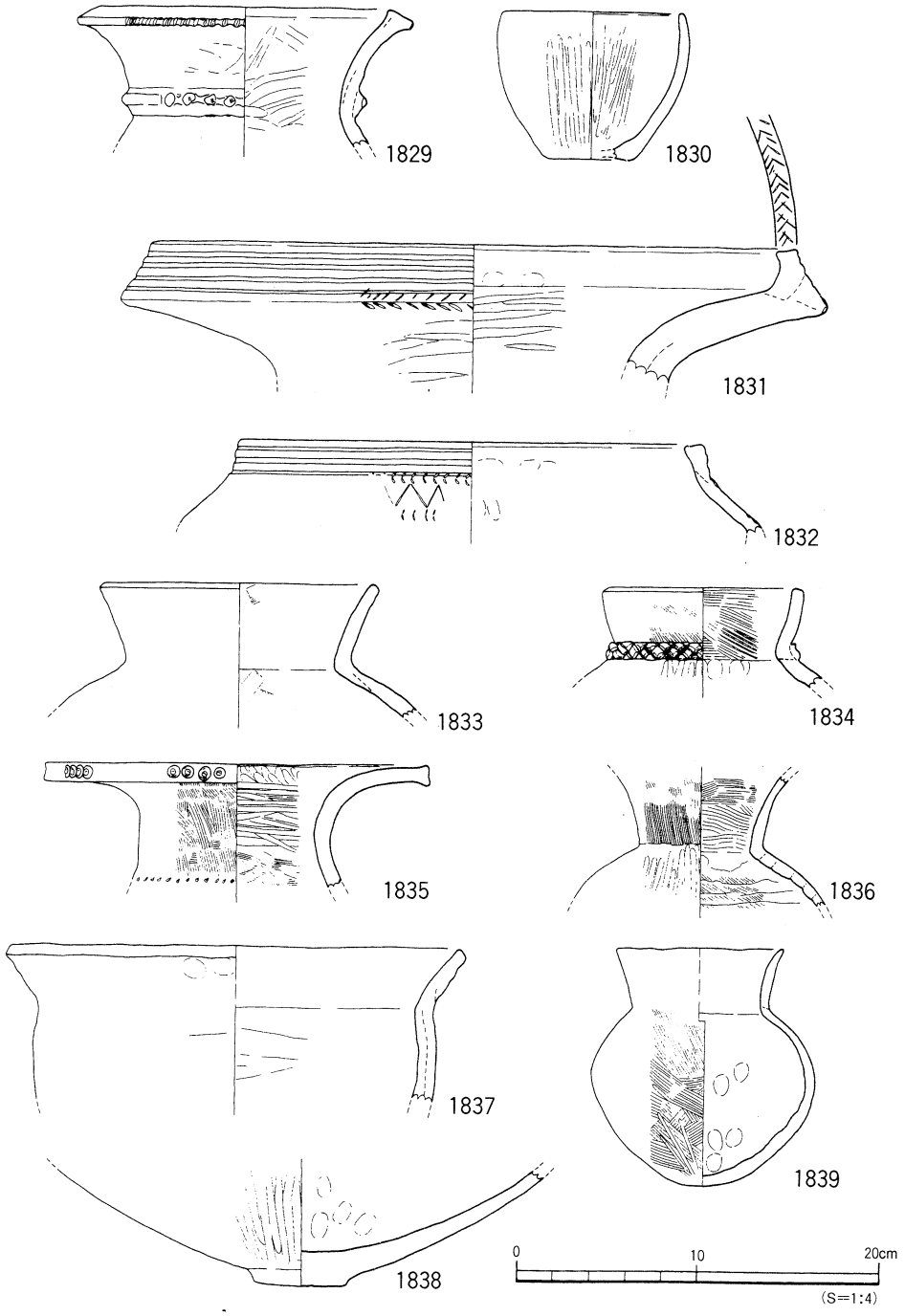
1813・1814は壺形土器である。1813は大型品で幅広い押圧を施した凸帯を頸部にもつ。1814は頸部に多条の櫛描き直線文をもつ。器形・施文手法とも平野のものとは異なり、外来的要素の強いものである。1815は甕形土器の底部。1816～1818は鉢形土器である。1817・1818は小型品で、ミニチュアに近い法量である。1816は口縁部が立ち上がり、外面に沈線をもつもので、内面のケズリ痕が著しく残るものである。形態・調整・施文手法は外来的要素が強い。1819は高坏形土器で、大きく広がる口縁部をもつものである。1820は甕形土器の口縁部である。口縁端部は面をもち、わずかに外傾する。1821は壺形土器の口頸部である。内傾する短い頸部に、外反する二重口縁をもつ。1822は高坏形土器の柱部片である。外面に赤色顔料が付着する。1823～1825は支脚形土器である。1823は裾端部がわずかに外反するもので小型品である。1824は脚端部は内側に小さく突出する。1825は中央部に貫通孔をもつ。1826・1827は甕形土器である。1826は器壁が厚く、口縁端部に沈線をもつ。1827は口縁端部が上方に拡張され、肩部に刺突文をもつ。1828はミニチュア品で、壺形土器を模したものであろう。1829は弥生中期の壺形土器、1830は後期の鉢である。1831は壺形土器で後期前半のものである。1832は長脚付の注口土器になる可能性が高いものである。胎土・色調とも平野のものとは異なる。1833～1836は壺形土器である。後期末。1837は中型の鉢形土器である。1838は大型壺の底部である。後期末。1839は壺形土器で、古墳時代前半期のものである。同時代の遺構に伴うものであろう。1840～1842は壺形土器である。いずれも形態・施文・色調とも平野のものとは異なるもので、外来的要素の強いものである。1843は小型の鉢形土器である、1844はミニチュアないし古墳時代の小型壺とも考えられるものである。1845は底部で、壺形土器とみられるが、断定できない。1846は小型の鉢形土器である。1847は高坏形土器の坏部、1848は焼成前の小円孔がみられる壺ないし鉢形土器の蓋である。

最後に流路出土の遺物のうち、複合口縁壺に施されている波状文や山形文などの拓本を以下に掲載した（第235～237図）。



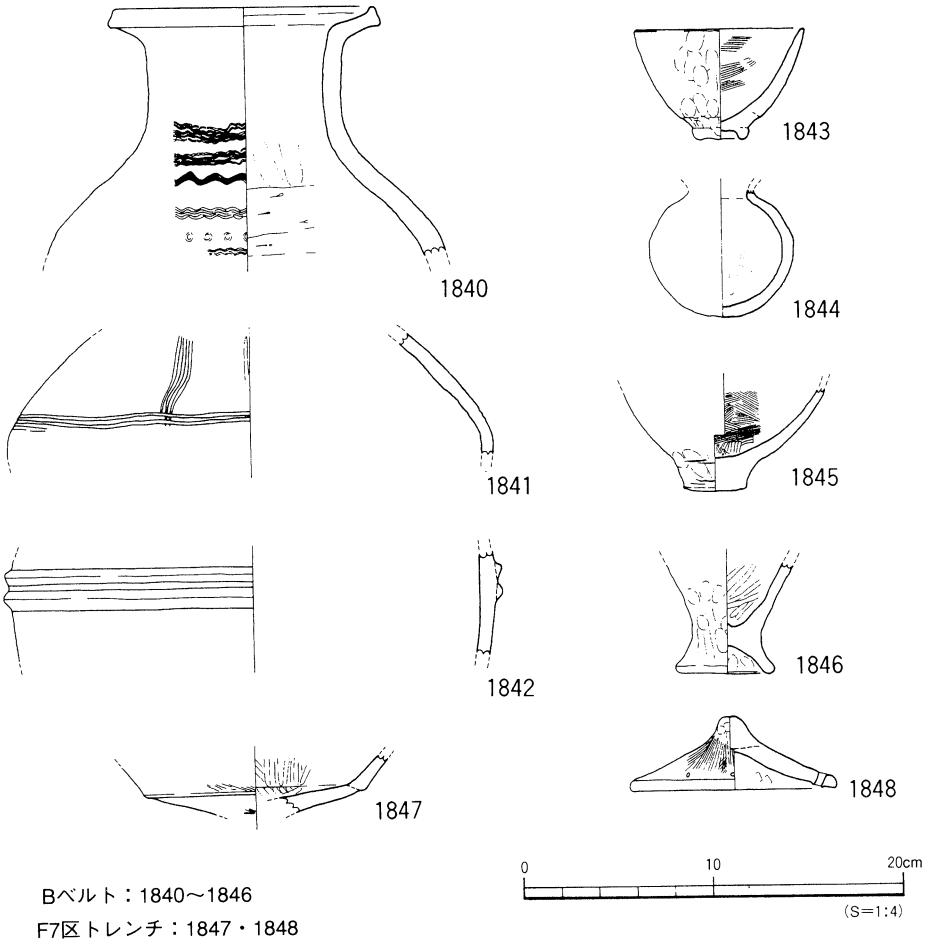
Eベルト上層：1813～1819
SR2・3：1820～1825
南東隅トレンチ：1826・1827
東壁トレンチ：1828

第232図　ベルト・トレンチ出土遺物実測図(1)



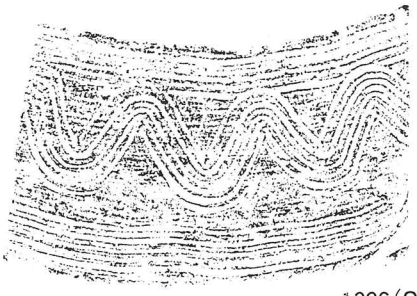
Eベルト下層（⑧⑨区）：1829～1839

第233図　ベルト・トレンチ出土遺物実測図(2)



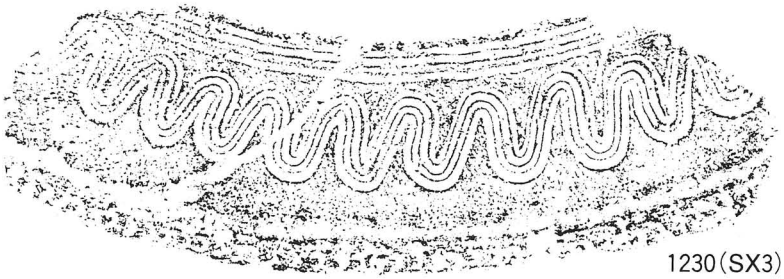
Bベルト：1840～1846
F7区トレンチ：1847・1848

第234図　ベルト・トレンチ出土遺物実測図(3)



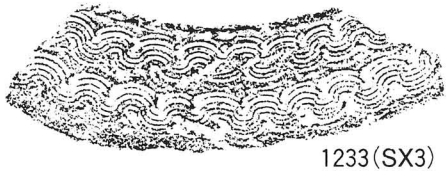
1226(SX3)

1228(SX3)



1230(SX3)

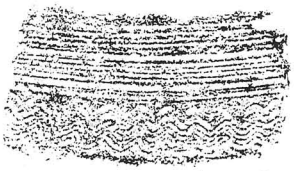
1231(SX3)



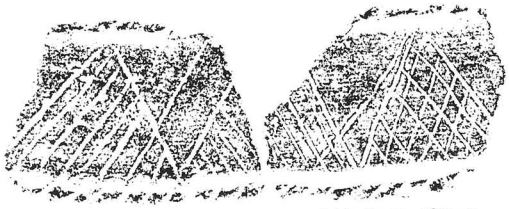
1233(SX3)

1234(SX3)

1235(SX3)



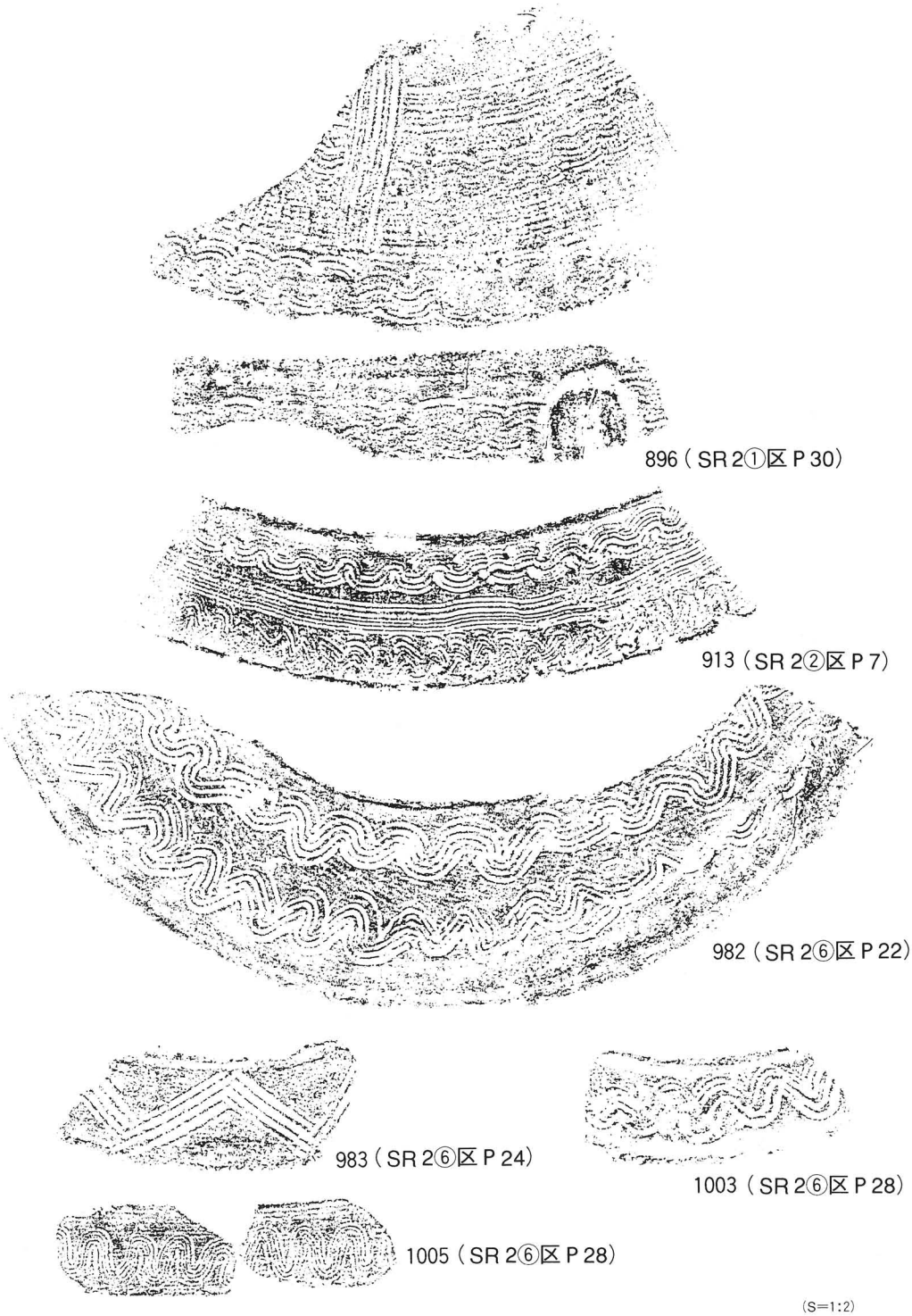
836(SR2⑧区)



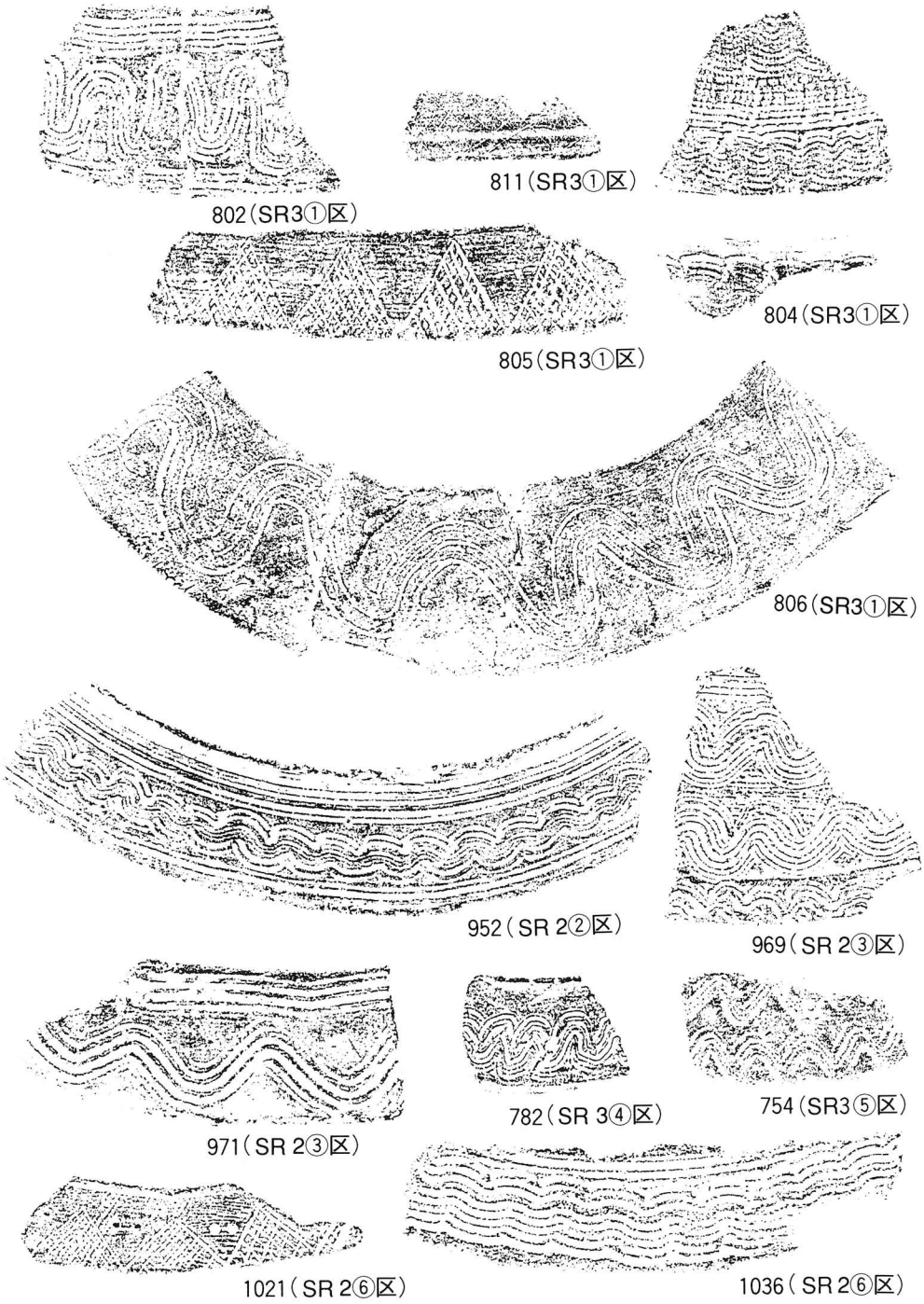
841 (SR2⑧区)

(S=1:2)

第235図　複合口縁壺の拓本(1)



第236図　複合口縁壺の拓本(2)



(S=1:2)

第237図　複合口縁壺の拓本(3)

自然流路のまとめ

本調査では3条の自然流路を検出した。これらの流路は出現期が遅くとも弥生時代中期後葉であり、埋没期は古墳時代初頭頃と考えられる。以下、流路の形成順に時期と性格を記述する。

Ｉ）形成過程

① まず、調査地に最初に出現する流路はＳＲ1である。調査区南東隅に検出した流路で、粘性の強い砂を含む暗灰褐色土を埋土にもつ。流路内からは主に弥生時代中期後葉に比定される遺物が少量出土した。全面かどうかは判断しかねるが、褐色の粘土質シルト層（ＳＲ1上層）が流路を覆うことになる。上層中からは完形品を含め弥生時代後期前葉に比定される多数の遺物がまとまって出土している。出土状況などから上層堆積中に遺物を投棄したものと思われる。ＳＲ1は弥生時代後期前葉に埋没する。

② またＳＲ1上層上部には、遺物が集中して出土する地点があった（ＳＸ3)。ＳＸ3からは完形品を含め弥生時代後期末（梅木編年Ⅲ－1）に比定される遺物が重なり合うようにして出土した。とりわけＳＸ3からは、赤色顔料が付着する遺物が本調査中、最も多く出土している。出土状況から、ＳＲ1上層堆積後に遺物を投棄したものと思われる。

③ 調査区北西部と南東部では溝ＳＤ401・402を検出した。埋土や検出状況などから判断するとＳＤ401と402は同一の溝と考えられる。断面形状から自然のものではなく、人工的に作られた溝と考えられる。これらの溝には埋没中もしくは埋没する直前に調査区北西部に2ヶ所と南東部に1ヶ所、遺物が集中して出土する地点があった（ＳＸ1・2・5)。ＳＸ1・2・5からは弥生時代後期末（梅木編年Ⅲ―1・2）に比定される遺物が、完形品を含め押しつぶされた状況で出土した。出土状況から、投棄された様相がうかがわれる。これらからＳＤ401・402は弥生時代後期末もしくは、それ以前に作られた溝と考えられる。

④ その後、新たな流路ＳＲ2が調査地内に出現する。調査区南東部から北西部に向けて流れる流路で、灰色の粗砂を埋土にもつ比較的緩やかな流れの流路である。ＳＲ2からは弥生時代後期末（梅木編年Ⅲ―2・3）に比定される遺物が出土した。調査区南東部の流路北側の壁体沿いには、完形品を含め比較的良好な状態の遺物が多数出土している。ＳＲ2が流れている間に、調査区南東部にて遺物を含む土層が堆積する（ＳＸ401・402)。ＳＸ401・402からは弥生時代後期末に比定される遺物が出土したが、性格は不明である。

⑤ 急な流れをもつ流路ＳＲ3がＳＲ2とあまり時期を隔てることなく出現することになる。ＳＲ3はＳＲ2と同様、調査区南東部から北西部に向けて流れる流路で、灰色の粗砂を埋土にもつ。ＳＲ3は流路の範囲や、他の流路の遺存状況から、ＳＲ2、ＳＲ1、ＳＤ401、402を浸食したものと考えられる。ＳＲ3からは弥生時代後期末から古墳時代初頭までの遺物が出土している。

2）性格

流路の調査では大量の遺物が出土している。とくに土器では弥生時代中期後葉（梅木編年中期Ⅲ)、後期前葉（梅木編年後期Ⅰ)、後期末（梅木編年後期Ⅲ）に比定される良好な資料が得られている。このなかには、外来的要素をもつ土器が数多く出土し、搬入品と考えられる土器も幾つかある。また、赤色顔料が付着する土器も30点ほど出土している。流路出土の土器は土器編年とともに、松山平野と他地域の交流を考えるうえで好資料となるものである。

石器では各流路内から石庖丁、石斧、石錘など各種の資料が出土した。とりわけ、弥生石器の主要器種である石庖丁や石庖丁未製品が異なる時期の流路から出土したことは、石器の変遷を考えるうえで好資料となるものである。

以上、簡単にまとめを行った。調査では、ＳＲ2とＳＲ3の埋土が類似していることより、掘り方や遺物の取り上げなど、的確な調査を進めることが困難であった。よって、流路本来の姿や構造を判断することが難しかった。今後の調査に課題を残す結果となった。

〔流路の形成過程〕

弥生中期後葉	後期前葉	後期末～古墳初頭		
ＳＲ1下層 ⟶	ＳＲ1上層 ⟶	ＳＸ1 ⟶	ＳＲ2 ⟶	ＳＲ3
		ＳＸ2		
		ＳＸ3		
		ＳＸ5		
	ＳＤ401			
	ＳＤ402			

溝

ＳＤ８（第85図）

調査区南西部Ｇ２区で検出された短くて不定形な溝である。東端はＳＢ９に切られる。深さ約６㎝、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は褐色の粘土質シルトである。溝からの遺物の出土はない。

時期：ＳＢ9に切られることから下限は弥生時代後期末と考える。

ＳＤ９（第85図）

調査区南西部Ｇ２区で検出された短くて不定形な溝である。東端はＳＢ９、西端はＳＢ12にそれぞれ切られる。深さ約4㎝、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は褐色の粘土質シルトである。溝からの遺物の出土はない。

時期：ＳＢ９及びＳＢ12に切られることから下限は弥生時代後期末と考える。

ＳＤ17（第85図）

調査区中央部南東寄りＦ５区で検出した東西方向に延びる溝である。ＳＢ17と重複する。検出長5.3m、幅約0.6m、深さ約38㎝を測る。断面形は「Ｖ」字状を呈する。埋土は褐色の粘土質シルトである。溝からは弥生土器小片が出土している。

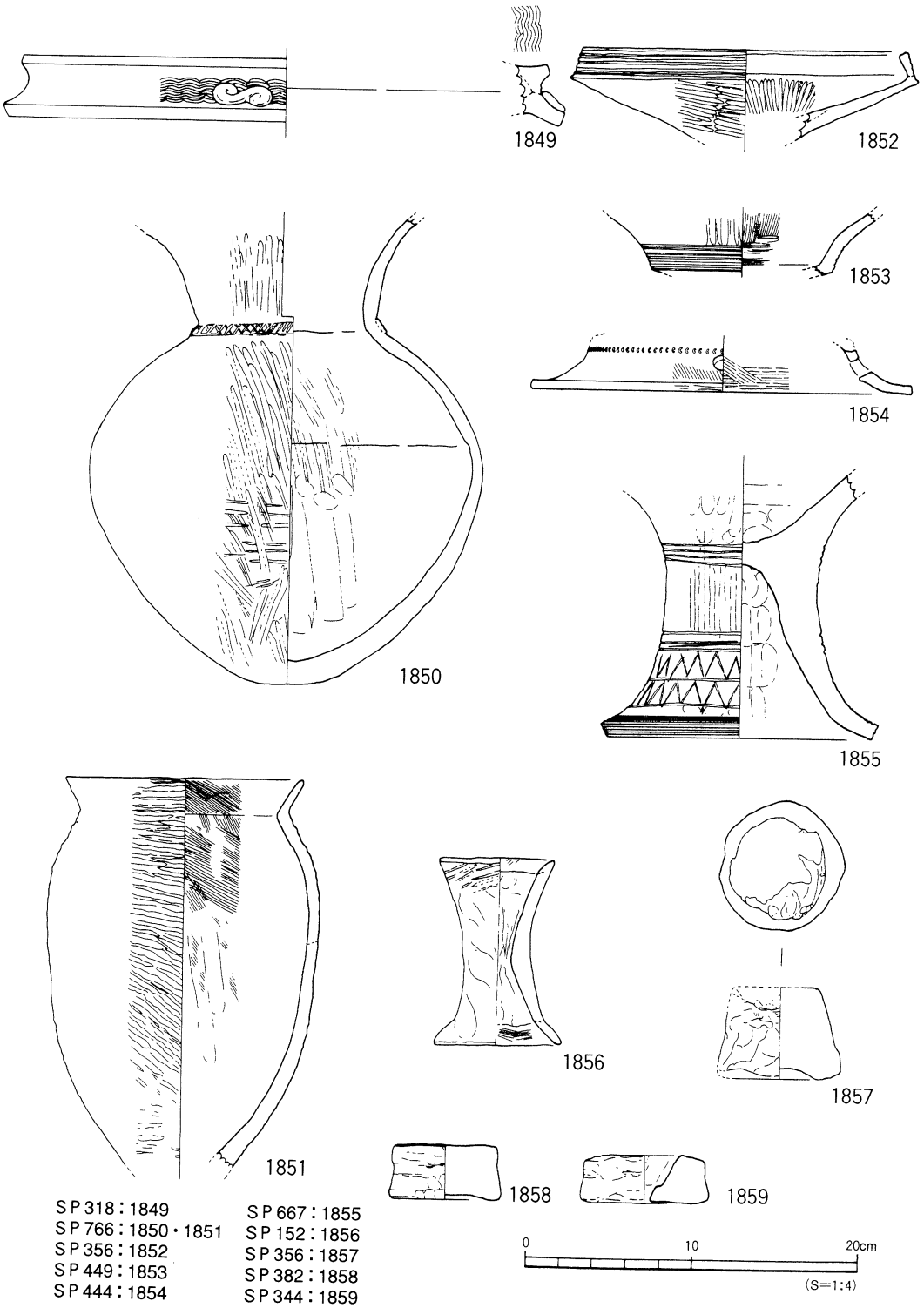
時期：ＳＢ17と重複することから弥生時代末と考える。

その他の遺構と遺物

第Ⅶ層上面検出のピットの内、弥生土器の出土したものがあった。すべてピット埋土は褐色粘質土である。

ピット出土遺物（第238図、図版31・32・101・102）

1849はＳＰ318出土の壺形土器である。複合口縁壺の口縁接合部片で、外面に9条の櫛描波状文を施し、その上から「Ｓ」字状の浮文を貼付する。接合部上面には7条の櫛描波状文を施す。1850・1851はＳＰ766出土品。1850は頸部に凸帯を貼付し凸帯上に斜格子文を施す。1852はＳＰ356出土の高坏形土器。口縁部外面に5条の凹線文を施し、坏部内外面にミガキ調整を施す。1853はＳＰ449、1854はＳＰ444出土の高坏形土器である。1854は脚裾端で屈曲し、裾部は外反する。脚端部に径8㎜大の円孔を穿ち、屈曲部に半截竹管文が２個並列して巡る。1855はＳＰ667出土の器台形土器。口縁部は欠損しているもので、ピット床面付近に底部を上にした状況で出土した。1856～1859はそれぞれＳＰ152、ＳＰ356、ＳＰ382、ＳＰ344出土の支脚形土器である。



SP318：1849
SP766：1850・1851
SP356：1852
SP449：1853
SP444：1854
SP667：1855
SP152：1856
SP356：1857
SP382：1858
SP344：1859

第238図　第Ⅶ層ピット（弥生）出土遺物実測図

(2) 古墳時代

1）竪穴式住居址

ＳＢ３（第239図、図版32）

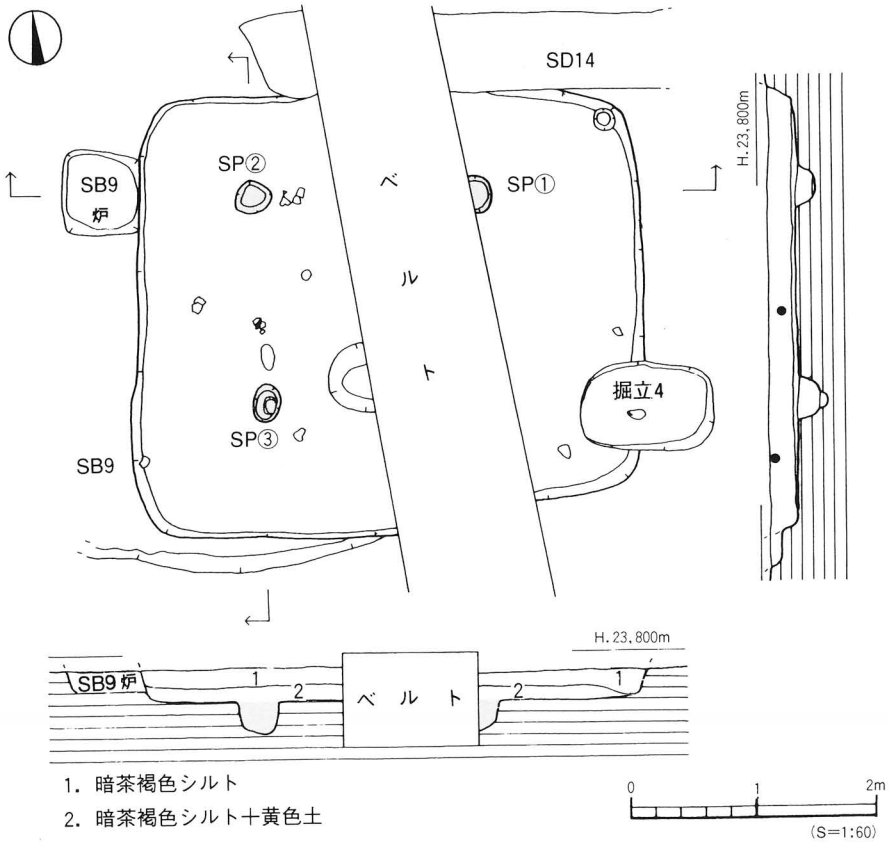
調査区南西部Ｆ２区～Ｇ３区に位置する。遺構南東隅は掘立4柱穴に、北壁の一部はＳＤ14に切られ、南壁はＳＢ９を切っている。

平面形は隅丸の方形を呈し、規模は東西4.1m、南北3.5m、壁高は約30cmを測る。床面はほぼ平坦で比較的硬い。埋土は２層に分層され、上層は暗茶褐色の粘土質シルト、下層は上層に黄色土が斑点状に混入するものである。

主柱穴はＳＰ①・②・③の３本を検出したが、その配置から４本柱であるものと考えられる。各柱穴は円形を呈し、規模は径30～33cm、深さ10～12cmである。柱穴間はＳＰ①―②間1.7m、ＳＰ②―③間1.7mである。炉は未検出である。

遺物は埋土中から弥生土器・土師器が散在して出土している。

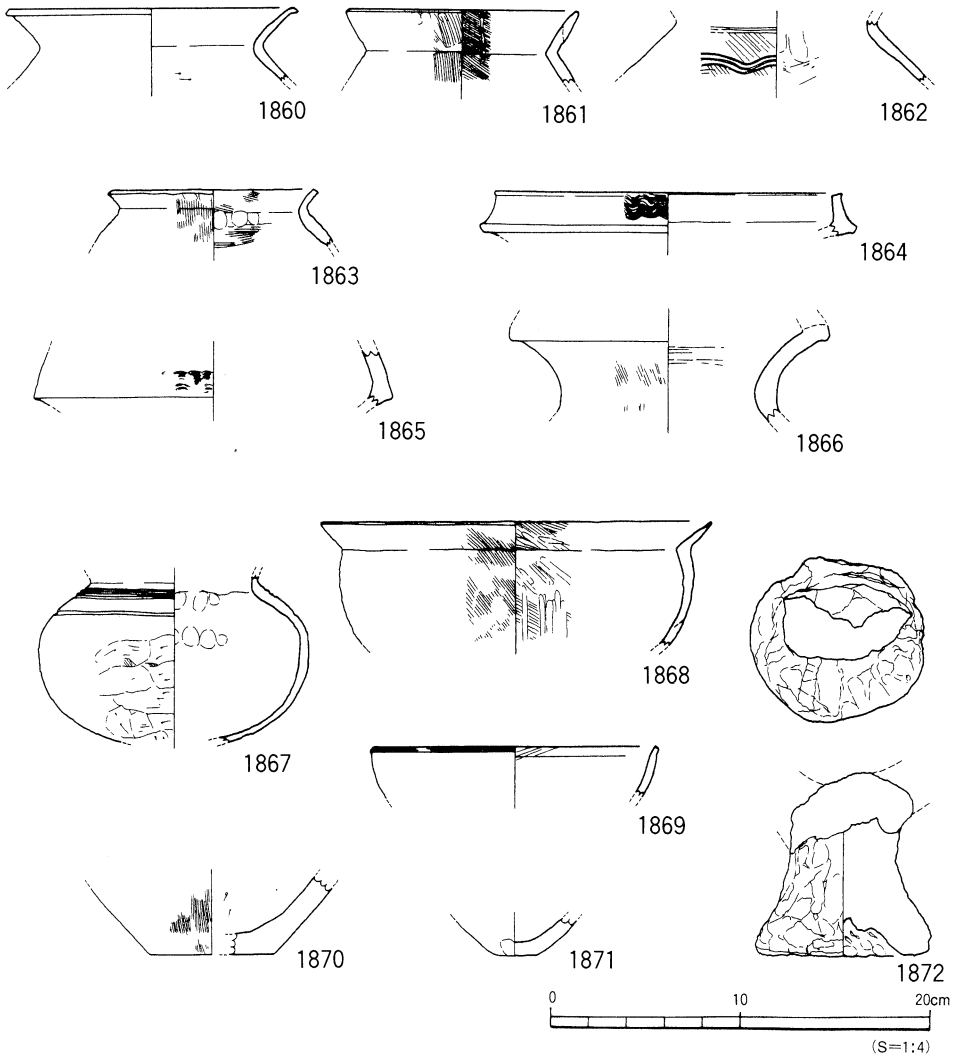
出土遺物（第240図、図版102）



第239図　SB3測量図

1860～1863は甕形土器。1860・1861は「く」の字状口縁を呈する。口縁端部の形態はやや下垂するものと「コ」字状に仕上げるものに分かれる。1862は体部片で、体部上位に3条の沈線文を施す。1864～1867は壺形土器。1864～1866は複合口縁壺である。口縁部はいずれもやや内傾する。1864の口縁端部は内傾する面をなす。1867は硬質の土器で体部下半に手持ちのヘラ削り調整を施す。1868・1869は鉢形土器である。1868の口縁部は外反する。1869は口縁部がわずかに外反するもので、口縁端部は丸く仕上げる。1870・1871は壺形土器の底部である。1872は支脚形土器。受部は欠損している。

時期：出土遺物や切り合い関係より、本住居址の廃棄・埋没時期は古墳時代初頭～前期に比定されよう。



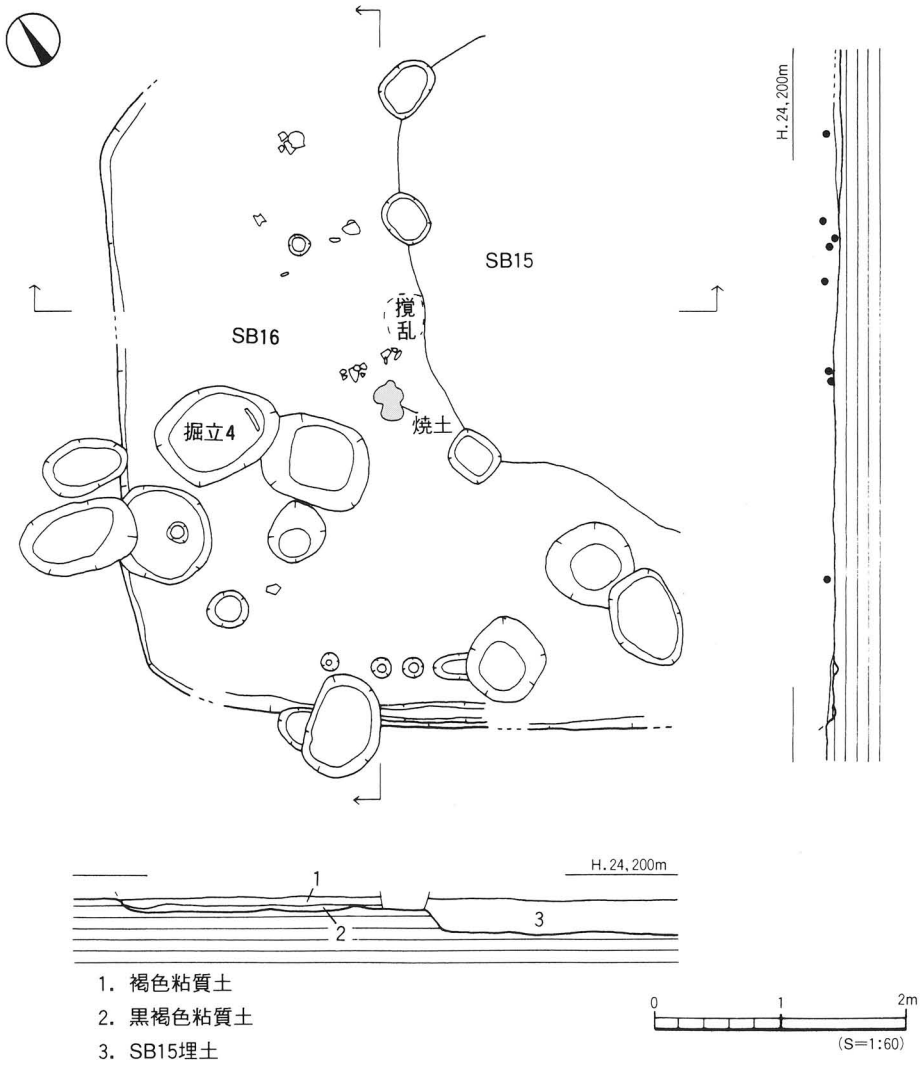
第240図　SB3出土遺物実測図

ＳＢ16（第241図、図版19・33）

調査区中央部南寄りＦ４区～Ｈ４区に位置し、ＳＢ15～17と重複する。埋土が類似することから検出に困難を有した住居址である。遺構上半部は削平を受け遺存状況は良好といえるものではなかった。住居址西部は掘立４柱穴に切られている。

平面形は隅丸の方形もしくは長方形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長5.15m、東西検出長4.0m、壁高は約10cmを測る。床面はほぼ平坦で硬くしまっている。埋土は褐色の粘質土である。南壁の壁体に沿って幅10cm、深さ３cm程度の小溝が検出された。

住居址床面からは大小９基のピットを検出したが、主柱穴を特定するには至らなかった。



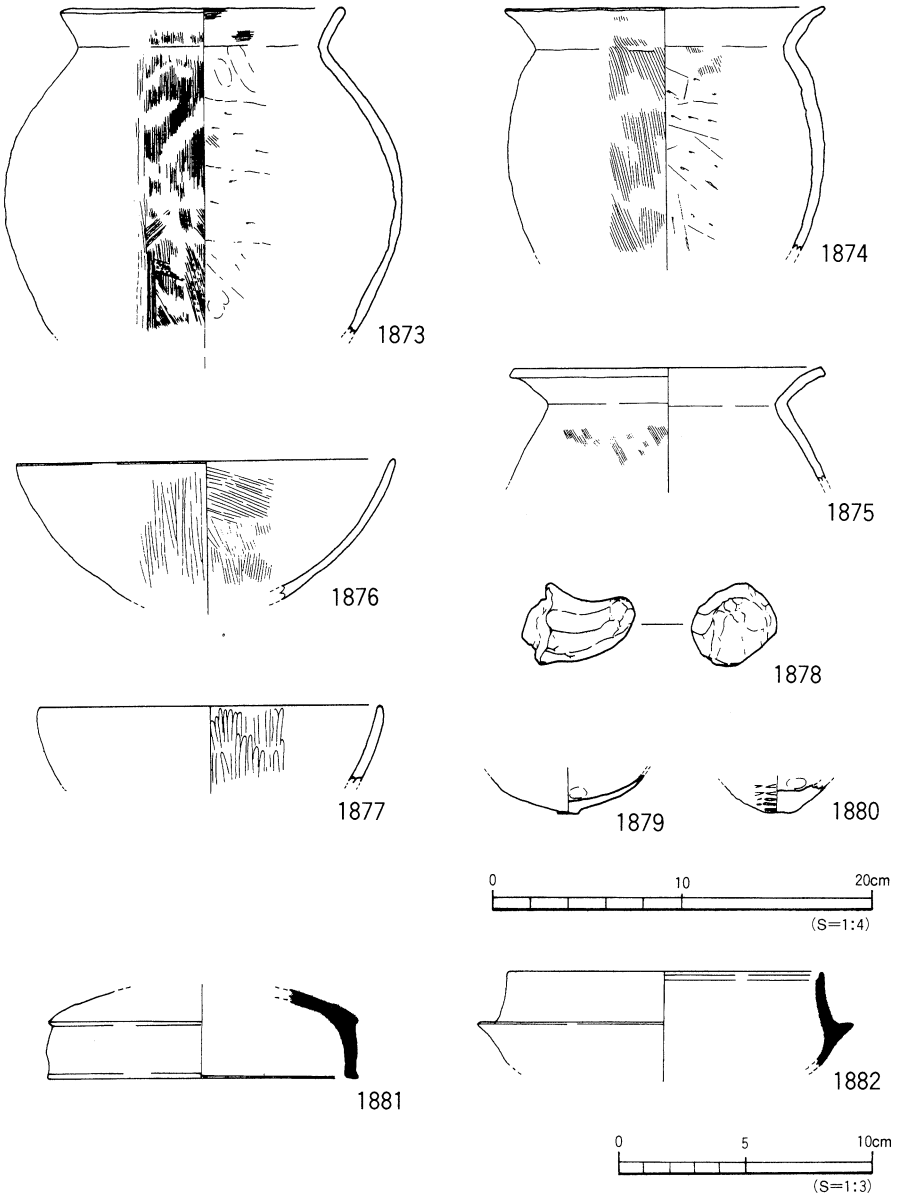
第241図　SB16測量図

そのほか住居址中央部床面に30×25cmの範囲に焼土塊が検出された。

遺物は埋土中より弥生土器、土師器、須恵器が混在して出土した。

出土遺物（第242図、図版102）

1873～1875は甕形土器。「く」の字状を呈する口縁部で、1873・1875は口縁端部を「コ」字状に仕上げる。1873・1874の体部内面はヘラ削り調整を施す。1876・1877は鉢形土器。体部



第242図　SB16出土遺物実測図

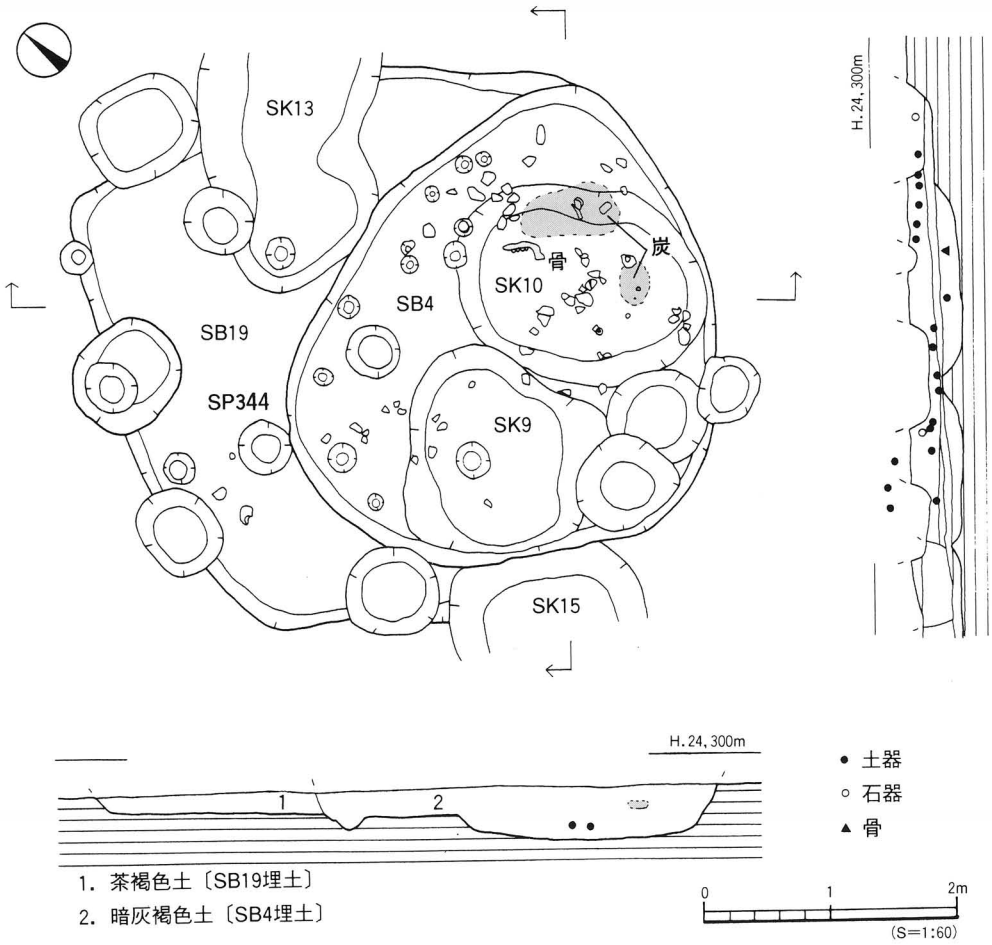
は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。1877の内面はヘラミガキ調整を施す。1878は甑の把手である。1879は壺、1880は甕形土器の底部。1880の外面に叩き調整を施す。1881は須恵器坏蓋。天井部は扁平で断面三角形の稜をもつ。1882は須恵器坏身。たちあがりは長く、端部は内傾する凹面をなす。住居址床面直上の出土である。

時期：床面出土の須恵器より古墳時代後期前半までに埋没したと考えられる。

ＳＢ４（第243図、図版33～35）

調査区南西部Ｇ３区～Ｈ４区に位置する。ＳＢ19、ＳＫ13及びＳＫ15を切っている。

平面形は不整の円形を呈し、規模は長径4.0m、短径3.3m、壁高は約20cmを測る。床面は北から南に向けて緩やかな傾斜をなす。住居址壁体に沿って小ピットを検出した。小ピットは径４～12cm、深さ３～７cmを測る。



第243図　SB4・SB19測量図

本住居址床面にて土坑２基（ＳＫ９・10)、ピット４基を検出した。土坑２基はいずれも床面からの掘り込みである。ＳＫ９は不整の円形を呈し、長径1.7m、短径1.6m、深さ約24cmを測る。土坑床面より小ピットを検出したが、土坑との関係は不明である。土坑からの遺物の出土はない。ＳＫ10はＳＫ9と切り合うが前後関係は不明である。平面形は楕円形を呈し、規模は長径2.0m、短径1.6m、深さ約18cmを測る。断面形は中央部がわずかに凹む擂鉢状をなす。本土坑内からは牛の下顎（Ｐ312，図版125）のほか、ガラス玉２点、須恵器短頸壺などが出土している。両土坑ともに埋土は暗灰褐色土である。

住居址床面より大小４基のピットを検出したが、出土遺物もなく本住居址に伴うものかどうかは不明である。

本住居址の埋土は暗灰褐色の砂質シルトである。遺物は埋土中ではあるが、住居址北半部に集中して出土している。また遺物に伴い炭化物や焼土が埋土中に散在して検出された。遺物の出土状況から投棄がなされたものと考えられる。本住居址は小規模であることや、形状が不整形であること、加えて炉をもたないことなどから住居としての機能よりはむしろ土坑として理解されるべきものであろう。

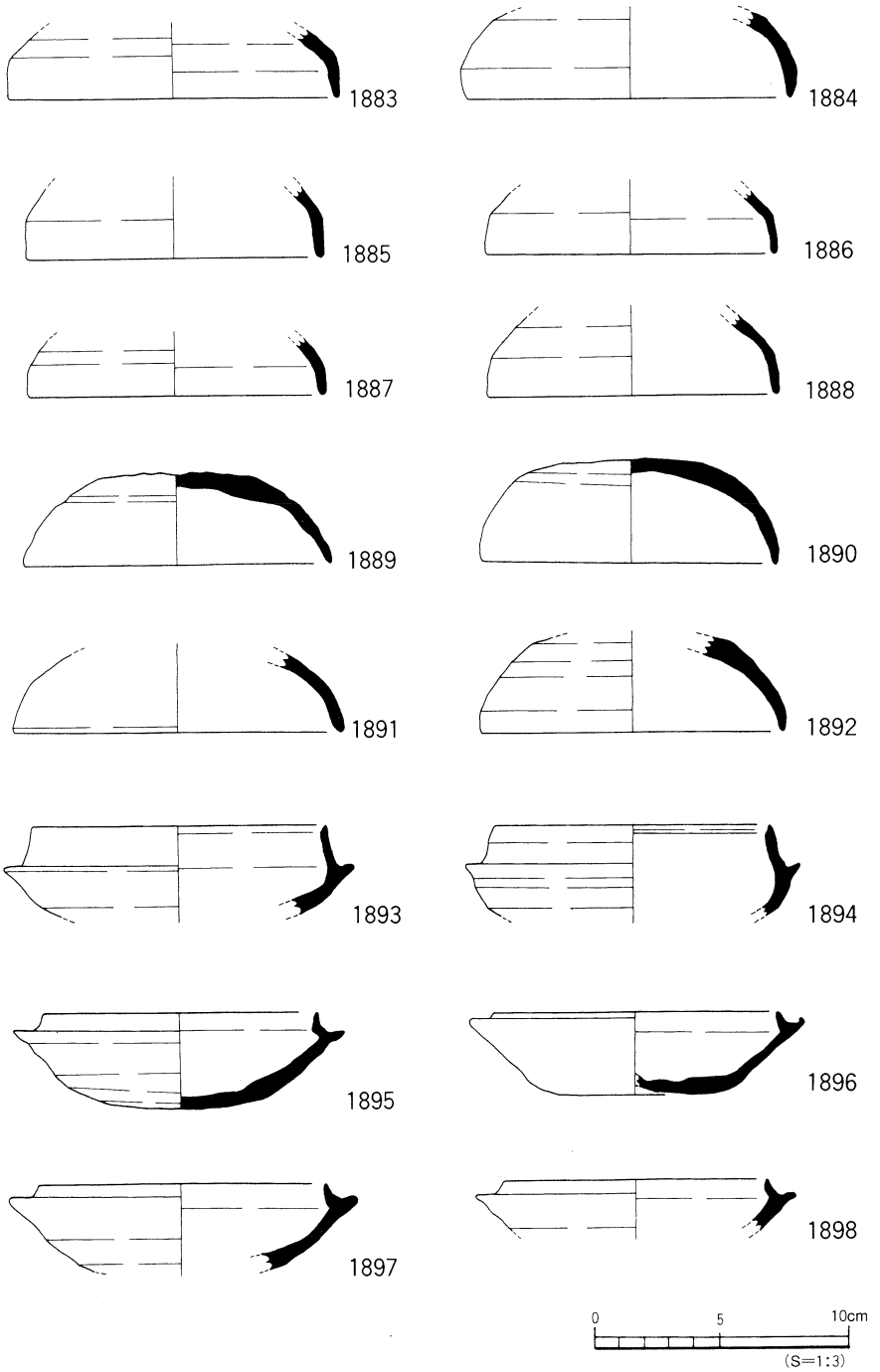
出土遺物（第244～247図、図版103・104)

1883～1892は須恵器坏蓋である。いずれも天井部と口縁部を分ける稜は消失している。1893～1898は須恵器坏身である。1893・1894はたちあがりは比較的長く、端部は内傾する。1895～1898はたちあがりは低く内傾し、端部は尖り気味に仕上げる。

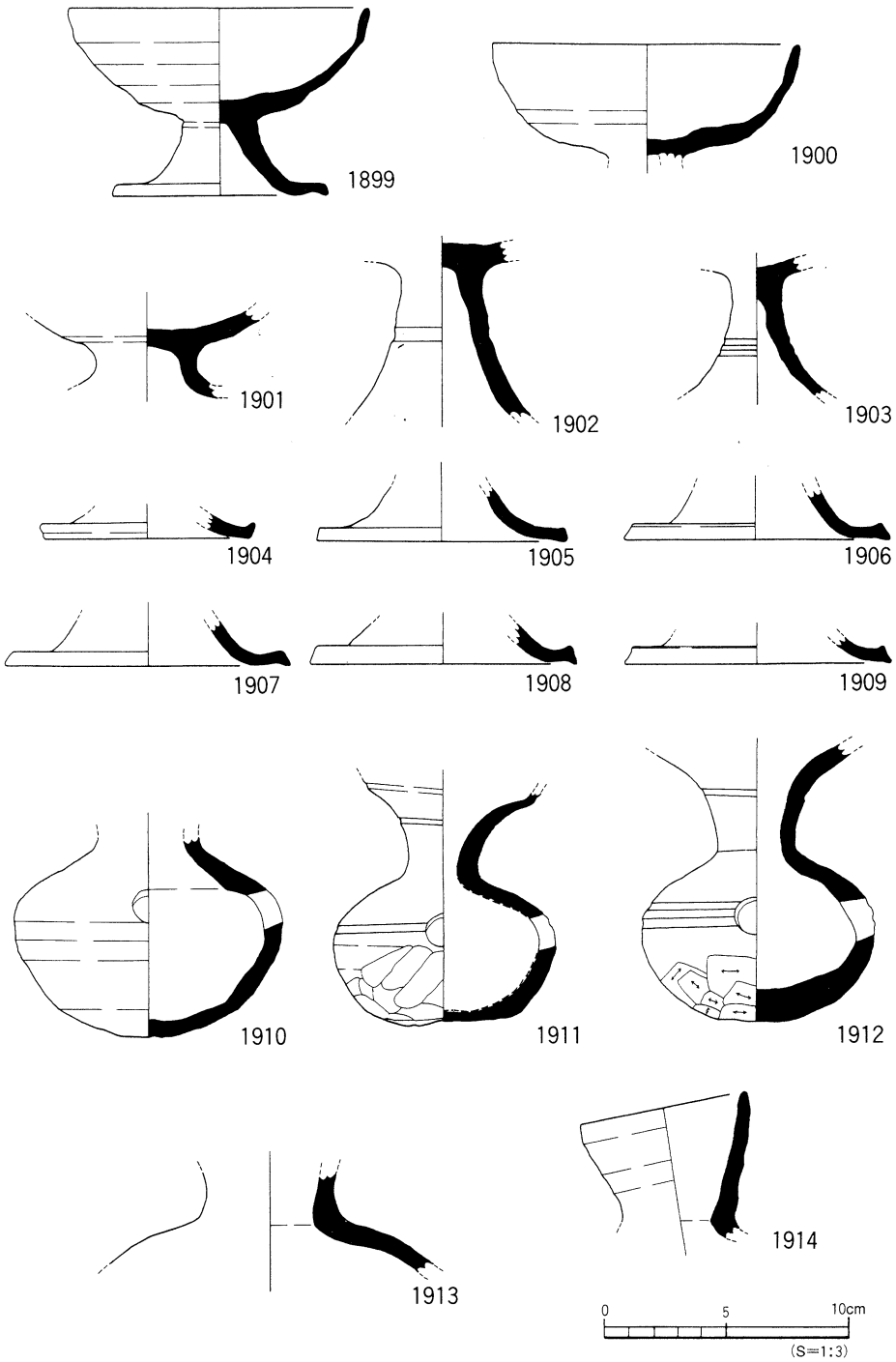
1899～1909は高坏である。1899・1900は無蓋の高坏。坏部は椀形を呈し口縁部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。脚裾部は大きく外反し、1904以外は脚端部は下方へ屈曲する。

1910～1912は𤮈。扁球形の体部で、基部は細い。1911・1912は体部下半に手持ちのヘラ削り調整を施す。1913は提瓶、1914は平瓶である。1915は直口壺、1916は壺の蓋である。1918はＳＫ10出土の短頸壺。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く仕上げる。1919は広口壺。頸部外面に上下２段に２条の凹線が巡り凹線間に波状文を施す。1920～1922は甕の口縁部である。1922の頸部外面に２条の凹線が巡り、口縁下にヘラによる直線文を施す。1923～1926は土師器の甕である。1927・1928は甑、1929・1930は椀である。1928・1929の体部外面にヘラ状工具による沈線文を施す（記号か？)。1931は体部片。縦と横方向に細沈線による線刻を施す。1932・1933はＳＫ10出土のガラス玉である。色調は濃緑色を呈する。

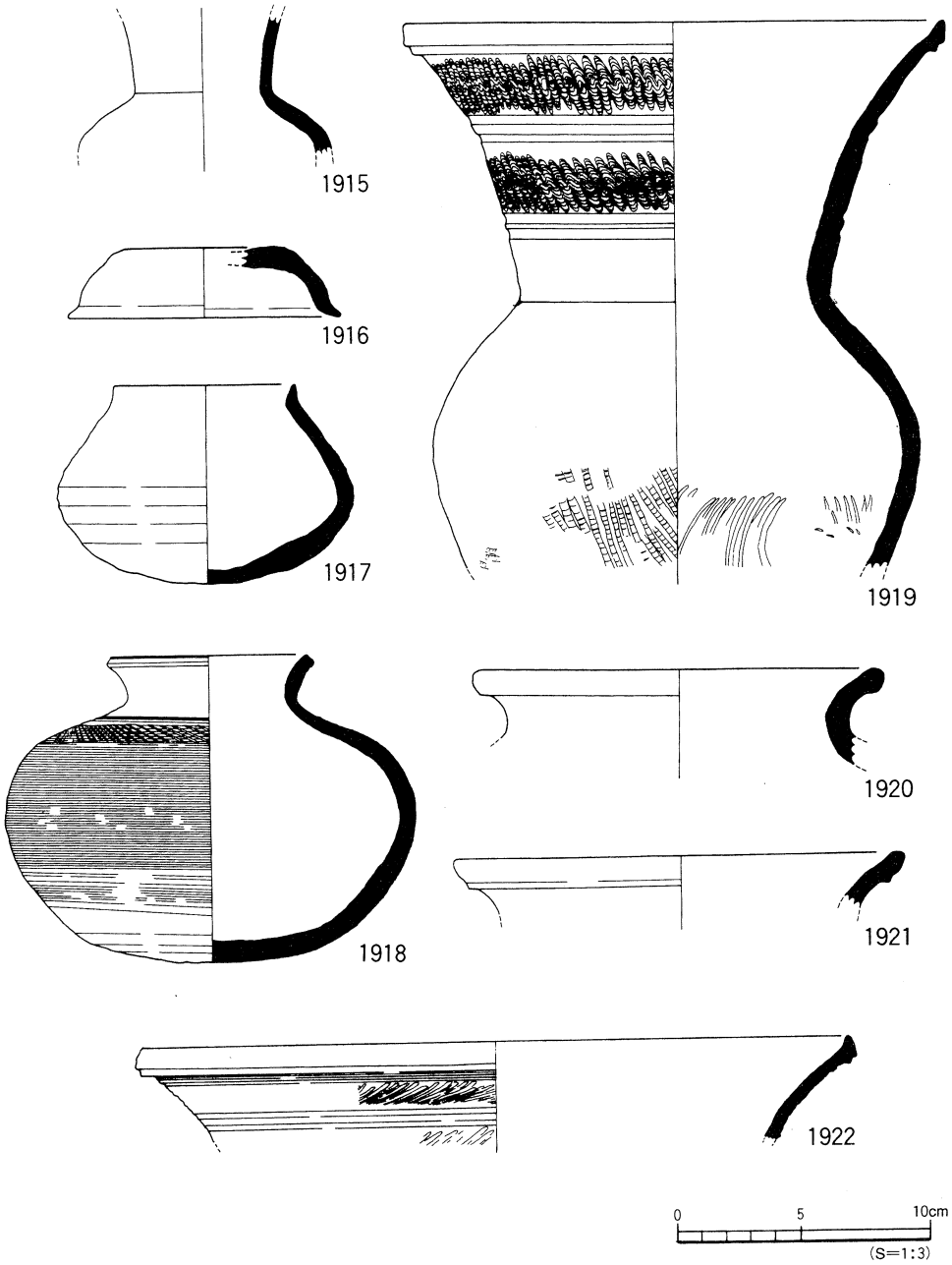
時期：出土した須恵器の特徴から、本住居址の廃棄・埋没時期は古墳時代後期後半～末に比定されよう。



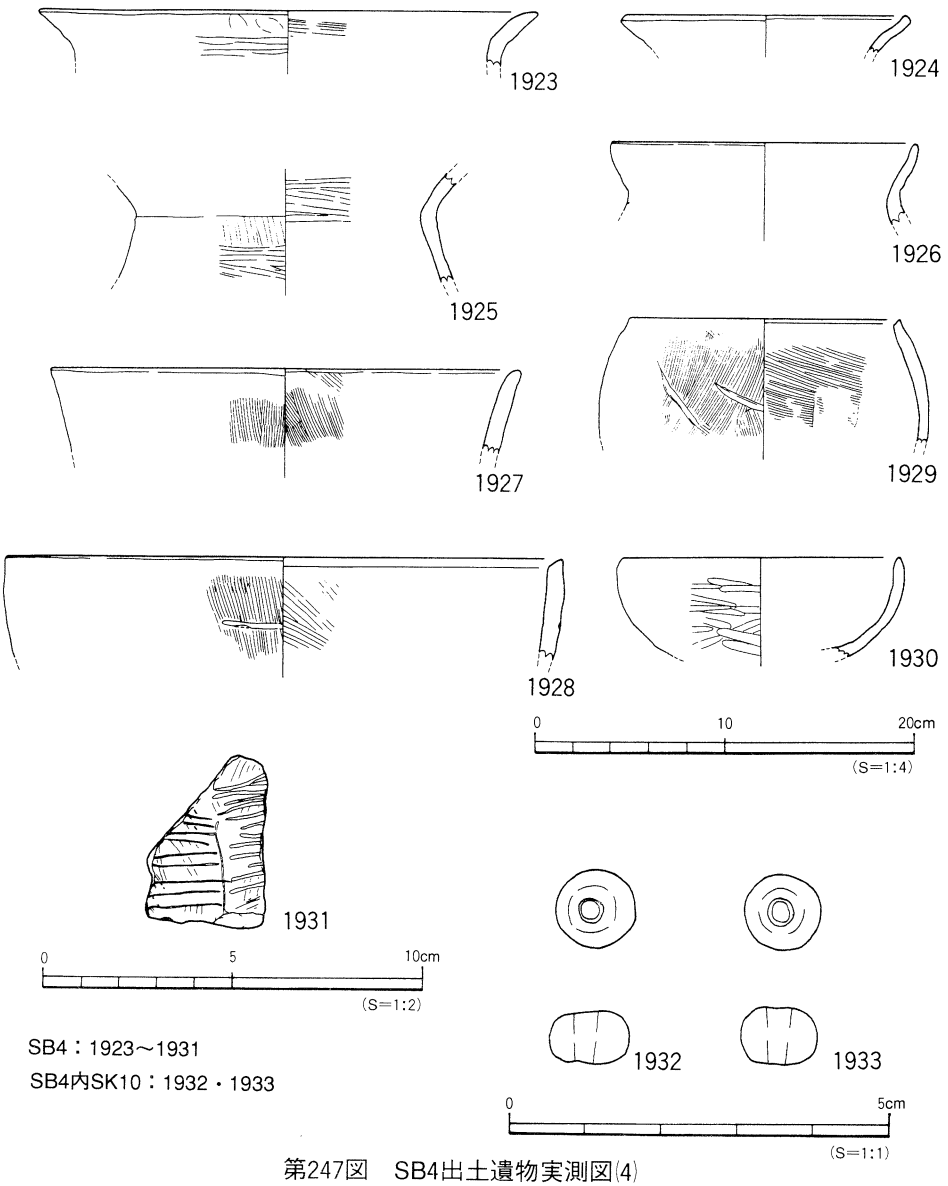
第244図　SB4出土遺物実測図(1)



第245図　SB4出土遺物実測図(2)



第246図　SB4出土遺物実測図(3)



第247図　SB4出土遺物実測図(4)

ＳＢ19（第243図、図版35）

調査区南西部Ｇ３区～Ｈ４区に位置する。遺構東半部はＳＢ４に、北壁中央部はＳＫ13にそれぞれ切られている。

平面形は隅丸の方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長4.2m、南北検出長4.2m、壁高は約18cmを測る。床面は平坦で硬くしまっている。埋土は茶褐色の粘土質シルトである。

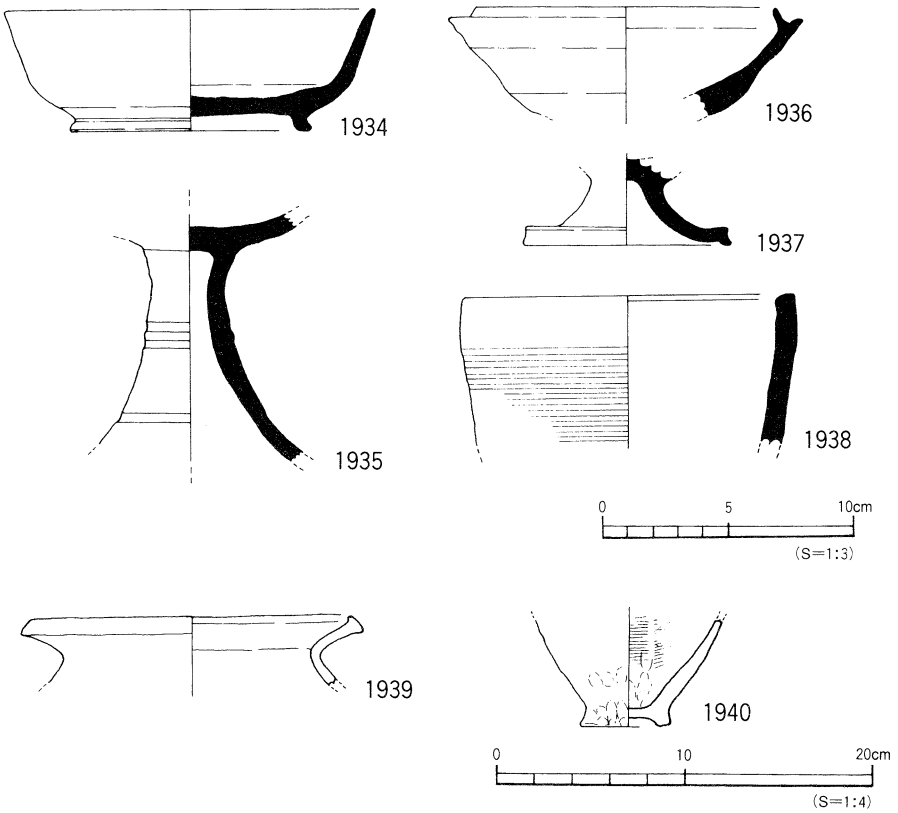
住居址床面にて２基のピットを検出した。ＳＰ344は床面からの掘り込みであるが、他のピットは出土遺物もなく本住居址に伴うものかはわからない。

遺物は埋土中から弥生土器、須恵器が混在して出土している。床面検出のＳＰ344内からは古墳時代後期末に比定される須恵器が出土した。

出土遺物（第248図）

1934は須恵器の高台の付く坏。体部と底部の境界は丸みをもつ。高台は境界よりやや内側に付く。1935は須恵器高坏の脚部。脚上位に２条、下位に１条の凹線が巡る。1936～1938はＳＰ344出土の須恵器である。1936・1937は高坏。坏部はたちあがりは短く内傾し、端部は尖り気味に丸くおさめる。脚部は低脚で裾部は外反し、脚端部は下外方へ屈曲する。1938は鉢。口縁部は直立し、端部は内傾する面をなす。1939は弥生土器の甕形土器、1940は鉢形土器である。1939の口縁端部は上方に拡張する。1940はわずかに上げ底を呈する。混入品であろう。

時期：出土遺物には時期差があり年代の特定は難しいが、ＳＢ４に切られることから、下限を古墳時代後期後半～末と考える。



第248図　SB19出土遺物実測図

ＳＢ７（第249図）

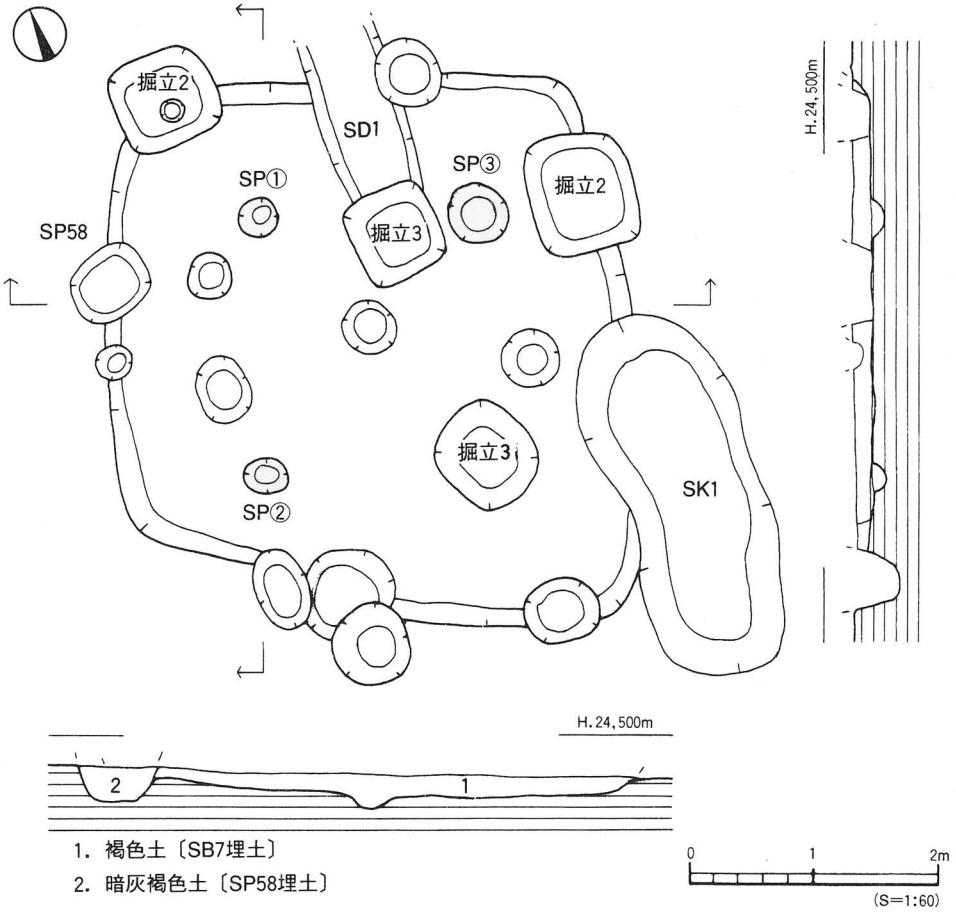
調査区中央部北寄りＡ４区～Ｂ５区に位置する。北壁はＳＤ１に、南東隅はＳＫ１に切られる。また住居址東半部は掘立２・３の柱穴に切られている。

平面形は不整の方形を呈し、規模は南北4.4m、東西4.2m、壁高は約18cmを測る。床面は北西から南東に向けて緩やかに傾斜している。埋土は褐色の粘質土である。

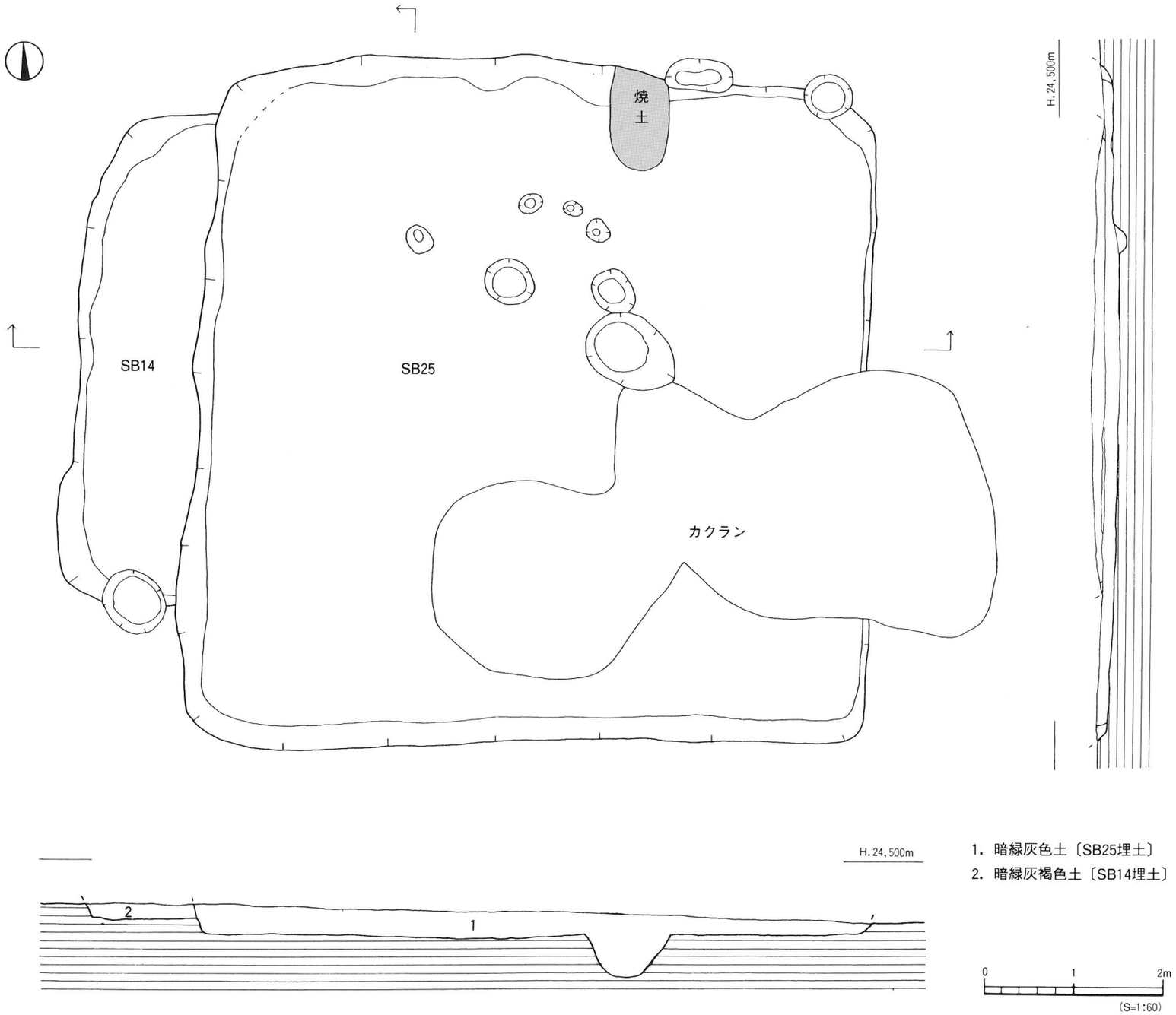
主柱穴はＳＰ①、②、③の3本を検出したが、その配置から４本柱であろう。各柱穴は円形を呈し、径30～50cm、深さ12～15cmを測る。柱穴間はＳＰ①―②間2.1m、ＳＰ①―③間1.8mである。主柱穴以外に床面にて４基のピットを検出したが本住居址に伴うかどうかは不明である。

遺物は埋土中より土師器、弥生土器片が数点出土したのみで図化しうるものはない。

時期：出土遺物がわずかであり時期判断は難しいが、掘立２・３に切られることなどから、本住居址の埋没時期の下限を古墳時代後期末と考える。



第249図　SB7測量図



第250図　SB14・SB25測量図

ＳＢ14（第250図、図版35）

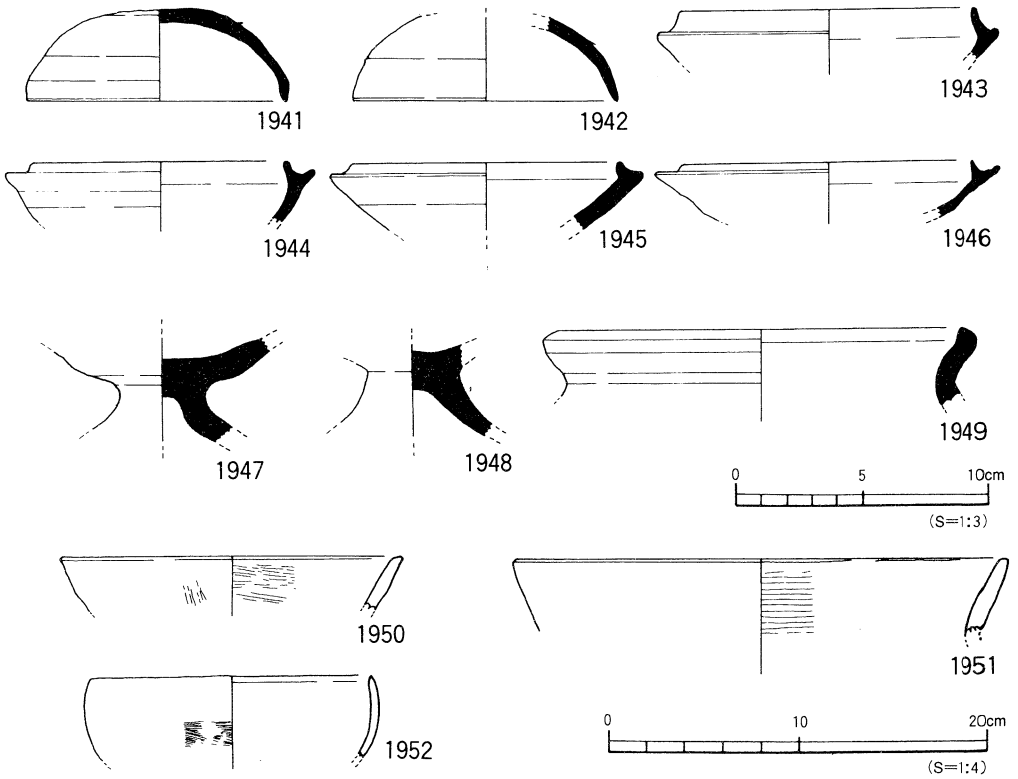
調査区中央やや北西寄りＣ３区に位置する。遺構東半部はＳＢ25に切られている。平面形は隅丸の方形もしくは長方形を呈するものと考えられ、規模は南北5.5m、東西検出長1.3m、壁高は約18cmを測る。床面はほぼ平坦で硬くしまっている。埋土は暗緑灰褐色土である。主柱穴及び炉などの施設は未検出である。

遺物は埋土中に須恵器・土師器片が散在して出土している。埋土上位から焼けた骨（鹿の脊椎）が出土した（Ｐ312，図版125）。

出土遺物（第251図、図版105）

1941・1942は須恵器坏蓋である。天井部と口縁部を分ける稜は不明瞭である。1943～1946は須恵器坏身である。たちあがりは低く内傾し、端部は1946は尖り気味、他は丸く仕上げる。1947・1948は高坏、1949は甕の口縁部である。口縁端部は上方につまみ上げる。1950・1951は土師器の甕である。口縁端部は内傾する面をなす。1952は土師器の椀である。体部は内湾し、口縁端部はわずかに内傾する。

時期：出土した須恵器の特徴から本住居址の廃棄・埋没時期は、古墳時代後期末に比定されよう。



第251図　SB14出土遺物実測図

ＳＢ25（第250図、図版35）

調査区中央部北西寄りＢ３区～Ｄ５区に位置する。遺構南東部は近現代の攪乱坑により削平されている。西壁はＳＢ14を切っている。

平面形は隅丸の方形を呈し、規模は東西7.8m、南北7.7m、壁高は約33cmを測る。本調査検出の住居址の中でもっとも大型の住居址である。床面は中央部がやや凹んでいるものの、ほぼ平坦で比較的硬い。埋土は暗緑灰色の砂質シルトである。

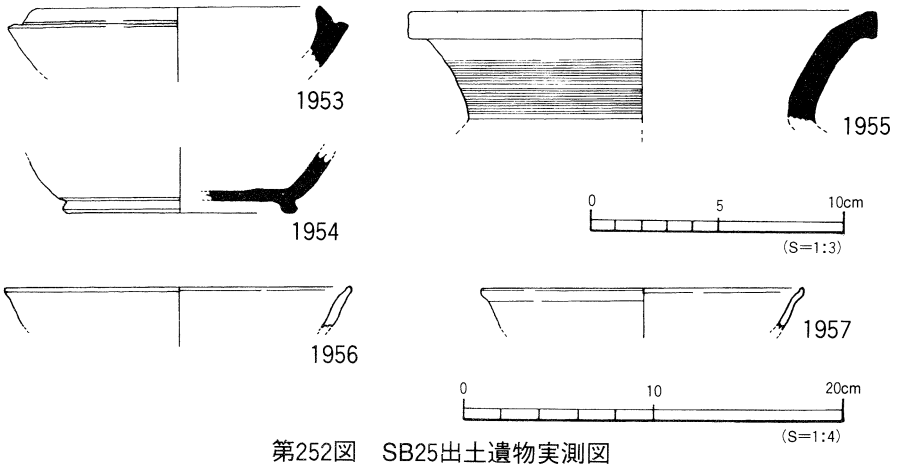
カマド本体は検出できなかったが、北壁中央部東側に焼土を検出したことからカマドが存在していたものと考えられる。住居址床面にて大小７基のピットを検出したが、本住居址に伴うものかどうかは不明である。

遺物は埋土中から土師器・須恵器小片が数点出土している。

出土遺物（第252図）

1953は須恵器坏身。たちあがりは太く短い。1954は高台の付く坏である。体部はやや内湾して立ち上がる。1955は須恵器の甕である。頸部外面に回転カキ目調整を施す。1956・1957は土師器の坏である。いずれも口縁端部内面に沈線状の凹みが認められる。

時期：出土遺物に多少の時期差がみられるが、ＳＢ14を切ることなどから、本住居址の埋没時期の上限を古墳時代後期末と考える。



第252図　SB25出土遺物実測図

2）土　坑

ＳＫ13（第85図）

調査区中央部南西寄りＧ３区に位置する。北半部はＳＢ８を切り南半部はＳＢ４に切られる。平面形は不整の楕円形を呈し、規模は長径2.25m、短径1.35m、深さ約34cmを測る。断面形は擂鉢状を呈する。埋土は灰褐色の砂質シルトである。土坑からの遺物の出土はない。

時期：ＳＢ４に切られることから、下限を古墳時代後期末と考える。

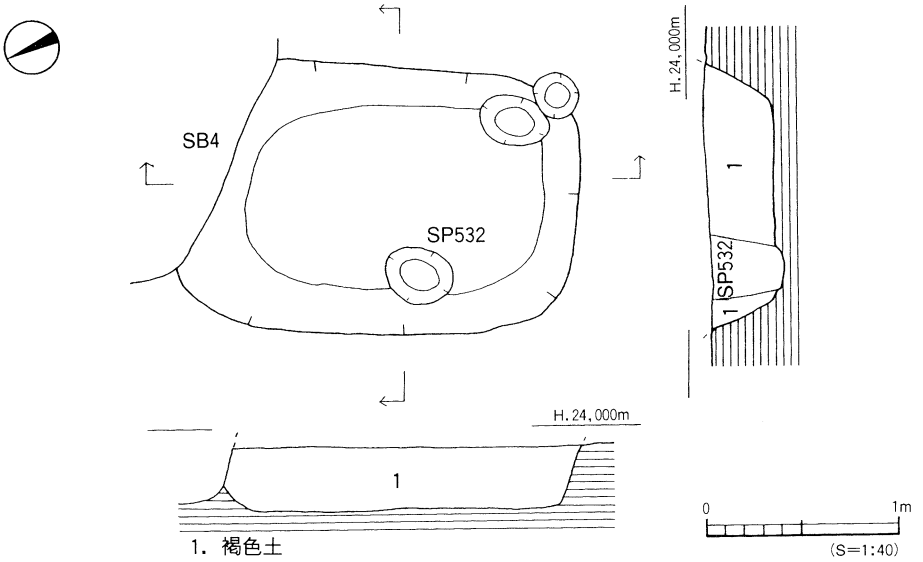
ＳＫ15（第253図）

調査区南西部Ｈ３区に位置する。北半部はＳＢ４に切られる。平面形は楕円形を呈し、規模は長径2.05m、短径1.30m、深さ約35cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は褐色の粘質土である。遺物は埋土中より須恵器坏蓋、土師器甕などが出土している。

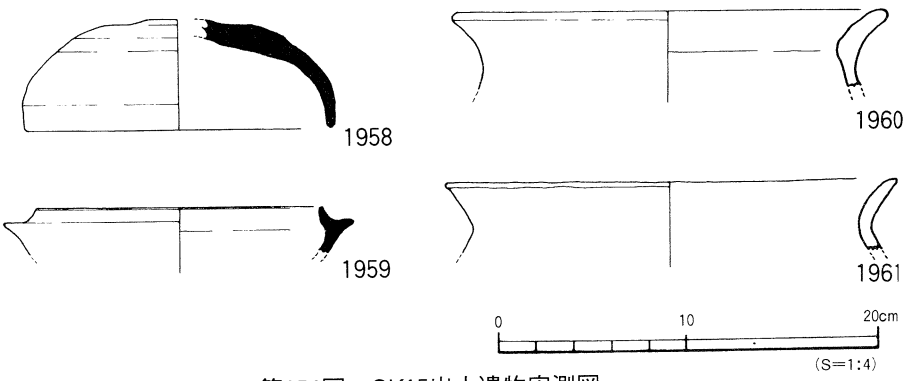
出土遺物（第254図、図版105）

1958は須恵器坏蓋である。天井部に回転ヘラ切り痕が残る。1959は須恵器坏身である。たちあがりは短く内傾し、端部は丸く仕上げる。1960・1961は土師器の甕である。1960は器壁が厚く、口縁端部は丸く仕上げる。1961は「く」の字状口縁で、口縁端部は面取りされる。

時期：出土遺物及びＳＢ４との切り合いより本土坑の時期は下限を古墳時代後期末と考えられる。



第253図　SK15測量図

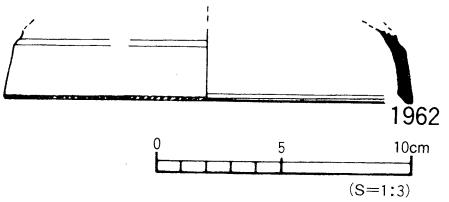


第254図　SK15出土遺物実測図

3）溝

ＳＤ５（第85図）

調査区中央北寄りＢ４区で検出した短くて不定形な溝である。南端はＳＢ25に切られる。深さ約21cm、断面形は皿状を呈する。埋土は灰褐色の砂質シルトである。溝内からは須恵器片が少量出土している。



第255図　SD5出土遺物実測図

出土遺物（第255図、図版105）

1962は須恵器坏蓋である。天井部と口縁部を分ける稜は凹線により表現される。口縁端部外面に刻み目を施す。

時期：出土遺物が僅少で溝の時期を確定するのは難しいが、ＳＢ25に切られることなどから、下限を古墳時代後期末と考える。

ＳＤ１（第85図）

調査区中央北寄りＡ５区で検出した短くて不定形な溝である。ＳＢ７を切り、南端は掘立３の柱穴に切られる。深さ約13cm、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰褐色の砂質シルトである。溝内からの遺物の出土はない。

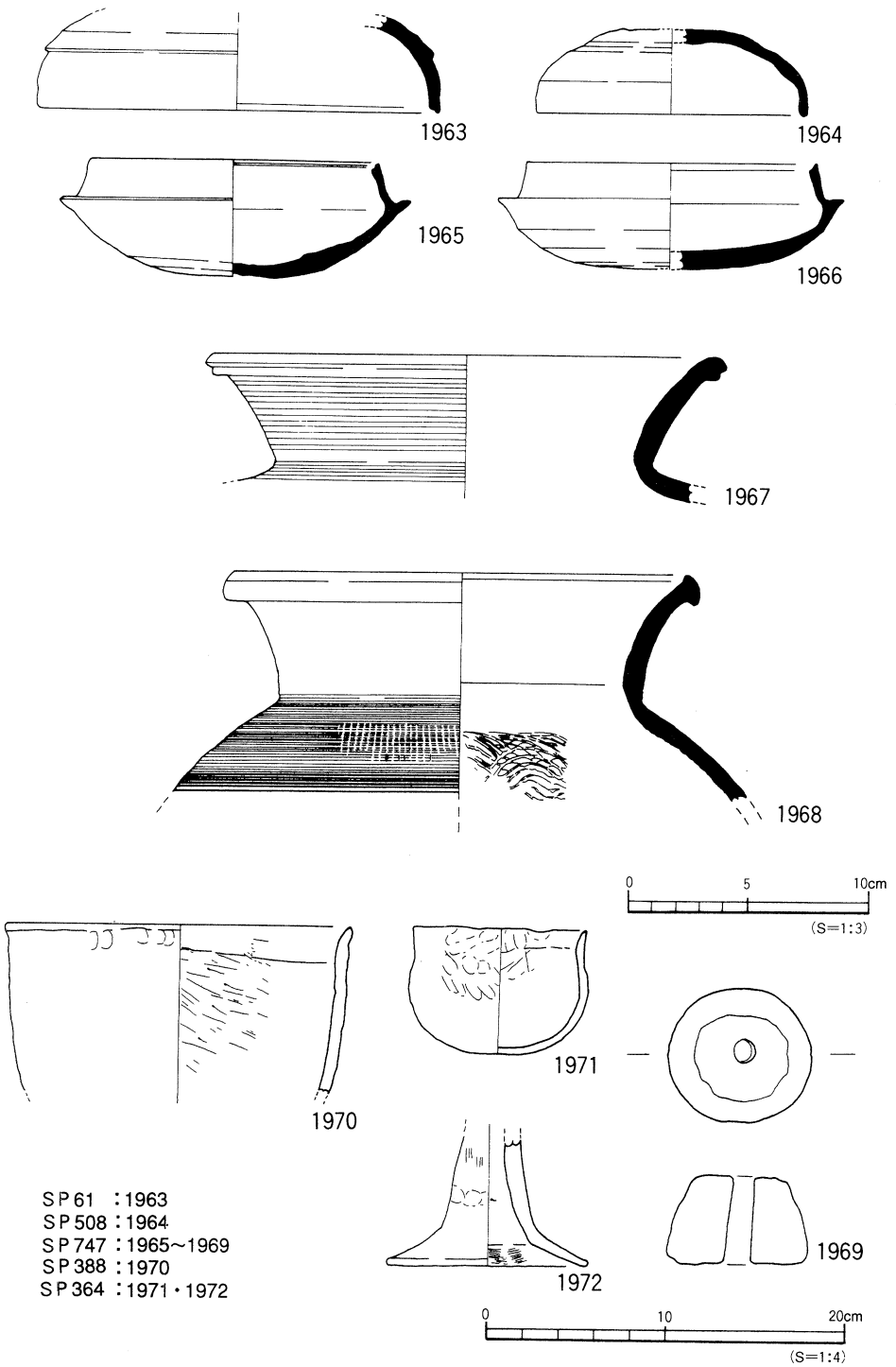
時期：出土遺物がなく溝の時期を判断するのは難しいが、掘立３に切られることなどから下限を古墳時代末と考える。

4）ピット

第Ⅶ層上面検出のピットの内、ＳＰ61、ＳＰ364、ＳＰ388、ＳＰ508、ＳＰ747の５基のピットから古墳時代に比定される須恵器・土師器が出土した。いずれもピットの埋土は暗灰褐色土である（第85図）。

ピット出土遺物（第256図、図版105）

1963はＳＰ61、1964はＳＰ508出土の須恵器坏蓋である。1963は断面三角形の鈍い稜をもつ。1965～1969はＳＰ747出土遺物である。1965・1966は須恵器坏身で、たちあがりは内傾し、端部は内傾する。1967・1968は須恵器の甕で、1968は口縁端部を上下方に拡張する。1969は土製の紡錘車である。台形状を呈し、径６mm大の円孔を穿つ。1970はＳＰ388出土の甑形土器である。口縁端部付近でわずかに外反する。体部内面はケズリ調整を施す。1971・1972はＳＰ364出土遺物である。1971は鉢形土器で内外面共に指頭痕を残す。1972は高坏形土器の脚部。脚裾部は「ハ」の字状に開き、裾部内面に弱い稜をもつ。



第256図　第Ⅶ層ピット(古墳)出土遺物実測図

(3) 古　代

ＳＫ14（第257図、図版36）

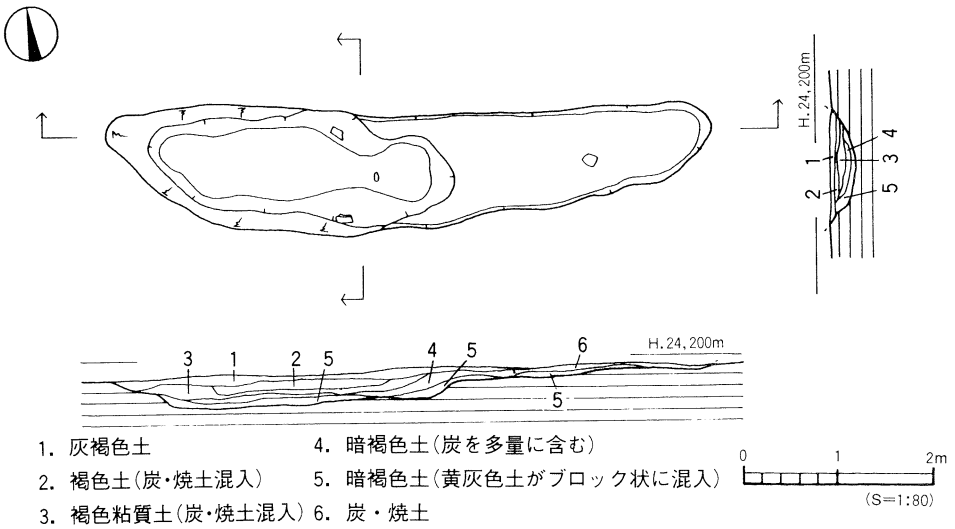
調査区南東部Ｇ５・６区に位置し、ＳＢ15を切っている。平面形は不整の長楕円形を呈し、規模は長径6.4m、短径1.3mを測る。床面は段掘り状になっており、遺構東半部では深さ約５cm、西半部は約40cmを測る。断面形は東半部は浅い皿状、西半部は舟底状を呈する。

埋土は西半部では、上層部は灰褐色の砂質シルト（埋土１）、中層部は灰・炭・焼土が混入する褐色の粘土質シルト（埋土２・３）、下層部は炭・焼土を多量に含む暗褐色の粘土質シルト（埋土４）、床面直上には約５cmの厚さで、暗褐色の粘土質シルトに黄灰色土がブロック状に混入するもの（埋土５）である。東半部では上層部に焼土・炭の混合層が検出され、床面付近には西半部でみられる土層（埋土５）と同様の層が検出された。

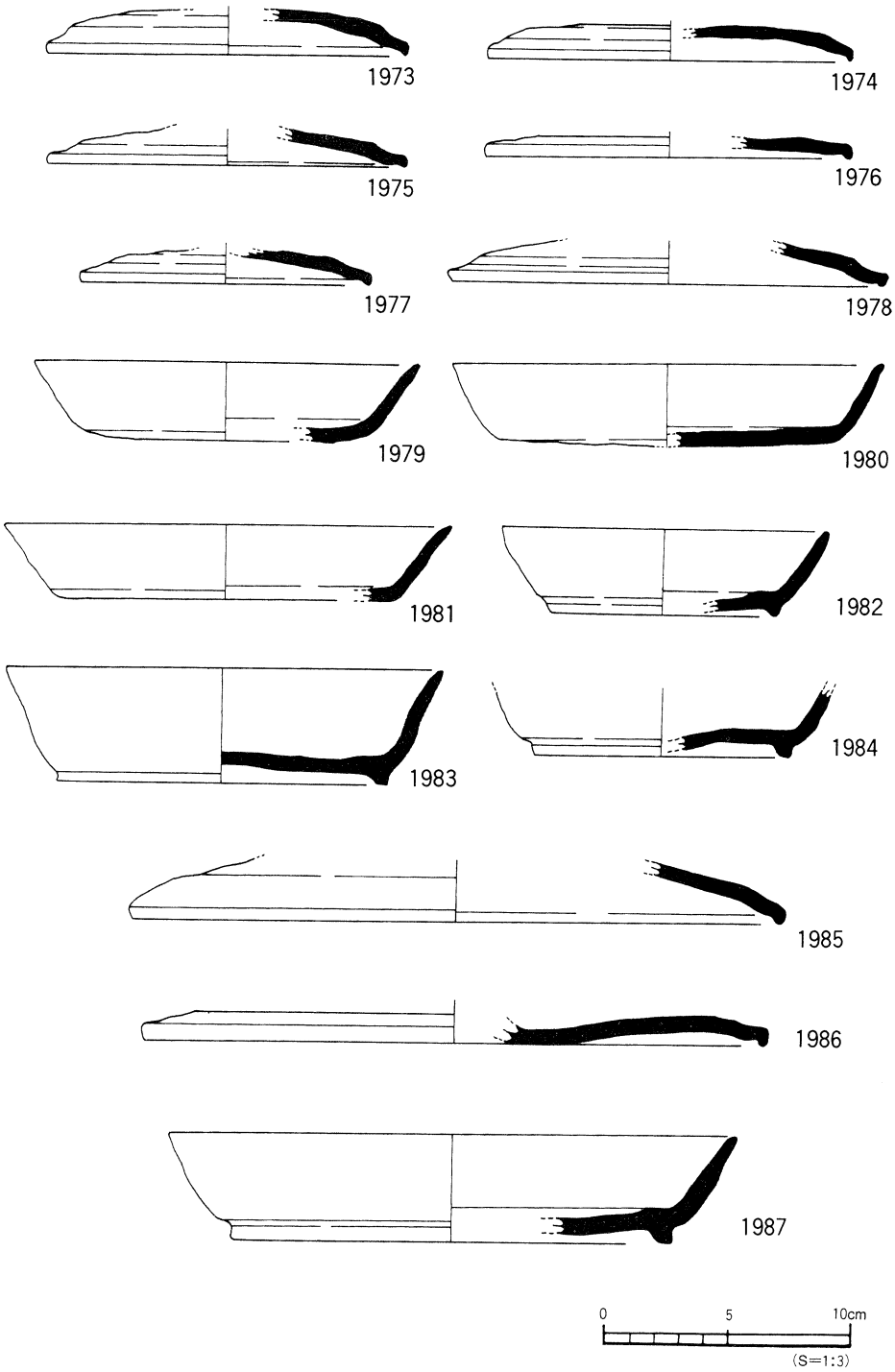
遺物は東半部からの出土はなく、西半部の埋土１～４から出土している。大半は須恵器蓋坏や皿などであるが、土師器類も少量ではあるが出土している。

出土遺物（第258・259図、図版106）

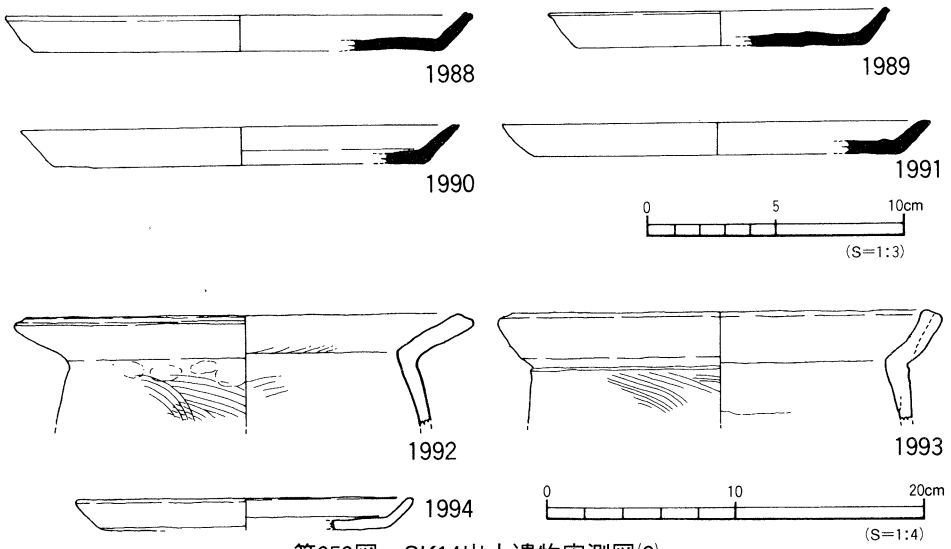
1973～1978は須恵器坏蓋、1985・1986は皿の蓋である。天井部は扁平で口縁部は下方へ屈曲する。1979～1984は須恵器坏である。1979～1981は無台の坏で、体部は直線的に立ち上がる。1982～1984は高台の付く坏。体部と底部の境界で稜をなし、1983は口縁部はやや外反する。底部は1983は回転ナデ調整、他は回転ヘラ削り調整を施す。



第257図　SK14測量図



第258図　SK14出土遺物実測図(1)



第259図　SK14出土遺物実測図(2)

1987～1991は須恵器の皿である。体部は外傾して立ち上がる。口縁端部は1990・1991はわずかに平坦面をなす。1992・1993は土師器の鍋である。1992は「く」の字状口縁を呈し、口縁端面はわずかに凹む。1993はやや内湾する口縁部で、頸部で稜をなして屈曲する。いずれも内外面に粗い刷毛目調整を施す。1994は土師器皿。口縁部はやや外反する。

時期：出土遺物より、本土坑の時期は8世紀中葉～後半と考えられる。

(4)　縄文時代

縄文時代の遺構は未検出であるが、第Ⅶ層中から縄文土器が数点出土している。

出土遺物（第260図、図版106）

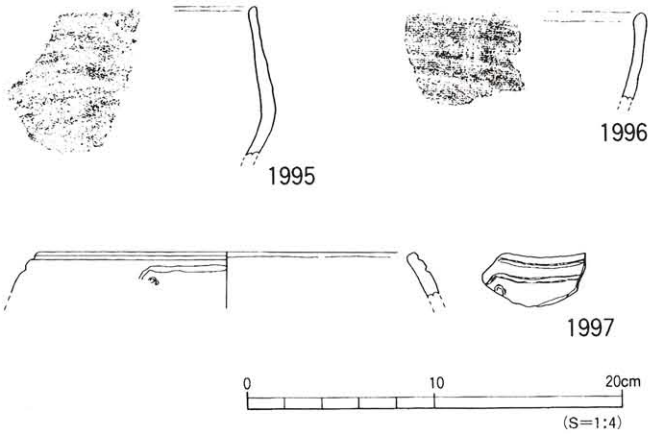
1995・1996は粗製の深鉢である。1995は胴部で一度屈曲するもので外面に巻貝条痕を施す。1996は口縁部内面がわずかに肥厚するもので、外面ナデ調整を施す。1997は有文鉢。口縁部が内湾するもので渦文から横方向に直線文が延びる。

(5)　時期不明・その他の遺構と遺物

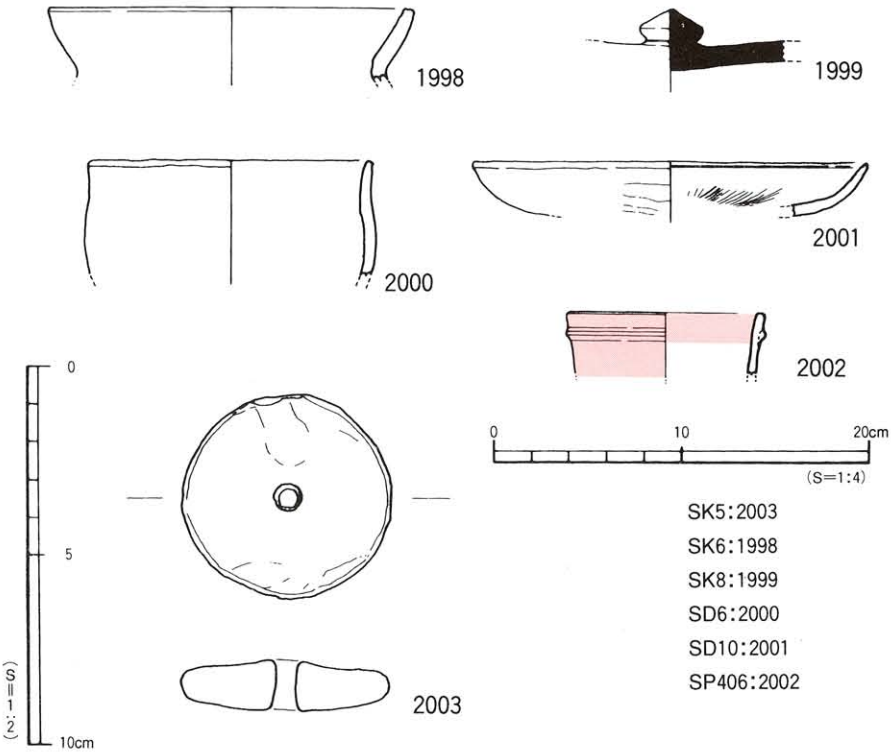
時期の特定が難しい遺構にＳＫ１・３・５～８・11・23、ＳＤ２・３・６・７・10・12・15がある。出土遺物があまりなく、掘り方もわからないため時期特定は困難である。これらの遺構の規模や埋土等は一覧表に記す。

ＳＫ・ＳＤ・ＳＰ出土遺物（第261図、図版106）

1998はＳＫ６出土の甕形土器。口縁部は内湾し、端部は平坦面をもつ。1999はＳＫ８出土の須恵器坏蓋。2000はＳＤ６出土の土師器椀、2001はＳＤ10出土の土師器坏である。2001は



第260図　第Ⅶ層(縄文)出土遺物実測図



第261図　第Ⅶ層SK・SD・SP(時期不明)出土遺物実測図

体部内面に放射状の暗文を施す。2002はＳＰ406出土品。口縁部に断面三角形状の凸帯を貼付け、口縁端部は平坦面をなす。内外面に赤色顔料が付着する。胎土・器形が在地のものと異なり、おそらく搬入品であろう。2003はＳＫ５出土の土製紡錘車である。

第Ⅶ層上面検出のピットは604基である。埋土の違いにより4グループに分類される。各埋土は①暗灰褐色土、②暗灰褐色土に黄色土が混入するもの、③褐色粘質土、④褐色粘質土に黄色土が混入するものである。埋土①は216基、埋土②は33基、埋土③は183基、埋土④は172基である。埋土①のピットは調査区北半部中央及び南東隅、埋土②は調査区東半部及び中央部、埋土③及び④は調査区南半部に分布している。

そのほか、本調査において出土した遺物の中で、重機による表土採削中や近現代の攪乱及び、先行トレンチなどから出土した遺物を第262～265図に掲載した。トレンチ出土遺物については出土地点や土層が特定できないため、あえて包含層出土遺物からは除外した。

表採・トレンチ出土遺物（第262～265図、図版107・108）

須恵器

2004～2009は須恵器の坏蓋である。2004は稜をもち口縁端部は内傾する。2005・2006は稜はなく口縁端部は丸く仕上げる。６世紀。2007は宝珠つまみの付く坏蓋。かえりは口縁端部より下がる。７世紀。2008は断面台形状のつまみの付く坏蓋。2008・2009共に天井部は扁平で口縁部は下方に屈曲する。８世紀。2010・2011は須恵器坏身である。たちあがりの端部は丸く仕上げる。６世紀。2012～2016は高台の付く坏である。高台は底体部の境界付近に付くもの（2014・2016）、境界より内側に付くもの（2012・2013・2015）がある。体部はいずれも直線的に立ち上がる。８世紀中～後半。

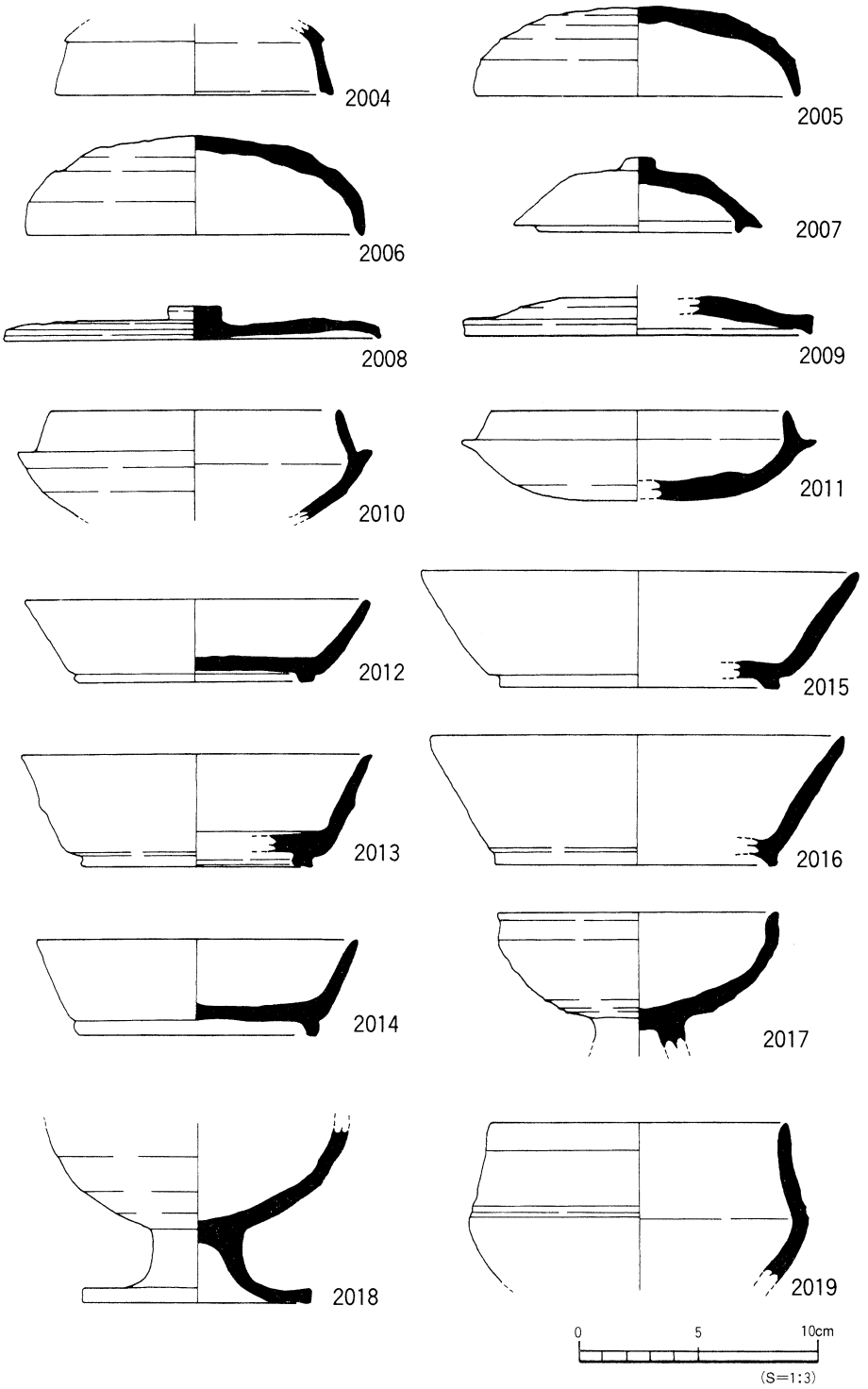
2017・2018は無蓋の高坏。2017は椀形の坏部で、口縁部はやや外反する。2018は口縁端部は欠損している。低脚で柱部は大きく外反し、脚端部は「コ」字状に仕上げる。7世紀。2019は椀である。体部中位に１条の凹線が巡る。7世紀。2020・2021は甕の口縁部である。口縁部は外反し、口縁端部は下方へ肥厚する。６世紀～７世紀。

陶磁器

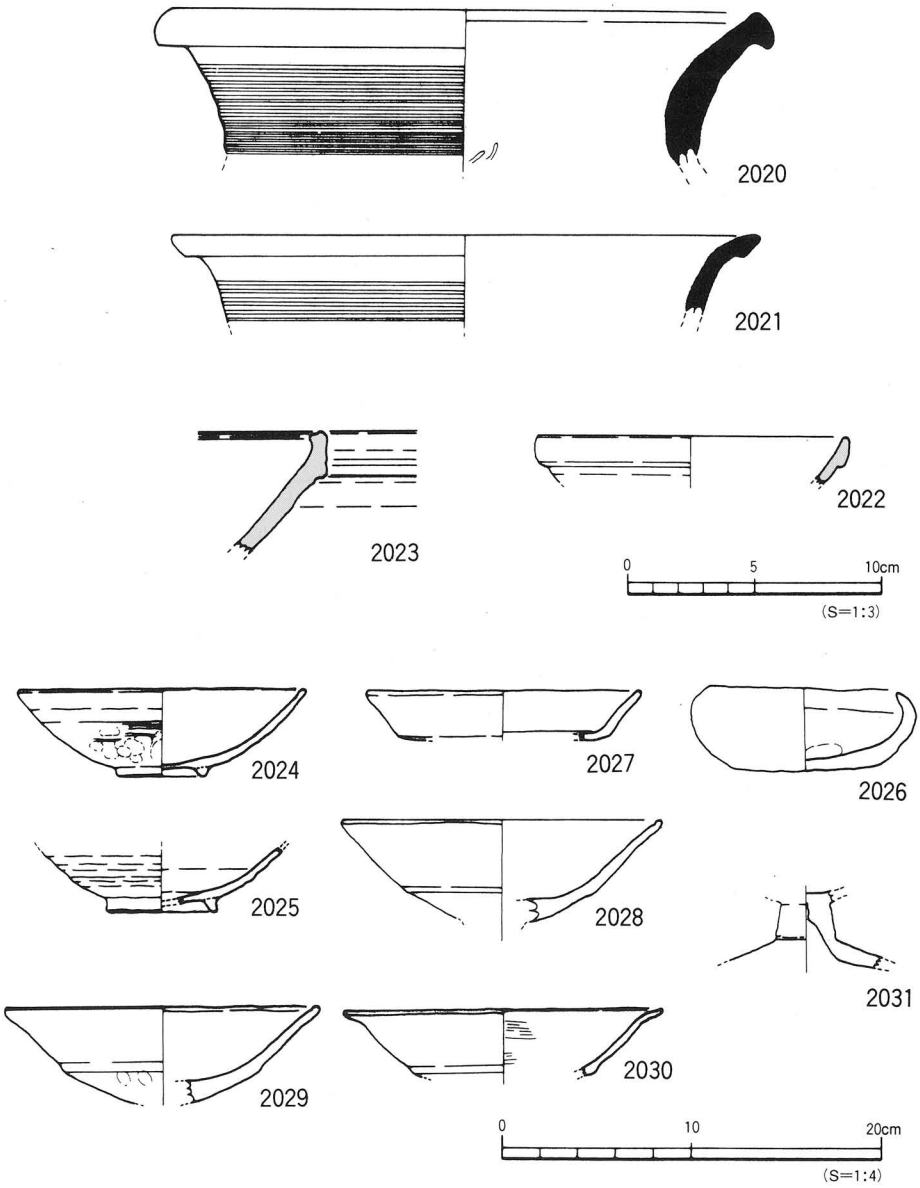
2022は白磁碗。胎土は白灰色で釉は灰クリーム色である。2023は肥前焼の擂鉢である。

土師器・弥生土器

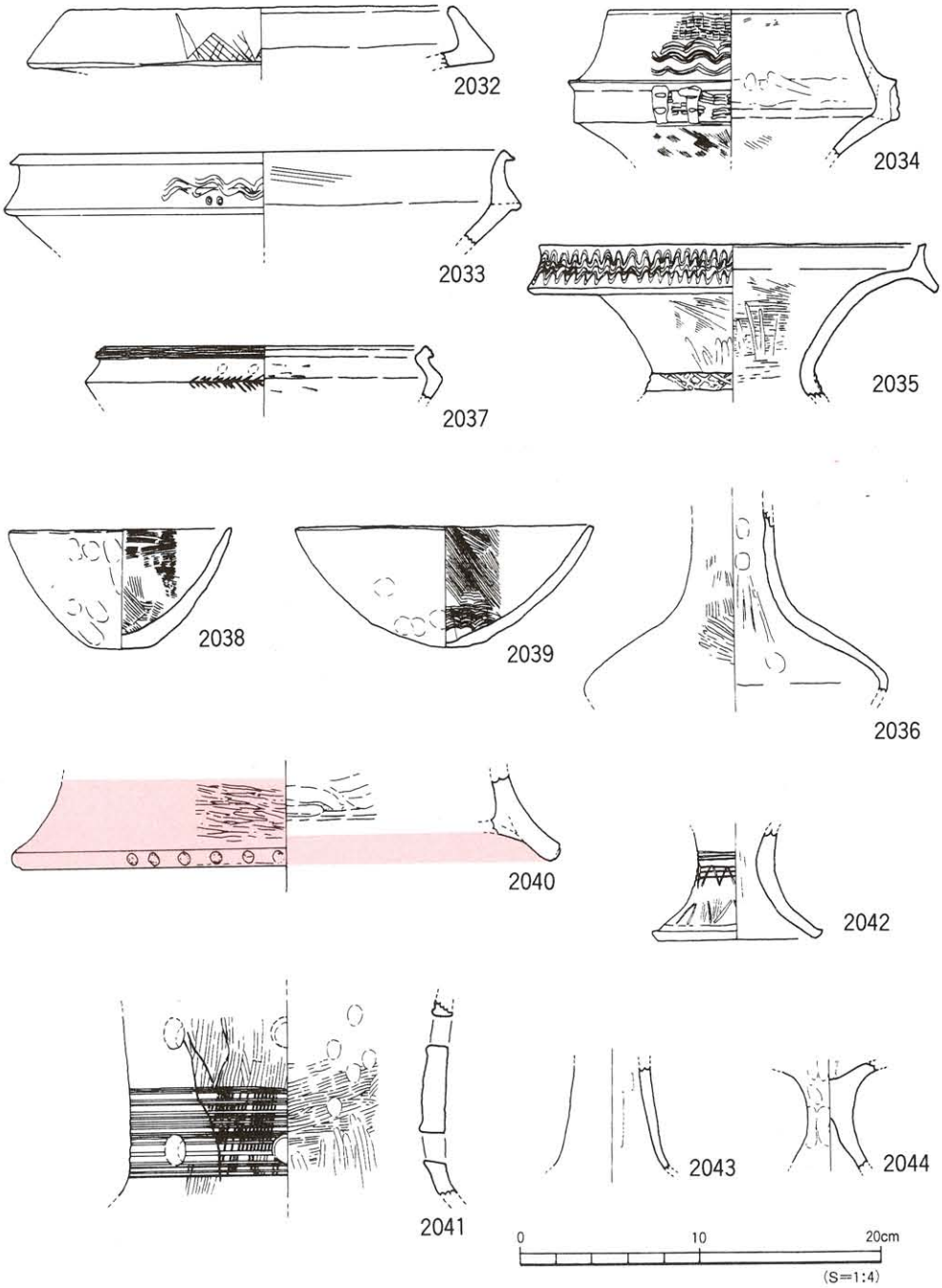
2024～2026は土師器の椀である。2024・2025は断面三角形状の高台が付く。2026は体部は内湾し口縁端部は尖り気味に仕上げる。2027は土師器の坏。体部は直線的に立ち上がる。2028～2030は高坏の坏部、2031は脚部である。坏屈曲部は稜をなすもの（2028）と段をなすもの（2029・2030）とがある。口縁部はいずれも外反する。2032～2034は複合口縁壺。2033は口縁端部を下外方に屈曲する。口縁部外面に櫛描きの波状文と竹管文を施す。2034は口縁部に廉状文と



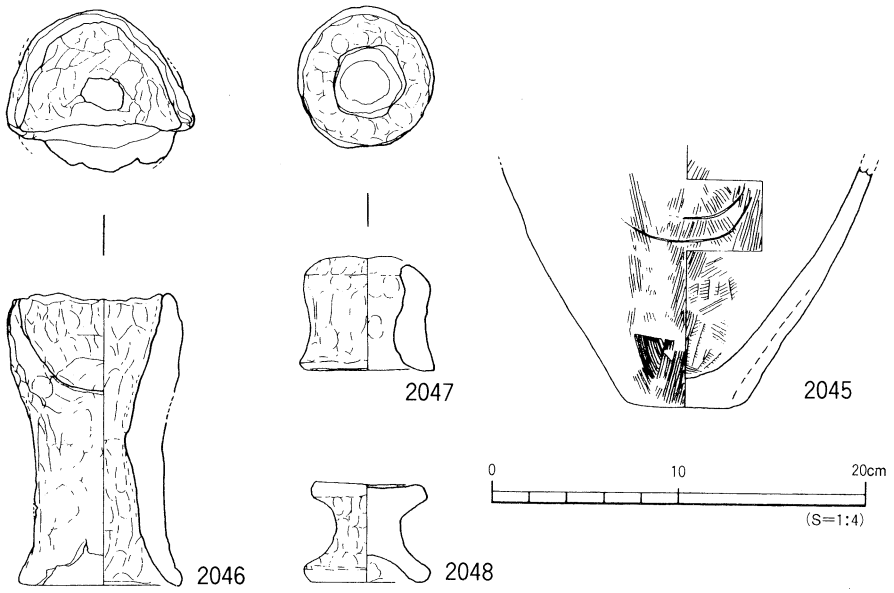
第262図　表採・トレンチ出土遺物実測図(1)



第263図　表採・トレンチ出土遺物実測図(2)



第264図　表採・トレンチ出土遺物実測図(3)



第265図　表採・トレンチ出土遺物実測図(4)

波状文を、口縁接合部に棒状浮文を貼付する。2035は広口壺で口縁端部を上下方に拡張する。2036は長頸壺。体部の張りは強く、頸部内面にシボリ痕が看取される。2037～2039は鉢形土器。2037は口縁端部に2条の沈線文を施し、屈曲部外面に羽状文を施す。2038・2039は直口口縁の鉢で、内面は刷毛目調整を施す。2040・2041は器台形土器。2040は装飾器台で、屈曲部に円形浮文を6個貼付する。内外面に赤色顔料が付着する。2042～2044は高坏形土器。2042は脚中位に櫛描沈線文を7条、脚中位～下位に山形文を施す。2045は壺形土器の底部。ヘラ状工具による弧状の沈線文を施す（記号か）。2046～2048は支脚形土器。2046は受部を斜めにカットしている。2047は中空、2048は中実のものである。

〔参考文献〕

谷若　倫郎　1989　「分銅形土製品にみる地域相」『花園史学10号』

山之内志郎　1992　「道後城北地域出土の分銅形土製品」『祝谷アイリ遺跡』

〔5〕 石製品

本調査において、遺構や包含層中から多数の石器が出土している。竪穴式住居址では弥生時代に比定されるＳＢ1、ＳＢ2、ＳＢ17の3棟、古墳時代に比定されるＳＢ3、ＳＢ4、ＳＢ6、ＳＢ13、ＳＢ19、ＳＢ21の6棟から石鏃や石庖丁などの製品のほか、石器素材が出土している。とりわけ、ＳＢ1からは大陸系の磨製石器片が出土しているほか、ＳＢ17からは赤色顔料が付着した石杵が出土している。自然流路内では、石庖丁や石斧などのほか砥石・台石・石皿・石錘など良好な資料が多数出土している。そのほか、包含層中からも多数の出土がみられ、とりわけ、第Ⅶ層出土の石器素材（サヌカイト製）は弥生時代以前に比定される可能性があるものとして注目される。

本稿では、これら石器類を遺構・包含層別に掲載する。

(1) 竪穴式住居址出土石器（第266・267図、図版109）

1）第Ⅳ層検出住居址出土石器（2049～2053）

ＳＢ6　本住居址からは、加工斧・砥石・台石が出土した。2049は扁平片刃石斧である。大きく欠損する。2050は砥石である。下端は欠損する。横断面形は不整五面体状を呈し、各面を機能面として利用している。右側面に遺存する溝には鉄錆が認められることから、本資料は鉄器製作に関わるものである。2051は台石である。器面の中央を機能面として利用しており、僅かに凹んでいる。

ＳＢ21　本住居址からは、石庖丁が出土した。2052は1／2の遺存である。平面形は長方形を指向しているようである。穿孔は両面からおこなわれている。器面の研磨は粗い。

ＳＢ13　本住居址からは、石庖丁が出土した。2053は1／2の遺存である。平面形は、刃部が弱く外湾する長方形を呈している。穿孔はいずれも両面から施される。

2）第Ⅵ層検出住居址出土石器（2054～2056）

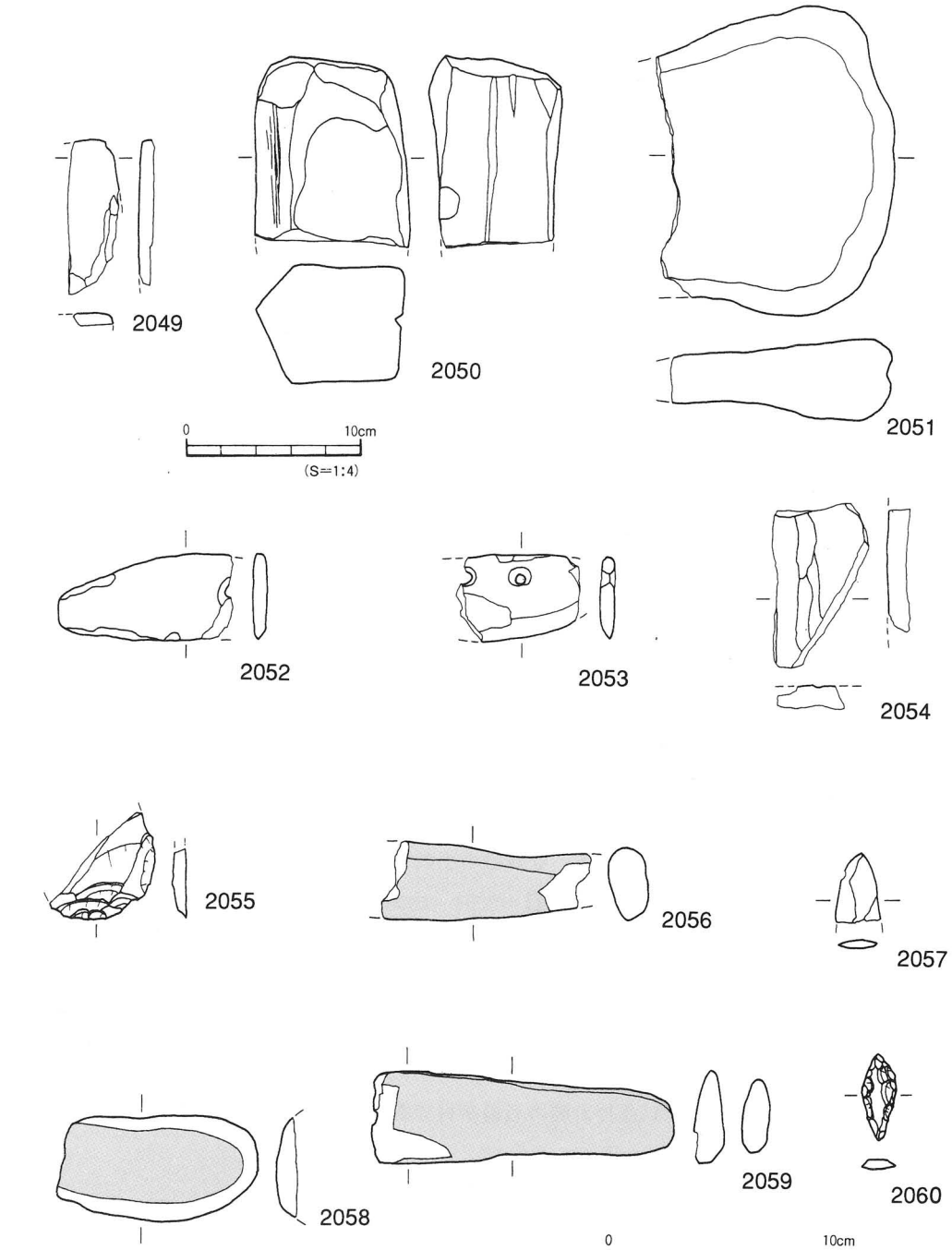
ＳＢ1　本住居址からは、結晶片岩製の大陸系磨製石器片が出土した。2054は器面の一部に研磨が施されている。

ＳＢ2　本住居址からは、スクレイパーと石器素材が出土した。2055はサヌカイト製のスクレイパーである。大きく欠損しており、全体形は不明である。刃部は弧状を呈し、片面調整により作出される。2056は結晶片岩製の石器素材である。両端は欠損する。破損面以外には自然面が残置する。

3）第Ⅶ層検出住居址出土石器（2057～2062）

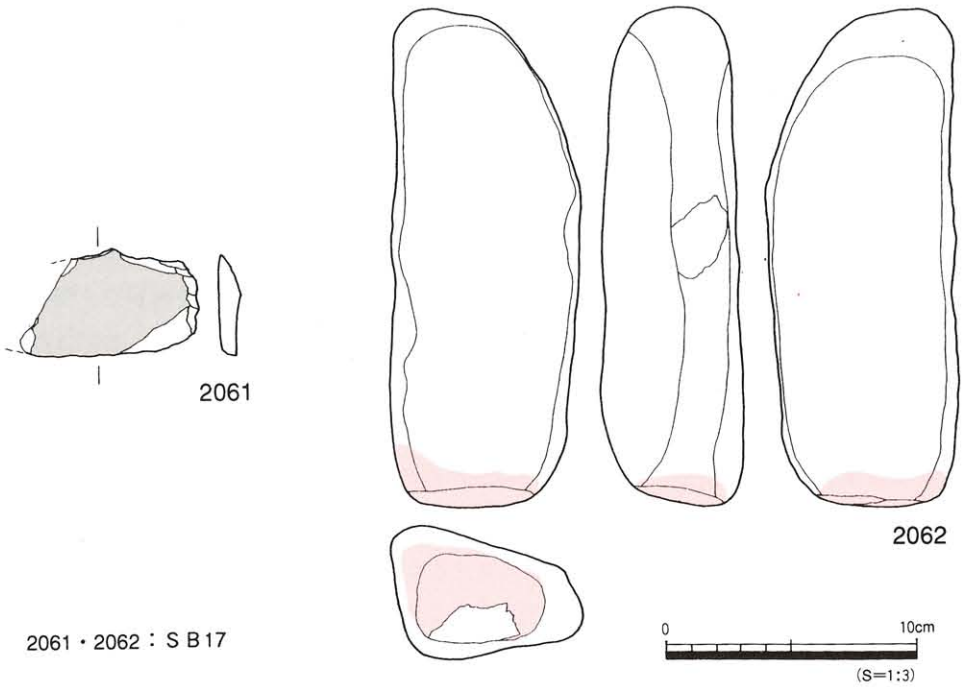
ＳＢ3　本住居址からは、磨製石鏃片が出土した。2057は基部が欠損する。研磨が粗いためであろうか、自然面が残置する。結晶片岩製

ＳＢ4　本住居址からは、石器素材が出土した。2058・2059ともに結晶片岩製で破損面以外には自然面が残置する。



2049～2051：SB6　2054：SB1　2058・2059：SB4
2052：SB21　2055・2056：SB2　2060：SB19
2053：SB13　2057：SB3

第266図　SB出土石器実測図(1)



第267図　SB出土石器実測図(2)

ＳＢ19　本住居址からは、打製石鏃が出土した。2060は尖基無茎式の完存品である。両面に素材面（初剝離面）が残置する。サヌカイト製。

ＳＢ17　本住居址からは、石器素材と石杵が出土した。2061は板状の石器素材である。片面には自然面が残置する。2062は石杵である。安山岩製の棒状の礫を素材としており、調整はなされず、素材の形状のまま使用している。機能面は下端面に限られ、著しい器面の磨滅が観察される。赤色顔料が付着しており、特に下端面には顕著である（巻頭図版２）。

(2)　自然流路出土石器

本調査検出の自然流路からは、多種多量の石製品が出土した。ここでは前述の土製品の場合と同様に、報告は調査区北西部から中央部と調査区南東部とに分けて記述を行う。

１）北西部から中央部（Ｂ2～Ｄ6区）の調査

北西部から中央部ではＳＸ1、ＳＸ2及び流路ＳＲ2・3（灰色粗砂）から石器が出土した。特にＳＲ2・3からは石鏃、石庖丁、石斧など比較的豊富な器種が出土している。

①　ＳＸ１・ＳＸ２出土石器（第268図、図版110）

2063はＳＸ1出土の結晶片岩製の石庖丁である。打裂段階で製作が中断されている。片面に大きく自然面が、もう片面には素材面が残置する。2064はＳＸ2出土の石庖丁である。遺存部位から、平面形は隅丸の長方形を指向していることが考えられる。

② ＳＲ２・３出土石器（第269図、図版110）

2065～2071はＣ区、2072はＢ区、2073はＤ区出土石器である。2065・2066は打製石鏃である。2065はサヌカイト製の凹基無茎式で片脚部を欠損する。2066は赤色チャート製の平基無茎式である。先端部と基部を欠損する。両面に素材面が広く残置する。2067～2069は石庖丁である。2067は刃部を大きく欠く。背部は弧状を呈しており、平面形は弧背弧刃形あるいは弧背直刃形と考えられる。穿孔は両面からおこなわれている。2068は1／2の遺存である。弧背直刃形に復原される。穿孔は両面からおこなわれる。2069は平面形が長方形で、側部に抉りを有する。抉りは敲打によって作出され、研磨によって仕上げられている。2070は伐採斧である。欠損後、基部と刃部には再加工がなされている。器面の風化が著しく進行している。2071は石器素材である。破損面以外には自然面が残置する。2072は大陸系磨製石器片である。2073は石器素材である。完存。大きく自然面が残置する。

２）南東部（Ｅ6～Ｈ8区）の調査

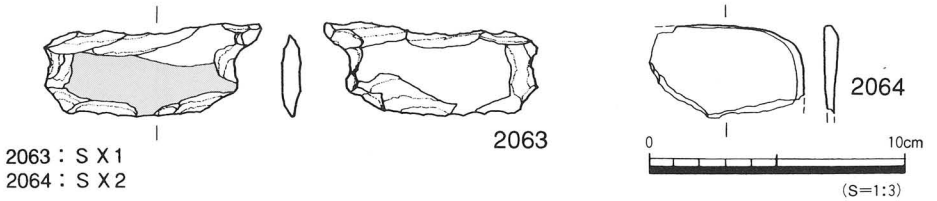
南東部では流路ＳＲ1、ＳＲ2及び土器溜まりＳＸ3、ＳＸ4、ＳＸ5から石器が出土した。とりわけ、ＳＲ1からは、石庖丁、石鏃、石斧、砥石、石錘など多種多量の石器が出土している。ＳＲ1については土製品の場合と同様に北半部（①～⑥区）と南半部（⑦～⑩区）に分けて記述している。なお、ＳＲ1下層出土石器として報告している中には、流路基底面の土層である最下層Ａ（明灰色砂）、最下層Ｂ（鉄分を含む小礫層）から出土した石器も含まれている。

① ＳＲ１出土石器

調査区南東隅Ｅ7～Ｈ8区に検出した流路ＳＲ1から出土した石器である。北半部の調査では、下層で取り上げた土製品の中に上層遺物が多数、混在していたため、ＳＲ1出土遺物として報告した。よって石製品についても同様に、ＳＲ1出土石器として報告する。

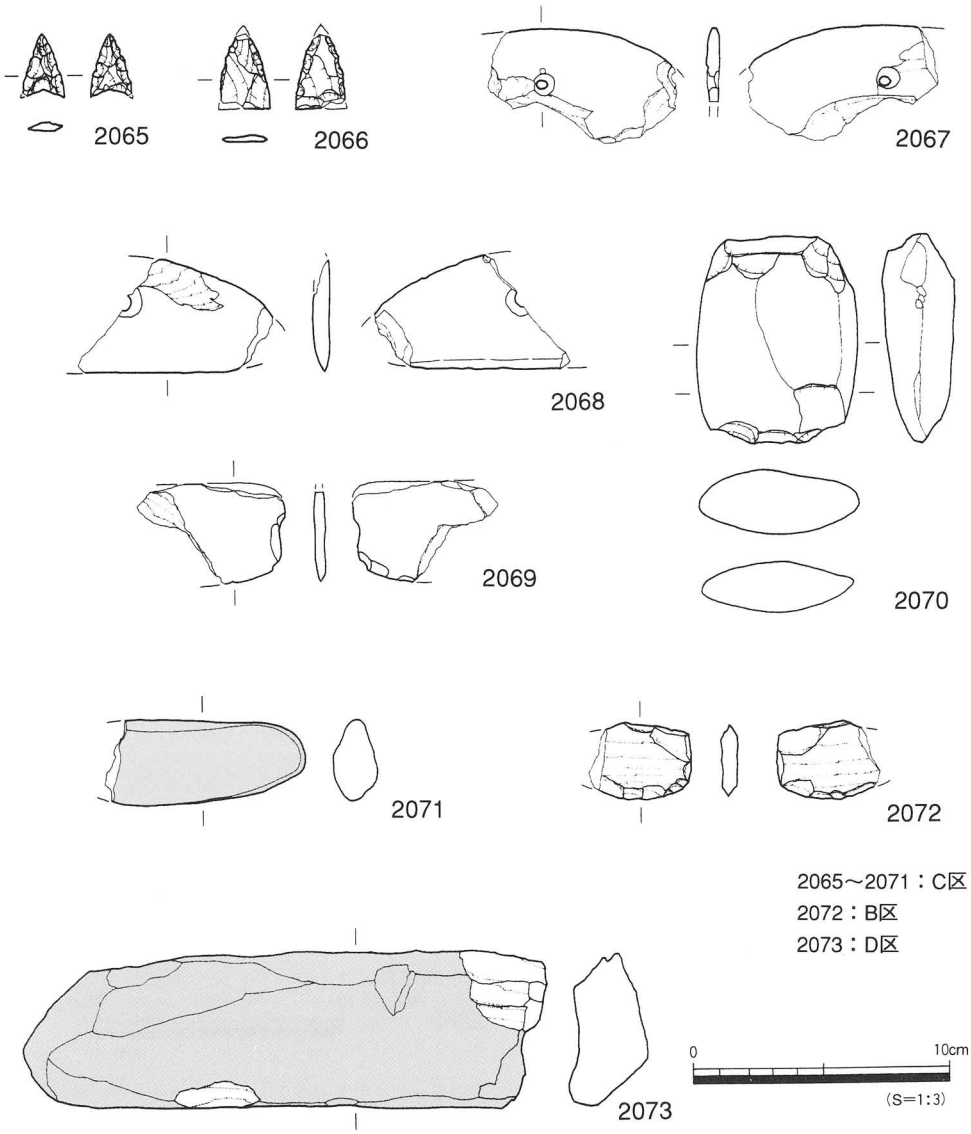
（ｉ） 南半部（⑦～⑩区）下層出土石器（第270・271図、図版111・112）

2074・2079は最下層Ａ、2075～2078、2080～2083は下層下部、2084～2088は下層上部出土石器である。2074はスクレイパーである。厚みのある剝片を素材とし、若干内湾する刃部を両面調整により作出する。使用により刃部に細かい刃こぼれ状の使用痕が認められる。流紋岩質安山岩。2075は石庖丁である。大きく欠損する。欠損している上端には研磨痕が認められ、再加工されている。2076は加工斧である。基端と両側面以外はほとんど欠損する。2077は器種不明の大陸系磨製石器片である。結晶片岩製。裏面は大きく欠損する。片面には丁寧な研磨がみられる。2078は砥石である。断面は不整七面体状を呈し、各面に使用痕が認められる。そのうちの一面には幅1～2㎜の溝が一条認められる。断面は極めて浅いＶ字形を呈しており、この溝は金属器製作時の研磨によって形成されたことが考えられる。2079は砥石、2080は台石である。受熱により部分的に黒化している。2081は石庖丁未製品である。右半部が欠損する。弧背直刃形態を指向しており、研磨段階で廃棄されたものである。2082・2083は石器素材である。結晶片岩製。



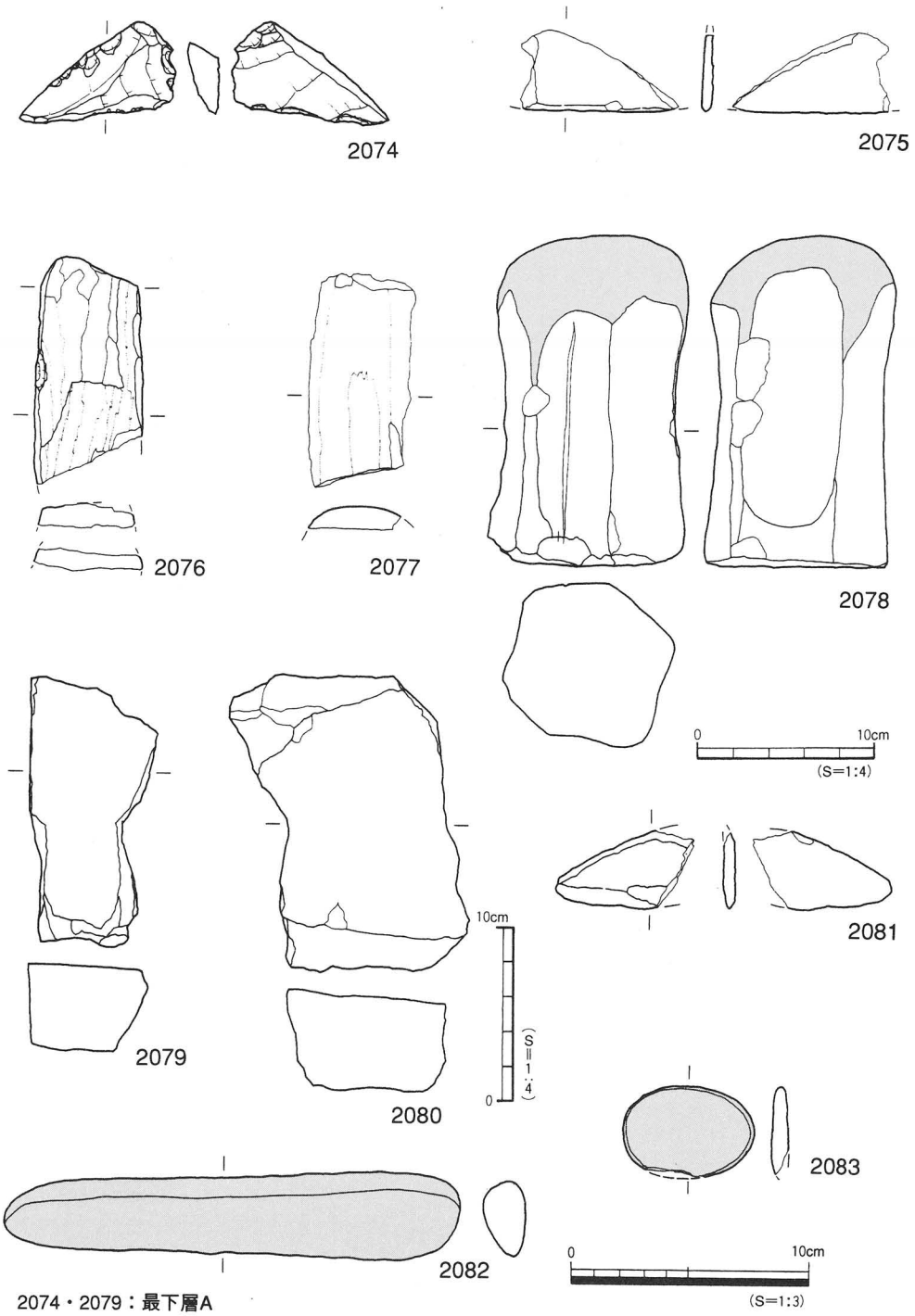
2063：SX1
2064：SX2

第268図　SX1・SX2出土石器実測図



2065～2071：C区
2072：B区
2073：D区

第269図 SR2・3　B・C・D区出土石器実測図



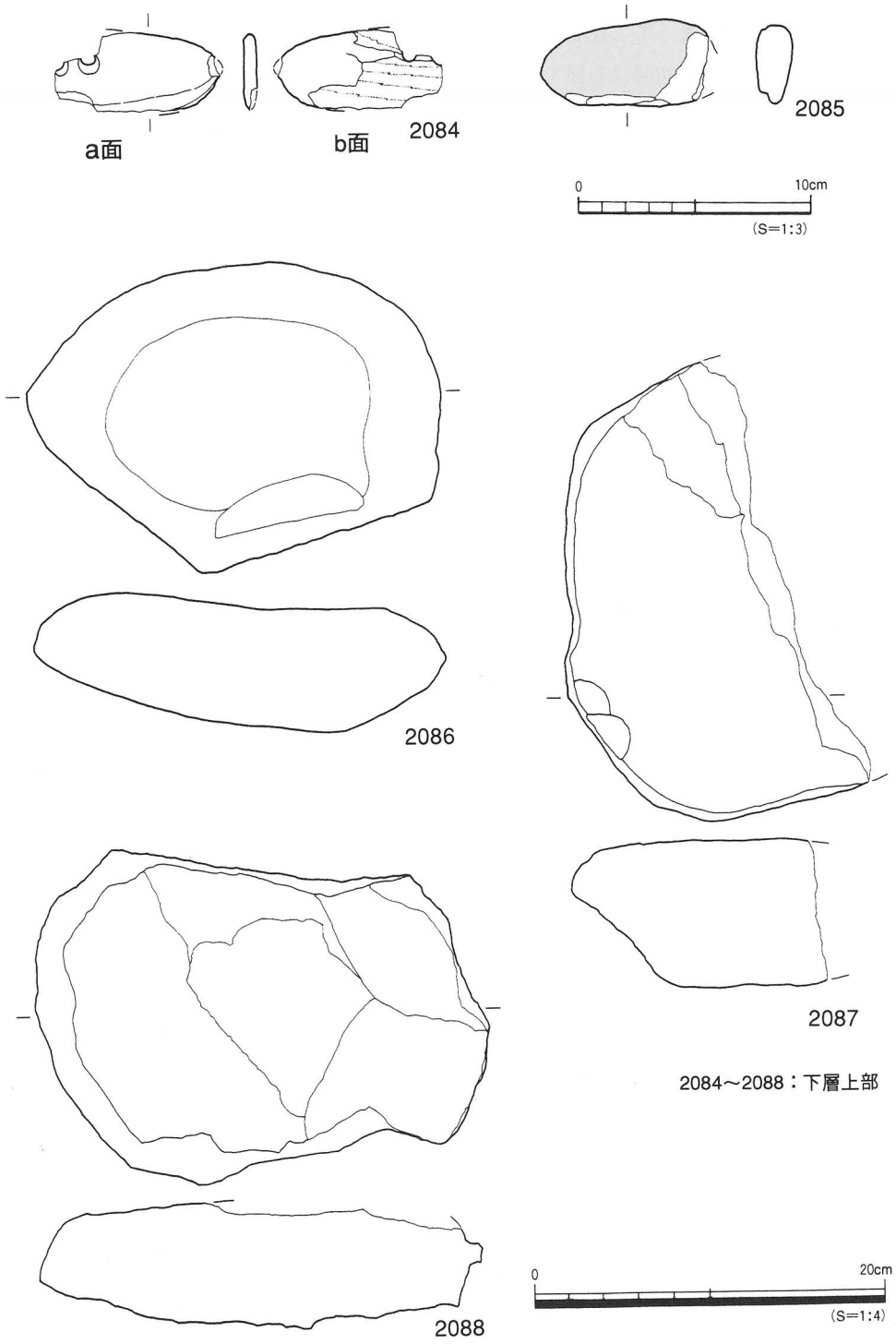
2074・2079：最下層A
2075～2078・2080～2083：下層下部

第270図　SR1南半部下層出土石器実測図（1）

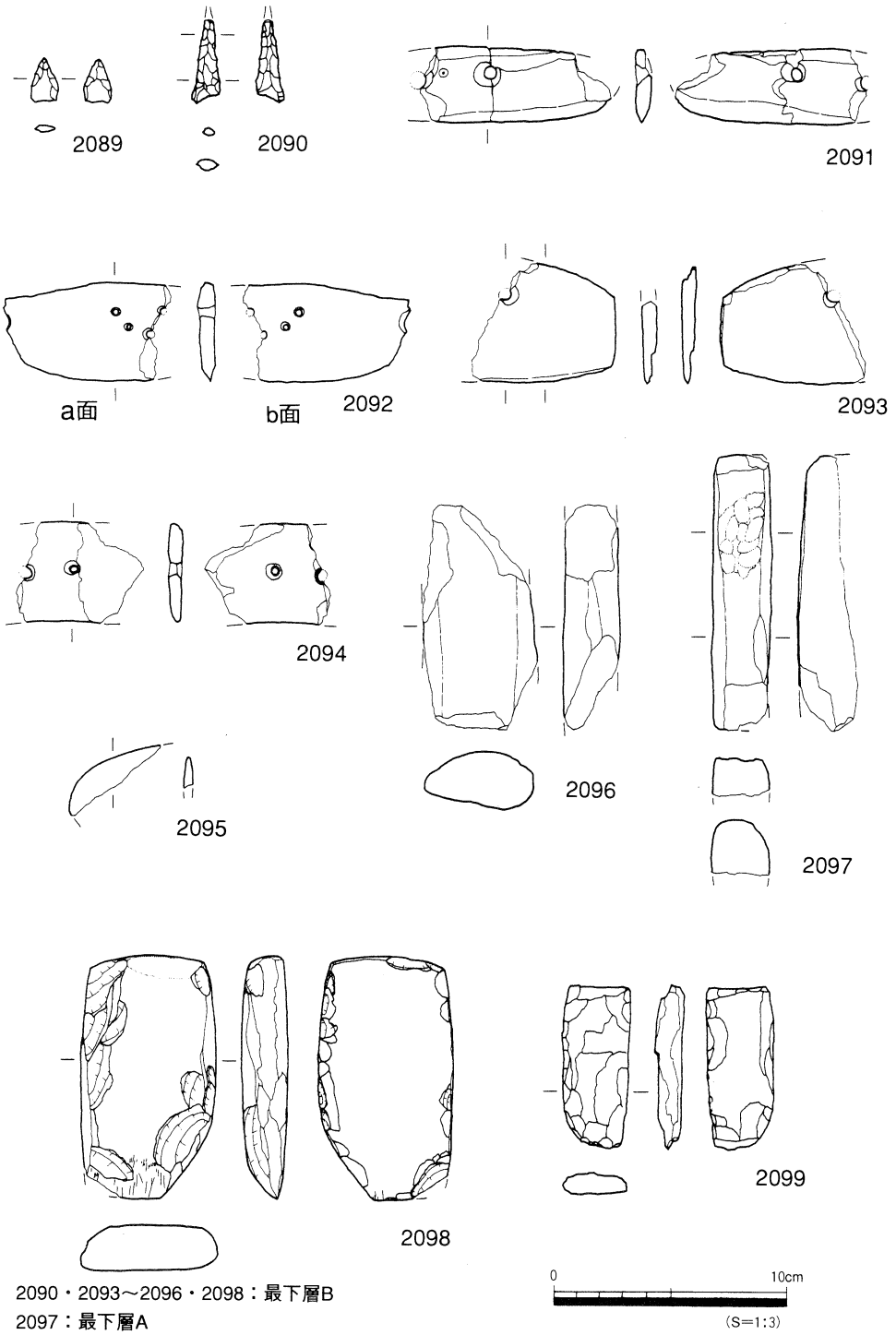
2084は石庖丁である。大きく欠損する。弧背弧刃形態で、刃部と背部の接点が尖るタイプであろう。両面穿孔によって二孔を穿つ。ａ面に認められる刃部の鎬は曖昧で判然としない。2085は石器素材である。2086は石皿である。片面中央部を機能面として利用しており、部分的に敲打による凹みが観察される。2087・2088は台石である。2087は受熱により部分的に黒化している。2088は表面の一部が剝落している。受熱により裏面以外の各面が黒化する。

（ⅱ）　ＳＲⅠ北半部（①～⑥区）出土石器（第272～274図、図版112～114）

2090・2093～2096・2098・2100・2105・2109～2111は最下層Ｂ、2097・2102・2106・2108は最下層Ａ、その他はＳＲ1出土石器である。2089は打製石鏃である。サヌカイト製。小形の平基無茎式である。両面に素材面が残置する。2090は打製石錐である。使用により先端部が欠損する。赤色チャート製。2091～2095は結晶片岩製の石庖丁である。2091は両端部が欠損しているため平面形が楕円形か長方形かは判然としない。2092は長方形を呈し、側部には研磨によって仕上げられた抉りが認められる。ａ面には4孔の他に穿孔途中が二箇所認められる。貫通している孔には外径と内径に大きな差異はみられず、金属器によって穿孔されたものと考えられる。2093は長方形で側部に抉りがみられないタイプである。2094は大きく欠損するため、全体形の復元は困難である。遺存する刃部は僅かながら内湾し、磨滅が著しい。2096は伐採斧である。基部と刃部が大きく欠損する。横断面形態は不整円形を呈す。2097～2099は加工斧である。2097は欠損品。基部は円基を呈し、各面の研磨は弱く面取りが甘い。そのために稜が不明確となっている。横断面形は胴張り形を呈す。抉りは弱く、僅かに凹む痕跡的なものである。2098は平面形が身膨れ状の不整長方形に近い。側部には、成形時の打裂痕が残る。刃部の鎬は弱く丸みを有する。前主面側の刃部には、縦位の細線条痕が認められる。右側部には欠損後の研磨が施されており、欠損後に再利用されていることが理解される。2099は加工斧の未製品である。打裂が終了し、研磨に移行した段階である。2100・2101は有溝石錘である。2100は長軸方向の側面に、擦り切りによる一条の溝が施される。2101は2100と同様に長軸方向の側面に擦り切りによって溝が一条作出されている。下端を欠損する。流紋岩製。2102～2104は敲石である。2102は両面の中央を機能面として使用している。2103は片面中央部を機能面として使用している。2104は片面の中央部と下端面を機能面として使用する。下端面が磨滅していることから、この面では擦り潰すような作業がおこなわれたことが想定される。2105～2107は砥石である。2105は完存。片面と下端面を機能面として使用しており、横位の細かい線条痕が認められる。2106は裏面の一部を欠損する。機能面は片面であり、特に中央部に使用痕が顕著に認められ、磨滅が著しい。2107は片面を機能面として使用している。2108・2109は石庖丁未製品。結晶片岩製。いずれも打裂段階で欠損したために廃棄されたと考えられる。2108はｂ面に自然面を有している。2109は両面の一部に自然面が残置する。2110・2111は大陸系磨製石器の未製品である。結晶片岩製。2112・2113は石器素材である。結晶片岩製。ともに自然面が両面に大きく残置する。2114は流紋岩質安山岩製の剝片である。

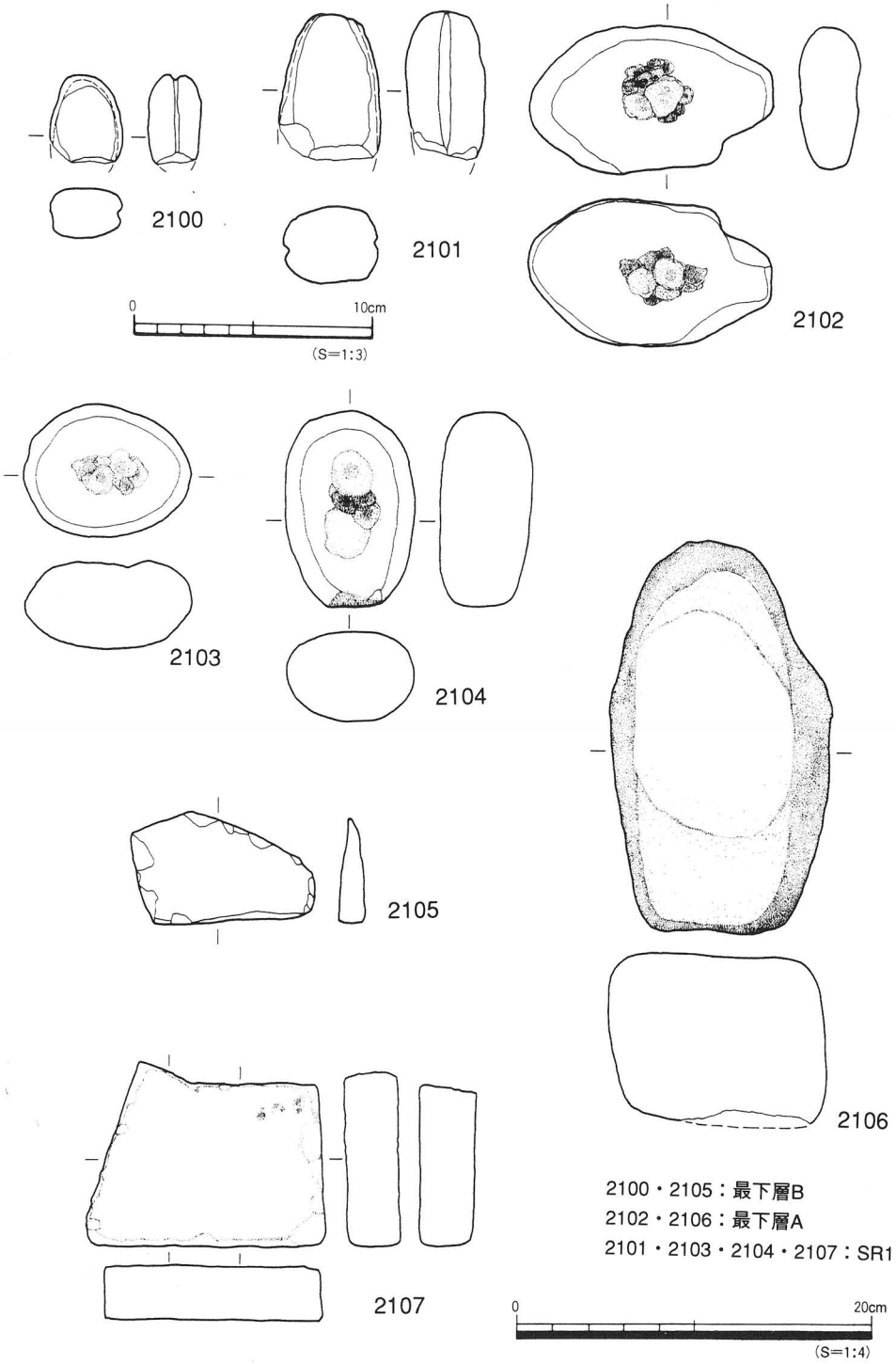


第271図　SR1南半部下層出土石器実測図（2）

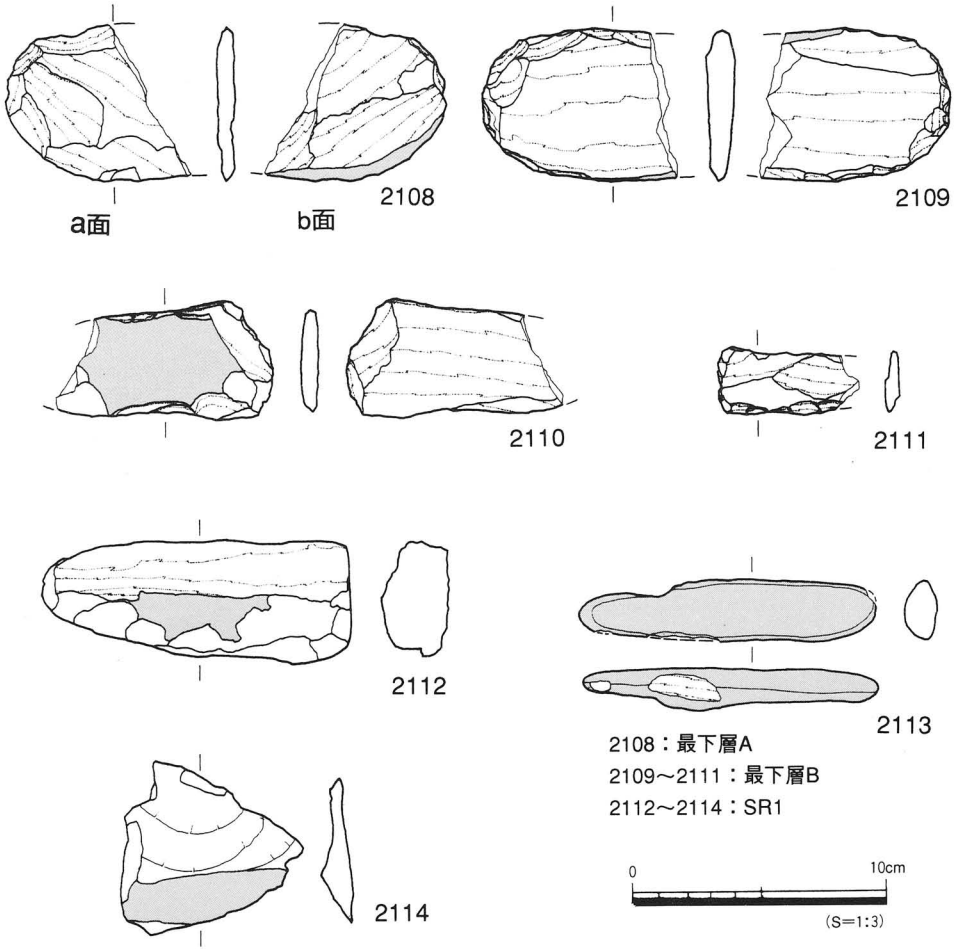


2090・2093～2096・2098：最下層B
2097：最下層A
2089・2091・2092・2099：SR1

第272図　SR1北半部出土石器実測図（1）



第273図　SR1北半部出土石器実測図 (2)

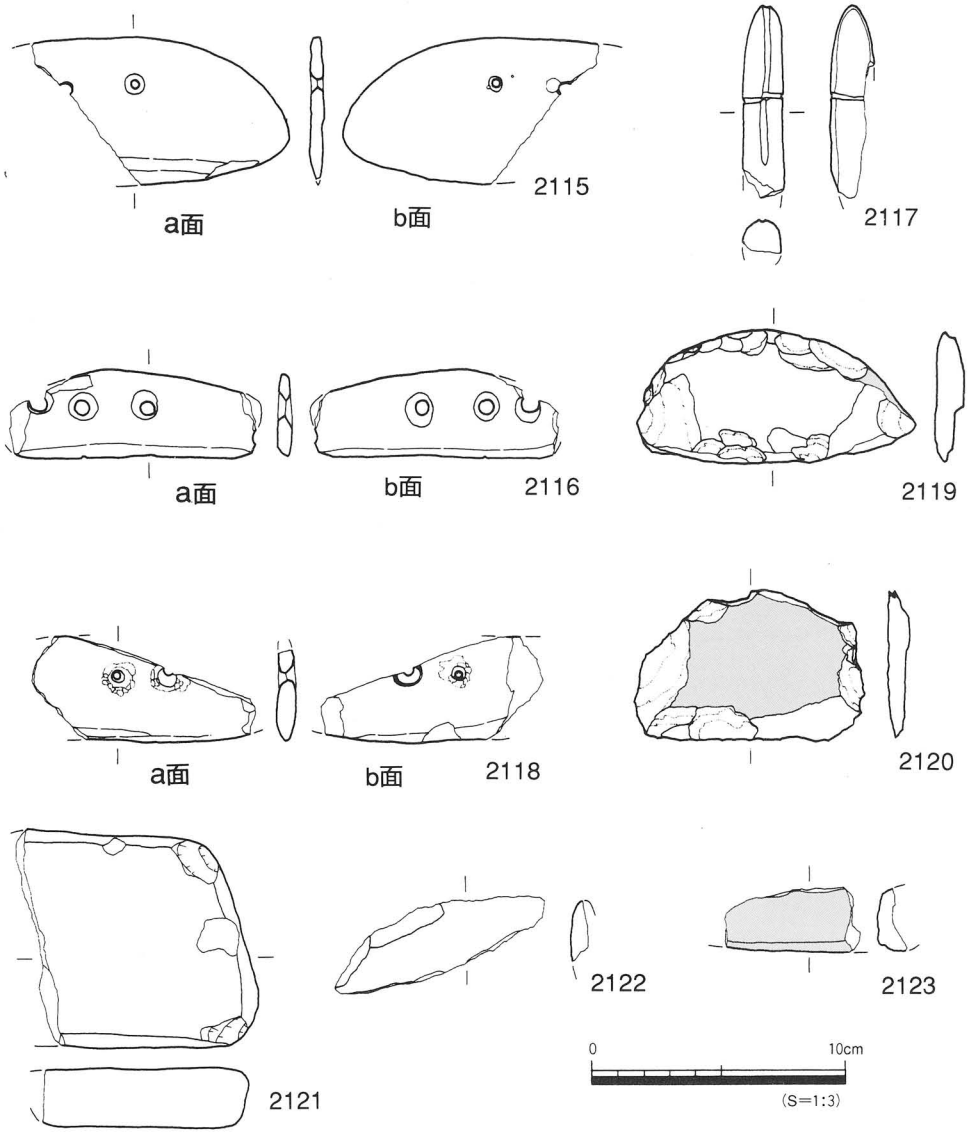


第274図　SR1北半部出土石器実測図（3）

次にＳＲ1上層では南半部、特に⑦・⑧区から石器が出土した。石庖丁（製品・未製品）、有溝石錘、台石、大陸系磨製石器片が出土している。

（iii）　ＳＲＩ上層出土石器（第275図、図版115）

2115・2116は石庖丁である。2115は弧背直刃形態でａ面の研磨ではなく、局部的には自然面が残置する。背部は面取りされ、両面穿孔により2孔を穿つ。ｂ面には穿孔途中が3箇所認められる。2116は長方形を呈し、左側部を中心に欠損する。右側部には研磨によって仕上げられたと思われる抉りがみられる。刃部の鎬は両面に認められるが、特にａ面は明確である。2117は有溝石錘である。2118～2120は石庖丁未製品である。2118は研磨が進行し、穿孔段階で廃棄されたものである。穿孔はａ面の左右孔とｂ面の右孔は敲打後に穿孔具による回転穿孔であるが、左孔は敲打を行わず直に回転穿孔を行ったと考えられる。直刃形態を指向していることが考えられる。2119は打裂が終了し、研磨に移行した段階のものである。打裂段階

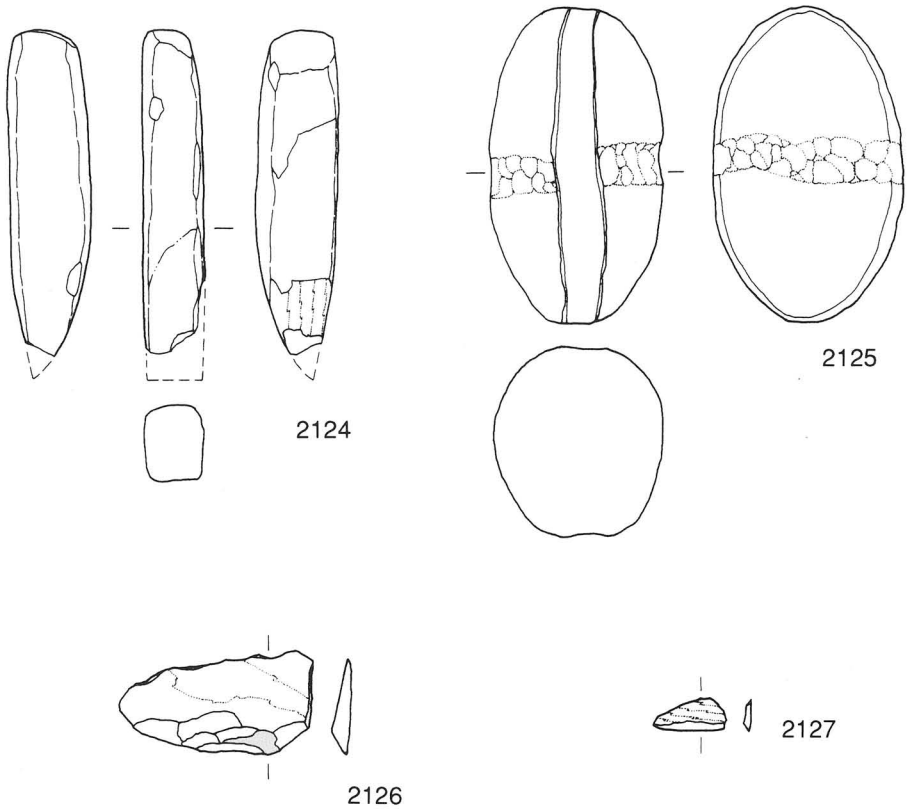


第275図　SR1南半部上層出土石器実測図

で大きく剝離された面には研磨が及ばず、剝離された面がそのまま遺存する。弧背直刃形態を指向している。2120は打裂段階で、一部自然面が残置する。2121は台石である。2122・2123は結晶片岩製の大陸系磨製石器片である。

② ＳＸ3出土石器（第276図、図版116）

調査区南東隅⑧区で検出した土器溜まり（ＳＸ3）から出土した石器である。ＳＸ3からは



第276図　SX3出土石器実測図

加工斧、有溝石錘、大陸系磨製石器片が出土している。2124は加工斧である。刃部の一部を欠損する。2125は有溝石錘である。長・短軸方向に1条ずつの溝が作出される。長軸の溝は研磨で、短軸の溝は敲打で作出されている。2126は結晶片岩製の大陸系磨製石器未製品である。打裂段階のものである。

③　ＳＸ５出土石器（第277図、図版116）

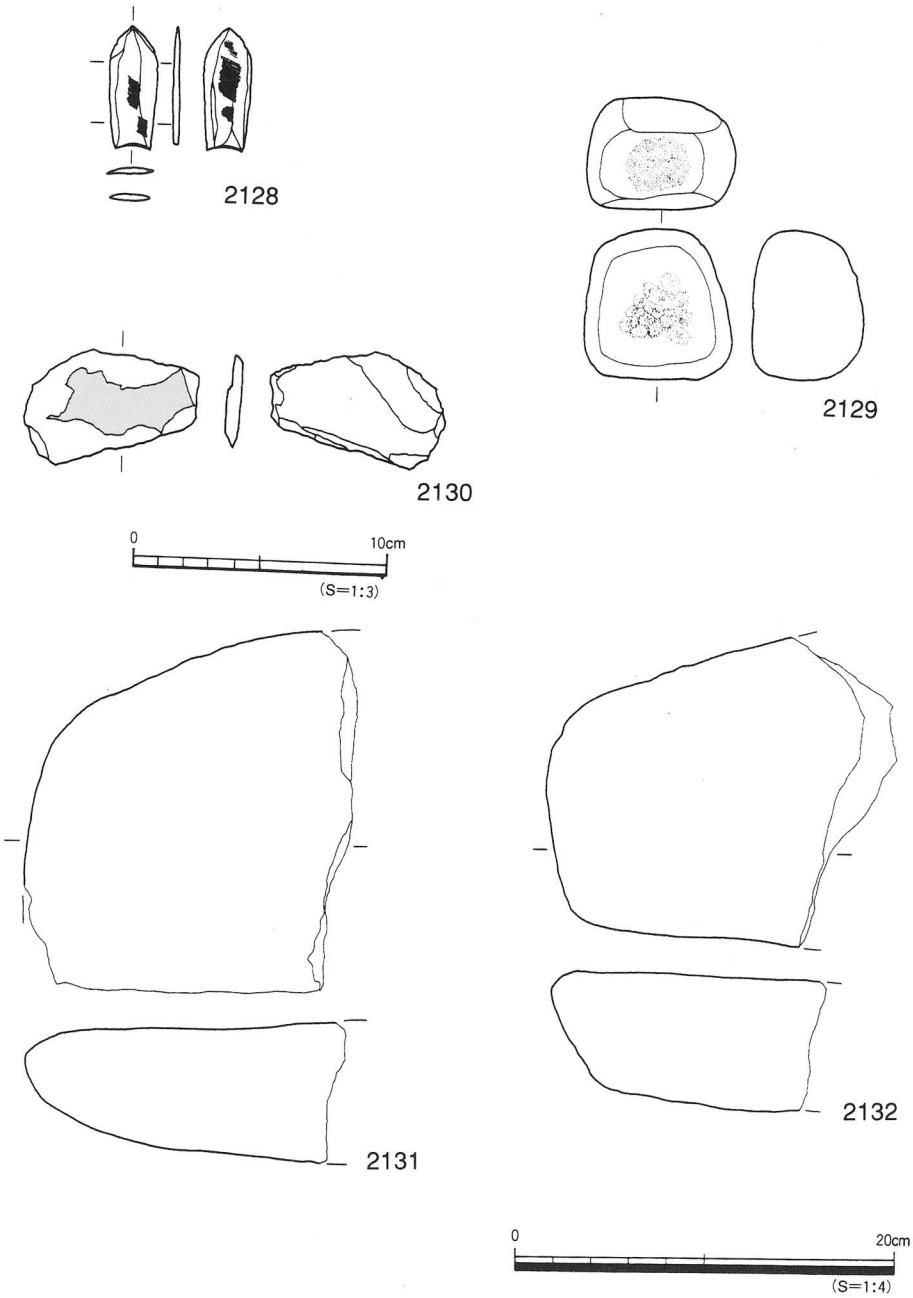
②区の南、溝ＳＤ402の埋土上部で検出した土器溜まり（ＳＸ5）から出土した石器である。ＳＸ5からは磨製石鏃や敲石・石庖丁未製品が出土している。2128は凹基無茎式の磨製石鏃である。先端部は細かな使用痕が認められる。完存品。2129は敲石である。完存品。2130は石庖丁の未製品である。打裂段階で欠損し廃棄されたものである。

④　ＳＲ２出土石器（第278・279図、図版117・118）

調査区南東部で検出した流路ＳＲ2から出土した石器である。いずれも北半部からの出土である。2133・2135・2136・2139・2141・2143・2146は①区、2144は②区、2138・2145は③区、

2134・2137・2140・2142は⑤区出土品である。

2133・2134はスクレイパーである。サヌカイト製。2133はやや薄みの横長剝片を素材とし、直線的な刃部を両面調整により作出する。2134は厚みのある横長剝片を素材とし、直線的な刃部をｂ面からの片面調整により作出する。



第277図　SX5出土石器実測図

2135・2136は石庖丁である。2135は直背弧刃形を呈し、刃部に刃こぼれが顕著に認められる。刃部の鎬は両面ともに明確ではない。穿孔は両面から施されている。結晶片岩製。2136は側部に丸みのある長方形をなし、両側部には研磨によって仕上げられた抉りを有す。ａ面の刃部の鎬は明確である。また、この面には自然面が一部残置する。2137は伐採斧である。基部を欠損する。やや幅狭で、4.7cmをはかる。横断面形はやや楕円状を呈す。前・後主面の研磨は、全面には及ばず刃部付近に限られ、他は器面に凹凸が認められる。結晶片岩製。2138は加工斧である。前主面側を欠損する。基部は緩い斜基で、後主面には敲打による抉りが認められるが、僅かに凹む痕跡的な抉りである。刃部の鎬は認められず、刃端に向かって緩やかに円弧状の刃付けとなる。横断面形はやや胴が張り、角のとれた隅丸の長方形状を呈する。2139は安山岩製の有溝石錘である。溝は片面が擦り切りにより作出し幅狭く、もう一面は敲打により幅広で浅く作出される。なお、横断面図における左右の両側面には磨滅や破損が認められる。2140は台石である。片面を機能面として利用している。2141は砥石である。上半部を欠損する。2142・2143は大陸系磨製石器片である。結晶片岩製。2144～2146は結晶片岩製の石器素材である。

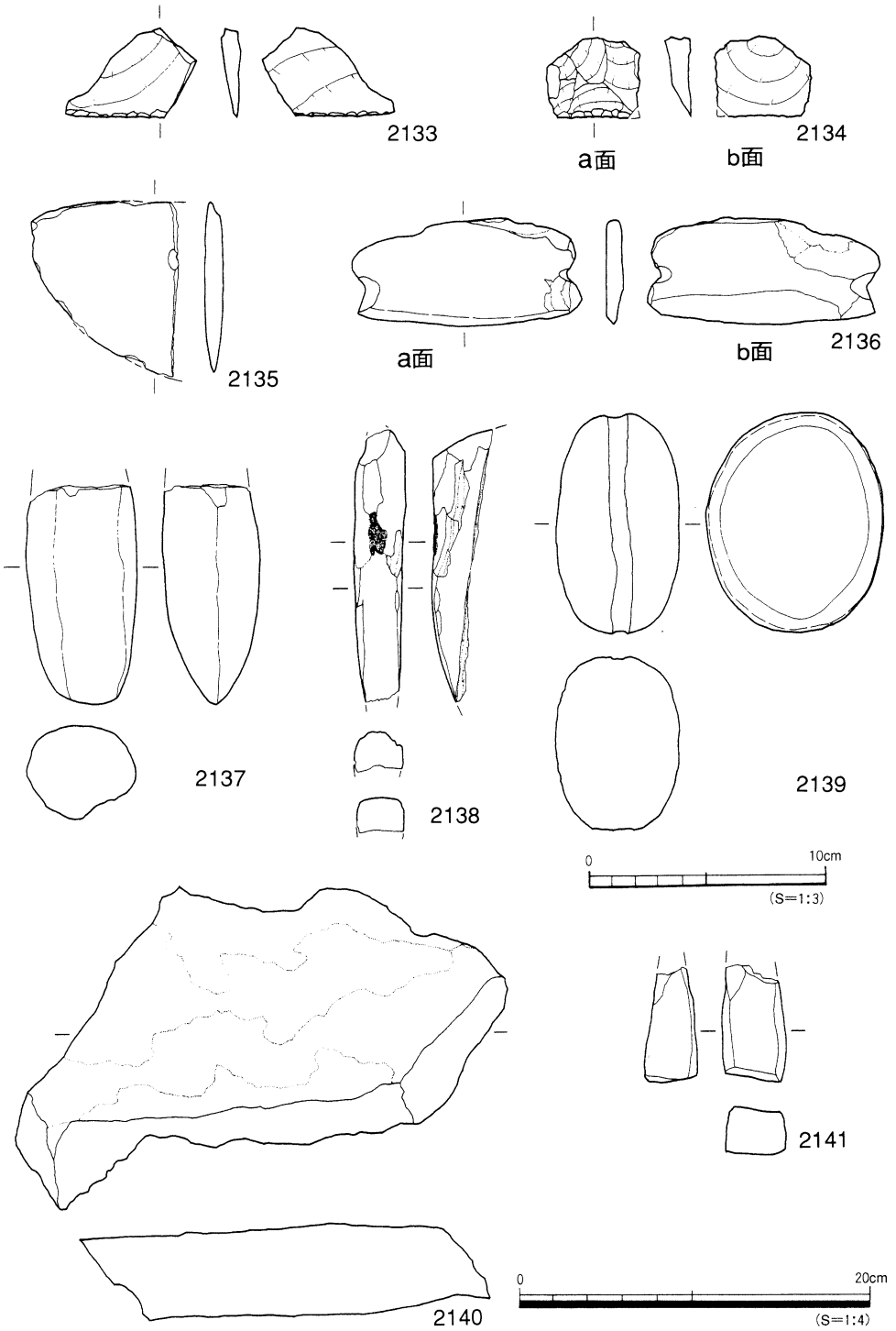
⑤　Ｅベルト出土石器（第280図、図版118）

発掘調査の最終段階で流路ＳＲ1南半部内に設定した土層観察用のＥベルトの除去中に出土した石器である。2147～2150は下層下部出土品。2147は紡錘車である。平面形は不整円形を呈し、孔は両面穿孔による。2151～2153は下層上部出土品。2151は結晶片岩製の男根状石製品である。先端の一部を欠損する。扁平な自然礫を素材とし、素材の形状を利用している。2152は石庖丁未製品である。左半部は欠損する。研磨段階のものであるが、刃部は作出されておらず鎬は認められない。2153は台石である。片面のみ機能面として利用しており、凹み状の使用痕が認められる。完存品。2154・2155は上層出土品。2154は石庖丁未製品である。ａ面には未貫通の穿孔痕が認められることから、穿孔段階で欠損し破棄されたものであろう。2155は斑晶安山岩製の有溝石錘である。下端の一部を欠損する。溝はやや幅広く、長軸方向にのみ擦り切りによって施されている。受熱によるものであろうか全体的に黒化している。

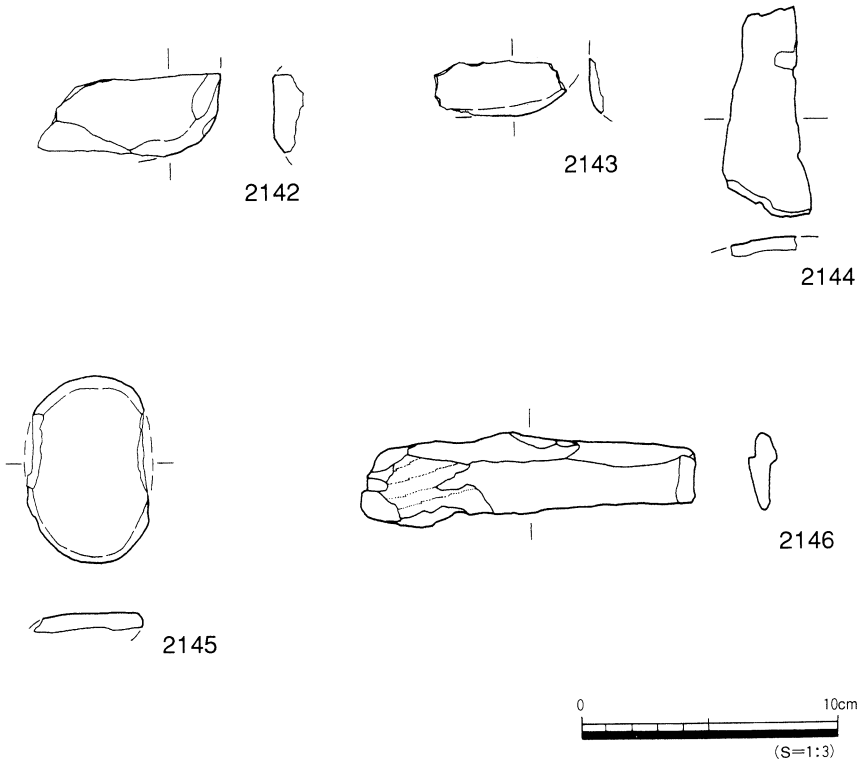
⑥　ＳＸ401・402出土石器（第281図、図版119）

調査区南東部、③・⑥区及び⑧区で検出した性格不明の土層から出土したものである。2157はＳＸ401、他はＳＸ402出土の石器である。

2156はスクレイパーである。両端を欠損するものの、背部・刃部ともに直線状を呈しており、平面形が長方形の打製の石庖丁と考えておきたい。上端の一部には自然面が残置しており、ファーストフレイクあるいはこれに近い剥片を素材としていることが理解される。サヌカイト製。2157は加工斧である。刃部を欠損する。平面形は胴張りの長方形、横断面形は側部の膨らむ不整形を呈す。基部の平面形は弱円基状、縦断面形は不整形を呈する。左側面には製作時の打裂痕・敲打痕が顕著に認められる。2158は大陸系磨製石器片である。2159は石器素材である。



第278図　SR2北半部出土石器実測図（1）



第279図　SR2北半部出土石器実測図（2）

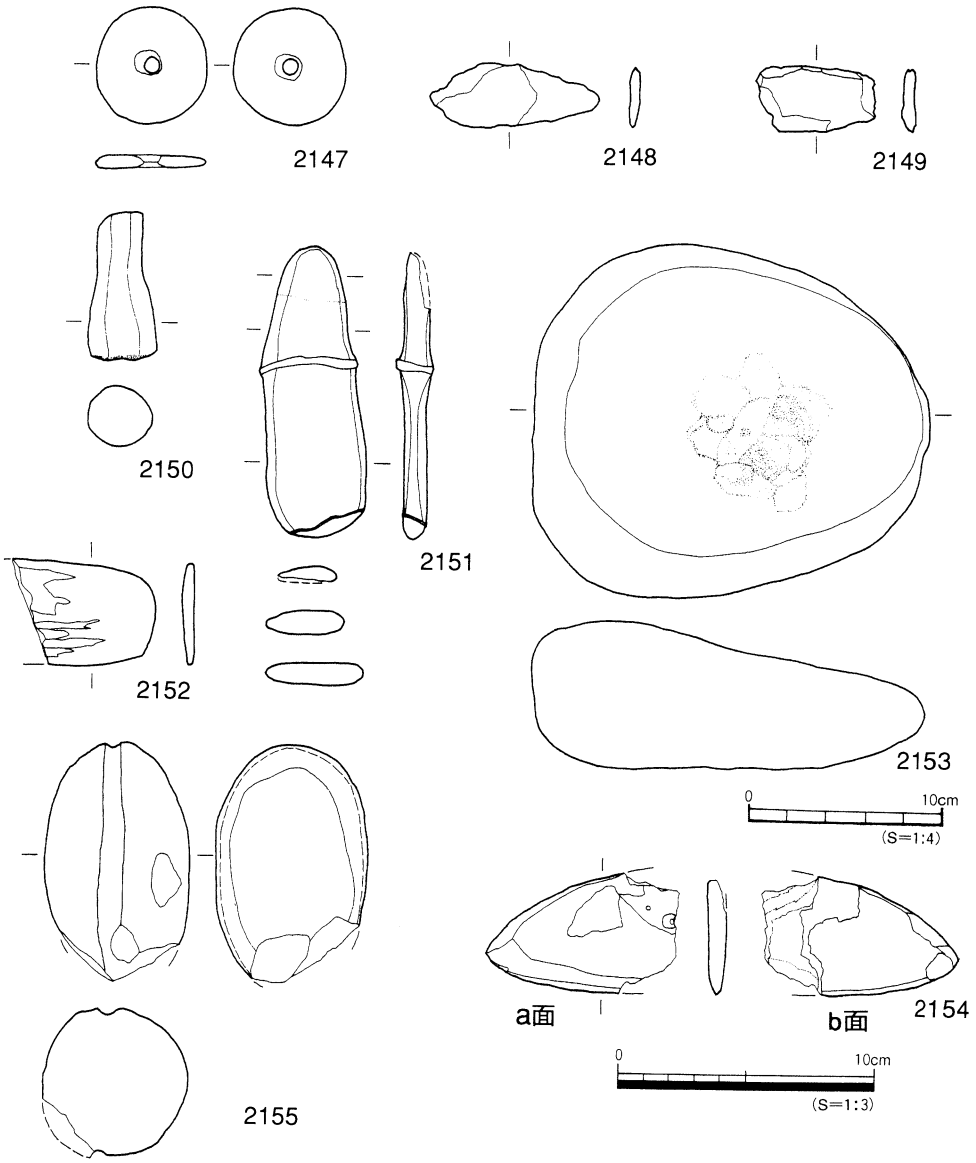
(3)　包含層出土石器

本調査において包含層である第Ⅳ層、第Ⅴ層及び第Ⅶ層中から石器が出土した。第Ⅳ層中からは、石庖丁・砥石・紡錘車のほか、勾玉などが出土している。第Ⅴ層中からは、石鏃・石庖丁・砥石のほか、大陸系磨製石器片他が出土している。また第Ⅶ層中からはサヌカイト製の石器素材が出土している。

1）第Ⅳ層出土石器（第282図、図版119・120）

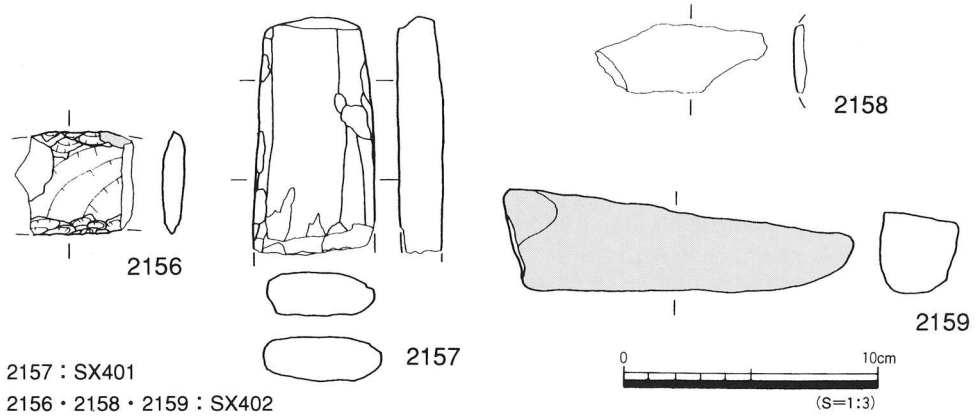
2160～2163は石庖丁である。いずれも大きく欠損する。2160は弧背直刃形を呈す。使用・再研磨を繰り返した結果であろうか、刃部はやや内湾するものと考える。二孔みられ、ともに両面穿孔である。2161は弧背直刃形を呈し、二孔は両面穿孔による。2162は弧背直刃形に復原される。器面は丁寧な研磨で仕上げられ、孔は両面穿孔による。2163は両端が大きく欠損するために、平面形は特定できない。遺存する孔は、敲打をおこなった後に穿孔している。2164・2165は砥石である。2164は上半部を欠損する。方柱状を呈し、上面はよく使い込まれている。2165は完存品で、不整形である。2166は用途不明石製品である。完存品。重量64.1ｇをはかる。2167～2172は石器素材である。結晶片岩製。2167は完存品。両面には自然面が残

置しており扁平な礫を素材としていることが理解される。2169は棒状の石器素材である。上半部を欠損する。欠損面以外は自然面が残置する。2170・2171は裏面が剥離し、2172は両面が剥離する。いずれも表面には自然面が認められる。2173～2175は紡錘車である。2175は横断面形が台形状を呈す。2176は軟玉製の勾玉である。完存品。



2147～2150：下層下部
2151～2153：下層上部
2154～2155：上層

第280図　Eベルト出土石器実測図



第281図　SX401・402出土石器実測図

2）第Ⅴ層出土石器（第283図、図版120）

2177は打製石鏃である。凸基有茎式で、茎部が欠損する。素材面が残置する。2178～2180は石庖丁である。いずれも結晶片岩製。2178は若干欠損がみられるが、おおむね遺存は良好である。弧背弧刃形を呈し、丁寧な研磨が全面にわたる。孔は上端の中央よりにひとつあり、これは両面穿孔による。刃部中央から右にかけて光沢が認められ、コーン・グロスが付着していることを示している。2179は左半部を大きく欠損する。2180は長方形を呈し、側部は丸みを有し、この下端には抉りが認められる。欠損部には孔が認められ、両面からおこなわれている。2181は用途不明石製品である。2182は砥石である。裏面の一部は欠損する。機能面として片面を利用しており、中央は磨滅が著しく、斜位の細線条痕が観察される。2183は砥石で、完存品。2184～2186は大陸系磨製石器の未製品片である。いずれも大きく欠損する。結晶片岩製。2187は石器素材である。右半部を欠損する。平面隅丸長方形を呈し、横断面扁平な長方形を呈す。欠損部以外には自然面が残置する。2188・2189は大陸系磨製石器片である。

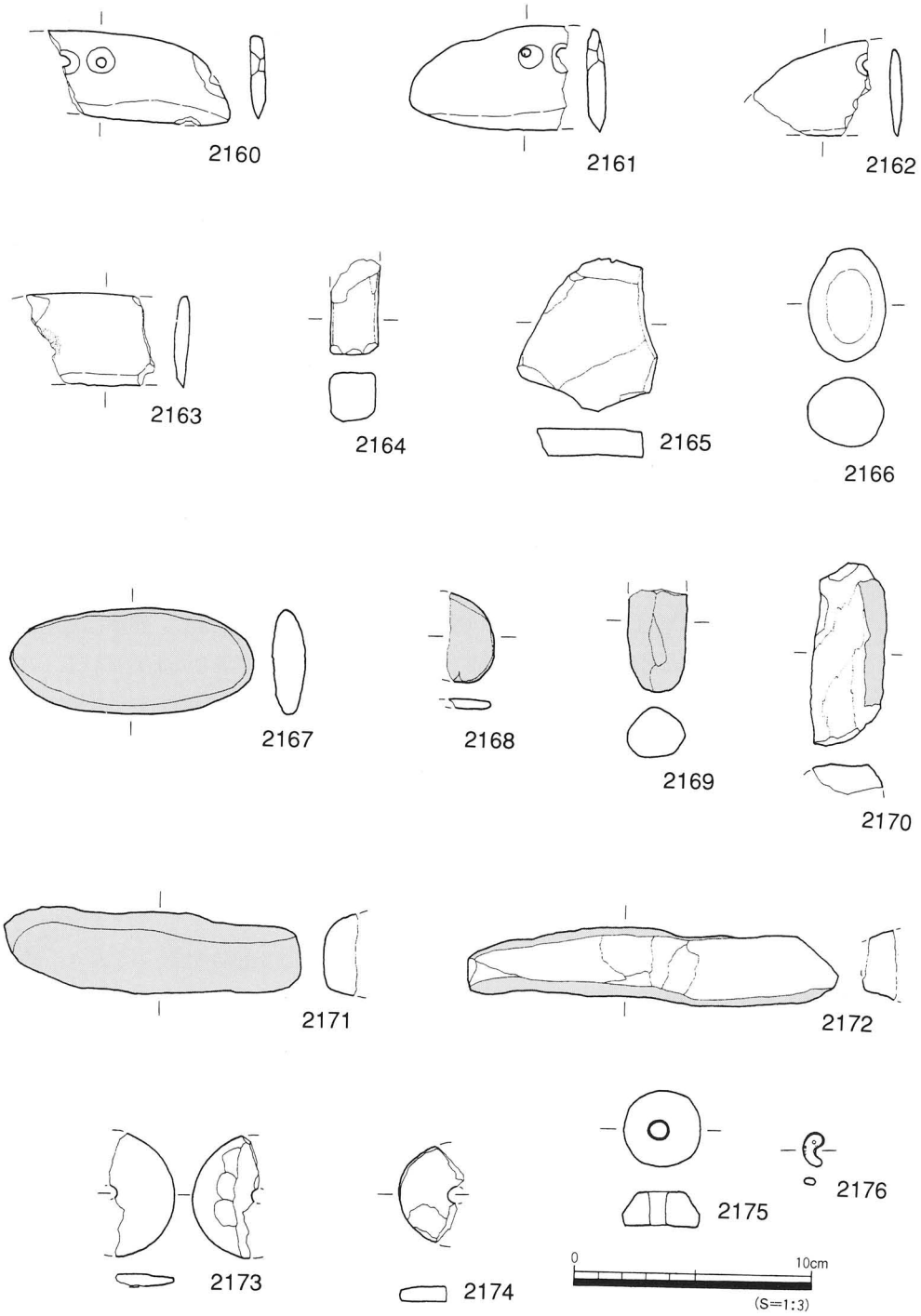
3）第Ⅶ層出土石器（第284図、図版121）

2190は板状の石器素材である。サヌカイト製。両面の一部に自然面が残置しており、礫状の素材の両面を大きく剝離した段階のものである。

(4)　地点不明出土石器（第285図、図版122）

本調査においてはトレンチや表採資料など出土地点や出土層位が不明な石器がある。

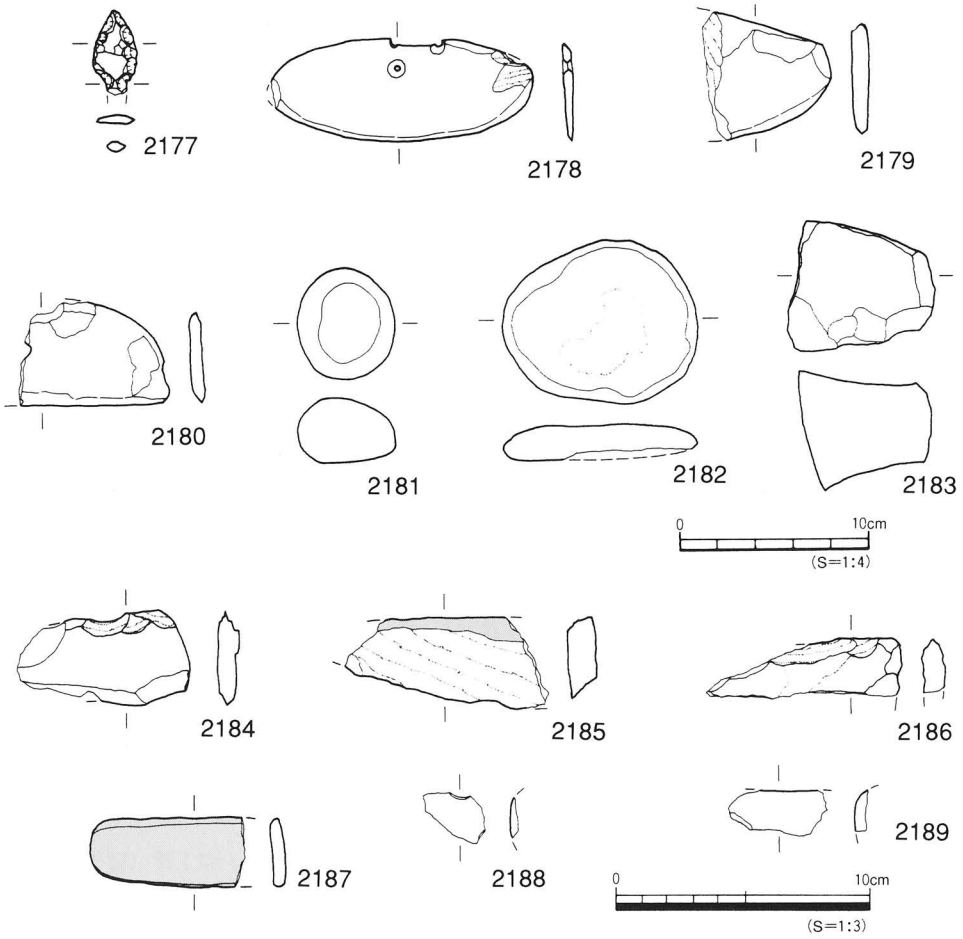
2191・2192はスクレイパーである。2191はサヌカイト製、2192は赤色チャート製である。いずれも完存品。横長剝片を素材とし、弧状の刃部は両面細部調整により作出する。2193～2195は石庖丁、2196は石庖丁未製品である。2193は弧背弧刃形である。刃背の接点は尖らず、丸くなって平面楕円形を呈すものと考えられる。下半の研磨は丁寧におこなわれる。二孔みられ、右孔は両面穿孔により、左孔は未貫通である。



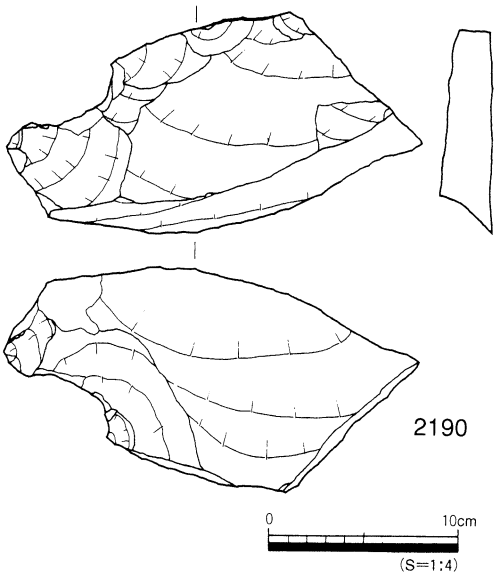
第282図　第Ⅳ層出土石器実測図

2194は長方形で、両側部に研磨によって仕上げられた抉りがみられる。完存品。背部には打裂段階の調整痕が認められる。2195は長方形である。左半部を欠損する。右側面は面取りされる。器面の研磨は丁寧で、刃部には弱い鎬がみられる。2196は打裂段階で欠損し、廃棄されたものである。表面には大きく剝離面がみられ、裏面には自然面が残置しており、本資料は礫を素材とした石庖丁の未製品である。弧背直刃形を指向している。2197は花崗岩製の台石である。左半部を欠損する。中央部は、使用によりわずかにくぼんでいる。2198は砥石である。機能面は片面中央部であり、横断面形は緩やかなU字形を呈す。

2199～2202は石器素材である。結晶片岩製。2199・2200は棒状の礫を素材とする。2201は表面には自然面が大きく残置し、裏面は剝離面である。粗割階段で廃棄されたものであろうか。2203は硬玉製の勾玉である。完存品。



第283図　第Ⅴ層出土石器実測図



第284図　第Ⅶ層出土石器実測図

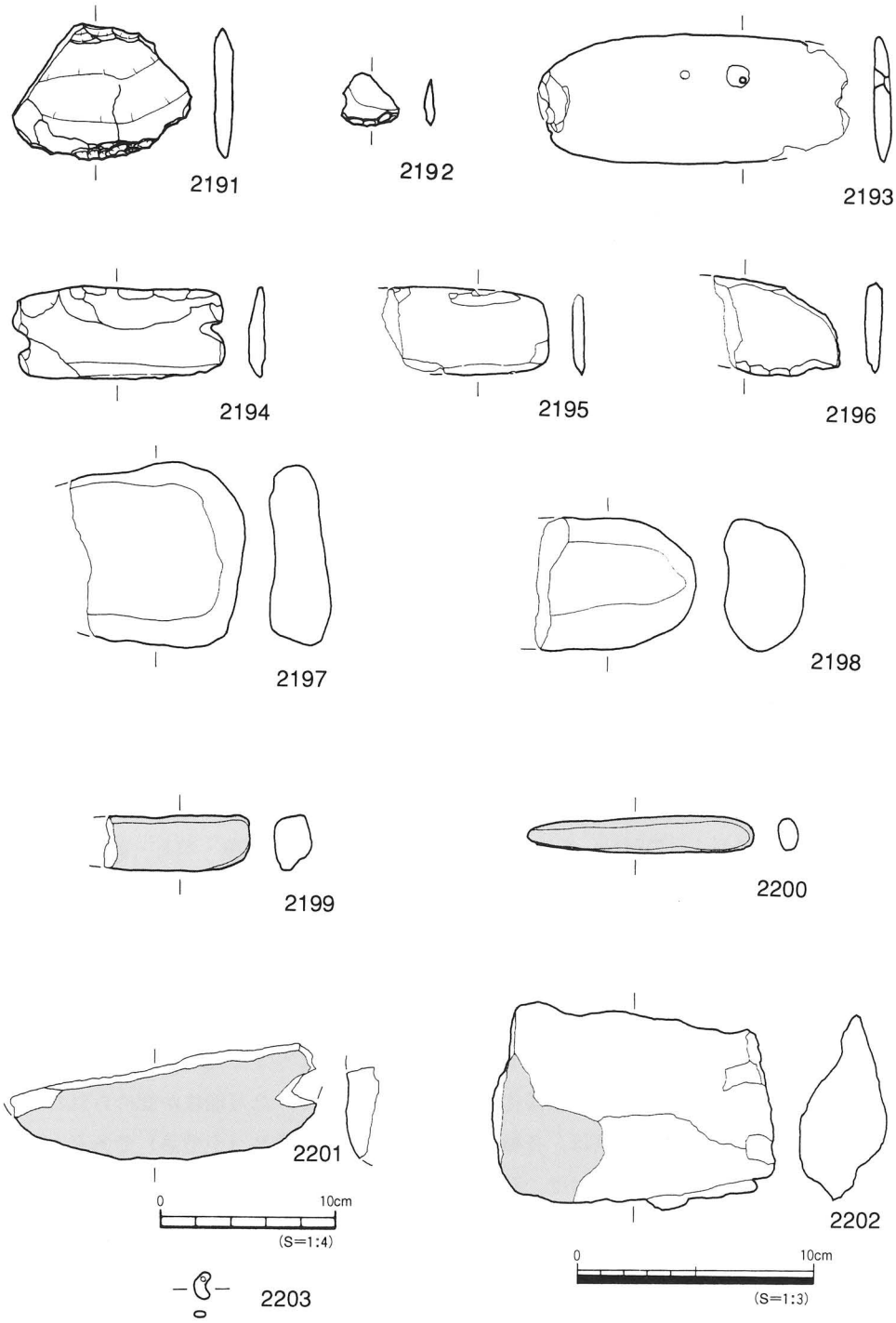
(5)　まとめ

本調査により多種多量の石製品資料が得られた。これらの資料は、遺構出土と包含層出土に大別される。石製品が出土した主要遺構は、自然流路・住居址・土坑・溝等が挙げられ、このうち自然流路から最も多くの資料が得られている。一方、包含層は、Ⅳ層～Ⅶ層である。Ⅶ層出土の石器素材（サヌカイト製）は、弥生時代以前に時期比定される可能性が高いものと判断される。本調査区の東に隣接する文京遺跡8・9・11次調査では、このⅦ層以下の土層から縄文時代後・晩期の遺物ならびに遺構が安定的に認められており、石器素材が当該期に時期比定される可能性が高い。Ⅳ層～Ⅵ層出土資料は弥生時代後期～古墳時代後期の土器と共伴するものの、弥生土器の多くが後期に比定されており、石器もこの時期に比定される可能性があることを指摘しておきたい。なお、発掘調査終了後の遺物整理段階で、包含層出土資料のなかに出土地区・層位不明なものがあることが明らかとなった。資料の充実を図るためにこれらも併せて報告した次第である。

自然流路と住居址（ＳＢ17）から出土した石製品は、共伴遺物（土器）と出土層・地区がほぼ明確であるため、所属時期をある程度特定することが可能である。石製品は、自然流路出土が弥生中期後葉～後期末、竪穴式住居址ＳＢ17が弥生後期末に時期比定される。以下では、これらの資料を用いて器種構成の変遷を中心に若干の考察を試みる。

[弥生時代中期後葉]

該期資料には、ＳＲ1南半部下層出土品が挙げられる。器種は、石庖丁・加工斧（扁平片刃石斧か）・スクレイパー・砥石・石皿・台石で構成される。構成比は、石庖丁13.3%、加工斧6.6%、スクレイパー6.6%、砥石13.3%、台石20.0%、石皿6.6%、その他33.3%の数値を示している。



第285図　地点不明出土石器実測図

石庖丁は、弧背弧刃形態と直線刃形態（背部は不明）がある。前者は刃部と背部の接点が尖る、杏仁形であろう。加工斧は、大きく欠損するために詳細は不明であるが、大型の扁平片刃石斧であると考えておきたい。スクレイパーは、両面細部調整により若干内湾する刃部を有する平面不整形のものである。台石は、大型の厚手の礫を素材としたものである。受熱により一部黒化している。石材は、大陸系磨製石器に結晶片岩が、台石や石皿には花崗岩が多用される。スクレイパーには流紋岩質安山岩が採用されている。同石材製のスクレイパーは、所属時期の異なる資料ではあるが、弥生前期後半の斎院烏山遺跡に報告例がある（加島1994）。この石材は、大型の打製不定形刃器に採用される傾向が認められる。

[弥生時代後期前葉]

該期資料には、ＳＲ1上層出土品が挙げられる。器種は、石庖丁・有溝石錘・台石で構成される。有溝石錘がこの時期より初出するも、加工斧・スクレイパー・砥石・石皿は欠落する。構成比は、石庖丁22.2%、有溝石錘11.1%、台石11.1%、その他55.5%の数値を示す。対象資料数が少ないが、石庖丁が継続してやや多いことは指摘できよう。

石庖丁は弧背直刃形態と長方形態がある。弥生中期末葉でみられた丸い刃部をもつもの（弧背弧刃形態）から直線的な刃部をもつものへ形態変化している。長方形態の側部には研磨によって作出された抉りがみられる。有溝石錘は、棒状の形態に長・短軸に一条の紐掛け用の溝をもつ、軽量品（小型品）である。石材は、石庖丁と有溝石錘に結晶片岩が、台石に花崗岩が用いられており、中期末葉と同傾向を示す。

[弥生時代後期前葉～後期末]

該期の資料には、ＳＲ1北半部出土品が挙げられる。調査時の土層観察等では、明確に分離して取り上げることが困難であった。共伴土器を基準にして、これらの資料はやや時間幅があることを指摘しておく。器種は、石庖丁・伐採斧・加工斧・有溝石錘・叩石・砥石・石鏃・石錐で構成される。豊富な器種が確認されるものの、この現象が時期幅のある資料を用いたがための結果である可能性も残されており、資料評価には充分考慮すべきものである。

しかしながら、製品・未製品が出土した石庖丁が最も量的に安定して存在している点は評価すべきであろう。直線刃形態が多い点も指摘しておきたい。また、資料2092のように、体部の穿孔の外径値と内径値が近似することから金属性の錐によって穿孔された可能性が想定され、該期における道具（工具）の鉄器化がある程度進行していた可能性が認められた点は注目すべきことである。有溝石錘は、長軸に一条の溝をもつ軽量品（小型品）であり、後期前葉単純資料と同傾向である。石材は、石庖丁と石斧には結晶片岩が多用されている。

[弥生時代後期末]

該期資料は、ＳＸ1～3、ＳＸ5、ＳＲ2・3（Ｂ・Ｃ・Ｄ区）、ＳＲ2、ＳＢ17出土のものが挙げられる。器種は、石庖丁・伐採斧・加工斧・有溝石錘・石鏃・スクレイパー・砥石・台石・敲石・石杵で構成される。石杵が初出し、石庖丁・有溝石錘は引き続き存在する。構成比は、

石庖丁17.1%・伐採斧5.7%・加工斧5.7%・有溝石錘5.7%・石鏃8.5%・スクレイパー5.7%・砥石2.8%・台石8.5%・石杵2.8%・その他37.1%である。石庖丁が最も多く全時期を通じて安定した数値であることは、本器種が一貫して石器の主要器種のひとつであったことを示している。長方形態の紐掛けが、体部の穿孔から側部の抉りへ変化している点はすでに先学の指摘するところである。なお、該期における直背弧刃形態は既往の調査では認められておらず、資料2135の確認は大いに注目すべき点である。石庖丁の量に対して、伐採斧や加工斧の量は極めて少ない。この要因については多くの可能性が考えられるが、ここでは、工具の鉄器化の可能性を指摘しておく。石杵は、礫を素材とし、その下端を機能面として使用している。下端面の磨滅が著しく進行し赤色顔料（水銀朱）が本面の石の目に顕著に遺存（付着）していることは、本資料が長期にわたり使用されていたことを示している。

今次調査は、既往の調査で不明確であった弥生後期の集落における石器のあり方やそこから派生する当時の社会構造や地域性を考える上で多くの示唆を与えるものである。遺構出土資料は、おおむね共伴土器が確認されており、ある程度資料性の高いものといえる。その反面、多くの資料が得られたＳＲ2は「自然流路」と考えられ、その埋土はきめの細かい砂質土で、恒常的に流水があったと想定される。このことから本遺構出土資料が、純粋な意味での一括性の高いものと捉えがたい側面も残されており、この点は注意を要するものである。以下、ふたつの点について若干のまとめと課題を提示しておきたい。

ひとつめは、弥生石器の主要器種である石庖丁が各期で認められている点である。加えて、安定した量の石庖丁未製品が出土している点も確認されている。製品と未製品の共伴関係の確認は、当集落における本器種の製作と使用が恒常的におこなわれていたことを示唆している。用いられた石材が結晶片岩という松山平野南部を流れる砥部川で採取された可能性が高く、在地的な石材を素材としていたことが考えられる。今後の課題は、産出地（採取地）から集落への石材の移動（獲得）が直接的かあるいは間接的かといった点、その場合の石材のあり方（量や状態）を検討することであろう。しかしながら、僅かな資料しか持ち合わせていない現段階では言及することは差し控え、今後の課題として明示するにとどめておく。ふたつめは、赤色顔料付着の石杵が確認された点である。石杵は、特殊な形態の竪穴住居址から出土しており、遺構に伴って本資料が確認されたことは大いに評価すべき点である。松山平野における弥生時代の拠点集落のひとつである道後城北遺跡群から、終末段階に赤色顔料（水銀朱）に関連した石器の確認は、本地域の社会構造や当時の交流を考えていく上で新たな視点を与えるものである。今後、道後城北遺跡群はさらに注目すべき集落のひとつとして位置付けておく必要がある。

（加島）

〔6〕 金属製品

本調査において、遺構や包含層中から鉄製品や銅製品などの金属製品が出土している。遺構では、ＳＢ２より鉄鏃、ＳＢ10より刀子が出土しているほか、流路内からは板状鉄斧や鑿のほか鉄滓などが出土している。包含層では第Ⅳ層中から、鉄鏃やＵ字形鋤先、紡錘車などの鉄製品のほか、銅製品として、有茎鏃や金銅製の鈴が出土している。

整理期間の関係上、これら金属製品の処理は簡易的な処理にすぎない。よって本稿では平面形態や断面形態など、Ｘ線写真の結果にもとずき想定線で記述したものがある。

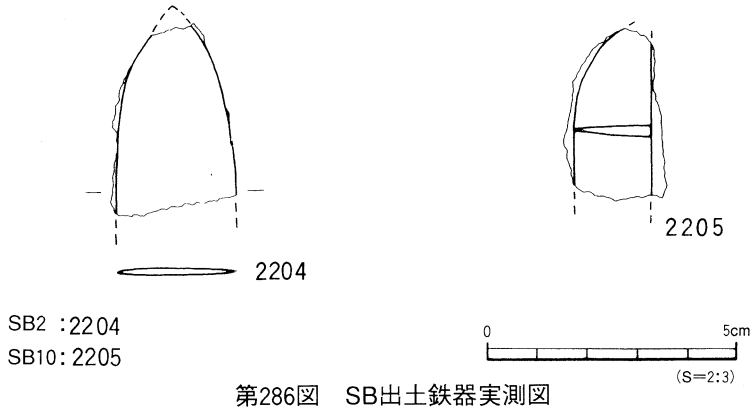
(1) 鉄製品

①竪穴式住居址出土の鉄製品（第286図、図版123）

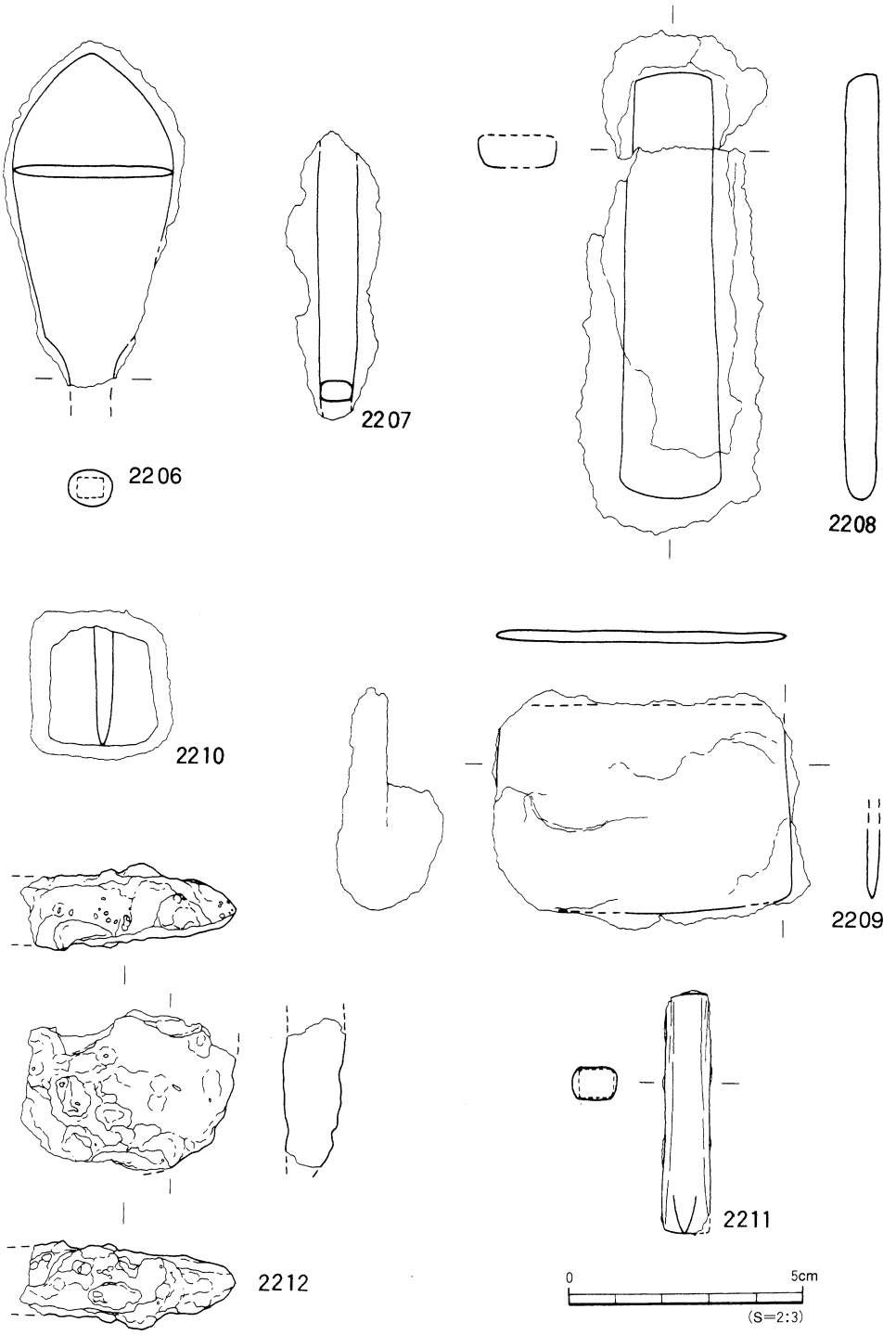
2204はＳＢ２（弥生時代後期末）出土の鉄鏃である。上下端部は欠損し、銹は表面に薄く付着している。2205はＳＢ10（古墳時代中期）出土の刀子である。切先を欠損している。割口から判断すると、実物よりかなり膨張しているものと考えられる。断面形は推定。

②自然流路出土の鉄製品（第287図、図版123）

2206・2207はＳＸ402の出土品である。2206は柳葉形有茎鏃である。茎部の断面形は丸みのある長方形を呈する。刃部の断面形態は銹ぶくれが激しいため推定。Ｘ線写真では関が明瞭に写し出されている。2207は断面形態は円形か方形か判断しかねる。棒状の鉄製品か？。2208・2209はＳＲ１下層出土品である。2208は器種は不明であるが、層状剝離がみられず、鋳造品の可能性もある。表面は小石や土をかみこんだ銹が厚く付着している。Ｘ線写真により断面端部は隅丸方形に近いものと判明した。2209は板状鉄斧である。銹ぶくれが著しく、断面形は推定。鋳造品の可能性もある。2210はＳＲ１下層上部出土の板状鉄斧である。銹が非常に厚く、Ｘ線写真により器種が判明した。外輪及び断面形態ともにＸ線写真をもとに作成している。2211・2212はＳＲ２・３Ｃ区出土品である。2211は鑿である。刃部を一部欠損するものの銹ぶくれも少なく原形をとどめている。上端は端部の可能性もある。2212は鉄滓（椀状滓）である。表面には光沢があり、表面や断面に比較的大きな気泡がみられる。一部に赤銹が付着する。



第286図　SB出土鉄器実測図



SX402：2206・2207
SR1下層：2208・2209
SR1下層上部(8区)：2210
SR2・3C区：2211・2212

第287図　SR出土鉄器実測図

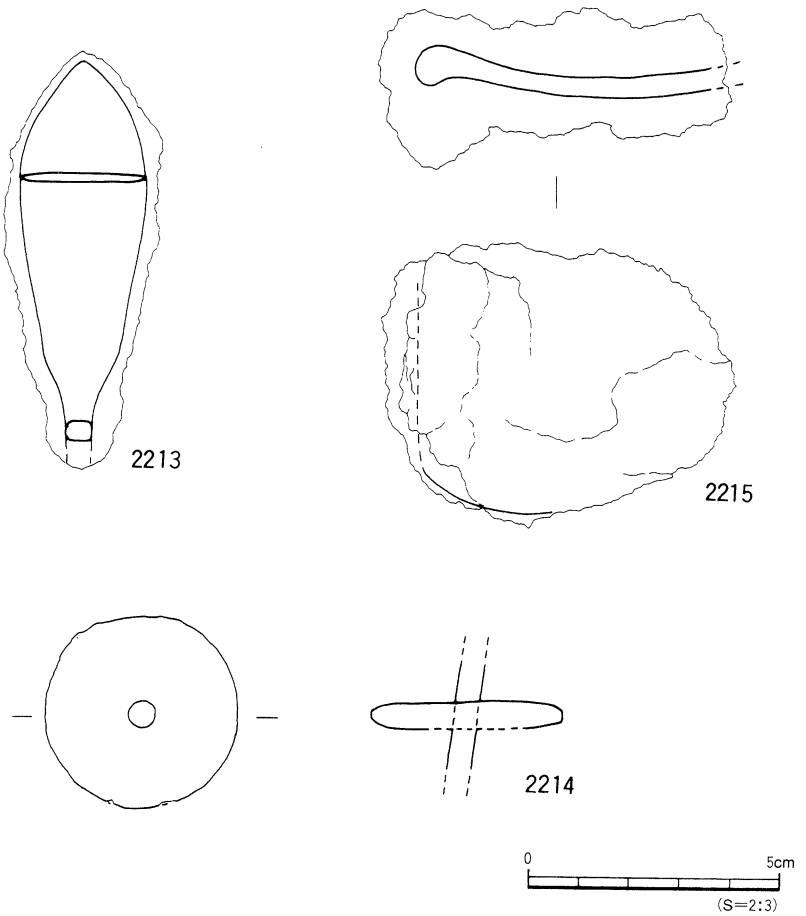
③第Ⅳ層出土の鉄製品（第288・289図、図版123・124）

2213は柳葉形の有茎鏃である。茎部の断面形態は長方形を呈する。刃部の断面形は推定。表面には堅くしまった銹が厚く付着する。2214は紡錘車である。径5㎜大の孔を穿つ。この孔には断面円形の鉄軸がやや斜め方向に挿入されている。2215は器種不明品。X線写真では不明瞭であるがふくらみの部分は折り曲げによるものではないと考えられる。

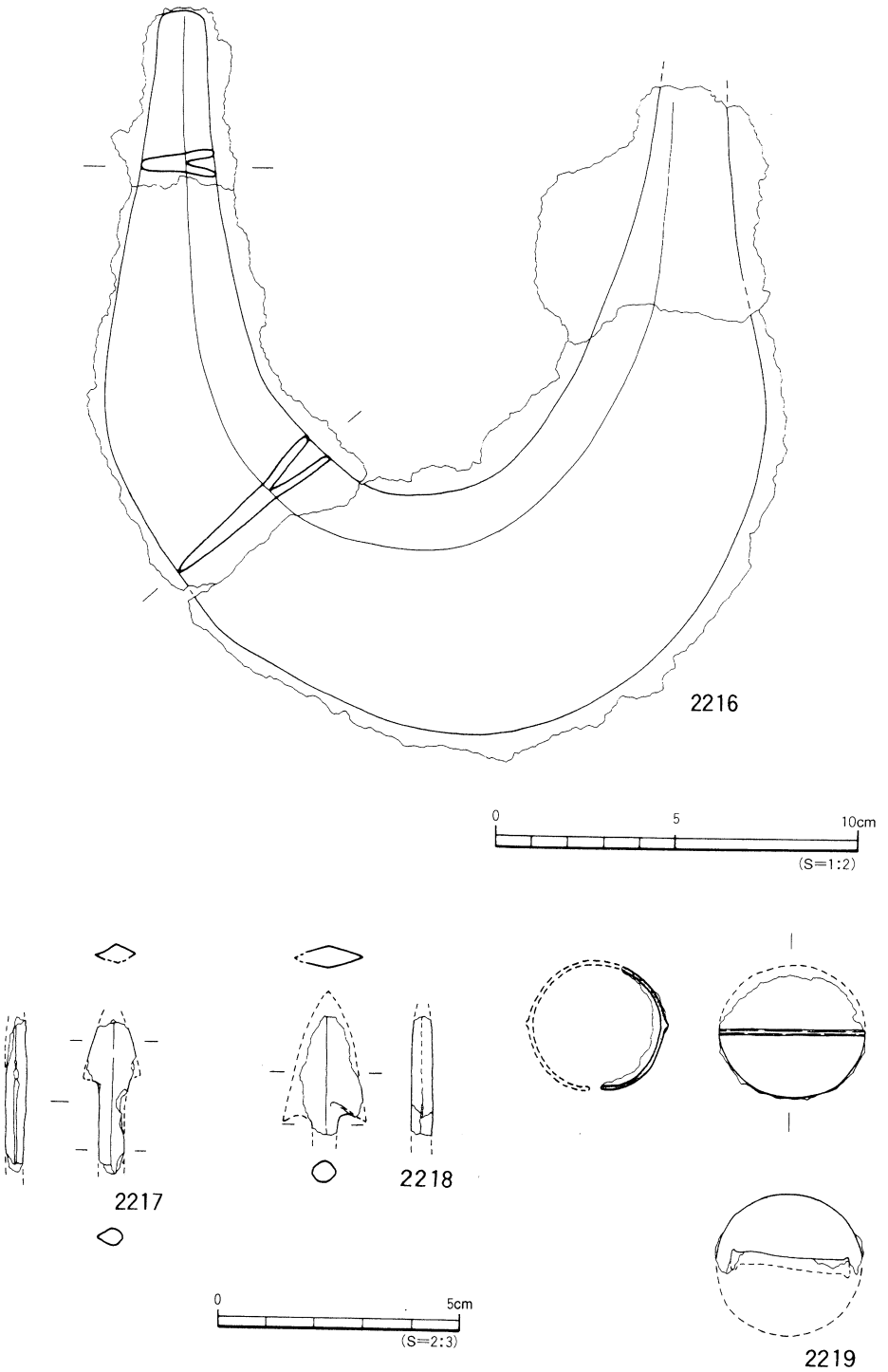
2216は「U」字形鋤先である。表面には土をかみこんだ銹がかなり付着している。数多くの使用により左側刃部がすりへっている。X線写真により鏨割により作成された可能性がある。

(2) 銅製品（第289図、図版124）

第Ⅳ層中から銅製品が3点出土してる。2217・2218は青銅製の有茎鏃である。2219は金銅製の鈴である。直径は約3㎝。銹がかなり厚く付着しており原形は不明である。断面形態は推定。1/2の残存である。



第288図　第Ⅳ層出土鉄器実測図



第289図　第Ⅳ層出土鉄器・青銅器実測図

〔7〕 動物遺存体（図版125）

本調査において、遺構や包含層中より各種の動物遺存体（骨）が出土している。遺構では古墳期の竪穴式住居址ＳＢ４、ＳＢ10、ＳＢ14内から出土がある。特にＳＢ４からは牛の下顎がほぼ完全な形で出土しているほか、ＳＢ10からは鹿の角の加工品が出土している。流路からは馬や猪の歯が数点ではあるが出土がみられる。そのほか第Ⅳ・Ⅴ層及びトレンチ内からも馬の歯が出土している。

本調査で出土した動物遺存体を以下の表にまとめた（表１）。

表１　動物遺存体観察表

No.	出土地点	種　別	部　　位	年　齢	時　期	備　　考	図版
1	ＳＢ４	牛	下顎(右)		古墳後期	同一個体	125
2	ＳＢ４	牛	下顎(左)				
3	ＳＢ４	牛	切歯				
4	ＳＢ４	牛	臼歯(上)	若年		未磨耗	125
5	ＳＢ４	鹿or猪	不明			エナメル質	
6	ＳＢ４	不明	不明				
7	ＳＢ10	日本鹿	角		古墳中期	鹿角加工品	125
8	ＳＢ14	鹿or猪	脊推骨		古墳後期	焼けている	
9	ＳＢ14	鹿？					
10	ＳＢ14	不明	不明				
11	ＳＫ19	馬	臼歯(下・右)	若年	古　代		125
12	ＳＸ２	猪	切歯(下)		弥生末～古墳初頭	ＳＲ2･3関連	
13	ＳＸ２	不明					
14	ＳＰ310	馬	下顎臼歯		弥生末～古墳初頭	ＳＲ2･3関連	125
15	ＳＰ310	馬	下顎臼歯(右)		弥生末～古墳初頭	ＳＲ2･3関連	
16	ＳＰ428	不明			古　墳		
17	第Ⅴ層	馬	臼歯		弥生～古墳	エナメル質	
18	第Ⅴ層	馬	臼歯			エナメル質	
19	第Ⅴ層	不明					
20	南北トレンチ	馬	臼歯		不　明		
21	南北トレンチ	馬	臼歯			萌出中・エナメル質	
22	南北トレンチ	不明					
23	第Ⅳ層	馬	下第３後臼歯	3～4才	古墳～古代	萌出中・エナメル質	

4．小　結

(1)　地形的変遷

本調査地の北東部には松山大学構内遺跡２次調査地がある。同遺跡からは縄文・弥生・古墳時代の遺物を含む包含層が検出されている。当地の第Ⅳ層は古墳～古代の遺物を含む包含層であり、２次調査地の第Ⅲ・Ⅳ層に対応するものと考えられる。当地を含め道後城北地区においては古墳～古代、特に古代の遺構・遺物の検出は稀少である。比較的多量の遺物を含む第Ⅳ層の検出は、道後城北地区における古代集落の存在を示唆するものであり、今後留意しておかねばならない土層である。

次に、本調査地北半部で検出された灰色砂礫層を取り上げる。本層は、土層観察により第Ⅶ層黄褐色粘質土の下に存在することを確認した。この層は道後城北地区で検出される旧石手川の砂礫層と同一のものと考えられる。検出状況から、本調査地内は東西方向に延びる土堤状の高まりがあるものと推測され、そのために北半部では第Ⅶ層が堆積しがたい地形であったことが充分に考えられるのである。

第Ⅴ・Ⅵ層（弥生～古墳時代の包含層）は南半部に検出がかぎられた。北半部に第Ⅴ・Ⅵ層が存在しないのは、地形が高いためか、あるいは第Ⅳ層堆積中に削平されたためと思われる。

一方、南半部は北半部からなだらかに南へ下がる地形となり、第Ⅴ・Ⅵ層がゆるやかに傾斜堆積をなしている。

調査地全域では、第Ⅳ層が堆積し、第Ⅳ層上面、言いかえると第Ⅲ層下面は水平化がすすんでおり、平坦な土地となっている。よって、第Ⅱ層堆積以前に当地が耕地整備された可能性が考えられる。

(2)　歴史的変遷

松山大学構内遺跡３次調査地には弥生時代中期から古代にかけて継続した集落が存在している。集落の時期は５時期に大別される。第Ⅰ期は弥生時代後期～古墳時代初頭、第Ⅱ期は古墳時代前期、第Ⅲ期は古墳時代中期、第Ⅳ期は古墳時代後期、第Ⅴ期は古代である。以下、第Ⅰ期から第Ⅴ期の集落構造について概要をまとめる。

１）第Ⅰ期：弥生時代後期～古墳時代初頭

本調査地内では竪穴式住居址は弥生時代後期になり出現する。遺構と遺物は調査地南半部に分布が集中する。まず、中期後葉に自然流路ＳＲ１が形成され、後期前葉で埋没する。その後、空白期があり、後期末～古墳時代初頭に再び流路が形成される。

ＳＲ１は調査地南東部で検出した流路で、完形品を含め多量の土器がまとまって出土している。ＳＲ２は調査地南東部から北西部に向けて流れる比較的緩やかな流れの流路である。

流路壁体付近からは良好な状態の土器が多数出土している。ＳＲ２とあまり時期を隔てることなくＳＲ３が出現することになる。ＳＲ３はＳＲ２と同じ方向に流れる急な流れの流路である。

これら３条の流路からは弥生時代中期後葉、後期前葉、後期末に比定される遺物が大量に出土している。この中には外来的要素をもつ土器や搬入品と考えられる土器も出土し、赤色顔料が付着する土器も幾つか出土している。

この流路に隣接して竪穴式住居址群が形成される。後期後半～末の住居址は８棟（ＳＢ１・２・５・８・９・12・15・17）が検出されている。

ＳＢ17は本調査中最も注目される住居址である。長方形の張り出し部を付設する円形もしくは多角形状プランの住居址で、弥生時代終末期の土器とともに石杵が１点出土している。特に石杵には赤色顔料が付着しており、くわえて住居址床面にも赤色顔料が検出されている。

２）第Ⅱ期：古墳時代前期

当該期の遺構には竪穴式住居址１棟（ＳＢ３）がある。１辺約４ｍの隅丸方形プランを呈する。主柱穴は３本（配置から４本柱であろう）を検出した。遺物は布留式の甕や須恵器を模倣した土師器の短頸壺などが出土している。前期の資料は宮前川遺跡・祝谷惣部遺跡・松山大学構内遺跡２次調査（ＳＢ10）に例がある。

３）第Ⅲ期：古墳時代中期

当該期の遺構には竪穴式住居址１棟（ＳＢ10）がある。調査区の南西隅に立地し、一辺約６ｍ前後の方形プランを呈する。前期の住居址ＳＢ３に較べやや規模が大型化する。主柱穴は３本（配置から４本であろう）を検出した。住居址中央には楕円形の炉を付設し、住居址の壁体に沿って小ピットが巡る。住居址の床面からは完形の小型丸底壺や高坏形土器など多くの土師器が出土し、住居址床面検出のピット内からも甕形土器・壺形土器・高坏形土器などが重なり合うようにして出土している。遺物の種類や出土状況から、住居址内で祭祀が行われたことを想定する。

４）第Ⅳ期：古墳時代後期

本調査地で確認された第Ⅳ期の集落は調査区北東部を除きほぼ全域に展開している。集落を構成する遺構は竪穴式住居址、掘立柱建物址、土坑、溝があるが、ここでは住居址を中心に説明することにする。なお住居址の時期選定は床面直上の遺物を基調とし、土師器よりも須恵器を判断基準においた。

当該期の竪穴式住居址は平面形態が方形プランを呈するものが多い。

後期前半：ＳＢ20・23がある。両者はＳＢ24と重複するが、平面では切り合い関係は不明

瞭であった。出土遺物により当該期の遺構であると判断した。ＳＢ20は一辺約４ｍのやや小型の住居址で、調査区外に続くため平面形は明らかではない。北壁沿いの埋土中に焼土が検出されたことからカマドが存在した可能性がある。

後期後半：本調査検出の竪穴式住居址の約５割を当該期のものが占める。後期前半では調査区北西部に分布が限られたものが、後期後半になると南側に分布が拡大する。平面形は方形～長方形プランを呈する。住居址の規模は、近現代の削平や遺構が調査区外へ続くものが多く全容は不明だが、方形プランをなすものは一辺約４ｍ前後の小型もの（ＳＢ７・19）と、一辺約６ｍをこえる大型のもの（ＳＢ14・16・23・24・25）がある（ＳＢ21・22は不明）。長方形プランを呈するものは１棟で、ＳＢ11がある。

さらに、住居址には一定の方向性が認められる。大型の住居址のなかでも特に規模の大きい住居址ＳＢ６・25は磁北にほぼ等しい方位をとり、それ以外はやや東に方位を偏している。

内部施設としてはＳＢ11よりカマドを検出している。カマドは造り付けによるもので、裾部の基礎は炭化物を含むシルト土壌で作られており、松山大学構内遺跡２次調査検出のＳＢ５と共通する。住居址の平面形及び規模等は、２次調査検出のＳＢ５と類似しており、古墳時代後期後半の松山平野における住居形態が知られるものとして貴重な資料といえる。

住居址のほか、当該期の遺構としては掘立柱建物址がある。４棟を検出しており、主軸方位で２分類される。主軸を磁北と等しくとるもの（掘立１・２・３）と、やや東に偏るもの（掘立４）である。特に掘立２・３は隣接するＳＢ25と時期を大きく異にしないことからほぼ同時期に併存していた可能性がある。

５）第Ⅴ期：古　代

古代に比定される遺構には溝や土坑がある。住居址は未検出である。特にＳＫ14は注目すべき土坑である。平面形は東西に長い長楕円形を呈し、西側部分は二段掘り構造になっている。土坑上層には炭化物層がほぼ全面に検出され、埋土中にも炭化物・焼土層がレンズ状にみられた。床面に焼けた痕跡は検出されなかったが土器の焼成坑か単なるゴミ捨て場か、その性格は不明である。今後の調査、研究で明らかにしていきたい。

(3)　竪穴式住居址の立地と形態

本調査地に住居址が出現するのは遅くとも弥生時代後期後半（Ⅰ期）で、ＳＢ１・２・５・８・９・12・15・17の一群である。住居址は調査地南半部に分布する。ＳＢ２が最も古く後期後半、ＳＢ１・８・９が後期末の前半、ＳＢ12・15・17は後期末の後半の住居址と考えている。

古墳時代になると前期（Ⅱ期）はＳＢ３が、中期（Ⅲ期）にはＳＢ10が調査地南西部に出現する。つづいて後期（Ⅳ期）になると、前半にはＳＢ20・23が調査地北西部に、後半には

調査地北東部を除くほぼ全域に分布する。古代では住居址は未検出である。

これらのことから本調査地内における竪穴式住居址は出現期が弥生時代後期後半であり、消失期は古墳時代後期後半つまりは、７世紀前半頃であるといえる。ただし、７世紀前半以降は、遺構が開発等により失われた可能性もあり、居住地として利用されなっかたとはいえないのである。

次に住居形態の変遷をみる。Ⅰ期は平面形態が円形と方形のものがあり、円形のものは径７ｍ前後のものと径５～６ｍのものとがあり、方形のものは一辺4.5ｍ前後である。Ⅱ期は隅丸方形で一辺４ｍ前後、Ⅲ期は方形で一辺５ｍ前後の規模である。Ⅳ期になると平面形態が方形～長方形になり、方形のものは一辺が７ｍを測るもの、一辺が６ｍ前後のもの、一辺が４ｍ前後の３種類がある。特に７ｍを越えるものは時期的にみて他のものより後出するものである。

住居の変遷は平面形態では円形から方形へと移行する傾向があり、規模では古墳時代前期は小型であり、中期になりやや大型化し、後期になると大型と小型のものが共存するようである。

さて、ここでは検数の多いⅠ期の竪穴式住居址について分析をおこなう。Ⅰ期の竪穴式住居址は平面形と規模から三分類できる。規模については直径６ｍを境に大型と小型に区分すると以下となる。

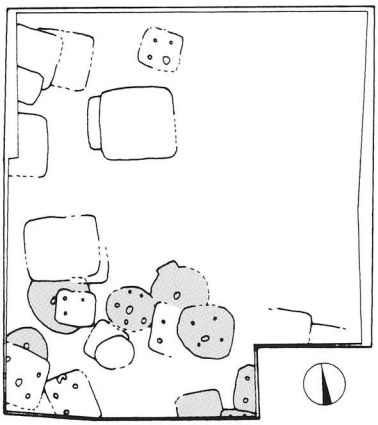
円形　大型　ＳＢ９・15・17（多角形気味のものを含む）
　　小型　ＳＢ８・12
方形　　ＳＢ１・２・５

なお、円形住居址群は調査地南半部の北側、方形住居址は南側にそれぞれ分布している。

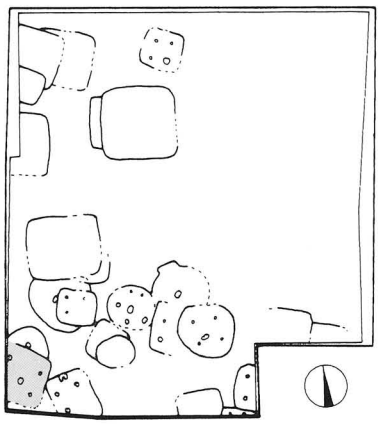
次に屋内施設をみる。円形の住居址群では、主柱穴はＳＢ８・９で５本（配置からおそらく６本であろう）を検出している。また円形の住居址はすべて住居址中央に楕円形の炉を付設している。このうちＳＢ15は主柱穴を４本検出しているが、平面形態等から主柱穴の据え替えによる改築が行われた可能性が考えられる。

一方、方形の住居址をみると、ＳＢ２・５は２本の主柱穴を検出しているが、主柱穴の配置から４本柱の可能性が高い。

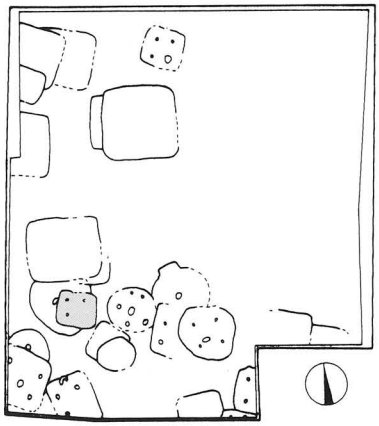
つづいて、松山平野内のⅠ期（後期後半）に該当する住居址の形態を概観する。東本遺跡（２・３次調査）、桑原高井遺跡、松山北高遺跡などに検出例がある。後期後半以降の円形住居址は後期前半の円形住居よりもやや規模が大きいものが存在する。また、小型の方形の住居址が出現し、弥生時代から古墳時代に移行していく過程で円形と方形の住居址が共存していた可能性が高い。



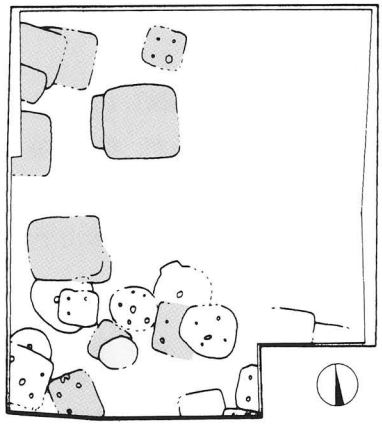
Ⅰ期　弥生時代後期



Ⅲ期　古墳時代中期



Ⅱ期　古墳時代前期



Ⅳ期　古墳時代後期

第290図　竪穴式住居址の変遷図(S＝1:800)

(4) 第Ⅴ層出土遺物

第Ⅴ層中からは口縁端部に刻み目を施す須恵器坏蓋が出土している。口縁端部を工具により面取りしその上から、刷毛状の工具で押圧されている。意図的なものかは、現在の時点ではわからない。形態は天井部と口縁部を分ける突出した稜はなく凹線により表現されているものである。松山平野においては道後今市遺跡などに類例があり、形態的にははぼ同時期のものである。この須恵器が持つ意義や目的などは不明だが、現在のところ、6世紀の坏蓋にしかみられない点で興味深い資料である。

(5) 第Ⅳ層出土の土師器

第Ⅴ・Ⅳ層中からは古墳時代～古代（8世紀）までの須恵器・土師器が比較的多く出土している。ここでは第Ⅳ層出土物の整理をする。第Ⅳ層出土物では、土師器に較べて須恵器の占める割合が非常に高いのである。このうち、土師器は畿内産と思われる破片が2点（102, 103）出土している。102は坏C（飛鳥Ⅱ）、103は坏A（平城Ⅲ）である。松山平野の畿内産土師器の出土は5例と少なく、それらの時期は飛鳥Ⅲから平城Ⅰに比定されている（飛鳥Ⅲ：久米官衛遺跡群、飛鳥Ⅳ：城の向古墳群・御産所権現山遺跡、平城Ⅰ：久米窪田Ⅱ遺跡・福音寺遺跡）。

また、畿内産土師器を模倣して制作されたと思われる土師器が少量出土している。形態的には坏Aや皿Aに類似しているが、暗文を施さないものである。

今回出土した2点の畿内産土師器は、畿内から松山平野への搬入時期が知られる資料であり、7・8世紀における畿内と松山平野との関係を考えるうえで好資料となるものである。

〔参考文献〕

西尾　幸則　1986　『宮前川遺跡調査報告書』松山市教育委員会

重松　佳久　1989　「祝谷惣部遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

森　　光晴　1980　「東本Ⅱ・Ⅲ、桑原高井遺跡」『松山市文化財調査報告書14』松山市教育委員会

宮本　一夫　1990　「文京遺跡の地形復元」『文京遺跡8・9・11次調査』愛媛大学法文学部考古学研究室、愛媛大学埋蔵文化財調査室

阪本　安光　1981　『愛媛県立松山北高等学校遺跡』愛媛県教育委員会

岡田　敏彦　1985　『道後今市遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

松　山　市　1980　『松山市史料集　考古編Ⅰ』

松　山　市　1987　『松山市史料集　考古編Ⅱ』

Ⅳ-1　植物珪酸体分析(1)

株式会社　古環境研究所

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オバール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体（プラント・オバール）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されてる（杉山，1987）。

ここでは、植物珪酸体分析を用いて、イネをはじめとするイネ科栽培植物の検討及び遺跡周辺の古植生・古環境の推定を試みた。

2．試料

調査対象は、ＳＢ17張出部、ＳＢ17内炉、ＳＢ４の各遺構の埋土である。試料は、ＳＢ17張出部で11点、ＳＢ17内炉で17点、ＳＢ４で13点の計41点が採取された。試料採取箇所を各地点のセクション図に示す（第291～293図）。

3．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オバール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料の絶乾（105℃・24時間）

2）試料約１ｇを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm、約0.02ｇ）

　※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

3）電気炉灰化法による脱有機物処理

4）超音波による分散（300W・42ＫＨｚ・10分間）

5）沈底法による微粒子（20μm以下）削去・乾燥

6）封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

7）検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試量１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10—5ｇ）をかけて、単位面積で層厚１㎝あたりの植物堆生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエヨキ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値は2.94（種実重は1.03)、8.40、6.31、1.24である。たけ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48、クマザサ属は0.75である。

４．分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表２～７に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す（表８)。

〔イネ科〕

機動細胞由来：イネ、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など)、マコモ、キビ族型、ウシクサ族型、ウシクサ族型（大型)、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型（おもにクマザサ属)、メダケ節型（メダケ属メダケ節ネザサ節)、クマザサ属型（おもにクマザサ属)、メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、タケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、タケ亜科（未分類等)

穎の表皮細胞由来：イネ

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属)、クスノキ科（バリバリノキ？)、その他

５．考察

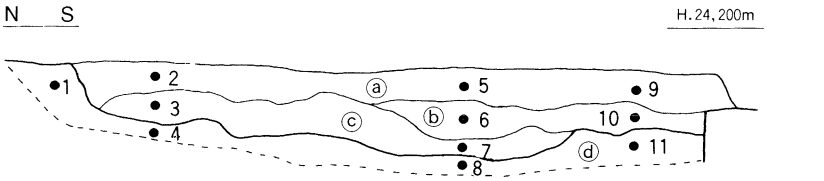
(1) イネ科栽培植物の検討

分析の結果、各遺跡のほとんどの試料からイネの植物珪酸体が検出された。以下に、各遺跡ごとにイネの検出状況を述べる。

１）ＳＢ17張出部（第291図、表５）

竪穴式住居址（ＳＢ17）の埋土のａ層（試料２、５、９）ｄ層（１、４、８、11）について分析を行った。

その結果、ｄ層の一部（試料１、11）を除くすべての試料からイネが検出された。このうち、埋土のａ層とｂ層では密度が1,500～5,200個／ｇ（平均3,100個／ｇ）と比較的高い値である。また、張出部のｃ層では1,400～1,500個／ｇであり、地山とされるｄ層でも1,500～3,600個／ｇが検出された。なお、試料９と試料10ではイネの籾殻（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体も検出された。



ⓐ層 暗褐色土(黄色土ブロックを多量に含む・炭化物を含む)〔SB17埋土①〕
ⓑ層 暗褐色土(黄色土ブロックを少量含む・炭化物を含む)〔SB17埋土②〕
ⓒ層 暗褐色土十黄色土(炭化物を含まない)〔張出部埋土〕
ⓓ層 黄褐色土〔第Ⅶ層〕

0　50cm
(S=1:20)

第291図　SB17張出部土壌サンプル採取地点位置図

2）ＳＢ17内炉（第292図、表６）

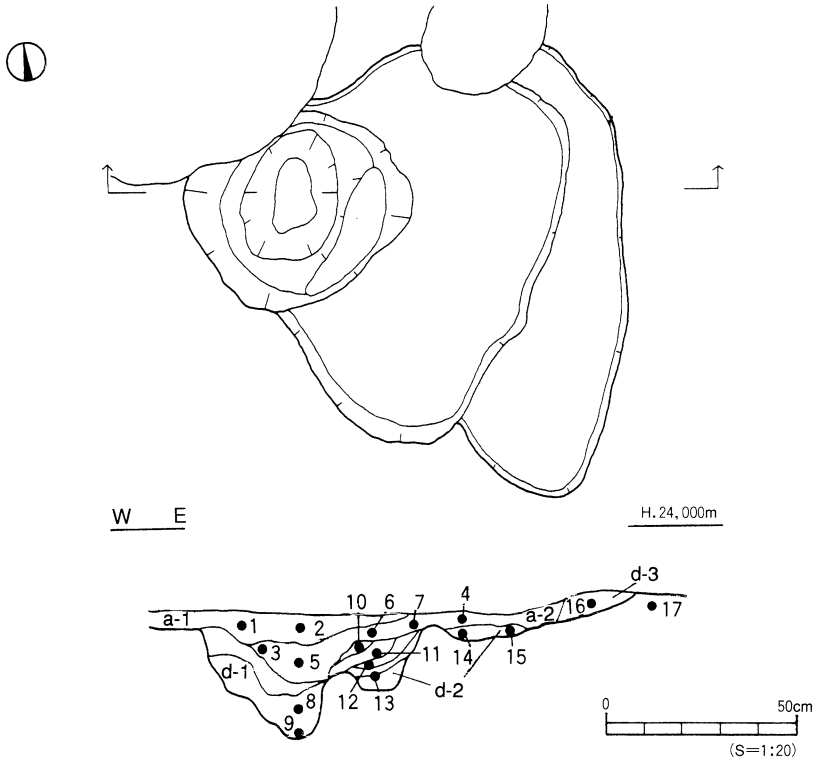
炉の埋土（試料１～16）および地山層（試料17）について分析を行った。その結果、これらのすべての試料からイネが検出された。密度は埋土上部のａ－１層とａ－２層では2,100～4,900個／ｇ（平均3,700個／ｇ）と比較的高い値である。また、埋土下部のｄ－１層～３層では700～3,600個／ｇ（平均2,200個／ｇ）であり、地山（試料17）でも2,200個／ｇが検出された。なお、試料１～３および試料９ではイネの籾殻（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体も検出された。

3）ＳＢ４（第293図、表７）

No.１～No.５の各地点で採取された埋土（試料１～13）について分析を行った。その結果、試料６と試料８を除く各試料からイネが検出された。このうち、No.１地点の埋土中位（試料２）と下部（試料３）では密度が13,800～27,700個／ｇ、No.２地点の埋土上部（試料４）やＮｏ.５地点の埋土上部（試料12）でも14,000個／ｇ前後と非常に高い値である。また、その他の試料でもおよそ5,000個／ｇ前後と比較的高い値である。なお、試料２～５、10、11、13ではイネの籾殻（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体も検出された。

以上のように、各遺構の埋土からはイネが比較的多量に検出された。このことから、当時は遺構周辺で稲作が行われており、そこから遺構内に何らかの形でイネの植物珪酸体が混入したものと推定される。また、地山とされる試料からもイネが検出されていることから、遺構の構築以前に各遺構付近で稲作が行われていた可能性も考えれる。なお、ＳＢ４の遺構中央部付近ではイネが特に多量に検出されたことから、何らかの形で稲藁が置かれていた可能性も考えられる。

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族（ムギ類が含まれる）キビ族（ヒエやアワ、キビなどが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。



第292図　SB17内炉土壌サンプル採取地点位置図

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

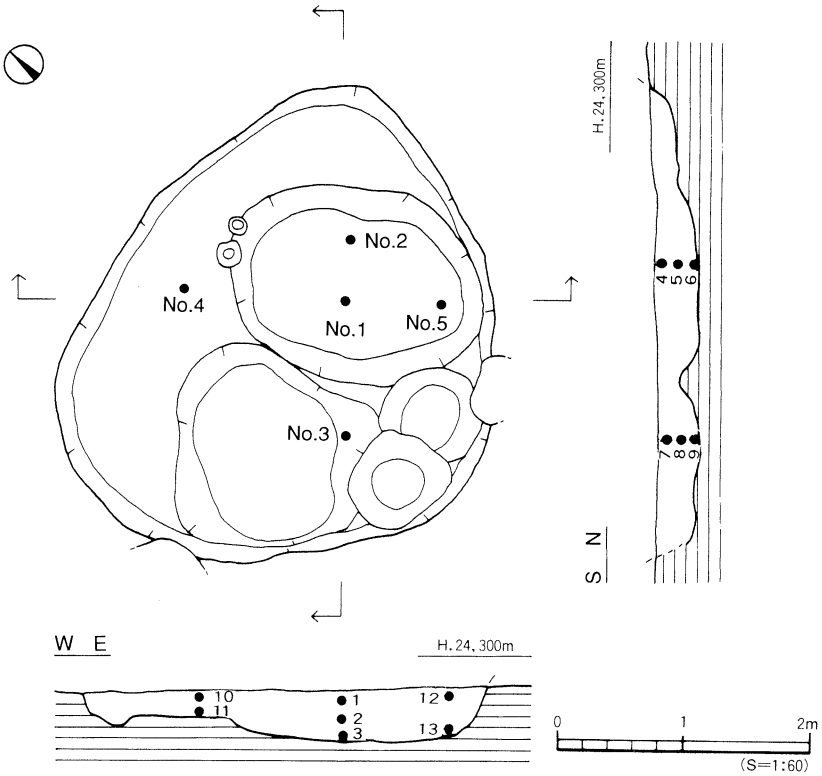
(2) 植物珪酸体分析からみた植生・環境

上記以外の分類群では、全体的にネザサ節型やウシクサ族型が比較的多く検出され、ウシクサ族（ススキ属など）なども検出された。また、イネ科以外にもブナ科（シイ属）やクスノキ科（バリバリノキ？）などの樹木（照葉樹）に由来する植物珪酸体も検出された。おもな分類群の推定生産量によると、全体的にイネが卓越しており、ネザサ節型やウシクサ族（ススキ族など）は比較的少量であることが分かる。

これらのことから、当時の遺構周辺ではおもに稲作が行われていたものと考えられ、ネザサ節やススキ属などが生育する比較的乾燥したところもみられたものと推定される。また、遺跡周辺ではブナ科（シイ属）やクスノキ科などの照葉樹もある程度生育していたものと推定される。

6、まとめ

ＳＢ17張出部、ＳＢ17内炉、ＳＢ４の各遺構の埋土について植物珪酸体分析を行った。



第293図　SB4土壌サンプル採取地点位置図

その結果、ほとんどの試料からイネが比較的多量に検出された。このことから、当時の遺構周辺では稲作が行われており、そこから遺構内に何らかの形でイネの植物珪酸体が混入したものと推定される。また、地山とされる試料からもイネが検出されていることから、遺構の構築以前に稲作が行われていた可能性も考えられる。なお、ＳＢ４の遺構中央部付近ではイネが特に検出されたことから、何らかの形で稲藁が置かれていた可能性も考えられる。

参考文献

杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第２号：ｐ.27—37

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—．考古学と自然科学，9：ｐ.15—29.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（３）—福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O. sativa L.）生産総量の推定—．考古学と自然科学，12：ｐ.29—41.

近藤錬三・ピアスン友子（1981）樹木葉のケイ酸体に関する研究（第２報）—双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について—．帯広畜産大学研究報，12：ｐ.217—229.

表 2　松山大学構内遺跡 3 次調査の植物珪酸体分析結果(1)
検出密度(単体：×100個/ g)

分類群＼試料	SB17張出部										
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
イネ科											
イネ		52	14	15	20	22	15	36	15	46	
イネ籾殻(穎の表皮細胞)									7	20	
ヨシ属			7				30				
ウシクサ族(ススキ属など)						37	7	15	7	33	
マコモ属											
キビ族型											
ウシクサ族型	29	132	64	51	66	104	60	51	73	146	
ウシクサ族型(大型)					7						
タケ亜科											
ネザサ節型	87	110	64	51	20	126	156	51	147	86	60
クマザサ属型		15			7	7	7		15	7	8
メダケ節型	7	7	7	15	7		7		7	26	
未分類等	58	103	42	51	66	52	119	80	132	79	38
その他のイネ科											
表皮毛起源	7	7	35	22	46	30	7	22	29	46	
棒状珪酸体	87	523	233	243	454	341	260	350	463	457	15
茎部起源								7			
未分類等	240	589	438	412	480	527	499	518	587	587	75
樹木起源											
ブナ科(シイ属)											
クスノキ科(バリバリノキ？)	29	81	49	15	53	7	15	29	44	20	15
その他			7	7	7	7			15	7	15
植物珪酸体総数	545	1619	961	882	1230	1261	1183	1159	1542	1576	225

おもな分類群の推定生産量(単位：kg/m²・cm)

イネ		1.51	0.42	0.43	0.43	0.65	0.44	1.07	0.43	1.36	
(イネ籾)		0.53	0.15	015	0.20	0.23	0.15	0.38	0.15	0.48	
ヨシ属			0.45				1.88				
ウシクサ族(ススキ属など)						0.46	0.09	0.18	0.09	0.41	
ネザサ質型	0.42	0.53	0.31	0.25	0.09	0.61	0.75	0.24	0.70	0.41	0.29
クマザサ属型	0.05	0.11			0.05	0.06	0.06		0.11	0.05	0.06

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

表 3　松山大学構内遺跡 3 次調査の植物珪酸体分析結果(2)
検出密度(単体：×100個/ｇ)

分類群＼試料	SB17内炉																
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
イネ科																	
イネ	44	29	37	49	43	37	21	23	23	15	36	27	19	30	20	7	22
イネ籾殻(穎の表皮細胞)	15	36	15						8								
ヨシ属			7		11							7					
ウシクサ族(ススキ属など)	7	15	37	11	48	52			23	23	7		45	46		15	
マコモ属																	
キビ族型	7			5	5	22				8							
ウシクサ族型	131	102	88	108	124	134	21	76	69	92	65	48	84	198	20	15	45
ウシクサ族型(大型)																	
タケ亜科																	
ネザサ節型	160	87	15	54	70	37	112	76	77	8	87	82	110	53	26	104	126
クマザサ属型					16		7	8	15								7
メダケ節型	7	15	7	11	11		7					14	6				7
未分類等	146	65	110	75	97	74	98	76	131	53	109	123	45	69	66	82	134
その他のイネ科																	
表皮毛起源	87	51	37	22	54	22	28	8	8	8	22	14	19		7		37
棒状珪酸体	736	669	697	631	849	854	485	305	330	641	450	417	441	693	276	186	357
茎部起源	7																
未分類等	721	654	616	663	672	772	492	435	277	503	530	444	539	647	414	402	468
樹木起源																	
ブナ科(シイ属)			7	5						8	7	7					7
クスノキ科(バリバリノキ？)	29	7	15	5	5		21	15	23	38	29	7	6	15	26	22	30
その他			7	11							7	7	6	8	7		15
植物珪酸体総数	2097	1730	1695	1650	2004	2004	1292	1023	983	1396	1349	1196	1324	1759	862	863	1257

おもな分類群の推定生産量(単位：kg/m²・cm)

イネ	1.28	0.85	1.08	1.43	1.26	1.09	0.62	0.67	0.68	0.45	1.07	0.80	0.57	0.90	0.58	0.22	0.66
(イネ籾)	0.45	0.30	0.38	0.50	0.44	0.38	0.22	0.24	0.24	0.16	0.37	0.28	0.20	0.31	0.20	0.08	0.23
ヨシ属			0.46		0.68							0.43					
ウシクサ族(ススキ属など)	0.09	0.18	0.45	0.13	0.60	0.64			0.29	0.28	0.09		0.56	0.57		0.18	
ネザサ質型	0.77	0.42	0.07	0.26	0.34	0.18	0.54	0.37	0.37	0.04	0.42	0.39	0.53	0.26	0.13	0.50	0.61
クマザサ属型					0.12		0.05	0.06	0.12								0.06

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

表 4　松山大学構内遺跡 3 次調査の植物珪酸体分析結果(3)
検出密度(単体：×100個/ g)

分類群＼試料	SB4												
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
イネ科													
イネ	89	277	138	149	49		45		77	83	31	138	23
イネ籾殻(穎の表皮細胞)		7	7	7	8					8	15		8
ヨシ属				7			7		8	8			
ウシクサ族(ススキ属など)	37	22	15	42	23		7		62	15	23	23	
マコモ属									8				
キビ族型		7											
ウシクサ族型	60	165	160	205	53		149	8	301	286	139	291	153
ウシクサ族型(大型)			7										
タケ亜科													
ネザサ節型	82	67	73	50	38	8	67	31	62	105	85	84	69
クマザサ属型					8								
メダケ節型		15											8
未分類等	67	142	138	99	61	8	134	23	162	128	93	115	84
その他のイネ科													
表皮毛起源	30	30	58	28	8		15		39	30	8	23	8
棒状珪酸体	544	928	682	687	328	15	477	69	818	737	510	681	543
茎部起源										8			
未分類等	619	734	653	616	412	15	597	38	825	752	611	719	627
樹木起源													
ブナ科(シイ属)		7		7	8			15	15				8
クスノキ科(バリバリノキ？)	15	7	22	14	38	8	7	31	8	15	54	8	23
その他			7			8			15	38		15	
植物珪酸体総数	1543	2410	1959	1912	1030	60	1506	214	2399	2212	1570	2097	1553

おもな分類群の推定生産量(単位：kg/m²・cm)

イネ	2.63	8.14	4.05	4.37	1.35		1.32		2.27	2.43	0.91	4.05	0.67
(イネ籾)	0.92	2.85	1.42	1.53	0.47		0.46		0.79	0.85	0.32	1.42	0.24
ヨシ属				0.45			0.47		0.49	0.47			
ウシクサ族(ススキ属など)	0.46	0.28	0.18	0.53	0.28		0.09		0.77	0.19	0.29	0.28	
ネザサ質型	00.39	0.32	0.35	0.24	0.18	0.04	0.32	0.15	0.30	0.51	0.41	0.40	0.33
クマザサ属型					0.06								

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

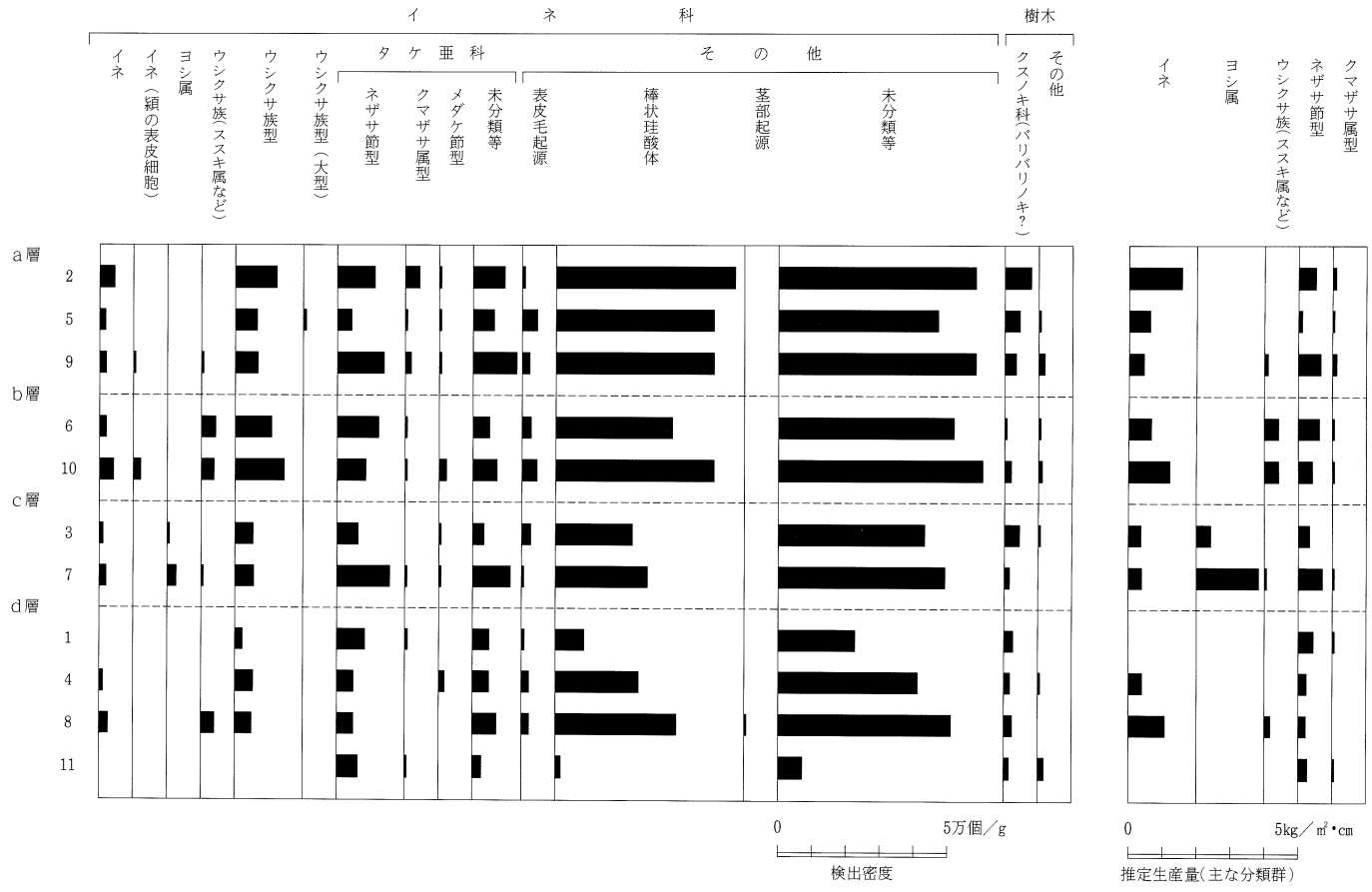


表 5　松山大学構内遺跡 3 次調査　ＳＢ17張出部の植物珪酸体分析結果

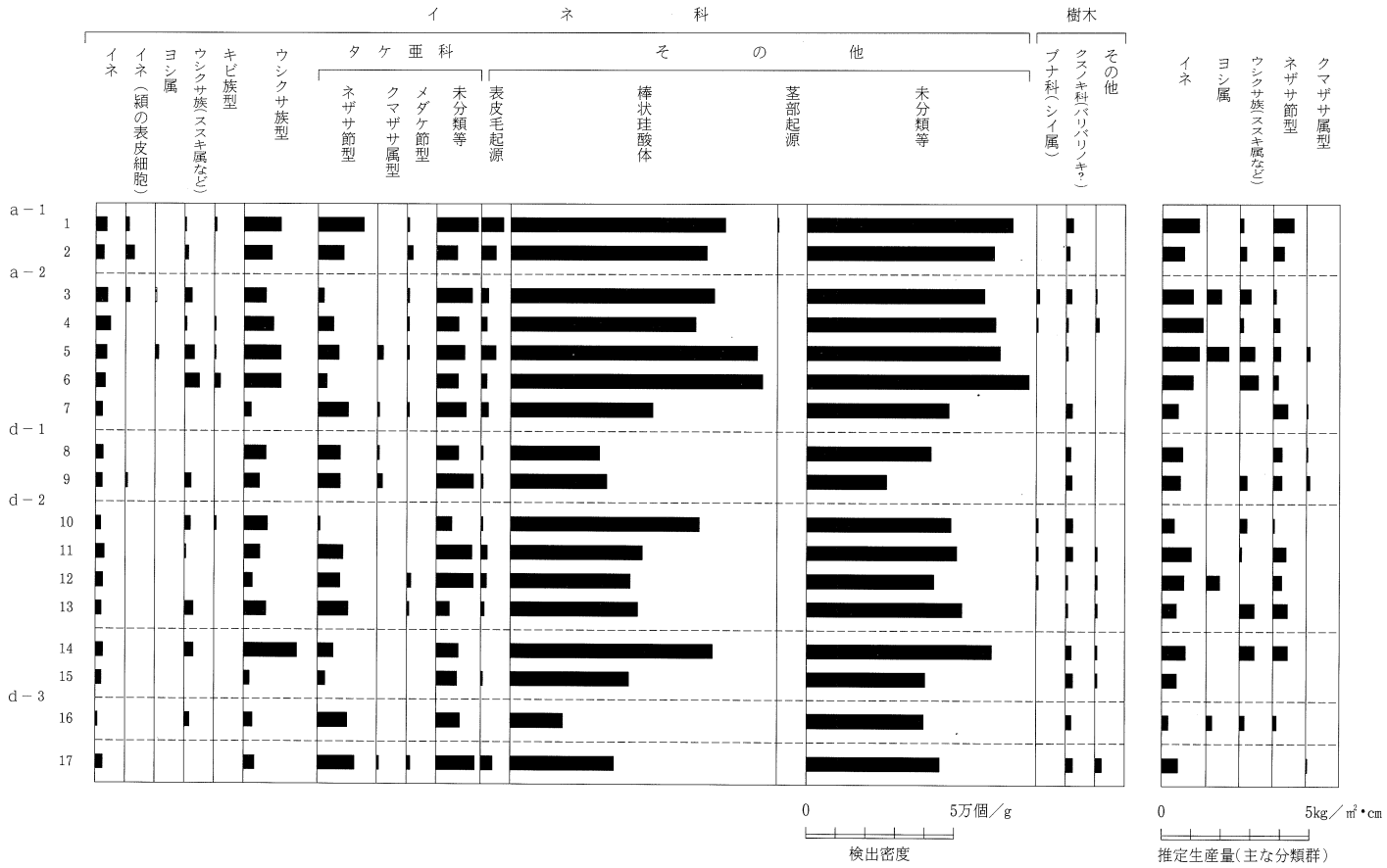


表6　松山大学構内遺跡3次調査　ＳＢ17内炉の植物珪酸体分析結果

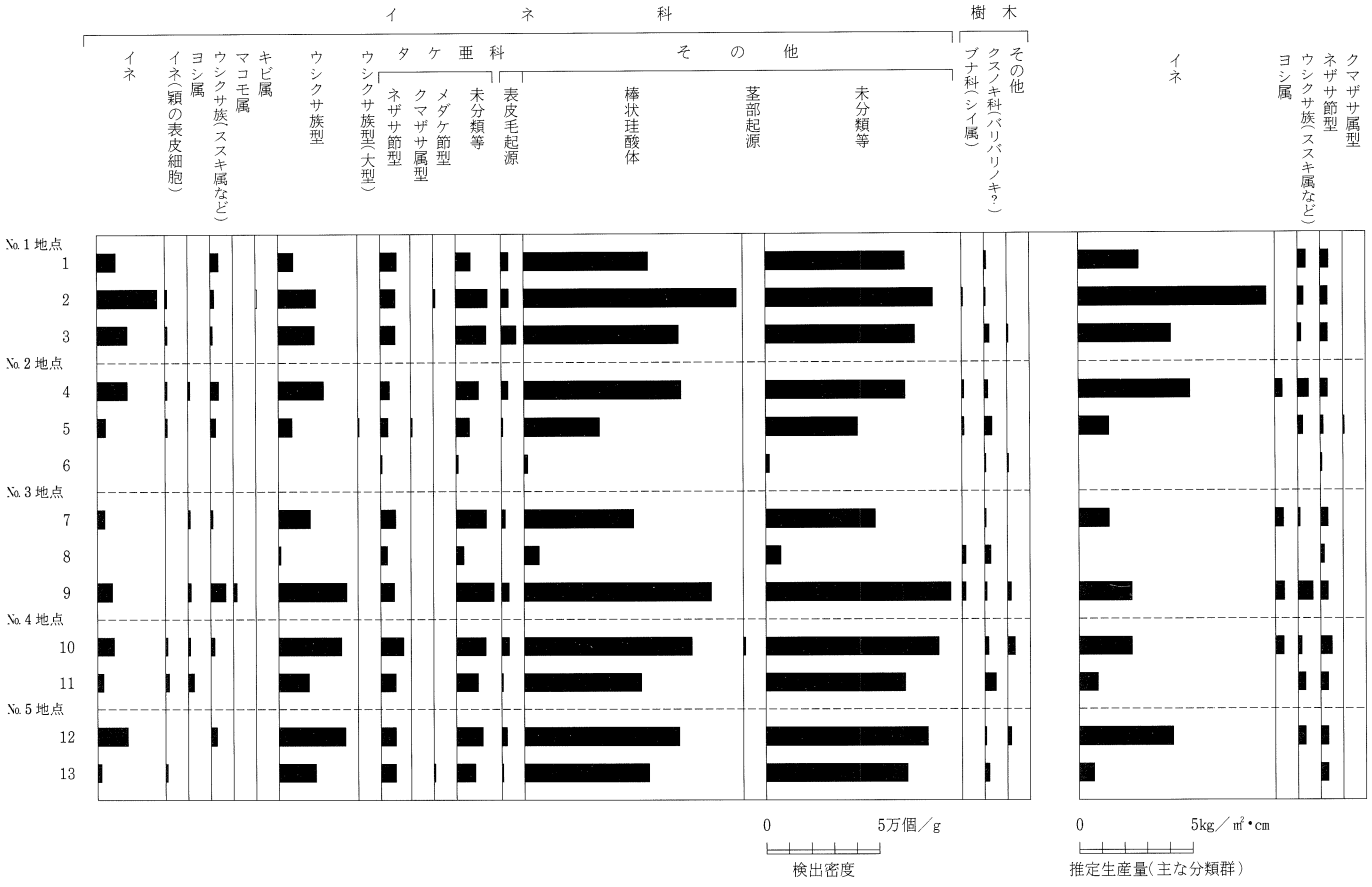
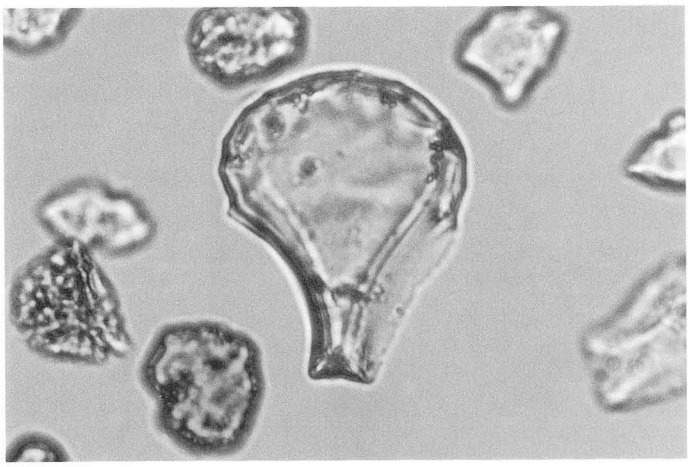


表7　松山大学構内遺跡3次調査　SB4の植物珪酸体分析結果

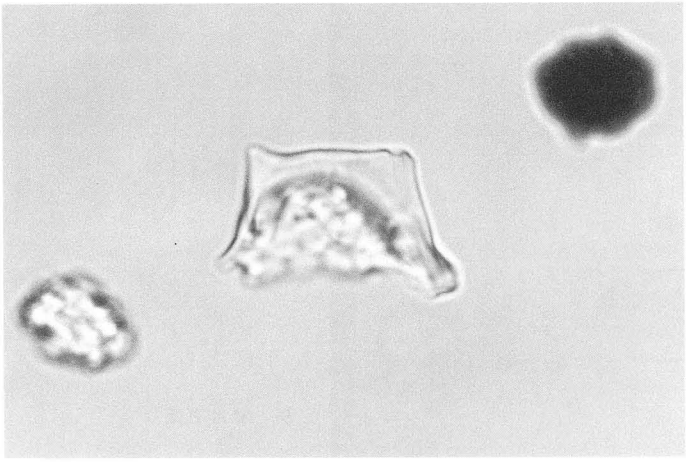
表 8　植物珪酸体の顕微鏡写真　　**(倍率はすべて400倍)**

No.	分　類　群	地　点	試料名
1	イネ	S B4	9
2	イネ	S B17内炉	5
3	イネ籾殻(穎の表皮細胞)	S B17張出部	10
4	ヨシ属	S B17張出部	7
5	ウシクサ族(ススキ属など)	S B4	4
6	マコモ属	S B4	9
7	オヒシバ属？	S B4	4
8	キビ族型	S B17内炉	4
9	ウシクサ族型	S B17内炉	14
10	ウシクサ族型(大型)	S B17張出部	5
11	ネザサ節型	S B17内炉	2
12	ネザサ節型	S B17張出部	7
13	クマザサ族型	S B17張出部	7
14	表皮毛起源	S B17張出部	8
15	表皮毛起源(稲籾剛毛？)	S B17内炉	7
16	棒状珪酸体	S B17張出部	6
17	ブナ科(シイ属)	S B17内炉	10
18	クスノキ科(バリバリノキ？)	S B17張出部	5



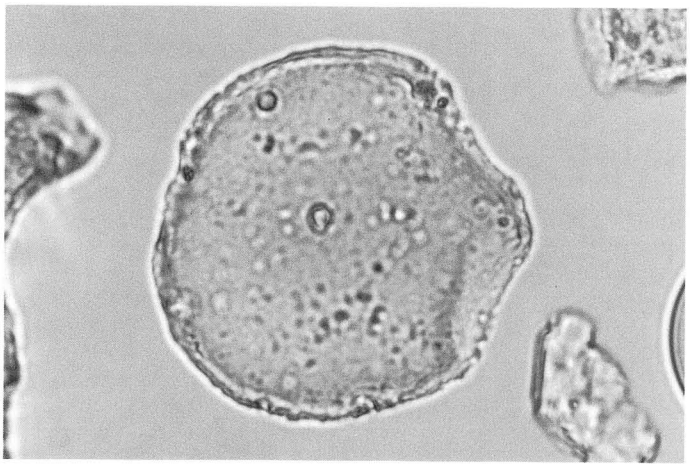
1　イネ

2　イネ

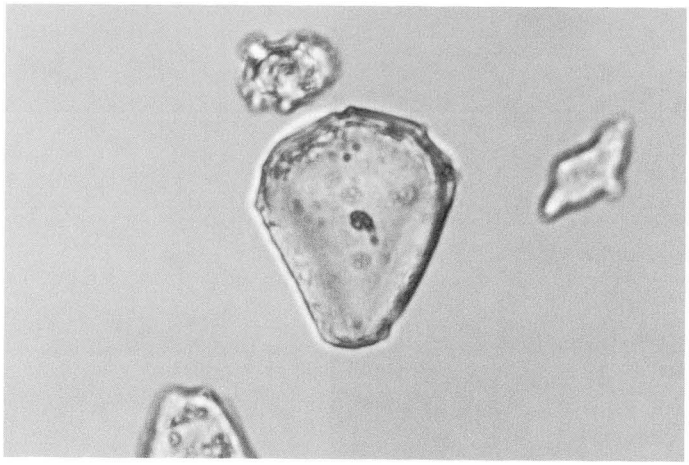


3　イネの籾殻

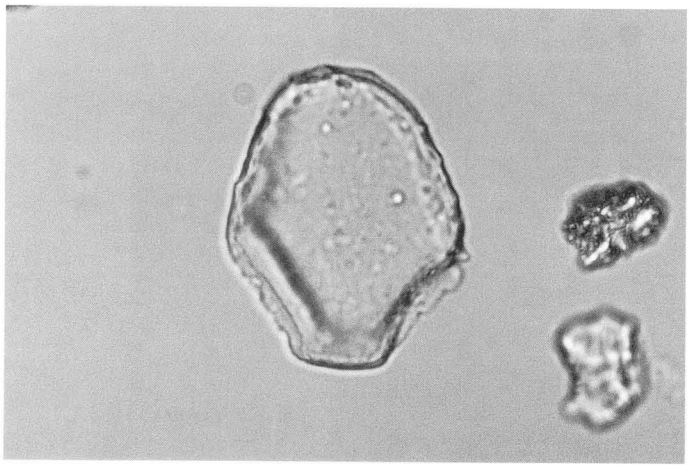
第294図　植物珪酸体の顕微鏡写真（1）（400倍）



4　ヨシ属

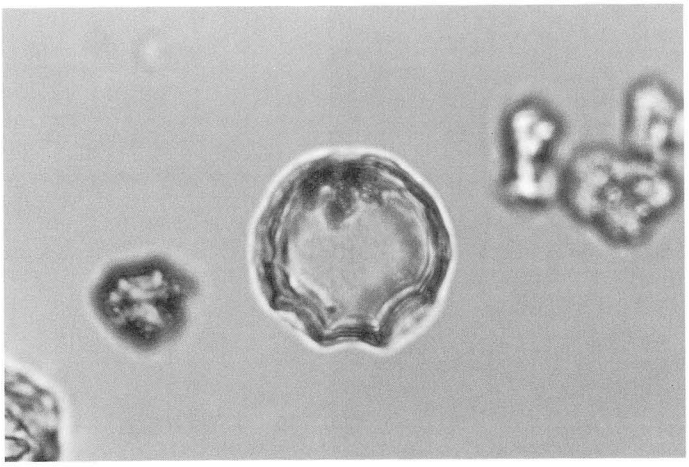


5　ウシクサ族

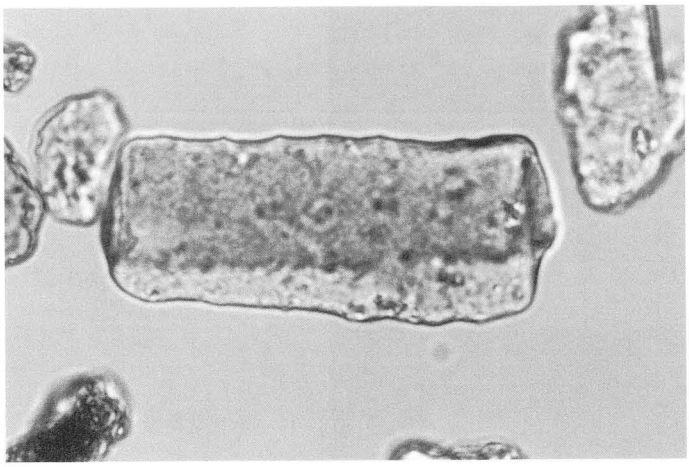


6　マコモ属

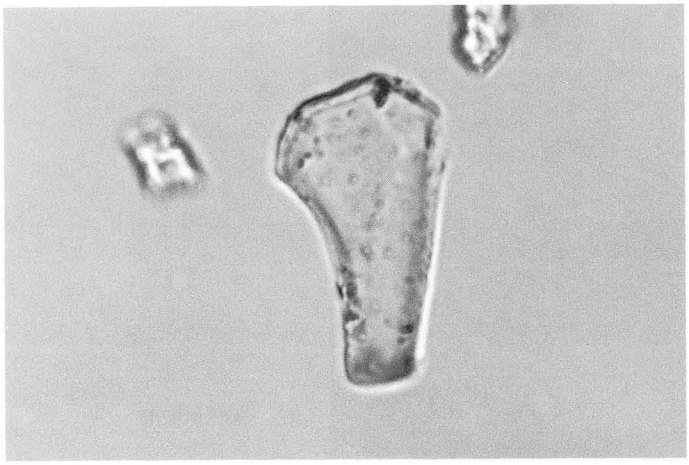
第295図　植物珪酸体の顕微鏡写真 (2)　(400倍)



7　オヒシバ属？



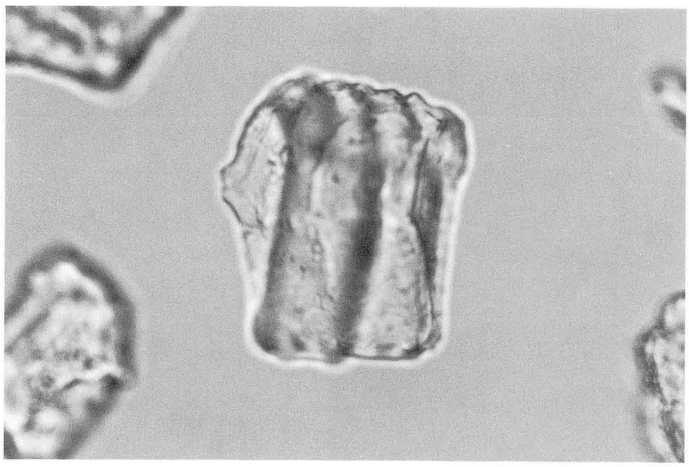
8　キビ族型



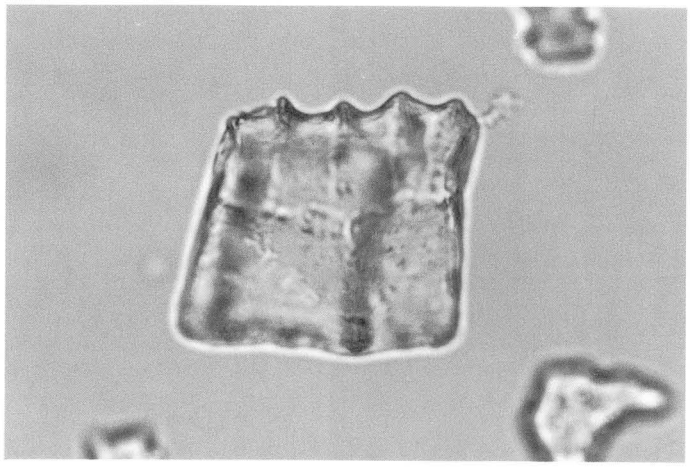
9　ウシクサ族型

第296図　植物珪酸体の顕微鏡写真（3）（400倍）

10　ウシクサ族型

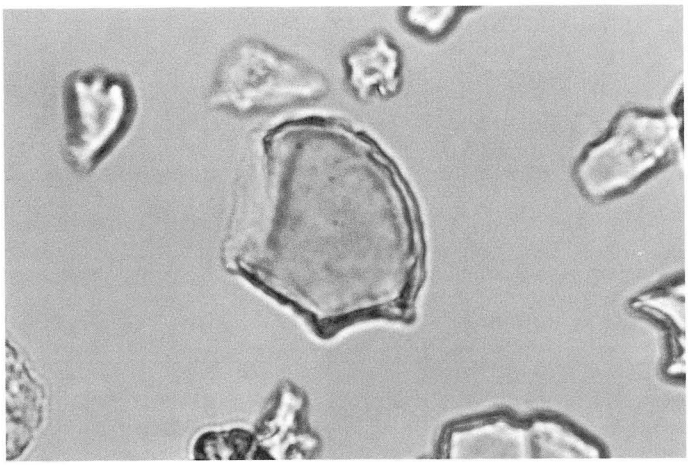


11　ネザサ節型

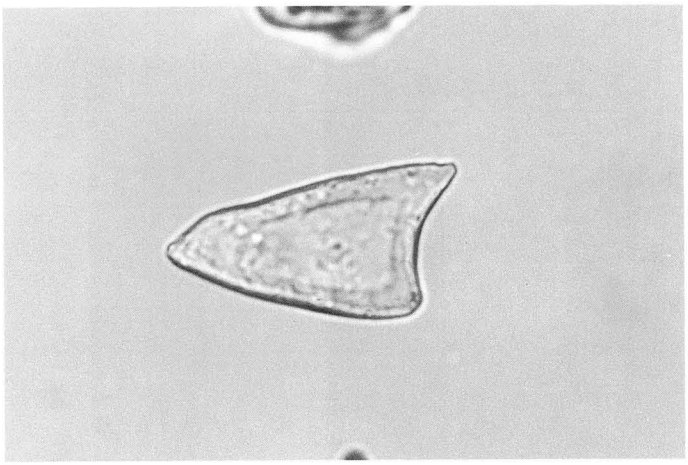


12　ネザサ節型

第297図　植物珪酸体の顕微鏡写真（4）（400倍）



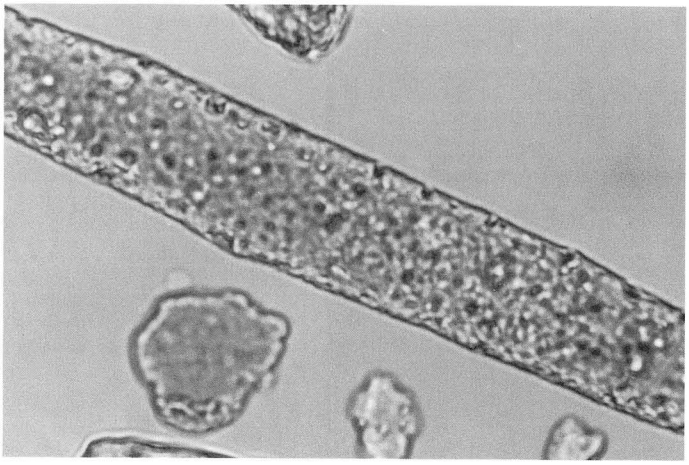
13　クマザサ族型



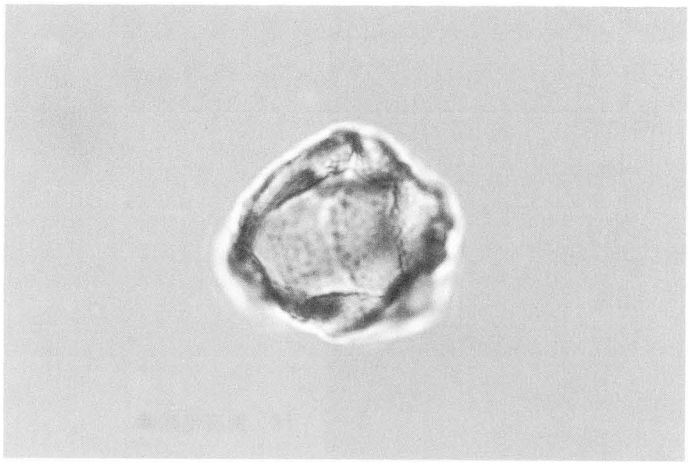
14　表皮毛起源

15　表皮毛起源

第298図　植物珪酸体の顕微鏡写真 (5)　(400倍)



16　棒状珪酸体



17　ブナ科（シイ属）

18　クスノキ科

第299図　植物珪酸体の顕微鏡写真（6）（400倍）

植物珪酸体分析(2)

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植物・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987)。

2．試料

試料は、ＳＲ１から出土した弥生時代後期後半の壺内（1423）の土壌（試料１、２）である。

3．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料の絶乾（105℃・24時間)

2）試料約１ｇの精度で秤量

※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

3）電気炉炭化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

4）超音波による分散（300W・42ＫＨｚ・10分間)

5）沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥

6）封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

7）検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算計数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}ｇ）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を産出した。

4．分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これＲＮＯ分類群について定量を行い、その結果を表９・10に示した。

〔イネ科〕

機動細胞由来：イネ、ヨシ属、ススキ属型（ススキ属、チガヤ属）、ウシクサ族型、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、タケ亜科（未分類等）

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

クスノキ科（バリバリノキ？）、はめ絵パズル状（ブナ科ブナ属など）

ＳＲ１から出土した弥生時代後期後半の壺内（1423）の土壌（試料1、2）について分析を行った。その結果、量試料からイネが検出された。密度は試料2では5,600個/ｇと高い値であり、試料１でも3,000個/ｇと比較的高い値である。イネ以外の分類群では、棒状珪酸体が比較的多く検出され、ネザサ節型やヨシ属、ススキ属型も検出された。おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、イネに次いでヨシ属が多くなっていることが分かる。また、イネ科以外にもクスノキ科やブナ科ブナ属などに由来する。植物珪酸体も検出された。

５．植物珪酸体分析から推定される植生・環境

以上のことから、壺が埋設された当時は周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で壺内にイネの植物珪酸体が混入したものと推定される。当時の遺跡近辺はヨシ属が生育する湿地的な環境であったと考えられ、ネザサ節やススキ属などが生育する比較的乾燥したところもみられたものと推定される。また、クスノキ科やブナ科ブナ属などの樹木もある程度生育していたものと推定される。

参考文献

杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第２号，ｐ．27―37．

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―．考古学と自然科学，９，Ｐ．15―29．

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―．考古学と自然科学，Ｐ.73―85．

表 9　植物珪酸体分析結果(1)
検出密度(単位：×100個/g)

分類群＼試料	SRI出土壺内土壌 1	SRI出土壺内土壌 2
イネ科		
イネ		
ヨシ属	30	56
ススキ属型	8	16
ウシクサ族型	15	8
	8	8
タケ亜科		
ネザサ節型	23	119
未分類等	8	24
その他のイネ科		
表皮毛起源	30	24
棒状珪酸体	151	119
未分類等	234	143
樹木起源		
クスノキ科(バリバリノキ？)	15	
はめ絵パズル状(ブナ属など)	8	
植物珪酸体総数	528	517

おもな分類群の推定生産量(単位：kg/m²・cm)

イネ	0.89	1.64
ヨシ属	0.48	1.00
ススキ属型	0.19	0.10
ネザサ節型	0.11	0.57

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

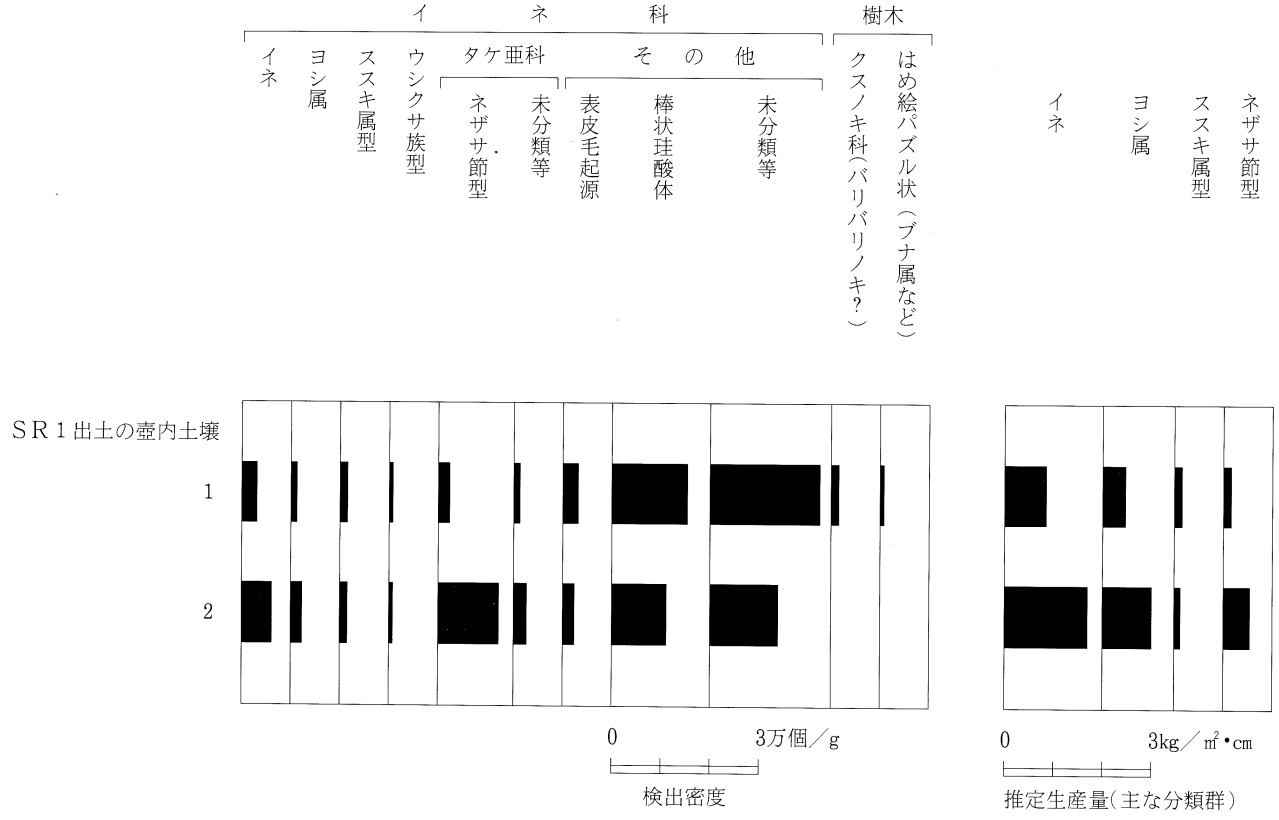


表10　植物珪酸体分析結果（2）

Ⅳ-2　松山大学構内遺跡３次調査出土の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター　本田　光子

１．はじめに

松山大学構内遺跡３次調査出土の石杵、土器に付着した赤色物および、遺構内出土赤色物が何であるかを知るために、顕微鏡観察・蛍光Ｘ線分析を行った。

出土例に関する今までの知見に寄れば、出土赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第２鉄：赤鉄鉱（Hematite）を主成分とするベンガラと、硫化水銀（赤）：辰砂（Cinnabar）を主成分とする朱の２種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹がある。これら３種類の赤色顔料を考えて分析を行った。試料の一覧・分析結果とそれにより推定される赤色顔料を表11に示した。

石杵が出土したＳＢ17では第300図に示したように、赤色物が数ヵ所で出土した。そのうち特に、No.４～７については周囲への拡散状況をみるために、ＡＢＣＤの範囲内で図のような試料採取を行った。

また、土器に赤色顔料が付着した例が多数あるが、いわゆる「内面朱付着土器」と「丹塗り」土器および、赤色顔料はないが焼成によって赤く発色をしたものと３種のものがあるように見受けられる。

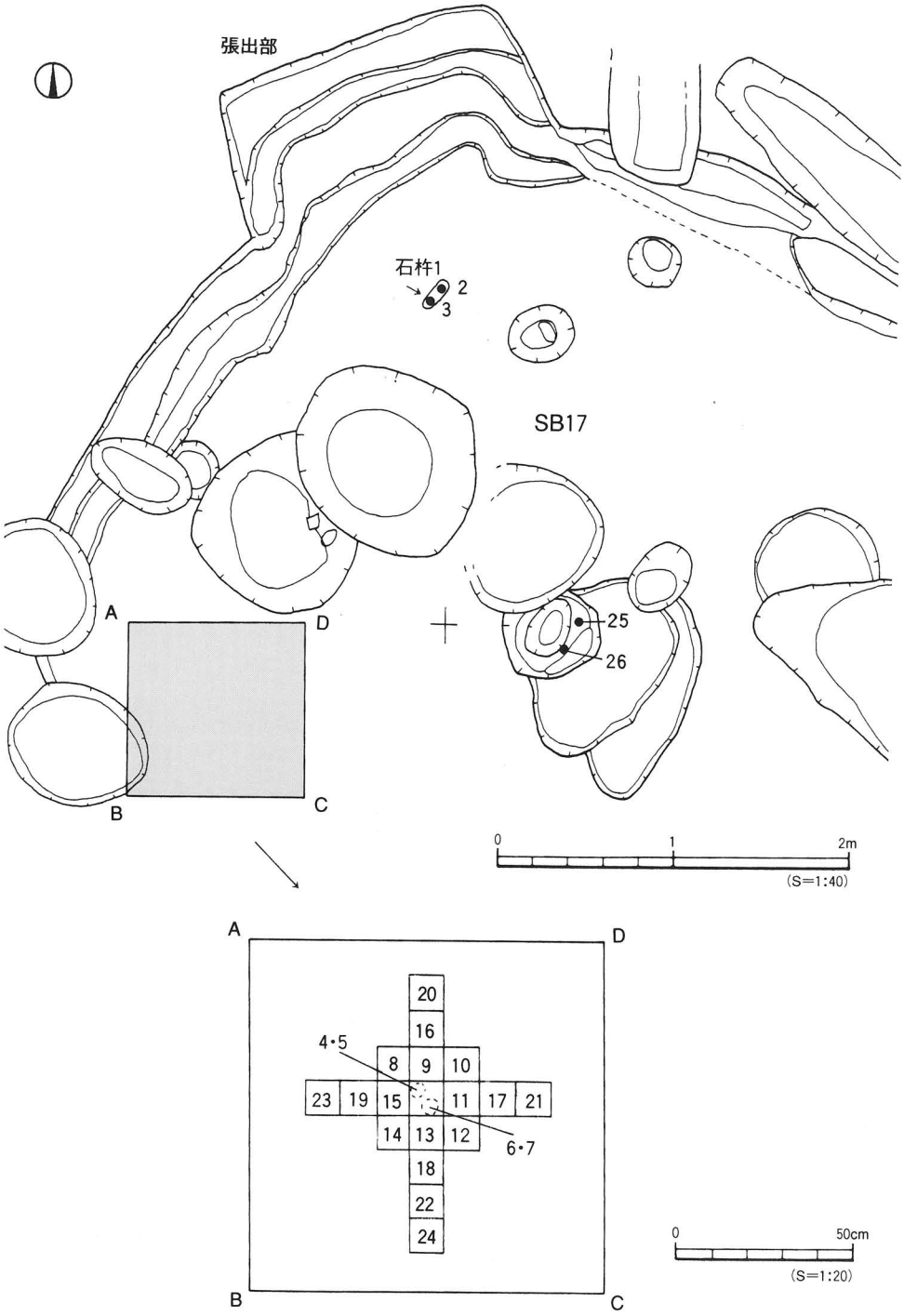
２．分　析

試料

赤色物及び土器を実体顕微鏡下で観察調整（混入土砂等の除去）した後、顕微鏡観察を行い、残りをＸ線分析等に供した。Ｎｏ.1と27～66は針先に付く程度の量で検鏡を行った。Ｘ線分析についてはそのままの状態で赤色のある部分と無い部分の測定を行った。

顕微鏡観察

光学顕微鏡により透過光・落斜光40～400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類・粒度等を観察するものである。三者は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等に認められる特徴の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。Ｎｏ.1～7、28～31、38、42～46、49～53、55、57に、赤色顔料として朱の特徴を持つ粒子を認めた。やや角張った形状、落斜光観察時に認められる独特の反射・光沢、透過光観察時の透明度及び赤色の濃淡の調子等である。朱の粒度は、約0.5～50μmの範囲であるが、10μm前後の粒子が多い。Ｎｏ27、34～37、41、47、48、54、56、58、60、63、66にはベンガラの特徴（質感、透明度等）を持つ赤色顔料粒子が認められた。ただし、きわめて微粒のものについてはどの赤色顔料であるか判断できなかった。No.59、61、64、65には顕著な赤色顔料粒子は認め



第300図　SB17サンプル採取地点位置図

表11　松山大学構内遺跡３次調査出土の赤色顔料分析

No.	遺　物	出土地点	顕微鏡観察	蛍光X線分析		赤色顔料の種類	報告書掲載の遺物番号
				鉄	水銀		
1	石杵	ＳＢ17	朱	＋	＋	朱	2062
2	赤色物	ＳＢ17石杵出土地点直下	朱	＋	＋	朱	
3	赤色物	ＳＢ17石杵出土地点直下	朱	＋	＋	朱	
4	赤色物	ＳＢ17床面	朱	＋	＋	朱	
5	赤色物	ＳＢ17床面	朱	＋	＋	朱	
6	赤色物	ＳＢ17床面	朱	＋	＋	朱	
7	赤色物	ＳＢ17床面	朱	＋	＋	朱	
8	土	ＳＢ17床面	?	＋	－	?	
9	土	ＳＢ17床面	?	＋	－	?	
10	土	ＳＢ17床面	?	＋	－	?	
11	土	ＳＢ17床面	?	＋	－	?	
12	土	ＳＢ17床面	?	＋	－	?	
13	土	ＳＢ17床面	?	＋	－	?	
14	土	ＳＢ17床面	?	＋	－	?	
15	土	ＳＢ17床面	?	＋	－	?	
16	土	ＳＢ17床面	?	＋	－	?	
17	土	ＳＢ17床面	?	＋	－	?	
18	土	ＳＢ17床面	?	＋	－	?	
19	土	ＳＢ17床面	?	＋	－	?	
20	土	ＳＢ17床面	?	＋	－	?	
21	土	ＳＢ17床面	?	＋	－	?	
22	土	ＳＢ17床面	?	＋	－	?	
23	土	ＳＢ17床面	?	＋	－	?	
24	土	ＳＢ17床面	?	＋	－	?	
25	赤色土	ＳＢ17内ＳＸ1	?	＋	－	?	
26	赤色土	ＳＢ17内ＳＸ1	?	＋	－	?	
27	壺	ＳＲ1上層	ベンガラ(焼成前塗装)	＋	－	「丹塗り」	1526
28	鉢	ＳＸ5	朱	＋	＋	朱	1077
29	鉢	ＳＸ3	朱	＋	＋	朱	1309
30	鉢	D6区第Ⅳ層	朱	＋	＋	朱	267
31	鉢	ＳＸ3	朱	＋	＋	朱	1306
34	器台	ＳＲ1上層Ｐ11	ベンガラ(焼成前塗装)	＋	－	「丹塗り」	1150
35	器台	ＳＲ1上層	ベンガラ(焼成前塗装)	＋	－	「丹塗り」	1501
36	器台	ＳＲトレンチ	ベンガラ(焼成前塗装)	＋	－	「丹塗り」	2040
37	高坏	ＳＲベルト	ベンガラ(焼成前塗装)	＋	－	「丹塗り」	1822
38	鉢	ＳＸ3	朱	＋	＋	朱	1307
41	壺	Ｉ4区SP406	ベンガラ(焼成前塗装)	＋	－	「丹塗り」	2002
42	鉢	ＳＸ3	朱	＋	＋	朱	1311
43	甕	②区ＳＲ1	朱	＋	＋	朱	1753
44	不明	ＳＰ731	朱	＋	＋	朱	694
45	鉢	ＳＸ3	朱	＋	＋	朱	1316
46	鉢	ＳＸ3	朱	＋	＋	朱	1308
47	壺	B区ＳＲ2･3	ベンガラ(焼成前塗装)	＋	－	「丹塗り」	698
48	器台	ＳＲ1上層	ベンガラ(焼成前塗装)	＋	－	「丹塗り」	1503
49	鉢	ＳＸ3	朱	＋	＋	朱	1310
50	鉢	ＳＸ3	朱	＋	＋	朱	1315
51	鉢	ＳＸ3	朱	＋	＋	朱	1313
52	壺	ＳＲ2⑥区	朱	＋	＋	朱	1028
53	鉢	ＳＸ3	朱	＋	＋	朱	1314
54	器台	ＳＢ10	ベンガラ(焼成前塗装)	＋	－	「丹塗り」	358
55	鉢	ＳＸ1下部	朱	＋	＋	朱	567
56	高坏	ＳＲ1上層	ベンガラ(焼成前塗装)	＋	－	「丹塗り」	1498
57	鉢	ＳＲ埋土2	朱	＋	＋	朱	1118
58	壺	ＳＲ埋土2	ベンガラ(焼成前塗装)	＋	－	「丹塗り」	1116
59	土製品	ＳＲ埋土2	赤く発色(赤色顔料なし)	＋	－	なし	1117
60	壺	ＳＲ1⑥区	ベンガラ(焼成前塗装)	＋	－	「丹塗り」	1794
61	高坏	D区ＳＲ2･3	赤く発色(赤色顔料なし)	＋	－	なし	730
63	鉢	ＳＸ3	ベンガラ(焼成前塗装)	＋	－	「丹塗り」	1312
64	土製品	ＳＸ3	赤く発色(赤色顔料なし)	＋	－	なし	816
65	分銅形土製品	ＳＲ1下層	赤く発色(赤色顔料なし)	＋	－	なし	1730
66	土製品	H6区表採	ベンガラ(焼成前塗装)	＋	－	「丹塗り」	未報告

られず、土器胎土が赤く発色しているように見受けられた。

No.8 ～26は、赤色顔料の量の問題と考えられる。No.59、61、64、65はいわゆる「丹塗り」とは異なり、はっきりとしたベンガラの粒子あるいは層を認めることができなかった。

蛍光X線分析

赤色物の主成分元素の検出を目的として実施した。理学電気工業（株）製蛍光X線分析装置システム3511を用い、X線管球：クロム対陰極、印過電圧：50kV、印加電流：50mA、分光結晶：フッ化リチウム、検出器：シンチレーション計数管で測定を行った。赤色顔料の主成分元素は朱であれば水銀、ベンガラであれば鉄であるので、２種の元素の有無のみ表中に記した。

No.27、34～37、41、47、48、54、56、58～61、63～66は赤色顔料の主成分元素としては鉄が、それ以外は鉄と水銀が検出された。この他主として混入の土砂や土器胎土部分に由来する元素は省略した。ただし、鉄は土砂部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断した。全試料とも鉛丹の主成分元素である鉛は検出されなかった。

石杵については、宮内庁正倉院事務所の成瀬正和氏による測定で、条件は以下の通りである。理学電機工業㈱製蛍光X線装置；X線管球：クロム対陰極、印過電圧：40kV、印加電流：20mA、分光結晶：フッ化リチウム、検出器：シンチレーション計数管。

３．結果と考察

ＳＢ17の石杵と赤色顔料

石杵に付着している赤色物は、赤色顔料朱である。石杵の出土地点にみられた赤色物も同様に朱である。

朱を磨るための石杵は特異な形状をした定形のＬ字状石杵と、棒状石杵に大きく分かれる。前者は弥生時代中期末から後期初頭に近畿、瀬戸内地方に出現し、後者は庄内式併行期の出土例が多い。住居址出土のものとしては、大阪府彼方遺跡、岡山県津寺遺跡出土例につぐ。上記２例は本例のように住居内に赤色顔料（No.４～７）の出土はないが、津寺例では完形の内面朱付着土器が伴っている。

住居址床面の赤色顔料と石杵の関連は現時点では不明であるが、No.４～７は周囲へ拡散した様子はなく、面的な広がりは認められないことから、何らかの作業を伴った結果とは考えにくい。また、後述の内面朱付着土器も住居内で共伴しているわけでなく、状況としては、福岡県犬竹遺跡や同県藤ノ尾垣添遺跡などで見られるＬ字状石杵の出土状況に似ているとも思われる。いずれにしても内面朱付着土器ともども類例の増加が待たれる所である。

内面朱付着土器

土器に赤色顔料が付着する例は時代を問わず多数あるが、土器の器種や付着残存状況の違いからその由来は大きく三通りに分かれる。第1は赤色顔料による装飾を目的としたもので、丹塗り、赤色塗彩土器等である。第2は赤色顔料の貯蔵を目的としたもの、第3は赤色顔料のうち特に朱を液状にして加熱することを目的としたものである。第3のものを「内面朱付着土器」と呼んでいる。

本遺跡では、多数の内面朱付着土器片が出土しており、鉢、甕が多く、壺もある。内面朱付着土器も前述の石杵同様、まだまだ内容が不明であり、類例の増加を待たねばならないが、両者とも大きく朱を用いた儀礼の専用具として捉えられることは明らかであろう。

徳島県名東遺跡や香川県上天神遺跡で出土している内面朱付着土器の専用品である広口の片口皿は今回出土していないが、これは時期的な問題と考えてよいのではないだろうか。

「丹塗り」「赤く発色」について

土器の赤色塗彩の残り具合は、その技法と埋蔵環境に大きく左右される。装飾方法は大きく焼成前塗彩と焼成後塗彩に分かれ、前者は、残り良く後者は時と場合によりまったく残らないこともある。前者の技法は北部九州地方で「丹塗磨研」と呼称されるものが代表的であるが、中期以降の弥生土器や土師器に一般的である。後者は縄文土器や、前期の弥生土器に見られるものである。

今回の例で「丹塗り」としたものは上記の焼成前塗彩であり、使用顔料はベンガラである。これに対して「赤く発色」したものは、焼成前に赤色顔料を塗彩したものではなく、器面調整の結果、例えば「ミガキ」の状態で焼成により赤く発色したものである。

〔文　献〕

1．大久保徹也、森格也　1995『上天神遺跡』香川県教育委員会、(財)香川県埋蔵文化財調査センター、建設省四国地方建設局

2．本田光子　1994「内面朱付着土器」『庄内式土器研究Ⅷ』庄内式土器研究会

Ⅴ-1　松山大学構内遺跡３次調査出土の弥生土器

梅木　謙一

１．はじめに

松山大学構内遺跡３次調査では、弥生時代中期後半から弥生時代末期の集落関連遺構と多量の遺物が検出された。このうち、調査地南東部のＧ７～Ｈ８区（南半部）にあるＳＲ１では、層位的に調査が進められ、土器編年に良好な資料が得られている。また、住居址や流路のＢ～Ｆ区地点からも完形品を含む多くの出土物が検出されている。ここでは、ＳＲ1の南半部出土の土器を主に整理・検討し、当遺跡の集落構造の分析資料を作るとともに、松山平野における弥生土器編年の基礎的資料を提示することにしたい。

２．編年的考察

⑴　資　料

本稿ではＳＲ1の南半部出土品を主要資料とし、各時期の器種やその構成、器形、施文、調整について整理を行うものとする。なお、資料の出土状況や時期比定については、第Ⅲ章遺構と遺物にて説明されているため記述は略す。時期区分については、本報告書に準じ梅木の中期及び後期の編年案を使用する。

１）中期後葉の土器（梅木編年＝中期Ⅲ）

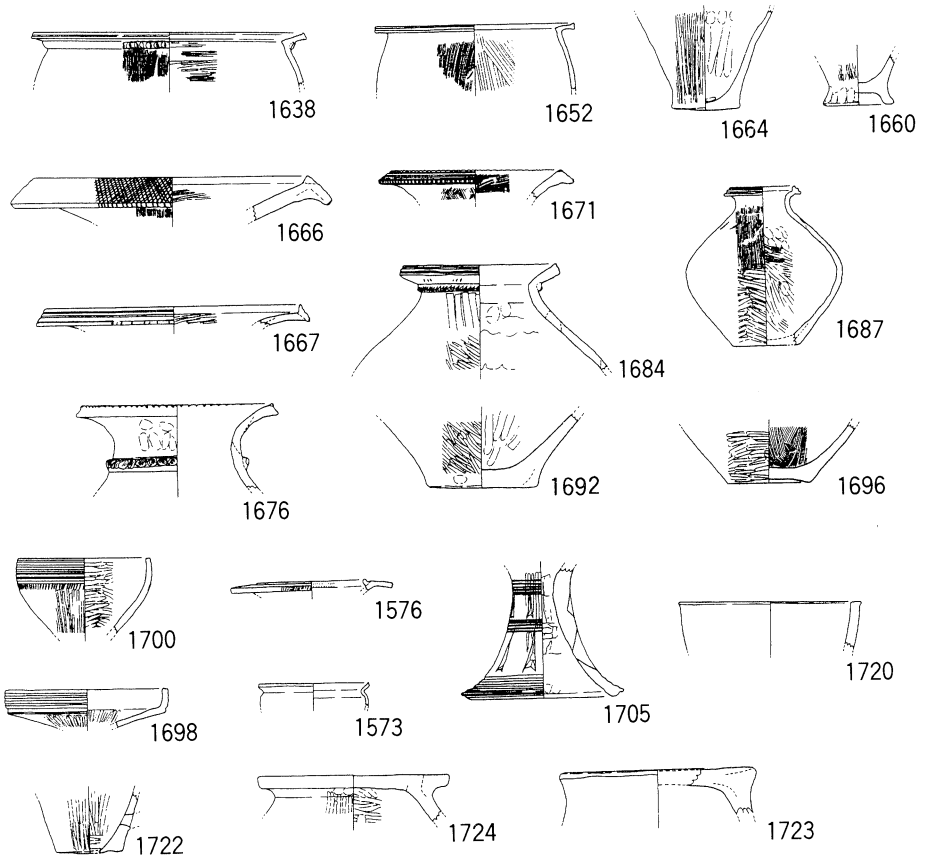
中期後葉に比定されるものには、ＳＲ1の南半部下層下部と同上部出土品がある。器種には、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、ジョッキ形土器、台形状土製品、蓋形土器がある。なお、下層下部には鳥形状の土製品と分銅形土製品、下層上部にはミニチュア土製品と分銅形土製品が出土している。

甕形土器　口径が23cmを越える大型品1638、15～22cmの中型品1652、15cm未満の小型品がある。形態は、口縁部は逆「Ｌ」字状口縁と「く」の字状口縁との中間的形態を呈している。口縁端部は半数以上が上方ないし上下にわずかに拡張されるものである。底部はくびれの上げ底1660と平底1664のものがある。施文は、大型品には口縁屈曲部に刻目凸帯を施し、中・小型品には凸帯を施さないことを基調としている。また、口縁端部には1～2条の沈線を施すものが半数以上をしめる。なお、下層下部1637・1642、下層上部1542は中期前半の様相を呈するもので、ケズリ痕が著しい下層下部1648、1658、下層上部1553は後期的要素をもつものであり、中期後葉の典型的形態ではない。調整は、外面はタテ刷毛目とナデ調整、内面は刷毛目調整が多い。内面にケズリ痕を残すものは形態も異なる。

壺形土器　出土品には器形の全容が知られる資料が少なく、口縁部と底部の形態が部分的に分かるにとどまる。口径が20cmを越える大型品、9～19cmの中型品、9cm未満の小型品がある。大型品は器壁が厚いもの1666と薄いもの1667がある。薄いものは上方にやや大きく拡張

する特徴をもっている。中型品は口頸部がやや長く大きく広がるもの1671と、口頸部が短く頸部が筒状であるもの1676、短く屈曲する頸部をもつもの1684がある。小型品は筒状の細い頸部に短く外反する口縁部をもつもの1687がある。底部形態は大きな平底になるもの1692が多く、上げ底のもの1696もみられる。施文は口縁部端面には大型品は格子目文と凹線文、中型品では凹線文を施す。頸部は中～大型品には刻目凸帯、中～小型品には板状工具の木口による押圧の「ノ」字状文列を施すものがみられる。なお、下層下部1684、下層上部1561・1562は形態・施文とも異なる様相を呈しているものである。外面調整は、胴部最大径以上はタテ刷毛目調整、以下はヘラ磨きとなる。内面は、口縁部はナデもしくはヘラ磨きとなる。

鉢形土器　出土資料に恵まれず、口縁部が外反するもの1573（下層上部）と直口口縁のもの1720があることが分かるにとどまる。



SR1下層下部：1638～1724
SR1下層上部：1573・1576

第301図　中期後葉の土器（S＝1／8）

高坏形土器　坏部は直口口縁のものが主体となる。坏部は口径に対し坏部高が浅いもの1698と深いもの1700がある。口縁部が外方に突出するもの1576（下層上部）は出土量が極少であり、外来的要素が強いものである。脚部はあまり長くなく、ゆるやかに外反する裾部1705となる。施文は、坏部外面に凹線文を施すことを基調とし、「ノ」の字状の刺突文列を施すことが多い。脚部は全面を加飾し、柱上部は細沈線文、柱部下半から裾部には矢羽根状の未貫通透しと凹線文を施す。外面調整は、坏部ではタテヘラ磨き、脚部ではタテ刷毛目調整やヘラ磨きであり、内面調整は、坏部はヘラ磨き、脚部は未調整ないしナデで、いわゆるヘラケズリはない。ただし、脚部内面ではナデ及び多少の掻き取りによる粒子の移動がみられるものが一部ある。

ジョッキ形土器　形態は直口口縁で平底、把手はタテ方向に付くもの1722である。

台形状土製品　器壁が厚く、広い平坦部をもつものである。平坦部の外縁は突出しており、突出部は弱いもの1723と著しいもの1724がある。

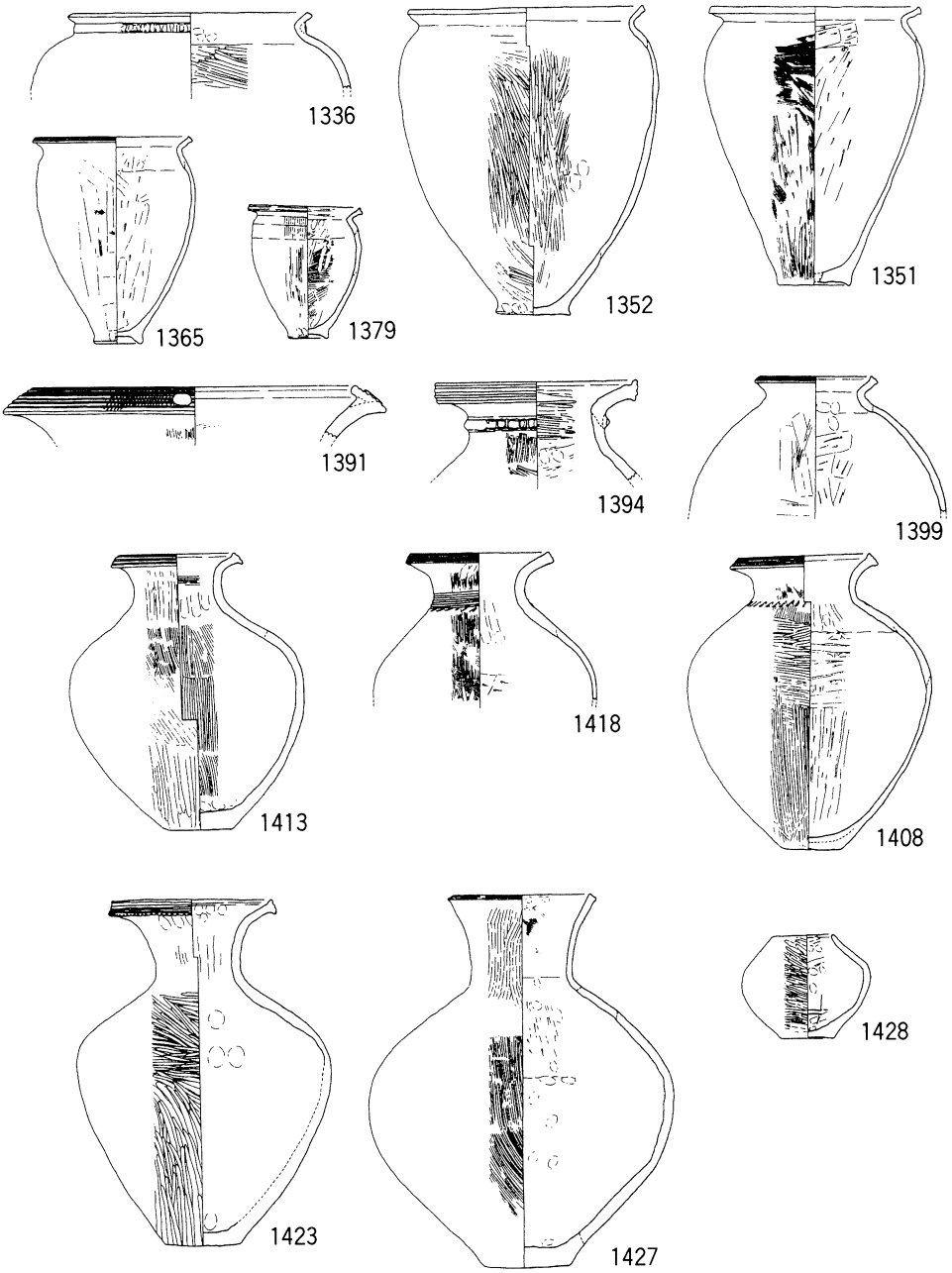
2）後期前葉の土器（梅木編年＝後期Ｉ）

ＳＲ１上層が主要な資料である。ほかにＳＲ１北半部Ｐ11地点とＰ14地点の古い様相をもつのものがあげられる。

器種には、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、器台形土器、支脚形土器ほかがある。

甕形土器　口径が17～25cmで器高が30cm前後になる中型品1351・1352と、口径が11～17cmで器高が14～25cmの小型品がある。小型品は器高20cmをこえるもの1365と20cmにみたないもの1379に区分できる。大型品は口径が25cm前後～30cmに満たないもの1336であるが、器高は知りえない。器形は、「く」の字状もしくはそれに近いものが多く、胴部径は口径とほぼ同じか凌ぐものとなる。底部は立ち上がりをもち、小さい上げ底となるものが大多数で、一部に平底がみられる。施文は、口径が20cmを越えるものには頸部に刻目凸帯を施すことを基調とする。口縁端部には多くのものに沈線が2～3条施される。胴部への加飾は、一部のものに「ノ」の字状の押圧文列がみられる。調整は、外面は刷毛目調整、内面はケズリ痕を残すものが多くみられるほか刷毛目調整も使用される。

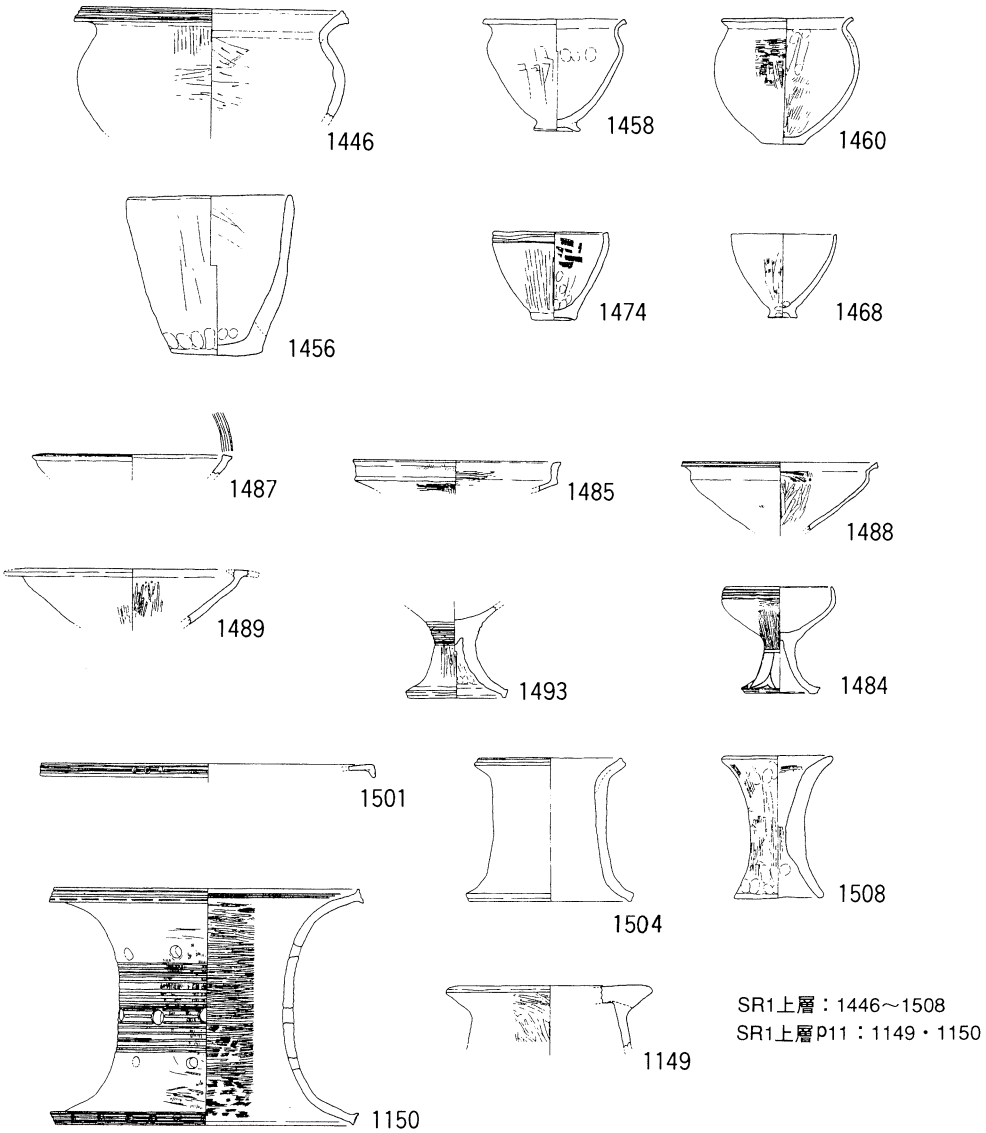
壺形土器　法量には口径が20cmを越える大型品とそれ以下の中～小型品がある。大型品には短い頸部に大きくひらく口縁部をもつもの1391と、筒状の口縁部に短く外反する口縁部をもつもの1394があり、後者の方が法量がやや小さい。大型品は、ほとんどのものが頸部に刻目凸帯をもっている。中～小型品は、短い口縁部をもつもの1399と、やや長い口頸部をもつもの1408・1413・1418、長頸のもの1423、長頸で直口口縁をもつもの1427、無頸のもの1428に大別される。形態では、総じて肩部が張る傾向にある。底部は丸みをもつ平底であり、やや厚いものが多い。施文では、口縁端面に沈線をもつものが多数を占めている。その一方で、長頸で直口口縁をもつものは口縁端部を拡張せず、全て無文であり注目されるものである。



第302図　後期前葉の土器（1）（S＝1／8）

頸部への加飾は、多条沈線と「ノ」の字状の押圧文字列をもつものがみられる。調整は、外面は刷毛目調整もみられるが、ヘラ磨きが多用され、胴部外面全体をヘラ磨きするものもある。

鉢形土器　口縁部が外反するものと直口口縁のものに大別される。各々に法量差がみられる。外反口縁のものは口径が20cm以上（最大31cm）の大型品1446、17～20cm未満の中型品、10～17cm未満の小型品1458・1460がある。直口口縁のものには、17cmの中型品1456と6～11cmの小型品1474・1468がみられ、口径が20cmを越える大型品はない。鉢形土器には施文が少な



第303図　後期前葉の土器（2）（S＝1／8）

く、口縁端面や口縁外面に沈線を施すものが少数あるにすぎない。調整は、甕形土器にくらべ磨きやナデ調整が多くみられる。

高坏形土器　坏部は直口口縁と外反口縁に大別され、直口口縁ではさらに内湾ないし内傾するもの1487と外傾するもの1485がある。このほか鋤先状口縁を呈するもの1489が出土している。脚部は著しく長いものはなく、比較的短いもの1484・1493である。施文は、直口口縁のものは内湾・内傾する口縁には外面に沈線を施し、外傾する口縁の口縁端面には沈線文がみられるものがある。脚部の施文は、加飾するものが少なくなり、直線文と三角文、沈線文による矢羽根文が施される。調整は、坏部に刷毛目調整が行われるものがみられる。

器台形土器　受部と器高より法量差が認められる。口径が40cm前後の大型品1501、口径が20～30cm大で器高が20cm大の中型品1150、口径と器高が20cm未満の小型品1504に大別される。形態は、大型品では受部の口縁端部は垂下し、中型品は上下にわずかに拡張するものである。柱部から裾部は出土が１例しかないため判断しがたいが、受部径と裾部径は大差なく、そのひろがりは似た形態になる。なお、小型品は支脚形土器の形態と法量に近いが、器壁が薄く調整が丁寧に施されるため識別は可能である。施文は中・大型品の口縁端面及び脚端面に沈線が、柱部に沈線と円孔が施される。

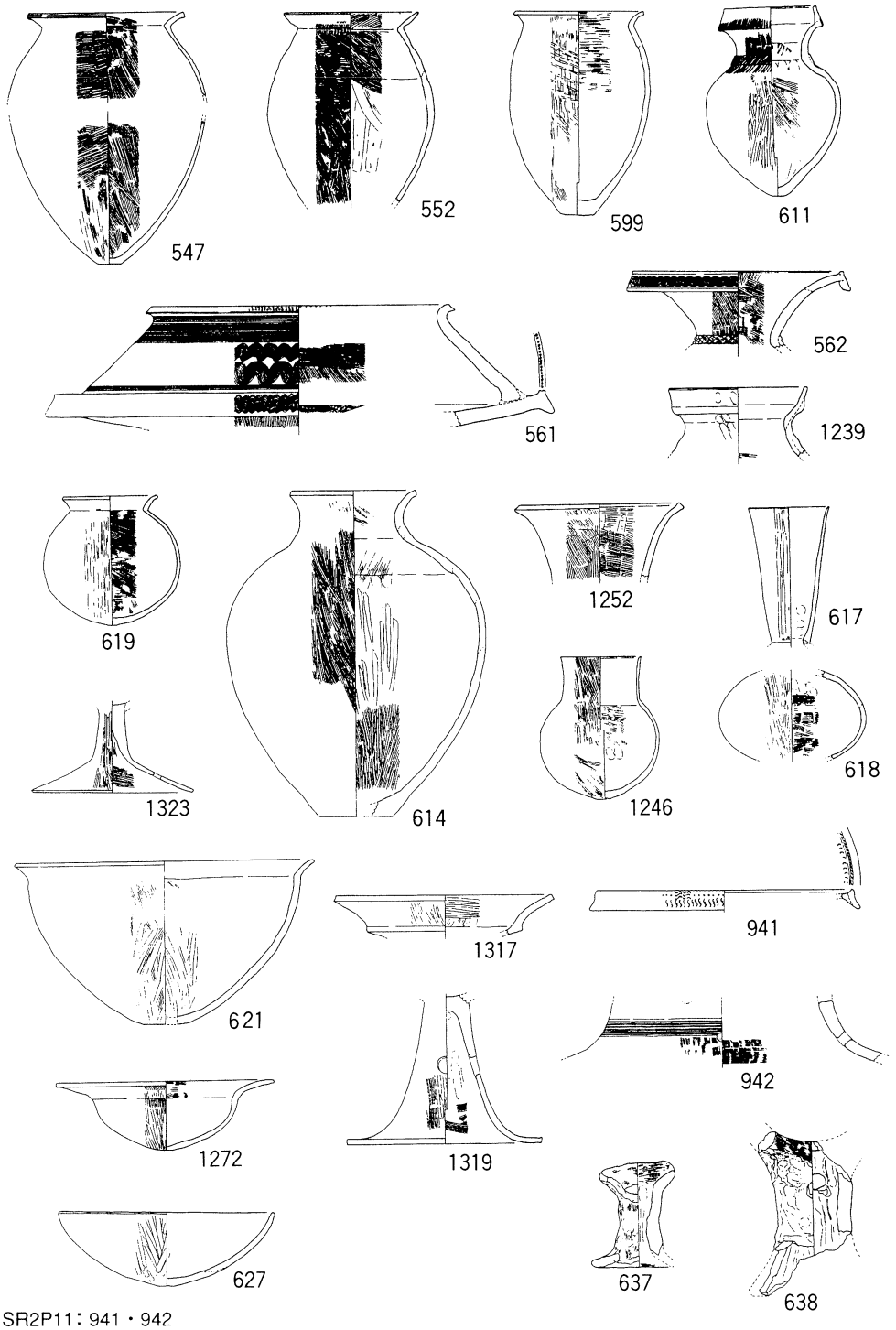
この他支脚形土器・コシキ形土器・台形状土器がみられる（1149・1508）。

３）後期末の土器（梅木編年＝後期Ⅲ）

ＳＲ２南半部、ＳＢ15・17、ＳＸ1・2・3、ＳＲ２北半部Ｐ11地点が資料としてある。ここでは資料の多いＳＸ１とＳＸ２を主に整理し、補足資料としてＳＸ3、ＳＲ２北半部Ｐ11地点を取り上げる。

甕形土器　法量には、口径13～22cm、器高23～30cmの中～大型品と、口径11～14cm、器高16～21cmの小型品がある。形態は、頸部が締まり肩部の張りが強いもの547、頸部が締まり胴部中位が強く張るもの552、頸部の締まりが弱く胴部の張りも弱いものがある599（ＳＸ2下部）。底部は平底である。なお、頸部内面に稜をもつものが多い。調整は外面は刷毛目調整が主体で、叩き痕を胴上半部にわずかに残すものがある。なお、小型品には胴部外面下半にタタキ痕がみられるものがある。内面はケズリが多く、刷毛目やナデ調整もなされる。ＳＸ３やＰ11地点では内面は刷毛目調整が多い。

壺形土器　複合口縁をもつもの561、長い口縁部をもち口縁端部が垂下するもの562。筒状の短い頸部に外反する口縁部がつくもの614（ＳＸ2下部）、短い口頸部のもの619（ＳＸ2下部）、細長頸のものがある617（ＳＸ2下部）。ＳＸ3では長い口縁部のものがある1252・1246。複合口縁壺には口縁接合部が面になるものと、稜になるものがある。ＳＸ3では複合口縁部が外傾するもの1239がある。施文は、複合口縁壺と広口壺には口縁端面に櫛描文、頸部に刻目凸帯文が施される。調整は外面は刷毛目調整が主体で、複合口縁や広口壺ではヘラ磨きをするものもある。



SR2P11：941・942
SX1：547・552・561・562
SX2：599～638
SX3：1239～1323

第304図　後期末の土器（S＝1／8）

鉢形土器　外反口縁をもつもの621（ＳＸ2下部）・1272（ＳＸ3）と、直口口縁をもつもの627（ＳＸ2下部）に大別される。法量には、口径が30cmを越える大型品と10～20cm大の中・小型品がある。外反口縁のものは口縁部が著しく長く、大きくひらくものがある。底部形態は、突出するボタン状の底部、平底、凹レンズ状に小さく凹むものがある。調整は刷毛目調整を主体とするが、ヘラ磨きを丁寧に施したものがある。

高坏形土器　ＳＸ1・2では良好な資料がないためＳＸ3を用いる。坏部は大きく外反する口縁部をもつ1317。脚部は、円錐状の柱部に、垂平に近くひろがる裾部をもつものである1319。ＳＸ3では柱と裾部の境が明瞭なもの1323がみられる。坏底部には充塡技法がみられるものがある。施文では柱部に円孔が一段ないし二段施される。

器台形土器　ＳＸ1・2では器台形土器が1点出土していおり、Ｐ11地点では大型品の受部片941と裾部片942が出土している。受部端部は垂下し、加飾が著しい。調整はヘラ磨きがされ、施文には多段の円孔と多条の沈線文が施される。

支脚形土器　受部形態には受部が「Ｕ」字状に傾斜するもの637（ＳＸ2下部）と角状の突起をもつもの638（ＳＸ2下部）がある。前者では、通常傾斜は1方向であるが、傾斜部を2方向にもつもの636（ＳＸ2下部）が1点出土している。

この他　焼成前穿孔をもつコシキ形土器がある。

(2) 分　析

ここでは、１）器種構成とその比率、２）形態的特徴について記述する。

１）器種と構成比率

各時期の土器様相を把握するために、器種と構成比について整理を行う。

中期後葉　ＳＲ１南半部下層下部と同上部の資料を使用する。器種には甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器がある。なお、出土品中には器台形土器と支脚形土器がみられない。下層下部と下層上部では甕形土器（下層下部・下層上部＝32％・36％）、鉢形土器（2％・1％）、ジョッキ形土器（1％・1％）は出土量に大差がない。高坏形土器（22％・30％）と壺形土器（34％・22％）は、出土量に弱干の違いがみられる。

後期前葉　ＳＲ1上層、ＳＲ1上層Ｐ11地点、ＳＲ２北半部Ｐ14地点を使用とする。このうち最も出土量の多いＳＲ1上層には、器種に甕形土器（39％）、壺形土器（27％）、鉢形土器（15％）、高坏形土器（12％）があり、さらに中期後葉にはなかった器台形土器（3％）と支脚形土器（2％）が少量ある。一方でジョッキ形土器の出土がみられない。

後期末　ＳＸ3、ＳＲ2南半部、ＳＸ1・ＳＸ2・ＳＸ5、ＳＲ2北半部Ｐ11地点、ＳＲ2北半部、ＳＢ9、ＳＢ17を使用する。器種には甕形土器（41％）、壺形土器（27％）、鉢形土器（13％）、高坏形土器（6％）、器台形土器（1％）、支脚形土器（7％）がみられる。ＳＲ２南半部よりジョッキ形土器（把手のみ）が１点出土しているが、砂層には中期後葉～後期前葉の遺物も含まれることより後期末に属するものではないと考えている。

さて、器種構成比は、遺構により差が認められる。この件について弱干触れておく。主要な器種である甕形土器と壺形土器をみると、ＳＸ3・ＳＲ2南半部・ＳＲ2北半部・ＳＢ17では甕形土器は34～42％、壺形土器は23～32％であり、ＳＸ1・ＳＸ2・ＳＲ2北半部Ｐ11地点では甕形土器は51～56％、壺形土器は15～18％となる。後者では甕形土器の比率は半数に近い値を示し、ＳＸ3などとは著しく異なるものである。これは、遺物群の性格によるものと考えられる。ＳＸ1、ＳＸ2、ＳＲ2北半部Ｐ11地点は極狭い範囲で、完形品が多数出土しており、瞬時的な一括廃棄の様相が認められる。一方ＳＸ3とＳＲ2は群集して出土するが、完形品がＳＸ1・2などに比べ極めて少量である。ＳＸ3ほかは時間がある程度経過したなかで投棄され、堆積した土器群と考えられる。よって、構成比に違いが生じたものと思われる。当時の日常生活での一般的な器種構成比率については他の遺跡資料も含め検証さすべきものと考えている。

２）形態的特徴

つづいて、中期後葉から後期前葉の形態、施文、調整の変化と、後期末の形態について特徴を述べる。

中期後葉～後期前葉　中期後葉から後期前葉の甕形土器では、大型品は頸部に刻目凸帯と口縁端部に沈線文を施しており、大きな変化はみない。中・小型品は後期前葉になるにしたがい逆「Ｌ」字状から「く」の字状口縁になるもので占められる。また、中期後葉にあった口縁部と底部の形態的様相の相関関係はくずれ、平底は多くがくびれるものへと移行し、出土量も少くなり、大半のものが直立ないしわずかにくびれる上げ底のものとなる。施文では、胴部にみられる「ノ」の字状押圧（刺突文）文列は口縁部に近い位置に移行し、調整では内面にケズリ痕を残すものが多くなるという変化過程がみとめられる。

壺形土器は、中期後葉に系譜が求められるものは頸部下端と胴部の境がやや明瞭になり、直立する頸部へと徐々に変化する。一方、短い口縁部のものは出土量が増し、著しく長い口頸部で直口口縁のものが出現する。底部形態は中期後葉の広く薄い底部から、やや縮小され厚くまるみをもつ底部へと変化する。施文では、口縁部端部がやや狭くなり、凹線文も丸みが欠け、溝幅が狭いのものとなる。また中期には稀にしかみられなかった頸部への沈線文は、施されるものが増加し定着する。

鉢形土器は、直口口縁のものが急増し、外反口縁のものでは頸部内面が丸みをもつ形態になることがあげられる。調整は、後期前葉ではケズリ痕をもつものがみられてくる。

高坏形土器は、中期後葉では坏部は内傾～内湾し、脚部は柱上部に細沈線、柱～裾部に矢羽根状透し（未貫通）、裾部は凹線文といった画一化された形態や施文をもっているが、後期前葉では坏部は直立～外傾するものが出現し、脚部の施文は矢羽根状透しが沈線として描かれるものへと移行し、形態と施文が多用化する。

器台形土器は、中期後葉では極稀なものであるが、後期前葉では出土量が増加し、定着し

た器種となる。形態は今後の資料増加を待ち検討を行う可きものである。

その他の土製品　台形状土製品と分銅形土製品は少数であるが、後期前葉には存在しているものと考えられる。

後期末　甕形土器は、口径は大型品でも30cmを越えるものはなく、25cm大を最大とする。底部は平底で小さいものであり、叩き痕が胴上半部にみられるものがわずかにあり、小型品では底部にも叩き痕がみられるものがある。壺形土器は、口頸部の境が明瞭でなく、一体化するいわゆる直口口縁のものが多くみられる。また、広口のものでは口縁端部が垂下するものがあり特徴的な形態といえる。鉢形土器は、口縁部が長く大きく開くものが後期後葉からみられるものであり、この時期のものは口縁部が最も長く、薄くなる形態をもち、出土量も多くなる。高坏形土器は坏部は外反口縁で、脚部は円孔をもつものである。後期後葉には坏口縁部に著しく長いものがあるが、この時期には著しく長いものは少なくなるようである。器台形土器は、大型品があるが、小型品が存在するのかは判断できなかった。支脚形土器は、角状の受部をもつものが一般的となっている。コシキ形土器は、焼成前穿孔で、直口口縁となるものが確実にみとめられる。

(3) 小　結

これまでに、中期後葉、後期前葉、後期末の土器を整理し、弱干の分析を行った。

器種では、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器は各時期にあるが、器台形土器と支脚形土器は中期後葉には出土がなく、後期になり少量（5～9%）が出現することが分かる。

主要器種（中～後期に一貫してみられる器種）では、各時期を通じ変化の少ないものは甕形土器（34～41%）と壺形土器（27～29%）である。変化が生じるものは高坏形土器と鉢形土器である。高坏形土器は、中期後葉には全体の4分の1を占めていたものが後期になり、さらに後期末になるに従い10分の1以下となり減少していく。一方、鉢形土器は中期後葉には10分の1に満たなかったものが、後期には8分の1強となり増加していくのである。主要な器種以外の状況をみると、ジョッキ形土器はＳＲ1下層下部の1例は課題を残すが、中期後葉には極少量あり、後期には基本的に器種構成のなかにはないものと思われる。ところが後期になり一般化する器台形土器と支脚形土器は、後期末になるに従い増加傾向を示すのである。このほか、コシキ形土器は後期末には確実に存在するが、後期前葉に定着したかは今後の資料により確認しなければならない。

これ等より、中期後葉から後期末の期間、甕形土器と壺形土器は、器種構成のなかでは約3分2以上を占めており、構成比率の変化が少ない安定した器種であり、高坏形土器と鉢形土器は構成比率が変化するが、継続して存在する器種といえる。一方、器台形土器、支脚形土器、ジョッキ形土器は、構成比率が低く、存在期間も限定されることより、時期決定のひとつのメルクマール的な器種になるものである。

形態では、甕形土器は逆「L」字状口縁から「く」の字状口縁へ、底部は上げ底から丸みのある平底へと変化する。大型品の口径が時期の経過とともに縮小化（23cm～25cmが一つの目安か）し、口径だけでは法量差はもとめられず、法量差は器高値に顕著に現れる。

壺形土器は、複合口縁壺はＳＲ1の上層には出土がなく、複合口縁壺の出現期を考えるひとつの資料であろう。中期後葉と後期前葉の形態差は、頸部から肩部への形態（部位境と張り）と底部にみられる。前者は先に述べたごとくであるが、後者は底部の厚み（薄いものから厚いものへ）と外縁の稜（鋭い稜をもつものから丸みのあるものへ）に現れるようである。

高坏形土器は、これまで中期後葉から後期前葉の変化が明らかでなかったが、今回の資料でその一部が知られるようになった。中期の坏部口縁は内傾～内湾しているもので占められるが、後期前葉のものには直立～外傾するものがあることで違いがみとめられる。また、小型品においては一部に内湾～直立するものが残っているようであるが、施文において違いが認められ（中期後葉は丸みのある沈線でいわゆる凹線文、後期前葉は線の細い沈線文）中期後葉との識別は可能である。このように高坏形土器は中期後葉から後期前葉の期間にゆるやかに形態変化をとげたものと考えられるのである。

本節のおわりに調整について弱干触れておく。瀬戸内地方では、特に中～東部地方ではヘラケズリの有無とその範囲が中期と後期を区分するひとつのメルクマールになっている。今回の資料をみるかぎり、当遺跡の中ではケズリ技法における使用の時間的変化は明確でないといえる。なお、後期の甕形土器には内面にケズリ痕を看取するものはあるが、全てのものにみられるものでもない。後期末では遺構によっては刷毛目やナデ調整を看取するものばかりで占められる場合もある。よって、当平野ではケズリ技法の使用比率に着目すれば時間差ないしは地域差が求められる可能性がある。

3．搬入品

今回の調査地からは、外来的要素を持つ土器が多数出土している。これ等の土器には、形態と胎土が在地とは異なるもの、胎土は変わりないが形態が異なるもの、施文や調整が異なるものなどがあり様々である。ここでは、形態・胎土・調整・施文・色調・焼成において全て、もしくは多数の要素について在地とは異なる、いわゆる直搬品（搬入品）について整理を行うことにする。

(1)　資　料

1）中期後葉（中期Ⅲ）

ＳＲ１南半部下層下部出土品　高坏形土器1718は長脚で、脚端部が跳ねあがり、内面にケズリ痕をもつことより吉備地方のものである。高坏形土器1719は脚端部の形状と器壁が厚い

ことより讃岐地方のものである。ミニチュア品1726は底部のくびれ部に沈線をもっており、讃岐地方のものとしたい。土製品1727は胴部片の転用品で、胎土に角閃石が多く、色調は灰褐色であり吉備地方の中期後半の甕形土器（胴部下半）の特徴をもっている。壺形土器1668は胎土が密で、色調は黒暗灰色であり、在地のものとは異なるが類例を求めることができなかった。

ＳＲ1南半部下層上部　壺形土器1562は口縁端部は拡張され、櫛描文を施している。色調は灰褐色であり安芸～備後地方のものである。高坏ないし脚台付の鉢形土器と思われる1578は胎土に混和剤が少なく、色調は灰色をおびる褐色である。胎土は讃岐地方に類例があり、同地方のものか。

ＳＲベルト出土品　注口土器と思われる1832は、出土状況が明確でないが形態より当期に伴うものと思われる。山陽地方と考えられるが、断定しがたい。

２）後期前葉（後期Ⅰ）

ＳＲ1上層出土品　壺形土器1442は胎土に長石が多く、色調は暗褐色を呈しており讃岐地方のものである。1444は肩部に「M」字状の小さい凸帯をもつ。胎土に金ウンモが多い。出自は特定できなかった。1445は色調が乳黄色を帯びた茶色をしており、豊前～豊後地方のものと考える。ただし、後述するＳＸ3出土の1269と同一体になる可能性もあり、時期比定に問題がある。鉢形土器1451は長い口縁部に、外面に凹線文をもつ。東～中部瀬戸内地方かと考えるが、断定できない。高坏形土器1498は長脚で、外面に赤色顔料が付着しており九州地方のものである。高坏形土器1500は脚端部が上方に拡張されているものであり、近畿地方に類例がある。

ＳＲ1③区下層出土品　甕形土器1760は内面の肩部以下がヘラケズリで、胎土・色調は安芸地方のものに近い。

ＳＲ1上層Ｐ11地点出土品　壺形土器1138は貝殻施文より安芸～備後地方、壺形土器1140は山形文と円形浮文をもっており東九州地方のものである。

ＳＲ1②区下層出土品（古相）　甕形土器1750は貝殻の刺突文列と内面のケズリより安芸地方のものである。

ＳＲ1⑥区出土品　Ｐ19地点出土の壺形土器1182は貝殻施文より安芸～備後地方のものである。Ｐ20出土の壺形土器1183は角閃石を胎土にもっており、形態とあわせ讃岐地方のものである。

３）後期末（後期Ⅲ）

ＳＸ3出土品　壺形土器1268・1269は胴部に凸帯をもっており、九州地方のものである。ただし、1269は先述のごとく時期比定に課題を残す。鉢形土器1312はベンガラ塗彩されたもので、備前・備中地方の形態に類似する。高坏形土器1322は器壁が著しく薄く、細く長い柱部をもつものである。出自は判断できない。壺形土器1264は口縁部が厚く、口縁内面に段、口

縁端面に沈線文をもつ。形態は九州地方のものに近いが、施文は在地と変わりない。ただし、小片にて本時期に伴うものかは検討を要するものである。

ＳＸ5出土品　高坏ないし壺形土器1091は色調は白っぽく、細かい刷毛がみられる。出自は断定できない。

ＳＲ2②区出土品　壺形土器905は口縁部が直立し、複合部下端にナデ凹みをもつ。また長い頸部には長めの刻目文列があり、備後地方に類例がある。

ＳＲ2南半部出土品　高坏形土器873は、坏底部外面にケズリ痕をもっており備後地方に類例がある。

４）後期（後期Ⅰないし Ⅲに比定される資料。特定できないものである。）

ＳＲ2・3Ｂ区出土品　壺形土器698は細長頸壺の胴部でベンガラが塗彩される。出自不明。

ＳＲ2・3Ｃ区出土品　壺形土器711は胴上半部に刻目の「M」字状凸帯をもつ。出自不明。壺形土器712は頸部に櫛描波状文を施し、色調は暗灰色をしており讃岐地方の大型壺に類似する。

ＳＲベルト出土品　大型壺1627は胴部に凸帯を施しており、九州地方のものと考える。鉢形土器1816は口縁部が上方に拡張され、内面に著しいケズリ痕を残している。備後地方のものである。

ＳＲ（埋土2）出土品　壺形土器1112・1113は貝殻腹縁による多段の羽状文を施しており安芸地方のものである。

ＳＲ1最下層Ｂ出土品　壺形土器1800は頸部に刻目を施した多条の沈線文をもっており、讃岐地方に類例がある。壺形土器1801は浮文と櫛描沈線文を施すもので、色調は白っぽく山陰地方のものに近い。鉢形土器1799は口縁外面に沈線文をもつ。胎土・色調が在地と異なる。出自不明。

ＳＲ1⑤区下層出土品（古相）　壺形土器1773は凸帯と小さい浮文を多数もつ。胎土に角閃石をもつ。出自不明。壺形土器1774は胴部に多条凸帯をもつことより、九州地方のものである。

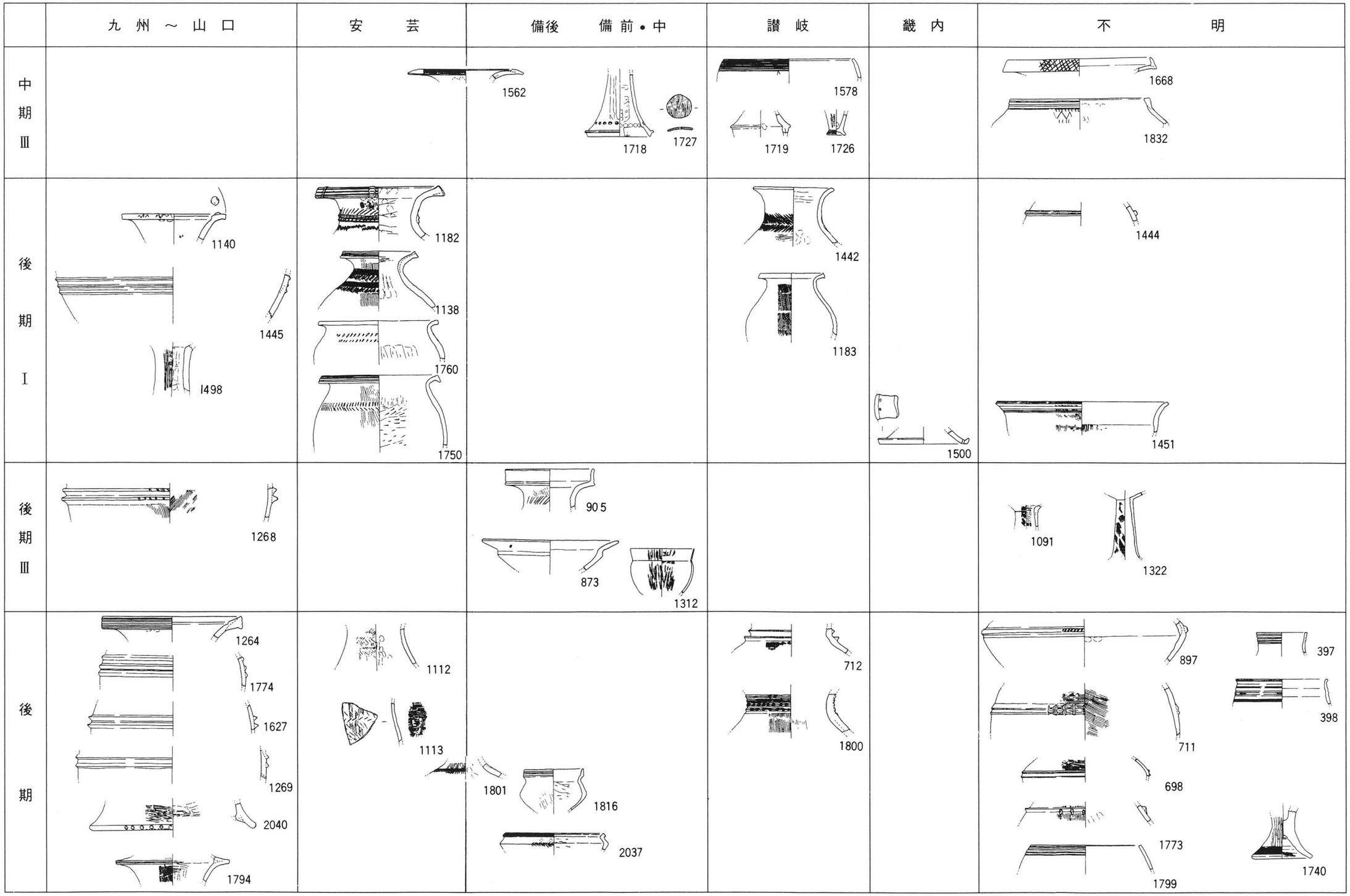
ＳＲ1⑥区下層出土品　壺ないし器台形土器1794はベンガラ塗彩があり、九州地方のものである。

ＳＲ2Ｐ30地点出土品　壺形土器897は肩部が強く張る胴部に、刻目凸帯をもつ。色調は茶褐色で、出自は判断できず。

ＳＲ1南半部下層下部出土品　高坏形土器と思われる1740は本来砂層中の遺物とみられるもので、形態・施文など在地には全くないものである。出自は判断できず。

第Ⅴ層出土品　壺形土器397・398は口縁部外面に凹線文をもつもので、中～東部瀬戸内地方のものか。

表採・トレンチ出土品　鉢形土器2037は肩部に強い屈折部分をもち、羽状文を施している。



第305図　松山大学構内遺跡3次調査出土の外来系土器

(S=1/8)

備後地方のものである。器台形土器2040は赤色顔料が付着している。九州地方のものである。

(2) 分 析

はじめに搬入品の概要をみる。中期後葉には安芸・吉備・讃岐から壺形土器・高坏形土器・(甕) 形土器が搬入される。後期前葉には先の地域に加えて九州と畿内からも搬入品があり、器種では壺形土器・高坏形土器に加え甕形土器と鉢形土器がみられる。後期末では備後と九州が主となり、安芸や讃岐は稀薄となる。器種では壺形土器・高坏形土器・鉢形土器がひきつづきみられ、甕はみられなくなるのである。以下、時期・器種・地域について個別の分析を行う。

まず搬入品の時期をみる。今回の調査により得られた弥生時代資料は中期後葉、後期前葉、後期末であり、各時期とも搬入品が出土している。出土量では、中期後葉が8点、後期前葉が12点、後期末が8点、後期に比定されるもの（時期特定をしていないもの）21点であり、後期に搬入品が多いことが分かる。

搬入品の器種は、甕形土器3点、壺形土器26点、高坏形土器ないし高坏形土器と思われるもの8点、鉢形土器6点、器台形土器ないし器台形土器と思われるもの2点、注口土器1点、ミニチュア1点である。壺形土器は26点で搬入品の半数を占め、著しく多いのである。出土量の少ない甕形土器・高坏形土器・鉢形土器・器台形土器はともに10点に満たない量であり大差はないといえる。よって、搬入品における壺形土器の優位性が指摘されるところである。

次に地域を考えることにする。安芸・備後・讃岐からの搬入品は多く、九州や畿内からのものは少ない。このうち、安芸や備後地域いわゆる芸予諸島の周辺地からは、全ての時期に渡り土器が搬入されており、特に後期になってからの搬入品が多い。これに対し、伊予の東側である備中・備前・讃岐地域からは、中期後葉から後期前葉が主要な搬入時期であり、出土量も中期後葉から後期前葉では芸予諸島をしのいでいるのである。

このほかの地域では、九州からの搬入品は後期を向かえ出土するようになる。器種には壺形土器・高坏形土器・器台形土器があり、このうち高坏形土器と器台形土器は全てが赤色塗彩されたものであり興味深い。畿内からのものは高坏形土器1点にとどまり、最も搬入量が少ない地域である。

以上、搬入品を分析したが、本項の最後に若干のまとめをおこないたい。

時期と地域との間には明確ではないが、傾向性がみとめられる。中期後葉では中部瀬戸内地方が搬入品の主体となるが、後期では九州を含めた西部瀬戸内地方が主体となり、搬入品の主体が移行している状況にある。同様に、器種にも変化がみられる。中期では搬入品は高坏形土器・壺形土器で占められるのに対し、後期では甕形土器や鉢形土器が少数ながら一定量存在するのである。そして時期と器種の関係を端的に現しているのは九州からの搬入品である。搬入時期は後期からであり、搬入品の器種は壺形土器・高坏形土器・器台形土器に限られるのである。

次に課題も提起された。伊予が含まれる中～西部瀬戸内地域からの搬入品の存在は容易に推察されるが、1点ではあるが中国山地や畿内のものが出土していることは注目される。搬入経路が課題となるものである。二つめには九州からの搬入品には一つの特徴がみられることである。九州から搬入された高坏形土器・器台形土器は全てがベンガラ塗彩であり、搬入品個々の性格についても検討しなければならないと考えている。

4．赤色顔料

(1) 資　料

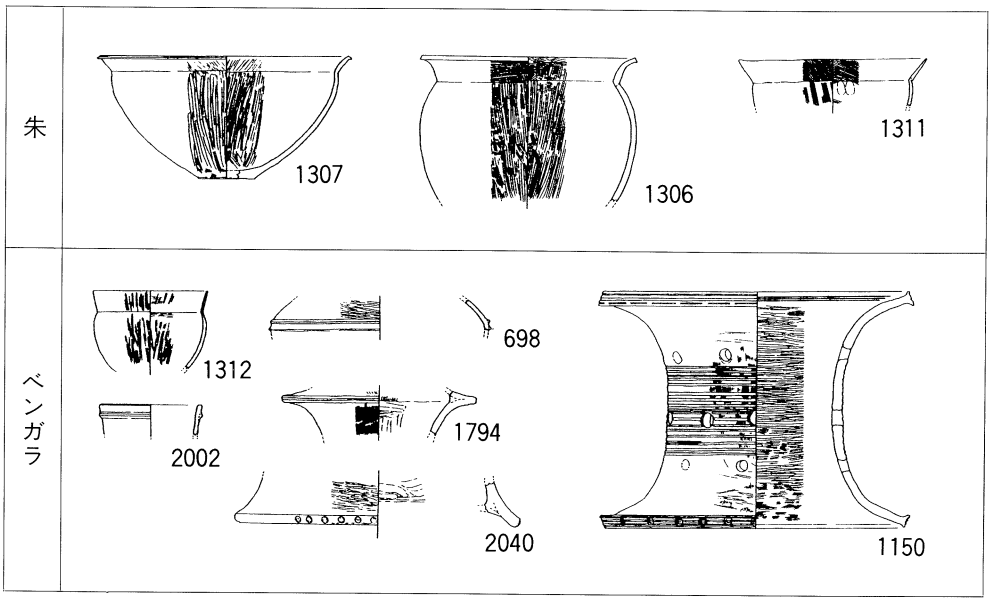
今回の調査では、赤色顔料が付着する土器30点と石器（石杵）1点が出土している。

資料はＳＲ1のＧＨ区間での出土が多く、時期は弥生後期前葉ないし後期末に比定されるものが多数を占める。このうち、時期比定が確実におこなわれ、出土量が豊富な資料としてはＳＲ1上層とＳＸ3があげられる。

後期Ⅰ　ＳＲ1上層からは、赤色顔料が付着する土器は壺形土器1点、高坏形土器1点、器台形土器2点の計4点がある。付着部位は4点いずれも外面で、原料はベンガラである。

このほか、中期Ⅲ～後期Ⅰに比定される資料には壺形土器2点、高坏形土器1点、器台形土器1点の計4点がある。壺形土器・高坏形土器・器台形土器いづれも外面（器台は受部上面にも）にベンガラが付着する。

後期Ⅲ　ＳＸ3からは、赤色顔料が付着する土器は11点あり、器種は全て鉢形土器である。付着部位は全てのものの内面にみられ、さらに外面にも付着するものが3点ある。原料は10点が朱、1点がベンガラである。なお朱のものでは外面にススが付着するものがある。



第306図　赤色顔料付着遺物（S＝1/8）

このほか後期に比定される資料には、甕形土器2点、鉢形土器5点、壺形土器2点、器台形土器2点の計11点がある。甕形土器と鉢形土器は内面に朱、壺形土器と器台形土器は外面及び内面にベンガラが付着している。

(2) 分 析

器種と形態 時期が確実に比定される資料をみると、赤色顔料は中期後葉から後期前葉では壺形土器・高坏形土器・器台形土器に、後期末では鉢形土器・甕形土器・壺形土器・器台形土器に付着している。中期後葉から後期前葉と後期末では、赤色顔料が付着する器種に違いがみられ、特に鉢形土器は中期後葉から後期前葉には出土がなく、後期末には多量に出土するのである。さらに、鉢形土器は他の器種と比べてもその出土量は著しく多いのである。

次に形態をみる。壺形土器・高坏形土器は在地の形態とは異なり、鉢形土器は1例を除き在地品と大差ないものである。形態においては鉢形土器と壺形土器・高坏形土器とはその様相に違いをみせているのである。なお、器台形土器は在地形態が未だ確定されておらず、本件については論を加えないものとする。

付着部位と原料 顔料が付着している部位は、壺形土器・高坏形土器・器台形土器は外面、鉢形土器・甕形土器は内面であり、さらに鉢の一部のものには内・外面に顔料がみられる。赤色顔料の原料では、壺形土器・高坏形土器・器台形土器の外面付着資料は全てベンガラであり、鉢形土器・甕形土器では1例を除き、内外面付着資料は全て朱である。なお、ベンガラが検出された鉢形土器1例は、在地形態と異なることを記述しておく。

以上のことから、赤色顔料が付着する土器について考えるならば、壺形土器・高坏形土器・器台形土器は外面にベンガラが、鉢形土器・甕形土器では内面及び外面に朱が検出（1例を除き）される結果となり、器種と部位、原料の間に一定の関係が認められる。また、ベンガラが検出された壺形土器・高坏形土器・鉢形土器は形態が在地土器と異なるものであり、搬入もしくは外来的要素が強い、いわゆる外来系土器で占められるのである。このことは、松山平野における赤色顔料の使用形態を考える上で一つの資料となるものであり、注目されるものである。

さて、内面に朱が検出される鉢形土器は、朱の精製と関係するとの指摘がある。本資料は、内面朱付着土器には中期に比定されるものはなく、その出現は後期以降であり、さらに多量に出土するのは後期末である。これは、ＳＢ17から出土した朱付着の石杵とも時期が一致しており、内面朱付着土器の用途を考える上で興味深い状況にある。なお、内面朱付着土器の平野での出現期については、今後の資料により定めなければならないと考えている。